THE CENTRAL REVIEW

昭和五年三月十八日
昭和五年四月一日發行

中央公論

本號特價金八十錢

奉仕普及版

（春季特輯號）

第四十五年　第四號　第五百七號

平福百穗著

【新刊】

日本洋畫の曙光

秋田藩主佐竹曙山並に其家臣小田野直武等を中心とする洋風畫の運動は、安永年間に於いて漸く結實し、我國洋畫史上先覺者としての名譽を擔ふに充分なる業績を遺してゐる。然も其畫業は純全たる洋畫の理論に立ち、當時舶載の顔料を自由に驅使し、其構成の技法に於いても亦明かに洋風畫の形式を確立したにも拘はらず、其業績は今日に至るも日本洋畫史の地下に空しく埋沒して、遂に顧らるゝ處がなかつた。是等一派の作家と鄉を同じくする平福百穗畫伯は、夙にこの事を遺憾とし、明治三十五六年の頃より畫道研鑽の傍ら是等先覺の業績を闡明する事に志し、爾來業餘の苦心を積んで、畫跡の蒐集調査を始め、作家の生活傳記に至るまで餘す處なく研究を遂げ、其結晶として此の一卷を大成するに至つた。從來我國の洋畫史に於いては其始祖を司馬江漢となしてゐるが、畫伯の研究に據れば、司馬江漢は佐竹曙山の歿後に於いて始めて洋畫の法を試みた事を明かにする事が出來る。隨つて本書の出現は、日本洋畫史の上に一の新事實を加へると共に、從來の記述を訂正すべき確固たる根據を持ち、美術史界にとつても亦曙光の如き輝かしき權威たる事を信じて疑はない。

参百部限定版

定價参拾圓

送料荷造費共　地方一圓十五錢　市内四十五錢

菊四倍判　本文九十八頁

タツク裝　メトウ入

圖版

三色版十葉

コロタイプ版二十葉

本文組込網目版六十箇

岩波書店新刊書

藤原定家所傳本 金槐和歌集	佐佐木信綱解說	限定版定價 15.00	送料 27
浮世繪概說	田中喜作著	1.20	18
能—研究と發見—	野上豐一郎著	2.80	27
斷食研究	高比良英雄著	4.00	27
古代日本人の世界觀	城戸幡太郎著	1.80	18

東京神田一ツ橋通　岩波書店
振替東京二六二四〇
電話九段 一〇二二・一二八一 三一〇八・三一〇九 三六二六

友愛結婚是非

婦人

〔座談會〕阿部ツヤコ・馬島僩・平林たい・細田民樹・吉屋信子・原田實・金子しげり・本誌記者

◆貞操破産時代……井上吉次郎

◆リンデイと結婚革命……原田實

◆讀者の友愛結婚贊否……懸賞當選

◆私の實行した避妊法……實話四篇

◆結婚破產者の手記……掛井冴子

◆産兒制限の母（一年に千人宛の產兒制限の施行に成功しつゝある柴原浦子女史の訪問實話）……三賀靜江

◆「墮胎」を裁く（法廷よりみた墮胎、その犯罪の背後にかくれたる悲話——暴露された現代相）……濱尾四郎

ゴルフウイドウは語る

▽下手の横好き　鈴木文史朗夫人・途子

▽健康第一　鳩山一郎夫人・薫子

▽有益無害　杉村楚人冠夫人・鬮子

戰の跡

▽勝つ迄……大山郁夫夫人・大山柳子

▽落選記……宮崎龍介夫人・柳原燁子

◆支那風の野菜料理……小林是正

◆ニキビの痕の根治……賀川博士

◆應用圖案のはなし……山形駒太郎

◆私の好きな洋裝（夫人令孃の好みにより諸先生の仕立）……杉野芳子・中澤鎚子・淺岡中子・小幡綮子

◆手藝——染め物（春の手藝に最もふさはしき染物各種）……坂本眞琴・中川義長・福島義郎・其他四氏

公論

長篇小說

流行兒の歎息

四月特輯號

定價七拾錢

中央公論社發行

毎學一

現代は切に吾等に政治

東



野鴨　　小林古徑筆

憲政の常道を護れ

——(卷頭言)——

先度の總選擧は豫想外の壓倒的大多數を民政黨に與へた。[illegible]として、吾等は我々は之に由て政局の安定し現内閣が輿論の強みを有つに至つた事實を承認されねばならない。

併し濱口内閣は此先き四年間果して持續し得るだらうか。政黨内閣主義の容認されたる今日、内閣はたゞ選擧の結果に依てのみ更迭を見るべき筈であるが、民間の常識は此點に就き判然たる所信を示して居ぬ。是れ我國では、選擧に由る者の外、内閣更迭を效果にもつ變態勢力の暗中活躍が從來頗る顯著であつたからだらう。

總選擧の結果が與黨に不利な爲め内閣の退くのは致方がない。補缺選擧に於ける連續的敗北が議會の政黨關係に重大な影響を與へ爲に内閣の引退を餘儀なくする場合もあり得るが、今度の樣に朝野兩黨の開きの大きな際には其適用はあるまい。要之選擧の結果で内閣を進退せしむるは直接に民意を政權の地位に反映する所以であり、此趣旨を徹底する樣な内閣更代の慣行をば今日でも憲政常道の一として尊重するわけである。民意と直接の交渉なき特權的勢力に依て内閣の動かさるるを無條件的に非立憲と罵り去るのも、畢竟之が爲である。

理論上の非立憲も惰勢の力で相當永く其存在を許される。時勢の進運に推されて近頃段々影が薄くなつたものの、元老樞密院並貴族院の——就中樞密院よりの壓力は、内閣の運命に取て今仍ほ斷る怖るべき者とされて居る。尤も彼等の專恣に對する民間輿論の反感は年毎に強烈を加へて居る、イザと云ふ場合從來の如く橫車を押し通すかは問題だが、選擧後濱口内閣が逸早くも諒解運動を開始せるなどを見れば、亦裏面の勢力の侮り難きを想はざるを得ぬ。民間の常識が何となく此内閣の當然の存續を危惧するも故ありと謂ふべきである。

理論上の非立憲の存在を歷史が許したのは、民衆勢力の組織としての政黨に道義的根據がないからだ。政黨が有樣のものとして正しき表現であり正しき活動體であつたら、樞密院抔は鎧袖一觸挨うにけし飛んで了つた筈と思ふ。彼れの跋扈も謂はば政黨の罪なのだ。之を又我々は烈しく政黨にも責めなければならぬ。

併し政黨に罪があるので特權階級の跋扈も已むを得ぬと云ふは單なる事實の觀察に過ぎぬ。政界進展の爲の努力の問題としては斷じて民衆と沒交涉な彼等の橫行を許してはならぬ。食へぬ者を放任しては泥棒は絕へぬだから泥棒を責めるなと云ふ譯には行かぬと同じく、政黨の不しだらは別に之が匡救を謀るとして、民意の暢達を阻止する者は如何なる場合に於ても憲政常道の紛更者として嚴に之を排斥することが必要である。

我々は必ずしも濱口内閣の謳歌者ではない。たゞ此内閣を總選擧以外の原因で倒れしめざらんと冀ふのは、何人が天下を取ても民衆政治の實現に不可缺の憲政の常道が之に由て漸次堅まるべきを喜ぶからである。

中央公論



第四十五年第四號
四月號
五百〇七號

選擧鬪爭から議會鬪爭へ

——大衆との固き握手の下に——

大山郁夫

一

總選擧は終つた。わが勞農黨は全國に十二名の候補者を立て、戰つたが、その結果はたゞ一名だけが當選者としてブルジョア議會に送り込まれることになつた。幸か不幸か、その一名といふのは外ならぬ私自身である。

勞農黨からブルジョア議會に送り込まれた唯一人の代議士！ 第五十八議會に於ける私の地位の、孤立的であることよ！

それは恰度、我々の送けた同志山本宣治の第九十六議會に於ける地位が孤立的であつたやうに。

だが、同志山宣のその地位がいかに孤立的であつたとかは、它も彼れを怯ませる力を持たなかつた、これに對し彼れの鬪志を益々鋼鐵の如くに鍛ひあげた。彼れが死の直前に吐いたところの、かの歴史的に記念さるべき一語は、その事實を一點の疑ひを挾む餘地もないやうに裏書きしてゐる。即ち彼れは、昨年の三月五日、大阪で開かれた全國農民組合第二回大會に臨んで一場の祝辭演説を試みたが、その中に於て彼れは、いはゆる無產黨議員團の非階級的態度に觸れた後、次の如く附け加へた。

「山本宣治たゞ一人孤壘をまもる。私は一人でも淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから。」

凛として高く響いたこの一語は、今尚ほ我々のすべてを奮ひ起たしめる。殊に、今やわが勞農黨の使命を帶びてブルジヨア議會に一步を踏み入れようとしてゐる私自身は、それから無限の激勵と鞭撻を受けてゐることを感じる。といふのは單に、その言葉自體が同志山宣の壯烈なる覺悟を明確に言ひ現はしてゐるからといふだけではなく、それは同時に、わが黨選出の議員の議會内に於ける一切の行動が大衆の意志の反映であり、あらねばならぬことを、確信を以て表白してゐるからである。

いふまでもなく、わが黨が議員を議會内に送り込むのは、わが黨の指導の下に行はれてゐる大衆鬪爭の一尖端をそこに送り込むといふ意味に於てゞあつて、それは斷じて、ブルジョア議員連を相談相手にして、彼等の手を通じて大衆の要求を貫徹しようといふが如き企圖からではない。ブルジョア議員連が刻一刻、資本家地主の利益の擁護者としての本質を益々露骨に發揮するやうになつて來てゐる今日の反動時代に於て、偏へに彼等の手を通じて大衆の要求を貫徹しようといふやうな考へが、畢竟愚人のパラダイスにもふさはしき一片の幻想にすぎないことは、意識の進んだ大衆が既に充分に知り悉くしてゐることだ。それを知らないやうに見えるのは、たゞ社會民主主義政黨の幹部諸君だけである。であればこそ彼

等は今日の情勢下に於ても依然として性懲りもなく議會内に於ける絶對多數の甘夢に陶醉して、議會外に於ける無數の大衆に信賴することを全然忘却してゐるやうに見えるのだ。

かゝる際に、同志山宣の聲は雷の如く響いた。「私は一人でも淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから。」この不動の確信の上に立つてゐるからこそ、彼れは最後に白色のテラーの犧牲となつて倒れた瞬間まで、終始一貫して、あれほど勇敢に戰ふことが出來たのだ。私はあくまで、彼れの態度を學ばねばならぬ。議會内に於て大衆の要求を戰ひ取るためにも、またその前提として經濟戰を效果的に敢行するためにも、ブルジョア議員連は斷じて私の協同者ではあり得ない。私は一切の希望を議會外の大衆の支持の上に懸ける。帝國議會の門扉は、よし形ちの上でこそ大衆の進入を喰ひ止め得ようが、どんな隙き間からでもドン／＼と浸透して來る大衆の壓力を如何ともすることが出來ないであらう。そして、それに賴よつて立つ時のみ、一人では微力な存在に過ぎない私自身も、亡き山宣の如く力強く戰ひ進むことが出來るであらう。少くともさういふのが、今の私の衷心の願望である。

しかも私は、總選擧に於ける我々の鬪爭を通じて、益々大衆の支持に對する信賴を深めることが出來たことを、私の大いなる喜びとしてゐる。それは疑ひもなく、我々の選擧鬪爭の最も主要なる收穫の一つであつた。

二

總選擧が終局に近づきかけた頃から、私は頻りに「大衆の壓力」、「大衆の勝利」、「大衆の時代來る」、等々の言葉を絶叫した。私はさう絶叫せざるを得なかつた。私は大衆が私にさう絶叫させてゐるやうに感じた。さういふことは私にとつては、一個の抽象的概念ではなく、具體的事實の認識であつた。そしてそれは、今も私の確信となつて殘つてゐるものである。

殊に東京府の第五區に於ける我々の勝利は、單にわが勞農黨だけの勝利といふよりは、寧ろ大衆の勝利といふべきものであることが、最も明白である。だが私は、わが勞農黨の全國に於ける全國を通じての選擧鬪爭の成績についても、大體一律に同様のことが言へることを確信してゐるものである。

それについては、まづ第一に、わが勞農黨の今回に於ける選擧鬪爭が、如何に異常な不利の狀勢の下に戰はれたかゞ注意されねばならぬ。わが勞農黨は文字通りに舊勞働農民黨の戰鬪的傳統を繼承し發展せしめてゐるものとはいへ、しかも田中反動內閣の手によつて幾度かその陣營を破壞された後を受けて、漸く昨年の十一月の初めに結黨式を擧げたばかりである。それから三個月も經たない間に議會が解散された。我々はその間に我々に支持聲援を與へた大衆と共に權力組織の確立と戰鬪力の充實に努めて來たが、しかもその事業がやッと緒に就きかけたばかりのところで、慌たゞしくも今度の總選擧に直面したのである。

總選擧は、我々に取つては、組織の確立および戰鬪力の充實のために一の絕好機會として利用されるべきものに相違ないが、しかし我々が殆んど全然の無準備のまゝでそれに臨まなければならなかつたとき、それは同時に我々には苦難にみちた一大試練の如く感ぜられた。我々はまづ金力の點に於て文字通りに無準備であつた。如何に我々の選擧には比較的に金が要らないと言つたところで、それが無一文で出來るものでないことは、いふまでもないことだ。我々は突嗟の間に、さうした心配からして掛からなければならなかつた。更らに我々は、權力からも見離されてゐる。否、單に見離されてゐるだけでなく、最も徹底的に金融資本の利益に奉仕する濱口內閣の反動政治の下に於て、我々こそ權力の壓迫を最も全面的に受けてゐるのだ。最後に我々はまた、既成諸政黨および他の無產諸政黨から來る猛烈な逆宣傳の嵐に逆つても進まなければならなかつた。

かゝる狀態の下に於て、我々が最後の賴みとして期待し得たところのものは、たゞ大衆の熱烈なる支持聲援以外には絕

對に何物もなかつた。幸にも、我々のこの期待は完全に酬いられた。いかにも我々は全國に亙つて唯一名の當選者をしか出さなかつたことは事實であるが、しかし我々が十二名の候補者を立て、約七萬九千の總得票數――候補一人につき平均六千四十二票――を收穫したことは、相當に重要視されなければならぬ。これを前回我々が舊勞働農民黨として四十名の候補者を立て、克ち取つた十八萬七千餘票――候補者一人につき平均四千六百七十六票――の總得票數に比較すれば單に形ちの上だけでも、斷然進歩の跡を示してゐるのだ。

さらにまた、我々は各選擧毎に新分野開拓の絶大努力をしなければならないが、既成諸政黨はこれに反して、過去四十年以上に亙る絶えざる策動によつて、選擧地盤の網を全國の隅々にまで張り廻はしてゐるのだ。それ故に、我々の手によつて得られた一票は、既成諸政黨によつては完全に失はれた一票を意味する。しかも既成諸政黨が代表してゐる資本家地主の階級は殘照の如き輝きを見せつゝも早晩必ず來るべき沒落に運命づけられてゐる舊勢力であるが、我々が代表してゐる無産階級は、これに反して今や旭日の如く堂々と中天に昇りつゝある新興勢力である。かうした諸事情を併せ考へるとき、我々は必然に、我々が得た一票は既成諸政黨が握つてゐる幾千票あるひは幾萬票に匹敵するものとして評價せざるを得ないのだ。

いふまでもなく、今回の總選擧に於ても、例によつて例の如く、政府および既成諸政黨の側から、干渉や買收の魔手が縱横に延びたことは否定できない事實だが、しかし我々は、この醜惡なる事實の前に落膽するよりは、寧ろさうした干渉や買收の齒が立たない階級的意義ある票が幾十萬にも殖えたことを喜ばねばならぬ。それは大衆が勝利への途上に於て確實に踏みしめた前進の一歩を鮮かにしるしづけたものでなくて何であるか。

我々が過ぐる總選擧期間を通じて東京府第五區で持つた百回餘の演說會を目指して詰め寄せて來られた大衆は、約十五萬人を算へたが、私は多い日は一萬五千人以上の、少い日でも數千人の大衆に呼びかけることが出來た。私は日々それらの大衆と共通に心臟の鼓動を感じたことを心から感謝した。それらの大衆は、我々が、今日資本の攻勢の下に益々少なの苦しみに喘ぎつゝある勞働者・農民・無產市民・植民地民衆・等々の一切の被壓迫民衆の生活と自由のために闘ふことを誓つたとき、我々に割れるばかりの聲援を與へた。さらにそれらの大衆は、當面喫緊の問題として、支配階級の金解禁の善後處置としての產業合理化政策が必然に促進すべき失業の洪水に對する闘爭、帝國主義戰爭準備のための一切の政策に對する闘爭、等々の主張に向つても、熱烈火の如き共鳴を我々に送つた。否、それらの大衆は、寧ろ積極的に、我々をしてさうした主張を絶叫せしめなければ已まないほどの意氣込みを示したのであつた。さうしたところに、私は大衆の意識の成長をまざまざと見ることができた。

一昨年の總選擧の頃には、我々は主として演壇の上から啓蒙的な說話をすることを我々の任務としてゐた。また當時の大衆は、それを我々に望んでゐたのだ。だが、今日の大衆は、著しく變はつて來てゐる。今日の大衆は、演壇の下から我々を鼓舞激勵して、大衆自身の要求を叫ばしめる。そして、重要なる各瞬間毎に、自發的に嵐の如き拍手を送ることによつて、場內に焰の如き氣勢をあげる。かつては我々は自黨のフラクションを聽衆の中に入れてさうした效果を出げることに努めてゐたが、今日では最早その必要が全然——少くとも東京地方では——なくなつた。大衆の自己訓練はかくまでに進んだのだ。それに大衆は屢々自律的行動にも達して來たことを自ら證明した。我々はその實例を幾らでも提供することができる。

我々は過去三年間の不斷の闘爭の過程に於て、大衆の意識の成長の跡を明かに見て來た。だが、私は今回の選擧闘爭を通じてのやうにそれを息づまるほどに感じたことは、かつてなかつた。尤もその最も代表的な現はれは、今回のところで

はまだ東京、大阪、等々の如き最尖端に立つ二三の大都市に限られてゐるといふのが、或ひは正當であるかも知れない。だが、今日東京や大阪に於て最も集中的に見られるかうした傾向が、明日は各方面に波及して、やがて必然に全國的現象となるであらうことは、我々から見れば、たゞ時間の問題であるだけだ。

さらに注意すべきことは、かうした大衆の意識の成長が、田中反動内閣時代以來の酷烈を極めた彈壓の下に遂げられたることである。權力は大衆の意識の成長を阻止するためには全然無力であることを自ら證明した。資本の攻勢が強まるだけづゝ、大衆の反抗心が進む。かくて大衆の力は、反動の嵐の中に育くまれつゝ、グン／＼伸びてゆくのだ。

わが勞農黨が、今回あらゆる不利の狀勢の下に選擧鬪爭を戰つたにも拘はらず、意想外の好成績を擧げて、そこから直ちに選擧後の組織の確立および戰鬪力の充實に向つて躍進することが出來るやうになつたのは、偏へに意識の進んだ大衆の支持聲援によるものである。それ故に我々は、わが勞農黨の勝利は同時に大衆の勝利であることを強調して、心からさうした大衆に感謝することを忘らないのだ。

四

久しく和ごやかな日の照る道をのみ歩んで來た社會民主主義政黨の幹部諸君は、今回の總選擧に於ける自黨の敗績に驚いて、様々の泣き言を並べてゐる。彼等の或るものは、『日本では無産黨が議會に進出するには、まだ時期が早やすぎるのだ』などゝ、捨て鉢を言つてゐる。他の或るものは『民衆はなぜ眼ざめないのか？』などゝ、愚痴をこぼして自己の落選の責任を大衆に轉嫁しようとしてゐる。

だが、無産黨が、全體として前回よりも三萬票以上も多い五十萬四千餘に上ぼる總得票數を克ち取つたにも拘らず、その代議士當選數が八名から五名に低下したのは、一つにはいはゆる中選擧區を基準とする我が國の現行の選擧區制が政府

のマニユーヴアーのために都合よく出來てゐるからである。ブルジヨア各黨間は一體に、それはたゞ各派の指導者の對立、對立、並立の結果だと論じてゐるが、さうした批評は必ずしも的に當つてゐない。殊に、無産黨各派間の指導精神の差異が既成諸政黨間のそれの差異以上に大きいといふ事實に考へ及ぶとき、我々は、さうした批評は全然無意味だとさへも結論せざるを得ないのである。それにしても、無産黨が全體として克ち取つた總得票數そのものが豫想外に少かつたとはいへるし、そしてその主たる要因が、無産黨各派中最も有利な地位に於て選擧を爭つてゐたやうに見られた社民黨の意外な不成績にあつたといふことも事實である。だが、社民黨のこの不成績は、同黨の幹部の一人が言つたやうに大衆が眼ざめてゐないためでは斷じてない。大衆は同黨の幹部諸君が希望してゐた以上に眼ざめてゐた。だからこそ、民政黨の急進派以上には決して出てゐなかつた彼等の社會民主主義的立場が大衆によつて可なり聰明に批判されて、その結果が同黨の慘敗となつて現はれたのだ。

その外に尙ほ無産黨全體の總得票數の意外に少かつたことの原因として擧げられるものとしては、政府および既成政黨の側からなされた干渉や買收もあれば、議會內多數決萬能主義の欺瞞もある。前者は特に說明する必要はないが、後者は簡單にいへば、議會內に於て多數を擁する大政黨でなければ決して如何なる政策をも完全に實行することが出來るものでない、といふやうな主張である。それは、大衆的日常闘爭主義の基礎の上に立つてゐるわが勞農黨の主張とは根本的に異つてゐるが、しかし本質上議會萬能主義を固守してゐて社會民主主義政黨の幹部諸君の主張とは同一範疇に屬するものである。それ故に、社會民主主義政黨の幹部諸君は、理論上それに向つて眞ッ額から反對することが出來ないのだ。それに今一つ、現行の選擧法に於ける選擧權獲得のための資格の制限――殊に性および年齡による制限が、どれほど無産黨のために不利に働いて居るか知れないのである。若しわが勞農黨がその政策の上に掲げてゐるやうな、十八歲以上の男女の選擧權獲得の要求が貫徹されたら、無産黨の躍進は一層めざましいものがあるであらう。しかも社會民主主義政黨の幹部諸

君は、さういふことには一切眼を呉れようとはしないで、只管自分達の敗因を選擧戰術の誤謬といふやうな枝葉末節の點に押ッ附け、果ては「民衆はなぜ眼ざめないのか？」と飛んでもないことまでを言ひ出して、自分達の非階級的な意識を大衆の不明にすり換へようとする！

否！　我々はあくまで大衆を信頼する。我々は一切の希望を、大衆の意識の成長とその行動力の増進の上にかける。私は今、大衆鬪爭の一尖端として、勞農黨から送られてブルジョア議會に入らうとするに際して、切に亡き同志山宣のあの歴史的な言葉を思ひ浮べて、それを幾度となく心のうちに繰り返す。――「私は一人でも淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから。」

五

他方更らに、濱口内閣の欺瞞政策は、刻一刻とその内的矛盾を暴露しつゝ、やがては破綻百出の窮地に陥るべく運命づけられてゐる。そして事態のかゝる必然の進行は、今後層一層大衆の政治意識の眼ざめを促進し、その積極的行動の要求に強力なる拘束をかけることなくして已まないであらう。

今回の選擧に於て、民政黨が衆議院の絶對多數を制したのは、一つには田中政友會内閣の陰険を極めた反動政治に對する大衆の反感が民政黨のために有利に働いたためでもあるが、また一つには濱口内閣の欺瞞政策の一時的奏效のためでもある。だが、かゝる状態は到底永續しないであらう。否、總選擧の終了後からまだ幾日も經たない今日に於て既に濱口内閣はその政策の實行に關して深刻なる難局の上に立つてゐることが明かに見られる。

それは當然のことである。濱口民政黨内閣は田中政友會内閣以上に、金融資本の利益の擁護に徹底してゐる。もとより兩者は共に、本質的に資本家地主の政府として、特に現段階に於て金融資本の支配の確立に沒頭し來つたといふ根本の一

點に於ては毛頭變はりがないが、しかもその實際上の施設に於て、濱口内閣が田中内閣以上に露骨な傾向があることは、又者が久しくその前に遲疑逡巡した金解禁を、前者が一ト思ひに斷行したといふ一事實によつても、その一面に看取され得るのだ。たゞ濱口内閣は、その手段に於て極めて陰險巧妙であつて、かの田中内閣が露骨に彈壓政策を大上段に振りかざしたやうな遣り口とは全然行き方を換へて、一種の自由主義の假面を冠ぶつて、ともかく現在までは何とかして表面を糊塗して來た。だが、濱口内閣の金融資本家の利益擁護の政策は、この上際限もなく××××××の日常利益を犠牲にすることなしには到底完全に實現し得られるものでない。しかも今日までに於て既に窮乏の深淵に追ひ詰められて來たことを痛感してる全××××は、これ以上いつまでも負擔の加重に堪へ得るものではない。この點に於て、濱口内閣の政策は明かに不可避の破局に直面してる。

否、今日までに於ても、濱口内閣の政策は、隱微の間に既に幾多の破綻を示して來た。その最も代表的な一例は、濱口内閣がその最高政策の上に麗々しく掲げてゐる失業救濟の實績の上に見られる。かの一月二十一日の議會解散の日に濱口首相が試みた施政方針演説の中には、政府が如何に事業調節委員會を通じて失業問題を緩和し、また如何に六大都市に於ける土木事業によつて多數の失業者の救濟に成功したかゞ、盛に吹き立てられてある。だが、實際に於ては、政府のさうした一切の施設は、燒け石に水ほどの效果をすらも齎らし來らなかつた。濱口首相が傲然と議場を睥睨して聲高々とその施政方針演説を放送してゐた間に、日本の津々浦々には、巷に滿つる無數の失業者群が口々に「食と仕事を與へよ」の悲痛なる叫びを擧げてゐたのだ！

しかも濱口内閣がいはゆる金解禁善後策の中心的地位に祭り上げてゐる産業合理化政策は、今後一層大規模に於て失業者群を生産するに決まつてゐる。そして、それは疑ひもなく、來るべき臨時議會に於ける最重要問題となるであらう。私自身は、議會外に於ける大衆の支持聲援を唯一の心頼みにして、あくまで精力的にそのために戰ふことを誓ふものであ

る。

六、

濱口内閣の政策のうちに含まれてゐる多岐多端の内的矛盾の今一つの好適例は、例の中小商工業者の保護の聲言の上にも現はれてゐる。濱口内閣の産業合理化政策は、明かに企業の合同・聯絡への傾向を辿つてゐるものであり、從つてそれは必然に中小商工業者の沒落を將來しようとしてゐるものである。濱口内閣は、一方に於てかゝる政策を取りつゝも、他方に於てそれと全然反對の方向にあることを行はうといふのだ。そこに救ひがたき矛盾が含まれてある。しかも今日濱口内閣が計畫しつゝあるといはれてゐる中小商工業者に對する金融機關の設置の如きも、金融資本の統制の下に於て一切の中小商工業が急速に大企業に併呑されてゆく大勢を如何ともすることが出來ないであらう。そしてたゞかくして大資本によつて壓迫される中小商工業者が、さしづめその負擔と苦痛を勞働者の肩の上に轉嫁するといふのが、最も直接的な結果であらねばならぬ。いづれにしても助からないのは勞働者である。

かゝる方面に於ける濱口内閣の政策は、それが單なる聲明を離れて現實の問題となるに從つて、次第にその内的矛盾を露出するやうになるであらう。だが、かう云つてゐる瞬間にも、濱口内閣が組織以來の一枚看板にして來たいはゆる緊縮政策に一大痛撃を加へた現象が突如として眼のあたりに現はれて來た。それは、かういへば何人にも察しがつくであらう通りに、外ならぬ例の絲價安定融資法の發動そのものである。

金解禁の斷行に伴つた爲替相場の變動は、豫想通りに鷄絲の價格の慘落を惹起した。濱口内閣はこの事實の原因を一にアメリカの市場の不況にあるやうに言ひ立てゝゐるが、しかしそれは例によつて狡猾なる欺瞞の奥の手を出したものに外ならない。だが、それはともかく、絲價安定補償法は、その制定の當時に民政黨が擧黨一致で反對したものであり、また

その公布の際に、町田現農相が、それは單に傳家の寶刀として唯非常時にのみ持ち出すばかりのものとして仕舞ひ込んで置くべきものだと發明したものであつた。しかるに今や濱口内閣は、製絲業者の眉毛に火のついたやうな情況に對つて周章狼狽の極、慌たゞしくもその傳家の寶刀を引き拔いた。かうした態度は、明かに濱口内閣による金解禁の將來が早くもその傳家の寶刀を引き拔くことが必要になつたほどの非常時を出現せしめたことを物語るものでなくて何であるか！　かくて濱口内閣が井上藏相の口を通じて、金解禁と共に市場が安定したと言はしめた××も、こゝに遺憾なく暴露された一の赤裸々なる、具體的事實は、空虚な修辭によつて飾り立てられてある百の發明よりも、幾層倍も强き說得力を持つ。

しかも、濱口内閣の手による絲價安定融資法の發動は、ゆくりなくも、この内閣の本質を、勞働者農民大衆の眼前に於て無慈悲に暴露したやうな效果を擧げた。勞働者農民大衆の立場から見れば、絲價——同時に繭價——の暴落が惹き起した最も根本的な重要問題は、資本家の片割れであるところの製絲業者の救濟の問題ではなくて、その暴落の餘波を受けて益、深刻化して來た各地方の農民の窮乏、および多數の製絲工場に起つた賃銀不拂などの現象に關する問題である。かうした問題は、決して一朝一夕に生じ來つたものではなくて、既に幾個月の久しきに亘つて、關係各地方の勞働者農民の心を異常に惱ましてゐたものであつた。しかるに政府は、例の永遠の「調査」「研究」に名を藉つて、一向それへの對策を眞面目に講じようとはしなかつた。ところが今回一部の製絲業者の間から、右の補償法の發動への要求が、足許から鳥が立つやうに突如として提起されると、政府は他の一切萬事を顧慮するひまもなく、響の物に應ずるが如くに、忽ちそれを取り上げた。そしてその結果は、又もや一般民衆の負擔による資本家の救濟となり、更に肝腎の緊縮政策の容易ならざる破綻となつた。かくて勞働者農民大衆は、その本質に於て資本家地主の××以外の何物でもない濱口内閣の正體を、今やしみじみと如實に見ることが出來たのである。

七

さらに今一つ別の方面で、濱口内閣およびその與黨の民政黨が從來すこぶる巧妙に冠ぶつてゐた僞善の假面が容赦なく引き剝がれた事實が注意される。

政府および與黨は、特に總選擧期間中には、いはゆる選擧の自由・公正の維持の名の下に、表面上或る程度に『寬容』の態度を裝うてゐた。だが他方に於て政府および與黨は、彼等自身が擁してゐる權力および利用し得た限りの莫大な金力を通じて、樣々の選擧上のマニューヴァーから、例の『合法的』干渉に至るまでの、各種各樣の手段を縱橫に驅使した。それでゐて『選擧の自由・公正の維持』も何もあつたものではないが、しかし彼等は兎も角實際さうしてゐるかのやうな外觀を粧ふことによつて、『さすがに濱口内閣は田中内閣とは違がつてゐる』といつたやうな印象を大衆に與へようと試みた。そして、その計畫がうまく圖に當つて、民政黨は衆議院に於ける絕對多數を獲得したのである。

ところが、一旦かゝる結果が實現されたとなると、彼等は忽ちその態度を豹變して、斷然その『寬容』の保護色――一種の擬製用の自由主義の上衣――をかなぐり棄てゝ、金融寡頭政治の××としての、その本來の狂暴性を露骨に示し始めた。その最初の現はれは、衆議院内のいはゆる小會派に對する發言封じの試みであつた。彼等は自黨が多數黨であるといふ事實を楯に取つて、『多數政治』の名に於て、この無理を押し通さうとしてゐるのだ。だが、民政黨が現在擁してゐる絕對多數そのものは、かつて田中反動内閣の下に政友會が擁してゐた多數と同樣に、『僞造の多數』以外の何物でもないのだ。それは、その民政黨の絕對多數が如何にして獲得されたかの經路を考へれば、直ちに解かることである。いづれにしても、現在に於ては寧ろ小會派のうちにこそ、國民の最大多數を占めてゐる無産階級が言はうと欲してゐることを議會内に於て叫び得る地位にある議員が含まれてゐる筈だ。しかもわが國の無産階級は、現在の瞬間に於てこそ、各種の重要諸問

圍——殊に失業救濟、解雇・賃銀値下絶對反對、勞働組合法および小作法の制定、治安維持法改惡反對、言論集會の自由その他一切の無産階級抑壓諸法令の撤廢、等々の如き——に關して言ひたいことを非常に多く持つてゐるのだ。だが、資本家地主の政府および政黨は、無産階級のさうした要求および反抗の聲が議會内に傳達されることを極度に恐れてゐるのだ。金融資本はそれ自身の支配的地位の安定のための保證としての政局の安定を痛切に欲求してゐる。この意味に於ける政局の安定は、民政黨が金融資本の擁護の下に絶對多數を獲得したことによつて、一應は實現された。だが、この際、無産階級の要求および反抗の聲が絶えず議會内に爆發せしめられるやうなことがあつては、折角の政局の安定が不斷の動搖を受けることになるであらう。政府および與黨は、何を措いても、さうした危險を豫防しなければならないと考へた。そしてその結果が、まづ第一に、小會派に對する發言封じの試みとなつて現はれたのだ。それ故に、それは要するに、金融資本の支配下に於ける反動政治の特徴的一樣相である。ブルジョア新聞は、それを單に「多數黨の横暴」の一言で片附けてしまはうとしてゐるが、しかしさうした概括的な評語は、決して問題の核心に觸れてゐるものではない。我々は今、現實の事象の進行の前に濱口内閣およびその與黨の民政黨の一種の自由主義の假面がかくも物の美事に引き剝がれた事實を見て、益々わが黨の政治的自由獲得鬪爭の重要意義に對する我々自身の確信を強め、この際特に議會外の大衆の支持援助の下にそれを效果的に議會内に持ち込まうとする決心を新たにしてゐるものである。

八

上來の説明を通じて看取されるであらう通りに、濱口内閣の政策は、單なる聲明の時代を離れて、段々とその實行期に歩み入るに從つて、一層一層破綻百出の醜狀を露出する傾向を早くも示しつゝあるのだ。そしてその根本的原因は、前にも一言した通りに、濱口内閣の政策は表面上如何に技術的に巧妙に修飾されてゐようとも、その本質に於ては畢竟、勞働

者・農民・無產市民・植民地民衆・等々一切の被壓迫民衆の犧牲に於て資本家地主の利益を擁護し、特に當面、金融資本の支配の確立を保證しようとしてゐるのだ、といふ中心的事實のうちに胚胎されてゐるのである。

この點に關聯して、私は尙ほ次の一事を附記しておかねばならぬ。それは、わが國の無產階級の間に於て從來久しく問題にされてゐた例の勞働組合法案および小作法案の運命についてゞある。濱口內閣は最近まで、それらの兩法案を第五十七議會に提出する意志を持つてゐることを屢々聲明してゐた。尤も第五十七議會はあの通りの解散だつたから仕方がなかつたとしても、濱口內閣は當然その公約の精神に基いて、來るべき第五十八議會にこそは是非とも兩法案を掛けなければならない筈である。ところが、この頃になつてから、濱口內閣は一部の資本家連の反對に會つて、さうすることを見合はせたと傳へられてゐる。

我々は昨年末發表された勞働法案、および數年前民政黨によつて起草され採用された小作法案要綱を通じて、濱口內閣が議會を通過せしめようと企圖してゐた兩法案の本質が如何なるものであるかを熟知してゐる。それらは要するに、形式的には幾分か進步的に見えるものであるにも拘らず、實質的には非常に反動的なものである。だが、濱口內閣が今日それらの兩法案を引ッ込めようとしてゐるのは、それらが反動的內容を有してゐるからといふのでは無論なく、その反動的內容がまだ不充分だからといふのである。我々はもとより、それらの兩法案には絕對反對だが、しかし絕對反對だけに猶ほ更らその提出を待ち構へてゐたものである。卽ち我々は、その提出の機會を敏活に捉へて、兩法案の欺瞞的本質を徹底的に暴露し、さらにその問題に對する戰鬪的勞働者農民の眞の要求を絕叫し、かくすることによつて、戰鬪的勞働者農民の眞の意志を反映した勞働組合法および小作法を戰ひ取り得る時期を促進しようと企てゝゐたものである。だが、濱口內閣は一部の資本家の要求に押されて、遂にその機會を我々の手から奪ひ去つたのだ。

最後に、濱口内閣の欺瞞政策が、さらに財政の運用の方面に於て無限に多く包藏されてゐる事實が注意されねばならぬ。濱口内閣はその緊縮政策の一枚看板の手前、昭和五年度に對するいはゆる緊縮豫算なるものを作つたが、しかしそれはその名目を裏切つて、實に十六億二百萬圓の巨額を計上したものであつた。しかも前年度の豫算に比較して見たその僅かばかりの節約すらも、大抵は既定事業の繰り延べによつて實現されたものにすぎないのである。

わが國の國家財政の運用を通じて、如何に資本家地主の利益の擁護の目的が無産大衆の犠牲に於て達成されてゐるかは、資本家地主がその最大部分を負擔する直接税中の諸税が全體で國税總額の約三割五分に止まつてゐるに反して、勞働者・農民・無産市民がその最大部分を負擔する間接税中の諸税が全體で國税總額の約六割二分を占めてゐるといふ、たゞこの一事實だけを見ても解かる。私はかうした一般に周知されてゐる事實の敍述を、これ以上に進める積りは持たないが、たゞ一言それに附帶して、わが勞農黨が「税金は資本家地主が負擔せよ!」のスローガンを押し出し、その趣旨の下に、まづ生活の必需品にかゝる關税および消費税の撤廢を叫び、その代りに財産税、不在地主税、奢侈税、等々の新設を要求し、資本利子税の大規模の増徴を唱へ、さらに所得税、營業税、相續税の免税點引き上げ、並びに以上の諸税の高率累進賦課の必要を主張し、さうした題目の下にあくまで大衆の日常利益の擁護伸張のために鬪ふことを誓つてゐる、といふ一事を記すに止めておく。

だが、人は言ふであらう、『民政黨の政策の上にも、生活の必需品の消費税の輕減といふやうなことが記載されてあるではないか?』と。それは如何にも事實であるが、しかし民政黨の政策中のその項目は、わが黨が生活必需品の關税および消費税の撤廢と言つてゐるのとは、全然その趣旨を異にするものである。似てゐるのは唯、言葉の上に於てのみであ

る。まづ第一に、民政黨は消費税の輕減とは言つてゐるが、しかし撤廢とは言つてゐない。次に民政黨は單に消費税だけを拾ひ上げて、關税には少しも言及してゐない。そこに大きなカラクリがある。民政黨はその欺瞞的な社會政策の主張の手前、或ひは生活必需品の消費税を幾分かは減額しようといふ意志を持つてゐるかも知れないが、しかしその穴埋めのためと言へる程度よりは遙か以上に、鐵および木材を始め、各種の輸入品に對して多額の關税を賦課しようと目論んでゐるのだ。かういふこともまた、大衆の負擔に於て一部資本家を保護しようとする手段の一端の現はれである。我々は斷じてその欺瞞の手に乘せられてはならない。

同樣に政友會は、租税政策に關聯して、最近頻りに減税の必要を唱へてゐる。さき頃犬養總裁は、日比谷公會堂の演壇の上から、『この際五千萬圓程度の減税を斷行して國民の負擔を輕減せよ』と言つたやうな趣旨を述べた。だが、我々はそれを眉に唾して聞かなければならない。たゞ漫然と『減税』といへば、『資本家地主が負擔してゐる税金をも減縮しろ』といふ意味に歸着するのだ。これこそ、生産資本にかゝる税金の減廢を叫んでゐる産業資本家の要求丸出しである。しかもその結果として當然に生ずべき穴埋めの問題に考へ及ぶとき、いはゆる『國民の負擔の輕減』などゝいふ甘言の欺瞞性が直ちに明瞭に知られるではないか！

かうした諸問題を一々取り上げてゐては限りがないから、それは一應茲で打切ることにするが、しかし私は最後の結語を言ふ前に、今一應極めて簡單に、濱口内閣の緊縮政策の最も惡どい――勞働者農民・無産市民の立場から如何なる事があつても見逃がせない――方面に觸れておきたい。

濱口内閣は國家財政の運用について、緊縮々々の鐘太鼓を打ち鳴らし、またいはゆる既定事業の繰り延べによつて多少の一時的性質の節約を行ひもしたが、しかし金融資本家の要求を充たすための各種の費目、殊に×××××準備のためのものとしてのみ理解できる軍事費の上には、何等これとうなづける程の節約が行はれてゐないばかりでなく、さらにそ

ここには軍部の當然の膨脹を見はせるものがないのみならず削減されてゐる。たとへば浜口内閣による陸軍省費についてみても、陸軍省費の上には組閣當時の宇垣陸相の減額の公約が一應實行されて居らず、また海軍省費は大正七年以降の建艦費が倍加する形勢にあるといはれ、ロンドンの海軍軍縮會議への參加は、その當然の歸結であるべき負擔の加重を國民に忍ばしめるについての口實の獲得のためとしか見えない。大藏省費や文部省費についても同様に、言ふべきことが多くあるが、殊に「明るい政治」を強調する緊縮内閣が、最も暗い影のさすスパイ政治の結晶ともいふべき機密費を從來のまゝに据え置いて居る事實を見るとき、我々は必然に、かつて政友會内閣に利益を與へた機密費は、今や民政黨に便宜を借す機密費だと結論せざるを得なくなるのである。

かく見來れば、結局、濱口内閣が如何なる程度に於てか名實共に緊縮節約を實現してゐるのは、主として大衆生活の日常利益に比較的密接な關係のある各種の事業の方面に於てだけである。たとへば、例の既定事業の繰り延べのうちに於て主位を占めてゐるものは、或る意味に於て失業救濟の結果を伴ふべき土木事業の繰り延べであり、さらに、社會事業費と稱せられ得るものは全體で僅かに二千萬圓を出ないやうな始末である。從つて、當面の不景氣の深化、失業者數の増大、大衆の窮乏化等々に對應するための積極的施設に至つては、精々名目上の仕事がされるに止まり、大抵はたゞ掛け聲だけに終つてゐる。わが勞農黨がその政策の上に掲げてゐるやうな大衆生活の日常利益から不可抗的に迸ばしり出る諸般の要求例へば勞働者・農民・無産市民の正しき立場から見て完全なる勞働組合法、小作法、失業保險法、最低賃銀および最低俸給法、八時間勞働法、等々の制定實施、健康保險法の改善、職業紹介所の自主化およびその増設完備、簡易宿泊所の増設完備、義務教育および職業教育機關の増設完備、その生徒の學用品の無料給附、等々その他多數。——かうした大衆の緊切なる諸要求は、無論如何なる資本家地主の政府・政黨でもの善意から、その充當が期待し得られるものではない。まして當面政權の地位に立つてゐる濱口内閣の如きは、緊縮節約の看板の蔭に隠れて、實は大衆の負擔に於て資本家

地主の利益を擁護することに沒頭する以外の何事をもしてないことを知るとき、大衆は大衆自身の固き團結によつて、日常不斷の果敢なる鬪爭を通じて、それらの諸要求を自力で戰ひ取るより外に、××に道はないのである。

わが勞農黨は、常に大衆の先頭に立つて、かゝる日常利益の擁護伸張のための鬪爭を、その政治自由獲得のための鬪爭との相互的聯關に於て、大衆と共に效果的に遂行することを誓つて、今や堂々とその旗を進めてゐるものである。かゝる鬪爭精神の下に、わが黨は次の中心スローガンを揭げて總選擧戰に臨んだ。

解雇、賃銀値下絕對反對！

失業者に食と仕事を與へよ！

土地を農民へ！

稅金は資本家地主が負擔せよ！

勞働者農民の政治的自由獲得！

帝國主義戰爭絕對反對！

總選擧戰は終つた。今やわが黨は、尙ほも以上の中心スローガンを鬪爭目標として、一段の巨步を以て議會鬪爭に躍進しようとしてゐるのだ。我々は心から切に大衆の熱烈なる支持聲援に信賴して、この新分野の上に於ても、あくまで忠實に大衆に對する公約を守り、大衆に對する我々の階級的任務を全力的に遂行することを誓ふものである。

沒落資本主義「第三期」における
世界關稅政策の動向

笠　信太郎

1

今日の世界經濟を形づくる資本家諸國・半植民地・並に植民地の諸國は、しばしば一つの大きな輪をなす連鎖であるとたとへられる。この連鎖の中にあつていづれも大きな一環をなしてゐるところのイギリスとアメリカ合衆國とは、最も近くしてしかも遠い關係におかれてゐる、いはゞ一聯の世界經濟の鎖がイギリスとアメリカとの間において切斷されてゐるとでも云はうか、この二大資本家國は外見上最も接近しそしてするどく對峙してゐるけれども、一面において世界各國中一ばん遠いところに立つてゐる。即ちこの、今日の世界における最も大きな最もはげしい對立は、同じ量の對立ではあつても、同じ質の對立ではない。この二大資本家國は、本質的に——また歷史的に——兩極に立つてゐると云へる。そして現代の全資本家的世界經濟がまさにこの兩極の間を動いてゐるのである。

近年における各國關稅政策の變轉を跡づけてみると、およそかうした形勢が見出される。蓋し、關稅政策は、近世資本家經濟の最も外皮的な現象形態であるが、しかもまた最も尖端的な現象形態として、資本家經濟の本質的な動きを鋭敏に表徵するからである。

2

近世資本主義の地盤をなす自由競爭の上に獨占の形態が發生するとともに、一般に、保護關稅の機能が轉化したといふ事實は、はじめてヒルファディングによつて說かれてから、いまや廣く確認せらるゝに至つてゐる。前世紀の中葉を通じて、歐米

の諸國が悉く保護關税の風よけの中に、當時芽生えて間もなかつた自國の産業を發展せしめる權道を見出してゐたとき、ひとり自由貿易主義の中に世界侵略の方策を見出してゐたのは、近世資本主義の祖國イギリスであつた。當時の保護關税が資本家的發展のかよわき萌芽を培ふための溫室設備であり、また、當時の自由貿易主義が植民地並に弱小資本家國を積極的に侵略するための武器であつたことは云ふを俟たない。既に十八世紀末において近代大工業の基礎を据えたイギリスの工業家は「世界の工場」として、その國内消費をはるかに超ゆる過剩生産物の出口を求めねばならなかつた。イギリスの軍艦は、その先棒を荷負つて、産業上のあらゆる競爭者をそれぞれの植民地から遮斷し、そしてこれら植民地にイギリス商品のための門戸開放を迫つた。同時に、イギリスの工業家は、内に對しては、生産費切下げのために自國における穀物關税の徹廢を强要したのである。いはゆる自由貿易の勝利(一八四六年)から一八六六年の大恐慌に至るまでに、イギリス・ブルヂョアジーはすばらしい躍進を遂げた。世界戰爭後の今日、この、十九世紀中葉のイギリスの地位にあるものは、いふまでもなく、アメリカ合衆國である。合衆國は、今日、世界資本家諸國の尖端に立ち、その「世界の工場」としての生産高、その輸出高、まさに世界の第一位に居る。自由貿易の理論が永遠の眞理であつたならば、今日の合衆國こそ自ら進んで自由貿易主義を採るべきであつたらう。しかるにそのアメリカは周知の如く世界主要國中保護關税の筆頭である。見るべし、資本家的世界攻略の武器は前世紀の自由貿易主義から今世紀の保護關税に移つたことを。それはイギリスすらが、大戰後においてその光榮ある「自由貿易」の傳統を舷側から投げ捨てた事態によつても立證されてゐる。

この轉化はどうして起つたか。自由貿易主義の傳統に動搖が起り、保護關税の機能に變化が發生し出したのは、既に前世紀の末葉、丁度エンゲルスの晩年の頃のことである。この轉向は老エンゲルス(一八八八年)にはまだはつきりとは見定められなかつたが、變動の發生そのことだけは確かに把握せられてゐた。一八七八年のドイツにおける高度の保護關税採用について、また八十年代におけるアメリカ並にフランスの保護關税について、エンゲルスは、これらの國々における關税保護の目的が完全に果されてしまつたことを、そしていまや保護關税はそれら當該國の資本の發展そのものの妨害をなすに至つたことを、明かに看取してゐる。蓋し、この頃を轉機として、米・獨・佛の後進資本家國におけるその生産物が漸く自國内市場を充滿しつくして、たゞ海外輸出にのみその資本の全生命が依存すること

、なつたのだから。しからばその後に續いたものは如何なる自由貿易の時代であつたか。現實は、しかしながら、「全體としては徐々に自由貿易へと移つてゆくであらう」といふエンゲルスの想定を裏切つて、いまや資本の發展を妨ぐるといはれた保護關稅が、外見上はそのまゝ、いな、いづれかといへば却つて徐々に高められつゝ、依然としてその存在をつゞけた。表面上明かに存在理由を失つた保護關稅は、たゞその本質的な機能を變化せしめることによつてのみ、はじめて同じ名のもとに新らしき存在理由を發見したのである。かくして十九世紀末、從來の育成的保護關稅が概ねそれ自らを轉化して、資本主義の最後の段階を開始する「カルテル保護關稅」(ヒルファディング)となつたのである。

カルテル保護關稅の必然性は、第一に、國內市場を飽和してしまつた獨占的生產力に追かれゆく資本の新しき存在方法である。工業カルテル化の進展とともに國內市場を獨占した資本は、その生產する商品の國內價格を謂ゆるカルテル價格にまで高めるため、且つは進んで海外市場をダンピングによつて攻略するため、外國商品の自國侵入に備へて高き城砦を築く。カルテル保護關稅は、「それの爲に、それ自身利潤維持のための資本の必然的進路である。しかも一國の高き關稅障壁は直ちに他國のそれを誘致する。[illegible]稅障壁のヨリ高き引上げへと作用する。

かくの如き一般的諸事情が、一九一四―一八年の世界戰爭の直接の結果によつて一段と促進せしめられたことは否めない。戰前ヨーロッパ大陸には二十六個の國家が存在してゐたが、平和條約締結後には三十五の國家が戰前にも增して敵意と猜疑とをもつて相對峙し、戰前における十三種の貨幣が戰後には二十七種の貨幣となつて入亂れて流通した。その貨幣の制度は未曾有の混亂を生じ、その貨幣の價値は――特に大陸諸國のそれは――概ね大暴落を來した。貨幣價値暴落の結果は、いはゆる「爲替ダンピング」の橫行となつたが、爲替ダンピングをおそれる必要はその貨幣價値の暴落を來せる疲弊國よりは貨幣制度にゆるぎなき資本家諸國において大きかつた。即ち、イギリスも、アメリカも、戰後三四年の間に大急ぎで關稅のバリケードを築き上げた。一方、貨幣價値の暴落を招來せる疲弊國の方でも、極度の財政窮乏は勢ひまた關稅政策に依らざるを得なかつた。かくして資本家諸國における戰前よりの保護關稅の趨勢が、戰後のインフレーションを通過することによりヨリ强力に押し進められた、生產力が戰爭による破壞から戰前の水準へと年々に恢復されてゆくにつれて、また資本の獨占と產業の合理化との

過程が新たにすざまじく進展するにつれて、再びあふれる資本と賣れない商品とが更に高き城壁を要求したであらうことは見易い。

しかしながら、その半面においては、かくして各國の境濠高くめぐらされた高度の障壁のために肝腎の商品輸出がひどく阻害される。のみならず生産規模の擴張は促進されない。生産費の低下も、利潤の増加も、從つて望まれ得ない。いまや關税の障壁は資本自體の發展を妨げるのである。インフレーション直後の資本主義の束の間の安定期が過ぎて、新しき資本主義的諸矛盾の激化の時期――國際無産階級が把握して云ふところの沒落資本主義の「第三期」――が始るとともに、これらの高率保護關税の高き城壁を呪ふ聲は漸くにして高まつた。一九二七年のゼネヴァ國際經濟會議。一九二八年のプラーグ經濟會議。更に一九二九年九月國際聯盟總會における佛國首相ブリアンの提案――ヨーロッパ合衆國建設論。同じく同總會において採擇された英・佛・白の代表による提案――關税休戰案。同じく十月、パリ國際商業會議所大會におけるオーストリー代表の提案――「歐洲」關税休日案。そして、一九三〇年二月のゼネヴァ關税休戰會議。等々。すべてこれらは「第三期」における資本そのものの矛盾を反映する聲である。だが、それは第三期における保護關税の停頓を語るものであらうか、乃至は、自由通商への新たなる轉向を指すものであらうか。

3

以上までに吾々は主として工業品關税について概説したが、資本の帝國主義的段階における關税の特質は、たゞに工業生産品のそれのみではない。そこには、保護關税のカルテル關税化と竝んで、農業關税が前面に押し出されてゐる。

『近世の保護關税のアルファでありオメガたるものは農業關税――即ち農産物の價格引上げのための關税である。』（カウツキー）『農業關税の目的は國民資本の發芽的展開を保護せんとするにあるのではない、反對に、農業關税は、一國が資本主義的に充分發展したといふことを、しかしまた、過度の國民的發展が、肥滿症が、起つてゐるといふことをも、そばに付いてゐて間違ひなく知らしてくれる通告人である。』（パルヴス）蓋し、農業關税は、資本家的發展が成熟期に入るとともに起るところの農産物に對する需要の停頓乃至減退から免かれんとする、地主的勢力の地價昂騰策にほかならぬから。從つてその出現は大體に近世カルテル保護關税の出現とほゞ時を同じうする。これが典型を、吾々は一八七八年におけるドイツの關税改正において

見得る。當時、ドイツの工業家達は『この工業がほんたうのところは輸出に依存してゐたにも拘らず、今になつて關稅保護をもつて國內市場の獨占を確保する一手段だと見た』即ち、こゝに、ドイツの工業關稅は轉化してカルテル保護關稅への一步を踏み出したのであるが、しかし『この工業保護といふ出鱈目な制度の代償として、工業資本家達は、地主達に與へられたもつともつと理屈離れのした獨占を認めねばならぬ破目に陷つたのである。』(エンゲルス)日本における農業關稅もほゞ同じ道を踏んでゐる。日本においては、日露戰時中の非常特別法が居直つて、戰後の明治四十三年、ともかくも保護の色彩をもつ農業關稅がはじめて課せられたのであるが、眞に近世的の農業關稅として地主的勢力の意識を明瞭に表現し出したのは何といつても世界大戰後、殊には米穀法の制定をもつて轉機とする。しかもこの期は內地における重要工業保護の運動と前後してゐる。從來、農業關稅は——舊き用語をもつてすれば——「農黨」政友系の、そして工業關稅は進步的ブルヂョア黨憲政系の支持のもとに、ほとんど議會開催ごとにその引上運動をもつて國民をおびやかしてゐる。かくの如く、農業關稅は、資本主義の成熟期乃至は沒落期における沒落的地主階級の自己防衛的努力の表出として重要の役割を演ずる。カルテル保護關稅と農業關稅とは帝國主義的段階に[illegible]一般的に[illegible]交錯と、資本家的政策の對立[illegible]一つの定式[illegible]各國間における關稅政策の對立[illegible]との、複雜化と緊張化とが、まさに第三期における關稅政策の根本特徵をなしてゐる。

4

『合衆國に對しては大ブリイテンは守勢の地位に立つ。合衆國は全世界における大ブリイテンの經濟的な權勢を見事に押へてゐる。合衆國の輸出はイギリスのそれを犧牲として擴大する。大ブリイテンの原料獨占に對して、合衆國は、その獨占的な購入組織を對立せしめる。資本輸出においては、合衆國は、あらゆる國において大ブリイテンを驅逐してゐる。高率關稅によつて護られてゐる強大な國內市場——その消化力はイギリスのそれの數倍にのぼる——を足場として、合衆國の帝國主義はイギリス帝國主義をあらゆる領域に亙つて大成功裡に驅逐しつゝある。この壓迫は、アメリカ合衆國の資本主義が爛熟するに從つて、そして海外における投資が國內における生產力の發展に比してより重要性を獲得するに從つて、ますます強まるであらう。』(Inprekorr. 17, Nov. 1928, S. 2522)

支配的帝國主義國たる英米のかくの如き根本的對立の反映と

して、最近時における關稅政策の上においてアメリカとイギリスとが世界の兩端に立つてゐる。尤もそれは必しも最近時にはじまるものでなく一般に大戰後の趨勢ではあるが、この配置は第三期に入つてますます明瞭を加へた。

それ故に第三期の關稅政策を、展開するについて、まづイギリスとアメリカとに二つの焦點を求めて二つのレンズがさし向けられねばならない。

一切の貿易理論を尻目にかけて自ら强力なる貿易理論をいま實踐の中に築いてゆくアメリカ合衆國は、一九一三年のアンダーウッド關稅法までは未だ農産品については無稅主義をとつてゐた。アメリカに近世的農業關稅がかやうにや、おくれて出現したのはもとより若く豐かなる無限の土を擁せる合衆國の特殊事情にもとづく。けれども戰後(一九二二年)の新關稅は、早やすでに農産物及び特殊綿製品に輸入禁止的高率關稅を課して、漸く利潤率低下に轉じ來つたその農業を救助したのである。同時に、工業生産物に對しては、戰後特有のダンピング防止と明かな報復關稅の規定とをもつて、完全なるカルテル保護の武裝をほどこした。この一九二二年の新關稅――卽ち現行關稅――は全體的に見れば戰爭直前のアンダーウッド關稅の約四倍に該當する稅率の引上げを行つたものである。かくして國内における獨占の形成と企業の合理化とを促進せしめ、戰後の世界經濟における合衆國の覇權確立に寄與したこの關稅は、實にスペインを除いて世界最高の稅率をもつものであつた。その關稅收入並にその輸入總額に對する率を他國のそれと比較すれば、一九二六年においては次の如き數を示してゐる。(商工省調)

	關稅收入	對輸入總額率
日本	一四七、九六九(千圓)	六・二二%
イギリス	一〇七、五一五(千ポンド)	八・六四%
合衆國	五八〇、〇〇〇(千ドル)	一三・〇八%
ドイツ	八一六、六二八(千マルク)	八・二〇%
フランス	一、九三五、九五一(千フラン)	三・二四%
イタリー	二、八六七、四二四(千リラ)	一一・〇四%

かくの如き高度の關稅障壁が、他國の資本にとつて漸く堪え難い重壓となつて來た時――あたかもその時、ゼネヴァ經濟會議の勸願とワシントンにおける四十ケ國の抗議とをジャズの雜音と聞き流して、アメリカは、更に高度の保護關稅の採用を決意した。

既に一九二八年大統領の改選に際して、共和黨はその重要政策として保護關稅並に農業保護を標榜し、フーヴァーはその選擧演說において高唱した。――(一)現行の關稅法に對して一般的改正は行はないが、從來保護を受けてゐなかつた産業には相當

の税率改正をやらう、（二）外國で競爭を有效に防止するためには充分の高率關稅を賦課しよう、特に農產品の税率を按配して農業を救濟しよう、（三）歐洲諸國に對する戰債回收の目的をもつて外國商品の輸入を容易にしてやるためならば、アメリカは税率を引下げる必要はない、と。この公約は、新大統領の下において、五月二十八日二六四對一四七票で下院を通過し現に上院の審議に上せられてゐる未曾有の新關稅法案の中に出現した。

この關稅率改正法案を、現に世界第一と稱せられる高率をもつ現行のフォードネー・マッカンバー關稅法と比較すれば、製造品に對する從價税率の平均は三割五分から三割九分に、農產品（砂糖・羊毛・バタ・馬鈴薯・ミルク・卵・ベーコン・肉類・等々）は平均四割から五割四分に（場合によつては從來の三倍に）増加されてゐる。從來無税乃至は殆んど無税であつた皮・鞣皮・靴、或はセメント・煉瓦・材木等の建築材料には一割から三割に至る從價關稅が新たに課せられた。改正の範圍は極めて廣汎であり、品目は二千種に上り、大體に各國特殊の製品に對しそれぞれ税率の引上げが行はれてゐる。即ちイギリスに對しては高級綿製品、毛織物、等。フランスに對しては絹天鵞絨その他高級絹製品。スイスに對しては絹リボン時計、等。ベルギーに對しては硝子、セメント、等。ドイツに對しては雜貨、化學製品、等。カナダに對しては穀物、乳製品、[illegible]、等。[illegible]に對しては[illegible]類、[illegible]等。キューバに對しては砂糖、[illegible]、[illegible]陶器、[illegible]、油類、敷物、等。日本に對しては品目が甚だして中小工業品の範圍に屬しその影響に從つてさほど重大とは云へないが、他國の多くはその重要產業品に關係してをり、その打撃は、アメリカに商品を供給する唯一の國であるヨーロッパ諸國において最大であらう。だが、改正は單に品目と税率のみではなく、更に重要なのは關稅施行法中の改正であり、その主要のものは現行法中の謂ゆる關稅伸縮條項と評價方法の改正である。現行法においては、關稅率は大統領の權限をもつて現行税率の五割まで増減し得るのであるが、それは、外國商品と米國商品との生產費の調節を名目とするもので、少くとも表面上は、外國商品のために米國商品が壓倒される場合において兩生產費の差額に該當する税率を（現行税率の五割まで）増徵し得ることになつてゐる。これが關稅伸縮法の規定である。しかるに改正法案においては、外國よりの輸入商品の價格をそれに類似するアメリカ產商品の價格を以つて決定し、それを基礎とすることにした。この結果は明かである。アメリカ販賣價格はアメリカ產商品の生產費・運賃・利益の一切を含んでゐるが故に、是を從來の生產費を基礎とするものに比すれば著しき増徵とな

る。更に評價方法の改正においては、從來適用困難の狀態にあつた米國評價（United State Value）が容易に適用せられ得ることゝなつた。米國評價とは、輸入商品がその輸出の當時合衆國內の主要市場においてもつ價格であつて、それは云ふまでもなく從來の主たる評價方法たる外國價格又は輸出價格に較べて甚しく高價である。その結果は、稅率の引上てふ名目を用ひずして方外高率の關稅率が課せられることになる。一例を、若松商務書記官の言ふところによると、日本の對米重要輸出品の一つであるラツグ・ラツグ（綿襤褸製敷物）の一種が一九二八年米國內の生產者の斯業保護運動の結果評價方法を輸出價格から米國販賣價格に變せられたゝめ、同じ三割五分の名目が實際には舊輸出價格の從價十割に當り正に六割五分の關稅引上げを行つたことになるといふ。（「自由通商」三ノ七參照） かくて關稅伸縮條項改正並に米國評價の方法によつて、今回の改正品目中に入らざる商品も事實上極めて高率の引上を蒙むる結果となることを知らねばならぬ。

アメリカの關稅はまさに昂然として世界の攻略に向つてゐる。

5

もう一つの焦點に移らう。大戰後この自由主義の祖國イギリスが保護主義に轉化したといはれる。だがその保護主義は果して舊きレッセ・フェールに代り得る何らか新しき力であつたらうか。イギリスの新保護主義の旗は近代的な色どり鮮かになびいてゐるであらうか。

「公正貿易」（フェーアトレード）といふいち早き先驅者を暫くおくならば、近世のイギリスにはじめて保護的色彩の現はれたのは、開戰の翌年即ち一九一五年、自由黨アスキスを主班とする聯立內閣の下におけるマツケナ關稅である。しかしこの關稅はもともと自由貿易論者マツケナの提案でもあり、單に戰時經濟の危急を切りぬけるための權道であつて、主として國內の奢侈的消費を禁壓せんとするものに過ぎず、課稅品目も自動車、自動自轉車、時計、活動フイルム、樂器、蓄音器等、極めて少數にすぎなかつた。ところが、戰後當然廢止さるべき運命にあつたこの關稅が、自由黨ロイド・ジョージの率ゆる聯立內閣の下において廢止されず、却つて藏相チャンバーレンによつて一九一九年大英帝國內における特惠關稅制度が創設された。更に、一九二一年には、商相ボールドウィンのもとにおいて謂ゆる「產業防衞法」（Safe-guarding of Industries Act）が制定されて、樞要工業（キー・インダストリー）の保護とダンピング防止に備へられた。同じく同年、イギリス染料法

及びドイツ賠償收入法が制定され、ドイツ品の輸入を防止して部分的ながら内地產業保護の役目を演じた。自由黨を代表する聯立内閣の下において多少ともかくの如き保護主義の採用を見たことは、云ふまでもなく、戰後の大陸諸國における貨幣價値の混亂・暴落が與つて力あることであつたらう。けれども、戰後における歐洲諸國購買力の減退は尙ほその後も引つづき、植民地における工業もまた戰時中の發達を維持しつづけたゝめ、イギリス商品のための市場は一向に擴大の形勢に至らなかつた。かくて、一九二二年における保守黨内閣の首相ボーナー・ローの聲明にもかかはらず、翌一九二三年に至つて新たに反動的ブルヂョアジー保守黨の首班として登場したボールドウィンは、現下のイギリス・ブルヂョアジーの帝國主義的地位を正直に認識しそして露骨に表明した。彼は、『未曾有の失業問題』を『國内市場の保護』に結びつけて一般的保護政策に出でんとしたのである。だが近世イギリス國家傳來の家憲『自由貿易』を破つた當主の政策は、すでに輝やかない自由貿易の迷信を抱いて放さない大イギリス國民の不機嫌を買ふに終つた。一九二四年一月マクドーナルドによる勞働黨内閣が成立した。けれどもそれは、如才のない、モダーンな自由黨にすぎなかつた。藏相ヒリップ・スノーデンは安直に自由黨と手を握つた。そして保護的[illegible]防衛法において[illegible]更に一九二三年保守黨内閣が植民地に約束した特惠關稅增加案の廢棄。けれどもそれらの切札はたゞ大向ふの『自由主義者』の喝采を博し得たにすぎなかつた。自由黨とのなれあひにも拘らず、マッケナ關稅と特惠關稅案の廢棄にすらすでに可成りの困難が感ぜられた。

かくして辛しで擁護された『自由貿易主義』は、さて新しい時代の初めであり得たらうか。十ケ月の後、イギリスの貿易政策は、ボールドウィンの再起とともに再び保護政策へと轉換したのである。たゞ、この保護主義は、イギリス國家代々の家憲『自由貿易』がひどく不體裁にならぬやう、しかしまた傾きかけてゐるイギリス國家を何とか持ち直すやう、支へにつけられた心細い一本のつッかい棒である。そしてそこにこそ現代イギリス關稅政策の面目は窺はれる。

新關稅政策の中心は舊法の復活としての產業防衛規則(Safeguarding of Industries, Procedure and Enquiries.――一九二五年)の制定とマッケナ關稅の復活である。新關稅政策において、ボールドウィンは前回における『一般的保護』より一步退却し、單に產業の防衛を主旨とすることを言明した。その全政策が事實において保護の程度を低めたかどうかは別問題として、

新規則のもとに防衛せらるる產業にはともかく種々の制限があり、その點は舊法よりも保護範圍の縮少を見たといへる。卽ち、一九二五年より二八年に至る間に約五十種の產業が保護を要求しそして審査の結果はわづかに九種が防衛せられたに過ぎない。(一)レース及び刺繡、(二)皮革製手袋、(三)織物製手袋(四)ガス・マントル、(五)刄物、(六)包裝紙、(七)半透明陶磁器、(八)ボタン、(九)エナメル製品。そこには殆んど重要工業と目すべきものはない。また防衛規則以外の新設關稅においては、絹關稅の創設、自動車關稅の擴張、樞要工業(キーインダストリ)保護の擴張の如きものがあるが、要するにそれらも外國品の競爭によつて脅かされる部類に屬するイギリス產業の保護であり防衛であり、極めて消極的、受身的であることは確かであらう。しかもかくの如き受身的地位にある工業の保護であつてみれば、いかに頹勢のイギリスと雖もさほどに多數に亙るべき理由はない。事實、防衛規則によつて防衛せらるる產業はイギリス全產業の二%そこらであるといふ。

產業のカルテル化並に合理化に立ちおくれたイギリスの關稅――マツケナ關稅並に產業防衛關稅――は、近世保護關稅特にその先頭を行く合衆國關稅政策に對してまさに受太刀の地位に立つてゐる。それは、新たに市場の獲得に進み出んとする攻略的武器をなすものとは云ひ難いのである。この、イギリスの立てる運命は、分けてもその植民地政策の中にあらはれてゐる。後に見る如く、イギリスの諸植民地が最近の三四年間において著しく關稅壁を高めつゝある。それは、それら植民地に對する資本主義列強殊に合衆國の侵略を防ぎ、そしてその中に大英帝國自らがしばし籠城せんとする城砦である。

第二次勞働黨內閣はかくの如き保守黨の政策を打破するであらうか。それはむろんこゝに答へらるべき限りではない。嘗てマツケナ關稅復活の討議に當つて、スノーデンは、イギリス工業家は本稅が勞働黨內閣成立とともに廢止さるべきことを記憶せよと豪語したといふが、またその組閣後屢々保護關稅の不當を「聲明」しはするが、組閣半ケ年未だ現內閣が保守黨の復活し創設した關稅政策に根本的な斧鉞を加へたとは聞かない。第一次勞働黨內閣時代に比して更に反動化せる今日のイギリス勞働黨が――大英帝國主義の根幹を覆さんとするのではなく、大英帝國主義の進展を條件として勞働大衆の生活條件の改良を志す勞働黨が――一方にイギリス產業の衰頹と失業の增加とをそして他方に大衆の生活條件の改善を盛つてゐる天秤――防衛的保護關稅擁護――の矛盾(實は勞働黨自身の矛盾)を前にして進退に窮するはこれ當然ではなからうか。旣にその立つ大地を失つ

て浮んで來た自由主義[illegible]を破壊する[illegible]に、何が勞働黨をして保護貿易[illegible]やその[illegible]關税の撤廢を――決意せしめるであらうか。事實において、イギリス自身がその發案者の一人として現に開催されてゐる關税休戰會議には、イギリス植民地の大部分は不參加を通告してをり、そして勞働黨内閣がそれを是認してゐる！

イギリスの「防衛的」乃至「籠城的」關税政策は、かくしてアメリカの正反對へと歩いてゐる。

6

イギリス關税の老衰期的特徴に比すれば、フランス、ドイツの政策はなほアメリカに追隨してゐるといへやう。

古き保護主義の國フランスは、一九一九年に改めて最低税率・一般税率・中間税率に分れる新關税を創設してゐたが、一九二七年五月、對獨通商條約を締結するに當りその基礎として一般税率を最低税率の四倍にまで高めた。この新關税率に關する法案は、その審議と時を同じうして開かれた國際經濟會議の決議に影響されて豫定よりも低い税率がとられたと傳へられたが、すでにその翌年には對獨條約に關する部分の税率引上改正案がフランス政府自身から提出せられてゐる。またフランスの[illegible]

[illegible]し、他國に對しては本來[illegible]

ただとして重工業に依存するドイツが高度の[illegible]保護關税とそれと連帶を結ぶ農業保護關税の城砦の中に發展し來つたことは周知である。一九二五年の改正は既に農業品工業品につき可成りに高い障壁を作つてゐたが、その後農業の不況につれて農業關税引上げ運動は新たに擡頭した。一九二九年、食糧農林大臣は、農業困窮の一大原因が一九二五年の改正が工業に厚く農業に比較的薄かつたことにあるてふ理由のもとに、農業關税の引上げを決行した。穀物・穀物粉・牛酪・乳酪・馬鈴薯・砂糖の税率が、社會民主黨その他の反對にも拘らず結局妥協成立して悉く引上げられた。同時にドイツはフランス、スイス等との間の税率協定の撤廢を取極め條約上の拘束を免れた。なほ一九二八年十一月以來、ドイツは米國産大麥の輸入制限をやつてゐる。

日本における近世的保護關税運動の擡頭は、やはり歐洲大戰後、殊に最近の五六年來と見るべきであらう。農業關係においては、米穀關税が一九二七年八月以來引續き免除されざるのみならず、翌二八年それは植民地朝鮮・臺灣にまで擴張され、更に同年三月以來は外米の輸入を制限した。木村關税は一九二九

年新たに設置された。鐵鋼關税は近き將來において再燃するであらう。

7

たゞに資本家國のみでなく、殖民地諸國における關税の引上げの傾向がまた最近時世界關税政策の一特徴をなすことは既に觸れた。

英領インドは數年來の懸案を解決して一九二七年綿絲關税の引上げを行つたばかりであるが、最近、更に綿布關税の引上げが計畫され、それは特惠關係にあるランカシアとの對抗上差當り日本の輸出綿布を甚しく脅威してゐる。イギリスの大きな得意先である濠洲聯邦は近年矢繼早に關税の引上げを行つた。最近においては一九二九年十一月、歳入の不足補充のためといふ名目の下に百四種に亙る增課を決行したが、もとよりイギリス本國のためには特惠的效力の發動を期せること印度の綿布と異らない。しかもそれは同聯邦勞働黨内閣の下において決行されてゐる。ペルシャは、一九二七新關税法を制定し、依つて從來の各國との間の條約を一九二八年五月をもつて廢棄し、最高最低二種の税率を設けて一般に税率を高むるの結果となつた。シャムは、一八五五年イギリスとの間に結ばれた片務的條約を廢棄して一九二七年初めて關税制度を確立し、特殊の品目を除き他は一率に從價五分の税率を定め、これ又關税壁の改築と引上げとを決行した。佛領印度支那には一九二八年十二月以來フランス本國の税率が適用されることゝなり、その結果關税上無條約國に對しては著しく税率の引上を齎すことゝなつた。日本及びドイツはその主な無條約國として甚しく不利の地位に落された。更にトルコは、一九二八年、新輸入税率法を制定して標準從價三割の課税を確立した。エヂプトが關税を引上げ、日本の綿製品が八分の從量税から一割五分に引上げられたことは最近新聞紙の報じたところであるが、日本の綿製品はブラジルにおいても(一九二八年)關税引上げにぶつかつてゐる。最後に支那における金建の採用は事實上關税の引上と同一であり、さらに關税自主權問題の解決は、必然更にその引上げを齎すであらう。

かくの如き植民地、半植民地における關税の引上げは、植民地自身における工業の發展に由因するほか、その從屬する本國の政策を反映するものとして、「第三期」における一つの動向を示唆するであらう。

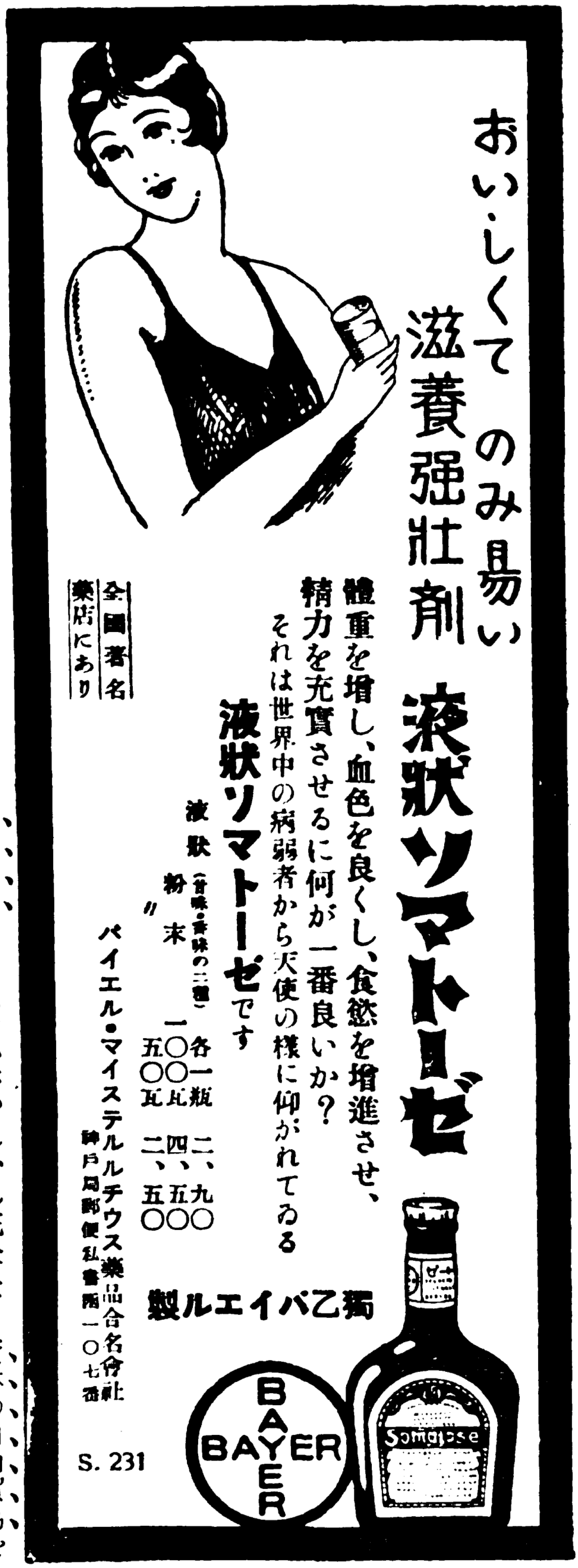
8

沒落資本主義の十年を綜括し來つたオイゲン・ヴァルガは、最近の一論文においてその所謂「第三期」を五つの主要素をもつて特徴づけた。(Unter d. Banner d. Marxismus, 3 Jahrg. Heft 2) これら五つの要素――それぞれ相關聯するが――のうち最も根本的な――「生産と販賣可能性との間の矛盾」の激化てふ新たなる狀勢は、上に吾々が見た世界諸國の關稅政策の中に――關稅戰爭の激化の中に――確認せられ得ると思ふ。

利潤連帶の上で手を握り合つてゐる農業關稅とカルテル保護關稅との交錯を基調として展開された近世保護關稅は、最近の一時的安定期を過ぎるとともに、第一に、資本家諸國において急速に引上げられた。この動きをリードするものは合衆國である。第二に、資本家諸國のうちイギリスの沒落的地位の著しき深刻化が反映された。そこに現はれた關稅は、侵略の武器としてのカルテル關稅といふよりはむしろ自國産業の「防衛」――既に『育成』ではあり得ない――を使命とする。「防衛」關稅は、他の資本家國の「侵略」關稅が進出するにつれて、從つてイギリス帝國の悲運が加はるにつれて、その「防衛」範域を廣めその「防衛」率を高めるであらう。盛花期が既にはるかな過去にあつたイギリスは、この意味において、アメリカからはるか遠くのところを歩いてゐる。しかし老舗イギリス帝國主義の現在は、もとよりその沒落を隱蔽することなく[illegible]へられてゐる。そこにはしかし關稅自主の要求が伏在してゐり、自治要求の若芽が準備されてゐる。イギリス保守黨の植民地特惠關稅政策の發展はかくしてイギリス帝國主義の最後的段階を表徴するであらう。第三に、植民地々域における關稅壁の確立と引上げは、資本家諸國におけるそれのヨリ一層の引上げを以て應ぜられるであらう。

かくの如き積極的なる事實の動きを把握するときは、この主たる流れの横を逆流する保護關稅撤廢乃至引下げ運動の意義はおのづから分明であらう。

關稅壁撤廢の國際的運動は――消費者乃至無産階級の立場に發足するものを暫く除けば――關稅の高き障壁のために蒙る商品輸出可能性の減少にもとづき、利潤率の低下を呪ふ資本自身の叫びにほかならぬが、しかも關稅障壁そのものはもと利潤を追求する同じ資本の熱求によつて築き上げられたものだ。關稅障壁撤廢の運動は明かに資本の自己矛盾を暴露するものである。けれどもこの矛盾は未だ必しも資本の進路をはゞむ矛盾ではあり得ない。否、國際的な撤廢運動そのものが第三期における「侵略」關稅の昂進を裏書するものでこそあれ、ただに近世關稅のための挽歌ではあり得ないであらう。そのことは、國際



經濟會議後の一ケ年間に關する常設委員會の實狀報告がこれを證してゐる――『過去一年間における各國の關稅は引下げよりはむしろ引上げの傾向にあつた』と。それはしかし不思議ではない。何となれば、國際關稅戰において關稅障壁に自己の全面的進出をはゞまれるのはたゞ小資本であり商業資本であり總じて產業資本であるにすぎないから。國內の重要產業をカルテル化しそれを獨占せる大資本は、關稅障壁をくゞるにダンピングをもつてなし得る。そして、金融資本は、一切の國際的障碍を自由に超え得るところの資本輸出の武器をもつ。彼は、商品の自由貿易をもたないが、しかし完全なる資本の自由貿易をもつ。逆にこの商品のための國際障壁は、たゞひとり國內產業の合理化と資本の海外輸出との能力をもつ金融資本にのみ堪え得るところであり、進んで、この障壁は、常に弱小資本を克服して自己を擴大しゆく金融資本のために必然な城砦となる。これ、アメリカが現在進行してゐるゼネヴアの關稅休戰會議に參加せざる所以であり、またイギリスが自ら提案しながらその植民地の不參加をよろこぶ所以である。

『獨占は自由競爭の終結を意味しない。』（一九三〇・三・四）

第二次普選の勝者と敗者

＝無產黨戰線統一の問題＝

山川均

(一)政戰の勝利者は誰か？

總選擧の結果は、民政黨の壓倒的な勝利となつた。謂ゆる「國民の總意」は、少なくともなほ四年の間（憲政の常道に從へば）、政權を民政黨の手にゆだねるといふ表明をしたのである。

何はともあれ今度の總選擧に見られたほど、選擧戰に對する興味と關心とが、大衆化したことはない。開票日の夜の京濱間の列車の中は、目黒の競馬や早慶戰の夕方と同じような光景を呈してゐた。銀座の鋪道を歩いてゐるステッキか棍棒らしい男女の會話の中からも東京第五區の戰況が聞かれ、或る食料品店の店頭の小僧さんからも、『××さんの票は知識階級だからね』といふような批評を聞くことができた。選擧に對する興味が一般化され、選擧に對する大衆の興味の高まつたことは、大衆が、ともかく總選擧の場合には一票を持つ者として、その立場から、二ケ年間政治を眺めてゐた結果であるとは、疑ふとができぬ。

そこで現在の政治機構の下において、選擧制度そのものが畢竟どの程度に正確に、國民の意志を反映し得るものであるかといふ問題はしばらく別として、多少ともそれを反映するものだとしたならば、一般大衆のより多くの關心と、より廣汎な興味とによつて行はれた今度の總選擧は、より多く國民の意志を代表してゐると云ひ得られる。そしてこの國民の意志が、在任四年の間、政權を民政黨の手にゆだねることであつた、といふことになる。民政黨が陣太鼓をたゝいて喜んだのも、尤もではないか。

しかし總選擧に勝つたものは、民政黨のみではない。いや陣太鼓をたゝかなかつた者の方が、ほんとの勝利者であつたかも知れぬ。

今度の政戰は何をめぐつて戰はれたか、そして總選擧によつて決定を與へようとする爭點は何だつたか。これは極めて明瞭單純であつた。わが國の經濟は根本的な建て直しをしなければ立ち行かない。膏藥やつかえ棒では間に合はない。このことは最早や政友會の五千萬圓の減稅の前約や犬養さんの好景氣の約束くらゐでは動かされぬほどに、國民の多數は過去の體驗によつて說得せられてゐる。そして金解禁はこの建て直しを、いよ〳〵、そして初めて、ほんとの軌道の上に乘つけたものである。さてこれから先きの工事を誰に請負はせるか。政友か民政か、犬養か濱口か。これが總選擧の爭點であつた。建て直すか建て直さぬか、鐵筋コンクリートに建て直すか、木造に建て直すかゞ問題となつたのではなくて、どちらの請負師の見積り書の方が、正直そうに見えるかといふことであつた。二つの政黨の政策は、この限られた範圍においてのみ問題となり、この限られた意味においてのみ、政友か民政かであつた。

しかしこの建て直しそのものには、選擇のできるいろ〳〵の設計や模型があるわけではない。少なくとも資本主義といふ立て前の範圍內では、わが國の經濟が活きんがための出口は、たゞ一つしか見當らない。强大な金融資本を頂上とし、これと緊密に結合し、これによつて秩序整然と統制され、そして生產の行程においても管理の方法においても、高度に合理化された大產業の巨柱で支へられ、たゞに潛水艇と飛行機ばかりでなく、完全な政權によつて防禦せられた鐵筋コンクリートの大資本主義――かういふ模型に從つてわが國の經濟が建て直されぬかぎりは、國際資本の競爭のうちに立つて、わが國の經濟はもはや存續して行かれぬ。このことには、政友か民政か、濱口か犬養かといふ選擇の餘地はない。これは政友會と民政黨との政策によつて初めて決定せられる方向なのではなくて、究極においては、政友會と民政黨との政策を決定する方向なのである。そして總選擧に現はれた謂ゆる『國民の總意』は、この方向をより率直により正直に代表すると認められる民政黨に政權をゆだねたのであつた。眞實の勝利者が何者であつたかは、云ふまでもない。權威ある金融資本の代表者と大企業の代表者とは、一齊に、總選擧の結果を、『政局の安定』といふ言葉で祝福した。

(二) 無產黨の『慘敗』

けれども、かような資本主義經濟の建て直しは、決して安價に得られるものではない。不景氣の深刻化、驚くべき失業者の激增、勞働條件の一般的な低下、就職難、小企業の破產と小商工業者小農民の沒落はその代價にほかならぬ。そしてかういふ

方向を指した經濟の再建――金融資本の政策――をより卒直に代表した政派に對して、國民大衆が壓倒的な支持を與へたことは、國民總意の名において、この代價の支出に承認が與へられたことを意味してゐる。かうしてわが國の金融資本の政策は、より廣大な國民大衆によつて正式に支持せられ、金融資本の政治勢力は、一そう廣汎な大衆の上に、その基礎を擴大したのである。そこで參政權の擴張は、少なくともそれに對立する强大な勢力の現はれない現在までは、ブルジョア政治勢力を危うくする代りに、その影響力を一般大衆の上に擴大する手段にとゞまつてゐる。

勝利の反面には敗北がなければならぬ。わが國の資本主義經濟が新たな基礎と體系との上に再建される作用が進行し、またそれに照應するところの、金融資本を頂上にいたゞく强大な政治勢力が築づき上げられる過程の進行する反面は、生活の鬪ひにおける勞働者と農民との敗北と後退であつた。勞働者と農民の鬪爭の組織たる組合運動が、到るところで壞滅し、無力にされ、そして殘存してゐるものも互ひに孤立化され、何ら有力な全國的な中心組織による單一な戰線を形成することのできない狀態に陷入つてゐることは、一つには、かような作用の進行の結果でもあるが、同時にかゝる作用が最も圓滑に、最も容易に、最小の抵抗によつて最も效果的に遂行される條件ともなつてゐる。最近の總選擧における勝者と敗者も、かういふ作用の一つの部面乃至は一つの方向として考へるとき、最も重要な意義がある。

選擧によつて、無産黨の代議士は、前回の總選擧における八名から五名に減じた。この事實は、一般に「敗北」と認められてゐる。勿論、それが勝利の表徵でないことだけは疑ひがない。けれども現在の無産黨の場合には、當選者の五名と八名とが、決定的なものだとは云はれない。即ち代議士の數は一時的には減じても、又は著しい增加を見ないでも、無産黨の勢力が決定的に增大したと認めなければならぬ場合をも考へることができる。

この點では、そして特に無産黨の今日の發達の段階では、總得票數の上の增減こそ、無産黨の勝敗に取つては一そう決定的なものだといふことができる。

今度の總選擧における無産黨の總得票(全國黨および地方黨をも形成してゐない「無産派」をも含めて)は、前回よりも約二萬を增した。けれども他方には、有權者の增加や棄權率の點からして、有效投票數は六十萬を增してゐる。そこで今度の總選擧では、投票總數は前回よりも六・二二%を增し、有産黨の得票總數は六・三二%を增加したが、無産黨のそれは僅かに四・一%

を増したことになる。そして投票數全體のうちに占める無産黨の得票は、前回の四・九五%から四・八五%に減じたことになる。

けれども有産黨全體の得票が六・二二%を増したと云つたのでは、まだ充分でない。これらの有産黨の得票のうちで、金融資本の政策――勞働者、農民、その他の勤勞大衆の犠牲によつて行はれる資本主義經濟の再建の方向――を最も率直に代表し、それ故に總選擧において壓倒的な勝利を得た民政黨の得票は、二二・八%を増加したことを見落してはならぬ。そこで以上の數字のみから推論せられるなら、過去二ヶ年間の存在によつて、無産政黨の影響力は、絶對的には聊かの増加をしたが、金融ブルジョアジーの政治勢力との相對的には、遙かに縮少したと結論しなければならぬ。この點に、無産黨の「慘敗」の一そう決定的な方面がある。

しかしながら總選擧の戰績に對する計算は、すべての人が一致してゐるわけではない。たとへば東京第五區から沸騰的人氣によつて當選した大山氏は、次のような見解を述べられてゐる。

『……大衆の意識の成長といふことは、最初の言論戰を二三回やつた時に既に明かに觀取することが出來た。すべては時代の力である。金解禁を契機として、支配階級が産業合理化の美名の下に全大衆の生活をます〳〵窮乏に陥れ、その自由を愈々剝奪しようとしてゐるときに、大衆はもはや眠つてをられないことを感じた。大衆は我が黨と力を併せ、生活と自由との奪還闘爭に突入しようとする意氣を示した。大衆はもはや盲目なる衆團ではないことを自ら證明した。しかも大衆は自己の要求を貫徹する手段を悟つた大衆であることを遺憾なく示した……實際この選擧(即ち、大山氏を當選せしめた選擧)を通じてほど、大衆の力のめき〳〵と伸びてゐることの見受けられたことは曾てない……』(『讀賣新聞』)

これが大山氏を議會に送つた東京第五區の大衆である。ところが無産黨五名の候補者に合計三萬票を投じた――しかし不幸にして鈴木文治氏を當選せしめなかつた――大阪第四區の大衆を見ると、光景は一變する。鈴木氏の見解はかうである――

『……世間でいはれて居るやうに無産黨分裂の結果などゝいふやうなことはありますまい。この際私の思ふことは、何故民衆がもつと目覺めてくれないかといふことです……。』(二月廿二日『東京朝日新聞』)

『……今回の選擧において、私はまざまざと、未だ民衆の政治教育の足らざるを知つた。……』(同日『時事新報』)

しかし二年前はどうだつたらうか? 二年前には、大山氏は勿論、八千九百票しか與へなかつた香川第二區の大衆の間には

かういふ素晴らしい力の生長を[illegible]けられなかつたに違ひない。これに反して鈴木氏は、その一萬九千票によつて當選の榮冠を氏の頭上に捧げた大阪第四區の大衆に、めきめきと伸びる大衆の力を看取せられたかも知らぬ。

これに反して無産政黨は、その戰績のうちから、冷靜にして嚴格な自己批判を學ばねばならぬ。

〔三〕戰線の整理と『地盤協定』

若し吾々が、觀點を當選者數のみに限るなら、無産黨はその有るがまゝなる實力によつて、たゞ僅かに選擧に臨む對策を變更するだけで、今度の總選擧において、少なくとも十三名の當選者を出すことができた。即ち、對立した無産黨候補者の得票を合せると樂々と當選者の出された選擧區が、少なくとも九つあつた。從つて無産黨の『慘敗』は、對立諸黨の間に選擧協定、ないしは地盤協定によつて、忽ち勝利と進出とに變はるといふことになる。

選擧戰の敗績を顧みて、まづ何人もが痛感せざるを得なかつたことは、無産政黨の分裂對立による戰線の缺陷であつた。戰線の統一、無産政黨の合同の主張に對しては、今日まで固くその眼を閉ぢられてゐるかの如くに見えた社會民衆黨の安部磯雄氏すら、[illegible]今日は既に[illegible]の必要を認められるにいたつたことは、この問題の解決の上に大なる進歩と云つてよい。

安部氏は、目下の状態では合同は不可能であると思つてゐるら、出來れば勿論結構であるが、それよりも先づ實際的のものとして、全無産政黨の地盤協定に進むべきだと思ふ」と云はれてゐる（同二月廿四日時事新報）。安部氏はこの地盤協定案を黨議に附し、各無産黨との交渉を開始されるといふことである。一たい安部氏の地盤協定の交渉とは、何年かの後に來るべき總選擧に當つての地盤を今から協定しておくといふのであるか、それとも各無産黨の活動の領分繩張を平素から定めておくといふことであるか明らかでないが、假りに、次の總選擧に當つての立候補地盤を今から協定しておくといふ意味だとしても、これは畢竟、おのおのの政黨の領地を定め、日常の活動をその版圖内に限定するといふことにならなければ、效果を來しない。

安部氏の地盤協定案はしばらく別として、一般に選擧の目的に限定せられた地盤協定、または選擧協定は、無産政黨の戰線上の缺陷を、果してどの程度に救ふだらうか？ 無産黨の當選が五名であるか八名であるかに一切の重點をおき、無産黨の『慘敗』にたゞこれだけの内容を盛り、そして戰線統一の必要をた

ゝこの觀點から見る人に取つては、選擧における協定が問題の一切を解決するかの如くに見える。勿論、假りに無產黨の合同が不可能としたならば、選擧に限定せられた協定によつて對立を除去することも、無きにはまさつてゐる。けれどもその效果は、極めて局限されてゐるものだといふことも忘れてはならぬ。

若し完全な理想的な選擧協定が成立してゐたと假定したならば、今度の總選擧においても、無產黨は五名の代りに十三名の當選者を出すことが出來た。これは何人の目にも最も見易い效果である。さらに當選者を增すことは、單に議院における無產黨の議席を增すばかりでなく、無產黨に投ぜられた投票が、それだけ死票となることを防止する。現に今度の總選擧に無產政黨が獲得した總票數の八割三分四厘は死票となつてゐる。無益な對立のために徒らに死票を多くすることは、無產政黨が大衆を把握してゆくことを妨げる。そこでこの點からも、選擧協定の成立は、固より望ましいことに相違ない。

けれども完全な選擧協定の實行は、想像せられるほどに容易なものではない。合同は不可能だから——卽ち分裂對立は止むを得ぬから——先づ實際的な地盤協定をと云へば、如何にも尤もらしく聞えるが、現在の對立抗爭の狀態のまゝではとうてい完全な選擧協定は不可能だから、先づ徹底した合同からと云ふことの方が、却つて一そう實際的であるかも知れぬ。現にこの事を反駁するに足るような選擧協定が、何處に實踐せられたらうか。今日までに完全に行はれた選擧協定は、對立の一方の實力が微弱であつて、獨立の立候補が事實上不可能な場合に限られてゐると云つても過言でない。今度の選擧以前から、日本大衆黨と全國民衆黨との間には、非常に親善な關係が結ばれてをり、選擧協定が成立したばかりでなく、總選擧後を期して合同に進むべき諒解が成立してゐるものさへも認められてゐた。では、かような親善關係にある兩黨の間に結ばれた選擧協定はどうかと云へば、協定が行はれたのは、實際には兩黨の間に對立立候補の無い地域（東京一、五、六區、大阪一、二、三、五區兵庫二區）であつて、現に兩黨の候補者の對立してゐる東京第四區、大阪第四區では、「攻守同盟」が結ばれたに過ぎぬ。この一例を見ても、對立抗爭してゐる黨派間に完全な選擧協定を實行することが——如何に當選第一主義に徹底しようとも！——非常に困難だといふことがうなづかれる。

假りに協定によつて對立の除かれた場合にも、協定の效果は過大視することはできぬ。對立した二人の候補者の代りに、一人の候補者が立つた場合に、果して二人分の得票が得られるかと云へば、必ずしもそうではない。若し二つの黨が、共同候補者を立てゝ完全な協力をしたならば、總得票數は增加するかも知れぬ。けれども、かような協力を可能とするが如き條件の備

はつてゐる場合には、合同に何らの障碍もないといふことである。これに反して、合同を不可能とするが如き二つまたは三つの黨の對立の場合には、單なる地盤の利益交換によつて一人の候補者に整理しても、その得票は、二人の合計よりも減ることを豫想しなければならぬ。たとへば東京第二區では社會民衆黨（安部氏）は七七二〇票を、勞農黨（中村氏）は一九五五票を獲得し、双方を合せると九六七五票となり、ブルジョア政黨の最低位當選者よりも、千四百票を拔くことゝなる。けれども若し勞農黨の立候補さへ無かつたなら、安部氏の得票がまさに九六七五票となつたであらうと考へるのは、樂觀に過ぎてゐる。遺憾ながら無産黨候補に投ぜられる投票は、貸銀基金說における貸銀基金のように、それほど一定した分量なのではない。

對立と得票總數との關係は、すべての場合に決して一律だとは云はれない。無産黨の分裂對立が、無産黨一般に對する大衆の信賴を減じ、著しくその得票を減じてゐることは疑ひがない。けれども現在の分裂狀態をそのまゝにしておいて、たゞ單に候補者を一人にしたといふだけでは、必ずしも得票總數を增すこととは限らない。消極的に對立候補を引つ込めたばかりでなく、對立の跡に統一せられた有力な信賴すべき力が積極的に大衆に示された時にのみ、總得票數の增加が考へられる。そこで現在の分裂狀態をそのまゝにして考へれば、對立候補の整理必ずしも總得票數を增加せず、これに反して、[illegible]得票數を增加したと見なすべき場合がないか。

それでは對立候補を肯定することになるではないか!? 必ずしもそうではない。けれども若し無産政黨の現在の分裂對立が絶對に止むべからざるものであり、合同が絶對に不可能だと假定するならば、私は、對立候補こそ寧ろ當然であつて、選擧協定の如きは愚劣なことだと思ふ。選擧協定は、合同は可能であり、そして現に合同による戰線統一を目標としてのみ、初めて或る程度の意義を持つことができる。

（四）協定か合同か

ところが實際には、合同を不可能とする人々によつて、地盤協定が熱心に主張せられてゐるかのようである。合同は不可能であるといふ見解は、現在對立してゐる諸黨派は、合同を不可能とする程度に本質が異つてゐるといふ根本見解に基づいてゐなければならぬ。安部氏は婉曲に、合同の不可能を目下に局限され、將來における合同の實現を期待せられてゐるかのようである。けれども安部氏の社會民衆黨が三月一日に發表した合同問題に對する態度の聲明は、社會民衆黨とその他の諸黨とは、本質的に異なつてをり、從つて合同は絶對に不可能であるといふことを表明した以外のものではない。

勞農黨の大山郁夫氏も、精密にこれと同一の見解を取られてゐるもの〻如くに見える。大山氏は、今度の總選擧戰に臨むに際し、一點の誤解を容る〻餘地なき明白さをもつて、次の如くその態度を表明せられてゐる。

「無產黨の對立とか四分五裂とかいはれますが、社民黨や大衆黨は我勞農黨とは本質上絕對に相違して居ます。我々は眞の無產政黨は我黨だけと信じてゐます。從つてそこには無產黨の何等の「對立」もありません。この度の總選擧は、他のいはゆる無產黨の幹部の下にあつて階級意識を有する大衆が、我黨へ投票することによつて、その實際の意思を表明することを得る絕好の機會だと思つてゐるのです‥‥」（一月廿三日『東京朝日新聞』）。

この見解と立場はまた、同じ選擧區から立候補した社會民衆黨の松岡駒吉氏の立場でもあつた。

「‥‥立場と主張を異にする他の無產黨との對立はやむを得ないと思ひます。いや對立といふよりも、私は「竝立」といふ氣持でをります‥‥もし今度の選擧で共倒れになつても‥‥お互の地盤をつくるといふ點で、この竝立の價値はあると思ひます‥‥。」（同上）

大山氏にあつては、勞農黨以外には無產黨はないのだから、ドンキホーテの幻影のうちより以外には、無產黨の對立なるものは存しない。同じく松岡氏にあつても、在るものは對立ではなくて、無緣の他黨との竝立である。かういふ根本見解からは、無產政黨の合同は絕對に不可能であつて、合同を絕對に不可能とする以上は、お互にめい〱の地盤の開拓に競爭しようといふ松岡氏の態度は、選擧に負けた時にだけ協定々々と泣聲をあげることよりも、遙かに徹底した合理の態度だといふことができる。

尤もこの點では、大山氏といへども、敢て松岡氏に劣るものではない。勞農黨のみが本物の無產政黨だといふ見解から出發すれば、合同は固より問題となり得ない。他黨の大衆を取ることが唯一の殘された道であつて、他黨との間に對立候補者をなるべく多く立てることが、最も合理なこと〻なる。第五區では、東京無產黨は大山氏を支持したと云はれてゐる。これが正式な選擧協定の結果であつたか否かは分らぬが、いづれにせよこの場合にも、大山氏はこのエセ無產黨の一つである東京無產黨の幹部の下にあつて、眞の階級意識を有する大衆が、本物の無產黨たる勞農黨へ投票することによつて、その實際の意思を表示することを得る絕好の機會を惠まれた、といふ事に歸着する。

それと同時に大山氏は、地盤協定の希望者でもあることを忘れてはならぬ。

「‥‥それは兎も角、地盤協定（社會民衆黨の安部磯雄が提案されるといふ地盤協定のことである）には十分應じられる。

地盤協定と指導精神の議論とは、全然別個の問題である。勞農黨としては議會進出の必要を十分認めてゐるので、地盤協定により進出の可能性を多くすることは、勿論賛成である……」(二月廿四日『時事新報』)。

ここでは大山氏は、徹底した地盤協定論者として現はれる。指導精神を異にする政黨とは合同することができぬ。勞農黨は民政黨政友會と合同することができないのと全く同じ意味において、勞農黨以外の無産政黨ならざる無産政黨とは合同することができぬ。けれども當選するための地盤の協定は、指導精神とは全く無關係に實行することができる。それは政友會民政黨との間に實行し得るように、その他のブルジョア第三黨第四黨たるエセ無産黨との間にも實行することができる。そして大山氏の希望せられる地盤協定は、當選のためにするまさにこの種の地盤協定であつた。

かういふ目的のためには、地盤協定または選擧協定は最も有效な手段であるばかりでなく、對立無産政黨の間に行はれ得る唯一の利益交換の方法であらう。けれどもかような意味での地盤協定は、何ら戰線の統一または整理を意味するものではない。本質的に異つた黨派、從つて合同を絶對に不可能とする黨派の間には、たゞ對立抗爭と、でなければ利益の交換による休戰があり得るのみであつて、單一な戰線の形成はあり得ない。かような關係は、少くとも[illegible]には、[illegible]る。これに反して、現在對立する諸政黨を、本質的には同一のものと見做すことによつてのみ、初めてこれらの諸要素によつて單一な戰線を形成することが可能となり、必要となるばかりでなく、この戰線統一の不完全にして部分的一時的な一形態としての、選擧協定が意義あるものとなり、考へ得られるものとなる。言葉を換へて云へば、現在對立してゐる無産政黨を本質的に同一のものと見る場合にのみ、これらの諸政黨の間に、政友會や民政黨とは絶對に結ぶことのできない特殊の關係——戰線統一の關係——を結ぶことが可能となり、また必要ともなつて來る。

けれどもこの場合にも、選擧協定は、決して充分な、有效な、滿足すべき方法でないことは云ふまでもない。一切の偏執と誤謬を清算して、すべての無産政黨の合同を實現することによつてのみ、ますます擴大し强化する金融ブルジョアの政治勢力に對する有力な抵抗線となり、そしてブルジョアジーの政治的影響から遊離せんとする大衆の前に、彼らを信頼せしめ、彼らをして去就を決せしめるに足る糾合點となるような、有力にして鞏固な無産階級の單一な戰線を對立せしめることができる。(三月四日)。

金解禁後の日本農村の特殊貧困

稲　村　隆　一

（一）

濱口内閣によつて實行された平價金解禁は日本の資本主義經濟に如何なる影響と作用を與へるであらうか？　それは何人も次の如く答へることが出來るであらう。

（一）物價の下落

即ち物價の下落は産業利潤の減少となり産業利潤の減少は中小企業の沒落、從つて失業者の續出となり、同時に小資本の沒落に伴ふ大企業制の發展、資本の集中化、獨占化、即ち國家資本主義の完成（産業合理化による）となる。そして企業家の物價の下落による利潤の減少を勞働者に轉嫁し、賃銀値下げ、首切りとなる。一方の利潤の減少は生産原價の切りつめとなり、原料生産者たる農民の生産物の價格引き下げとなり、農家經濟を極度の貧困に陥れる。

（二）爲替相場の騰貴、變動であつて、輸入爲替の好化から、輸入業者の負擔の輕減となるが、輸出爲替の惡化は、輸出業者の負擔の増大となり、輸出業者はあまりに儲からない。だから結局輸出貿易の不振となり、それが遂には、養蠶農家等の打撃になるであらう。

（三）金利の騰貴

金解禁は金利の騰貴となることは何人も常識で考へられることだ。金利の騰貴は少數の銀行資本家の利益をのみもたらす。借金をしてゐる中小企業家、産業小資本家は、金利が高くなるから益々苦しくなり、或者は破産し、或者は自己の負擔を勞働者の賃銀低下によつて、勞働者の生活を窮迫に陥れ、同時に原料品を安く値切ることによつて農民に自己の損失を轉嫁しようとするのみならず、金利の騰貴は農民の借金と負擔を増大させる。現在如何なる農家も、勸業銀行、農工銀行、その他地方銀行、信用組合等より借金のないものはない。目下調査は明白ではないが、農家の借金はドンナに小さく見積つても六十億からあるといふ。物價は下落し、金利が騰貴するのだから事實上農民の借金は非常に増加するわけである。だから金解禁によつて農家の受ける打撃は想像以上である。

而して金の輸出解禁―金の流出―は必然に物價の下落、利潤の減少となるから、それが對策として又必然に小產業を滅亡せしめて、所謂產業の合理化(Rationalisierung)なる名目の中に、日本の資本主義は急速に獨占化の過程を辿る。蓋し少數大企業の獨占化こそ今日の資本主義經濟を建て直すところの唯一の政策であるからである。而してこの獨占化の形態はカクテル(Kartelle)でありトラスト(Trust)でありコンツエルン(Konzern)であるのだ。そしてカクテル、トラスト、コンツエルン等によつて所謂生產は合理化される。生產の合理化とは他ではない、即ち生產原價の切り詰だ。何故なれば生產原價の切り詰は即ち物價下落による利潤率の減少を相殺するからである。而してこの生產原價切りつめとは賃銀の低下と農業生產品の價格の低下である。

かく論じ來るならば、何か難しいことを云つて金解禁によつて日本の經濟を救濟するが如きことを宣傳することは、我々勞働者農民を偽瞞するも甚しい。金解禁は正に衰亡せんとする資本主義經濟に少しでも永い生命を與へようとする大金融資本家の代表者の起死回生の努力に外ならない。換言すれば資本主義の優秀なる財政家にして、政治家たる濱口雄幸氏及井上準之助氏は、丁度幕末に於いて德川社しよくを救はんが爲、奢侈禁止令を出し、節儉と消費節約によつて、封建武士階級から多大の人氣を博した、幕末の政治家水野忠邦と異らない。だが歷史の必然は水野忠邦の政治を失敗せしめたと同じ様に、金解禁は資本主義經濟の必然は通過しなければならぬ道程であるけれども、遂には失業者の續出、農家經濟の破壞となり、濱口內閣の致命的打擊となるであらうことは、それこそ火を見るより明かなことだ。こんな內閣の人氣なるものは水野忠邦の人氣と同じことである。これは大なる錯誤と失敗を暴露してゐるものだ。

（二）

金解禁後、物價の下落程明白なものはない。而して物價下落の現象が、爲替相場の騰貴や金利の騰貴に比して最も大きい。或人は金解禁によつて物價は一割位下落するであらうと云つてゐるが、それは必ずしもきまつてゐないがかなり下落するものと見なければならぬ。

即ち（イ）爲替相場の恢復は（解禁による）物價の下落を招來する（ロ）解禁による金の流出は必然に通貨の收縮になるから物價が下落する。（ハ）金利の騰貴は金融の緊縮となり物價の下落となる。（ニ）金本位制の復活は、日本の資本主義經濟の水準を外國のそれと同じ様にする。金の輸出禁止によつて、日本の物價は外國の物價に比して割が遙かに高かつたのが、或程度迄外國と同程度に引き下がる。（ホ）產業の合理化による原價の切り詰と低下によつて全體の物價はどうしても低下する。（ヘ）不景氣による購買力の減少も物價の下落となる。（ト）財界の不振より資金が固定して流動しない、之も亦物價下落を伴ふ。殊に中小商工業の沒落は資金を商業界から引き上げてしまつて、銀行等に預金となつて固定するから、從つて資金の活動が鈍ることから物價の下落となる。以上の如き事實から物價が下落するのであるがこの物價下落が原料生產者たる最も農家の經濟に影響するものであることは前述の

通りである。

去る二月二十六日の「東京日々新聞」の新潟は次の如く報知してゐる。

「縣下農村は今年意外に積雪量少なかつたため蒲原地方の如き既に田打ちさへ開始した處あり、一方養蠶期を目前に控へて愈々農繁期に入つたが、縣農會では今年糸價大暴落のため養蠶農村の受ける打撃を憂ひ目下對策考究中で昨年の縣下産繭高は白繭九十一萬二千貫、黄繭廿九萬四千貫、合計百廿萬二千貫で相場は春秋を通じて平均七圓だつたのに對し同年は金解禁の結果六月限で一千百十圓、釜入相場で五圓餘と云ふ暴落振り、昨年に比し更に二圓の差あり、結局二百四十一萬二千圓といふ巨額の損失となり、縣下農村の大半はこの養蠶によつて得た金で春秋の肥料を支拂ふものだけに今年の農村の疲弊は極度に達するであらうと當局は頭を惱してゐる」

以上の記事によつてもわかる通り、繭の下落によつて受ける打撃は實に大きい。養蠶は日本農業の主たるものである。養蠶ばかりではない。米價の下落も如何に人爲政策を施すも徐々下落してゆくのは必然である。それ等に就いて高橋龜吉氏は次の如く云つてゐる。

「顧るに、我が農産額は、別表の如く年額三十三億圓内外である。然るに、爲替相場四十三弗のものが金解禁の結果、平價(四拾九弗八五)に戻るとせば、ために起る不景氣――物價下落と云ふことを算外に置くも、即ち爲替關係のみの物價下落を見ても、大體に約一割半である。果して然らば、これだけで農民は年々約四億九千五百萬圓の收入減を強ひられるわけだ。尤も農産品價値の下落と同樣に他の物價其他の農家の支出が低下すれば差引トン／＼であるが、税金その他低下の見込なき支出多き上に、繭、米、麥等の大商品は、金解禁の影響を最も鋭敏に感ずるものなるに反し、農家用品たる農具、味噌、醤油その他の日常品の下落は最も後れるものである。斯樣なわけで、農産物下落のために蒙る農民の打撃は相當期間續くものと考へねばならない。

之に關聯して農民のために一言注意しておき度いことは、我が生絲業者が、金解禁の打撃を最小化するため、この斷行を、手持原料繭の無い時、即ち四五月頃に決行されたしと要望した。しかし乍ら此の如きは、金解禁の我が蠶業に及ぼす打撃につき、その負擔を全部夜の目も寢ずに働きつゝある養蠶家に轉嫁して、資本家たる生絲業者の負擔を免がれしめんとするに外ならない。しかも此の如き蟲のよいことが、堂々と、我が經濟界及政界に於いて論ぜられつゝあるのである。以て農民の利害が如何に公然と蹂躪されてゐるかの一端を窺ふに難くないであらう。しかも、平價金解禁に由る生絲業者の打撃は一度ですむ。それ以後は、原料繭をそれだけ安價に仕入れることに由つて、その打撃を農民に轉嫁する。

だが農民は之を他に之を轉嫁する途なく、翌年その打撃を受けねばならぬ。換言せば、僅か一回の仕入繭だけの損に過ぎない生絲業者に對しては、その損害を免がれしめるに汲々たる政府が、毎年永くその損失を負擔せねばならぬ農民に對しては、何等考慮を拂はざるのみならず、重荷に小附の樣な氣で、當然受くべき生絲業者の損失まで、農民に轉嫁しようとしてゐるのである。」(日本農村經濟の研究四〇二頁――

四〇四頁）

右の引例によつて、濱口内閣の金解禁の正體を我々は知ることが出來る。所で農民に取つて物價の下落も敢て惡くない。物價の下落は生産費の低下となるからと民政黨の政治家諸君は云ふ。しかし生産費は一體何處に低下される傾向があるか、即ち政府の連中は産業資本家を救濟するため、既に關税調査會を設置して、内地の資本家を保護し、生産費の低下を事實上防いでゐる。のみならず肥料の如きは滿洲の大豆粕の如きものすら、一二の財閥に販賣の獨占權を委ねてゐるから容易に下落しない。又、肥料會社なるものは少數の財閥の經營するところである。而して最近税制審議會は、この肥料會社を保護するため、外國から輸入される肥料の關税の引き上げを主張してゐるのだ。かくの如き恥知らずの議論が何處にあらうか？　金解禁によつて、少數財閥の利益だけを計つてゐる濱口内閣は、我々農民の金解禁による貧乏を一體どうしてくれるのだと叫ばざるを得ない。

（三）

次に物價の下落と共に金利の騰貴は農民の經濟を脅かす。金を解禁しても金利は騰貴しないと云ふが、しかし乍ら金解禁によつて、金利が騰貴するのは自然である。或人は日本は金解禁によつて、米國よりも金利が二%位高くなると云つてゐる。然らば日本の農民は六十億の借金が現在背負つてゐるのであるが、農民の借金は大正二年までは拾億足らずであつたのが、景氣に誘はれて、いろいろ投機に手を出したり、[illegible]のである。然らば今回物價が下落し、金利が高くなると農民の借金は非常に増加するわけである。米價も繭も下落する一方、高利が[illegible]る。農民は益々利子も拂へず、金は益々銀行家に[illegible]併呑されてプロレタリア化す。それればかりではない。金の流用は前にも一寸述べた通り中商工業を自滅せしめる。そして大企業の獨占力を強める。而してこのことは獨立商人の没落でもある。何故なれば、カルテル、トラスト、コンツエルン等の結合は自由競爭の除々たる驅除と投機的事業の滅亡となり他方に於いて誇大の廣告的販賣、仲介業者、行商人の介在を減少せしめ空費を省くからである。そこでこの獨立商人、仲介業者、小工業の没落は必然に地方銀行を行き詰らせる。何故なれば地方銀行なるものは正に、之等商人、小工業者の動きによつて、生命をもつてゐるからであるから。そしてこの中商銀行の行きづまりは、農村金融を益々困難ならしめ、自作農、小地主の没落の原因となるであらう。そして田舍は益々衰微し凋落する。それのみならずこの金解禁によつて、農村の受ける最も大きな影響であるが、それは何であるかと云ふに、不動産、土地建物の下落である。一面から云ふならば土地の下落は小作人にとつて、都合のよいこともあるが、この土地その他不動産の下落が農村經濟に及ぼす影響のみに就いて語り度い。即ち日本の土地の値の高いのは、人口の稠密と面積の狭少にもよるが、一つは一般の人々の土地を最上の財産と考へる傳統的の觀念に支配されてゐた。少なくとも小作爭議のおこる迄、土地の價値は益々昂るものと個人は考へて

ゐた。今尚宅地等は投機買されてゐるところがある。左樣なわけで金を少し儲けたり、持つたりするものは必ず土地を持つ風習があつた。又銀行も今迄土地や建物を抵當にして、ドシドシ金を貸出したのである。所が今では殆んど建物や田地では銀行は金を貸さなくなつてゐる。而して物價下落と共に日本の土地は益々下落する傾向にある。然らば日本の人々の過半は土地で財産を持つてゐるのであるが、地價の低落は益々小地主を沒落せしめ、自作農を沒落せしめ、大多數の農民の貧農化する勢が滔々として低止するところを知らないであらう。かゝる經濟狀態の下ではどんな大規模の自作農創立をやつても無效である。最近の農林省の統計は數年此方自作農の增加、小作農の減少を證明してるようであるが、(此の統計も實は甚だ怪しいものである)いくら低利資金を借りて土地を買つても年賦償還で土地を買つても、今回の金解禁から洪水の樣に自作農の沒落があるだらう。小地主の沒落もあるだらう。それが益々農村の金融逼迫となり、農家は肥料資金すら借りることが出來ないであらう。

以上簡單に述べたるが如く、何れの方面から見るも不價金解禁は、農村經濟を混亂せしむるも甚しい。この頃政府は生絲の暴落によつて損失を蒙る生絲業者を救濟する補償法案を考慮中とあるが、彼等によれば生絲業者を救濟することが、農村を救ふものゝ樣に考へてゐるかも知れないが、生絲業者の救濟だけで斷じて農村は救はれない。それこそ生絲業者を救ふ金で小農に無利子で金を貸し與へ、肥料その他の生產に要するものを公營として、農民の生產費を減ずることが、唯一の金解禁後の農村對策であるに拘らず、そんなことには一向、かまわず、却つて關稅をあげて、肥料の下落を阻止せんとするが如き風說あるに至つては實に言語同斷と云はねばならぬ。

(四)

その他、金解禁による所謂「緊縮政策」のため多くの仕事はくりのべられ、農民の副業的勞働を奪ふに至る。このことは我々農民にとつてのみならず、都會勞働者に最も大きな影響がある。それで私は都會の勞働者と金解禁に就いても是非一言しなければならぬと信ずる。即ち所謂、金解禁による產業の合理化によつて、どれだけ賃銀の値下げ、首切りによつて、ストライキを勃發してゐるか?

或者は云ふ「物價の下落は實質的に賃銀を增すことである」と。しかし乍ら、物價の下落―利潤の減少は、資本家階級をして、所謂產業の合理化に急たらしめ、自己の損害を勞働階級に轉嫁するのである。そこで物價の下落による利潤の減少は、賃銀引き下げ、首切によつて、相殺するのである。かくて現在の勞働爭議の大部分は勿論、將來のストライキは皆、首切りと値下げに對するストライキである。否値下げよりも、失業に對する爭議が大部分となるであらう。

今迄金輸出禁止の場合は兎に角人爲的に不自然に、高い物價と低い金利を維持し、必然に沒落すべき小企業、小經營が、どうにかして金錢の融通をつけて命脈を保つてゐたのである。然し乍ら金輸出解禁はそれに伴ふ物價の下落や、金利の騰貴、爲替相場の變動で、かうした

不合理なる企業の存在を絶對に許さなくなつてしまつた。殊に日本の資本主義は急速に、不自然に發達したものであるから、多くの不合理な企業の存在、商業存在が到るところにある。だからして金解禁の影響を受けることの多いのは他國先進資本主義の比ではない。如何に不合理なる仲介的商業が存在してゐるか、又如何に多くのやりくり的な小工場、マッチ工場が多いことか、この薄弱にして、不合理なる存在は、金解禁によつて洪水の様に没落することは正に目前にある。

故に日本の資本主義は金解禁によつて、産業の合理化のため他國に見ない様な最大の犠牲を、勞働者及小商工業の上に負はせるのである。もしこの小工業が存在するなら絶對に利潤がないであらう。先づ第一に生産原價を切り詰めることである。それには小工業の併合と勞働賃銀の値下げ又は首切りでなければならない。もつと詳しく説明するならば、もし資本家が物價下落、市場價格の安價のためにも關らず今迄の様な利潤を保持しようとするならば、二つの場合を考へなければならぬ。第一の場合は賃銀は大した引きさげなくとも、勞働時間を延長し、勞働の生産性を増加し、勞働力を強度に増加し、生産量を増加し、その増加部分で生産費を低下せしめて、市場價格の先安(金解禁後市場價格が先づ安くなる)に對抗して、利潤を維持しようとする。これがため、勞働者は資本家のため益々勞働力を搾取されるのである。

更に第二の場合は、賃銀を引き下げることと、首切即ち失業であるが、この場合資本家は、勞働者の數を少なくするか賃銀を安くすることによつて、前と同じ様に生産量を保持して行く。そして生産費を低下するため、勞賃の價値を引き下げるか、これと共に不必要な機構を、即ち勞働者を解雇して、殘餘の勞働で、從來の生産額を維持する外に方法はない。ただ此の如き方法による、金解禁、産業の合理化は勞働者階級と必然に、資本家階級は衝突せざるを得ない。

即ち前者の勞働時間の延長や強度の勞働力の搾取は、勞働者の賃銀の値上げの運動となるであらうし、賃銀減額、解雇は、賃銀値下げ反對、失業反對の運動となり、今迄見ざる深刻なストライキが演出せらるゝであらうことは金解禁後の經濟狀勢を分析するならば、何人と雖も觀取することが出來る。而して、金解禁——これは必然に資本主義合理化の強行となるのだ——によつて、資本に對する勞働者、農民の反撥はかつて見ざるものとなるであらう。その時こそ民政黨内閣も僞瞞的なる自由の假面をぬぐであらう。彼等は今迄明るい政治を云々してゐる。選擧のときの言論取締りの公正を自慢してゐる。だが彼等は金解禁による、勞働者や農民の犠牲を少しも救濟しようとしてゐない。そうしたならば必ず大きな反抗鬪爭がおきるではないか? そうしたならば彼等の自由は忽ち、言論、結社、集會の抑壓となる。否現になりつゝある。彼等の明るい政治は忽ちに暗黒の政治となる。

こうした狀勢を前にして、勞働者農民は資本との鬪爭のために大結成をしなければならない。無産政黨の合同は決して代議士を多く出すためでもない。資本との鬪爭のためだ。このとき、いろいろな小理窟をつけて、統一と合同を拒否するものは、裏切りものとして大衆の鬪爭の前に葬られるであらう。鬪爭のために合同する。指導精神が統一さ

れてから合同するのではない。それは知識階級の世迷言葉である。鬪爭力集中のため、それこそ組合の擴大强化のために合同する。そしてその鬪爭の過程から正しき指導と結合は創造され發展するのだ。一部無産政黨幹部の聲明や決議や待合政治や、又は代議士病患者や學者の合同運動などは時とすると却つて、各團體大衆の對立、分立、抗爭を惹起し、組合の破壊となり、爭議の敗北ブチコワシとなる。だから無産政黨の統一は斷じて少數幹部の策動や通り一片の決議によつてではなく、各勞働組合農民組合の組合會議を、中央又び地方にまき起し、日常鬪爭と大衆的討議によつて、下から押上げるべきである。丁度舊勞働農民黨の時代、幹部が門戸閉鎖によつて、黨の發展を妨げたとき、各農民組合會議勞働組合會議はそれを蹴破つて門戸解放をなし、裏切りものを敗北せしめたと同じ様に合同統一は全國の勞働者農民の組合會議によつてなさるべきだ。我が全國農民組合の執行委員會及支部長會議はそれを決議し、提唱せんとしてゐる。

而して今更我々に共同鬪爭による指導精神の統一によつて　大衆と大衆との合同を教示する尊敬すべき同志があるけれども、我々はとつくの昔に共同鬪爭を卒業してゐるのだ。例へば全國農民組合の勞農黨員及び大衆黨は同一組合内に於いて、秋田の前田村爭議、又新潟の帝織の爭議に於ける様に、いつでも共同鬪爭してゐる。共同鬪爭をしないものは少數の學者や智識階級だけだ。共同鬪爭によつて、是だけ鬪爭してゐるのにどうして合同がまだ早いと云ふのだ。その上總同盟のダラク幹部に愛憎をつかした舊總同盟の左翼分子は我々に向つて、無條件合同統一を叫んでゐるではないか。勞働農民新聞の三月一日の社説は今起りつゝある合同運動は、戰鬪的大衆より起つたものではなく、議會主義的代議士病患者の叫びであると。だが我々は學者や代議士病患者のがどんな合同論を云つてるか知らないが、我が全農の戰鬪的農民諸君及全同盟（舊總同盟）の戰鬪的勞働者は一度だつて、代議士になり度いために合同を云つたことがあるか？我々の叫びは鬪爭のための火の出る様な痛烈な叫びである。組合大衆を見よ、彼等はインテリゲンチュア、少數幹部の對立意見におしつけられて默してゐるが、しかし彼等の要求は戰線の統一だ。その時期の來てゐるのをよく知つてゐる。そして單純率直に要求してゐる。我等、勞働者農民は、金解禁による産業の合理化に對して、資本の强大なる攻勢に對して速かに合同統一し戰鬪力を集中しなければならぬ。

（一九三〇、三、五）

中學校は自殺する

原田實

一、問題の現實的特徴

總選擧に於ける與黨の勝利は、現内閣の當分の安定を保證した。こゝに論じようとする問題は、本質的には必ずしも、否寧ろ決して、現政府に係はるのみの問題ではないが、現實問題としてそれに特殊の關係を持つ。現内閣が當分續くとなつたに就いては、是非ともその田中文相に熟考を切望せねばならぬ問題だからである。

昭和三年の秋、田中内閣の文部省は、豫ねて委員會を設けて調査中であつた中學教育改善案なるもの、成案を得て、これを、内閣總理大臣を總裁とする我が國最高の教育諮詢機關であるところの文政審議會に提出附議した。もとよりそれを實行しようとの意志を以てゞある。文政審議會は約八ケ月に亘る審議を經て、昭和四年六月、多少の修正を加へたが、その本旨は全くこれを承認して、その文部省の原案を可決した。よつて、時の勝田文相は、これを早晩實行せねばならぬ義務を負うたわけであつた。

その改善案の内容はどうであつたか。またその旨趣はどこにあつたか。今日に於て最早や一般社會は、何事をも記憶してをりさうでないと思はれるほどに、その當時に於て既に、教育界の一隅以外にては殆ど問題にされなかつたとも言へる。然しながらこの改正案は、今日の日本の中學校を自然に抹殺解體せしめるの結果になり行かざるを得ないやうな、謂はゞ學制上に大變革を捲き起すべきところのものであつた。中學校の抹殺必ずしも驚くに足らぬが、たゞ抹殺解體せしめるだけで、その除後の建設的方面に十分の思慮が盡して居ないものとして、教育界の

ならず一般國民の大いに注視を要するところのものであつた。即ち、斷じてそのまゝ實行してはならないやうな不徹底な不透明な改正案であつた。

ところが、それの文政審議會を通過した翌月、即ち七月、田中内閣の沒落を見、文部大臣も更迭した。新任の小橋文相は、就任早々非公式な發言ではあつたが、おのれはその改善案を當分實行する積りはないと公言した。敵黨内閣の文相の發案であつたからか、または別に識見あつてのことか、その邊に就いては不明であつたが、それでも、その實行を見合はせるといふことは誠に結構なことであつた。たゞ、文政審議會がこれに對して如何がの態度を採るかといふ餘興的興味と、小橋文相が眞の中學教育改正に對してどれ程の識見と誠意とを示すかの重要問題とが、殘されたのであつた。

再び、ところが、忽ちにして小橋文相は低調お話にならない辭職をば「熟慮斷行」して、その結果現在の田中文相が就任した。田中文相は、これまた、就任早々、この中學教育改善案に對して非公式の發言をした。こゝに挿言して特に注意を喚起しておくが、教育上の問題に常に不注意勝ちなる一般日本人諸君、この問題は文部大臣が就任早々兎も角も一言觸れておかざるを得ないほどの、現今での重要教育問題であるといふことを了解して頂きたい。さて、田中文相の發言はどういふのであつたか。それは小橋文相とは全く反對に出た。田中文相は、おのれが、その原案を可決した文政審議會の一員であつたことを特唱して、この案に對しては同審議會に於て贊成したる義理合ひもあり、是非とも自分の手に依つて實行したいといふのであつた。自分は新聞紙上でこれを傳聞したに過ぎないのだが、その記事には、たとひ敵黨内閣の文相が立案したものであつても良いものは良いものとして實行するのだといふ意味が附されてゐた。

こゝに於てこの問題は、自分の如き日本教育の改善問題に日常關心してゐるものにとつては、いよ〳〵默してそれを捨てゝはおき難い場合となつた。

三たび、ところが、總選擧を迎ふることゝなり、田中文相の運命も内閣のそれとともにまた問題となつたのであつたが、然し與黨の勝利を以て選擧もこゝに終り、先づ内閣の基礎も田中文相の椅子もこゝ暫く定立することゝなつた。こゝに於てか、この中學教育改善の問題は、近く必ず田中文相の手に依つて兎も角も一問題となるに違ひない。

この機會に於て自分は、この問題の根本の中核を剔出して、本質的には一般社會の注意を喚起し、直接的には田中文相並びに文政諸家の熟慮を要求せんとするものである。

二、中學校の自殺

文政審議會を通過した中學教育改善案中最も顯著なる外面的な制度上の特徴を摘約すれば、略よ次ぎのとほりである。

第一、五學年を通じて基本科目を定め、四學年以上にはそのほか增課科目を選擇附課せんとすること。

第二、基本科目中に作業科を加へたること。

（作業科は之を基本科目とし五學年を通じて之を課し作業に依り勤勞を愛好するの氣風を養ひ兼ねて日常生活上有用なる智能を得しむるを以て旨とし園藝工作をその內容と爲すこと、とある。）

第三、第四學年以上を增課科目の選擇如何に依つて、第一種課程及び第二種課程に分けて編制し、生徒をして何れか一方を選修せしめること。但し第一種、第二種とも資格には差別なし。

第四、第一種課程においては、增課科目の一つたる實業科を必ず加ふること。

（因みに、基本科目は、修身、公民科、國語漢文、歷史、地理、外國語、數學、理科、圖畫、音樂、作業科、體操。增課科目は、國語漢文、外國語、數學、理科、圖畫、音樂、實業。）

第五、特別の事情ある場合には、一學校に於て第一種課程、または第二種課程のみを設くるを得しむること。

このうち、基本科目として作業科を加へたことは、有識の何人も贊成するところであらう。立案者乃至これを審議して通過せしめた人達の意識してゐる以上に、恐らくは教育學上の原理に基礎を置くところの重要意義をこれは持つてゐる。自分もこれには全く贊成である。作業は作業の爲めの作業でない。心理學の進步に依つて、身體の筋肉活動と腦中樞作用との間には極めて密接なる有機的關係が通ひ、腦中樞作用の健全なる發達は到底筋肉活動を閑却しては可能でないことが、漸次證明されつゝある。然しこのことは、さやうな廻りくどい理論に頼るまでもなく、私達の日常の常識に依つて了解出來ることに屬する。

第四學年以上を第一種課程と第二種課程とに編制分けした理由は、改善案の表面に唱へてはないが、第一種は、中學校のみで學校教育を終りとする者の教育を主眼とし、特に實業を實習的に課さうとするものであり、第二種は、それ以上の高等學校、大學、專門學校等に進まんとする者の教育を主眼としてゐる。このことは、寧ろ故意に表面に唱へなかつたのであるが、これは蔽ふことの出來ない事實である。何故に斯く曖昧に不徹底に唱

はゞ卑怯な態度に出でたかに就いては、大いに論じたいこともあるが、今はこの小論文の旨趣を先づ端的に進める必要から、敢へてそのことには論及しないで、たゞ想像にまかせておく。

さて、この第一種第二種兩方の特徴を考へ合せて見ると、第一種は實業學校の不徹底なるものであり、第二種は高等學校尋常科の不徹底なるものである。從つて、教員と生徒とが、大いに協力して、兩種各々の教課を愈々熱心に教授し或は習得するとせば、おのづから益々それは、事實に於て一は實業學校となり、他の一は高等學校尋常科となり來たるほかはない。況んや事情に依つてはそれら兩種の何れか一方のみを一中學校とすることが出來るに於ては、それが益々實業學校か或は高等學校尋常科かに成り行くといふことは、考慮を俟たないで明白なる事柄に屬する。

更に、一、二、三學年の低學年は如何といふに、これはまた高等小學校にほかならぬ。高等小學校に關しては文部省は先きに既に大正十五年に於てその施行規則に改正を加へ、特に手工及び實業を必修科目として所謂作業教育の效果を期待し要求してゐる次第であつて、高等小學校の法規上の精神を徹底せしめその效果を充實せしむるに於ては、改善案に於ける中學校低學年の教育と何等差異の認むべきが無くならう。

かやうに見て來ると、改善案に於ける中學校は、高等小學校と實業學校と高等學校尋常科との三種の學校に分裂して、中學校それ自體を解體せざるを得ぬ。中學校そのもの、文字どほりの自殺にほかならぬ。自分がこの小論文に、「中學校の自殺」と表題して特に視聽を呼ばんとしてゐる所以は、その理由實にこゝに存するのである。

たゞこゝに、公然と明白に主張せねばならぬことは、この中學校の自殺乃至解體は決して憂ふべきでなく、却つて大いに歡迎すべきであるといふことである。この點に於ては改善案は極めて適切であると言はねばならぬが、たゞ立案者がこの案の眞意義を自ら自覺することなく、即ち中學校の自殺乃至解體を十分に意識することなく、從つてその善後の處置にまで考へ及び居らざる點が、致命的弱點である。

三、中學校並びに高等女學校の功罪

なぜ中學校は自殺してよいか。解體してよいか。無くなつてよいか。詳細に論議せないでは了解し得ない人士もあるか知れぬ。それなら、自分は飽くまで論ずることを辭せぬ。論義の意欲と論據の材料とならば、自分は十分に持ち合せてゐる。たゞ然し、今の場合は紙面の都合を考へねばならぬし、また抑もこの小論文

の目的を最初からの示唆の提供に滿足すべく自覺して出發したのでもあるから、多くは言はず、たゞ端的に言つておく。

中學校のみでなく高等女學校をも併せ含めての、最近三、四十年間に於ける日本の中等普通敎育の功罪は如何。見方に依つては成功してをるとも言へる。中學校卒業者のタイプ。高等女學校卒業者のタイプ。彼は中學卒業なりと言ひ、或は然らずと言ふ。彼女は高女卒業なりと言ひ、或は然らずと言ふ。卒業と否とに依つて、そこにかなり顯著なタイプの差異を見出し得ることは、中等普通敎育の功績ではないかと言はんとする向きもあるか知れぬ。然し、それは、眞の意味に於て功績と見らるゝや否や。

今日の日本の新時代(ヤンガー・ジエネレーシヨン)をより皮相的にし、より淺薄にし、極言すれば吹けば飛ぶやうな無氣力者をも隨所に氾濫せしめ、謂はゞプチ・ブルジョア的精神を知らず識らずに醸成して、所謂底力と逞ましき精神力とを中流階級の新時代から去勢した罪は、我が中等普通敎育、即ち中學校、高等女學校の敎育が、或る程度まで負はねばならぬ責任ではあるまいか。

たゞ、一面に於て、或る僅かな程度にまで、寧ろ僅かな傾向だけではあるが、中學校竝びに高等女學校の敎育が、新時代を領的(インテリゲント)にしたことだけは、確かにその功績である。頑迷は、前時代に比せば、彼等からは稍ゝ剝落しつゝある。然し、力強さ、逞しさ、特に精神、[illegible]は、中流階級の新時代は、生長不良で、[illegible]いでゐる。無産青年の斬新たる獨立的[illegible]と中流階級青年の顧慮的、缺忍耐的、小賢しさとを、それらに何等かの關係で直接し得る人士は、對比してそこに顯著なるそのコントラストを看取するだらう。中流階級の青年學徒と、貧困と戰ひつゝ夜の學校に敎育を熱求して集まる比較的無産的なる青年學徒となば、學校敎員として、時を同じうして敎へた經驗を自分は所有してをるものであるが、敎室に於ける空氣の緊張に於て、兩者間に判然たる對照の存するを認めざるを得なかつた。深き衝擊を受くるなくしては、それを心に回想することは出來ぬ。

ルソーは、貧乏人は特に敎育する必要がない、彼等は環境から眞に生きた敎育を受ける、敎育の必要なるは富者であると言つて、そのエミールを富者の子供に選んだ。私達はルソーの如く狂激しない代りに冷靜に思慮するが故に、貧乏人に敎育は必要ないなどと發言することは斷じて出來ないが、然しこのルソーの激語からは津々たる深き敎訓を得ざるを得ぬ。プチ・ブルジョア的環境を中學校や女學校が全然用意しなかつたとは、安んじて言ふことは誰にも出來まい。今後の青年敎育に於ては、プチ・ブルジョア的精神を[illegible]、眞に生々たる逞ましく雄々

創造的意志に燃え、自治と責任とに勇躍するが如き人格を收穫せねばならぬ。

四、高等小學校を重視せよ

そこで自分は、一足飛びに結論する。中學校はこゝに自殺せんとする。誠に良きことである。而して、將來の女子教育は、その制度上の程度の取扱ひに於ては全く男子と同等たるべきものであるから、これも同時に、餘り氣の利いた言ひ方ではないが中學校と心中せしめるがよい。身を捨てゝこそ浮む瀬もあれである。そしてこゝに、中學校の低學年は斷然高等小學校と合流せしめて甦生せしめたい。高等小學校を大いに重視して形式内容共に大改善を加へて、國民の全般をこれに收容したい。

階級別と性別とを問はず、一視同仁、世界に制度的には比倫の稀れな日本の小學校の精神、所謂アインハイツシユーレの精神を十分に徹底せしめて、高等小學校に一國教育の中心をおき、經費と教育力とをこゝに充實せしめ、國民の中堅をこゝから社會に躍り出でしめねばならぬ。先きの學校へ進みたい者は、こゝから、實業學校或は高等學校尋常科に自由に進出するがよい。

兎もあれ、高等小學校に於て、底力のある逞ましい、富によつて毒されない、眞に生々素純なる生命を育てたい。今日の如く高等小學校を全然繼兒扱ひにして日陰へ押込めておくやうな教育方針は、永遠に伸び榮えんとする興隆國家の採るべきものでない。

高等小學校を輕視してはならぬ。侮辱してはならぬ。それは國民の大多數を輕視することであり、侮辱することである。今後の日本學制改革問題の中核が、實にこの高等小學校の改善問題に存するといふことを、切に知らねばならぬ。若し假りに、非常に永い將來の間この高等小學校の重視が適切に實現されないとすれば、その結果、日本は如何なる事態を期待すべきであるか。熟慮して貰ひたい。

詳細に具體的論證を以てはしなかつたが、示唆的にはこれだけの論說に依つても、問題の中心は了解して貰へるかと信ずる。敢へて一般社會の認識に訴へ、特に田中文相並びに文政諸家の省察と熟慮とを切望する次第である。（二月廿五日）

歌舞伎王國の落城

佐々木孝丸

一

「歌舞伎の新人運動」、「大あらしの芝居王國」「歌舞伎の崩壞」——等々の文字が近頃ジャーナリズムの一角を賑はしてゐる。

現存社會機構の内部に於ける歌舞伎の藝術的地位、その階級性、その將來といふやうなことに就ては、從來とても、種々な人々によつて、種々な意見が述べられて來たことではあつた。が、今日程著るしくこの問題が表面に浮び上り、喧ましく云はれたことはない。それは、最近歌舞伎關係者の間に持ち上つたいろんな事象とそれに伴ふいろんな「運動」とが直接の機緣をなして、歌舞伎王國の内部に對する世人の興味を喚起し、その注意を惹きつけたからである。

曰く、下級少壯俳優が、樂屋で「雜俳」をひねくる代りに「雜誌」を出し、しかもその雜誌の上で、眞正面から幹部俳優を槍玉に舉げ、興行主に喰つてかゝつた。曰く、中堅所の俳優が新しい劇團を組織して、「赤い」芝居をやり出した。曰く、俳優協會の役員改選で、「大御所」歌右衞門之丈が惨めに蹴落された。曰く、協會幹部派に對する反對勢力としての「優志會」なるものが結成された。曰く、協會幹部が一般俳優の懷柔手段として設けた「各等俳優代表委員會」なるものが、却つて幹部に反旗を飜へし、「我等に決議權を與へよ」との「要求書」を突きつけた。その他曰く何、曰く何……。

これ等一聯の事象は、一言にして云へば、歌舞伎俳優が何等かの意味に於て現状に慊らずして「動いてゐる」ことを示すものであり、その「動いてゐる」俳優の數が假令にはたとへどのやうに少いものであるにせよ、これまで全然別世界扱ひにされて來た歌舞伎の傳統的堅壘に罅がはいつたことを物語るものだ。だが、これを唯表面的にのみ觀察するならば、これ等のことは極くありふれた一般的な不平・不滿——先輩の專斷に對する後輩の不滿、いつまで經つても良い「役」をつけられない下層俳優の不平等——の現はれに過ぎないものとも見られよう。そして若しそんなものだとするならば、歌舞伎初まつて以來、今迄にもしよつちゆう繰り返へされたことであらうし、從つて亦、歌舞伎の堡壘に罅がはいつたりするわけのものでもないであらう。然るに、歌舞伎俳優の中堅分子が「動いてゐる」のは、さういふ單なる個人的な不平や不滿からではなく、もつと根強いところにその原因をもつてゐるのだ。即ち彼等の動搖は、現在社會そのもの、動搖の反映に外ならないのであ

つて、上に擧げたやうに諸々の事象乃至運動には、重要な社會的意義が含まれてゐることを見逃がすわけにはいかない。

歌舞伎役者といふものは、唯「藝を磨いてゐさえすればいゝ」もの、藝者遊びをしてゐさえすればいゝもの、せい〴〵の所で野球位をやつてゐさえすればいゝもの、それ以外の人間的なことは一切してはならないもの、と信じ込み極めてかゝつてゐた連中にとつて、斯ういふ事柄が奇怪至極な「分を辨へない」ことであるのは、固より當然過ぎる程當然であらう。と同時に亦、少しでも人間らしい血の通つてゐるものなら、現在歌舞伎の中で、そのまゝぢつとしてゐられなくなつたのも當然過ぎる程當然であらう。それなら、何故彼等は現在のまゝの歌舞伎の中でぢつとしてゐられなくなつたか？――私は今、彼等の動搖が社會そのもの、動搖の反映に外ならないと云つた。が、之だけでは餘りに抽象的である。で、これをもつと具體的に説明する爲には、先づ現在我々の眼の前に置かれてゐる歌舞伎といふものがどういふ諸條件の下に存立してゐるのであるかを一度調べて見る必要がある。

二

歌舞伎は云ふまでもなく、封建制度の社會に發生し發達した文化の一つである。出雲のお國が初めて加茂川の磧で「女歌舞伎」なるものを演じたのは足利末期――即ち、所謂「分權的封建時代」の末期であり、これが爛熟・完成の極に達したのは、徳川幕府の「集權的封建時代」に於てゞある。それ故、普通一般に、歌舞伎を封建的殘存物と看、封建文化と稱することが當然のことゝして受け入れられてゐる。が、「一時代を代表する文化とは一時代を支配する階級の文化である」といふ嚴密な意味では、歌舞伎を封建文化といふことは出來ない。なぜなら、歌舞伎は封建時代の支配階級たる大名諸侯の文化なのではなく、庶民階級、就中町人（商人）階級の文化として花咲いたのであるから。

だがそれなら、被支配階級であつた町人の文化が、どうして幕府・諸侯を支配者とする封建時代に、かくも見事な花を咲かせることが出來たのであるか？　この疑問に對しては簡單に次の言葉を以て答えることが出來よう――徳川幕府三百年の歴史は貨幣經濟發達の歴史でもあつたと。

貨幣經濟發達の歴史とは、とりも直ほさず、商人階級成長の歴史である。「今の世の諸侯は大も小も皆首をたれて町人に無心をいひ、江戸京都大阪其外諸々の富商を憑で其續け計にて世を渡る」と「經濟録」の著者から嘲られた程、政治的支配者は經濟的優越者の前に頭を垂れざるを得なくなつてゐたのである。「要するに徳川時代、殊にその後半に至つては、町人階級は既に全く國内の金權を掌握せしのみならず、精神的文明をも左右せんとするに至つたものであつて、實世間の勢力を一身に背負つて立つ者は、商人階級を外にしては之を求むることを得ざる有樣であつた。」（本庄博士「日本社會史」）。この階級の文化的所産であつた歌舞伎が、徳川時代に發達したことは毫も訝しむに足りないわけである。

商人階級の文化であつたとは云へ、それが常に、當時の政治的支配階級からの干渉と影

響とを受けてゐたといふ點では、[illegible]階級のイデオロギーを反映したもので[illegible]あつたとは云へない。ただ併し、その本質に於ては、歌舞伎は飽くまでも、町人階級の生活の表現、或ひは町人階級の眼を以て見た封建社會の表現だつたのである。貴族、武士階級の文化としての「能」の典雅・淡白なるに對して、歌舞伎がこつてりと脂こく、官能的で情痴的であるのも亦當然のことと云はなければならぬ。

さて、斯くの如くにして發達し、封建時代の末期にその形式の完成を爲し遂げた歌舞伎は、今日、どんな風になつてゐるか？

こゝで我々は、敢て演劇史を繙いて見るまでもなく、今日の歌舞伎が昔日のそれと似ても似つかぬものになつてゐることを斷言し得るであらう。この點に關し、曾て林房雄は、やはり本誌の上で、要領よく次のやうに云つてゐる。

「如何に同じ商人社會とはいへ、現代は決して元祿時代ではない。かつての町人階級は、明治革命と世界大戰を經て近代的ブルジョアジイにまで進化してゐる。（中略）[illegible]演劇は、歌舞伎に對して[illegible]。したがつて歌舞伎は忠實に自己修正と現代化とを行つた。（中略）照明、裝置に於ける近代的技術のとり入れ……劇場建築の近代化。帝劇、歌舞伎座等によつて代表される歌舞伎劇場の構造は、懷古主義者を悲嘆させるに十分である」云々。

一言で云ふなら、それは「ブルジョア化した歌舞伎」である。がこのことは少しも訝しむに足りない。封建時代に漸次その金權的勢力を培ひ扶殖して來た町人階級こそ、近代的ブルジョアジイの前身に外ならないのだから。

近代資本主義社會の第一の、そして基本的な特徴は、それが「利潤を目的とする商品生産の社會」であるといふことである。この社會にあつては一切のものが商品化される。歌舞伎も亦この法則から脱れることは出來ない。

利潤を追及する爲の「市場」の爭奪――それは歌舞伎にあつては劇場の爭奪であり、興行權の爭奪である。そして、これ亦、資本主義[illegible]ある。現代の演劇界に於ける[illegible]トの制覇は、この間の消息を物語る以外の何物でもない。

白井松次郎、大谷竹次郎の兄弟が[illegible]とする「松竹」とはどんなものか？ それは、年額九十七萬圓の利潤を擧げる豫想の下に資本金七百萬圓を投じて作られた「松竹興業株式會社」（關東）と、一千萬圓の資本金を擁して三百四十萬圓の純益を計上して出來上つた「松竹土地建物興業株式會社」（關西）との企業合同である。而してその組織は、他の如何なる部門の企業組織にも劣らぬ立派な近代的企業組織であるのは云ふまでもない。

興行組織は斯くの如く近代化されてゐるが、然らば、その組織の下に隷屬する歌舞伎俳優は如何？（松竹トラストの下に隷屬する俳優は、固より歌舞伎俳優だけではなく新派の俳優もあれば、映畫の俳優もあるが、今は歌舞伎俳優だけに就て云ふ）。此處で、我々は歌舞伎演劇が、その人的關係の上に自ら内包

する大きな矛盾の一つに當面させられる。卽ち、彼等歌舞伎俳優を操つて、利潤の何割かを生産させてゐる企業組織は前述の通り最も近代的な資本主義的組織であるにも拘らず、俳優達の方では、依然として非近代的な封建制の殻の中に深く閉ぢ籠つてゐるといふことである。

主從關係の嚴存　祖法墨守、新儀停止、卽ち物を變へることを嫌ひ、祖先の定めたことは何事も祖法なればとの理由によつて容易に變更しない。新儀を採用しない。禮法、格式によつて全てを縛り上げ、學にしても藝にしても一度その門に入ればその流派以外に出ることを異端邪說として排斥する――之等のことが封建社會の特徴であると專門家は說いてゐる。で、今歌舞伎俳優の世界を看るに、これ等の封建的特徴が殆んどそつくりそのまゝ當てはまつてゐるといふことが出來よう。

だが、斯かる矛盾がいつまでもそのまゝで持續されよう害はない。歌舞伎俳優とても、今日の社會生活の範圍から外に出られない以上、今日の社會の空氣を吸つて生きて行かねばならぬ。少壯俳優の間から「門閥打破」の叫びが起り減俸反對の「經濟鬪爭」が起つて來初めたのも極めて當然の事と云はねばならぬ。

最近「俳優協會内のごた〳〵」そして新聞等に傳へられてゐる各種の事件は、主從關係と祖法墨守の嚴重な封建的桎梏の下から自らを解放しようとする少壯俳優達の人間的欲求の表現であると共に經濟的搾取者としての近代的興行資本家の組織に對する自衛手段を組織しようといふ意志の現はれに外ならない。

一等俳優から八等俳優までの歌舞伎俳優を網羅し、「藝術・人格の向上と生活の安全を計ることを目的」として作られてゐる「東京俳優協會」は、その名の示す所をそのまゝ正直に單純に受けとるならば、それは如何にも、俳優全體の利益擁護の爲の組織の如くに見えるが、實は、「勞働組合」と名のつくものにも、「勞働者の爲の」組合ではなく「資本家の爲の」組合があるやうに、この「俳優協會」も「俳優の爲の」組織ではなく「興行師の爲の」組織――純然たる「御用組織」だと云ふことが出來る。

勞働組合の場合に於ける御用組合の特徴は一握りの勞働貴族・勞働官僚が、資本家の御用を勤めることによつて自らの私腹を肥やし、大多數の勞働者の利益を踏みにじることである。そしてこの特徴は、移して以てそのまゝ現在の「東京俳優協會」の特徴である。卽ち、一握りの協會幹部は、協會員の大多數から選まれてゐる代表員の要求――減俸問題反對運動の要求、協會員の大多數を占めてゐる中以下の俳優より選ばれた代表員に決議權を與へよといふ要求等々――を暗から暗に葬つて顧ない。かゝる俳優協會を少數幹部の手から奪ひ返し、御用團體としての性質を取り除き、「藝術及び人格の向上、生活の安全等を計る」といふ目的を眞實に實現せしめられるやうな自主的な組織に轉化せしめようとするのが、世上傳へられてゐる所の「優志會」の運動であらうと思ふ。

かくして、現在の歌舞伎は、先づその人間的關係に於ける「近代性」と「封建性」との同時的存在といふことが齎す矛盾・衝突を解決しなければならないハメに立ち到つてゐる。

商品としての歌舞伎の價値は、人間の娛樂的慾望を滿足させる對象の一つとしての價値である。從つて、歌舞伎を商品として賣り出すことによつて利潤を得ようとする興行資本家は、顧客の娛樂的慾望を出來る限り滿足させるやうにと努力する。そこで、現在の歌舞伎が主要な顧客として有つところの、藝者及びその友人諸君の娛樂的慾望の性質如何が歌舞伎の娛樂的形質を決定し、新座附作者をして、近松のそれよりは稍々近代的な感情を織りませた「心中物」を書かしめ、「移り行く藝者時代」を書かしめるのだ。

だが、一切の娛樂機關が、常に敎化的な目的の爲に用ゐられ得る如く、歌舞伎も亦現代のブルジョアジイによつて、松竹にこの目的の爲に用ひられてゐる。而も現代のブルジョアジイは、極度に反動化せる階級であり、從つてその「敎化」は、人類の進步に益し役立ち得るそれではなくて、却つてこれを押し止め逆行させようとする最惡の「敎化」である。岡本綺堂・松居松翁・木村錦花氏等によつて書き下ろされる新作物の内容を一瞥すれば、このことは多言を要せずして明瞭であらう。

若し歌舞伎の俳優悉くが、現代ブルジョアジイの使徒たることを覺悟し確信してゐたのであつたならば、右のやうな事情の下に於ても何等の動搖を見せることがなかつたかも知れない。だが、封建的暴君的幹部俳優の專制に憤慨して起ち、近代的興行資本家に對する自衞組織の必要と云ふことをおぼろげながらも自覺して來初めた少壯俳優達は、同時に藝術家としての自分達の立場をも、更めて顧みないではゐられなくなつて來たのだ。そして新しく見開いた眼で自分を眺め、自分の周圍を眺め廻した時、彼等は、益々深刻の度を加へて行く階級鬪爭の大きな渦卷きの中に、いつの間にやら自分達も捲き込まれてゐたことを氣付かないではゐられなかつたであらう。そして此渦卷きの中で、文化的仕事に携はる一切のものが、自分の意識するとしないとに拘らず、いづれかの側の階級に奉仕してゐるのであることを見出さずにはゐられなかつたであらう。資本主義末期の腐り切つた泥溝の中から發散される不健康な頽敗した文化の代りに、潑剌とした力強いプロレタリアートの文化が生々と輝き初めてゐるのを見ないわけにはいかなかつたであらう。」

藝術家としての歌舞伎俳優、社會人として文化的任務の一部が擔當させられてゐる歌舞伎俳優——彼等は社會進化の拍車となるべきであるか、邪魔物となるべきであるか?

今日社會進化の原動力を爲すものはプロレタリアートを措いて外にない。プロレタリアートこそ唯一の最後の革命階級である。

物をまともに見、まともに見たものをまともに感ずることの出來る俳優は、まともに「左傾」しないではゐられなかつた。

三

歌舞伎自身が内在せしめてゐる自己崩壞の要素は大ざつぱではあるが、大體以上述べた通りであらうと思ふ。これは、資本主義社會が、自分自身の中で崩壞の要素を醗酵させ發育させてゐるのと同斷であるが、既に現在に於ては、資本主義諸國に儼然と對抗する要素として、プロレタリアートの國が存在してゐ

る如く、そしてこの要素が「外部から」現存資本主義國家を崩壞に導く重要な脅威となつてゐる如く、歌舞伎に厳然と對立して、その公然の敵國をなしてゐるものはプロレタリア演劇である。

今日まで、歌舞伎の不滅不亡を論じて來た多くの論者は、歌舞伎の對立物として現はれた「新派」、「新劇」が歌舞伎に對して無力であつたこと、歌舞伎を微動だにせしめ得なかつたことを例證として、歌舞伎王國の萬々歳を稱へて來たのであつた。が之等の論者は、「新派」や「新劇」が決して歌舞伎の對立物ではないと云ふことを知らなかつたのである。

「新派」は、明治の新興自由主義ブルジョアジイのイデオロギイを代表して生れ出たものであつたが、ブルジョアジイ自身の無氣力化反動化と共に歩調を合はせて無氣力化し反動化して來たものであり、「新劇」は小ブルジョア・インテリゲンチヤの運動として起され、インテリゲンチヤの自己分化と共に分化せざるを得なかつたものである。して見れば、これ等の演劇がブルジョア化した歌舞伎を揚棄せしめる眞の對立物でなかつたのは云ふまでもないことだ。この三つのものは、少しばかり毛色の變つた「一つ穴のむじな」に過ぎない。むじなを滅ぼすものは、むじなと相反する利害關係に立つものでなければならない。

かくして、眞に歌舞伎を克服し得るものはプロレタリア演劇のみである。

併しながらプロレタリア演劇は、歌舞伎そのものを跡方もなく「滅ぼさう」とするのではない。彼は、三百年の傳統をもつ歌舞伎が、その間に蓄積して來た多くの藝術的要素を、正しく繼承し、新しい生命を吹き込んで再生せしめることを知つてゐる。

プロレタリアートは資本主義社會を變革する。だがこの社會を空無に歸するのではなく、資本主義が作り出した多くのものを繼承するのだ。

在來一切の文化を最も正當に評價し、最も有效に發展させ花咲かせ得るものはプロレタリアートのみである。歌舞伎の崩壞過程は同時に又プロレタリア演劇の成長發展過程である。

（一九三〇・三）

新刊紹介

鎔鑛爐の火は消えたり（淺原健三著） 筆者生を享けて茲に卅三年顧みて血戰の苦闘を描く。受難の夕忍辱の夜飢餓の朝は息詰る血涙の滴を以て全篇に貫かれて居る。繙かば誰人も讀み終らさずにはおかないであらうし、又現代人必讀の書（四六判四七六頁定價一・五〇、東京府西巣鴨町巣鴨二、三九三新建社）

氣象と人生（藤原咲平著） 嘗てものせる諸述作を收む。天氣豫報概説、梅雨、二百十日、その他興味深き内容をもる。（四六判、二五八頁、定價一・八〇、鐵塔書院）

日本資本主義發達史（野呂榮太郎著） マルキスト的見地よりせる過去の諸論作を系統づけたもの。現段階に於ける諸矛盾の客觀的條件を究明すると共に其上に生成しつつある諸關係を分析せんとする企圖に對する一貢獻。（菊判三三九頁、定價二・五〇、鐵塔書院）

現代人の生活戰術（早坂二郎譯） Upton Sinclaire "Book of Life" の全譯。著者は自己の住む社會の「眞實」を把握し得る所の惠まれた少數の一人である。本書は精神、人體、戀愛、社會の四部より成る。（定價一・八〇、新潮社）

亞米利加發見

柳澤健

○

ホノルル上陸を自分にとつての「亞米利加發見」の第一日目だとすれば、ニューヨークの埠頭を歐西行の船に乘つて離れた日まで都合二十七日間といふものを、U・S・Aの領土内で過した勘定になる。サン・フランシスコとロス・アンゼルスとシカゴとワシントンとでそれぞれ二三日ほど、ボストンでは一日、それからニューヨークでは五日ほど、――これが自分の旅の總決算である。かうした飛脚旅行でこの廣大な亞米利加合衆國を語らうとするのはすさまじ過ぎると言はれれば、正しくその通りと答へざるを得ない。しかし、ある亞米利加通は、この自分の日程をさへ丁寧過ぎるものと見做して自分に言つたものだつた。――「合衆國の都會なんぞは一つ見るだけで澤山。どれだつて皆似たり寄つたりなんだからね。佛蘭西や英吉利やの都會のことを考へて亞米利加を歩くものがあつたら莫迦者さ……」そう言へば、大陸横斷の汽車のなかで自分が讀みつゞけたシンクレア・レウイスのあの「メーン・ストリート」――この小説の頁先にもちつと氣取つた言葉でこれと同じやうな「眞理」が書き出されてゐた。

兎も角自分の亞米利加滯在は、新時代らしい高速度のめまぐるしさの下になされたものであることだけは事實である。

○

太平洋上を東へ東へと快走する郵船「天洋丸」のうへで、自分は杳か遠いパリの新聞「エコー・ド・パリ」の外交論説記者をやつてゐるペルティナックスに幾度か感謝したものである。

このペルティナックスだ、自分にこのすばらしい立派な亞米利加研究の書物を讀めと勸めて吳れたのは。それは今から二年以上もまへのことだつた。書物は早速買ひ求めたものの、——またその所々は拾ひ讀みはしたものの、今が今までとう／＼通讀をせずに書篋のなかに押し込めて置いたものだ。その書物を自分は今度の旅に取り出して甲板の藤椅子のうへで讀みはじめたのである。

書物の名は、『今日の合衆國』"Etats-Unis d' aujourd'hui" 著者の名はアンドレ・シーグフリート、(英譯では"America Comes of Age" といふ題名でニューヨークのハーコート書肆から既に二年前に出てゐることをあとで聽き知つた。)大型で三百五十頁まあフランスの書物としては大部な方である。

亞米利加研究に關する書物と言へば、それこそ汗牛充棟も啻ならぬものがあることは、言ふまでもない。然しこのシーグフリートの書物のやうに透徹した見解と無私な態度とを以て見事に書かれたものが夥しく存在してゐるとは自分には鳥渡想像できない。自分はこの男の頭のよさに感心するとともに、かうした人間を生み出すフランスといふものにも、矢張り羨望の念を抱かない譯には行かなかつた。思へ、海軍でどうすると言へば先づ亞米利加だ。外交でどうすると言つても先づ亞米利加だ。支那でどうすると言つても先づ亞米利加だ。貿易の決濟がどうなると言つても、金解禁の爲めのクレディット設定をどうするといふやうなことを言つても、先づ亞米利加だ。ジャズとダンスとムーヴィと——さてはモダーン・ガールとモダーン・ボーイとのメッカにさへなつてゐるのがこの亞米利加だ。耳に胝の出來るほどリフレーンとなつて繰り返へさるる各樣各種の『日米問題』で一日一日を送つてゐるやうなのが取りも直さずわが日本ではないか。その日本に、『これこそ我等の亞米利加研究の結果だ！』と言つて當の亞米利加人——さては世界全體に突き出せるものが、何時何處でできたと言へるだらう。

シーグフリードはフランス人だ。フランス人といふものが總じて外國研究の熱に乏しいことは諺にもなつてゐる位だ。況んやフランスと亞米利加との關係は、ラファエットの憶ひ出と戰債問題でも除いたら何が殘ると思はれるほどの仲なのだ。それで、これだ。

亞米利加旅行中も、いろ／＼の人がこのシーグフリートの書物のなかの文句を採用するのを耳にした。數年來出た亞米利加研究の本でこれほどのすぐれたものはない、といふ言葉までも聽いたのだつた。

せめて、わが國に『我等の亞米利加研究』が出るまでの繋ぎと

しててもいゝ、誰かこの書物を翻譯して出す人はないものか知ら。尤も、この書物のなかにはジャズやコックテールやチャールストンやのことは書いてないし、さてはハリウッドのスターやベースボールの選手やの消息も書いてないし、それとも新興階級の擡頭やら資本主義倒壊やらの豫告を試みても居らぬしするから、折角翻譯が出てもわが國では買ふ人がないかも知れぬ。

ホノルル上陸早々この土地釀造にかゝる日本酒を御馳走になつた。それを振り出しにサン・フランシスコでもロス・アンゼルスでもニューヨークでも……。

そうした席である人が自分に語つた。『禁酒法が施行されて以來特に在留邦人のなかの目立つた現象はと言へば、皆が昔よりはうんと酒を飲むやうになつたといふことですよ。何しろ昔はわざ／＼日本から取り寄せた高い酒を飲んでゐたものが、今では自分のとこで廉くできるのですからね。――』更にまたある人は言つた。――『月日の經つにつれ釀造法がだんだん巧になり、近頃では、御覽なさい、こんなうまい酒ができるやうになりましたよ！』

自分には、日本から遣つて來た許りの自分には、お世辭にもこれがうまい酒だ[illegible]手ならできた酒だ[illegible]いい酒だとは[illegible]それも公には酒のない國だとなると、不思議な興味がそうした酒の味に加はらないではなかつた。現にニューヨークを立つ前の晩なぞは折柄不思議な縁で一年中二度も海外でめぐり逢ふこととなつた久米正雄君と『飲りいゝ味ではないね』なぞと言ひ交はしながら飲むともなしにとう／＼二本位づゝ飲んでしまつたことすらも覺えてゐる。――

禁酒國の亞米利加に於けるかうした現象が、勿論在留邦人のなかだけに限られてゐるわけではない。否、否、それはほんの一小例でしかあるまい。恰度自分がニューヨークへ着くと前後してイギリスから同じ土地に渡つて來たかの哲人バートランド・ラッセルのごときは、ニューヨーク着早々の感想を新聞紙のうへで洩らしてゐるなかに、亞米利加人の今日の酔いどれ振りを先づ劈頭に掲げて、かゝる現象は禁酒法發布直前渡米せる經驗のある。彼の曾て見なかつた所であるとさへ述べてゐるのである。彼はそのなかに續けて言ふ。――『この悲しむべき現象は、要するに、禁酒法に依つて飲酒が「禁斷の實」となつたからである。禁斷の實は常にあまい。從つてこの怖るべき弊害から亞米利加を解放する爲めには、かゝる法律を廢して、その

縮りを學校、家庭、社會等の教育の方面に委ぬべきである：」（ある專門家の研究に依れば、今日亞米利加の禁酒法を「有效に」實施する爲めには一年十萬人の警察官と二億弗の巨費とが必要であると言ふ。）

自分は、この言をなしたラッセルがスウェーデンに旅したことがあるか否かを知らない。若し彼にして同國に於ける節酒の法律とその效果とを親しく知つたならば、或ひは彼のこの禁酒法に關する意見も、――法律よりは教育に依つて目的が達し得られるとなす彼の意見も多少變更するかも知れぬと思つてゐる。自分の觀察の關する限りでは、この北歐の國に於いては節酒法が亞米利加の禁酒法に比べて遙かに見事な效果を收めてゐるやうに思はれる。

○

然し、物事に冷靜で總ての方面に節度と中庸とを立派に守り得るスウェーデン人と、若くて烈しいわが亞米利加人とを同様の規矩で縛り得るか否かは、一つの問題ではある。

シーグフリートも前記の書物のなかで言つてゐる通り、亞米利加人の飲酒に對する沈溺的な徹底さは、到底他の國民には見られないところかも知れない。他國民ならば陶然と醉ふ位の程度で止め得るところを、亞米利加人はまゝ、飲んだが最後泥醉の極致まで辿り着かなければ止め得ないこと、ある點までロシア人と同様なのを見るのである。かゝる徹底性の持ち主であればこそ、禁酒法の制定も止むを得ない手段でもあらうし、またスウェーデン流の節酒法では結局その效を奏し得ないと言へるかも知れない。

それ許りではない。今日の亞米利加に見るが如き機械文明の極度に發達せる國に於いては、勞働者の生命（生産自體も勿論）は全然精巧なる機械の運轉の下に委ねられてゐると見ることができる。極めて微細なる過誤でも、忽ち自己の生命を奪ひまたは高價なる機械の損傷を招くことともなるのである。この點から見て、飲酒を社會的に禁止することは、機械國米國としてはむしろ當然過ぎる程當然であらうと言へる。一般が未だ未だ米國の組織ほど機械化せられてゐない歐羅巴の各國とは、この點でも尠からぬ相違のあることが見られるのである。

かう見て來ると今更に總ての制度は矢張りその國その國の特殊の事情から生れ出て來るものであることが感じられる。從つて外國人の立場で輕々しく他の國の制度の長短を言ふのは最も危險な業と言へやう。況んや、自國の傳統・民情・民俗等を顧みずして徒に他國の制度に眞似て急激に世を變革せんとするがご

ことは愚にあらざれば狂であると見做すも一向差支へはないであらう。

○

サン・フランシスコ滯在の一日を人に案内せられて近郊にあるスタンフォード大學を訪ねて見た。

自分は歐羅巴の國々の名だたる大學を見てゐる。また自分が在學してゐた當時とは比較もならざるほど立派になつた今日の東京帝國大學をも親しく見てゐる。然しこのスタン・フォード大學を見た眼には、これ等の大學の貧しさ佗しさは言葉に絶すると言つてよかつた。今フランスが誇りにしてゐるあの大學市(シテユニヴエルシテール)——わが薩摩氏も數十萬の金を投げ出してそこに立派な日本館を造り出してゐるパリー南端のこの大規模な大學市、それもこの一箇のス大學の廣さ豐かさ立派さには遠く遠く及ばないと言つていい。

そこで逢つた舊知の市橋教授の口からいろ〳〵と聽くことができた大學内部の組織や制度やの話も、自分の今までの感を更に強めるだけのものであつた。同時に、土地が廣いから、金があるから、こんなものができるのさ！——と許りは容易に言へないある大きなものがそこにあることも感じないでは居られなかつた。

またしてもシーグフリートの見解を持ち出すならば、彼は亞米利加の動力(物的及心的)の中心をプロテスタントの活動に置い——更に明確に言へばカルヴィニズムの一貫せる宗教運動に置いて見てゐるのである。即ち彼に從へば、亞米利加では金を多く儲けることが取りも直さずキリスト教徒としての活動をなす必須の條件であると信じられてゐるのである。彼等の信ずる聖書のなかには、富めるものの天國に赴くことを決して針の孔を通り抜けやうとする驢馬にはたとへてゐないのである。否その驢馬は富める者ではなくて貧しい者を指してゐるのである。亞米利加では富めるものでなければ完全に天國には行き得ないのである。何故かならば、充分の富を獲た者でなければ、充分の社會的事業をなすことができず、從つて天國に間違ひなくはいる資格が附いて來ないからである。

スタンフォードの大學は鐵道業で巨億の富を獲ることができたスタンフォードといふ人の創り上げたところであるといふ。亞米利加の富が、かゝる形で顯現せられてゐるといふことは、少なくとも世界のどこの國々でもざらに見ることができる現象とは言へまい。ある大きなものが感じられると言ふのは、そこだ。

だから若し人がたとへば日本の富豪に向つて、亞米利加では

られるやうにもつと社會事業に熱心になれと無條件で勸めるとしたら、それは亞米利加の富豪といふものにも日本の富豪といふものにも兩つながら無理解な無知の到すところと言はれても致し方はないかも知れない。

○

然し見方は外にもある。

ヘンリイ・メンケンと言へば、あ、あの男かと肯づく人は日本にも多いであらう。餘り皮肉な物の言ひやうをするので亞米利加のある州なぞでは頒賣禁止をすら喰つてゐる批評家だ。この男の書いた本に『デモクラシイ考察』"Notes Democracy" といふのがある。この書物のなかでメンケンは、亞米利加に多い各種の社會事業――學校、教會、病院、養老院、託兒所、孤兒院等々の建立、さては不具者、老衰者、貧民救濟等々の發達を、上層階級者が下層階級者の兎もすれば上層階級に對して抱き勝ちな嫉妬とか敵視とかの本能を、うまく慰して眠らせやうといふ『多年の經驗の結果』に歸してゐる。

(仍ほこの際メンケンの言葉に誤解の來ないやうに一應註釋を加へて置く必要がある。それはメンケンのこの言葉はわが日本の左翼思想家の諸君が絕えず放送してゐる言葉と見掛けは似てゐるものの內容はまるで違つてゐるといふことである。メンケンにとつては下層階級の人間は新興階級どころか大部分は到底救はれ得ざる無知蒙昧無能者流であつて、その癖――否その爲めに――自己より秀れた者の爲す一切のことに嫉妬・敵視の動物的本能を持つてゐるものなのである。この嫉妬・敵視の焰を靜め何とかして、溫和しく後から隨いて來るやうにさせなければ、この社會の進步もこの文明の發展も行き詰りになつてしまうといふのである、決して、惡辣な資本階級が虐げられた勞働階級の戰鬪能力を鈍らせて一層搾取しやうといふが爲めに奸詐な方法を須ゐてゐるといふことをメンケンが言ひ出してゐるのではないのである。)

メンケンは亞米利加人だ。それこそ百パーセントの亞米利加人だ。この者の見方の方が一外國人に過ぎないジーグフリードの見方よりは、ずつと痛い所に屆いてゐるのかも知れない。然し、眞理はたいがい中庸にある、實際は恰度この二人の見方の恰度眞中邊の所にあると解してよいではないか知ら。

○

サンフランシスコの一夜をショウに過した。場所はウィリアム・フォックス・シアタ。

出來て間もないこの活動小屋は、日本の金にして約一千萬圓を費やして竣成したものであるといふ。（日本でのあの官吏擬作案が實施されたとしてもこの小屋を建てるには未だ二百萬圓位不足する！）これだけの金のかゝつた堂々たる活動小屋は廣い亞米利加にもそう外にはあるまい。小屋のなかは言ふに及ばず、わざ〱そのまへの歩道にまで惜しげもなく立派な絨氈を一杯に敷きつめてゐるといふ豪勢さ――また莫迦らしさでもあらう！――である。

が、それよりも自分に興味を起さしたことは、この亞米利加風に大がかりな建物が畢竟するに『古い』歐羅巴の建物の模倣以外の何物でもなかつたといふ點であつた。絢爛なあの路易王朝時代の室内裝飾をそのまゝに借りて來たといふ以外に、何等の亞米利加らしいもの、何等の亞米利加風な獨創といふものが見當らなかつたといふ點であつた。自分は不圖先刻スタンフォド行きの車のなかで某君が言つた言葉を想ひ出した。――「亞米利加にはバンガロー以外何も獨創的なものはありませんよ！あとは皆借物ですよ。」

（然しこの某君の言葉はすこし過ぎる。あのストランドから見たシカゴの高層建築の偉觀、さてはハドソンの河上から眺めたニューヨークの林立してゐる摩天塔の偉觀を見たものには、バンガロー以外亞米利加にも「獨創」があることを些かでも認めるに相違ない。）

自分はこゝでもまたスウェーデンのことを念頭に浮べた。そこに聳えてゐる大音樂堂の建築を、岩上のエングレスカキルシュの建築を、さては高等工藝學校の建築を、北方博物館の建築を、――これ等の新らしき巨大な數々の建造物を。それは、伊太利の、西班牙の、さては希臘の、佛蘭西の、獨逸の、英吉利の夫々に相違した建造物の數々を克明に見て歩いたことのある自分にとつても、一つの大きな「發見」と言へるものであつた。この北方の邦の風土と民俗とからでなしには生れ得ないと思へる美があり、獨創があり、――生命があつたのだつた。

それがこの亞米利加では？

今日の亞米利加は、不取敢建物に關するバンガローと摩天塔以外には未だ未だその獨自の物を持たないとだけは確かに言へる氣がする。わが國が亞米利加風な數々のものを殆んど無批判な寛容さで受取つてゐる――模倣してゐるやうに、亞米利加はまた歐羅巴のかうした美術を矢張り子供のやうな無批判な寛容さでたゞ雜然と受け容れてゐるといふやうな氣がしてならないのである。（さう言へばジークフリートは亞米利加人の模倣性を擧げてゐる節で、これほど模倣性に富んでゐる國民は亞米利加

人を外にしては世界で日本人であらうといふ意味のことを言つてゐる。）

○

建物のうへから話をもすこし遠くの問題へと持つて行かう。

プロティスタンティズムを經とし熾んな經濟的活動を緯としてゐる亞米利加の文明といふものに、他の諸國では見られない――また從來の世界の歴史では見られない壯大なる光景が存すると言へば、取りも直さずそれはこの廣大な國土と人類との上に働く富の普遍化とその見事な循環の現象に外なるまい。彼等は、從來世界の持つた歴史の示してゐるやうに數々の惡徳の主なる根源となつた貧を儼を、先づその地上から驅逐することに成功した。金持と貧乏人との生活上の差を殆んど質的には認め得ないほどにまで近接させることに成功した。見よ、金持がヴィラを有する代りに、貧乏人はバンガローを持つてゐる。金持がロールス・ロイスを持つてゐる代りに、貧乏人はフォードを有してゐる。金持がパリーのウォルツとかジャン・パトゥー邊から洋服を取り寄せる代りに、貧乏人はそれと一寸見には殆んど違はない洋服をワナメーカー邊から十分の一にも足りぬ廉い値で買ふ。金持が特等席で高い映畫を、貧乏人はそれよりずつと廉い入場料で、――まつたく同樣の映畫を聽き眺める。（小數の人々が見られない歌劇や演劇が過去のものとなつたことの仕合せさよ。）この富の普遍化こそ、亞米利加の生み出した壯麗な人類的事業の一つと言はなくて何であらう。

それから更に富の循環。

十九紀の初期資本主義の活動が生み出した經濟學者マルクス（まつたく今日の亞米利加の經濟現象を見る者にとつては、マルクスはそれこそ百パーセントの十九世紀人である！）の說に依れば、社會は必然的に資本家と勞働者との二つの對立せるクラスに別れねばならぬ筈であつた。この二つのクラスの間とは不斷の闘爭が持續されてゐねばならぬ筈であつた。富の循環、――更に換言すれば資本の循環が、この二つのクラスの對立を單に文學の修飾以外に意味のないものとするが如き現象の起り得ることは、彼の些かも豫想するところではなかつた。彼が階級闘爭に依つてでなければ生じ得ないと考へてゐた新社會が、この亞米利加では富の循環に依つて見事に生み出されることになつたのである。

この國では、金持と貧乏人とが生活のうへで殆んど質的の相違を持つてゐぬやうに、ブルとプロとの領域も亦些かも固定した限界を維持してはゐないのである。昨日までのブルが今日の

プロにならぬとは誰も保證し得ぬよりもつと確かに、昨日までのプロが今日はブルになり得るのである。富は絶えず循環する。一所には固定しない。その富の爭奪は、要するにその個人の能不能と運不運とに歸する。斷じて階級闘爭といふが方法に依つてゞはないのである。

新しい亞米利加は、いつでも過去の幽靈に纒はり付かれてゐる。古い歐羅巴の諸國がこの舊式な階級闘爭の手段で社會の改造乃至「新社會」の設立を依然夢見てゐる間に、彼等の想像もしなかつた富の循環の現象に依つて、こゝに見事な新社會を逸早く建てるに到つたのである。これ亞米利加の生み出した最も壯麗な人類的事業の一つと言はなくて何であらう。

自分は、この意味では、亞米利加に獨自なる一大「文化」の嚴在してゐることを確認する。

○

然し我々が普通の意味で『文化』と稱んでゐるものを、この亞米利加から發見しやうとしてゐるとする。前述の富の普遍化及富の循環は、この場合文化的と稱ぶには餘りに物質の世界に傾斜してゐるとする。言はゞもつと形而上の方面から發散してゐる活動を見やうとしてゐるとする。それは如何なる姿で現はれてゐるか？　すくなくも藝術文化の面において、如何なる獨自の形を取つて現はれてゐるか？

自分は既に建築のことは說いた。繪畫・彫刻については、自分の短かい滯在中これと言つて瞠目の機會も極めて乏しかつたのであるが、自分は從來これこそ亞米利加の獨自の繪畫なり彫刻なりとして賞嘆し得るもの、あつたことを知らないのである。

音樂についても（ジャズのことはすぐ後に書く）同様のことが言へると思ふ。文學については、先づポオを出し、やゝ降つてはエマスンを出し、最近ではオニール、シンクレーアを出す等、他の姉妹藝術に較べては可成に活氣を呈してゐるもの、、それすらこゝに言ふ意味の亞米利加獨自の姿相がそれ等の作品に明確に現はれてゐるものと認め得るか否かは甚だ問題であると言へやう。

たゞこゝに何人も亞米利加のマークを思ひ泛べずにはゐられないある藝術がある。これこそは、その本質から言つてもその世界的の影響から言つても、亞米利加の生み出した獨自の藝術と言はなければ濟まぬ氣がする。

それは、一つはジャズの音樂とそれに伴ふダンスであり、もう一つはムーヴィである。

○

ジャズの(さてはそれに伴ふダンスの)世界的な波及は、同じ亞米利加產のフォード自動車やレミングトン寫字機(タイプライター)や自働計算器やの世界的進出に較べても更に更に大いなものがある。現代の音樂とダンスと、——更に一步進めて一般の風俗のうへにも及ぼしてゐるこのすさまじい影響は、ハリウッドのムーヴィと並んで、亞米利加の『文化』の名の下になされたる眞の『世界征服』の著大な例とも見做すことができやう。

然しながら、このジャズが亞米利加の如何なる層から生れ出たものであるかを我々が吟味するとき、この亞米利加產の文化が、外ならぬ『黑・亞米利加(ブラツクアメリカ)』の、——言ふまでもなく黑奴(ネグロ)の頭と手足とから——要するに阿弗利加から！——生み出されたものであることを發見する。決して今日の亞米利加の富を社會を國家を作り成した『白・亞米利加(ホワイトアメリカ)』のなかから生じたものではないことを發見する。從つて、若し我々がジャズの『世界征服』の事實を認めるにしても、その事實の生ずるまへに、先づ黑・亞米利加の白・亞米利加(ホワイトアメリカ)に對する『征服』の存在してゐたことに氣が付かねばならぬのである。更に言へば、ジャズに依る亞米利加文化の世界征服は、實のところは、『黑奴文化の、阿弗利加文化の世界征服に外ならぬことに氣が付かねばならぬのである。

自分がこの印象を最も鮮かにしたのは、シカゴの町で友人に案內されてシカゴ・シアタにジャズを聽いた折であつた。その際に聽いた數箇のジャズはいづれも此頃流行のものであることを、その友人から敎つたのであつたが、それ等はジャズの名が直ちに連想させるやうなあの騷音と雜音との混淆した狂騷的の音樂とは殆(おほよ)そ程遠い種類のものであつた。そこには靜けさ佗しさ憐れさの限りをつくしたやうな哀調が充たされてゐた。自分はそれを耳にしながら、遠い野山の寂寥を、月の夜の椰木の林を、そのなかに落ちる涙を、溜息を、戀を、別れを、まざまざと感ぜずにはゐられなかつたのであつた。

この哀音は、抑々何處から生れ出したものであるか？　自分には到底これがあの高層なビルディングの林の生活のなかゝら生れ出たものとは想像し得ないし、クイック・ランチの雜沓と速度とのなかゝら產み出されたものとも想像し得られなかつた。要するに『亞米利加的な』生活のなかゝらこれが生じ來つたものであるとは如何にも想像し得なかつたのである。反對にそれを聽いてゐる自分の頭にはあの南部カロリナがテキサスがミシシッピィがジョルヂアが、それ等の果しない寂しい曠野が、青々と映つた。——否それよりもあの眞黑な阿弗利加の森林と砂

漢とが更にはつきりと映つて來たのである。――

それからムーヴィ。

以前は日本移民のセルリイの農作地でしかなかつたやうなハリウッドが、今日のやうな世界の名所になつてしまふまでには、ほんの僅かな年數しか經つてゐない。これだけな見ても、亞米利加産ムーヴィの市場進出の勢といふものは、すさまじいといふ一語に盡きる。ポール・モーランがある紀行文集のなかでも言つてゐるやうに、亞米利加の曠野に散ばる名もない村落がシネマのおかげで世界的に有名な場所になつてしまひ、恰度古代希臘の詩人エスキロスがその詩に歌つたアルゴスの町を訪ねて抱くと同樣な一杯の感動を人々は抱くやうにもなつたことはある程度まで事實なのである。見よ、牧場が橫はる、フェアバンクスがカウボーイの姿で現はれる。彼がグレース・マイルスを大きな車の輪のかげから見染めたのは、この場所ではなかつたか？　見よ、アイス・クリームの色をした秋の小山がある、そこから牛の皮を着たあのチャプリンがしづしづと現はれて出たのではなかつたか？　村の端れに幾百となく固めて撒き捨てられたフォード自動車の廢趾（おゝ、新大陸に於ける唯一の廢趾！）

〔州に住まつてゐる女の樹、それに[illegible]いか黑いドドリス・パイヤの[illegible]に[illegible]出やうとするベッシイ・ラヴを待ち合はしたのではなかつたか？　など々々……。

まつたく、亞米利加はこのシネマ風物のおかげで、從來佛蘭西や伊太利や英吉利やさては日本やの古い邦々のみが持つてゐたやうな「舊蹟」を持つことにさへなつてしまつたのである。

それにしても今年の夏、ジュネーヴで佛蘭西の外相ブリアンがあの歐羅巴合衆國の構成の必要を大聲疾呼したそのずつと昔から既に歐羅巴のシネマ界では、この亞米利加フイルムの歐羅巴進出――否世界進出に對して、歐羅巴聯邦組織の緊急事なることを合唱してゐたものであつた。が今日までのところ、いくら獨逸が佛蘭西が伊太利が大聲に騷ぎ立てゝも、到底亞米利加には歯が立たぬといふのが實情である。

が、一體この亞米利加のムーヴィたるものは、ほんとうに亞米利加生粹の産物であらうか？

ハリウッドのメトロ・ゴールドウィン・メイヤー[illegible]たした折、自分たちを案内して與えた男に、おお[illegible]

は？ときいて見ると、露西亞であつた。それから、場内を歩いてゐるうちに、從來度々フィルムのうへでお目にかゝつてゐるアニタ・ページに二度ほども出會はした。この愛らしい顏をしてゐる女優が、決して百パーセントの亞米利加人でないことだけは確かである。更に歩いて行くと、あの伊太利人のラモン・ノヴァロを主役にした何とかいふ題名のナポレオン時代を舞臺にしたトーキイを、今をしきりと製作中の光景が展開してゐた。

それよりも自分たちの歩いて行く道々の兩側に立ち竝んだ『背景』の建物を見て行くといゝ。佛蘭西の田舍の宿屋が立つてゐるかと思ふと、軒を接して南露西亞はジョールヂア邊の酒場が出來てゐる。その隣には波斯のいかめしい宮殿が聳えてゐる。かと思ふとその向ひにはメーン・ストリートの何丁目何番地が門札に出てゐる(頭無しの)アパートメントが建つてゐる。そのすぐ隣りには、南獨逸邊のビール屋だ支那の片田舍の弊屋だ。……………。

カルヴィニズムも依然亞米利加の精神文明の中心をなすものであると見るならば、ニュー・イングランドにある清敎徒の發祥地を依然亞米利加の大衆の爲めの指導精神が發散するメッカでありさてはモスコーであるとするならば、K・K・K・の運動とY・M・C・Aの運動とを依然亞米利加を貫流する二つの目覺ましい國內運動と國際運動とのカーレントだと解し得るならば、さては、すくなくもジャズのあの狂騷と哀愁との藝術が、黑にもあれ白にもあれその亞米利加產であることに間違ひはないとするならば、このハリウッドの子供たちは、決して純粹な亞米利加の血統に屬するものとは言ひ難いのである。

ムーヴィの發明者が、佛蘭西人のリュミエールだつたといふやうなことはどうでもといゝことゝしても、すくなくもハリウッドのムーヴィは、亞米利加製のレッテルがついてゐるとは言ひ條、その機械をのぞいては、原料も技師もさては勞働者もまぎれもない外國ものなのである。然し、それであればこそ、今日見るやうな亞米利加フィルムの『世界征服』ができたのではなからうか。

○

正宗白鳥氏だつたか、亞米利加の文學と言ふと人々は輕蔑するやうだけれども却つて將來こんな國にこそ變つたすばらしい作品が生れ出るやうな氣がする、といふほどの意味のことを書いたのを、いつか自分は讀んだことがある。

所が、最近ではわが國の左翼評論家の人々のなかに、佛蘭西、英吉利等の國々の文學を舊態依然だとして、露亞西は固より、

亞米利加邊に却つて新らしい傾向の文學が生じつゝあるやうな議論をするものがちよい／＼あるやうに見受ける。

自分は、現代の亞米利加文學については殆んど知るところがないと言つていゝ。從つて個々の作家なり作品について、英・佛等歐羅巴諸邦の夫れ等と較べ果してより新らしい傾向にあると言ひ得るかどうかを親しく驗することは不幸にして出來ない。

たゞ自分に許されたこの短かい期間の亞米利加滯在の觀察からの歸納に依れば、亞米利加の今日の狀態が、すぐれた文學を生むのに最も適當してゐない土壤を形作つてゐるものであることを痛感しないではゐられなかつたのである。

その一つは、前記したやうに亞米利加の人々の精神上の中心が極めて現世的で功利的で同時に禁欲的なかのプロテイスタンチズムに存してゐるからである。

その二つは、殆んど全部の亞米利加人の思想を支配してゐるものは富の開發、富の獲得――所謂 to make money であり、すくなくとも今後數十年の間はこの思想の實行を阻止すべき理由を見出し得ないからである。

その三つは、物質的に見て今日の亞米利加人の生活は既に黃金時代の觀がある點である。彼等は、この物質的飽滿の狀態を享樂して、特別に自己の生活に不滿も不安も感じてゐない。こ

の狀態の下に、すぐれた文學の生ずる餘地のないことに、常識の示すところと言つていゝ、（この意味合ひで、と學者が社會問題乃至政治問題等に沒頭する「矛盾」を嗤はんとする者がある。歷史的に見るも安穩にして物質的の富裕なる時代にはすぐれたる文學現はるゝこと少なく、これに反して世亂れ人多く糊口に苦しむが如き時代にすぐれたる作品現はれるといふのである。從つて文學者にとつてはこの世に理想的社會の到來することは却つて文學的饑饉の時代の到來とも見做すべきものであると言ふのである。）

その四つは、亞米利加に於ける個性の無視と、眞の農村生活の缺如とである。

そのことをすこし後章で書く。

○

亞米利加の今日の富の主たる基礎が、天然の富源に基づく以外、その生產組織の大袈裟な機械化の點にあることは、今更言ふまでもない。この產業組織の機械化は、殆んど一切の生產一切の分配乃至消費のうへに現はれてゐて、所謂世に名高いスタンダリゼーションの現象を結實するに到つたのであるが、このスタンダリゼーションはひとり彼等の日常生活のうへ許り、

はなく、その精神生活のうへにも歴然と印刻されることゝなつたのは、事理の當然である。日常生活の各般に亘る必需品が大に機械の手で製作せられて各人の間に行き亘つてゐるやうに、精神的の糧も亦手にすればその儘口に持つて行けるやうにちやんと調理されレディ・メードの形で各人の間に配給せられてゐるのである。斯くして彼等の精神生活は、かの共産黨支配下にある露西亞の民衆の精神生活と同樣、個性を缺如した取り止めのない茫漠たる草原の如きものになり終せたのである。この意味で、個性を――乃至それから生ずる獨創性を複雜性を、精神文明の基調なりとして(すくなくも今日までは)動き續けて來た歐羅巴の諸邦とは對蹠的なコントラストをなしてゐると言つていゝ。歐羅巴が峨々たる山岳の群に充ちた風景であるとしたならば、亞米利加は取りも直さず一望際涯なき平々坦々のステップスかさては海洋の圖繪である。……

自分は、今後の眞の新らしき文學は一國の階級そのもの――乃至は一團のコムミュニティさては全民衆そのものから生れるべきものであつて、個性といふが如き前世紀思想の遺物はこの強力なる階級意義若くは全民衆の波のなかに覆沒すべきものであるといふが如き新說が、モスコー(乃至東京?)邊の文學者のなかから熾んに放送されてゐることを、萬更知らないではない。然し、議論は如何やうにも立たうが、數千年來の人類の歴史はかゝる新說が立證されやうとする事實の存在を認めてゐないのである。第一我々が古い時代の藝術なり文物なりを探つて行く際に、その作者の名が知られなかつたと言つて、これ等の作品が一個人の作といふよりもその時代の自らに生み出した作品であると解釋するといふが如きことは厳格なる意味で許さるべきことではないと思ふ、(この錯覺を鮮やかに示してゐるものとして自分は故有島武郎氏の晩年の論文の一つを擧げたい。)作者の名の知られないのをその特徴の一つとしてさへゐると見られるかの民謠のごときものでも、決して民衆がこれを生み出したものではなくて、矢張り(名は知れぬが然しすぐれたる一人の個人がそれを民衆の頭上に投げ出したに過ぎぬものなのである。民衆はコミュニティは、階級は、さては國家は、乃至運動は、あるすぐれた個性を生み出す醱酵素の一つにはなるかも知れない。(同時に、それを蹂みにじる敵ともなる！否、その方がむしろ多くはなかつたか?)然し民衆自身階級自身は、一の凡作さへも生み出す力を持つてはゐないのである。個人を個性を離れてこの世に送り出された藝術なり文物が、過去に於いてなかつたやうに、今後に於いても到底あり得ない、――と自分は確く信ずるのである。

物質的にはこれほど強力な亞米利加が、精神的には――すくなくとも藝術のうへに於いては、見るかげもないほど微力であるといふことの最も大いなる原因の一つは、實にこのスタンダリーゼーションが生み出した個性無視といふ風潮の結果にあると自分は思ふ。

○

それから眞の農村の缺如。

サンフランシスコで、ロス・アンゼルスで、さてはニューヨークで、自分は十里二十里と自動車を驅つてこれ等の都市の近郊をなしてゐる村落を眺めて通つたものである。またロスアンゼルスからシカゴにいたるサンタ・フェ線の汽車の窓からまる二日といふもの廣々と果てもなく擴がる耕地を――そこに點在する農村を眺めながら過したものである。

これ等の展望が自分に與へた印象と感想とは、畢竟亞米利加には我々の意味するかごとき農村乃至その生活なるものが殆んど存在してゐない、といふことであつた。

我々が農村とその生活とを口にするとき、直ぐと頭に來る回想は、都會との著しい懸隔であり對照である。保守と傳統と孤獨と淋寥とがそのまゝに姿をとつて顯現してゐるやうなその風景の喚起である。自然のなかに取り圍まれ、自然の一部となりおほせ、恰かも樹が土壤から生え出してゐるやうに深々とその根をその自然のなかに降してゐるその風景の喚起である。

これが亞米利加の農村になると、都會に對するかゝる特異性の一つも見ることができぬ氣がする。強いて都會と農村との區別を見出さうとならば、その家屋の集團せると否とか、それともその職業の性質が農と商と相違するといふかの外には、その標準はない氣がする。思へ、彼等は十里二十里の距離はあつても、そのフォードを驅れば容易に毎夕町のシネマ・ハウスに入場することができるのである。否、町のなかに住宅を有して朝夕十里二十里と隔てる自己の耕地に通ふことができるのである。耕地の勞働といふも、彼等の手や足よりは、機械の方がはるかに多く働いて呉れるのである。彼等の眼には、工場のなかに動く機械も、耕地のうへに動く機械も、全然別物ではないのである。

それ許りではない。昨日までの耕地が、今日は殷賑な町になることが珍らしくない。ハリウッドがつい近年まで日本人の百姓のセルリイの耕地だつたことは、前にも書いた。獨逸のカイザアリンク伯がロス・アンゼルスの郊外の耕地を歩いてゐるうちに畑のなかに(既に數年後を豫想して)町名を書いた標杭の立つてゐるのを見て異様な感銘を受けたと言つてゐるが、自分と

でも同じ經驗を持つてゐる。シカゴの町が數年經つか經たぬかに百萬も人口が增して行くといふやうな現象は、到底他國ではあるまい。

それ許りではない。數年間かうした農作で富を獲たることができ「農夫」たちは、やがて他の事業で更に富を重ねるべく、その耕地に未練なく別れを告げて大都會へも出て來るのである。大都會へ着いた翌日から、彼等はもう立派なニューヨークッ子でありシカゴッ子であるのである。……

亞米利加に於けるこの眞の農村生活缺如の現象はこの國の現在と將來の運命とを論じて行く者にとつて忘れてならない重要な楔子の一つとなつてゐるやうに思はれるが、それは別として單に文學の發生といふ點からのみ見ても、この農村生活缺如の現象は取りも直さず深い傳統力の缺如、孤獨冥想といふが如き潛勢力の缺如、自然と人間との愛着と鬪爭とから來る強い反省力の缺如等々といふ結果に到達しはしないであらうかと考へられる。自分は眞の文學が、かゝる傳統力、潛勢力、反省力等から離れて果して生れ出づべき可能性があるか否かを疑ふ。

固より自分は今日の亞米利加人が、都會生活に堪能し切つて田園生活に些かのノスタルジイをも感じてゐないと見做すものではない。却つてその反對に、例へばジャズの音樂と舞踏とに對する彼等の執心は取りも直さず今日の機械中心の都會生活に對する彼等の痛ましいほどの反抗と忘却の努力との實證であると解釋し得るとさへ思ふ。

○

自分は今亞米利加人のジャズに對する執心を以て、機械の都會の（おゝ、それは全亞米利加を意味する！）生活に對する反抗とも解し得られやうと言つた。この意味で、自分は、若し將來世界が亞米利加の文學に俟つべきものがありとすれば、この種の反抗乃至不安に發足點を置いて生れて來る特異な文學ではないか知ら、といふ氣がするのである。

亞米利加の今日世界のなかに保持してゐる物質的な富強の地位は、今後すくなくとも一世紀は間違ひなく續くであらうと、言はれてゐる。いづれにもせよ、彼等の大部分は、このすばらしい富強な物力に十全な滿足を感じて、この上にも更にその富強の增加を圖らうと努めてゐることは事實である。（この意味で今日の亞米利加ほど眞の意味で帝國主義の國は他にあるまい。）然しながら、最も強力な探海燈の反射はまた同時に最も闇い影をそのなかに作り出すやうに、たとへ數は極めて僅かでも聲は細くても、この燦ゆい程な亞米利加の富強のなかに反抗背逆の

彩が、さてはその十全の滿足感のなかに激しい不安不滿の影がそれとなく動いてゐないとは、到底言ふを得まい。

雜誌『ピフュール』のなかのジョン・トゥーマー John Toomer の書いてゐる言葉に聽かう。――

『……我等は、我等の作り出した事物に對して何等の執着も持つてゐない。我等はそれ等を作り出す。我等はそれ等を一毀す。我等は買い、また我等は賣る。我等はこれ等の事物を別に輕蔑しやうといふ譯ではない。然し、漸次にそれに執着が薄らいで來るのである。漸次に尊敬が減つて來るのである。やがては全然これ等に尊敬はせぬといふことになるかも知れない。……我等の希求してゐるところのものは、生な荒削りの原料の持つ抵抗力を感じるといふことなのだ。我等の努力が亞米利加のうへに何等かの注意すべきものを加へるといふことなのだ。――』

そう言へば、我々がシンクレア・レウイスなどの小說から感じられる焦燥と不安との種も實にこの希求から生れ出て來たものではなかつたか？　さてはアプトン・シンクレアの小說から、あの『マンハッタン・トランスファー』の作者ジョン・ドス・パソスの小說から、發散してゐる苦い煙も、同じくそれではなかつたか。

彼等は、今日までの亞米利加ではいけないと感じる。もつと尊敬に値するあるものを作り出さねば駄目だと信ずる。然しそれがどんなものであるかは、實の所、彼等にも判つてはゐないらしい。これが彼等の濃い不安不滿の影の萌す所でもある。

亞米利加發見、――更に正確に言へば亞米利加の再發見。彼等の仕事も亦こゝに集つてゐるかの觀がある。

我々は今日の亞米利加の文學に多くを豫期し得ないことは前にも言つた。然し時代は變り事物は動く。充分な關心をもつて氣永に彼女の將來を見てゐる必要があらう。――

○

ロス・アンゼルスに滯在中招かれて一夕を土地の知識階級と言はるる人々と語り合つたことがある。

その席に上山草人氏も見えてゐた。話は自然ムーヴィの――わけて近頃流行のトーキーのうへにも落ちて行つた。その時自分は氏に言つたものだつた。

『ムーヴィ――殊に亞米利加のムーヴィと言へば、動きの早い、言はゞテンポの迅速なので先づ第一の名を取つてゐるやうなものだ。佛蘭西邊のムーヴィはその點でいいコントラストで、よく言へば味ひがあるが、要するにのろ〱してゐて實にまだるつこいといふ感じを起させられる。然しそれだからこそ亞米利加のムーヴィといふものは、如何にも現代にぴつたりしてゐて、如

何にも從來は無かつた第六藝術か第七藝術の發生といふやうなエモーショナルな感銘に打たれさへしたものだつた。

それが、更にトーキーの製作といふ時代に『進ん』で來た譯なのだが、自分から言はせるとそれはむしろ既成藝術の方へと一歩も十歩も『逆戻り』したといふ感じの方が深い。言はゞ新藝術の舊藝術に對する降服だ。我等は最早普通の芝居の舞臺も同じ約束で出來上つたものをスクリーンのうへで見、そしてまた耳で聽かうとしてゐるのだ。テンポの迅速さで我等の新時代の感覺を駭かし悅ばして吳れた新要素は、耳に來る肉聲とその會話との面白さといふ既成藝術の古くから持つた舊要素の爲めにその席を讓つてしまつたのだ。

どうも自分には、トーキーが新らしいものとは言ひながら、實のところはずつと古いもののやうな氣がしてならない……。』

然し自分は、だからトーキーはつまらないなどと斷定しやうとは露程も思つてはゐないのである。それどころか、このトーキー流行の力に押し流されて行く亞米利加人が、それとは氣付かずに自然々々と從來のテンポ萬能とも言へる新時代の迷夢から幸いにも覺めることともなり得やうと思ふのである。偶然に似て偶然とは言ひ得ない自然の轉機が、――過度のテンポのブレーキが生れ出たものと思ふのである。

自分は同じ意味で、あのニューヨークのダウン・タウンの町々を蜒々と徐行する自動車の珍奇な光景をも想像するのである。急ぎの用事に自動車に乘つたが最後、この足で歩くよりも倍ほども時間がかゝるといふ悲慘なる喜劇を、かく言ふ自分も幾度か經驗したものである。（自動車でニューヨークを殊にあの殷賑な下町を乘り廻すのんびりさは、古い巴里の町を辻馬車で乘り廻はすよりも更に芝居がかつてゐやう！）テンポが生命の自動車が、かくも皮肉な運命に逢着してゐるといふことは、自分を笑はせもしたが、然し同時にトーキーの發生が偶然に過度のテンポのブレーキの役割を努めたと同じ暗示をこゝでも意味ふかく訓へてゐるやうな氣もしたものであつた。

亞米利加をテンポの國だといふ。勿論その通りだ。然しもうそこにもこゝにも各種のブレーキが働き出してゐる事實を見逃がしてはいけまい。……

○

ロス・アンゼルスで數日を送つた自分たちの宿は、ハリウッドの町を下手に展望できる宏壯なホテル・アムバサドールだつた。このホテルの階下の數多い賣店のなかにかこまれて鳥渡した食事が攝れる所がある。はじめて自分たちがそこに晝飯を攝り

に這入つたとき先づ眼についたものは、ここの卓子にもここの卓子にも同じメニュで食事をしてゐる美くしい女の顔と姿とであつた。ハリウッドが程近いところから、自分たちはこれ等の若い女たちが、そこのムヴィのスタディオに働いてゐる女優たちではないか知らとも思つたほどであつた。その位に彼女たちは、自分たちにお馴染の亞米利加映畫のなかの姿や顔やに似通つてゐたものであつた。が、間もなく自分たちは、彼女等がそここゝの賣店の事務員たちであることを知ることができた。……

然し自分たちがこの亞米利加映畫のなかの姿や顔やに出逢つたといふ最初の感じは、このロス・アンゼルスに來るまへ、ホノルルの町で既に受け取つて來たところである。この町この島を太平洋の樂園とよぶのは間違ひでないにしても、コロンボやシンガポールやを今まで幾度となく通つて來た自分たちにとつては、矢張りそれと軌を一にする熱帶地方の殖民地の一つだといふ感じがしないではゐられなかつた。然しその眩ゆい南國の光に照された町のなかを左往右來する忙がしい人波のなかにあちこちと點綴する若い女の美くしい顔・姿は、到底コロンボやシンガポール邊では見るを得ない鮮やかな快い風景の一つであつた。否、歐羅巴の賑やかな町々でも容易には見ることを得まいと思はれるほどの生々した、目覺ましい——言はゞモダーンな風景であつたが、自分たちにとつては[illegible]顔と姿とをここに發見したと感じたのだつた……

それにしても、亞米利加の若い女たちはその生々した顔や、その美くしさで、僅に歐羅巴の邦々の娘たちを凌駕してゐることだけは、躊躇なくいへやう。勿論佛蘭西の娘たちの持つあのデリカに動く美くしさは彼女たちにはあるまいし、また英吉利の娘たちの持つあの氣高い美くしさも彼女たちが持ち合はしてゐないことも確かだし、さては西班牙の娘たちの持つあの端麗で情熱的な美くしさも彼女たちにはないといふこともほんとうであらう。然しその晴やかさとその爽やかさとその明るさとの美くしさは、一目見るもの、眼を一瞬に眼覺まさせるに充分だ。

この女の美くしさを一つの生きた藝術と見ることができるとすれば、おそらく亞米利加の生んだ最大の藝術がこれにある！

このすぐれた藝術を製作したものは？　先づそれは混血だ。スカンディナヴィアの血が佛蘭西の血と混り合ひ、コーカサスの血が伊太利の血と混り合ひ、英吉利の血が波蘭の血と混り合つたその「バベルの塔」だ。それから、この豐饒な富裕な土地とそのうへに築かれた社會とだ。幸福と満足とから來る美くしさが彼女達の上に世にも眩ゆく耀いてゐる。そのうへに移住民だつた親たちの荒々しい血から受け繼いで來てゐる活力が、——

單純さと野蠻さとの美くしさが、生々と模樣附けをしてゐる。：：：：

○

然しこの亞米利加の「傑作」の讃嘆から自分は一寸立ち停る。彼女たちを美くしい姿に浮彫してゐる亞米利加の全社會のその背景を自分はあらためて眺めやうとする。

亞米利加の若い女の群が直ちにハリウッドの映畫のなかに現はれて出る女たちを聯想させることは前に言つた。然し、それだからと言つて彼女等の一切のモードが、このムーヴィ・スターたちの模倣に過ぎないやうに考へることは、（銀座通邊を游泳してゐるわがモダーンガールの諸孃は如何に？）皮相過ぎる。問題はもつと複雜して居り、もつと根本的である。

亞米利加が全體として何と言つても成金國であること、從つて歐羅巴の邦々に見らるゝやうな古い習慣（しきたり）・固い傳統といふやうなものが缺如してゐることは、誰しも認めざるを得ない事實である。從つてあらゆる事物に面接したとき彼等には選擇力に乏しくまた抵抗力にも缺けてゐるといふことゝなる。一つの新らしい風俗を取り入れるにしても、歐羅巴の邦々に於ける如く、例へば徐々と上層の社會から下層の社會に及ぶとか、さては漸次に都會から田舍へと行き亙つて行くとかいふやうな順序とエヴォリューションとを持つて居らない。殆んど一夜のうちに變化し全土に行き亙る。（こゝにも機械のスタンダリゼーションが見事に働く。）

この亞米利加に、歐羅巴がまだ〳〵維持してゐる「家庭」なるものを總體として殆んど失ひかけてゐるといふことは、元來家庭なるものが古い習慣と固い傳統とのシンボルであり機構分子であるだけ、至つて當然の現象と言へる。亞米利加に於いては、食事すらも家のなかで攝らずにレストランで濟ます夫婦者がすくなくない。否、家屋すらも有たずにホテル生活を續けてゐる夫婦すらすくなくはない。彼等には家庭の煩瑣な數々の「事務」から解放されねばならぬ必要があるのだ。それは、金を儲けるといふことだ。能率（エフイシエンシイ）をあげるといふことだ。成功するといふことだ。それなのに何を好んで煩さく手足に纒はりつかうとする古い習慣を固い傳統を守つてゐる要があらう、……といふのだ。

しかもこの家庭なるものは、（新らしがりの女たちの言ひ分とは反對に）從來男の爲めと言ふよりも女の爲めにより有利に働いてゐたものと見ることができる。この家庭の構へがあればこそ、先天的に弱く出來てゐる女性が外部からの數々の脅威不安に對し完全に保護せられてゐたのだつた。肉體的にも精神的に

[illegible]さては經濟的には男性よりは脆弱にできてゐる[illegible]、ここで先天的の特別を變へることは創造主以外永久に何人にもできない！）この牢獄のなかではじめて安心して今日まで生活し續けることができたのだ。それを奴隷とも言へやうが、また同時に女王の地位にあつたとも言へるのだつたのである。

この家庭が、亞米利加の從來の國情と今日のこの經濟事情とからして、危く失はれんとしつゝある。かくて女は「牢獄」のごとき家庭から『解放』せられて兩親やさてはその夫やから奪はれてゐた本然の『自由』を獲得するに至つた。彼女等は嬉々と街上に躍り出てもいゝことになつたのである。

然しその街上で彼女を待ち受けてゐたものは何であつたか？

先づ自己と同じやうに『自由』を獲得した無數の同性であつた。それから、今までは自己の家庭の內外の數名の男性以外には眼も向けずに濟んだのが今度は街上にカフエにダンス・ホールに事務所に數知れぬ異性と逢ふといふことであつた。（彼等は彼女等が解放されたやうに均しく家庭から解放されてゐる。たゞ彼女等が辛うじて『自由』を獲得したに過ぎない時に、彼等は更に『自由』を通り過した一層の『我儘勝手』をすら獲得することができたのである！）この無數な同性と異性との渦卷のなかに自分の身を見出した彼女にとつて、先づ最初の問題は、どんなことで[illegible]といふことは、自分の[illegible]に（何と亞米利加では生き[illegible]て行くといふことを意味する。）それには、同性との競爭が必要だつた。できるだけ綺麗にするといふこと（然し歐羅巴風な時代おくれた優雅さはもうはやらない！）が必要だつた。それも要するに男性の奪ひ合ひといふことに歸する問題だつた！（趣味のあるとか教養のあるとかいふやうな男性を奪ひ合ひをしてゐるわけではない。金儲けのうまい――從つて自分に贅澤が許せる男の奪合ひだつた。）露骨で肉情的で直線風に來る烈しさ、美くしさ、――それこそ彼女等の異性に對する「餌」だつた。同時に彼女等の同性に對する「武器」でもあつた。

然もこの新時代の女性の要求をうまく理解して、洋服屋が帽子屋が靴屋が靴下屋がその巨大な機械を運轉して一夜に數萬のストックを製造して亞米利加全土に放送して見れる。同時にハリウッドのスター連はスター連でそのシリイスの衣裳につゝまれてスクリーンのまへに立つて見れる。二日若くは三日――かくて北はシカゴ南はニュー・オルレアンス、東はニューヨーク西はサン・フランシスコまで、一日千本こゝに同種同系の美人の姿が俄然とでき上るのである。……

日本のモダン・ガールの発生とは大分に違ふ經路である。

○

サン・フランシスコで土地の人から、近來黑ン坊がどし／＼町のなかに『侵入』して來てある部分などは殆んど彼等だけの町となつてゐるといふやうな話しを聽かされた。

ロス・アンゼルスからサンタ・フエの線でシカゴへと向ふ。自分たちの車室の世話をするボーイが先づ黑ン坊であつた。自分たちは三日間起きてから寢るときまで彼の顏と姿とを見續けて旅をしたのだつた。

それからシカゴの町。あのミシガンの湖畔に添ふたストランドの通からすこし南の方へと車を走らせて行くと、並木が續く道路をはさんでヴイラ風な一軒建の宏壯な建物がずつと竝び合つてゐる通りに出る。(ある友人の言葉を借りれば、いづれもわが東京の首相官邸ほどの立派な建物の連續だ。)これが、ほとんど全部黑ン坊の住居になり切つてゐる。

それからワシントン。町を歩くと七八人に一人位の割合で必ず黑ン坊に逢ふ氣がする。そう言へば、自分たちの泊つたホテルなぞも、リフト・ボーイからベル・ボーイからメードまで一人殘らず黑ン坊だつた。

それからニユーヨーク。さてはボストン。自分の歩くところに必ず黑ン坊がゐた。自分の通り過ぎるところに必ず黑ン坊の町があつた。かうも黑ン坊が夥しく眼につかうとは、亞米利加の土地を踏むまでは考へられぬことであつた。『白・亞米利加』と『黑・亞米利加』と、――この二つの對立をまざ／＼と感じさせられるやうになつたのも、かうした見聞から來た感想に外ならなかつたと言へる。

『黑・亞米利加』が藝術なりさては廣く文化のうへなりで『白・亞米利加』(乃至世界全體)に及ぼして行く大きな力については、前に書いたからこゝでは觸れまい。また現在竝びに將來の亞米利加の風俗なり社會なり經濟生活なりさては人種そのもの文明そのものなりを動かして行くその偉きな力についても到底こゝで簡單に言ひ盡せるものでなからうからそれも略する。たゞこの黑ン坊侵入(?)の現象に關聯して所謂東洋人排斥といふ問題に對するほんの自分の通り過がりの感想だけを一寸こゝに書き記して置きたい。

所謂東洋人排斥の最初の烽火が擧つたのは西海岸地方だといふことは誰でも知つてゐる。またその原因が所謂白人勞働者の東洋人勞働者に對する競爭と敵視の念とから來てゐるといふことも誰しも知つてゐやう。(亞米利加全體が富の循環といふ新現象に依つて自然らマルクスの階級鬪爭說を徹底に打破してゐる

やうに、こゝでも亞米利加の勞働者は東洋人の勞働者を仇といふ事實に依つてマルクスの「萬國の勞働者よ團結せよ」といふ標語を木端もなく蹴飛ばしてしまつた！）然しながら、これだけであの徹底的な鎖國令が出來上つたとなすのは、恰度あの有名な禁酒法が單に（わが日本にも出來てゐるやうな）禁酒運動の諸團體諸個人の懸命の奔走・活動に依つて出來上つたとなすやうなもので、餘りに事物を簡單に片づけ過ぎてゐるものと言つてよい。

自分の感想に依れば、如何に西部地方の勞働團體が不屈不撓の東洋人排斥運動を十數年に亘つて持續してゐやうとも、若しこの黑ン坊の侵入といふ誰が眼にも隱し切れない顯著な現象さへなかつたらば、決して亞米利加全土の輿論といふやうなものにはなり得なかつたであらうと思はれる。黑ン坊の奴隸の廢止といふことの爲めには、數萬人の血を流すことさへも敢へてした北部合衆國が今日では南部合衆國にもまして黑ン坊の無遠慮な侵入とその跋扈とに脅威され切つてゐるといふ現狀ではないか？東洋人の侵入がこの暗翳に更に黑點を加へるものであるとする彼等の懸念彼等の危惧は、判り過ぎるほどに判る氣がする。

だから自分は、ロス・アンゼルスにあつて土地の人から、近來[illegible]人に對する白人側の[illegible]といふことを聞いても、これだけ[illegible]人の入[illegible]にも[illegible]なるといふやうな樂觀的な觀察にはどうも同意できなかつたし、また東京邊でカルフォルニア邊の有力な勞働團體の幹部が遣つて來たからと言つて一夕の饗宴で彼等の「誤解」を解いてやるといふやうな企ても、果してどれほどの效果を實際に齎らすものか、頗る心許ないことと思ふのである。

黑ン坊の問題は、どつちにもせよ亞米利加の現在將來に亘つての最も大きな鍵の一つといふ氣がする。

○

黑ン坊のことを書いて來て、たま〳〵白人勞働者對東洋人勞働者といふやうな問題に筆が飛んだ。この序でに、この亞米利加の勞働者のことを一筆書いて置くことも無駄ではあるまい。

ポール・モーランの近著『カライブの冬』（"Hiver caraïbe"）（巴里・フランマリオン書肆）と題する彼の西印度紀行の文集を讀んで行くと、そのなかに大略左の意味合ひの言葉がのつてゐる。

こゝに一人の人間があるとする。全自然が既に眠りから覺めたときに床から起き上る。戸のまへには湯氣の立つ珈琲と朝の新聞とが置いてある。それから割引の乘車券。一日に三度の食

事、日曜には釣りに出掛け、土曜日の晩にはシネマに出掛ける。ただで學校に通はして貰ひ、老衰と病氣とに對してはそれぞれの保護ができてゐる。一體この人間とは誰だと言へば、取りも直さず白人の勞働者のことなのである。西洋諸國の月給取りのことなのである。これに小さな庭がつき、それと食事毎に葡萄酒がつくとなれば、佛蘭西の勞働者といふことになる……。

ところがこゝに更に別な一人の人間がありとする。ほとんど裸で、口にするものは米の握りか鰯の燒いたもの、一日に十五時間から十八時間位働いてしかも物一つ身に所有出來ず、唯一の樂しみはと言へば時たま胃袋が一杯になつたなと感じる位のもの、寢る時は道路のうへでも船舶の奧でも所嫌はず、あげくの果が骸骨同樣になつて捨てられてしまうといふ、――これこそ黑ン坊の勞働者、更にひろく言へば一般有色人種の勞働者なのである。

この白黑の人間を世間では同じ勞働者の名をもつてよんでゐるけれど、實のところは夫々別種の名を附けねばならぬ筈。然し今のところ急にその名が見付からぬとならば、すくなくともこの有色人種に對して白色人種の方は「特權貴族階級」を作つてゐると確言して置いてもよからう。――

モーランのこの感想文は、自分に更にこの「特權貴族階級」のなかにも更にはげしい階級の段々があることを想到させるのである。彼が、一般白人勞働者の生活に更に庭と葡萄酒とをプラスして一層特權的な地位に佛蘭西の勞働者を置いてゐるけれども、今それを亞米利加の勞働者と較べて見たらどういふことになるか？

○

アンリ・デュブルイユ Henri Dubreuilといふ男が、「スタンダート」といふ本のなかで、この佛蘭西の勞働者と亞米利加の勞働者との收入と支出との狀態を極めて明瞭に頭に來るやうに次のやうな例示で計算し出して居る。この兩國の勞働者がその收入より見て、どれほどの時間を勞働せば夫々どれほどの生活必需品を手にすることができるかを示したものである。（亞米利加人は弗を貰ひ弗を使ふのであり、佛蘭西人は法を貰ひ法を使ふのであるから、兩者の收支の數學上の單純な比較は意味をなさぬといふのである。）

	（佛蘭西人）	（亞米利加人）
麵麭（一リーヴル）	十五分	六　分
牛乳（一リットル）	廿二分	十三分
鷄卵（一ダース）	二時間半	五十五分
馬鈴薯（一リーヴル）	九　分	六　分

砂糖(一リーヴル)	廿五分	七分
珈琲(一リーヴル)	二時間	一時間
ラムステキ(一リーヴル)	二時間四十分	廿五分
豚肉(一リーヴル)	二時間四十分	十八分
鶏肉(一リーヴル)	二時間	廿分

この外に例へば石炭について見やう。一噸の石炭を購入する爲めに佛蘭西の勞働者は八十五時間の勞働を要するのに對し、亞米利加の勞働者は廿三時間で充分である。木綿の廉い靴下を買ふ場合に見やう。佛蘭西の勞働者が一時間以上の勞働を必要とするに對し亞米利加の勞働者は三十分で足りるのである。日曜に着て出る外着の洋服について言へば、佛蘭西の勞働者は七十五時間の勞働の結果でなければ購入できないに反し、亞米利加の勞働者はそれよりいい着物を手に入れるのに五十時間働けば充分である。靴にしても、佛蘭西人が二十時間働かねばならぬところを、亞米利加では更によい質のもので八時間さへ働けば手にはいる。

それから有名なフォードの自動車だ。亞米利加の勞働者はその給料の十三週間分でそれを求め得るし、ガソリン代と言へば石油罐一杯で二十分の勞働の分にしか當らない。佛蘭西の勞働者が自動車を持つまでに到らないのは言ふまでもないが、若しそれを持たうとすれば一年半以上の給料を投け出す必要がある。それにガソリン代には一時間にこの[illegible]

(自分はそのうちこの比較を日本の勞働者についてもして見たいと思ふ。)

兎も角、亞米利加の勞働者は一特權的賃銀階級のなかでも飛び拔けて高位に位してゐる。日本流のなまじつかなブルジョア階級や乃至は小市民階級やらよりもずつと上の方に鎮座してゐる。これではいくらマルクス主義者が高聲を出して「萬國の勞働者よ結合せよ」と叫んで見たところで、亞米利加の勞働者諸君が餘程の人道主義者餘程の感傷主義者でない限りはこの羨望に値する特權をむざむざと放棄することはゆめあるまいと思はれる。畢竟するに、黑人の勞働者にとつては、さては支那流の勞働者にとつては、乃至露西亞流の勞働者にとつては、亞米利加は固より英・佛その他の國々の勞働者が結合して彼等とその憂ひを分ちその乏しきを充たして呉れるといふならば、こんなにうまいことはないのである。が、そんな溫情主義はマルクス生存中の前世紀頃の出來事ならばいざ知らず、二十世紀の今日ではつゆ望めることでなくなつたことは、痛嘆に値ひする事實と言つていい。……

ニューヨークの港頭に天をついて聳立する自由の女神の巨像。

この「自由」の像を今日の亞米利加に見立てていろんな哲學を吐く人がすくなからずある。先づある人は言ふ。なるほど自由の女神であることには間違ひはない。然しその女神は黄金いろをしてゐるんだ！　弗貨の色をしてゐる女神なんだ！と。更にある人は言ふ。あの自由の像は外から見ると巨大でまた燦爛ともしてゐるが、入場料を拂つてその内部にはいつて見よ。狹苦しくて薄汚なくてとても叶はん。亞米利加で言つてゐる自由といふものが恰度あれさ！と。

たしか厨川白村博士もその「北米印象記」のなかで、亞米利加といふところは自由の邦土であることに間違ひはないとしてもそれには大きな二つの例外があるとして、弗と女との世に稀れな専横振りを面白可笑しく書いてゐらるるのを古く讀んだことがある。

どつちにしても、たゞ一介の旅行者として亞米利加を歩いてゐるだけでは、この亞米利加が自由の國だといふよりかむしろ不自由な國だといふ感想の方が多く浮び勝ちなのは、事實と言はなければなるまい。

先づ入國の際の煩はしさだ、その吟味の嚴しさだ。見せ金だ。移民官だ。植物檢査だ。飲料檢査だ。等々……。

一歩上陸するとたちまち例の禁酒法だ。法をくぐればいくらでも飲めると言ひ條、――否それだからこそ益々うるささの極みだと言つていい。

それから、エレヴェターのなかで帽子をとり、煙草の火を消さなければならないことは止むを得ないとして、汽車で折角のプルマンに乘つたはいいが、窓外の風景を眺めながらゆる〳〵一服といふ譯には行かないのは旅行者にとつて不自由のいたり。便所のそばでこそ〳〵と濟してそれから席に戻つて來ると言つた調子だ。

それから一寸本屋へ立ち寄つて本でも買はうとする。一例がロス・アンゼルスあたりでアプトン・シンクレアの小說「石油」でも買はうとする。さてはボストン邊でユージン・オニールの脚本「奇異な幕合ひ」でも買はうとする。さては、前記したメンケンの亞米利加民主主義檢討の著書でも買はうとする。ありません、といふ。よく聽いて見ると、この土地では賣つちやいかんことになつてゐる、といふのである。時にはその州の官憲の命令に依ることもあり、時には（アプトン・シンクレアの小說の場合のやうに）石油業者の組合からの通達といふやうな言はゞ強力な經濟團體からの抗議なぞで賣れなくなることもあり、ま

た時には教會の牧師さんたちの意見で役收といふやうなことになることもあるといふのである。(日本の國粹檢閲のやかましいのを濫してゐる人は、時々西の邦露西亞を眺めるとともにこの東の邦亞米利加を眺める必要がある!)

然し自分たちは幸ひにして、料理屋に行つても黄色人種なるが故に拒はられたこともなく、また特に席を區別されたといふが如きこともなかつた。この點では、生國日本に於けると同じな、また歐羅巴の邦々を歩いてゐると同じな待遇を自分たちはうまく得ることができた譯である。多少は危惧してゐた事柄だけに、この意外な自由は——乃至平等は、ありがたくないことはなかつたのである。

それにしても、かう書いて來ると、自分も多くの人々の後について、亞米利加には『自由の像』はあるも(尤ももと〱この像は佛蘭西からの寄贈ではあるが、)『自由』なし! といふやうな警句に同感して合唱してゐるものと見做されるかも知れぬ。

然しながら自分の亞米利加自由感は、稍々世人の夫れとは類を異にする。自分の眞の感想は、亞米利加は自由の國柄だからこそ、かゝる不自由の事も敢へてすることができるのだといふのである。

かう言ふと、讀者のうちには、亞米利加には自由の像あれども自由なし』といふ世の警句以上に、自分の言葉を奇怪視するものがないとも限らない。然しこの種の說明を探して行けば實例は世上いくらでもある。

佛蘭西の革命の標語の一つは誰もが知る通りこの『自由』であつた。一七八九年に最初の烽火があげられたときの佛蘭西全土のお祭り騒ぎは、要するに虐げられてゐた各自が自由の身になつたといふ歡びの爆發から來てゐた。それが、あの慘虐な恐怖時代の到來の魁とならう、とは當時誰が考へてゐたらう。幾萬のそれからそれへと、斷頭臺の露と消えて行かうとは、誰が豫想したらう。然し事實は、氷のやうに冷たい論理を以て展開して行つた。『あゝ自由よ、爾の名の爲めに幾萬の人類の血が流されしことよ!』人類を生かすはづの『自由』が、見よ、こゝでは、こんなにも人類を殺してしまつたのだ。

この自由のスローガンが、それからそれへと各國に飛び火したことは、人の知る通り。そのなかでも一番火元に近かつた獨逸。こゝであの愛國的な哲人フィヒテが世にも巧みな言葉で說いてゐた國家哲理の一つは何であつたか? 自由は拘束のなか

にこそ制約のなかにこそ眞の意義を現はす、といふのがそれだつたのだ。國家と君主との嚴めしき統制の下にこそ初めて各人の自由は發揮せられ保證せられる、といふのがそれだつたのだ。見よ源の佛蘭西では、自由の言葉が君主政體を轉覆する役割を演じてゐたのに、こゝでは反對に君主政體を維持する役割を立派に努めてゐたのである

　だから今自分が、亞米利加の生み出してゐる數々の「不自由」の根源を探ねて行けば、それは取りも直さず亞米利加の自由主義に歸着する、と言つたところですこしも奇僻な見方でもないことは、これ等の史的事實を檢した人々には判り過ぎるほど判つてゐやう。然し、この機會に一應亞米利加の自由主義を吟味して見ることは蛇足でもあるまい。――

○

「メー・フラワー」號の船客たちが大西洋を越してわざ〳〵亞米利加の荒野に渡つて來たのは、決して（往時の西班牙王國が所謂拉丁亞米利加に求めしたやうな）黄金や寶石やの發見の爲めではなかつた。彼等はまつたく心から『自由』を希求してその發見の爲めに遣つて來たのに外ならなかつたのだつた。自由、――先づ政治的の、宗教的の、また同時にあのルッソーの牧歌風な感情的の。（そして最後に經濟的の……。）

　この深い心の希求が、結局今日も亦昨日のやうに亞米利加の精神的内容の髓心を作つてゐると同時に一切の社會的形態の輪郭をも形作してゐるのである。かくして、現代亞米利加人の父祖が自由發見の爲めに敢然と過去と祖國と習俗とに挑戰し絶縁して來てこの大陸に新らしい生活を遠慮なく營み得るに到つたその歴史のうへから見ただけでも、歐羅巴の邦々に比して亞米利加のこの「自由」完成の爲めの發展振り（？）が如何に徹底してゐるかは容易に想像し得やう。西歐に生れ西歐の社會を對象としてその革命理論を作り上げたマルクスの思想が、當の西歐に結實しないで、彼の豫想もしなかつた「東洋」露西亞の土壤に發生したやうに、（尤もカイザーリンク伯の言葉に依れば、マルクス主義と今の露西亞のボルシェヴィズムとは何等の關係もないのである！）所謂自由民權の思想も亦肝腎の佛蘭西で具體化するまへに、ヴォルテールやルッソーやの夢に見たこともないこの亞米利加の荒野のなかで忽然と開花することになつたのである。

　かうした亞米利加だ。歐羅巴の邦々が佛蘭西革命以來その君主政體とその共和政體とを取るにかゝはらず一應は民主主義をその政治活動・社會活動の合言葉としてはゐながら、實は依然として强力なる反民主主義的の極右運動ありさては新興の極左運動あり、殊に大戰以來は數こそ君主政體より共和政體へと變りし國多けれ、その内容を點檢すれば反民主的なるデクテーター

シップの[illegible]と較べて、何とはげしく相違することよ。（スターリンの[illegible]を見よ。ムソリニの伊太利を見よ、ケマル・パシャの土耳其を見よ。プリモ・デ・リヴェラの西班牙を見よ、ピルジンスキーの波蘭を見よ、ヴェネゼロスの希臘を見よ、ゾーグー新王のアルバニアを見よ……等々と自分は言ふ。）民主主義は——乃至自由民權の政治形態は、歐羅巴の邦々にあつては最早瀕死の病床の苦惱の期間を閲しつゝあると見做さうとしてゐるシャルル・モーラス一派の觀察も必しも根據が絶無だとは言へない。それが今日の歐羅巴なのだ。この歐羅巴を見る眼には、亞米利加はその建國以來民主主義の坦々たる王道を傍目もふらずさては憚かりもせず堂々と進軍しつゝある世にも羨しき健全なる國柄であるに相違ない、と言つていい。

○

かくのごとく骨の髓まで民主主義者であり、『自由』と『民權』との謳歌者である亞米利加人は、民主政治以外他に政治の存するのを信じないのは理の當然である。歐羅巴には『多數の横暴』といふ言葉があるが、民主國の亞米利加では多數は常に正しく、それ以外に正義の隱遁所のありやう筈はないのだ。『多數』の決定したことには、『少數』は文句なしに服從する。——否、服從[illegible]

見よ、[illegible]民主主義の[illegible]成する

その議會（國會と州會とを併稱して、[illegible]觀た政治現象は[illegible]ないと言つていい。議會は一といふ。もう亞米利加の何處を探しても二はない。反對に彼が二といふ。もう一は何處にも見當らない。彼が、禁酒を宣言する。法律事項であらうがあるまいがもうその翌日から幾百萬の人間から酒瓶が取り上げられる。彼が、ダーウィンの進化論はバイブルと牴觸するから學校で講義してはいけぬといふ。もうその日からうつかり進化論でも口にしたら追放だ。いくら黑奴の私刑沙汰が世界の問題になつたところで、議會がそれを問題にせぬ限りは、大つぴらでいつでもできるし、日本人が多年汗水流して手を入れた土地が沒收されても、議會がかゝる沒收はいかんぞと言ひ出さない限りは、文句の持ち行き場がない。

かくして亞米利加の議會は、おそらく男を女に代へることを除いては、何でもできるのだ。できないことは何一つないのだ。だから、——結局自國の大統領が外國と締結した條約を廢棄するやうなことがやすやすとできるのは勿論、大統領自身だつて氣に入らぬから罷めさせやうと思へば一擧手一投足の勞でしかあるまい。憲法の改正は勿論のこと、どうも民主制度の[illegible]具合がわるいから、となれば、それを廢してしまふことも議會[illegible]

全く議會そのものを廢止して獨裁政治を樹立することさへも議會の手で何の苦勞もなくできる筈である。

民衆の名に依つて、民衆の爲めに、民衆が行ふこの亞米利加の議會に、不可能といふことはあり得やう筈はない。この位に亞米利加の議會は『自由』なのである。要するにこの位亞米利加の民衆は民主的なのである。

亞米利加が案外不自由なぞと言つてあれやこれやを滾す旅行客は、言はゞ、森に入つて木がないと滾すやうなものである。――と自分は考へる。

○

この自由國亞米利加をまさしくシムボライズする自由の女神像をあとにして、十月三日わが乘船『ハヴァナ』號は、ニューヨークを立つてキューバからメキシコ、――所謂拉丁亞米利加の邦々をさしての旅へと向つたのである。

同じ亞米利加の大陸の北と南とに地を占めると言ひ條自分たちの今まで歩いて來たところと、これから踏まうといふところとは、何と言つても大きな隔りがあらう。その隔りこそ獵奇的な旅人にとつては何にも増した誘惑となるものであるけれども、またこの隔りこそ今までにも増してこれからの世界に大きな動きを與へることとならう。自分は日に日に南らしい輝きの増して行く空と海とを眺めながら、水平線にやがて現はれ出す新らしい邦々のうへに數々の想ひを走せた。…………

その折不圖想ひの一つは、太平洋の船のなかで讀み耽つたあのシーグフリートの著書のなかの數章に落ちて行つた。それは、英吉利と亞米利加との關係、亞米利加と黄色人種との關係、それから亞米利加は結局白人種のなかのリイダーになるかどうか？　といふやうな數々の重大な世界の將來について書いてゐる部分であつた。

シーグフリートに依れば、先づ英米の關係は、かの母國離反の歷史、それから引續いて今日に到るまで兩國人の兎もすればお互に口にして憚らない惡口の言ひ合ひ、乃至は數々の經濟的利害の抵觸衝突、――の存在にもかゝはらず、刻々に緩和され改善され行き、今日では兩國有識者の殆んど大部が衷心よりその協力その提携を希求してゐるといふのがその實狀と言へるのである。從つて今日の狀態に於いて、英米戰爭といふが如きは全然あり得ない可能性であるとなすのである。

殊に黄色人種擡頭の脅威に面して、英米兩國の利害關係は全然一致してゐるものと見ざるを得ない。加奈陀は言ふを須ゐるず、濠太利亞・ニユウジーランド、遠くは印度等此等英吉利本國より隔離せるドミニオン諸邦の安全は、到底合衆國の擁護なしには維持し得ざるものといふのが、此等ドミニオンに於いては

勿論、英本國に於いても良心考へられつゝあるのであるに從つて萬一日米開戰の曉は濠政府が日本側に就かんと決定するが如きことあらんか、加奈陀濠洲等の各ドミニオンは母國と離反するも合衆國側に走るであらう、とシーグフリートは見てゐる。

さはれ、このアングロ・サクソン民族の協調といふ點から更に一步を進めてこゝに兩國民族の融合とまで行かうといふ念慮は英吉利本土に於いては、亞米利加自身及び前記ドミニオン諸邦よりは強くないことは、認めざるを得ない。從つて差當り今日の問題としては、英米兩國が完全に提携して世界に當るといふ時機までは行つてゐないし、同時に、英米兩國がこの提携を利用して世界に覇を唱へ得るといふ時期にも到つてゐないことは、勿論のことである。それどころかかゝるアングロ・サクソンの提携といふが如き民族主義に基礎を置かうとする亞米利加人のアムビションに對しては、先づ第一に歐羅巴大陸の、次には汎く拉丁亞米利加の警戒と反對とが存在することを忘れてはならない。從つて、この警戒反對の續く限り、所謂アングロ・サクソン民族の世界爭覇の勝利者となり得る日の到來は、さほど近いことではないであらう。……

シーグフリートのかうした觀察の當否を自分はこゝで檢さうとしてゐるわけでは勿論ない。たゞ、これから拉丁亞米利加の土を初めて踏まうとする自分にとつて、彼が、英米戰爭の不可能を說き、むしろ日米戰爭の[illegible]べきを說き、更に一轉して拉丁亞米利加を[illegible]に英米兩國の提携に必しも快いものではないとなしてゐるこの七種の暗示的な解說に、それとはなしに興味を惹かれたことを言ふにとゞまる。……

自分はこの春まで歐羅巴の大陸に身を置いて、つぶさに亞米利加の齎らした數々のアクシオンとそれの惹き起したレアクシオンとを眺めて來た。それから日本だ。銀座街頭で、新聞紙上乃至雜誌の上で、さては會社內で工場內でそれぞれに渦卷いてゐる『亞米利加』の姿も見て來た。それが今度は、拉丁亞米利加だ。そこで自分はまた同じ『亞米利加』の然し新らしい姿を、――そのアクシオンとレアクシオンとを眺めやうとしてゐる。自分の生れた國を離れないでゐるものにほんとうにその國が判るものではないと信じてゐる自分は、またこの場合、亞米利加をその土地を見ただけでは眞の亞米利加が語り得ないと信ずる者である。拉丁亞米利加が、シーグフリートの言ふやうに、かのモンロー主義の網のなかに素直に泳いでゐる魚のやうなものではないらしいだけに、自分の亞米利加見聞には倘更に役立つ土臺石ともなるであらう。

そうだ自分の眞の『亞米利加發見』は、かうした土地に渡つてから更に後のことかも知れない。……

（一九二九・[illegible]祭・巴都にて）

『文壇アンデパンダン』の提供

我社が中央公論五百號記念を期して出版界に進出して以來、異常の喝采歡呼の裡に目醒ましい成功を獲得した。偏へに江湖の支持と聲援との賜物である。われらは此の恩顧と同情とに酬いるところなければならない。それは一に讀書階級の要求と期待とに背かざる雜誌書籍の刊行に邁進すべきは言ふまでもない。またわれらはその努力を寸毫と雖も怠つてはならないつもりである。が、また一つには無名の作家、執筆者を發掘して之を世に推奬することも、われらの當に心懸くべき任務である。

さればこそ、五百號記念號發刊に際して普く草稿を全國に募集したのであつたが、心細いことには應募四千に餘らんとして、その一篇だに誌上に發表し得るものを見出し得なかつたことである。之については一部の非難をも受けたが、非難どころか、いかに惡罵と讒謗を蒙つても致方はない。われらはその發見に不忠實であつたのではない。寧ろその發掘に熱心なるわれらの同僚をして先づ失望に泣かしめたのを奈何せんやである。

併しながら、われらはそれによつて絶望してよいものか。惟ふにそれは何等かの手段において間然するところがあつたに因るものだらう。第一『中央公論』といふ雜誌に募集する原稿であつて見れば、誰にしても現在の『中央公論』といふものを目安におかない譯にはゆかない。そこに無意識の裡に何等かの妥協や苟合が生れて來る。

……今度は一つ思ひ切つて、原稿を白紙の儘で募集して白紙の儘で發表しようではないか。――といふのがこの『文壇アンデパンダン』の提供である。

『アンデパンダン』といふのは夙に佛蘭西畫壇に行はれたことで、最近我國においても二科會によつて創施された自由展覽會の意である。即ち展覽會場の一部を各自借受けてそこに各々自信ある作品を出品して江湖の批判に俟つ譯である。審査鑑査の情實に囚はれることなくして、一直線に一般大衆に呼びかけようとするのである。そこに、今までさういふ場所に顏出しの出來なかつた無名の、又は不遇の作家にして一躍畫壇に認めらるゝ機會が與へられる。

『文壇アンデパンダン』はそれと軌を一にする。即ち無名作家にして自己の作品を世に問はんとしてその便宜なく、若しくは知名の作家にしてもその資力なく、空しく愛兒を篋底に藏して身の不遇を喞つ多くの少壯作家のために、假に中央公論社が代つて出版するのである。中央公論社の信用によつてそれらの作家の自費出版を助けるのである。そして出來るだ

け廉價に提供するのであるが、賣れるか、賣れないか、歡迎されるか、されないかは一に[illegible]、賣れた時はその利益を配當し、賣れない時は中央公論社が犧牲となつて其損失を甘受する。從つてここに中央公論社としての一通りの審査を必要とするのは言ふまでもない。また如何に良い試みだといつても無限に要求に應じて採用の損失を招いてゐる譯にもゆかないから、その邊は諒解下さることと思ふ。

今や、出版資本主義横行の時代に入つて、可惜才能を抱いて朽ち果てる無名作家や、出版界の積弊を憤んで悶々たる不遇知名の人士のために、この我社が率先して提供せんとする「文壇アンデパンダン」こそ大旱に雲霓を望んだ以上の福音であると信ずる。

惠まれざる、寧ろ虐げられたる作家群出せよ。新人輩出せよ。

左の規約を承知の上、どし〳〵御投稿ありたいと思ふ。

「文壇アンデパンダン」規約

一、原稿は創作（小説、戯曲）に限る。

一、原稿は大體枚數を二百枚以上と定めておく。但し一作を一册として出版することもあれば、また二三篇合せて一册とすることもある。故に堂々たる大作であれば二百枚以上八百枚位までであつてもよいが、それほどでもないならば二百枚位までのものが二三篇合して一册として出版し得る可能性が多い。

一、作者への配當は印税一割を以てする。故に一册三人の合本ならば、枚數に拘らず頭割にその印税を三等分する。五人ならば五等分する。

一、原稿は六月十五日で〆切る。そして九月上旬に發行する豫定。その場合組方製本裝幀等に關しては本社に一任せられたい。

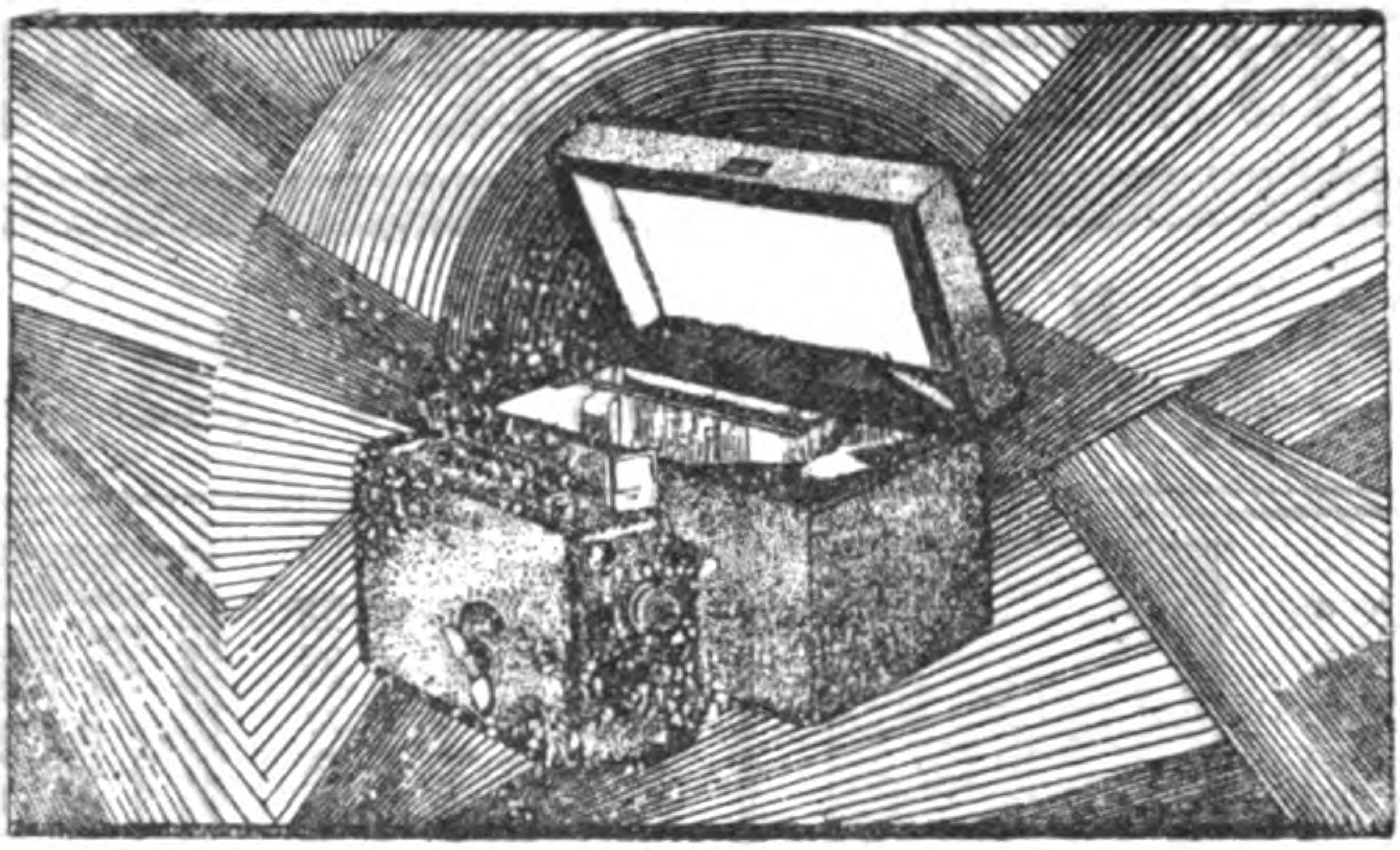
一、原稿は中央公論社宛の事。但し必ず「文壇アンデパンダン」原稿と傍書あるべき事。

一、原稿は必ず書留郵便にて送らるゝ事。而して、原稿は必ず返送する故、同料の書留郵便切手を封入せらるゝ事。

一、住所姓名は原稿の終りに必ず明記せらるゝ事。

以上

右の規定に背反する者は本社は其責に任じない。



Little and Light

A NEW CAMERA in colors
that makes movies in colors

茲に活動**カメラ**があつて婦人には便利な手頃のもので、男子の外套のポケットに入るくらゐ小形ですたゞ美しいといふ以外に何物もありません。色は鳶色、黒、銀鼠、青。ケースも共色。

此**カメラ**は素晴らしい**コダカラー**(完全な天然色)映畫を黒白映畫同様に容易に作ります。簡單な**カメラ**、ちつぽけなのに似ず驚くべき完全なものです。値段は安い。お買附の販賣店へお尋ね下さい。

フヰルムの現像は無料です

東京方面のフヰルムは特別四十八時間現像

大阪市西區南堀江通一丁目
日本シネ コダック サーヴイス社

シネ コダック

CKF-249 EASTMAN KODAK CO., ROCHESTER, N.Y., U.S.A.

『資本論』民衆化の完成

大塚金之助

『……俺は
嚴肅な文句「資本論」を讀んで永久に覺醒してしまつたのだ。
今俺はすべてのものを、かくあらねばならぬものは、その如くに見ることができる……。
自分のまなこの光でどんな覆ひ物も見透し
工場のなかに——未來の世紀のよろこびを豫見し
黄金のなかに——搾取された血を眺めることができる……』

（ベヅイミヤンスキー）

一、カウツキイ民衆版の完成

カウツキイ（カール）民衆版の第一卷は一九一四年に出た。カウツキイ（ベネディクト）民衆版の第二卷は一九二六年に出た。同じくその第三卷は一九二九年に出た。これで『資本論』民衆版は完成した。

編者。世界大戰前、カール・カウツキーは、ドイツ社會民主黨總務部の委囑を受けて『資本論』民衆版第一卷を出版した。マルクス研究の世界的權威リヤザーノフがこの作業に協同した。ところが世界大戰は、もう一人の協同者エクシユタインを病死させてしまつた。一九一七年ロシア革命の後、リヤザーノフはモスカウへ歸り、彼とカウツキーとは、場所的にも

政治的にも餘りにかけ離れてしまつて協同作業は非常に困難になつた』(第二卷序九頁)。その上、カウツキーはもう七十の坂を越した。そこで彼は、第二卷及び第三卷の編輯を自分自ら折紙をつけた自分の子ベネデークト・カウツキーに渡したのである。

編纂方針。民衆版の目的は、『單に學問的に準備教育を受けてゐない人々の研究をたやすくするための補助を與へるだけでなく、なほそれは科學的專門家の役にも立つべきだ』(第二卷序一一頁)。つまり『一切の學究臭を棄てた通俗版』(第一卷序一八頁)ともなり、同時に嚴密な版本ともならうとする。だから『この勞作の深さと性質とを損傷しないでできる程度で、ドイツ原文の理解をたやすくするやうに形作る』(第一卷七一頁)のが編纂者の任務であつた。

勿論それは省略本や解説本ではなく、マルクス＝エンゲルス版の『資本論』の原文は――マルクス自身が自用密本に書き入れた點を除いて――原形を殘してをり、編者の加筆はすべてそのところに一々ことはつてある。

かういふ方針のもとに、編纂者は、諸種の版本を利用して、原文を詳細に檢討し、引用文を一々追檢し、誤植や外國語を淨化し、外來語的表現には一々ドイツ譯を附記し、明かにマルクスの誤りである點を修正し、註をつけ、外國書引用文には譯をつけた。リヤザーノフは索引を作つた。その他に引用書一覧を添えてゐる。第二卷及び第三卷では、『原文をエンゲルスが與へたまゝでできるだけ無疵に形作る』(第二卷序一二頁)と目的がやゝ限定された。索引はベー・カウツキーによつて作られた。またこの兩卷に特に多い數字的計算を檢討して原版の誤算を訂正した。エンゲルスが言つた通り、マルクスは代數家としては優れてゐたが算術家としてはだめだつたのだ。引用書の追檢は非常に困難であつて、遂にベー・カウツキーはイギリスに渡つてロンドンの大英博物館圖書室を利用しなければならなかつた。かうしてカウツキー父子の前後二十年近くの克明な努力によつて、第一卷は初版から四十七年目に、第二卷は四十一年目に、第三卷は三十五年目に、民衆版の完成を見ることになつた。

この新版は大體に於てその民衆版としての目的に適つてゐる。此所々缺點はある。例へば原版の誤植を取りのぞかないでおきながら新たな誤植をもぐり込ませた。外國語にドイツ譯をつけるのに、第一冊目に出て來たときに、ついてゐないこともある、等がそれだ。また値段が高い。

今こゝでこの全三卷の理論的重要さを繰返す必要はない。第一卷は、資本主義的生産過程をそれだけとして取つて見て、即ち直接生産過程としてそれが提供する諸現象を研究し、そこではまだ外部の諸事情から來る一切の二次的影響は度外視されてゐる。問題の中心は「餘剩價値の生産と資本自體の生産」であつて、讀者は餘剩價値の生産工場に、餘剩勞働搾取場に踏み込んでゐるのである。「だがこの直接生産過程で資本の生涯は盡きてはゐない。現實世界では、流通過程がこれを補つてをり、この流通過程が第二卷の研究の對象なのである。」こゝで讀者は、油と汗との工場から市場へとつれ出される。さうして「資本主義的生産過程は、全體に於て見れば、生産‖及び流通過程の統一である」ことが明かになる。資本家は、彼の貨幣資本を生産的資本の要素に變じ、さうして今度は彼の商品資本を貨幣資本に變ずる。だから資本の循環と回轉とが問題であり、最後に社會總資本の再生産と流通とが問題になつて來る。第三卷では、全體として見た資本運動過程から起る具體的諸形態を見出すことが問題である。讀者は一歩一歩、社會の表面へと導かれ、生産當事者の凡俗な意識に出て來るやうな資本の姿を見とゞけることができるのである。

今この民衆版と舊版とを比較するために、第一卷第二十二章（餘剩價値の資本への轉化）第二節（餘剩價値の資本と所得とへの分割。制欲說）をとつて見やう。高畠譯改造社版同本第一卷第二冊五八〇頁――

「餘剩價値の量が與へられてゐるとすれば、以上兩部分の一方が小なれば小なるほど、他方は益々大となる。他の一切の事情に變化なき限り、この兩部分に分割される比率の如何に從つて、蓄積の大小が決定されるのである。だがこの分割を行ふものは、餘剩價値の所有者たる資本家である。」

英譯も大體この通りである。一八八九年のロンドン版（六〇二頁）、從つてシカーコ版（六四八頁）、一九二八年のパウルの新英譯も。カウツキー民衆版を見ると——

『餘剩價値の量が與へられてゐるとすれば、蓄積の大小は明かに、蓄積基本と消費基本とへの、資本と所得とへの餘剩價値の分割如何にかゝつて來る。その一つの部分が大きければ大きいほど、他の一つの部分は益々小さくなる。……（こゝに半頁入つて）……何れにしても本資と所得とへの餘剩價値の分割を行ふ者は資本家なのだ。』（第一卷五二六—七頁、傍點筆者）

このやうに原文が（傍點の箇所）改訂されてゐるだけでなく、新たに半頁挿入されてゐる。そしてそこには次のやうな句をも見出すことができる。

『一國に於ける資本主義的生産が發展すればするほど、蓄積が急速となり大量となればなるほど、その國が富めば富むほど、從つて奢侈と浪費とが大げさになればなるほど、餘剩價値總大量とそのうち資本に轉化される部分との間のこの開きは益々大きくなるのだ。』

この部分は恐らく、マルクスが自用臺本に書き入れておいた加筆をカウツキーがその臺本から採つて加へたものだらう。カウツキーがこゝへ附言すべき註を附記してゐないのでよくは分らない。高畠氏は原本第六版を基礎としてをり、カウツキー民衆版をたゞ助けとして援用したに過ぎないから、この部分が拔けてゐるのである。河上肇氏の着手された岩波版は、カウツキー民衆版を臺本としてゐるが中絶してゐる。エンゲルスがこの箇所を採用しないでカウツキーがこれを採用した事情は、リヤザーノフ版『資本論』全十卷の出版を待たなければ確認することはできない。だが民衆版が完成した以上、邦譯『資本論』は、定價だけでなく、その内容も民衆版化されねばならない。改譯しないまでももう一度譯書を再檢する必要がある。高畠氏が、『大いに重荷をおろした氣分になり、祝盃の一つも上げねばならなかつた筈』（序二頁）だと言つた時期は過ぎ去つた。民衆版の完成を報告する理由の一つはこゝにある。

次に吾々は、ドイツ語のできる人には、この民衆版の使用をすゝめる者である。今までの版にはすべて索引はなかつた。だから眞劍な研究家は自用のために自分で索引を作らなければならなかつたのである。カウツキー民衆版第一巻にはリヤザーノフが初めて索引をつけた。第二巻及び第三巻の索引は、リヤザーノフのそれとは趣を異にしてはゐるが、ベー・カウツキイが作成してゐる。パウル英譯版も索引をつけた。リヤザーノフが言つた通り、「資本論」は勞働者階級の全政治的・勞働組合的闘爭の理論的基礎』（第一巻七〇一頁）である。そして『この武器を色々な戰ひ――理論的及び實踐的の――で使ひこなすためには、讀者は、「資本論」の思想内容と事實内容とをいつも手に持ち合はせてゐることができるやうでなければならぬ……』（同）。この内容のあらゆる部分にはつきりと索引をつけておいて、本書をいつも參考書か辭書のやうに用ひ得なければならない。それには此索引が非常に役に立つ。尤もこの索引は十分ではない。リヤザーノフの索引でも、農業革命、ローマンティシズム、宗教、教會、ドイツ經濟學に關する重要な一般的規定、協同組合、その他が全く缺けてゐる。封建制度、産業革命、淫賣、法律の階級性、欲望、共産主義社會等は不十分である。それでも吾々は、勞働強度化、資本家御用づとめの學問、教育の階級性、アジア的、恐慌等の當面の吾々の問題への鍵をこの書のなかにつかむ便宜を得てゐるのである。

ベー・カウツキーが作つた索引は、實質に於てリヤザーノフのそれに比べて落ちるだけでなく、後者が第一巻においた索引作成の根本方針を放棄したものと思はせる。第二巻及び第三巻の索引を第一巻のそれと比較して見給へ。リヤザーノフが特記してゐる辨證法、歴史的唯物論、顯現（見かけ）、現象形態、物神崇拜（第三巻）、事物化、神秘化、逆轉――これらは何ヶ所となくあるのだ。――などはもうない。また歴史的な項目では、一八六一年のストライキ、一八四八年革命（國民職場、著識）、原始共産體などがない。地理的には、日本が索引から落ち、ロシア（第三巻）が一ヶ所しかあげてない（事實は十ヶ所もあるのだ、マルクスのロシア語の勉強を思へ）。共産社會が不十分で共産社會と恐慌との關係はない。等々。こ

れて見ても、マルクス主義に對する態度の相違がいかに強く索引にまで現はれてゐるかゞ分るのである。唯物史觀の修正を敢てしたカウツキー父子は、その社會民主主義的態度を索引の作成にまで現はしてゐるものとも見えるのである。

吾々は、この民衆版の完成がマルクス普及に一段と役立つものと考へる。だがしかしこの民衆版が「科學的專門家の役にも立つ」最終的なものとは考へない。かゝるものを作る任務は、もはや今日のドイツ社會民主黨に課せられても解決すべくもないものであり、それはモスカウのマルクス＝エンゲルス研究所にのみ課せられ且つそれによつてのみ解決されるのである。

二、『資本論』ポケット版

『資本論』のポケット版が出た。ベネディクト・カウツキー編纂、一九二九年値段二册で三圓七十錢。ドイツ原文で約版二千頁が二册合せてポケット三六版七百五十頁に壓縮され、第一册は第一卷を、第二册は第二卷及び第三卷を包括する拔刷本である。

編纂方針。この切り詰め版の特色は、原著者の原文を切りとつて新順序に配列し、しかも『原著の基本思想と最重要部分』(序八頁)とを知らしめ、この切り詰めた形で『理論的思想進行の關聯』(同九頁)を出さうとするところにある。編者の言葉によると「この關聯がこの拔萃の基本觀念である。あらゆる切り詰めにも拘はらず、思想連鎖に於ける本質的な環は一つも缺けてゐない。原著三卷からのあらゆる本質的なものは取り入れられてゐる」(同九頁)。この目的を達するために、編纂者は、多くのものを犧牲とした。即ち第一卷からは『殘念ながら』歷史的資料と註とを大部分削り取つて來て、第二卷及び第三卷からは「バラスト」(！)を即ち資料と手記とを剪み取つて來てた。なほその上に章全體をも多く犧牲としてゐる。これがこのポケット版の編纂方針である。

この原文のまゝを提供するポケット版の出版は、『資本論』普及の上の一進歩である。その編輯方針はそれ自體としては正しく、現在のところこの版は縮小版としては最善のものであり、且つまた『資本論』全三巻の通俗化といふ課題を解くための準備作業となるだらう。

だがそれは餘りに多くのものを犠牲とし過ぎた。それがいかに重要なものを棄てたことになるかは次の二三の例でも分る。資本主義時代を特色づけるものは勞働者にとつて勞働力が商品となることである（一二六頁）。抽象的自然科學的唯物論の缺陷（三一七頁）、ブルヂョアジーの生產關係革命（四二八頁）、プロレタリアとは何であるか（五五〇頁）、利潤の增大につれて資本が躍り三〇〇％となれば罪惡をも斷頭臺をも辭しないといふ引用文（六八九頁）、等。だから脚註だからと言つて機械的に切り棄てゝはならないのである。

またこのポケット版は、『資本論』『第四卷』を默殺したといふ缺陷を持つ。マルクスがこの『第四卷』を計畫してゐたことは、『資本論』全三卷の序文・本文・脚註でも何度か述べてゐるところである。マルクスはこの『第四卷』で學說史を取扱ふつもりであつた。こゝに經濟學批判者としてのマルクスの偉大さと鋭さとが現はれる筈であつた。經濟學史家としてのマルクスの重要さはこゝにあるのだ。そしてその學說史の一部は『資本論』の本文及び脚註に組み入れられてをり、この部分は立派な經濟學史を成してゐる。ベー・カウツキーが脚註を切り棄て『第四卷』を無視したことから次の結果が生じて來る。

第一に、マルクスが第一卷の脚註で諸學者に加へた適切な批判は全く影もない。アリストテレースのやうな思想的巨人が奴隷勞働の評價を誤まつたこと（四五頁）、大學教授のなまくらな態度をこつぴどくやつつけたこと（五五頁、一六〇頁）、辯護論的經濟學の二大特色（七三頁）、大學教授が餘剩價値の良心的分析の前にたぢたぢであること（一六九頁）、マルサスに

於ける學問と利益との野合(四六六頁)、その人口論の正體(五五二—三頁)、ミルは俗流經濟學者でないこと(五四七頁)、アダム・スミスには月がチーズに見えませうなどと坊主が野次的にこき下した醜態(五五四頁)、その他シーニオルの御用振り、等々。これらはたとへ通俗版でも切り棄てゝはならないものであらう。第二卷以下は本文中からも、學說史の部分は棄てられてゐる。

第三に、『餘剩價値學說史』にある生產的勞働、恐慌、生產價格等が全く無視されてゐる。勿論、詳細を極めた學說批判を採り入れる必要はないが、しかしこれらの本質的なものを度外視して『資本論』を三卷に限定して通俗版とするのはよくない。だから吾々は、ドンカーと共に(H-K. 1929=113)、ポケット版を二册にしないで三册にすべきものだと考へるのである。

本書は切り棄てゝならない部分を切り棄てゝゐる。その一つは第十五章勞働力の價格と餘剩價値の大いさの變化である。讀者はこゝを飛ばしていきなり勞働賃銀にぶつかるのである。こゝでは第一に、勞働賃銀といふ現象形態に進む前に本質的關係が說かれてゐる。なほまたこゝは勞働强度化の原因と結果とを說いてゐる箇所なのであつて、今日の合理化時代に無視してはならない箇所なのである。なほその上に、この章には社會化された社會に於ける勞働時間の長さをも說いてゐる。『勞働日の短縮は根本條件だ』——自由の王國を持つための(ポケット版第二册三一七頁)。革命後の必要勞働時間はどうなるのか?(民衆版四六六頁)今日世界の革命情勢が盛り上つてをりサヴエート同盟で勞働時間が七時間に減じ——やがて六時間にならうとし——てゐる場合に、マルクスが革命後の社會に於ける勞働時間について述べてゐる點を機械的に切り棄てるのはよくない。別の箇所でマルクスは政權奪取に伴ふ勞働者學校のことまで說いてゐる(本書第一册二八一頁、民衆版四三〇頁)。ベー・カウツキーはこゝを採つてゐるではないか。

ポケット版は原著の本文と脚註とから歷史と資料とを切り棄てた。だから歷史的事實、統計資料、等はこの版では知る由

もたない。マルクスは、一八四八年革命の闘士クーゲルマンに宛てた手紙のなかでいつた（ドイツ版二〇二頁）。「あなたの奥さんに先づ第一に「労働日」、「協業、分業及び機械」、最後に「原始的蓄積」についての諸編から讀めると教へてやつて頂きたい」と。つまり初めて讀む人々は、第八章（労働日）、第十一章（協業）、第十二章（分業と工場手工業）、第十三章（機械と大産業）、第二十四章（所謂原始的蓄積）の順で讀むことを教へてゐるのである。この部分は、生々しい歴史的事實を豐富に包括する部分である。今その諸事實を極く僅か抜き出して見やう。

第八章労働日から。少年酷使の實例として、少年が三十時間ぶつ通しで労働した（一九一頁）。「労働者はこゝでは人格化された労働時間以外のものではない」（一九二頁）。「一つの都市が男子労働時間を一日十八時間に制限しろと請願するために公けの集合を開くなど、聞いたら人は何と思ふだらう！」（一九三頁）。「七歳の小供が十五時間労働だ」（一九四頁）。資本家は一年を十三ヶ月にしたり（一九〇頁）、一週を八日にしたりする（一九六頁）。鐵道労働者の五十時間勤務（二〇二頁）。二十歳の婦人労働者を三十時間ぶつ通しで労働させ、氣絶しないやうに時々シエリーやブランデーを飲ませる（二〇三頁）。十歳の少年が二日二晩ぶつ通し労働する（二〇七頁）。少年教育は全く蹂躙され、少年は四四が八と計算したり、英語の神（God）をさかさまに犬 Dog とまちがへて書くほどであつた（二〇八頁）。資本は労働者の健康と壽命とには全くおかまひなしだつた（二一八頁）。一八三三年以降の諸イギリス工場法とその失敗。工場法は、工場主の時間泥棒を防ぐために工場の時計をもよりの公共建物（例へば停車場）の時計に合せるやうに命じた（二三一頁）。チャーティスト運動の高揚と一八四八年革命――十時間労働日の實施（二三三頁）。裁判官の席に坐る工場主（二三七頁）。労働者階級の攻撃力の増大（二四三頁）。第一インタナショナルの八時間労働宣言（二四九頁）、等。これらの歴史的資料は悉く切り棄てた。つまりこの章の大部分が切り棄てたのだ。

第十三章から。婦人労働者は失職してやつと子供に乳をやつたり料理を覺えたりすることができるのだから、料理を覺える時間があれば今度は喰ふ物がない（三三九頁）。工場法の規定によつて少年工教育のために雇はれた教師のなかには自

分の名も書けないやうな者があつた（三四五頁）。資本家の側から見れば、未婚女工よりも既婚女工の方がいゝ、なぜならば家を持つた女は、必要生活手段を得るために遥かにおとなしく注意深くあらざるを得ないからであり、かくして母としての優しさまでが奴隷制の手段となる（三四六―七頁）。等。婦人＝及び少年勞働者に關するこれらの事實も恐く切り棄てだ。第二十四章原始的蓄積。スーザランド侯女が軍隊を用ひ火を放つて行つた土地收奪、一萬五千の住民を追ひ立てゝ十三萬の羊を飼ひ、やがて羊を追つ拂つてかのスコットランドのローマンティックな風景を殘した實例（六六〇―一頁）。

右の諸章の外、資本が勞働者からあらゆるものを奪ひとつた多くの實例。ブラッドフォードで調べた二十三家族のうち五家族は、一室に一家族十六人以上が住み、そのうちの一家族は一室に十八人！（五九九頁）。一つ寢室内に新婚夫妻とその弟妹とがごろ寢することから來る近親相姦の恐ろしい結果と性道德（六二一頁）。イギリス農業放行勞働者間に行はれた公然の添ひ臥し、自分の色女に土地を與へてやつた王様、等々。

勿論ポケット版ではどこかを切り棄てなければならぬ。しかし歴史的資料を一掃してしまつてはならない。その最適例は適宜の方法を講じて、なまのまゝ組み入れておかなければならない。況んやイギリスが「資本の首府」であり、イギリス勞働者が勞働者階級の戰士であつたのだつたからなほ更だ。またこれらの事實は、資本主義がその誕生の時から暴力的であつたことを例證するものである。資本主義は初めは良質であつて後に惡質となつたのだとか、資本主義は後になつて暴力的になつたのだとかいふ考へを防ぐのにも役立つのだ。吾々はこゝで高橋龜吉氏のことを言つてゐるのではない。カウツキー自身のことを言つてゐるのだ。

かう考へて來ると、カウツキーの改良主義的立場がこの本の編纂にまで現はれて彼の剪を動かしたのではないかとの疑問が浮んで來る。さうは思はぬといふのがドイツ共産黨の文獻學者ヘルマン・ドウンカーの意見だ。がカウツキーが勞働者獨裁に、從つてサヴエート同盟に、反對することを考へ、現在のドイツの情勢の下にあつてなほ政權奪取を遠い先のこ

とでもあるかのやうに平然としてゐることを思へば、この疑問は當然である。

マルクスの民衆化・通俗化は重大な課題である。マルクスは言つた「一の科學を革命しやうとする科學的企圖は、決して本當に通俗的にはなり得ない。だが一旦科學的基礎がおかれれば、さうなれば通俗化は容易だ」と（クーゲルマンへの手紙、ドイツ版一五頁）。エンゲルスは言つた。「吾々の義務は、吾々の考へを科學的に基礎づけることにあつた。だがそれと同様に吾々にとつて大事だつたのは、ヨーロッパ・プロレタリアートを、そして先づもつてドイツ・プロレタリアートを吾々の確信の側へ獲得することだつた」と（『ノイエ・ツァイト』第三十二年第二卷第三號一〇〇頁に引用）。また吾々は、勞働者が「資本論」の大册を讀むためにどんな苦勞したかを知つてゐる。シャボワロフはそのシベリア流刑地の手記に書いてゐる——「マルクスの著作のむづかしい言葉が革命的マルクス主義の普及を妨げたことは爭ひの地がない」と（『マルクス主義への道』青木俊三譯三四七頁。）

このポケット版は通俗化の課題を十分解決しなかつた。だが通俗化の課題を解くための準備をしてくれた。マルクスの思惟を大體その主要線に添ふて原文で辿る準備をしてくれたのである。

三、序文におけるマルクス曲解

ポケット版は、編纂者の言ふ通り、決して原三卷を無用ならしめやうともしないし、また無用ならしめ得ない。度々引用されるマルクスの重要箇所でポケット版に見出せないものがいくらもある。一つの例。「生産力が發達して勞働者たちの絶對數を減ぜしめたとき、換言すれば實際に全國民をしてより短少の時間をもつて總生産を遂行し得るに至らしめたとき、革命を齎らすことになるであらう。なぜならば、かくの如き生産力の發達は、人口の大多數を適用外におくからである。こゝにも亦、資本制生産が特殊の制限を有する……」（改造社版第三卷二二五頁）。この句は最近資本主義的合理化に關して

ルービンシユタインが引用してをり(ドイツ版『マルクス主義の旗の下に』第三年第四號)、また勞働者數絶對減少に關してヴァルガとウルムとの論爭に引用されたものので、讀者諸君に親しいものだが、この重要な句はポケット版には見出すことができないのである。

以上の缺陷の外に、ポケット版へのベー・カウツキーの序文には幾多の誤謬がある。この誤謬は既にドイツの讀者に向つては指摘されてゐる(IPK, 1929＝113)。

彼は言つてゐる。「勿論彼(マルクス)は彼(ヘーゲル)の體系への突入をたやすくやつたのではなく」(一六頁)。火のやうな討論をやつたり原稿を書き散らしたりして、やつとのことで辨證法を自己の出立點とするところまで來たのであると。しかしこれは誤りである。若きマルクスのなかには、辨證法的＝唯物論的世界觀はすばらしく急速に成長したのである。

編者は更らに、「マルクスが大學教師を斷念して國家への直面鬪爭を志した頃、「マルクスがこの時分いかに唯物論……から遠くかけ離れてゐたか」(一七頁)を論證しやうとしてゐる。だがマルクスはこの時既にフオイエルバッハの意味で唯物論者だつたのである。いやもつと遡つて、リヤザーノフの研究によれば(『マルクスとエンゲルス』アメリカ版三三—四頁)、マルクスの父は既にロック、デイドロー、ヴオルテールを讀んでをり、この家庭の空氣はフランス唯物論者の影響を受けてゐたのである。

エンゲルスについても、編者は同樣な誤りを傳へてゐる。「イギリスは當時チヤーティスト勞働運動の一頂點を體驗してゐた。このイギリスに於ける滯在がエンゲルスを社會主義に改宗させたのだ」と(二〇頁、傍點筆者)。編者はどういふ研究に基いてか、る斷案を下してゐるのであらうか? ガスターフ・マイヤーの大『エンゲルス傳』(ドイツ版一九二〇年)ははつきりと次のやうに書いてゐるのである。「彼の共產主義への改宗は(イギリス滯在以前に)……ドイツの環境のなかで行はれてゐた」と(一二五頁、傍點筆者)。モーゼス・ヘスは、「彼及びマルクスのやうな人物に共產主義の重要さを確信させ、彼

等に共產主義を深く研究する必要を示したのである（一一七頁）。一八四二年九月十八日『ライン新聞』に出た一論文がある。もしその筆者が本當に彼だとすれば、彼は決定的に共產主義へと態度をきめた過渡期にはそこに居つたのだ（一一五頁）等。

更らにマルクス經濟學の短かい紹介のなかにもいくつかの誤謬がある。例へば彼は、相對的餘剩價値生產の手段として『勞働強度化の方法と合理化の方法』（四一頁）とをあげて合理化と勞働強度化とを對立させてゐる。しかしマルクス主義で言ふ資本主義的合理化とは何であらうか？　それは勞働過程の再組織によつて勞働をできるだけ強度化することなのである。勞働強度化が資本主義的合理化の本質的特色なのである。尤も資本家は、アメリカでもドイツでも日本でも、規格化も標準化も不變資本の節約も企業合同も何もかもごつちやにして合理化と稱してゐる。資本辯護論者や合理化の使徒も勿論さうである。『アメリカに於ける產業合理化の重要なる方法……標準化……機械化……組織化……勞銀の高率……月賦拂制……生產組織の擴大……』（太田正孝『資本主義の修正』一九三〇年一一六頁）。

老カウツキーは、自分の息子のことを、『一貫してマルクス主義的に思惟する』と折紙をつけてゐるのだから（民衆版第二卷序九頁）、以上のやうな誤謬や不精確なマルクス主義的概念の用法はなほ更ら人を誤るものだ。だが父カウツキーも民衆版第二卷序文のなかで、マルクスを全く忘れてしまつて彼自身の學說を堂々と宣揚してをり、そしてベー・カウツキーはその一部をやはり第三卷序文のなかで繰返してゐるのである（IPK.1927＝107）。

彼は言つてゐる。『プロレタリアートが政權を得るのはもはや遠い未來のことではない』（一六頁）。『こゝ數年のうちに多くの國家に社會主義的多數が發生して、純粹に社會主義的な政府が政局に立つだらうと（一七頁）。では「未來國家」や「社會主義的未來」の近さはどうかと反問すると、「その近さについては色々の意見を持つことができる」（一九頁）としてし

まひ、どういふ途をとつてそこへ行くのかと反問すると、現存秩序を社會主義の方向に向つてもつと發展させる』(一八頁)のだとする。『大戰は階級鬪爭をいやが上にも增大させ、また經濟機構は深く震害された。『當時の狀態では階級對立の調停の最も溫和な形態が經濟的に最もためになるものであつたらう』(二五頁)。その形態は『民主主義の形態』である。この民主主義は獨裁の如く破壞的でなく、獨裁は野獸的强力の所產なのださうである。『戰爭が產み出した野獸的强力禮讚の風は他方に於て屢々民主主義を獨裁によつて置き換えさせ、この獨裁の必然的成果は內亂であり、この內亂は經濟的混迷をいやが上にも增大した』(二五頁)。彼は言ふまでもなくロシアのことを考へてゐるのである。彼は『勞働者が工場を引きつぐといふボルシエヴィキ的實驗』(一七頁)の難點をあげてゐる(一七頁)。かうして吾々は、曾つての革命家であつたカウツキーの代りに、一個の改良主義者を見出すのである。

階級利害については彼はかう言つてゐる。『流通過程では……こゝでは或る程度まで勞働者と資本家とは同じ利害關係を持つ』(一九頁傍點筆者、殆んど同じ文句は三〇頁にも)。ところが彼は次頁ではやゝ前進してかう言つてゐる。『つまり勞働者は、流通に關しても、また同樣に生產に關しても、賢明なる經濟政治に利害關係を持つ。だが階級對立の重心は生產過程の領域にあるのだから、流通の領域には多くの點で——決して一般的にではないが、——プロレタリア的利害と資本家的利害との間に或る調和が存するのだ』と(二〇頁、傍點筆者)。吾々はこゝで、曾つての階級鬪爭家を見る代りに、階級利害調和論者を見出すのである。

更らに彼によると、戰後の恐慌が長びいたのは、『殆んどすべての國家に於ける支配階級の平和政治が經濟的認識によつて指導されず、ましてやマルクス主義的認識などによつては指導されず、戰爭によつて育て上げられた野獸的暴力禮讚の風によつて指導されてゐた』からであるとする(二五頁、傍點筆者)。そこでプロレタリアートの任務は、『資本主義的生產樣式を克服しそれに社會主義的生產樣式を置き替へることだけでなく、大農や將軍や官僚や教授等と同盟してゐる大資本獨

古者がこの生産様式の諸法則を強力的に破壊するのに對抗してこの生産様式の諸法則を擁護するところにある。（三〇〇頁）最後に彼は資本主義政府に呼びかける。「もし主要國家の近年の政治が資本主義の諸法則の——資本論一卷のなかに描き出かれたこの諸法則の——認識によつて指導されてゐたとしたら、資本主義が完全に機能し續けるとしてさへ、どんなにか人類の苦惱を輕減してくれたらうに！」（三〇一頁）と。吾々はこゝに、曾つての科學的マルキシストの代りに一個のユートピストを見出すのである。

これが『資本論』民衆版の序文であるといふことは驚くべきことである。一旦生産工場から市場に入つた彼は「資本主義的生産過程は……流通過程と生産過程との統一である」（民衆版第三卷第一冊三頁）ことを忘れてしまつてゐる。總過程は『生産過程と流通過程との統一』（第二卷六七頁）である。またカウツキーが生産過程を勞資闘爭場面とするならば、流通場面に敵同志の握手を見ることができない筈である。「……この關係（勞資間の貨幣關係）は、基礎に於て、生産の社會的性質に基くものであつて交易様式に基くものではない。後者は前者から生ずるのだ」（第二卷八三頁）

また強力が大戰の産物でないのは言ふ迄もない。原始的蓄積に當つて流された血は第一卷に記錄されてゐるではないか。また彼が強力と經濟とを對立させてゐるところはまるで一個のデューリングの新生を思はせるのである。「あらゆる經濟現象が政治的原因から説明さるべきであることが、言ひかへれば強力からさるべきであることが明かなのである」——これはエンゲルスがデューリングに對して言つた皮肉な言葉なのである（門木平譯『強力と經濟』一九二九年四頁）。

なほ吾々は、彼の論旨の全體が改良主義者の唱へる經濟民主主義の方向を辿るものと見るのである。自由競爭の排除、國内獨占の發展につれて、組織化された資本主義といふ學説が生じ、經濟民主主義といふものが發生した。經濟民主主義者は、『國家は一の共同體である、』とする。この國家が所謂社會國家であり、階級超越國家である。勞働者階級は民主主義の途を辿つて、政治的方面では、政黨を通じて、この國家の上に勢力を增加することができ、經濟的方面では、經濟民主

主義によつて經濟遂行に參加することができる。『經濟の民主化によつて社會主義へ！』――これが經濟民主主義のスローガンである（ナフタリ『經濟民主主義』ドイツ版一九二八年一三頁）。曾つてはベルンシユタインの修正主義と鬪つて正統マルクス主義を守つたカウツキーは、今や唯物史觀を修正して、經濟民主主義へと墜落をするのである。

四　國際プロレタリアートの標準版

民衆版第三卷と前後して、吾々はリヤザーノフ版マルクス＝エンゲルス全集の新刊三册を手にした。一つは第一部第一卷第二分册（マルクスの詩、劇、民謠集、拔き書き、當時の人々の書簡等）であり、もう一つは第三部書簡集第一卷（マルクス＝エンゲルス往復書簡）である。ドイツ社會民主黨が『資本論』の民衆化を努めてゐる間にも、モスカウのマルクス＝エンゲルス研究所は全集の科學的＝批判的刊行の計畫をどし／＼と進めて、全國的マルクス＝エンゲルス研究の資料を提供してゐるのである。

かうしてリヤザーノフ版全集の刊行計畫が進行するにつれ、吾々は、ドイツ社會民主黨がマルクス＝エンゲルスの原文と文獻的遺產との公表に當つて亂棒な黨派的編纂振りを發揮してゐたことを知るやうになつた。編纂者達は、マルクス＝エンゲルスの原稿や書簡を公表する際に、黨派の都合や個人的主觀的な理由で勝手に原文を切り取つたり縮めたり或は一文全體を默殺して、眞實な研究の妨害をして來たのである。こゝに二三の例――

コミンターン第五回大會（一九二四年六月―七月）の第三十回會議（七月七日）で、リヤザーノフは、マルクスの『フランスに於ける階級鬪爭』へのエンゲルス序文がいかに切り取られてゐるかを報告した。ベルンシユタインその他の人々は、エンゲルスがその晩年に日和見主義者になつたと言つてゐた。ディーツ版のエンゲルス序文にはかうある。『……一八四八年以來新たに建設された諸大都市の區には長いまつすぐな廣い街路が敷設されて、まるで新式の彈丸と銃との效力にも

つて來いである。ベルリンの北區や東區の新城街の周壁で防塞戰をやらうなどゝいふ革命家は氣違ひに違ひあるまいとこゝで切れてゐるので、このまゝではベルンシュタインの修正主義にはもつて來いである。ところがベルンシュタインが[illegible]ひ忘れてゐたエンゲルス原稿がリヤザーノフの手に入つて見ると、それに續いてすぐから書いてあるのだ。今では將來に於て市街戰はもはや何の役割も演じないだらうといふことになるか？斷じて否だ。今はたゞ、一八四八年以來諸條件が市民戰士にとつて遙かに不利になり、軍隊にとつて遙かに有利になつた、といふだけのことである。」そしてすぐそれに續いて、いかなる時期に市街戰が起るだらうかをも書いてゐるのである。

もう一つの例。メーリング編纂の「マルクス、エンゲルス及びラサールの文獻的遺產（一八四九—一八六二年）」から「全四册一九〇二年は、科學的全集の出版を待つ間の準備的著作集だが、メーリングは、「精確なテキストを提供する」（序九頁）と言ひながら、原文を色々に加工したり切斷したり省略したりして、原文の忠實な再用といふ任務を裏切つてしまつた。

もう一つの例、今度リヤザーノフ版全集第三部書簡集の第一卷が出て見ると、ベーベル（編纂には參加せず）とベルンシュタイン（主として編纂方針を立つ）との編纂した「マルクス＝エンゲルス往復書簡」全四册にも同樣のことがあつたのが分る。一例をあげると、ベルンシュタインは一八四五年三月十七日のエンゲルス書簡を削り去つた。實に無謀なことをしたものだ。この書簡のなかで、エンゲルスは彼と彼の父との關係をまざ〳〵と描き出してゐる。「僕のところへ手紙が來ると、私がそれを受けとる前に、彼は四方八方から嗅ぎまはす。それがみんな共產主義者の手紙だと知つてゐるので、その度毎にいつでも、信心ぶつた泣きつらだ。氣違ひになりさうだ。僕が外出する、例の同じ面。僕が自分の室で机に向つて勉強する、勿論共產主義だ、それは皆知つてゐる——例の同じ面。僕は喰ふことも飮むことも寢ることも屁をひることもできぬ……（以下略す）」と。これでこそ家庭に於ける彼と父との間の關係は極くはつきりして來る。ベルンシュタインはこの書簡を默殺したことによつて、エンゲルス傳記研究にこの一資料を拒み、革命家とその父との關係（大抵は同論

に行かない）についての一資料を拒んだのである。

それだけに吾々は右の『全國際プロレタリアートにとつての標準版』の進行をよろこぶと共に、一日も早くその版の『資本論』の部分が刊行されるのを待つ者である。サヴエート同盟は、その國民經濟建設五ケ年計畫によつて物質的生産の急テムポの增進を實現しつゝあるばかりでなく、更らに書籍出版までをも五ケ年計畫のなかに包括してゐる。あらゆるデマゴギーにも拘はらず、吾々は國際プロレタリアートの標準『資本論』を手にするときが遠くないと考へる。それはマルクス研究の一新時期を劃するだけでなく、國際プロレタリアートの城塞たるサヴエート同盟の强固化の現はれなのである。

落選記錄

選擧鬪爭の跡を顧みて

河上　肇

私の屬する勞農黨は議會主義に立脚してゐない、それは大衆的階級鬪爭をその旗じるしとしてゐる、そして斯かる大衆的鬪爭の一場面として選擧戰をも戰ふのである。だから勞農黨の公認候補者として立つた私は、自然、當選第一主義を採るわけに行かなかつた。しかしこのことは、私の氣質には頗る適合してゐた。

私はそれ自身を目的とする仕事には相當に慣れてゐる。嘗て學校の教師をしてゐた頃は、早く學位を貰ひたいとか、早く教授に昇進したいとか、いふやうな考で、學問することを、常に自ら固く戒めてゐた。そして學生に向つても、努めて點取り主義の勉強をさせないやうに、心掛けたつもりである。私は書齋から出てまだ間がなかつたので、右のやうな心持をそのまゝ選擧戰場裏に持ち込んだ。

それで私は、殆んど選擧戰の全期間を通じ、鬪爭それ自身を目的とする意識によつて占領されてゐた。選擧鬪爭といふ以上當選を目標としなければならぬ筈なのだが、私はたゞ自分の信じてゐる階級鬪爭の理論を宣傳することに夢中になつてゐた。ところで一通りその理論を說明しようと思へば、どうしても四十分から五十分の時間を要した。それで私は演說のために、最初のうちは一夜に二會場しか有たず、後になつても（最後の二日を除く外）三會場しか有たなかつた。そのために演說會の會數では、すべての候補者に比べて、私のが最も少かつた。たゞ一會場へ集めえた聽衆の數が、いつも最大であつたために、私は前後を通じて、約五萬人を動員することが出來た。

私はこれらの聽衆に向つて、少くとも最初のうちは、學校教師が學生に講義するやうな氣持で演說した。最初しばらくは、原稿をもつてやつた。選擧戰に原稿を持ち出すなどいふことは、その筋の黑人から見たら甚だ滑稽なことに相違ないのだが、なるべく多くの內容を、なるべく簡單に、しかも出來るだけ正確に表現するためには、原稿によらなければならぬやうに感じてゐたのだ。

私はまた場末の偏僻な會場で、聽衆が寄り上がつてゐないやうな場合には、大きな聲を

出す必要がないので、安心したやうな氣持で最も深切に話をすることが出來た。さういつたやうな場合には、私は全く一個の學校教師であつたに相違ない。自然、聽衆が少ければ私の費す時間は逆比例に多くなると云ふやうな場合があつた。

會場を三つ有つやうになつてからは、最後の會場を簡單に切り上げ勝ちであつた。如何にも寒い夜を、聽衆諸君は、場所によつては土間に蓆を敷いただけの會場に、坐つてゐるので、長くしやべつては閉口されるだらうとの氣兼ねから、さうしたのであるが、折角待つてゐた聽衆から不平を聽かされるやうになつてから、やつとさういふ下手なことも已めた。

何にしても、私にはまだ書齋人としての癖が拔け切らずにをり、大衆と共に闘ひ大衆と共に語るといふ氣魄が缺けてゐたために、少くとも最初のうちは、演説によつて票を得ることが出來なかつたであらうと思ふ。

それに今度の選擧戰では、候補者たりし私は、嘗て經驗しなかつた程度の言論の自由を得たので、ついそれに釣り込まれて、批判的理論の宣傳に沒頭した傾きもある。そのために選擧には敗けたに違ひないが、しかし萬の大衆に蒔き散らした種子のうちのいくつかは、他日やがて何等かの實を結ぶであらうから、私は『落選』しても必ずしも『敗戰』したと思はつてゐない。

或る大新聞の記者は、『河上は當落を問題としてゐないと言ふさうだが、當落を問題としない選擧戰といふことは、俗人には理解し兼ねる』といふやうな批評をした。併し少くともマルクス主義者には、當落を問題としない選擧鬪爭が、考へられもし行はれもする餘地がありうるのだ。

私はまた、演壇の上から屢々次の如く述べた。『無産黨の議員を十名や二十名議會に送り出したからといつて、無産階級の生活が俄にどうなるものでもない。もし諸君が何年目かに行はれる總選擧の際に、無産黨の候補者に向つて一票を投ずるといふだけのことで、——そんな簡單な手數を費しただけで、諸君の生活が改造されるのなら、無産階級の生活の改造といふことは實に譯もないことなのだがもしさう考へたなら、それは大變な間違ひである。それは丁度、稻荷神社に參詣して、何程かの賽錢をあげておくと、商賣が繁昌するものだと、迷信してゐるのと同じである。吾々の生活の改造は、實は荊棘に充ち〳〵た苦難の道を通り拔けなければ、決して實現されえないのである。』

こんな風な演説をすることは、投票を贏ち取る上に不利であつた。若干の聽衆には、河上は無産黨の候補者として立つてゐるにも拘らず、無産黨から代議士を出すことには何の意義もないと言つてゐるかに響いたらしい。どういふ意義があるかと云ふことは、更に引續き說明したつもりだが、自分の言つたことが殘らず聽衆の頭へはいる筈はないのだ。

また或る人々には、私の演説の調子が『私に投票したい者はされるがよし、いやな者はされぬがよい』といふ風に聞こへたさうだ。選擧が濟んでから後、さういふことのために投票を見合はしたといふ若干の實例を耳にした。これには、私が意識的に泣き落しを避けたことも、一つの原因となつてゐるだらうと思ふ。

「總じてものを懇願するといふ類のことは、

ひどく私の氣質に合はぬことなのだ。だから私は有權者に向つて、努めてさういふ態度を避けた。元來、今日の選擧では、金錢による物質的の買收と泣き落しによる精神的の買收とが、有力なる武器となつてゐる。なかんづく小ブルヂョアは、金錢による買收には從らぬにしても、泣き落しによる買收には可なりもろいやうだ。これはどういふ譯かといへば、平生めつたに威張ることのできない者でも、選擧の場合になると、何人かの候補者が立つてゐるものだから、『おれはおれの氣に入つた候補者に投票してやるぞ』といふ氣持になつて、心の底でちよつと威張つたやうな心持を感じることができる。そこへ持つて來て、相當に社會的の經歷ある候補者が、演壇に上ぼる前に先づ平土間でお辭儀をしてくれたり、あるひは演壇の上から泣くが如く訴ふるが如くにして同情を乞うたりなどすると、意識の低い有權者は、先方が自分を高いところへ持ち上げてくれたやうな感じを起して、心の底に快感を覺えるのである。そしてその刹那に精神的買收に引つ掛かるのである。

私はこういふ泣き落しを絶對に避けた。そのために、私の態度が不眞面目に見えたり、不遜に感じられたり、したこともあるやうだ。しかし之は致方がない。

こういふ風に許いてくれれば、いろ〳〵言ひ譯が立つやうだが、しかし何にしても私の熱意と努力が足りなかつたことは、自ら承認せざるをえない。私は腹の底では、議會へ送り出されるから、そこで出來うるかぎりの努力はするつもりだが、しかし強いて議會へ送り込まれなくても、爲すべき仕事は充分にある』といふやうに考へてゐた。そのために、當選圈內を目指して有らゆる鬪爭場面を最高度に利用するといふ用意を怠つたと思ふ。自分では全力を擧げて戰つた積りであつたが、今から考へると、不充分な點が少からずあつた。このことは、我が勞農黨の命令によつて立候補した者として、——勞農黨の候補公認[illegible]はいつでも[illegible]——私は候補に對し[illegible]ことを考へてゐるが、しかし今となつては、その[illegible]に[illegible]はない。

大衆を教育するつもりで戰つた私は、選擧を濟ました後、自分自身が教育されたことを發見した。これは私の選擧區內に[illegible]せざりし意外の收穫である。東京および京都を通じて殆んど三十年に近いあひだ學校教師の生活をして來た私は、容易に[illegible]人としての臭味を脱することが出來なかつた。だがこの選擧戰のおかげで、おそらく一二年を要したであらうほどの訓練を、二十日間に受けてしまつたやうに感じてゐる。——私はこの新たに得たる元氣をもつて、更に新たなる鬪爭に發足せねばならぬ。

敗戰を語る

加藤勘十

今、世間は選擧の興奮から醒めて靜かに其の戰績について批判說明を試みつゝある。私

は東京五區において、同志諸君から送られた一戰士として闘爭の三旬を過ごし、然かも戰ひ敗れて同志諸君の期待に背いた敗慘の兒である。然しながら、私は戰ひ敗れたりと雖も闘爭の現實を通じて、大衆の意識の偉大なる成長を把握することが出來、且つ敗戰の苦汁を喫することが、將來へのより勇敢なる闘爭を約束するものであることを識るとき、私は誰に臆することなき敗戰を語ことが出來、同志諸君も亦私の自己批判に對して諒としてくれるであらうことを信ずる。

私の闘爭の舞臺であつた東京第五區は色々な意味で全國的に視聽を聳だたしめた。就中大山(勞農黨)、松岡(社民黨)兩君と私との鼎立戰が一層の興味を集中したことは爭はれない事實である。私は戰ひの冒頭に於いて、無產三黨が各自己の立場を意識しつゝ、共同の敵金融資本の代辯者民政黨、政友會に一致して當つたならば、現實政治に優れたる批判力を有するインテゲリンチヤと、組織勞働者を比較的多量にもつ東京五區に於いては、支配階級の壓力に對して被抑壓大衆の抗爭力を正當的に測定し得る絕好の機會であることを信じ、我が日本大衆黨から提唱した選擧協定(地區の決定、共通のスローガン、他黨排擊の除去等々)が最少限度にでも成立することを希つたのであるが、それすら協定不成立に終つて亂軍の儀で戰ひに臨むことになつた。それでも尙且つ私共は、對立意識の强烈なる諸君の不平を抑へて、他黨(勞農、社民)排擊を口にせざることを菊川事務長の注意深い警告に基いて實行して來た。(後に至つて勞農、社民の演說會等で餘りにも聽くに堪へない惡罵が發せられたのに激昂して一二の同志によつてそれに對する駁論が發せられたさうであるが)大山氏が依然として獨善主義の幻に囚はれ、他黨排擊を高調し、社民黨が他黨中傷のビラを配布してゐるなかに、私としては終始一貫、一語の對立無產黨に對する批評を試みることなく、全力を盡してブルジョア政黨の暴露のために闘つて來たことを、戰ひすんだ今日において私かに愉快とする處である。只、無產黨亂軍のために、正常的に測り得べかりし被抑壓大衆の反抗力を無條件に測定し得なかつたことを遺憾とするものである。

さりながら、大山氏が大衆の勝利を高調せられた通り(この點鈴木文治氏は民衆の無自覺を慨歎して居られるが何んと皮肉ではないか)私は明かなる大衆の意識水準の高揚と現實政治に對する批判力の透徹とを識るを得て我々の今後の闘爭に巨大なる光明を點ぜられたものとして、この上なき喜びを感ずるものである。

勞農黨の運命を賭けた大山氏と社民黨の實質的な代表者である松岡氏と、この有力なる兩君の間に介在して裸一貫の私が敗れたりと雖も恥かしからぬ戰績を收め得られたとは、全く同志諸君の涙ぐましきまでに眞劍なる努力と精神的物質的の援助と、大衆諸君の透徹したる批判力の賜物である。私は今度の選擧戰において百十八回(立會演說を含む)の演說會(聽衆動員數約九萬人)と選擧郵便による挨拶狀と四萬枚のはがきを發送することを得たが、これに要した費用は勿論選擧費用全體としては約八千二百餘圓(精細な分類は菊川君が扱つて其の報告書は目下印刷中である)を費やしてゐるのが、裸一貫の勞働組合運動の一戰士に過ぎない私に、斯の莫大な金が、あらう筈がない。この多額な金は各組合、黨各

[illegible]部の村議會議員當選者の選擧に我等の候補を推[illegible]支持せられる大衆諸君の努力である。而して寄附者の數は約二千三百人を算へ、其の氏名（組合、黨關係の分は一括して）は金額と共に、一々事務所に掲示して明かにしたる處である。

この同志諸君の血のにじむ尊い金によつて戰ひ得られた私は、感激に全身の血の高鳴りを覺え身の光榮を感ずると共に、鬪爭に對して大きな責任を痛感するものである。私の鬪爭に對する責任が今後如何に展開せられるかは、私の階級的良心の問題であつて、偏に客觀的に評價せらるべきもので、自ら彼これ云ふべきものではないが、私は私の過去十有餘年の鬪爭を顧みて、徴塵も良心的苦痛を感じないことをもつて、自らの大きな慰めとしてゐる。この私の過去の鬪爭に對する態度は當然に將來への態度でなければならぬ。

今や、人々は其の生活の環境につれて多少の程度の差こそあれ、資本主義最後の發展相たる帝國主義の重壓下に喘ぎ苦しみつゝある。其處に歴史を織りなすプロレタリアの鬪爭の、峻しいが未來に明るさを約束された一筋道がある。この道こそ、我等の進むべき唯一の道である。私は同志諸君並に私に絶大なる支持を與へられた大衆諸君に、この只一筋の道へ[illegible]て私の責任を果したい[illegible]

選擧心理の大浪

内ケ崎作三郎

敗者は兵を談ぜずとの諺がある。敗戰には敗戰の理由がある。實は默して是を味ふ可きである。此體驗は獨り敗者に與へられた特權である。此特權を一般の讀者に分ち與へよといふことは無理な註文である。人生は波瀾萬疊起伏常なきものである。或る時は峰の頂きに立ち、或る時は谷底に墜ちる。第三者より見れば或は成、或は敗、或は利、或は鈍、然しながら是を主觀的に見れば成必じも貴からず、敗必ずしもいやしからず、利も鈍も各一長一短を藏してゐる。されば勝つて誇らず、敗れて屈せざるを兵家の原則とすべきであらう。從つて私は今度の總選擧に於て多大の教訓を得た。さればとて此教訓を全部後悔するのは私の忍ぶ能はざる處である。只天知る、地知る、人知るといはんのみ。然れども敗戰の原因を尋ねる讀者の心に對して全然默することが出來ない。極めて大まかに二三の點を述べて知己先輩同志友人に對して陳謝の意を表したい。

私は昭和二年六月末日以來民政黨宮城支部長であるが、常に東京に居住するが故に支部長は名目に過ぎない。當時曾て憲政會宮城支部長にして重鎭たる村松龜一郎氏が存命中であつたから私が不在でも村松翁が萬事世話された。が翁は昭和三年の秋逝去された。それ以來支部長としての責任は一層重くなつた。昭和三年二月の總選擧には田中内閣のために吾々は野黨として猛烈なる壓迫干渉を受けた。然し我が同志の結束堅きと奮戰苦鬪とに

よつて、一區定員五名に對して當選者は藤澤氏と私及び政友會の菅原、中島君、中立の守屋君であつた。第二區は定員三名に對して山本、菅原兩君(民政黨公認)及び小山君(中立、後に民政黨へ入黨)が當選した。政友會は四人立つたが全敗し民政黨の全勝となつた。村松翁が仙臺にあつて支部長代理として采配を振はれたことがこの勝利の原因である。

然るに今度の選擧に於ては仙臺に於て支部長代理として全縣の形勢を見通して働く可き適當な人を見出し兼ねたので、五人の委員をあげたのである。故に私は自分自らの選擧に沒頭すると共に目を全縣に配らねばならなかつた。而して第一區民政黨は藤澤、長谷川君及び私を公認し、政友會は菅原、中島、守屋三君を公認し、社民黨より赤松君、宮城大衆黨より菊池君、縣會議長佐々木君が中立として立候補した。第二區に於て民政黨は菅原、小山、齋藤三君を公認し、村松君が非公認として立候補した。政友會は前回の敗戰にこりて星、大石二君のみを公認し、後れて内海君が非公認として政友會よりたつた。よつて戰はざる前に民政黨は不利になつた。

又一方に於て第一區それ自體は如何であるかといへば、政友會の候補者である菅原君は當選十數回の古強者であり、中島、守屋兩君共に新進氣鋭の人物である。又佐々木君は中立を標榜したれども志田郡に於て有力な地盤を有し、且つ地方財閥の背景を有して侮る可からざる勢力を有してゐた。私は支部長として民政黨の公認候補者六人を當選せしめねばならないと覺悟した。それは支部長として當然なす可き責任と考へた。然るに第二區に於て公認非公認の紛爭は終始繼續した。私は少なからずこれに思ひを傷めた。又第一區に於て民政黨三人揃つて當選するは容易ならざる仕事と觀念した。政友、中立、無產黨六人の候補者中四人に打勝たねばならない、誠に至難の事である。然し至難であるがこれを實行せねばならない。何んとなれば今度の總選擧は政民天下分目の戰である。民政、政友の何れが第一黨になるかの事である。要するに私は支部長としても民政黨の頭數を揃へねばならない。それには三人が當選せねばならない。三人の中一番弱いのは、長谷川君と世間で考へた。長谷川君を當選圏内に入れるには第一區より民政の三人揃つて當選する空氣を造ることが私の責任と考へ、又黨そのものに對する責任なりと痛切に感じた。特に私は内務省にあつて安達内相の殆ど狂人的な努力によつて晝夜兼行心膽をくだいて努力せられつつある光景を見ては、自ら駑鈍に鞭打つてこれにあたらねばならないと考へた

私は卅日仙臺に着き第一區石卷町に齋藤君の立候補第一聲の演説會に應援し、午後仙臺に歸り仙臺座にて自分の第一聲を擧げた。聽衆三千有餘立錐の餘地なく大盛會であつた。應援辯士早大の林博士は民政黨と政友會の政策を比較して第三者の立場より民政黨を禮讃した。私は第一區より三人揃つて當選させて貰ひたい事を訴へた。かくして一區三人といふ空氣が出來あがつたのである。言論戰は各地に於いて壓倒的多數であつた爲、内ヶ崎は大丈夫だといひふらした。又藤澤氏は仙南四郡に於て牢固として抜く可からざる地盤を有し、且つ前回には最高點で當選してゐるから大丈夫である。心にかゝるのは長谷川君である。長谷川君をだせといふ空氣が時の進むに從つて益々濃厚となり、選擧期日の前日あた

り。それが沖浪の如くに現はれた、これは誰しも豫想しなかつた事であつて、殊に選舉心理を研究するものは大に注目す可き現象であると思ふ。

又今度藤澤氏は本部の筆頭總務にして選舉委員長なるが故に、選舉戰の中頃より歸縣されたに過ぎない。私は又本部の命により岩手縣の應援をせねばならなかつた。この二つの事情は私の運動を一層困難ならしめた。その上仙臺市及びその附近は『長谷川を助けよ』との空氣が濃厚となつた。私もそれに同意してゐた。然し始めから自分が落選する覺悟は無論なかつた。三人當選せられるとの計算であつた。それが不思議な選舉心理によつて狂ひが生じた。私の意外なる落選は仙臺及び宮城縣民政黨員諸君に、非常なショックを與へた。何百といふ電報、手紙は或は私を鞭達し慰安し或は問責するのである。何れも血あり涙ある文字である。私は長谷川君の最高點當選を非常に喜ぶのである。同君は大正十三年私を最初の立候補に擁立し、命がけの努力をした私の恩人である。而して前回には落選したのである。私は自己を犠牲にしても同君を當選させたことを、個人としては大に滿足するのである。只公人としては自己の當選を必ずしも不可能でなかつたのである。作戰を誤りたるためである。これは必ずしも選舉事務長委員應援者諸君の責任ではない。私の多忙な生活が充分に水を漏らさぬ作戰をなさしめる暇がなかつたのであつた。これ私が敗戰の主なる原因である。誰をもうらむ事は出來ない。

若し民政黨が全體として敗れた場合には自分は腹を切らねばならない。大勝を博したことはもつけの幸である。而して民政黨の勝利は各地に於いて先輩が後進を助けたといふことが一つの原因である。私のは少し藥がきゝすぎたのである。黨の先輩は禍を轉じて福とせよといつてくれるのである。只大正十三年以來、私を支持し後援し來れる幾萬の同志及び我が選舉區の熱心なる同情者に對して何の言葉をもつて謝す可きかを知らないのである。選舉心理が醸る大きな波を打つことは豫想だにもしなかつたことであつて、全く天運と見るより他はない。「私が大丈夫と思つて……」といつて事務所に來てくれた人が何十何百を數へる程である。私は此等の多くの同情と厚誼に對して謝す可き言葉なく、私の不德の致す處と罪を天下に謝すのである。唯個人として考へれば、大正十三年以來餘りに多忙なりし生活から脫して幾分なりとも修養と研究との時間の與へられたことを喜ぶのである。先哲の曰く『弱き時に強し』と。願くはこの試錬に處して自らの魯鈍に鞭達して向上の進路を辿らんことを期するのである。（五・三・二七）

「長老組」の合同運動

堺　利　彦

私は見事に落選した。自分一個としては、笑つても濟まされる。又實際、笑つてもよい。然し毎日毎夜、一生懸命、その爲に働いて呉れられた人達、いろ

くに手傳つたり、心配したり、同情したり、望みをかけたりして吳れられた人達の事を思ふ時、何としても相濟まない、申譯のない、面目ない氣持がする。

然らば一體、私はどうすればいゝのか。私は深く考へて居る暇もない。私は只、差當り、この無産黨の――殆んど全滅ともいふべき――大失敗を、むしろ却つて絶好の機會として、こゝに無産黨大合同の機運を作りいだす事が最も切迫した急務だと痛感する。從つて私は只その爲に、出來るだけ多く役立つ事が、現在に於ける自分の任務であり職分であると考へる。それが自分らの過ちに對する、せめてもの償ひだと考へる。

それについて、何よりも先づ私の最も深く反省せねばならぬと思ふ事は、自分個人としても、又自分の屬する黨派としても、善く私心私情から脫却して居るか否かの點である。尤も、人は皆それぞれの立場に依つて、必然的に、多少とも、私心私情と目さるべきものを持つて居る筈のものではあるだらうが、然しそれにしても、自ら常に深く反省する場合と、その反省を忘れて居る場合とでは、餘ほどの差異が生ずると思ふ。だから今日の場合（いつの場合でもソウではあるが、殊に今日の場合）、我々は何よりも先づ、その深い反省の上に働きたいと思ふ。

各黨派の直接の代表者、或は執行部の常任機關たる人々は、兎かく何處でも行きがゝりを全く棄て得ない傾向が多い。行きがゝりを全く棄てよと云ふのは無理であらうが、大抵の事はアッサリ放擲するといふ決心と覺悟がなくては、大きな改革が出來るものではない。そこで今日の場合、私は年寄役として、先づ年寄同志の間に少し話しあつて見たいと考へた。

私は先づ社民黨の『常言』安部磯雄君を訪問した。安部君はさすがに、いつもの通り私心を脫した美しい態度を以て私を迎へて吳れられた。そして安部君に個人としてなら、勞農黨とでも一緒に合同を議する積りだと云はれた。私は多くを語らないで、先づ合同の希望を認め得た如くに感じた。次に私は、安部君との談話にヒントを得て、新議員松谷與二郎君を訪問した。松谷君は極めて淡白な態度を以て、私等と共に合同の爲に努力すべき事を約された。三人は皆多少とも超然たる地位に立つ『長老』（或は半隱居役）であつた。斯くて三人は、多少とも、それぞれの黨から獨立して、個人的の懇談を重ねるといふ關係に入つた。

この長老組の懇談會が如何樣に發展するかは固より豫測の限りでない。我々は一定のプランを持つて進まうとする者ではなく、只だ自然の發展に從つて、成るべく多く合同の爲に役立たうと切望するに過ぎない。然し我々に多くの私心私情が存しない以上、必ずこれが相當の效果を擧げ得る事は疑ひないと信ずる。

この記事が雜誌の上に現はれる頃には、この長老會の其後の發展が既に世上の知る所となつて居るだらう。或はそれが詰らなく立消となつて居るかも知れない。或は隨分ヘマな成行として、物笑ひの種に成つて居まいにも限らない。然しそれはいづれにしても、右に記しただけの事は、兎に角歷史上の一事實である。私はそれを書きとめて置いて恥かしくはないと考へて居る。

今日に於ける私の希望から云へば、こうし

た浅白な人々の半ば偶然的行為が機縁となり、中心となつて、諸党派の内外に於ける多くの聡明なる人々を自然に団結（或は聯絡）せしめ、そこに相當權威のある無産階級的輿論を作り出だし、それに依つて党内の執行部、或は實務的の有力者に影響を及ぼし、結局その邊の動きからして遂に漸く大合同の機運が迫り出だす事にでもなればと、半ば空想的に考へて居る。

今日の諸党派内に於ける、執行部の直接當局者は、私共の見る所に依れば、今のところ大抵、迚も大合同を決行し、若しくば促進し得る地位に居ないらしく思はれる。然し党内外に於ける大衆の切實なる要望が大合同に在ることは既に争はれない事實である。そうすれば、諸党派がいつか遂にその大衆の力に押されて、大合同を實現させられるに至る事は無論だと考へられるが、只その道程に於ける一個の附録的（然しながら場合に依つては相當價値のある）事件として、右の如き半ば偶然的（或は半ば意識的）の合同運動を生ずるのも、亦自然の成行かと考へられる。

何しろ、私共の見る所に依れば、合同實現の為には、もう合同戦[illegible]止合に議決される事が[illegible]とする。[illegible]の為には、新聞雑誌界の輿論たるも一つの[illegible]有力な判載であり、又謂ゆる識者有志間の意見なり批評なりが、それに對して多大の影響力を持つ事も無論である。そしてそれらの輿論や意見を導き出だす一つの方法手段として、謂ゆる長老組の運動の如きものが、種々なる事情の下に於て、決して少なからぬ效果を持つことを信ずるのである。

こうした考へ方をして居る私共として、今のところ最もイヤに思ひ、苦々しく感ずるの[illegible]實[illegible]者、[illegible]的に、[illegible]的に、合同戦線の先手を打つ事にのみ腐心して、實際上には寧ろ意識的に合同を阻止し妨害する連中である。

兎にかく今日の情勢の下に於いて、その標榜する理由の如何に係はらず、その外観の如何に係はらず、實質上分裂主義の態度を取り實際上、合同反對の行動を取る者共に對しては、我々は之を目して無産階級運動の賊と呼ぶに躊躇しない。（二月二十日）

足尾を死守して

麻　生　久

一

第二次普選の総選挙の幕が閉された、此戦ひは我々無産政党運動者にとつては實に感慨深い戦ひであつた。其中から幾多の教訓と将来に對する方針とが深刻に暗示して現れてゐる。私一個の戦ひはどうであつたらう。而して又、無産政党運動全體は今回の戦に依つて何ものを贏ち得たであらう。

二

今回の総選挙に於て、私一個の立場を云ふ

ならば、私には少しの遺憾もない。戰ひは敗れた樣に見える。投票は當選に足りなかつたに相違ない。併し私は私の此敗れたる戰の裡に我々の將來の正しき運動の行く道と確乎たる勝利とを豫見する事が出來るからである。

今度の總選擧の最初に當つて、或る者は私に對して、東京の當選し易かるべきを豫想して足尾を棄てゝ東京に來るべきを說いた。其論據とする處は、今日の場合、私が日本大衆黨の執行委員長である點からして、何はともあれ當選しなければならぬと云ふのである。

それも一理である。

併し私の心には夫れを否定する強い或る物があつた。

無產階級運動は永い未來の運動である。目前の成功を急ぐよりも、永い將來に對する正しき確固たる勝利に向つて進まねばならぬ。足尾の死守を棄てると云ふ事は何を意味するであらうか。

それは第一に、困難を避けると云ふ事である。困難に當面してそれを避けて決して困難な無產階級解放運動の成功はあり得ない。これは目前の利害問題ではなくして根本的な精神の問題である。無產階級運動は目前の利害よりも未だ此精神を守る事の方が重要である。當面せる困難に向つての直進的な克服、これが第一義的の重要性である。

第二には第一回普選總選擧に於て田中反動內閣の彈壓にやつつけられながらも尙ほ過去二ケ年間栃木を死守せる同志を斷じて見殺しに出來ないと云ふ一點である。たとへ、東京で當選しても、そこには大きな空虛がある。栃木の同志達は死んで行かねばならぬ。見棄てられねばならぬ。私には死んでもそんな事は出來ない。常に身を犧牲にして行かなければならぬ我等の運動に於て、指導的立場に立つ者が、單なる目前の巧利を追ふて、同志を棄て去るならば、誰か今後進んで一身の犧牲をいさぎよくするであらう。一度共に困苦の裡に戰ひ來つた者は、それを克服するまで共に苦勞しなければならぬ。それは巧利を追ふて目前の當選をかち得るよりも黨の眞の發達にとつてはより深刻により大きい事だと私は信じてゐる。

第三に、目前當選し易きを以て我等が農村を棄てゝ都會に走るならば、何時の日か虐げられたる農村の運動の進展を見る事が出來るであらう。それは單に農村の運動を進展せしめないばかりではない。農村に眞に根を下さない無產政黨の運動は永久に力強い大なる運動となり得ない。永き將來を考ふる時は、忍耐と困難とに堪えて、土に食ひ入る農村の運動に力を入れて行かなければ、無產政黨運動のより確固たるより偉大なる進展はあり得ない。此意味に於ても私は斷じて栃木の一區を棄て去る事は不可と考へたのである。

私は二度の敗戰を覺悟して栃木の一區に再戰した。

私は當選に於て既成政黨に敗れた。然し戰ひに於ては明かに勝つた。

此前の得票五千八百十票は、今度一躍殆んど倍加して、一萬九百六票となつた。そして敵の心臟を寒からしめた。敵は私の得票を八千票以上には見てゐなかつたのである。そして敗戰の中から三度目の戰ひの日の勝利の光りが輝いてゐる。併し敵はこれに對して如何ともする事が出來ない。

二ケ年間敵の蹂躙に委せられた其後の足尾の光景よ！　一千餘の坑夫達は漸くにして借

た入れたせまい會場の外に、しん／＼として降りしきる雪をあびながら夜十一時近くまでこらえながら我等の演說を聞いて呉れた。

會社の思惑や彈壓を蹴飛ばして、『顔さへ見れば』と云つて、私のそばに寄つて來た坑夫達の双眼には涙が光つて居た。私も思はず双眼をうるませざるを得なかつた。

『麻生君は足尾から百か百五十以上あてにしたら計算が狂ひますよ』と既成政黨は冷かした。併し足尾も亦壓しひしがれた屈伏の裡に二年前の票五百餘を死守して呉れた。これ丈けでも私にとつては大きな感謝である。

民政黨農林政務次官高田耘平閣下の農村に於ける悲鳴を見よ！

『農村を亡ぼすものは日本大衆黨なり、農民代表高田耘平』

總選擧投票日の數日前、耘平閣下は大人氣なくも、新聞廣告までして、大衆黨侵入の防止に必死となつた。それ程、我等の運動は農村を動かした。

耘平閣下の金城湯地、那須郡の私の得票は前回の一千一百票から三千七百餘票に躍進した。同志達は、泥濘の中を積雪の中を自轉車をかついで熱心に運動したのである。

戰ひ敗れたる廿六日夜の宇都宮に於ける演說會の光景よ！　恐らく私にとつては一生忘れる事の出來ない感銘深い一夜であつた。

劇場、宮科座に集まる者四千、劇場も破壞された。場内は落選者に對する萬歲を叫び續けた。報告演說會終るも四千の聽衆は去らず遂々私を舞臺に引つ張り出して胴上げした。千餘の熱狂せる群衆は事務所に押しかけて大衆黨の萬歲を叫んで尚ほ去らず、私は遂に此大群集に送られて停車場から東京に萬歲裡に送られた。そして私は此敗戰者に對して熱狂せる人々に對して三度の戰ひを約束した。

戰は敗けたのか勝つたのか！

戰には明かに勝つた。其後に於て續々として檢擧されつゝある既成政黨のバイシユウの違反を見よ！

民衆の勝利は此清く正しき根強き吾等の運動の裡に一歩／＼と築かれて行く。

私は東京に兇がれて當選したよりも栃木に於て敗れたるを衷心から喜び感謝するものである。斯くてこそ、無產階級運動の偉大なる力強き根強き發展がある。

今から三年前、宇都宮の[illegible]私と田中内閣の存在を賭けた一つの代表者であつた。

當時大山郁夫氏は、發言した。

『百度敗れても百度香川に來つて君等と共に戰ひ香川を奪還するであらう』と、

私は其言を實に壯とした。私は其時此壯なる言をなすを得なかつた。其時私には悲しい哉その決意が出來なかつた。思はざりき當選主義を輕蔑し、闘爭を高調し、所謂左翼を標榜して他をエセ無產黨とのゝしる大山郁夫氏が、黨議の名にかくれて百度どころか、たゞの一度で香川を逃げ出して東京に割り込まんとは。あてにならぬは學者の言である。

私は空氣に乘る運動の中に一喜一憂するよりも更に今後幾年間、ブルジョアに依つて踏みかためられた農村の固き土に食ひ入つて其土を深く耕さう。それが私の誇りであり衷心のよろこびである。

三

今回の戰ひに無產黨は敗れたと云ふ。併しこれは敗るゝが當然であつたかも知れない。

第一回普選の浮いた空氣に乘つて當選せる者も多々あつたであらう。無產運動戰線の分裂も敗戰の因をなして居るであらう。然し今回の敗戰の裡に將來に對するより偉大な勝利の暗示が含まれてゐる。私達は我々の運動をもつと深刻に考へるべき好機會に到達した事を悅ぶ。目前の砂上の勝利よりも、深刻な反省の上に除々として築かれる確固たる步みの裡により偉大なる勝利を見る事が出來る。

私は如何なる場合でも失望を感じない。我々の運動は歷史の流れに棹さした必然の運動である。一高一低、其間に道は自から開かれて行く、たゞ私達には、迷はざる不撓不屈の正しき運動のみが必要だ。

選擧後の感想

安部磯雄

昨年の後半期に起つた疑獄事件は我國のため痛嘆すべきことであつたけれども、同時にこれが政治の革新を促進する一大轉機となるのではないかとも考へられた。既成政黨の側からは疑獄事件の原因が選擧のため多額の費用を要するにあることが强調されたゝめ、幾多の新聞社は座談會を開きて選擧革正に關する多方面の人々の意見を聽くことになつた。其結果選擧法を改正して出來得るだけ候補者の負擔を輕からしむるため選擧公營を實行すべしといふ意見までが眞面目に唱へられるようになつた。これは確に我選擧界に對して多少の光明を與へるものである。然し我政治界はこれによりて正道に立返ることが出來るであらうか、私はこれを信ずることが出來ない。

選擧公營といふことには次の如きことが考へられる。候補者が現在負擔して居る印刷費とか、演說會場費とかを中央政府と市町村役場とに負擔せしむることは比較的容易なことであらう。印刷物は單に宣言書のみを許し、立看板、ポスター、ビラの如きものを一切禁止することになれば、印刷費は僅に四五十圓で足ることになる。選擧事務も凡て市町村役場で引受けるのであるから、各候補者が事務所を有つ必要もなくなる。更に應援辯士を全廢して候補者の立會演說を行ふことにすれば、自動車代の大部分を節約することが出來る。現在に於ては無產黨の候補者すら三四千圓乃至五六千圓の選擧費を要して居るのであるが、選擧公營が行はれることになれば、彼等も僅に五六百圓で立候補なし得るようになる。故に選擧公營が無產黨にとりて有利であることは玆に喋々する必要はない。

然し選擧公營が現在の政治界を革正し得るや否やに就ては多大の疑問がある。何となれば既成政黨側の立候補者が費して居る所は單に法定の選擧費のみではなく、更に莫大なる買收費を含んで居るものと推測されるからである。私は一度も買收の事實を突止めたことはないけれども、餘りに多くこれに關して傳聞して居るし、且つ政友會の總裁が民政黨の大勝利の原因を買收と干涉に歸して居るのを考へても、今尙ほ買收が選擧界の大勢を動かしつゝあることを推測せざるを得ない。多數

の候補者が法律を蔑視して三四萬乃至十數萬圓の選擧費を使用して居るのは明に買收の行はれて居ることを語るものである。よし選擧公營が實現されても、眞逆國家は買收費をも公營とする譯にはゆくまいから、既成政黨の候補者に取りて選擧公營は餘り意味をなさない。若し彼等が選擧公營により四五千圓を節約することが出來ることになれば、彼等はこれを買收費に流用して却て選擧界を腐敗せしむるといふ結果になるかも知れない。然しこれあるがため私が選擧公營に反對するものでないことは充分に述べて置かねばならぬ。私は選擧公營が選擧革正の第一歩であることを信ずるが故に一日も速に其實現を希望するけれども、これは單に其第一歩であつて、更に進んで買收行爲を嚴重に取締ることの出來る方法を考へなければ選擧界の革正は駄目だと思ふ。

有權者が充分に候補者の買收行爲を罰するだけの見識があれば、凡ての難問題は容易に解決が出來る。然し現在の有權者にこれを求むることは困難であるから、何等かの方法によりて買收行爲を取締る必要がある。選擧法の施行は司法官と警察官との責任であるが、此責任者が果して其職責を全ふして居るや否やが大なる疑問である。司法官は比較的多くの獨立性を有して居るけれども、警察官にはこれがない。内閣の更迭する每に知事及び警察部長の大異動が行はれるのは何のためであるか。在野黨に言はしむれば政府黨は何時も自黨のために警察官を利用するから勝利を得るのだ。然し在野黨の不平必ずしも私共の同情に値しない。何となれば在野黨が一朝政權を握る時には又警察官を利用するからである。スポーツ界に於けるアムパヤーは神聖なるものであつて、競技者は絶對的服從を要求されるのみでなく、彼を利用したり誘惑することを許されない。此の如き公平無私なる審判官の下に於て始めて公平なるフエアー・プレイーが行はれるのである。

政府黨も在野黨も安心して總選擧を行ひ得るためには先づ公平なる審判官をして買收行爲及び其他の違法行爲を監視せしめねばならぬ。これがためには司法大臣を獨立せしめ、其下に獨立の司法官と警察官を置くといふが如き制度を設くることが必要ではあるまいか。總選擧前の政友會は不自然の多數を得て居たから、これを打破すべしといふ意見が盛であつた。然し政府黨がかち得た多數は何時も不自然の多數ではなかつたか。政友會が議員を買收して多數を得たのも、政府黨が有利に有權者を買收して多數を得たのも、其の不自然なる點に於て少しも異なる所はない。

敗戰の跡を顧みて

島中雄三

政戰十二日――期間は極めて短かかつた。敗軍の將兵を語らずなどゝ氣取つてみるほどの敗軍でもない。さりとて大に兵を語るほどの材料もないが、さて靜かに敗戰の跡をふりかへつて見るに、何と選擧といふものゝ馬鹿らしいことよ、といひたくなる。

そも／＼無產政黨の使命は、など〻更まつて說き出すまでもなく、手近いところは先づ選擧界を革正して、自由に公正に、國民の意志が反映されるやうな制度にすることが何よりも先に必要である。理想選擧だ、言論戰だ、と騷いでみても、今のやうに選擧界の空氣が腐敗して居つては、思想も言論も空念佛ほどの効果もない。要するに金さへあれば、金さへ費へば、誰でも選擧に勝てるのである。

それを私は、今度の選擧で初めて知つた譯ではない。しかし初めてその意味がわかつたのである。田舍で選擧をやつてみて初めてその意味がわかるのである。

私の選擧區は奈良縣であつた。

奈良縣は全縣一區であるが、三分の二以上は山又山で、あと三分の一以內の平坦部に人口の八割は集中してゐる。言論戰の屆く範圍も從つて此の平坦部だけである。全縣に亙つての選擧運動は、とても一ケ月や二ケ月の運動期間にやり終せるものではない。私は主として平坦部に運動の主力を集中した。

しかし何といつても立ち遲れである。總選擧の告示が出て、同志の演說會が既に各處に始まつた頃、私はまだ社會民衆黨の本部に居て、候補者の銓衡に忙しかつた。應援演說にも駈け廻つた。安部磯雄先生の選擧事務長として、諸般の準備にも奔走しなければならなかつた。一方には奈良縣下の同志から、是非立候補せよといふ嚴しい督促を矢のやうに受けて、それを斷るにも骨が折れた。或は東京第一區から、或は靜岡第一區から、其他某々二三の支部から、同じやうな勸誘を受けたにも弱つた。

けれども私は、すべて一樣に斷つた。どうしてあなたは立候補しないのですかと、不思議さうに聽かれる每に、私は腹の中で、多年の懸案である無產政黨と選擧費の問題について、新らしくもない考察を繰り返してゐた。だがとうとう私は負けた。私は私の生れ故鄉であることに實は特別心を惹かれて、つひに奈良縣から立候補することに意を決した。それが二月に入つてからである。

印刷その他の準備を終へ、運動費の調達を友人たちに託して、ぶらりと選擧地へ乘り込んだのが二月八日、その日から直ちに演說會を驅け廻つて（尤もその前から推薦演說會は開かれてゐた）前後九十三回、約四萬の聽衆に無產黨の主張を呼びかけた。演說會は到る處盛況を極め、會衆はいつも場外に溢れた。而もその聽衆が或る時は極めて神妙に、或る時は心からの感激の拍手を以て迎へて吳れた。これなら大丈夫——と私も思つた。當選は確かだ、と若い運動員は言つた。しかし、土地の故老は依然として首を傾けた。そして最後まで傾けて首を擧げなかつた。——せめてももう半月早く立候補が分つてゐたら、また方法もありましたらうがと。

都會でもさうであるが、田舍では殊に、情實關係といふものが重んぜられる。情實關係をたどつて選擧から選擧までの二年間なり四年間なり、絕えず選擧運動をつゞけてゐるのでなければ、いざといふ時の間に合はない。

勿論、いざといふ時に必要なものは金である。金さへあれば民政黨であれ、政友會であれ、乃至それが無產黨であれ、投票は金のある方へと合流するにきまつてゐるが、合流するための溝を堀るのが情實である。選擧から選擧までの何年間、絕えず情實因緣をたどつて、それからそれと渡りをつけて置くことが、

買收を有效ならしむるための必要事とある。既成政黨には叶はない。既成政黨は今や全國各町村に、各のブローカーを中心とする完全な選擧網を張つてしまつた。何時選擧が行はれても、その時になつて間誤付かないだけの平素の準備が出來てゐる。たゞ問題は金だ。金の有る無しが民政か政友かを決定する。既成か無産かを決定する。政策がどうであらうと、言論の力がどうあらうと、選擧網の張られてゐる範圍において、金が無くては動かしやうがない。また動くべき筈もない。地方の選擧民の多くにとつては、選擧は土地の潤ひである。高遠な理想や廻りくどい政策よりも、現實に一票の値ひ一圓にでも五十錢にでもなることが、たとひ旱魃のパラ〳〵雨に類するといへども、それが不景氣の救濟である。生活の足し前である。事ほど左樣に、今や地方農村の生活が極度に疲弊してゐるのだから致し方がない。

かういふ地方の農民に向つて、私は選擧に多額の金をつかふことの弊害を説き、政界墮落の根本先づ茲に在ることを力說した。大概は成る程と理解して呉れたらしい樣子である。しかし自ら金を費さないことを公言してゐる候補者は、金のないことを自白してゐる夜店の素見客ほどにも、選擧民から歡迎されないのは當然である。何と選擧といふもの〻馬鹿々々しさよと云ひたくなるのはこゝだ。

思へば無産黨の進出も前途頗る遼遠といふ外はない。今度の選擧の慘敗は、要するに無産黨に金が無かつたといふことにある。理想選擧が、買收と情實との前に全く無力であつたといふことにある。たま〳〵四五の當選を見たからといつて、それが決して例外となるものではないのである。

だが、それはそれとして當落を問題の外とすれば、私の敗戰も、地方の政治教育の上に多くの收獲のあつたことは疑ひない。買收と情實との渦中にあつて私に投ぜられた六千近くの清票こそは、實にその收獲の現れとしての貴い賜ものであると思ふと、敗れたりといへども氣持がいゝ。更に此の苦しい戰に當つて、文學通り寢食を忘れて働きつゞけて呉れた多くの同志友人の好意を思ふと、たゞ〳〵涙ぐましさに堪へないのである。

新刊紹介

所得税の話（勝正憲著）素人のためにも書かれた本で是程分り易く且信頼し得るものは稀である。國民として一本を備ふべきである。（四六判四〇三頁、定價一・六〇、千倉書房）

赤旗の下に（茂森唯士、田村茂佐雄共譯）カトレーネフの原作、興味深し、譯筆は正確流暢（四六判一七九頁、定價・七〇、叢明社）

新浪漫人の歌（北澤金藏著）詩集（四六判一〇三頁、定價一・三〇、詩洋社）

ソヴエートロシアの經濟及經濟政策（村井賢一郎譯）マルクス主義の見地からソヴエート經濟を體系的に論述して居る。（四六判五六五頁、定價二・〇〇、共生閣）

柳瀬正夢畫集　日本漫畫壇の健在を茲に明瞭に見ることができる。（四六倍判一〇〇頁、定價一・五〇、叢文閣）

レーニンの思ひ出（岡林辰雄譯）レーニンと半生の生活と闘爭を共にせるクループスカヤ女史の著になるもの。（四六判二二〇頁、定價・六〇、叢文閣）

木下杢太郎詩集　[illegible]以下小吟竹枝の類に於て多くの絶唱を收む。（四六判六五六頁、定價四・八〇、第一書房）

東洋社會黨新考

――予は從來國家社會主義者也　樽井藤吉――

田中惣五郎

一、黨研究への示唆

明治十五年五月廿五日。

肥前島原の江東寺に於て結黨された東洋社會黨は、その客観的狀勢――ブルヂョアの闘爭機關の政黨が、自由黨、改進黨の名で現れたのは、此黨結成の數ケ月前でしかない日本である――や、主體的條件――社會黨の理解者が當時果して何人居たらうか――が完備して居ないにも關はらず、なほ且つそれは、社會黨の外貌と内容とを兼ね備へて居た。

明治十五年の社會黨、

それは溫室育ちのメロンかも知れぬが、それだけに珍とするに足る。

この黨の實體については、石川三四郎氏の如く、純乎たる無政府主義團體と規定する人と、山路愛山、吉野作造、木村毅の諸氏の如く、國家社會主義の一群と斷定する人々との二種があり、之についての相當苛辣な論議も加へられて居るが、問題はまだ解決して居ない。

私も此等の先輩に尾して、この黨を考へて見た一人であるが、當時發刊の著書、雜誌、新聞紙其他について、大體の輪廓を知り得た上で、黨の中心に居た樽井藤吉の郷里、大和五條を訪れて見た。

そこには樽井を取りまく肉親や理解者が居た。そこには、樽井の書いた遺稿があり、日記があり、手紙があつた。そして、黨の行動綱領が先の藏相武富時敏氏の手にものされた事なども知り得た。

樽井藤吉は、研究さるべき大きなスフィンクスである。

社會主義を獨創して以來、易經の誤を指摘する迄の彼の一生は、天來的創造と、特異の生活の交響樂である。殊に、明治初期の日本社會運動史に興味を持つ者にとつての慈雨である。彼の傳記は作らるべきであらう。だがこゝでは、東洋社會黨の周邊だけをめぐることにする。

二、黨の輪廓

明治十五年七月三十日刊「內外政黨事情」(中村義三著)は語る。

大和の人樽井藤助(註、藤吉の誤り)氏等が團結せし肥前島原の東洋社會黨は、本年五月廿五日同地の江東寺に於て、黨員の會議を開きたりしが、當日來會するもの、東京、大阪、新潟、佐賀より各一名づゝ、長崎より三名、神代より四名、島原人は無慮數百名にて、先づ同黨の黨議を議せしに、頗ぶる過激の徒多く、或は立憲急進黨と改むべしと云ひ、急進にては飽き足らねば暴飛黨となすべしなど、一時餘程の激論もありしが、結局多數にて從來の黨名に據へ置く事に決し、黨則を議了し

て後、各員の演說等ありて、從來に倣ふべき

性質を致さんとするの色を顯はせりと。その

黨則の草案は左の如きものなり。

東洋社會黨々則

第一章　綱領

第一條　我黨は道德を以て言行の規準となす

第二條　我黨は平等を主義となす

第三條　我黨は社會公衆の最大福利を以て目的となす

第二章　手段

第四條　我黨は綱領の主旨を演繹して遊說演說等をすることあるべし

第五條　我黨は平易なる和文の雜誌及漢文の雜誌を發兌し支那朝鮮へ我旨趣を擴充するを務むべし

第三章　盟約

第六條　我黨は黨員相共に左の誓を爲すべし

予は諸君と此社會黨を團結し、諸君と共に我黨旨を擴張するは、諸君予をして此社會黨に同盟せしめたるに非ず、又予が諸君を誘導せしに非ず、諸君が道義心予が道義心と相感合協和して成る所なり。諸君が此黨則を編成せしは、予が曾て心に銘記したる[illegible]のものにして[illegible]精神に共に其の編成に與りしものなり。諸君よ、此黨則は予が精神を發表公示するものなれば、予は誓つて此黨則を守り他人の毀譽に拘束せられざるべし、且つ予は務めて予が精神の如く道義に富有なる精神の人と親和交結して我此黨を大にせんとす、予は我黨旨を擴張するに親和を以て宗とすべし、敢て敵を求むるが如き言行は爲すべからず、然れども我億兆の兄弟中、若し過つて我黨を阻害するとき、予は身を以て我黨に許さん、予身を我東洋社會黨に許すは諸に之を許すに非ず、即ち是れ道義に之を許すなり、予が腦裏に予を制するの君主あらず、予が本ずる所の君主は一の道義のみ、道義亦予が腦裏を制する能はず、予が精神は即ち道義なればなり、予は之を心に誓ひ以て諸君に示す、

第四章　組織

第七條　我黨は名けて東洋社會黨と稱す

第八條　我黨は同心相聚るものなれば會長又は創立員等の名稱を用ひず

第九條　我黨は全社會に及すものなれば別に本黨[illegible]す、[illegible]により[illegible]の會幹[illegible]等の名稱を附することあるべし

第十條　我黨は時々各地に於て集會する事あるべし

第十一條　會議入黨は其の適出願者の自辨するものとす

然るに本年七月に至り、同所の警察署は黨員某を呼出し警官が種々の尋問をなしたるに黨員某は大いに辯論する所ありて、七月七日に一の上申書を出せり、其略に曰、

社會黨の上に東洋の二字を冠せしは、東洋に興りたる社會黨と云ふ議にて東洋のみの社會黨と曰ふ意に非ず、其の社會黨と稱するは大なる親和黨と曰ふ義なり、社會は人々の相親和鳩合したるを指す稱なればなり。而して人々相親和するの法は道德を捌いて他に術あらず、故に道德は固より言行の規準なり、黨則草案は道德の義を明かにするなり、第一條不等を主義とするとは、道德の働を示すなり儒佛及西哲等凡て道德を說くもの悉く平等に歸せざるはなし、曾て太政官の告諭文中にて上下を平均し人格を齊一にする云々の語ある

も道義に基かれたるにて、即ち社會主義なり、第三條、社會公衆の最大福利を目的となすとあるも亦道義上の事にて之を今日に得んとするにあらず、之を人世の目的とし此域に達するの法を講究する學事會なり、無識の新聞紙の喋々するが如きものに非ず云々。

當港の同志には昨日來警察署に其姓名を上申するも妨なきや照會したるに、我社會黨は道德を以て成るものなれば、公然姓名を顯すは、吾こそ道德家なれと誇稱するに似たり、如斯所存は道德上取らざる所なるを以て見合すべしとの事云々。

右差出したる後、尙彼是問答ありしが、遂に、東洋社會黨の儀は、內務卿に於て治安に妨害ありと認められ、禁止致すべしと縣令に達せられたるを以て、結社禁止致すべきにつき其旨心得べしと縣令に達せられたれども、該黨員の精神は變ずることなく、尙進んで朝鮮及び支那地方へ其議論を輸出せんと企つる由なり。

木村毅氏が、

「東洋社會黨に關する基礎史料は、今日のところ、これ以外無い。」

と推稱された指原安三氏の「明治政史」中の東洋社會黨紹介文も、この政黨事情から引用したものであるらしいことは、二者對照したもの、首肯するところであらう。唯、明治政史には、黨員の地方制や、發展への豫想が無い。どこ迄も、變つた一政黨として取扱ひ、禁止命令一下「爲散せり」と云つた風の、果敢ない氣まぐれ黨として取扱つてある。

これは、二十四年刊と十五年刊の時期の相違の外に、著者の思想的立場の相違が影響して居るらしい。解散の際の警察對黨員の珍問答もあるが略す。

三、黨成立への過程

大和五條の宮崎氏が、門外不出とまで珍重されて居るものに、樽井氏の自傳的手記がある。樽井氏の晩年は、この手記の作成と、明治發祥紀念碑の建設で終始して居た。それから酒と。

その手記は、惜しい哉前編を作り上げただけで、中風の爲に筆を折らざるを得なかつた。そして三年間、同棲者小原歌女からも閉め出しを食つた形で、町の和陽倶樂部の一室に佗しく生きて、大正十一年十一月廿五日、七十三の生涯を生き終つたのである。

だが、社會黨當時の氏は、三十三才の男盛りである。總髮美髯の快男子である。手記は委しく當時の氏を物語つて居る。

自叙傳は語る。

「前述したる如く、明治の始め予が胸間に浮びたる思想は、社會主義に類似したるものなるが、社會なる熟語さへ未だ世に知られざる頃なれば、予は自ら其の何主義たるを知らざりき(土方大內史より說諭せられたる事ありしも、其思想は胸間に蟠り居たり)」

これは後で說明する。

「西洋の如き稍完備したる社會主義を按出爲し得べきものならんや、唯、明治十五年に至り無人島探見の事も絕念せざるを得ざるに至りたるが、其頃我が全國中には、政黨樹立は一の流行熱となれり。長崎に於ても亦、家永芳彥、町田直潔、渡邊元、橫田直彥等の諸氏長崎改進黨を起さんとせり。

此時、予は一の業務あるに非れば、斡旋の勞を執るべく勸誘せられたり。予は無人島探

見の修滿三年間其事に從事し、幾多の碩儒を經たるも之に飽かず、寶井の如き猛虎蟇洞の徒も、予が物に驚かざるを見て剛膽の人物なりと傳へしより、其實佛の如き予を鬼神の如く世間に傳へしなり。

時に約百名の諸氏、長崎改進黨の創立會を開くや、歸途家永芳彦氏、其の主義の凡俗なれば、諸國政黨團體に超越したる一新主義を立つべき希望を述べ、政黨を別に組織せんことを圖る。予は西洋に社會黨なるものあるを聞き居たるも之に精通せざれば、武富時敏氏に之を質し、大いに得る所ありき、武富、家永は佐賀藩人なり、予も久しく佐賀に遊びて其地方に親炙する事多かりき。

自叙傳はつゞく、

「當時、佐賀領内は貧富の懸隔殊に甚しくして、貧民苦痛に堪へざれば、鍋島侯は決然富豪の所有地を二三十年間無代にて借り上げ、之を小農に自作せしめたる事あり、之を近代に於ける社會主義實行の嚆矢なりとす、故に社會主義は須佐賀領を以て最も入り易き所たらざるを得んや、蓋佐賀人に貧富平等思想の存在するに、閑叟公の[illegible]

茲に閑叟公が大隈氏より無償借上の議を聞[illegible]限來れり。然るに小民等は、之を承諾するを欲せざるより、鍋島侯の領所中、殊に東松浦郡に其紛議最も重大なりしが、其の小民の意を煽動する者に渡邊政貴なるものありて、我社會黨の一味なりしが、其年五月ごろ其重立てる者は佐賀に會し、閑叟公の社前に、竪三尺横六尺の扁額に仁祠の二字を大書し、其横に、

天保壬寅年　公以博愛之心　立財產公平之制
我黨沐浴其澤　欽慕其德　乃謹奉献此扁額
　東洋社會黨松浦部三千餘名總代

と記し、乃ち之を奉献して正面に懸けたり。好奇の者は之を新聞に掲出せしめたるより其風聲鶴唳世人を驚愕せしめたるも、其實當時に於て社會主義を解せるもの僅々數名に過ぎざりしなり。

「諸岡正直氏は元佐賀人なるが、其叔父副島種臣の命を含み、東京より來られ、大いに社會主義を鼓吹せらるゝや、予は大いに意志を強うせり。然も東洋の二字を創り、單に社會黨と稱すべく勸誘せられたるも、予は東洋と西洋とは事情を異にする者あると、且つ西人[illegible]せられしことが[illegible]東洋の二字を冠せしめたり。

これによると、東洋社會黨結成への因子が、大體五つある。

一、樽井藤吉の持つ社會主義的思想
二、武富時敏氏の與へた歐米の社會主義思想
三、九州改進黨の除設――ブルヂョア政黨の誕生
四、鍋島閑叟の德政を今後も繼續せんとする農民群
五、副島を背景とした諸岡正直等の支持

九州改進黨の創立は、十五年三月である。大隈が、「國會を十五年末に開け」「開拓使官有物拂下を撤回せよ」と呼んで、薩長の連合軍に彈劾されたのは十四年十月。爾來改進黨運動が、流行病の如く蔓延した。

東洋社會黨が、その一波であることは、自傳の記す通りであるが、九州改進黨大會を揭載した新聞を切り拔いて、郷里へ送つて居るのから推しても、政黨運動が樽井を動かしたことは想像に餘りある。唯、それが社會黨に

なつた特異性が面白い。

樽井が「諸國政黨に超越したる一新主義」として提供したのが、この社會黨であつた。彼の思想經路は後に記すとして、その思想にソシヤリズムの銘を打つてくれたのは、洋行歸りの某であつた。

しかし、社會黨は何を爲すべきかの具體的問題になると、樽井の手に餘つた。武富氏が此處で登場して來るのである。ブルヂョア政黨の領袖武富氏も、曾ては日本最初の社會黨の創立に干與したのである。そこに、當時の被壓迫民衆としてのブルヂョアとプロレタリヤの交合を見る。

武富氏は、當時九州屈指の人物であり、同時に新知識でもあつた。社會主義思想は、其後八戸欽三郎氏が、米國の留學先から送つてくれる新刊によつて啓導され注入されて居たものである。

樽井との交渉は明治十一年に始まる。

西鄕の亂に應じて奥羽まで募兵に行つた樽井は、空しく失敗して東都に潜んだ。次いで百餘日の病院生活が始まつた——性病の爲——八方塞がりの氏の局面展開策は、朝鮮附近に無人島を求めて理想の實現を計ることであつた。而も、同志松岡に籌討問題が起り、生活費に窮して飛び込んだ矢先が、武富經營する所の戊寅義學の講師である。二人の交渉はこゝに始まる。

武富氏の賦與した思想は、修正黨則の中に行動綱領として生きて居る。左の如し。

第四條　舊來の弊習を矯正し貧富の世襲を破壞するに左の項目を以てす

一、天物共有

二、協同會社

三、兒子共育

四、理學的生殖

武富氏の言を簡約すると、

第一の天物共有は、スペンサーのソシヤルスタチックスの中に土地國有論がある。それを更に廣めて、あらゆる自然物の共有を主張したもので、天物の語は書經から取つた。

第二の協同會社は、コーペラチヴソサイチイの譯、これは當時歐米でも新流行であつた。

第三の兒子共育は、子供の養育から敎育まで、一手に國家が引受けるのである。

こゝで私が

「今日の露西亞の制度見たいですね」

と疊みかけると、

「さうださうだ」

と此の老政治家は破顔一笑するのであつた。

第四の理學的生殖は、サイエンテイフイクプロパゲイションの譯で、當時はまだ、科學の文字が無かつたので、理學と譯したのである。今の優生學の樣なものである、等々。

副島伯の甥諸岡正直と樽井の交遊は、樽井が電信柱の請負で大阪に出張し、その足で東京へ飛び出した時からである。

武富氏によると、副島伯は明治十三四年頃既に社會主義的意見を藏して居られたさうである。その甥の諸岡は、伯に輪をかけた樣な人物である。樽井の東洋社會黨から東洋を取り去らうとしたのも無理は無い。

然らば、松浦の農民は、

彼等に惠まれた德政三十年の期限は、もう切れた筈である。うまく導けば農民運動に轉化し得る。事實、社會黨の黨員の大多數も、

社會黨の實行部も、この宣言書によつて代表されて居たものであらう。宣言以下各說の根基はこゝにある。

さて然らば、黨の中心人物樽井藤吉の思想とは何か、如何にして發生し生長したか。

樽井の血には獨創力が遺傳して居たやうである。彼の兄義三は大儒森田節齋に學んで、近鄕稀なる秀才と稱へられた。先祖にも學者筋がある。そしてその獨創は晴開から牛を引出す式の滋味津々たるものである。嘗て池邊鐵崑崙氏が、藤吉流と云ふ熟語を振り廻したが、それは出來さうもない理想論、獨創論に對する諧謔的命名である。樽井藤吉はこと程左樣に想像と獨創の分野を饒富に持つて居た人である。

王政維新は二十歳の彼を震撼した。當時、彼の家運は、一路沒落行程を走つて居た。大いに考へたであらう。考へざるを得ぬ。

彼の家は森林の國大和である。その大和の木材を吉野川を利用して紀州和歌山に賣り出すのが彼の生活であつた。

詩の國、繪の國、歷史の國の大和、そこを流るゝ吉野川を、獨創味豐かな若き樽井が、沒落し行く我家の運命と、新興日本の前途とに對して思ひ沈みつゝ下つて行く情景は、一幅の繪卷物である。

沒落は飛躍の母である。封建時代の沒落、我家の沒落、そこに新らしきものへの飛躍がある。それが獨創豐かな樽井に於て烈しい。彼は飛躍した。資本主義を飛躍して社會主義へまで到達した。

「或日のことです、材木を運搬して一ぷくして居る時、天來の福音の如く彼を襲つたのが社會主義思想だつたさうです」

とは宮崎氏のお話である。

自叙傳はつゞく、

「明治元年は予二十歳なりき、此時予は已に家政を執り居たりしが、五ヶ條の御誓文を拜誦するに及んで初めて報效の志を發し、自ら謂へらく、

「我れ材木業を營み萬金を得ると、他人皆に代り其利を得るとは、自家の爲に逕庭あるも、國家より之を見れば損益する所あらず、明治の新政に浴し、治國安民の大策を建てんと欲せば、私利を捨て公務に盡さざるべからず、然るに、[illegible]、或は遊惰するに、紳士富家は常に安逸に日を送るも、其實は生産の游民なり。勞務に服苦する者は其實生産的良民なり、故に富國安民の策は不生産者をして勞務に服せしめ、共同の力を以て營業を共にせざるべからず、例へば、隣邑五條町に十餘の呉服問屋あり、雜貨屋あり、彼等は店頭に毎に坐臥して勞務に苦しむこと無く、而て比較的良衣美食たるは、貧愚の良民より巨利を強要するに由る、其十餘の同商店を一店舗とし販賣せしむるに於ては、購買者をして廉價の物品を購はしめ、薄利にして益却多し。

而して停業せしめたる殘餘の商人をして生產的業務に轉ぜしむる時は、國產益す增殖して致富の基礎此に在んと、斯の如き單純なる思想は、後日社會主義を唱道するに至りたる萌芽なりとす。」

彼は此の思想を抱いて上京した。そして新興日本の上に此の思想を影響せしめやうとした。

彼の母は明治六年三月に死んだ。その五月

に出奔した彼は、翌七年一月に右大臣岩倉の手許へ意見書を奉つて居る。もつとも、六年の十二月に一度小手調べをして言路洞開の程度を探つて置いた。船艦充實についての提案であつた。それで言路の通ずる事を知り得た彼は、眞の目的の社會主義政策採用案を出したのである。

「此時予は言論既に開通したる事を實際に試み得たれば、其宿望なる經綸策を松野氏に打明し、更に氏の立案を乞ひたるに、氏は立案の勞を執りくれたれば、之を右大臣岩倉公に上つれり。

月餘を經るも何の沙汰も有らざれば、督促の爲再び右府邸に伺候したるに、其事は土方大内史に廻附しあれば往いて問ふべき旨指示せらる。直ちに大内史邸に至りたるに、土方氏は種々に說諭せられて曰く、

「上書するの志は賞歎すべきも、如何にせん目下我政府は專ら商業の奬勵を取らる。上書の主旨と反對すれば採用し難し、其國家に盡さんとする志を以て政府の方針に戾らざるものを熟考して上書せらるゝに於ては、喜んで其筋に取次ぐべしとて遂に却下せられたり」

土方大内史は土方久元である。

明治七年の日本である。朧ろげながらも商業主義で行く位の見當はついたのであらう。それにしてもその七年に早くも社會主義的政策を上書したのだから恐ろしい。十五年の社會黨の伏線は、こゝに存在する。

四、事業、彈壓、解散

東洋社會黨は何を爲したか。

故佐賀侯鍋島閑叟の廟前に扁額を獻じたことは前に述べた。大日本政黨史は次の如く記述して居る。

「されど其の說く所は、「社會の人をして十分に其の天賦の道義心と、平等自由の法則を重んずるの精神とを涵養せしめば、則ち政治法律は遂に無用の長物たるに至るべし、此佳境に徜徉するを得るの時節を造るは即ち吾人の目的なり」と云ひ、又「政府は素と惡事の子孫なれば到底廢滅に歸せしめざるべからず、政府廢滅の日は即ち吾人が企圖する所の眞正の文明世界に達するの時なり」と云ふが如き無政府主義を唱へ、又「土地は人間共有の天與物なり、故に今日の地券證を以て土地所有權を表する者と爲す勿れ、地券證は須らく視て以て土地の券と爲すべし」「社會の事業は主として多數人民の便益を圖りて施設すべき者なり、今現社會の大半は皆貧賤者なり、故に社會の事業を爲すには必ず主として貧賤者の便益を圖るべし」「天地の公道に基き舊來の陋習を破るべしとは維新の御誓文に見え、上下の權を一にして各人に自由を得せしめんとは徵兵令の勅諭に見えて共に吾人が聖慮の厚きに感激する所なり、吾黨の起る亦偏へに此の聖慮を奉戴するのみ豈他あらんや、故に吾黨の起りたるを非議する者は、即ち聖慮を非議し奉るの國賊なり云々」と說き、半鐘警報なる雜誌を發刊せり、其の記する所によれば、該黨の事業は、貧民救護、身分平等、權利均一、人類改良等の目的にして、內地に於て其の主義の擴張を企圖せんよりは、寧ろ之を朝鮮支那の內地に輸入し、彼の奴隸人民の惰眠を覺破し、以て大いに東洋の衰運を挽回するに如かずとせり。

而して黨員は、必ず世論の排斥を受くるを豫期して大いに不撓の精神を養ひ、互に節義を勵し、溫飽の爲に動かず、俗論の爲に動

かされず、云々の盟約を爲せり。

然れども其の實無頼の徒の集合にして、或は陰密の集合を爲し、或は富豪の家に至りて金錢を強要し、或は黨員募集と稱して壹岐對馬に行き人民を脅迫し煽動する等、不逞の擧動を爲せり云々」

武富氏の談では、この半錢警報は、唐紙の悪い紙を綴つた粗末なもので、一二號で廢刊になつたさうである。

以上を綜合すると、東洋社會黨の實際運動は

一、機關誌半錢警報の發行
二、鍋島閑叟禮讃の匾額奉獻
三、秘密集會
四、富豪を脅かして黨費徴集
五、主として壹岐對馬方面へ勢力擴張

等が主であつたらしい。

そこへ彈壓が來たのである。

彈壓は來たが、樽井式熱心さで黨の仕事は細々と繼續されて居たが、翌年一月の黨則草案問題で、樽井氏が一ヶ年の輕禁錮刑を受くるに及んで、黨は完全に消滅した。晴れての黨の活動は、明治十五年五月廿五日から同年六月廿日までの廿五日間、そして黨則草案を出す迄は餘喘を保つて居たのである。

修正黨則は黨の死滅を決定的にした點と、黨の本質を一層確實に表白して居る點で意義がある。結黨當時の黨則は、運動への展望であり修正黨則は、運動體驗後の反省であるところに價値がある、その二つに挾まれた實際運動を併せ見たところに、此黨の本質が描き出されるであらうと思ふ。

草案發表當時の樽井氏の心境は、次の手紙が明かにする。

十六年一月一日の手紙、

「別紙の如く黨則を草せり、右は本年四月十八日迄に諸家の評論を開き、更に修正して來十七年四月に確定する事を約し居れり」

黨再興を名とした大衆への呼掛け、さうした意志も含まれて居たのである。

結黨當時の黨則と修正黨則を比較して修正されたものゝ中の重なる條項だけを拔萃すると、

第一條　我黨は親愛を言行の規準となす

第二條　我黨は[illegible]平等を主義となす

第四條　我黨は貴賤の等級を廢止し貧富の世襲を破壞するに左の項目を以てす

一、天物共有
二、協同合社
三、兒子共育
四、理學的生殖

第五條　我黨を強固にし我黨旨を擴張するに左の項目を以てす

一、自勉
二、演說
三、遊說
四、書籍新聞紙雜誌

第七條　我黨は左の件を爲すべし

(略)全文は約二倍に引き延ばされてあるが趣旨は結黨當時と全然一致

第九條　黨員三類左の如し

一、同盟人
二、同志者
三、贊成人

第十一條　總理黨長又は創立委員等の名實共に用ゐず、但一時の事務分擔周旋者を確立することあるべし

第十三條　黨員は左の項目を戒愼す
一、言語を同等にすべし
二、品行を方正にすべし
三、家業を怠慢せざるべし
四、不得止に非れば誹毀を爲さす
第十四條　我黨は別に規則を設け方便課を置く（略）
第十七條　本則は大なる障礙を生ずるに非れば更生せす

四章十一條が三章十七條にまで増して居る處にその具體的運動化を見る。

第二の彈賑が來た。

修正黨則草案に對する判決文は、明治十六年一月五日の郵便報知に掲載されて居る。

長崎輕罪裁判所宣告
大阪府大和國宇智郡嶽安寺村平民材木商兼
農業　當時長崎縣長崎區袋町
大立又誠方寄留
被告人　樽井藤吉
三十二年九ケ月
（略）被告人樽井藤吉は曩に東洋社會黨なるものを結合したるに因り、內務卿に於て該社會黨なるものは治安に妨害ありと認め、明治十五年六月二十日を以て其結社並集會共禁止を命じたるものなり、然るに被告人は明治十六年一月六日を以て曩の黨則を修正編成したる東洋社會黨々則草案を西海日報社に托し印刷に付し、之を同好に頒ちたることは（略）

右の理由に基き被告人樽井藤吉に對し集會條例違犯の罪一年の輕禁錮に處する事を言渡すもの也　（略）

明治十六年一月廿五日

これについての手紙二三、（十六年一月廿日付）

「東洋社會黨は昨年當縣下にて四千餘名に及びたる所、內務卿より禁止せられ大いに失望を極めたり。然れども同黨は內務卿の命令に服從するものに非ず」

その欄外に

「禁止せられたるに再び草稿を活版に附せし故、警察は集會條例を犯したるものとするなり。然れども其後集會したるに非ず、又結社したるに非ざれば罪すべきものに非ずと信認し居れり、隨つて無罪放免ならんと思料せり」

本人は安心して居たらしい。

三月八日の手紙、

「愚第一月廿五日內務卿の命令に從はざる旨を以て、輕禁錮一ヶ年の刑に處せられたり、

右裁決固より不當なれば上告して破毀を求めたり、依て二月九日保釋金五十圓にて出監を許さる（略）而るに昨々裁判所より保釋取消事件に付、檢察官の請求あるにより三月九日出頭すべき旨達せられたり、願ふに再入監せざるを得ざるべし、然らば上告の判決は凡そ一ヶ年を經ざればならず、若し上告破毀せざれば、其上一年の刑を受けざるを得ず、依て此後二ヶ年は音信致す能はざるべし、明日上告取消願を出す積りなり、上告取消さへすれば一ヶ年にて事終る故なり」

此の保釋取消は、中央から出張した太政官大書記官村田保の意見であること等が細々と認めてある。

そして一年の獄中生活が始まる。

入獄早々、傷寒を患つた。六月中旬から喀血が始まつた。そして吐血が二十日も續いた。十七年一月こそ漸く快復に向つて居た。だがこの心身の打擊は、社會黨から彼を遠ざから

しめた。

三月廿八日出獄、四月一日の手紙、

（略）今日前途の考には、名利、社會、交際を絶ち少しく學事を勉勵する心得なり、最近の名譽は假令一時は落すとも、名譽よりも大なる業あればなり。故に唯生活の爲官に就くかも圖るべからず（最も嫌なれ共活計の爲）然れども月給多きを望まず、月給多く任ずる所重ければ學問の妨となればなり。成るたけ閑なる地を選まんと欲す（もつとも生計確立せば官に就かず）（略）

だが、官に就く事も上京の事も皆實現せずに、彼は佐賀新聞の主筆となつた。唯社會黨だけは其まゝ放棄して仕舞つた。其後の清佛事件、大坂事件、條約改正運動等で二度三度入獄した時は、彼は自由黨左派として動いて居る。そして第二議會に議員として送り込まるゝに至つて、再び社會主義議員の名の下に動いたのである、だがそれも大したことではなかつた。

五、社會黨の影響

樽井藤吉が、第二議會にその朴野極まる短

義、更迭、西洋料理の試食ならずや、所謂改良た紳士諸君は、社會主義者來れりとして心中平らかならぬものがあつたさうである。恐らく現代の無産黨諸君が議會に現れた以上の衝撃を與へたものらしい。

しかも、此の社會主義者は議會に其の姿を現すのみならず、何處如何なる處へもその姿を現はしたものである。

彼と齋藤伯のことは既に述べた。其他岩倉の前に現れ、東久世の前に現れ、板垣の前に現はれた。彼は、パトロン土倉の娘を内田康哉伯に娶すことに成功して居る。彼は又、パトロン北の娘を副島の當主に送ることに成功して居る。彼の支那大陸横行の便は、この内田伯の手で扱はれたものが多いのである。

彼は大木喬任伯には特に信任を得た。其他岡崎邦輔と知り、佐々友房と交つた。熊本に日本最初の支那語學校の設立を見たのは、樽井が佐々をそゝのかした結果である。其他彼の行くところ、他人の意見を徴し、求めらるれば、その蘊蓄を以て自己を語つた。それが日本のみでは無いのである。朝鮮人の見たる最大の日本名士は、この樽井だつた時代すら

ある、[illegible]下に浮かべた故である。

彼の動くところ、その思想が動いたものとしたら、東洋社會黨は樽井の影響も大なりと言ふべきでは無いか。彼が太陽に執筆した國有銀行論なども、當時の啓蒙的文獻として價値がある。明治三十年に、佐久間貞一、中村太八郎の諸氏と社會問題研究會を起したのも有意義であつた。鑛毒事件を助け普選を叫んでそれぞれ組織を作つたのも大いにいゝ。普選の殊勲者とし東洋社會黨は、第一に樽井を推すべきである。平民社によつて結黨された社會民主黨までのつなぎには充分なつて居やう。社會民主黨が、日本農民勞働黨へのつなぎになつて居るのと同じ意味で。

だが、東洋社會黨のもつと直接の影響は、文字による宣傳である。一通り掲げて見る。

A　新聞

イ、東京日々新聞

四月の半頃早くも社會黨集會の噂を載せ五月十五日には關史福澤問題を報じ十八日には、福地社長の「社説」文で猛烈に嚙みつ

いて居る、六月二日には、穗積八束を頻はし、六月七日には村上浩の寄書を揭げて攻擊して居る、其他寄書三、雜文五、

ロ、郵便報知新聞

五月廿日に三面式報導（好意的）、其後一二回報導、修正黨則、樽井の判決文、樽井の紀念碑建立等其折々の報導を怠らない。

ハ、朝野新聞

長崎に支局を置いた爲か、實に巨細の報導がある。これだけで一篇の社會黨史が出來さうである。中にも、六月廿三日から九回に亙る「論歐洲社會黨」の長論文は、出色の文字である。馬場辰猪らしいが、堂々たるものである。十五年に之だけ社會黨を理解して居たのは豪い。

二、其他の新聞

B　雜　誌

イ、機關誌半鐘警報

一部分にしか頒布されぬが、金無垢ものだけに刺戟が大きい。

ロ、佛敎演說集誌

「東洋社會黨の現出」千河岸貫一

中々面白い、しかし可笑しい長論文である。一度演說したの丶速記である。十五年六月十四日發兌

C　著　書

イ、內外政黨事情（既出）

ロ、日本政黨事情

大久保常吉著明治十五年九月六日發行、種は、朝野新聞論說子のもの丶拔萃らしい。夫を東洋社會黨と結びつけたものである。

其他、筆者の目に觸れないものも多いことであらう。それ〲がそれ〲に影響を與へて居るとしたら、東洋社會黨の功罪も忽がせに出來ない。

六、結　語

樽井の日記には、「予は從來國家社會主義者なり」と大書してある。德政は一種の社會主義である。副島は、諸岡は、武富は、其他の諸分子は、大體自由主義左派である。

然らば、第一回の黨則は、恐らく儒敎佛敎及び當時の歐米思想のカクテルではあるまいか。

唯、當時の日本には虛無黨の思想が相當に入りこんで居た。露國皇帝の暗殺は、十四年三月である、相當影響されたかも知れぬ。それに、國家思想も、資本主義思想もまだ幼稚な明治十五年である。その對蹠的地位に立つ社會主義思想の確立があらう筈はない。資本主義の幼稚な時代の反思想は、むしろアナーキズムである。日本社會運動史が之を證明する。

それにもかゝはらず、東洋社會黨の方向は、動向は、國家社會主義を目指して居る。

封建思想プラス自由思想割る二、つまり自由主義前派式の社會主義思想かも知れぬが、猶且つ國家社會主義を志して居たことは、種々の材料が歸納して居る。

そして、東洋社會黨はもつと研究さるべき重要性があると私は信ずる。

蔣介石と浙江財閥

長野朗

軍閥と財閥との交媾、それは他の國に於ける政黨と財閥との關係に似て居るが、資本主義の發達して居ない支那では、又特異の點を有つて居る。他の國では一つの財閥と一つの政黨とが各々結托して居るが、支那では蔣介石だけが財閥と結び、他の軍閥は結ぶべき財閥を有たない。そこに蔣介石が成功した原因があり、彼れが反動化した原因があり、また反蔣運動の渦中にあつて能く今日まで其地位を保つた原因がある。そこで蔣介石と浙江財閥との關係に入る前に、支那の軍閥と財閥の一般關係及浙江財閥が支那唯一の新興資本閥であることを説明せねばならぬ。

支那に資本主義が發達しない主なる原因は政治的の障碍にある。勞力と資源は有り餘る程あり、資本も技術も決して絶對的のものではないが、軍閥官僚跋扈の支那では、一つの産業を興すにしても、軍閥官僚の關係なくては決して成功しない。それは鑛山のやうなものは軍閥官僚が獨占して他のものには採掘を一切許可しないし、工場等にしても、彼等と關係なくやらうものなら、軍用金とか何とか盛んに搾られた上に治安の維持は保たれないし、忽ち經濟が成立たなくなる。其他金融機關にしても亦同じである。ために支那には新興産業の發達と共に、普通の資本主義は起らずして、一種の軍閥官僚資本主義とも云ふべきものが興つて來た。例へば鑛山の大部は官僚軍閥の所有だし、紡績の如きも安徽派の紡績とか直隷派の紡績とかゞあり、金融機關に至つては、軍閥の主要なる搾取機關として、大軍閥の多くは自己の銀行を有つて居る。蔣介石の中央銀行、閻錫山の山西銀行の如きはこれである。彼等は自己の獲得した地盤には早速銀行の支店を設け、不換紙幣を發行して正貨を代りに吸

收する。彼等の地盤擴張は結局搾取區域の擴張に過ぎない。軍閥資本主義の最適例としては滿洲がある。滿洲の金融機關は東三省官銀號を始め、凡て東三省軍閥のものだし、紡績工場は張作霖が設立したし、主なる產業は殆んど彼等の所有にかゝるだけでなく、開墾地の多くは軍閥官僚の有に歸し、更に滿洲の特產物である大豆の買占めを行ひ、張作霖と共に爆死した黑龍江督辦吳俊陞の如きは、四洮、洮昂鐵道沿線に多くの土地を所有し、更に貸家業から女郎屋までも經營して居た。かうして軍閥はそれ自身が資本家を兼ねて居たために、打倒軍閥は同時に打倒資本家を意味し、支那の革命は軍閥官僚階級を打倒することにより凡てが解決することが出來る。かゝる情況の下では軍閥即ち財閥にして、兩者の交媾は起り得ず、軍閥は資本家を兼ねた上に、更に不換紙幣の發行、富豪より公債其他の名義により軍用金を徵し、政府の租稅を橫奪し、鐵道收入を差押へる。各地軍閥の稅收の主なものは、鹽稅、釐金、地租、其他の雜稅であつて、現在南京政府の收入は外國人で管理して居る關稅の外は、江蘇省の收入と浙江其他の一二省から收入の小部分を送つて來るに過ぎずして、他は皆各地軍閥が橫奪して居る。然るにかうした軍閥官僚資本主義の中に一つの財閥が生れ出た。之れが浙江財閥である。之の浙江財閥の將來は單に軍閥との關係だけでなく、支那の資本主義發達の方面から見ても、極めて重要な問題である。浙江財閥が生れたのは、列國資本主義の侵入により支那にも資本主義の發達を促したが、支那に於ける經濟の中樞たる揚子江流域に於て殊に其傾向著しく、揚子江流域の中心たる上海は、支那經濟界の樞軸をなした。それには次のやうな理由がある。上海は列國對支經濟發展の根據地であるから、列國の經濟諸機關も多くこゝに存在し、貿易も全支那の約半部が上海で行はるゝため、支那側の資本家も自然上海に發生した。それに上海は列國對支發展の本據だけに、列國は自己の武力を以て鞏固に上海を確保して其治安を保ち、如何なることがあつても之を手放す意志はないので、上海ならば安心して固定資本を投下し、列國の保護下に事業を經營することが出來るから、こゝに資本家が發生した。この上海資本家の最も有力なる團體が浙江財閥である。支那では同鄉意識が極端に發達して居るために、政黨も軍閥も商人團體も皆同鄉的組織になつて居る。從て資本家が浙江省出身の同鄉的組織を取つたのも自然であらう。又支那の凡ての組織は、中央集權的な一大組織でなく、多くは各個小組織の聯合體を取ることが多い。浙江財閥も亦之れに據つたもので、之れが日本の三井や三菱等と異つた點である。かうして上海に强力なる財閥が發生したことは、その勢力を利用

した軍閥が中央の政權を握るのに有利である關係から、從來になかつた軍閥と財閥との結合を新に發生せしめ、相互利用により各々其地位を堅めんとするに至つた。そこで蔣介石と浙江財閥との關係を說くに當つては、先づ浙江財閥の發生內容に就いて一通り說明する必要がある。

浙江財閥の正體を明かにするためには先づ浙江財閥の發生から述べねばならぬ。浙江財閥は上海の發達と共に成長して來た。上海が一八二四年の南京條約で開放された當時、上海の財界を支配して居たのは山西票號であつた。然るに、外國銀行を始め支那人新式銀行及銀號、錢莊の發生は山西票號の沒落を來したが、其中で殊に顯著な發達を遂げたのは錢莊業であつたが、この錢業界は支那人を始め從業員に至るまで、主として浙江省の寧波、紹興、江蘇省の蘇州、鎭江四ヶ所の出身者で占められて居た。然るに光緒七年の中佛戰爭に於ける財界の變動により江蘇派の蘇州、鎭江系の錢業者は多く沒落したに拘らず、浙江派の寧波、紹興系は逸早くも陣容を整頓して全く江蘇派を壓倒するに至つた。其後上海の錢莊業界には幾度か恐慌が來たが、其都度浙江派は其壓倒的勢力を確立して今日に至つた。一方錢莊業と共に相對して發達し來つた國內新式銀行に就て見るに、國營的の中國、交通二銀行は、全員江蘇系の鎭江人を以て堅められ、純民營の四明銀行が浙江派寧波紹興財閥の本據となつた。次で滬杭甬鐵道の敷設に當り機關銀行として設られた浙江興業銀行が同じく寧波系の手に握られ、又始め官商合辦として組織され後に民營になつた浙江實業銀行も亦浙江系の一根據となつた。かくて當初新式銀行界に於ける浙江系の勢力は其錢業界に於ける如く優勢ではなかつたが、民間に入つてから俄かに其勢力を增大し、今日に至つては上海に於ける新式銀行の過半を其傘下に收め、其金融界に於ける勢力は牢乎たるものあるに至つた。其こゝに至つた原因は民國以來上海財界の指導階級に有力な浙江人が續出したことと、浙江系の金融業者が共存の立場から大同團結して集團の威力を發揮し、歷代の軍閥及政府と巧に結合して共同利益の獲得に努めて來たことにある。かくて當初江蘇系の手にあつた中國、交通の二大銀行も、民國以來次第に江蘇人を追ふて浙江人を以て其內部を堅むるに至つた。次で一九二八年國民政府により設けられた國家銀行たるべき中央銀行が浙江系で堅められたことは勿論である。かくて國家の三特殊銀行は悉く浙江派の手に歸し、浙江財閥活動の中樞をなすに至つた。從て浙江財閥の中心勢力は錢莊と銀行界を壟斷して兩勢力を合一し、これを基礎として上海財界の凡ゆる方面の事業に手を擴げたことにある。彼等の發達は同郷觀念により浙

江資本家が凡て共同利益の前に能く團結したのと、同鄕の商人の政客軍閥の結合が巧く出來たことにある。殊に近來浙江財閥の名が著しく世に現はるゝに至つたのは、浙江出身の新軍閥蔣介石が國民政府の主腦者となり一門同鄕を以て政府を堅め、蔣の義兄にしてブローカー的な宋子文が財政部長となり、蔣と浙江財閥の結合を堅くし、相互利益の觀念から財閥は蔣政府を助け、蔣政府は財閥の發展に盡力して、共に異常の發展を來した結果に外ならぬ。

次に浙江財閥の性質内容に就て一通り述べなければならぬ。浙江財閥たる名は最近に起つたものであつて、人により種々之を狹義にも廣義にも解して居るが、浙江財閥の熱心なる研究家である志村悅郎氏は之を次の三つに分つて居る。

第一には浙江省出身者にして主として上海に根據を有する金融業者及實業家の一團を稱するもので、最も狹義の解釋である。之れは又寧波、紹興等の浙江西部の出身者と、杭州、嘉興等浙江東部出身者との二つに分つことが出來る。

第二には主として上海に根據を有する江蘇、浙江兩省出身の金融業者及實業家を總稱するもので、上海財閥若くは江浙資本閥ともいふべきものである。

第三には浙江財閥を中心勢力とし、上海を本據として活動する凡ての金融業者及實業家から、財界政界の中間にある一切のブローカー的人物を網羅した最も廣範圍のものである。從て實質的には支那新興資本團の總稱でもある。然して之れは現在支那では唯一の資本團であり、其發達の將來は支那資本主義發達の將來を暗示する重大なる意義を有つたものであるが、其核心をなして居るのは浙江財閥であつて、他は之れを繞つて存在して居る。此等の關係に就いては更に後に述べる。

次に一つ述べて置かなければならないことは、前にも一寸書いた通りこの財閥は三井や三菱のやうな中樞機關を有つた一有機體ではなくて、個々獨立したる小資本家が、共同利益のために聯合して一の組合を組織して居るのであるから、鞏固なる統制力はない。支那の資本主義がかゝる特殊の形式を取つたのは支那の社會、經濟、政治組織が凡て同じ原則の下にある支那古來の特性によるものである。從て内部に利害の衝突が起れば一致の動作を缺くこともあらうし、又必ずしも蔣介石一派の浙江軍閥と終始するものでなく、形勢の變化如何によつては何時でも新しい權力者と結合する可能性は充分に備へて居る。狹義の浙江財閥内部に於てさへ各分派を有して時に内紛を起して居る位であるから、この集團が將來どう進むかは疑問である。

次に浙江財閥事業の内容に就いて少しく述べて見るならば、

浙江財閥は金融業を中樞として起り、今日では商工業各般に亙つて斷然優越の地步を占めて居る。彼等の關係事業中比較的不振なるものは紡績業であるが、それでも六會社を有つて居る。又上海に於ける石炭商は大小二百戸に達するが、其大部は寧波、紹興出身者によつて經營されて居る。又、金屬製品取扱業者も大小百七八十戸中大半は浙江人の經營で、錫銅鐵業者百内外の中約半數は浙江省の寧波人だけで占めて居る。航運界に至つては全く浙江系の下にあり、招商局は元來浙江系の下にあつたのを、蔣介石の國民政府で管理するに至つたので、今後も浙江系の手に入るべく、招商局に次ぐ三北輪船公司及寧波紹輪船公司の二つも共に浙江系に屬する。上海の製糸業は工場五十餘を算ふるが、工場所有者は多く自ら經營せず、他に工場を賃貸經營せしめて居るが、經營資金は多く金融界に仰ぎ、浙江財閥の支配を受けて居る。工場經營者は江蘇省無錫人が多數を占め、浙江省湖州人が之に次いで居る。然し生糸商の主要部は殆んど浙江人である。銀樓と稱し婦女の裝飾品及金銀器具の製造販賣及地金銀の賣買を業とする者六十餘戸中大部分は寧波人である。砂糖取引業では南洋華僑出身者の一團に對して大なる勢力を擁して對抗して居るのは浙江省寧波人の一團である。其他海產物、藥劑商の大部も浙江人であり、上海貿易の重要部を占むる綿業中、綿糸商では浙江系と江蘇系が相對立し、綿花商などには上海人が大多數で浙江人は之に次いで居る。綿布業では浙江人が最も優勢を占めて居る。其他米、雜穀、油業に於ても浙江人の勢力は相當に延びて居るし、又洋式家具業、醬酒及調味品製造、染料業に於ても浙江人が大半を占めて居る。次に金融業は其勢力の中心であるだけに、錢莊七十餘家中、浙江人四十四戸を占め、其他の分も支配人始め重要職員は皆浙江人で堅めて居るから、全く上海の錢業界を壟斷した形である。新式銀行業では中國、交通の二大銀行を始め、浙江興業、浙江實業、四明、中國通商、中華商業儲蓄、中華勸工、正大商業、道一、中央信託、通易信託等の直系を始め、中南、鹽業、金城、大陸の四行は聯合組織を有して浙江財閥と提携し準浙江系と見るべく、全く壓倒的優勢を保持して居る。かうして上海の金融界を壟斷した上に、商工業の各方面に亙つて優越な地步を占めて居る浙江財閥は、全支那財閥の中堅として之を牛耳つて居る。そこで浙江財閥の眞價を知るためには、浙江財閥と上海を本據とする他の財閥との關係を知らなければならぬ。

　支那に於ける財閥は上海を中心として發展して居る。從て上海財界に於ける浙江財閥の地位は又支那財界に於ける其地位とも見らるゝ。上海財界に於て浙江財閥に次いで勢力を有つて居

るものは廣東財閥である。廣東財閥は古く阿片取引を始め、石炭、生糸、茶、雑貨、呉服、南支那向爲替等に優勢を保持して來たが、更に民國になつては新式銀行（廣東、香港國民、東亞、和豐、工商の各銀行）百貨店（先施、永安、新々等）煙草製造業（南洋煙草、華商煙公司）等に新發展を試みたが、然し金融の實權を浙江財閥に握られて居るために其後援を必要とし、且つ浙江實業家と提携連絡するのが萬事有利である關係から、これと相結んで其支援を仰いで居る。廣東系に次いでは上海人及江蘇省人であるが、之とて廣東系と同じく浙江系との提携支援により其地位を保つて居る。其他各省出身者に至つては、勿論浙江財閥の支援を仰がざるを得ない。從て上海財界は太陽系の周圍に於ける諸星の如く、浙江系を中心として一系統をなし、之れに左右せらるゝ有樣である。

更に其關係内容を知るために之を金融界に就いて見るに、上海の新式銀行は其數二十餘に達し、其中には上海商業儲蓄、鹽業、廣東、金城、中南、大陸、中國實業、中孚等浙江系銀行に劣らざる他省系の有力な銀行が少くないが、此等の銀行はいづれも浙江系金融業者との提携連絡に汲々とし、浙江系銀行の傍系たらんことを希望する有樣であるのは、浙江財閥の勢力偉大なるを示すと共に、支那では經營年月の古き程信用あり、この點では浙江系銀行が優つて居るため之と連絡する必要があるのと、浙江系銀行には同系統の錢莊が多數存在し、背景が大なるため、之と提携しなければ日常の營業にも差支へる。更に浙江出身者にして上海にあつて各種實業に從事するもの多く、浙江金融業者は此等の顧客を控へて居るため其勢力强大であるのと現在の國民政府は浙江閥を以て堅められ、政治家と商人と相結托して居るために、浙江財閥と相結ぶにあらざれば甚だ不利だからである。かうした浙江財閥の力が表面に現はれて團體運動となつたのが上海總商會の活動である。浙江財閥は上海に於ける種々な實業團體、例へば上海總商會、上海縣商會、閘北商會、上海銀行公會、上海錢業公會、寧波旅滬同鄉會等に據つて居るが、上海總商會は此等の總本部として、浙江財閥の對外活動の中心機關である。上海總商會は其前身たる上海商業會議公所が光緒二十八年に初めて創立された時、既に浙江人嚴筱舫の手になり、民國革命と共に上海總商會に改めた後も、依然として浙江財閥の牙城として今日に至つた。即ち創立から民國九年までは浙江系元老派（保守派）の手にあつたが、其後民衆運動起り思想界にも變動起るや、浙江新進派が擡頭し來り、民國十六年に國民革命が上海を占領するまで、たゞ一期だけ湖南人が會長を務めた外は、概ね浙江人が正副會長を務めて來た。民國十六年に本

會が改組されて、外省人が委員の中に多數入り込んだが、此等はいづれも浙江財閥巨頭の傀儡にして、實質に於ては何等の變化なく、浙江王國の基礎には搖ぎがない。この上海總商會は、國民革命軍が起るまで、全國商民運動の中心として、北京政府に對しては一敵國をなした。殊に歐洲戰後に於ては政治運動にまで乘り出し、其活動は目覺ましきものであつた。一九二二年頃から北京政府の財政窮乏して列國共同管理の論起るや、政府財政に對する不信任の叫びが到る所に起り、「財政を公開せよ」「政府の財政を國民の手で監督せよ」と云ふ國民の要求となつたが、この運動を指導し熾烈なる反抗の氣勢を揚げて政府に肉薄したのは上海總商會であつた。又軍閥の害毒に對し裁兵の運動や厘金廢止に努力したのも主として上海總商會であつた。かうして數年間支那商民運動を指導し、其最左翼として活動した上海總商會が、國民革命軍が起つた以後如何なる行動を取り、如何にして、蔣介石一派と結托するに至つたかを次に述べて見やうと思ふ。

國民革命軍が始め廣東に起つて長江に進出して來た頭初に於ては、國民革命軍の内部は共産黨と國民黨との寄合世帶であつて、其政策は主として共産黨の指導方針に據つたため、總商會とは本質的に相合はないものである。總商會に指導された從來の商民運動は、封建的軍閥の打破と共に外國資本の支配を脱せん民主主義自由主義の支那を造つて大に資本主義の發達を期せんとするものであつた。然るに頭初の國民革命軍は、軍閥と共に資産階級を打破して無産階級の民主主義革命を完成し、次で成るべく速に社會主義革命に移らんとするものであつたため、無産階級の組織に全力を盡し、農民組合、勞働組合が共産系の指導下に大々的發展を遂げただけでなく、更に資産階級の總商會に對し、中小商人を主力とする商民協會を組織して對抗せしめた。即ち共産黨は大商工業者を倒すためには、商民協會の組織と、勞働組合の組織によつた。勞働組合の中には、商店從業員をも加へて其攻擊力を大にし、更に糾察隊を組織して階級爭鬪の武器とし、罷業に際しては一も二もなく糾察隊で資本家を壓迫して無條件屈服を餘儀なくせしめたため、さすがの浙江財閥も大恐慌を來したが、ここに財閥と蔣介石とが相結ばるる因緣が出來た。蔣介石は元來ロシヤの援助により軍官學校を造り、之れを基礎にして發展して來たが、彼れ自身は主義も何もなく、たゞロシヤを利用して自己の地位を築くこと以外には考へたことなく、ロシヤを利用して居た間は左派を粧ひ、地位が出來ると次第に右傾して中間派となつた。然るに共産黨側では國民黨内の右派を逐次驅逐し、次に中間派に及ぼし左派と結んで

勞農政府を造らんとし、謀漏れ蔣介石のため却て一部共産黨員のクーデターを喰つた。かくて蔣と共産黨との間に間隙を生じ、北伐軍起つて後は益々拙くなつて居たので、浙江財閥は蔣とは同鄕關係でもあり、共産黨に惱み拔いて居たので、盛んに蔣介石に說いて遂に蔣をして共産黨と分離して南京に政府を樹立せしめ、共産黨に對して峻烈なる彈壓政策を採らしむるに至つた。卽ち共産黨と國民黨との分離の背後には、財閥の黑い手が力強く動いて居た。又共産黨彈壓に際しては、之を條件として浙江財閥から蔣介石に財的援助をしたと噂されて居る。次で張作霖との對抗戰に當り、浙江財閥は總計一億萬元內外の金を蔣介石に支出して北伐を完成させたと云ふことである。この財的援助の結果が遂に蔣をして北伐に成功せしむるに至つた。北伐成功後に於ても約二ケ年の間に蔣は上海で二三億の內債を募集し、この金で廣西派や馮玉祥軍を討つてとにかく政權を保持した。然し浙江財閥も決して無條件に蔣介石を助けた譯でなく、そこは支那一流の共存共榮主義により、第一には彼等の最も嫌つて居る共産黨に對し嚴酷なる彈壓政策を斷行させ、次には民衆運動殊に勞働運動の取締を行はせた。それは國民政府の民衆運動中止決議となり、共産系組合解散後は國民黨系の組合に改組されたが、組合は名のみにして殆んど實なく、階級爭鬪は原則として否認され、又商店員は商會側の希望通り勞働組合から脫して商人の組合に加入した。かうして彼等の最も恐れたものが片付いた外に、浙江財閥は國民政府によつて種々の利得を得て來たのである。この蔣介石と浙江財閥との結託は勢ひ國民政府の政策を次第に右傾せしむると共に、蔣介石自身も中間派から右派となり、國民黨部は中央執行委員三十六名中二十八名は右派で占め、中央黨部の三部長は右派で獨占し、政府の各部を右派で堅め、民衆組織を骨拔きにし、民衆運動を壓迫し階級爭鬪を否認して無産階級の擡頭を抑へると共に、一方では國產振興、內地產業の保護等資本主義の發達を助成する方針に出で、國民政府の革命的色彩は全く消え去つた。

以上蔣介石と浙江財閥結託の相互關係に就いて述べたが、次に少しく浙江財閥と蔣介石一派が如何なる形式で結合して居るか其內幕を紹介して見たいと思ふ。

支那では鄕里關係が社會結合の主要素となつて居ることは既に世間周知の事實であつて、蔣介石一派の浙江軍閥と浙江財閥との結託は極めて自然である。又一方南京政府として、其財政の根據は上海に有る以上、鄕土關係を別としても、上海財界を指導

する浙江財閥と結ぶとも當然であらう。然らば蔣介石一派と浙江財閥とは如何にして結ばれて居るかと云ふに、それには第一に蔣介石の國民政府の組織内容から見てかからねばならぬ。現在の國民黨も國民政府も殆ど蔣介石の血縁と同鄕人により占められ、浙江人にして要職にあるものには、外交部長の王正廷や、考試院長戴天仇、監察院長蔡元培等を始めとして、多數を占めて居るが、殊に、國民政府の財政に關する方面には、蔣介石の血緣者を配し、財權を一族の手に收め以て其地位を堅むる方法を講じて居る。即ち財政部長には蔣の妻の兄宋子文が之に當り、鐵道部長は孫文の子の孫科が充てられて居るが、孫文の未亡人は蔣の妻と姉妹であり、もう一人の姉妹は工商部長孔祥熙の妻である。そこで之の蔣一族と浙江財閥との關係はどうなつて居るかと云ふに、財政部長宋子文は浙江財閥との因縁甚だ深きのみならず、浙江財閥の首領張靜江は、其資産の大部を傾けて國民黨を助けて來たが、蔣とは早くから相知り、國民黨の第一次大會で中央執行委員となり、蔣の懇請により廣東に赴いて蔣の臺所役を引受け、北伐期間殊に蔣が共產黨と分離した前後には、張は實に蔣の懷刀として萬事を采配した。北伐成功後國民黨の元老株として、蔣の背後の支援者として、彼等の故鄕である浙江省の地盤を保持し、大任に當つて居るが、[illegible]今後國民政府の建設事業に當つては蔣は張の力を借る外なく、張も亦之によリ浙江財閥をして蔣政府に投資した收穫を收めしめねばなるまい。次には浙江財閥の巨頭にして上海總商會を牛耳つて來た虞洽卿と蔣介石とは私的に非常に密接な關係がある。民國二年陳其美の參謀たりし蔣介石は、革命失敗後上海に潜伏して一時な隱忍したが、其時同鄕の大先輩たる虞洽卿が理事長をして居た上海物品證券交易所に入つて仲買人となつたが、忽ち失敗して窮境に陷つたのを、虞は蔣に泣き付かれて、其跡仕末をしてやつた上に、旅費を給して蔣を廣東に居た孫文の下に赴かしめ、それが今日蔣が成功した因をなした。更に蔣が南京に政府を造つて北伐を企つるや、虞は浙江財閥の元締として蔣のため北伐資金を調達し、蔣の北伐を成功せしめた。其他浙江財閥の各巨頭が皆一致して蔣を助けて軍資金の調達に盡力した功績は大なるものであるから、蔣は彼等を中央銀行や中國銀行等の要職に就け、錢永銘の如きは財政部次長に任ぜられた。其他浙江省財政廳長とか上海海關監督とか、財政の要職には皆浙江財閥の巨頭を任じて兩者の連絡を堅くし、更に南京政府が國庫券を發行して財政救濟策とするや、一切の內債は浙江財閥が一手請負式に

引受け、其擔保の上海關税收入は此等浙江財閥で組織した保管委員會の下に置かれた。之の裏面には內債一手引受に伴ふ特別秘密割引等があつたが、かうした相互利害に基く兩者の腐れ縁は、國民政府の內債を通じて益々深められて行つた。然らば兩者關係の將來はどうなるか、もし蔣介石一黨が沒落したとしたら浙江財閥はどうなるか、政府の執權者が代れば、政府の中央三銀行(中國、交通、中央)に集造らう浙江財閥は大打擊を受け、又浙江派が政權を有つて居るために浙江財閥の傘下に馳せ集まつて居る各小財閥の向背も疑問となり、又政府の臺所擔任で儲けて居たことは出來なくなるだらうが、從來の分は確實な擔保によつて居るから、蔣の沒落により直接大損害を蒙ることはあるまい。又浙江財閥は政府との關係なくとも上海に於ける最も大なる財閥であるから、如何なる後繼の政府も之を無視することは出來ないし、浙江財閥にしても自己の利益が主だから、新しい政權者と結んで自己の地位を保たんとすることはあり得ることである。上海の發達は浙江資本閥の發達を促し、其支那政局に及ぼす影響は將來注目の要があらう。

大民政黨論

馬場恒吾

大民政黨と云ふ言葉は聞き馴れない爲めか變んに聞へる。大の字は政友會に付くと相場が決つてゐると思はれる。だが、衆議院で二七三名の絕對多數を占めてゐる民政黨は大民政黨に相違ない。

民政黨の前身は改進黨以來、多くは轗軻不遇の歲月を送つた。それ故に此黨の人々は逆境に居る時が板に付いてゐて、順境に居るときは借りて來た猫の如うな感じを起さしめる。それが今は大民政黨になつたのであるから、否應なしに堂々として天下の重責に任ずと云ふ覺悟を決めねばならぬ。國民は割合に此政黨に對して好感を有つ。政黨それ自身に好感を有つと云ふよりは、總裁にして首相たる濱口雄幸氏の生眞面目にして正直な人物である處に好感を有つ。だから此內閣をして相當に成功せしめ度いと希望する。反對黨の政友會ですら、選擧前には金解禁の後始末は旨く行く事を望むと云つて居た。少くとも今一年位は此內閣を存續せしめてよいと、腹では思つて居ると信ずべき理由がある。環境は濱口內閣と其率ゆる民政黨を祝福してゐる。彼等は其謂ふ所の強く正しく明るき政治を行ふべき絕好の機會を與へられてゐる。若しそれが行へないとすると、それは內閣の事情の罪でなくして、彼等自身の罪である。大民政黨が世間の此期待を裏切るか否か、吾々はそれを知り度いと思つてゐる。

民政黨の選擧標語であつた強く正しく明るき政治の中の、正しく明るきと云ふ部分は不充分ながら承認出來る。だが、強くと云ふ部分は民政黨の本質以外のもので、寧ろ政友會が云ふべき言葉である。民政黨にはインテリゲンチャ的の特色が濃厚である。それは民政黨の前身である所の大隈重信の改進黨以來の

傳統的色彩である。改進黨は知識階級の長所と短所を有つてゐた。板垣の自由黨の如く粗暴野蠻でなかつた。物の情理を酌み分ける。人に同情する。無理を押し通さうとしない。これは個人としては貴むべき性質であるが、それが政治を行ふ上に現はれるときは、强い政治とは云へなくなる。民政黨は今衆議院に絶對多數を占めた。强い政治を行はうとすれば、行ひ得る條件の下に居る。それにも關らず彼等が果して强い政治を行ひ得るだらうかと疑はれる。それは彼等が尙未だ改進黨以來の傳統を充分に脱却して居らず、徒に黨に知識階級的な弱氣を包んでゐるからでもあらう。併しそれが全部の原因ではない。それよりはもつと深い理由を近代政黨の本質に見出す事が出來る。

例へば之を金解禁の後始末に見る。金解禁の方法とか時期とかは今議論しても無駄だ。已に行はれた後の泣き言は聞くのも厭だ。だが政府が金解禁を行ふ。其所には一つの外科的手術で日本の經濟を立て直ほすと云ふ決心があつたであらうと思ふ。其手術半ばに患者が痛いと云ふ爲めに、手術を手加減する。或は手術の半分は來年に延期する。さうする位ならば初めから手術を企てなかつた方がよい。例へば生糸の値段が下るのに驚いて糸價安定の補償法を働かせやうと云ふのはどうしたものだ。金解禁をする前に、政府はこれが日本の經濟界立て直しの槓桿になると云つた。金解禁をする。物價が下る。輸出が恢復する。そして日本の經濟界が常態に復すると云ふのである。それは或はさうであらうかと思はれた。歐洲大戰以來、日本は金の輸出を禁止してゐて、世界の經濟に對して鎖國主義を採つた。世界の物價が下りつゝあるに對して、日本ばかり物價を釣り上げて置く、それは資本家を不當に儲けさして置く方法であつた。此物價の高い爲めに、庶民階級が如何に苦しむかは歴代の政府の眼中にない事であつた。所ろで此物價を釣り上げて置く政策はそれ自身の中に資本家擁護にならぬ原素を含んでゐた。物價が高い。それで一時は資本家は儲かるやうであるが、物價が高い爲めに、日本の品物は外國に賣れない。輸出が減じて輸入が增す。結局資本家階級も立ち行かなくなる。だから此所は一時の苦しみを忍んで、物價を世界の水準迄下げる。さうして經濟を立て直ほすと、それは相當に勇氣を必要とする政策であつた。民政黨内閣が金解禁を斷行したのは、此勇氣を示した點に於て賞讃に値する。所ろで、生糸が下る。綿糸が下る。米が下る。汎べての物價が下る。製糸業者が陳情する、紡績會社が苦しむ。それに金を貸してゐる銀行が悲鳴を擧げる。すると政府は慌てて、糸價釣り上げ政策を行はんとする。今に綿糸も、米も、其他汎べての物價を維持せんとするであらう。すると外科的手術

を始めた趣旨が全部沒却される事になる。患者が苦しめば、毒にも藥にもならぬ只の水を氣休めに與へるのはよい。眞に苦痛を減ずる有效な藥を與へる事はそれ丈け患者の苦しみを引き伸ばすか、或は手術の效果を減殺する事になる。畢竟するに宋襄の仁は大局を過まるに過ぎない。

金の輸出を禁じて、內地の物價を釣り上げ、人爲的に景氣を煽つて資本家を保護したのが政友會であつた。民政黨はそれを放漫政策として攻擊して來た。今日の不景氣は此放漫政策の當然の結果だと云つて來た。此議論は大體に於て正しかつた。それ故に民政黨內閣が金解禁を斷行して、日本の經濟を立直ほすと云ふ決心を示したとき、それは一般多數民の諒とする所であつた。然るに今日になつて、物價の下落に驚いて、物價釣り上げ策を行はんとするのは、如何に贔負目に見ても强い政治ではない。

尤も日本の財界としては今日が多難の時である。不景氣は日本のみでなくして、世界的である。物價は世界的に下落しつゝある。其上に、銀相場の下落、印度が日本綿布に對する關稅引上などが加つて、日本の物價下落の勢を助長する。だが日本人は齒を喰ひしばつても此不景氣時代を突破しなければならぬ。その覺悟をしたればこそ、國民は民政黨に絕對多數を與へたのではないか。然るに其民政黨が中途で挫折せんか、政友會が常習とする物價釣り上げ政策に屈服するならば、國民は民政黨に與へた絕對多數を取戾さんとする。そして形勢がかう變化した曉には、民政黨の形式的な絕對多數は、何の役にも立たぬであらう。

政友會は民政黨の此變節を取つて攻擊の材料にしてゐる。曰く昨年八月絲價補償法を公布するときに、政府は此法律には贊成しないが、議會で通過したものなるが故に公布する。然し、これは國家非常時でなくば適用しないと町田農相をして云はしめた。然るに今それを適用せんとする。町田農相の二枚舌だと。然らば政友會は現在に此補償法を適用するのに反對であるかと云へば、それは反對所ろか大贊成である。製絲業者救濟の急先鋒である。だから、政友會の攻擊は、政府は何故に俺れの說に贊成したかと云ふことに歸する。不徹底も極まれりで、例令政友會の云ふ所に十分の理由があつても、それは政友會も民政黨も同じく資本家を擁護する事のみを念としてゐて、彼等が平生云ふ所の國家を思ふと云ふ言葉は口頭念佛に過ぎない事を暴露してゐる。尤も政友會は今在野黨であり、少數黨であるが故に、それが口舌の雄たるに甘んずるのも聊か諒とするに足るが、政權を握つて、衆議院に絕對多數を有する民政黨が、其所信を貫

き得ないとすると、其所に民政黨の素質に或る弱い所があるのではないかと疑はしめる。強き政治とはそれは一つの假面ではないかと疑はしめる。されば民政黨の素質の弱き所とは何ぞや。これは自他共に研究する價値があるだらうと思はれる。

其精神的の内容から云へば今日の民政黨は種々の要素から作り上げられてゐる。其主もなるものを數へると、今より五十年前に大隈重信に依つて組織された改進黨の氣風、桂太郎が率いた立憲同志會になつたときの氣風、加藤高明の憲政會として八年間在野黨であつた時の氣風、床次竹次郎の率ゆる政友本黨と合流して、濱口雄幸の下に民政黨になつて以來の氣風がそれである。人物の内容から云へば、大隈系統は殆んど皆民政黨からは離れたか、然らずんば凋落した。大隈の兩翼と云はれたのは犬養毅と尾崎行雄の二人であつた。犬養は政友會總裁になり、尾崎は中立として一人旅をしてゐる。大隈の股肱であつた島田三郎、河野廣中、箕浦勝人は死んだ。高田早苗は民政黨の門外漢である。武富時敏は貴族院に隠れてゐる。僅かに町田忠治一人が今の内閣に列してゐる。近年民政黨を牛耳つた加藤高明、若槻禮次郎、濱口雄幸皆官僚出身であり、桂の同志會に依つて政黨人となつた人々である。現在の民政黨内の巨頭である安達謙藏（内務大臣）は官僚ではないが帝國黨、大同倶樂部、中央倶樂部と云ふ官僚黨の黨人として錚々たるものである。

かうして民政黨の勢力の中心が純政黨人から官僚出身の人々に移つて行く處に時勢の變化が現はれてゐる。これは民政黨に限らず、政友會にしても、床次、鈴木、中橋は官僚出身であり、久原は實業家として手腕を振つた人である。此等が勢力を占めて、元田、岡崎と云ふ如き純政黨人の時代は過ぎ去つたかの如く見へる。それを時代の變化と云ふは、議會政治の創業時代に於ては、單純に民權を主張する粗技大葉の議論で世間が滿足した。然るに今日の如く政治と經濟の交渉が複雑になつた時代に於ては、單純なる民權論は意味をなさない。現實の社會狀態が理論よりは一歩先きに進んでゐるが爲めに、實際政治家は行政の經驗やら、綿密な判斷力を必要とする。大言壯語が退却して組織的の頭が登場する。從つて又口の雄辯よりは金力の雄辯が重んぜられる。大隈系が去つて、官僚系が蔓る。尾崎行雄が去つて、加藤高明が殘る。それは總選擧毎に莫大な政治資金が要るやうになつた自然の結果である。

此時代の變化を象徴する一挿話がある。大正四年八月大隈内閣が大浦事件の爲めに辭職した。所で元老會議は大隈に内閣を改造して留任するやうに求めた。留任か否かにまだ決しない時であつた。早稲田の大隈邸に大隈と加藤高明が對座してゐる。

大隈は

「陛下から留任せよとの御沙汰があり、且つ又内閣は御即位大典を行ふべき重大な任務があるから、留任すべきであらう」と云ふ。それに對して加藤は閣僚の一人が議員を買收すると云ふ如き罪を犯したときは、内閣として連帶に責任を負はなければならん。それが責任内閣の本義である。かゝる場合に、内閣は留任すべきものでないと云ふことを、陛下に充分に奏上することが、大臣たるものゝ輔弼の責任であると云つた。此理義明白な加藤の意見に大隈は返へす言葉がなかつた。彼れは沈默して、天井に向つて頻りに煙草を吹かしてゐた。側に見てゐたものは、これは確かに大隈の負だと思つた。

内閣が大浦事件に連帶責任を取ると云ふ事に對しては司法大臣であつた尾崎行雄が反對した。彼れは大浦が行つた事は大浦一個が犯した罪である。外の閣僚はさうした事を知らず、知れば亦許して置く筈もない。だから内閣は留任すべきだと主張した。大隈は之に賛成して留任と決した。加藤、若槻、八代海相が辭職して、内閣は改造されたのである。加藤は最後迄、尾崎を大隈内閣に入れたのが失敗であつたと悔んでゐた。蓋し尾崎が司法大臣でなかつたならば、大浦事件が白日の下に暴露しなかつたと思つたのであらう。

尾崎を大隈内閣に入れた事には今は故人の代議士である木村柳太郎氏が斡旋してゐる。大隈は内閣組織の大命を大正三年四月十三日に拜受した。大隈は宮中から早稻田へ歸る途中に、加藤高明の所に寄つて、内閣の役割の相談をした。桂太郎が創立した同志會の官僚出身者を中心とする顔觸れであつた。翌十四日には犬養も尾崎も入閣しない事に一旦決定した。其夜は大隈邸には夜半過ぎ迄來客があつた。漸く客の去つた後に、永井は大隈を説いた。それは犬養尾崎二人共入閣しないのでは、世人は大隈内閣を純然たる官僚内閣と見る。世人が官僚と云ふものに對して深刻な反感を有つてゐることは何人も疑ふ事の出來ない事實だ。犬養、尾崎二人を入閣せしめる事が出來なければ、せめて尾崎一人は是非入閣させなければならぬと云つた。大隈は初めは永井の云ふ事を聞く樣子もなかつたが、後には加藤高明さへ承知するなら、尾崎を入閣さしてもよいと云つた。永井は直ちに加藤邸に電話を掛けて直ちに訪問すると云つた。大隈は其席に居た鹽澤昌貞氏と一緒に行けと云ふ。二人が加藤邸に行つたのは午前二時半であつた。

尾崎が大隈内閣に入れない理由は内務大臣の椅子が大浦に決定してゐた爲めである。永井は加藤に向つて尾崎を入閣せしめる必要を説いた。そして例へば司法大臣と云ふ如き伴食の想

位なら、尾崎に與へても差支ないではないかと云つた。加藤は伴食ならば承認すると云つた。永井は加藤邸より直ちに品川の尾崎を訪問した。それは夜も將さに明けんとする四時頃であつた。彼れは尾崎に向つて、シーメンス事件のあつた後の内閣を引き受けて、徹底的に綱紀肅正の實を擧げる爲めに峻嚴な司法大臣を必要とする。それには其清節に對して、國民が絶對に信用してゐる尾崎氏が最も適任である。だから是非入閣を承諾され度いと云つた。尾崎は二つの條件を出した。それは司法大臣の椅子を變更せぬ事と、大隈、加藤、尾崎が集つて、更めて内閣組織の相談をする事。此二つの條件を承諾すれば入閣すると云ふ話が纏つた。永井が加藤邸に歸つたのは十五日の午前八時であつた。加藤は此條件を入れて、大隈内閣は翌十六日に成立した。大浦はかうした經緯の爲め初めは農商務大臣になつてゐた。其年の暮れの議會が解散になつて、政府が愈々總選擧に臨まんとするに際して、大浦は内務大臣になつたのである。

此總選擧に於て二〇三名の政友會は一〇四名に叩き落された。今回の總選擧に於ける政友會の敗北以上の敗北であつた。政府與黨としては同志會、中正會、大隈後援會を合せて二四一名の絶對多數を占めた。其當時は議員總數が三八一であつた故に、此絶對多數は議員總數に對して六割三分强、今日の民政黨が議員總數四六六に對する二七三即ち五割八分强を有するに比較して、より以上の勝利であつた。今の内務大臣安達謙藏は大浦系の政治家として同志會創立に參加し、此總選擧以來、總選擧毎に黨の中樞に觸れてゐた。大隈内閣の總選擧には大勝を博したが、それから後寺内内閣、原内閣の時は酷く負け、清浦内閣は稍々勝ち、田中内閣の時は善戰して一名負け、今度の濱口内閣の時は大に勝つた。これ丈の年代記を並べて見た丈けでも、安達が如何に選擧の老戰士であるかゞ判る。彼れに採つては選擧が一つの藝術であらう。恰かもそれを嗜む風がある。一選擧區内の投票を三人位の自黨候補者に均分して、三人共當選さす。其手際の鮮かさを眺めて、藝術家的の滿足を得る。尤も上手の手から水が漏れて、餘りに巧妙なる策戰が破綻を生ずる事がある。例へば今回宮城縣で内ヶ崎作三郎氏が落選した事が其例である。

大浦内相は總選擧の統帥として前に云つた如く大勝をした。だが、彼れの沒落は已に其時に胚胎してゐた。此選擧に大浦内相に選擧違反の事實があつたとして、政友會の村野常右衛門が告發した。さうする爲めに村野は政友會總務を辭する程の決心を以てかゝつた。告發の内容は香川縣代議士白川友一を當選さす爲めに、白川から一萬圓出させて、對立候補を引込ませた。

其一萬圓を仲介者の大浦が取つたと云ふのである。これは訊政者たある。

政黨が戰線整理の爲めによくやる手である。此事件を高松の裁判所で調べてる内に、大浦に關する他の事件が暴露した。それは解散前の議會に於て、大浦は二ケ師團増設に賛成せしめる爲めに政友會代議士を買收したと云ふ事である。それで大浦は全然政界引退の身とならざるを得なかつた。

大浦の沒落は悲慘であつた。其頃司法次官であり、今は政友會の大立物である鈴木喜三郎氏の談として東京朝日が掲げた處に依ると、大正四年七月三十日の晩、大隈邸で閣僚全部の會議が開かれ大浦内相は

「甚だ面目もない事であるが、今日となつては最早致し方がない。先に尾崎君が閣議の席上で自分に對し收賄した事實なきかと質問された時、自分は斷じてさる事なしと明言した。その際は自分としてかくいふ外やむを得なかつたのである。もし尾崎君が自分を別室に招いて懇談されたとすれば、自分は事件の内容を明白に説明する機會を得たこと丶思ふ。然し事こ丶に至つたのは全く自分の不明であり又不德の致すところで何とも申し譯がない。唯友情深き同僚諸君を今日まで欺いた事は罪萬死に價する」と云つたとある。

警視總監であつた伊澤多喜男氏は其時分尾崎に會つて云つた。

「あなたは刑事政策と云ふものを御存じですか。[illegible]を言救するやうな事がよくない位のことは誰れでも知つて居ますが、歴代の内閣中議員買收をしなかつたものがどれだけありますか。近い話が原（敬）前内相の如きも明かに買收したといふ動きの取れない證據を私は握つて居る。然しそんなこと位で大政治家を葬ることは國家のため損失だと思ふから、私は自分一人の胸の内に藏つて居るんです」と語ると、尾崎は凡そ罪あるものを罰するのは當り前だ。原に證據があるなら縛るからこちらへ出して下さいと云ふ。（「其頃を語る」中の伊澤自身の談話）

加藤高明は尾崎の爲めに、同志會の心臟を刺されたと思つた。それ故に尾崎を内閣に入れた事を失敗だと悔んだのである。

尾崎が大隈内閣成立の當初から、大浦を目の敵にしてゐた事は事實である。大浦のみならず、加藤高明が内閣の副總理格である事にも不滿であつた。初め犬養は尾崎に向つて、

『大隈は加藤には頭が上がらない。加藤の云ふことが何んでも行はれる。此内閣は加藤内閣だ。だから、入閣するのはよせ』

と云つた。それを推し切つて入閣したのである。だが、尾崎が計畫的に大浦を陷れたとは思はれない。尾崎は司法大臣と云つても司法省には飛入りであつた。從つて司法官を手足の如く

動かす事をしなかつた。殊に純理一徹の彼れの氣性としては大浦が沒落して行く事を當り前として眺める外なかつた。恰も、矢張純理に動く現在の司法大臣渡邊千冬子が小橋前文相の起訴を阻止しないと同じ行き方である。

大浦事件に依つて、加藤、若槻、八代が退き、大隈は高田早苗、箕浦勝人、石井菊次郎、加藤友三郎等を入れて改造内閣を作つた。この時は官僚系が負けて思想的には尾崎が指導する大隈系が勝つた形である。同時にそれは後になつて大隈系が完全に排斥される素地を作つたとも云へる。現に其後一年して大隈内閣が倒れるに至つた事情を見ると、其所には大隈内閣と同志會の感情は元のやうに圓滿でない事が明白であつた。内閣の倒れたのは貴族院の攻撃、田健二郎、後藤新平、平田東助と云つたやうな山縣系の陰謀が一つの原因になつてゐる。だが、今一つの原因は同志會が政權を取り度いが爲めに大隈に詰め腹を切らしたのだと確信してゐる連中もある。大隈はまだ内閣を投げ出さない前に、早稻田に訪問して來た寺内に向つて

『この間も山縣公に話したのだが、此次ぎの政局は君に御苦勞願ふ事になつてゐる、

と云ひ出した。大隈の側に立つてゐるものは、大隈は政權授受の言質を與へてゐるのだ。大變な事を言ふものだと其場を外づした。かうして一方には内閣を寺内に渡ると云ふ事を山縣などに云ひながら、一方には大隈は辭表捧呈の際、其辭表の中に

「伏して以ふに子爵加藤高明は練達堪能の士にして、亦久しく世の重望を負ふ。伏して願くは陛下宸衷を垂れさせられ、此に臣が重任を解かせ給ひ、臣が後繼として、高明を擢用し給はむことを。」

と云つて居る。何れが大隈の眞意であつたか。或はこの推薦は同志會に對する義理でしたのみで、採用されない事は初めから期待してゐたのだと疑ふものさへある。

寺内内閣の成立したのが大正五年十月九日、大隈内閣與黨の三派(同志會、尾崎の中正會、大隈後援會の公友俱樂部)が合同したのが其翌日十月十日であつた。これから加藤の苦節十年が始まる。十年と云ふけれど大正十三年加藤内閣成立迄は丸八年たらずである。併しとにかく、其間憲政會を在野黨として持ち堪へたのは加藤である。其間に總選擧が三回あつた。加藤は私財一千萬圓をも費つたであらう。彼れは富豪岩崎を姻戚に有つが爲めに、此れ丈けの大金を政黨に費ひ得たと云ふのは事實である。併し他の利權を提供して、寄附を仰ぐと云ふには、彼れの性格は餘りに傲岸不遜であつた。だから、現代の政治家の中で、眞に綱紀肅正を唱へ得るものは加藤位だと云ふものすらあ

る。條件付きの金を取らなくても、政黨資金を出し得るならである。尤も資本主義其物が掠奪であると云ふ立場から云へば、別の議論が立つが、今日の社會狀勢から云へば加藤高明ほど綱紀を大上段に振翳し得る政黨首領は稀れである。彼れの人物經歷、其手腕抱負も一流であらうが、彼れの力の根柢は彼れの財産の上に存在してゐる。

桂が同志會を創立して死んだ故、桂と共に同志會創立に盡力した後藤新平は脱退した。色々の書物にも其片鱗が出てゐるが、後藤は脱退の動機を物語つた事がある。其云ふ所に依れば、同志會を盛立てゝ行くには二百萬圓の金が要る。百萬圓は後藤自身が拵らへる。加藤にも百萬圓出して呉れと云つた。然るに加藤は此提議に應じなかつた。後藤ばそんな吝な考へで大政黨が作れるものかと思つて、手を引いたのだと云つた。これは後藤の解釋であるが、加藤の方の考へは私は確かめる機會がなかつたが、それとは異るだらうと思はれる。或は後藤が百萬圓作ると云ふのを信用しなかつたか、或は後藤と共同經營を好まなかつたか。どちらにしても、加藤ほど財産を有つてゐれば、後藤と金を出し合はすと云ふ事には、氣乘りのしない方が普通である。

憲政會結黨式の時は尾崎が座長を勤め、加藤を總裁に推薦したら、次ぎに[illegible]を指名した。[illegible]、高田早苗、武富時敏、若槻禮次郎、片岡直温、濱口雄幸、安達謙藏となつてゐる。此時は尾崎は立てられてゐたが、加藤とは氣が合はない。原内閣の時、普選案を憲政會が提出した。其中に幹部は獨立の生計を營むもの、みに選擧權を與へんとする。尾崎はそんな條件を付けるのに反對した。そして、田川大吉郎氏と共に憲政會から除名されるに至つた。憲政會結黨當時の總務の顔振れを見、そして大隈系凋落を合せて考へると加藤の後繼者が若槻、濱口、安達と云ふ風になるのが、已に豫定されてゐたかの如く見へる。

大正五年から十三年迄の間に憲政會の數は總選擧毎に一九七――一一九(六年)――一〇八(九年)――一五四(一三年)となつた。此在野時代の末期に於ては、流石に苦節に堪へ切れないと云ふ黨員も出て來た。安達謙藏は當時を追懐して苦節十年だつて、大いして苦るしいとは思はなかつたと云ふ。併しそれを苦しいと思つた連中は非政友合同を企てた。犬養の國民黨とも連結せんとするのである。それは加藤に對する一種の不信任案であつた。新聞が此運動に加藤排斥の魂膽があることを素破抜いたが爲めに、終に物にならなかつた。憲政會では後に朝鮮の政務總監になつた下岡忠治が此運動に加擔してゐた。それが爲め

に加藤は終に下岡と打解けなかつた。下岡の送別會が帝國ホテルで開かれたとき、加藤は出席せず、安達が送別の辭を述べた事もあつた。

此在野黨時代の大正六年の總選擧で、濱口は高知で落選した。それから二年の後に補缺選擧で出る迄は、院外團の徽章を付けて衆議院の控室に出入してゐた。そして默つて黨の仕事に勉强してゐた。憲政會即ち後の民政黨の强味がある所の、地味な、そして割合に堅實な氣風は此在野黨時代に養成された。言ひ換へれば、加藤が此在野黨時代を維持して呉れたから、かうした鍛錬も出來たのだと云へる。

大正十四年に加藤が死んだとき、若槻が總裁と總理になつた。若槻は加藤の相談相手であつた。だが必ずしも加藤と性格を同じくしてゐるとは云へない。加藤の鈍重さは寧ろ濱口に讓られてゐると云つてよい。のみならず、若槻に最も缺けてゐるのは財力である。殊に三菱を背景とする仙石貢は若槻を捨て、顧みない。昭和二年春の議會を解散せんと欲しても、金なくつて果して解散出來るや否や。若槻が不評なる三黨首妥協を買つて出た事にはさうした事情も伏在してゐたのではあるまいか。兎も角も財閥の背景を有たずして、現代の政黨首領となつてゐる事は困難な事業だ。併し若槻は議會を解散して議員を增す代りに、後に憲政會と政友本黨とが合同して民政黨となる素地を作つた。それは從來の憲政會に大なる力を加へたものである事は誰にも否定出來ない。

昭和二年四月若槻内閣が倒れ、其六月一日民政黨が結黨された。其時の議員數二一九。濱口が總裁になり、若槻床次が顧問であつた。濱口は病氣の爲めに餘り出て來ず、若槻も引込み勝ちであつた。床次のみが南船北馬、よく黨の爲めに働いた。今の安達内相すら、民政黨は非常にいゝ後繼總裁を得たと喜んでゐた。それが一年續いた後、床次は突然民政黨を脫黨して新黨倶樂部を作り、軈がて政友會に復歸した。

だが、初め民政黨に合流した政友本黨約六十名の中、半數は民政黨に踏み止まつた。今回の總選擧に際して、床次に從つて政友會に行つたものゝ中で、當選したものは十二、三名に過ぎないに對して、民政黨に殘留した方では三十名から出てゐる。矢張政友本黨の合流は民政黨に一つの勢力を加へた事は爭はれない事實である。其力には彼等の長老たる山本達雄男の財力が少なからず貢獻されてゐるだらう。

今の民政黨内閣の閣僚其ものは富豪ではない。濱口、安達、江木何れも金持ちとは見へない。だが、此内閣を支持するものには富豪若しくは富豪を動かし得る人々が居る。仙石が三菱に

関係ある事は今更云ふ迄もない。井上蔵相は財界に勢力を揮ふ富豪たち[illegible]事が出来る。彼等が今回の選擧資金を作つたと思はれる。斯した財界の援助を得て初めて成立する政黨であり内閣である所に、今日の政黨の弱味がある。民政黨が絶對多數を占めながら、尙且つ、其金解禁の政策を徹底せしめ得ない理由が其所にあらう。

假りに濱口首相が加藤高明の如く何千萬圓かを有する富豪であつたとする。そして彼れは他人から何の財政的援助を受けずに民政黨の絶對多數を作り上げたとする、其場合には金解禁の結論たる物價下落、經濟立て直しに突貫したであらう。其爲めに自分の財産も、他人の財産も木ッ葉微塵になる。だが國の爲めには已むを得ないと思つたであらう。悲哉彼れはそれほど恵まれた境遇に居ない。彼れの作つた絶對多數は財界有力者の援助に依つて作られたものだ。人情として其人々を餘りに慘めな目に遇はすに忍びない。從つて物價下落の政策が不徹底になる。

殊に不幸な事情は民政黨は今度の總選擧に於て、自力で選擧を爭ひ得る者、即ち相當の財産があるものを多く立候補さした。即ち金持ち議員を相當に作つた。民政黨内閣が財界に損害を與へる政策を行はんとすれば、反對は先づ自分の黨内から起る事を覺悟せねばならぬ。物價下落を中止する事が、政策的の自殺であるならば、物價下落を促進する事は黨自身の自殺である。民政は絶對多數を有しながら其所信に邁進する事が出來ない、

現代の政黨は財力を其力の基礎としてゐる、茲に其弱さがある。例へば民政黨が五百萬圓の金を散布して五百萬の投票を集め得たとする。それは無産黨が五十萬票を集め得たに比較すれば、十倍の力のやうに見へる。だが、假りに無産黨に投票する五十萬人は、一圓づゝ買ふ代りに、一圓づゝ寄附する傾向のあるものと假定する。さうすれば五百萬票の方は恐るゝに足らず、却つて五十萬票の方が眞實の力として認められなければならぬ。

民政黨が財閥の援助を受ける間は、其形體が如何に大きくとも、其内容に弱味を含んでゐる。民政黨々員は全國に二百萬とか三百萬とかあると云ふ話しだ。濱口總裁は此黨員から一圓宛の黨費徴收の意志はないだらうか。その黨費を徴收して見て、そして尙殘留する黨員のみが眞實の黨員である。其時になつて尙大民政黨であるならば、それこそ眞實に尊敬すべき大民政黨である。だが、今日の選擧過程を通して作られたる大民政黨には、只單に其大なるが爲めに敬意を表する理由がない。それは資本家の援助を差引けば、殘る所幾許かと、誰れでも直ぐに考へ及ぶからである。

打倒官製青年團

——帝國主義の教會制度として——

大宅壯一

一

色の幾分薄い、從つてまた幾分安つぽいカーキー色の服が、最近しばしば往來でわれわれの眼を遮りはじめた。そして火事、祭禮、演習、交通整理、勞働爭議等々の事故が起きた場合には、たちまちこのカーキー色で自治體が埋められるやうになつて來た。それはいふまでもなく官製靑年團の「目覺ましき發展」を語るものである。

實際、最近數年間において、市町村靑年に對する資本家地主側からの敎化事業は急激に發達し、著しく組織化されて來た。封建時代から全國の各自治體に、「若衆」の名において結ばれてゐた靑年の集團は、いつか「靑年團」といふ近代的に組織化された名稱を與へられ、明治神宮への勞働奉仕、日本靑年會館への强制寄附、敎化總動員、陸軍大演習參加等々の機會に、漸次反動思想の旗の下に中央集權化され、今では處女會と共に、年々何等かの形で國庫から三百六十萬圓の支出を受けて、完全なる全國的、政治的統制の下に、對外的といふよりはむしろ對内的の一大反動勢力としての××な活潑に果しつゝあるのである。

かやうに全國自治體の靑少年分子が中央集權的に組織せられ、反動勢力に編成されたのは、つまり「官製靑年團」化しはじめたのは、ごく最近のことである。

二

今から十數年前までは、靑年團の組織も機能も統制も、すべてその自治體に屬してゐた。私の鄕里は京都と大阪の中程にあつて、かなり夙くから近代文化の影響を受けてゐる一農村であるが、それでも私がまだ村童であつた頃、卽ち大正五六年頃は、德川時代からの「若衆」が漸く「靑年團」と名を改めはじめたばかりで、實質はほとんど德川時代そのまゝであつた。

その頃の靑年團の機能は、喇叭を吹いて通りを練り步いたり、敎化總動員に參加したり、罷工××をなしたり、强制貯金をしたりすることでは

なかつた、村道村橋の修理や、渡舩のための川浚ひの如き、自衛的な義務勞働に服する以外、祭禮や正月やお盆や花見などの際に、集つて一緒に樂しむために出來てゐたのである。

從つてその組織も、原始共產體におけるが如く、長幼の序以外に何等の差別をも認めない完全なるデモクラシーであつた。會合の日には、地主の息子も小作人の伜も平等に年齡順に配列され、彼等の日常生活を規定してゐる階級的禮儀作法とは、全然異つた規律のもとに統制されるのであつた。そしてそれに違反した場合の刑罰としては、主として衆人環視のもとで面責されることであり、もつとも重い場合には、その全家族が「村外れ」を食ふ、即ちその自治體との一切の交渉を絕はれるのであつた。

三

だが、歐洲大戰以後、日本の資本主義は急激に發達した。それと同時に、それと對立する反對勢力が、國內に擡頭しはじめた。同盟罷工や小作爭議の件數が幾何級數的に增加して來た。

こゝにおいて日本の支配階級は、はつきりと敵を意識し始めた。そして周章てゝそれに對する備へに取りかゝつた。その備への一つで、しかも今のところ一番成功したかの如く考へられてゐるのが、問題の「官製青年團」の組織である。

殊に、ロシヤのボルセヴヰキ革命以後は、搾取階級の被搾取階級に對する階級戰術が意識化すると共に組織化した。反資本主義的イデオロギーが實踐的に擴大し、わけても農村青年に[illegible]にまでプロレタリア・イデオロギーの把握、支持、實踐化の大衆的な傾向を示しはじめると共に、支配階級は、青年を誘惑し得るところのあらゆる方法を講じて、青年團組織の擴大、青年層に對する支配階級の精神的實踐的勢力の增大を計劃した。

かくして出來上つた「官製青年團」の××性を見拔くことは甚だ容易である。しかもその指導者である資本家地主の手先たちは、それを巧みに隱蔽することによつて、意識水準の低い青年層を反動勢力に結成しつゝあるのである。このことは彼等のスローガンである「國民思想の普及」、「體育の徹底」、「自治生活の訓練」等を檢討すれば一目瞭然である。

「國民思想」といひ、「國體觀念」といふも、要するにそれは國家若くは全民族の名に隱れて、搾取に×んずる思想を强制するからくりに外ならない。從つて「思想國難」といつても、それは決して「國難」ではなくて、たゞ支配階級にその搾取を廢絕させられる恐怖を與へるやうな客觀的情勢が發生したにすぎない。それにも拘らず、一般プロレタリアの子弟をこの支配階級の國難節に調子を合せて踊らしめ、實はプロレタリアの喜びであるべき筈の支配階級の××をプロレタリアの恐怖たらしめることが、青年團といふ組織の主要なる任務なのである。いはゆる健全なる思想」とは、つまり支配階級の恐怖を恐怖と感ずる思想に外ならない。

又、「體育の徹底」とは何であるか。いふまでもなく、あらゆる體育を通じて青年に軍事教育を施し、青年團を××××會化することであ

る。火事に、交通整理に、出迎へ見送りに、その一擧一動は完全に軍隊的敎練である。目的は決して「體育」それ××にあるのでもなければ、自治體の幸福にあるのでもない。最近、各役場や小學校で行はれてゐる青年訓練所の内容が、ミリタリズムの理論と實踐であるやうに、「體育」の名においてミリタリズムが青年層の間に積極的に、計劃的に注入されてゐるのである。時にはそれが娛樂的スポーツ、運動會等の形で現れてゐようとも、要するに、「體育の徹底」とはミリタリズムの徹底に外ならない。

最後に「自治生活の訓練」とは、今日の青年團にあつては果して何を意味するか。事實は何よりも雄辯にその本質を暴露してゐる。各青年團の團長、副團長、名譽團長、主事等々の指導分子は、一體いかなる人々によつて占められてゐるか。退役將校とか、町村長とか、小學校長とか、どこかの若旦那とか、資本家地主でなければ、その公然の手先たちがそれらの地位をすべて占領してゐる。果して團員が自らの意志でかうした人々を推擧したのであらうか。否、官製青年團においては、團員が自分の入つてゐる組織に對して、意見を主張しうる權利がほとんど認められてゐないのである。

しかもかうした指導分子は、さまざまな印刷物その他を通じて「中央」から來る訓令――巧妙なる支配階級の宣傳戰術によつて自由に操られてゐるのだ。從つて名は「自治」であつても、一から十まで支配階級の指令によつて動いてゐるのであつて、そのすべての活動は資本家地主のための活動であり、團體内の自治は事實上完全に無視されなければ、官製青年團の最初の最大の使命たるブルジョア的反動敎育を施すことが出來ないのである。

四

それでは、何故に今日多くの青年が、その大部分はプロレタリアの子弟であるにもかゝはらず、かうした反動團體に自ら進んで加盟するのであらうか。

概して反動思想それ自體は、一般大衆、殊に青年にとつて大きな魅力であるとは考へられない。今日發行部數の大を誇つてゐる反動的通俗雜誌、主として講談社系の諸雜誌も、決してその反動的傾向の故をもつて賣れるのではない。あの有田ドラッグ式誇大廣告、低級卑俗なる娛樂文學、荒唐無稽極まる立身出世譚、詐欺にも等しい金儲法傳授等々の好餌をかゝげて無自覺な民衆をおびき寄せてゐるのである。

それと同樣に、官製青年團も、意識水準の低い青年を巧みに××する多くの好餌をかゝげてゐる。そしてこゝでも反動的通俗雜誌の場合と同樣に、勤儉貯蓄、立身出世といつたやうなモットーが採用されてゐる。だが、これらのモットーが實際的魅力と威力とを具へてゐたのは、資本主義の成長期のことであつて、失業者の洪水の中に生きてゐる今日の青年にとつては、それらはもはやお伽話としてしか耳に響かなくなつて來た。從つてかつては今日の成年者の血を沸き立たせたこれらのモットーも、今ではもう青少年を惹きつける力をほとんど失つてゐる。二宮金次郎式勤儉貯蓄は、一時高柳淳之助式「一萬圓貯金法」に人氣を奪はれ

たが、後にはいづれも民衆の心から離れてしまつた。否、彼等の生活からさうした餘裕が失はれてしまつたのだ。又たとへ少し位の餘裕が出來ても、青年團から配布された強制貯金箭よりは、坂東妻三郎のポスターの方が今日の青少年の大多數の人氣を捕へてゐることは、爭はれぬ事實である。

それよりも、劍劇と軍事教練によつて鍛へられた青少年のヒロイズムに訴へるものは、あのカーキー色の制服制帽であり、徽章であり、團旗であり、喇叭である。

昨年東京の近郊で頻々として火事が起つた。放火であることはわかつたが、どうしても犯人が擧らなかつた。ところが、驚いたことには、それはその町の青年團の喇叭手で、自信のある自分の腕前を人々に見せる機會をつくるために、自分で放火して、早速警備隊として出動してゐたといふのである。これによつて見ても、青少年の幼稚なヒロイズムが、いかに彼等の理性的な批判力を失はしめてゐるかゞわかる。この心理を巧みに反動的に利用して出來上つたのが、今日の官製青年團である。

團員の大部分は、少年から成年に移る過渡期にあるのである。彼等自らは大人としての待遇を望んでゐるが、大抵の場合それが許されない。從つて社會がもし彼等を大人として遇するならば、彼等は喜んで、無報酬でもつてどんな勞役にでも敢然として服するであらう。

然るに、カーキー色の服を着て玩具でない喇叭を公然と吹けるといふことは、少くともその日、その時間だけは、社會が彼等を大人として否大人以上のものとして遇してゐる證據である。何となれば、その時の彼等は、軍人と同格若くはそれに準ずる存在であり、しかも軍人に、[illegible]の低い人々の間にあつては、巡査と共に民衆の上に、民衆の指導者若くは統率者として、多かれ少かれヒロイックな映像を示してゐるからである。彼等の平素の生活が、支配階級若くはその手先によつて、踏みつけられ、壓へつけられてゐればゐるほど、かうしたヒロイズムの捌け口に對する要求が昂まつて來るのである。

かくてすでに沒落期に入つた資本主義國家は、出來るだけその餘命を永らへるために、手段を選はなくなり、この心理を利用して青少年の潑溂たる進歩性を阻止し、彼等を反動的警備隊に編制することによつて、彼等自らの階級に矛を向けさせるべく、あらゆる方法を講じつゝあるのである。

五

官製青年團の構成分子の大部分がいかなる社會層に屬するかは、すでに述べたところによつて明らかである。中等以上の學校に入學する者には、勸誘もしなければ、又勸誘をしても加盟するやうなことはない。小學校を出るとすぐに働かねばならないやうな貧しい家庭の子弟を、しかも社會機構はもちろん、まだ世の中のことが何にもわからない年頃をねらつて、戸別的に團規を送つて入團をすゝめるのである。それには、丁度紡績會社が田舍へ女工を募集に行くときのやうな誘惑的な文字がつらねられてゐることはいふまでもない。

かうした無産青年層は、日本に於る十四歳から二十四歳までの總人口

數約一千萬人中の約八割を占めてゐる。ところで、全國に存在する約三萬の男女青年團の加盟人員は三百八十萬人であつて、それは全無産青年層の約半數である。しかもそのほとんどすべてが、官製青年團がいかなる本質をもつてゐるのであるかも知らずに、その反動的統制に服從してカーキー服に喇叭を吹きながら、この階級鬪爭の日に〳〵尖鋭化しつゝある社會を横行してゐるのである。

今日の日本が當面してゐる政治的經濟的情勢がいかに深刻化してゐるかは、前にものべたやうに、支配階級はすでにはつきりと敵を意識し、一切の教化機關をあげて反動思想の宣傳に力を集中し、教化總動員や青年團の大演習參加等の非常手段まで採用して、萬一のために具へつゝある事實に徴して明らかである。

六

これまで「青年團」の問題は、極く少數の人々にしかその重要性が正當に認識されてゐなかつた。「階級的に目覺めてゐる」と己惚れてゐるインテリゲンチヤの大部分にとつても、「青年團」といへば、××××への勞働奉仕を嘲つたり、カーキー服や喇叭の非藝術を罵つたりする程度に留つてゐたのである。だが、この問題はどんなに重大視しても重大視しすぎる恐れはないのだ。而も支配階級の側においては、ずつと以前からその重要視を認識してゐるのだ。

資本主義經濟が今日の如く發達して單純勞働の時代となり、機械と分業の發展は、婦人をも生産關係の中に動員すると共に、少青年工にも重要な部署を與へてゐるのである。一家の主人よりもその息子を安い賃銀で搾取した方が、より「能率」的で、より「合理」的であるからだ。今日青年勞働者の生産關係内部における地位を統計によつて示せば次の如くである。

一、青年勞働者の産業別分布及びその總勞働者數との比較

産業別	〇—二四歳未滿	總勞働者數
窯業	二四、〇八五	四九、八八五
金屬	二六、七九七	七三、八六四
機械器具	七一、九八六	二〇二、〇四六
化學	二七、〇五八	五八、〇二九
纖維	五九三、一六六	七二八、五七四
製紙	一二、九四二	二七、七二八
皮革角羽毛品製工	一、二〇六	三、一四二
木、竹類作工	一〇、九九〇	二四、九五七
嗜好品飲食料	四二、九九四	六八、九三五
被服類製造	一七、一四三	二四、七一六
土木建築	二七八	六九四
印刷業	二〇、四〇四	三二、七五三
學藝娯樂品	五、〇三九	八、二〇七
瓦斯、電氣	一、一二八	四、六六六
其他の工業	三、三三七	一〇、九四三
合計	八五八、五五三	一、三一七、一三九

鑛山勞働者比較	
總數	一五三、五八七
十四歳未滿	五四二
十五歳未滿	二、九九七
二十歳未滿	四八、九三七
二十歳まで合計	五二、四七六
二十歳以上	二七九、九二

二、工場勞働者年齢別一日平均賃銀表

年齢／性別	男	女
一四歳未滿	圓錢 〇、七三	〇、五九
一四—一五	圓錢 〇、八九	〇、六六
一六—一七	圓錢 一、一三	〇、九〇
一八—一九	圓錢 一、五九	〇、九六
廿—廿三	圓錢 二、一二	一、〇三
卅—五九	圓錢 二、五八	一、〇二
總平均	圓錢 二、二〇	〇、八八

この表によれば、青年勞働者は全勞働者數の約八割に及んでゐる。近代工業がかくの如く青年工を重要視するに到つた第一の原因は、いふまでもなく賃銀の低率であつて、それは成年勞働者の約五割にしか當つてゐない。以前の半額の可變資本で、以前よりも生産率を増加させうることによつて事實青年の社會的地位は經濟的に保證されてゐるのである。

この確固たる地位は、成年勞働者の利害と、表面的には對立してゐる。生産社會にあつては、青年工や女工は、一人前の仕事をしてゐるが、一度家庭に入れば、その經濟的主權はその父兄にある。父兄は失業して漸次産業豫備軍に追ひこまれて行くが、その子弟の得た賃銀は、親權によつて家庭經濟に沒收されねばならぬ。

もし青年勞働者のすべてが、自己の經濟的地位の確實性を自覺し、進んで自己の社會的、家庭的地位を批判し、それを正當化することを要求するならば、果してどんなことになるであらうか。

第一に、親權は打破されねばならぬ。

第二に、成年と青年との社會的差別が撤廢されねばならぬ。

もつとも近頃は、青年男女の家庭における生活は一般に以前よりもよくなつて來てゐる。親權の絶對性は、内容的にも形式的にも崩壞しかゝつてゐる。だが、それは今のところまだ〳〵根強くはびこつてゐる。生産關係の中で確固たる地位をもつてゐるとはいへ、青年勞働者はまだ「極端な封建時代の職人的な徒弟制度によつて極度の搾取と屈服を強ひられてゐる」のである。經濟的自由はまだ政治的自由を伴ふに到つてゐない。わけても農村における小作人の子弟の境遇はもつと悲慘なものであつて、今なほ農奴の域を脱してゐない。

又家庭における封建性は、そのまゝ社會にも持越されてゐる。普選が實施されても、甚だしい年齢制限に阻まれ、二十才以下の青年は政談演說を聽きに行くことすら出來ない。そしてあらゆる場合に、さま〴〵な束縛と不自由に甘んじなければならない狀態である。

今日の社會においては、大多數の青年は無言の被搾取者である。彼等が自己の實力と自己の地位のみじめさとを悟り、この束縛からの解放を望んで全身の血を沸き立たせて奮ひ立つたならば、そのときこそ、ブルジョア社會は完全に崩壞し去るであらう。

無言の被搾取者をして永久に無言の被搾取者たらしめよ！——これが無産青年大衆に對する資本家地主のスローガンであろ。この根本目標に從つて、資本家地主によつて構成されてゐる現在のブルジョア政府は青年大衆に對する一切の抑壓方針を樹立し、實行しつゝあるのだ。そし

てそのもつとも大きな、もつとも露骨な、もつとも組織的な表現が、全國的に統一されてゐる官製青年團であり、その反動的敎化運動である。

七

今や、世界の帝國主義諸國家は、再度軍備縮少の名のもとに、敵對列國の武力調査にいそしんでゐる。彼等の一擧一動は、平和の衣に包まれてはゐるが、事々に明白な戰鬪意志を不消盛式に露出してゐる。從つて次の帝國主義戰爭はいつ勃發するかわからない。

それがために、無智の被搾取者を一層無智ならしめるために、一切の努力が集中されてゐる。カーキー服と喇叭で誘惑した青年を、巧みに帝國主義國家の番兵に、「肉彈」に仕上げようとしてゐる。

打倒せよ、官製青年團を！　それは帝國主義の常設的敎育制度だ。今こそ、それを青年自らの手に奪ひとつて、自主的組織に改め、反動的意圖、反動的支配を追放して、それらに對する青年自らの××團に編成し直されねばならぬときだ。

黒船・えぴそおど

春海宏



「黒船・えびそおど」序話

所謂「黒船」といふのは、嘉永六年六月三日、提督ペルリの率ひる黒船四隻が、浦賀沖に投錨して國書を齎した。それをいふのである。

が、これ以前にも「黒船」は來た。

弘化三年五月二十六日、辰巳の暴風で、相摸灘は荒れに荒れてゐた。

三崎半島の、城ヶ島のかけは、今も昔も變らぬ、相摸灘一帶の唯一の避難港であるが、この日の暴風に、頻りに避難して來る漁船や便船が、

「異國船が、暴風の中に行惱んでゐた」

と、傳へた。

浦賀番所では、此等の船頭を取調べた。

尾州小野浦武兵衞船の申立て

「廿四日、横須賀沖合にて異國船に出合ひ大船の方地方(ぢかた)より走り來り、小船の方、沖合より來り、兩艘とも一同船掛りいたし、大船の方黒船中通り白筋二段、大筒凡五六十挺程も片々へ三段備へ、檣三本、やり出し一本、帆十三程も卷き、長さ凡そ五六十間位と見え、人數八九百人乘組可申哉と被存候」

と、ある。また、遠州掛塚平治郎船の、船頭與三郎は

「廿五日夕方、同樣異國船を見かけ、鐘太鼓を打鳴し、大筒打放ち候に付……」

漸く逃げて來たといつてゐる。



弘化三年米艦來航當時の警護の圖。わが海防界の始祖といはれる下岡蓮杖が寫したもの

この異國船は、風浪や、靜まつた廿七日四つ時分、漸く城ヶ島のかげへ避難して來た。それは、ヒッテレ提督の指揮による米艦二艘なのだが、驚いたのは三浦岬の漁師たちである。

三崎東町の、杢兵衞、松兵衞の漁船二艘に水主(かこ)を殘らず丸はだかにて押立て、浦賀番所へ注進、浦賀番所の三崎出張所からは、陸路早打御注進といふ譯で、早くも旗差物で警固した。そして晝夜とも篝火を焚いて、總房灣相州浦々まで野陣立て怠りなく、嚴重な警戒であつた。

黒船からは、上陸させず、結局、水、薪、食糧などを供給して、七日に退船させた。

しかし海上の暴風は相變らず續き、純然たる帆船であつた當時の「黒船」は、航行難でまた戻り、同月晦日に城ヶ島のかげへ入つて來て、風浪の靜まるのを待つて、七月二日に出帆したが、旗指物の騷ぎは、前と同樣であつた。

この時に、黒船へ供給した、食糧などが面白い。

白米一俵、玄米一俵、籾七俵、小麥二俵、梨子二百籠、杏四斗、桃千六百箇、林檎千七百五十箇、梓臘二斤、大根種子三台、瓜二百七十二本、隱元豆一石二斗八升、茄子千五百箇、薩摩芋三十四貫三百匁、大根五百本、菜百束、人參六十本、鷄三十八羽、南瓜二百箇、眞桑瓜四百、薪五千百八十把。

といふのである。

次いで、デネマルカの船（丁抹）、イギリス軍船、など入港したが、薪水の供給で歸つて行つた。

これ等は、浦賀詰下田廻船方臼井正箴の手記によつたものである。

かうして、嘉永六年の、ペルリ來航となつた譯で「黒船時代」は、こゝから初まる。所謂「維新革命」による、封建制度の崩壊を來した直接動因としての、黒船時代の歴史は餘りにも有名なのだから、こゝにそれは省くが、ペルリは來航とともに、頻りに、その領土的野心のないことを告げた。

彼れが、二度目に來航した安政元年の三月に、横濱の村の有力者石川半右衛門に、黒船の上で扇子に書いて與へたのが、

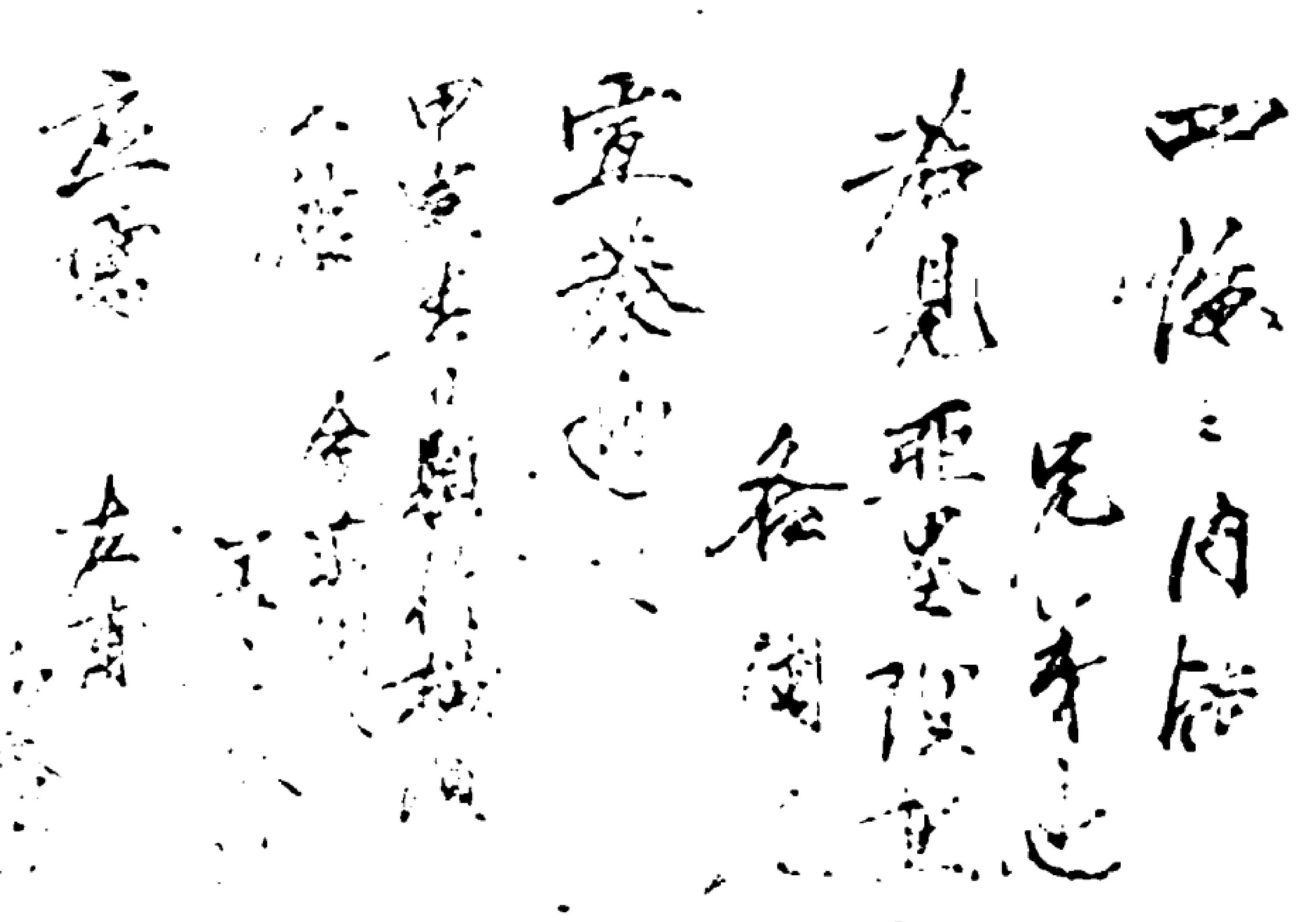
Be friendly to all American
Oluier N, Perry
Secretary to the Commander
In Chief N. S. Steamer.
Frigate Powhatan Yedo.
Bay march 3rd 1834.

と、いふので、その横に、黒船の通辭、支那人羅森が、譯して

四海之内皆兄弟也　若兄亞美利駕各國人、宜恭迎之
甲寅三月初三日於火船上、合衆國人[illegible]

とある。その後黒船の支那人通辭、羅森や向喬など[illegible]に此れを書いて與へたので、今に殘つてゐるものもあるが、ペルリの直筆原文の扇面は、紛失してしまつたらしい。

で、黒船時代は初まつたのだ、この時から、斷髪令の出る頃までを「黒船時代」として、話題を探すことにしやう。



ぺるり來[illegible]人に與へたもの

飜譯一枚二百兩

それ黒船が來た、われこそは、外國通の新知識とばかり、飛出した連中、外國でさへあれば、和蘭語で間に合ふと思つてゐたのであるから、英語の判るはずもなく、頗る面喰つたものである。

だから、安政元年正月十七日、横濱碇泊のペルリ艦隊のマドロス共が、四隻のボートに分乘して、本牧鼻に至り、十二天の

岩に、十七の「異國文字」を彫りつけた、といふので大騒動となつた。

それは、何の意味か判らない文字であるのだが、

『大陰謀にちがひござらぬ』

と、いふ譯で、警固の因州藩では、すこぶる面喰つて、早舟を仕立て、江戸幕府へ注進したほどであつた。

しかし、横濱開港とともに、和蘭語は、だん〴〵英語に移つて行き、星亨、横山孫一郎、渡邊牧太、矢野次郎、富永冬樹、品川の幇間小三の息子の清水異之助などといふ人々が、英語通辯をやるやうになつた。

しかし、此の連中の飜譯振りも、今から考へると抱腹もので

T. Cloths.(天竺金巾)を、ティ羅紗、

Turukey Reds.(紅金巾)を、トルコ好み赤色、

Italian Cloths.(毛朱子)を、イタリア羅紗

Victoria Lawns.(寒冷紗)を、皇后好み薄絹

と、いふ譯し振りであるから、さつぱり、判らない。流石の織物取引商も、外國商館から來た約定書を、折角飜譯しては貰つたが、實物が來るまでは、譯の判らないまゝに放つて置く外はなかつた。



黒船の水兵が、本牧鼻へ刻んだ文字。當時の「讀賣り」

こんな有様で、英語通辯の看板をかけてゐる先生達が、所謂「ティ羅紗仲間」なのだから、少し好い飜譯を欲しいとなると、目の出る程な、飜譯料をとられたらしい。當時、高島屋がティ羅紗飜譯では、面白くないとあつて福地源一郎氏に、ビル・オブ・レーディングの譯を賴んだ。その一枚の飜譯料が、二百兩であつたといふ。

その一枚なるものが、四百字詰めか、二百字づめか、或ひは千字あつたか知らないが、兎に角、その頃の貨幣價値での二百兩だから、まさかと思はれる。

『いや、噓のやうですが、ほんとうの話しですよ』

と、佐久間象山先生の學僕として、横濱へ來て土着した、鈴木鄰松翁が、語り殘してゐるところを見ると、本當であつたらう。

ともかく、横濱の、商人達は、一番これに悩んだと見えて、英語は勿論のこと、第一、羅馬數字が判らない。

そこで、これも鈴木郡松翁が考案して、

1(棒)、2(の二)、3(る)、4(挾函)、5(顔)、6(鼻)、7(鍵)、8(瓢箪)、9(高張)

といふ、象形的聯想的記憶術をつくつて、皆に覚えさせた。

ちよん髷姿の、横濱の輸出入商が、商賣のひま〳〵に、

「いちぼう、にのいち、さんる、しはさみばこ、ごかほ、ろくはな……」

暗誦、これ努めた有様が、微苦笑とともに想像されることではある。

鶏、米、角力、てれがらふ

相州、横濱村で、ミシシッピー艦隊の提督ペルリと、徳川政府の全權林大學頭とが、開港談判をはじめたのは、嘉永七年正月で、所謂ペルリ條約の調印を終つたのは、三月三日であつた。

幕府が、漸く開港の腹をきめたといふので、黒船では、二月十五日、將軍への贈物を陸揚げした。

汽車、電信機、懐中銃、海圖、望遠鏡、時計、鏡臺類、等々等、いろ〳〵なものがあつたが、これを陸揚げすると、應接所の庭で、汽車の模型を廻らせ、電信機の實驗をした。

「火の車が走るさうで、牛も馬もなくて、ひとりでに走るさうで……」

「てれがらふといふてな、針金の上を、手紙が走るさうだ」

「ほんとうかな……」

「ほんとうだと、飛脚は、あがつたり、だね」

「行つて見やう」

と、いふ騒ぎで、黒山のやうな見物人だ。應接所の廣場では丸く線路を設けて、模型の汽車ではあるが、素晴しい勢で走るので、皆をアッと感心させたが、いくら見てゐても判らないのは、電信の方だ。

いまの燈臺局のあたりから、野毛山の上へと、張り渡された一本の針金を見つめて、群集は去らうとしない。

「この針金の上を、手紙が傳はつて行くんださうですよ」

「へえ、御覧になりましたか」

「いゝえ、まだなんですよ、晝飯を喰ひに歸りましたから、その暇に傳つて行つたのかもしれません。でも、また傳ふでせう」

「どんな風に傳はるんでせうな、別に、仕掛けもないやうですが……」

「さあ、やつぱり、ぶら下つて行くんでせう」

で、こんな會話が至るところで聞かれ、暮れるまで、群集は去らなかつたと、古老は語つてゐるが、これは成程、何時のまに傳はつたか判らない筈だ。

さて、幕府では、贈物を貰つたので、この返禮の贈物を、二月廿六日に應接所に陳列し黒船に贈つた。

日本貨、日本刀、漆器、陶器等等、五十餘種に達したが、その贈物のうちで、面白いのは、白米三百俵に、鷄三百羽があつたことだ。黒船のヤンキー連、さぞ毎日「チキン・ライス」ばかり喰はされたことだらう。

が、それは別として…。

當時の外務大臣である外國奉行たちも、青い眼や茶色の眼をして巨大な體軀をもつてゐる紅毛人の前には、一種の壓迫感といゝ、ひけめを感じたらしい。

『いかゞで、ござる、江戸力士を連れて行つては……』



異人を驚かした江戸相撲

(上)その體軀を檢査して驚いてゐる圖。筆者不明横濱圖書館藏

(下)黒船へ送る米俵を手玉にとつてゐるところ。當時の讀賣

『なる程、それは名案でござる。あれなら、毛唐人にも、ひけはとるまい』

『さう〳〵、それで一つ驚かしてやらうでは、ござらぬか』

奉行達の鳩首協議の結果がこれである。民族的尊嚴を保つために、武家階級が、力士の應援を求めた譯である。

で、大關鏡岩、白眞弓を初め、九十餘名の江戸角力が、この三百俵の米俵の贈物を、片手に輕々と振廻しながら、舟へ積込んだものである。

そのあとで、應接所の土俵で、相撲をとつて見せたのであるが、これには黒船の連中も相當驚ろいたらしい。

そして、この象的人物の應援によつて、幕吏は、やゝ溜飲を下げたであらうが、相撲が日本の國技とされ、赤裸々に、單純に、全力を持つて相搏つ、今で言へばスポーツマン・シップ、そ

の頃の川柳では「一年を十日で暮すよい男」といふ、この氣分は、黒船の連中に判らう筈がない。

一時は、驚ろいたが、あとでは一向感心せず、ペルリの日本遠征記には「殘忍なる獸力」などと書き、「電信機はドラッパーとウイリアムスの指圖で實驗をし、農具はモーロー博士が説明をし、汽車は模型であつたが、大人までが來て、屋根にすがつて走つた」と書き「科學、工業の偉大なる力が、半開國民の前に展開した」などと書いてゐる。

思ひあがつた米國根生からではあらうが、ちつと、小癪にさはる言葉ではないか。

これは眞逆の話

黒船からの贈物、將軍からの贈物があつてから、黒船の「日本全權招待」があり、日本側でも「米使饗應」をやつた。

黒船が、日本全權を招いたのは、嘉永七年二月十九日で、日本側の客は林大學頭を初めとして七十餘名であつたさうだ。

これ等の人は、各軍艦からの祝砲に迎へられて旗艦ポーハッタンに行つた。

珍らしかつたにちがひない。

巨大な帆、大砲、バッテーラ、宴會場のデコレーション、碧眼紅毛の異人達、ビイドロの盃、シャンペン、マデーラ、ポンチ等々、酒々々、饗手の客、暖かけの食卓・・・・

皆、結構醉拂つたが、林大學頭だけは、儼然としてその容姿を崩さなかつたといふ。そのうちに、黒人の水兵が、更らに顔を黒く塗つて、盛んに踊つたり歌つたりしたが、その道化た有様には、さすが謹嚴の林大學頭も、思はず破顔一笑したさうである。

この時に、日本側の客が、異國の料理を珍らしがつて、殘つたものを紙に包んで持つて歸つたものだが、ペルリの「日本遠征記」には『妙な習慣だと思はれた』と珍らしがつてゐる。

もう一つ、幕儒の松崎滿太郎が、醉餘、提督ペルリに抱きついて

『日米兩國同一身』

と叫びながら、接吻をやらかして、滿場の拍手を買つたが、これが恐らく、日米キッスの初めであらう。

日本側で饗應を開いたのは、開港條約調印の三月三日頃であ



日本全權招待の艦上の、黒人の踊りを、隨員の畫工が寫生したもの。横濱圖書館藏

つたといふ。（亞墨理駕船）（渡來日記によると二月十日）御馳走は、山程あつたらしいが、それは省いて、この時の笑話を、横濱の古老から聞いたのである。

異人は椅子でなければいけないといふので、武州、相州かり集めて、寺々から、和尚が緋の衣を着たときにかける曲彔(きよくろく)といふのを探したさうで、なか〳〵好い思ひつきである。

それはよいが、これからが大變だ。

『何か異人の氣に入るものを探さう』

と、いふ譯で、江戸は廣い、江戸には何かあらうと探し廻つた末に、何處で、何う見つけたものか、探し出したのが



日本側にて黒船側を招待したる宴席の錦繪

ギヤマンの瓶一つ、異國文字の額が一面。さて饗で、饗應所に、その額を掲げ、その瓶に花を活けて、さて饗應が初まつたのであるが、後に至つて判明したことは、このギヤマンの瓶なるものが、異人のつかふ尿器であつたり、異國文字の額なるものが

"BARBER"

と、書いてあつて、よく聞いて見たら、床屋の看板だつたといふのだが、「これは眞逆の話」だらう。

この時の有樣は、松代藩の高川文筌が筆寫して幕府へ獻じ、また、浮世繪も頻りに翻刻されて、時代精神に媚びるやうなのが、いろ〳〵あるが、どこを探してもこの「尿器」と「床屋の看板」だけは見當らない。

因みに、此の料理は、當時の金で二千兩といひ、江戸浮世小路の料亭百川樓茂左衞門が請負つたといふ。また一說には百川樓が請負つたのでなく、その弟子が浦賀の岩井屋に居て、岩井屋が請負つたのだとも傳へる。

異國料理の話

異國の料理は、腰かけに腰をかけて、箸で喰べずに

『小刀と金(かね)の三本熊手で、たべるさうな』

と、異人の生活を物珍らしく噂するやうになつたのは、餘程後の話である。

黒船が、初めて、東京灣に入つた時に、千葉縣富津の海岸を警備してゐたのは會津藩であつた。

漁師と船などまで狩集めて、彈丸除けの土俵を積んで沖へ乗出した。その船に乗つた漁師の話であるが、

ぽうつ、ぽうつ、

と、朝の法螺貝がなると、兵糧場へ行く、飯を分けてくれるのだが、それが大釜の中で湯をたぎらし、笊に入れた米を、その湯の中へ一寸漬けて、それを桶へあけて蒸して置くといふのだから、まずくて喰べられない。

そのうちに、だん／＼黒船とも馴れて來て、空腹で堪らない船頭達は、黒船からいろ／＼のものを貰つて喰べる。

卵のゆでたのを呉れるので、割つて見ると半熟なので棄てる。

卵燒を貰ふと、中に牛や豚の肉が入つてゐるので、これも棄てる。

牛の燒いたのを呉れた、勿論棄てる。

ギヤマンの茶碗へ赤黒い水を呉れる。皆、これを見て眞蒼になつた。

『これあ人間の生血に相違ない。人間の血は染物ばかりにすると思つたら、飲物にもすると見える』

と、いふ譯で、勿論これも棄てる。

ビフテキ、オムレツ、葡萄酒、などといふ大衆的西洋料理も嘉永六年六月の、日本の漁師の食慾をそゝる譯には行かなかつたと見える。

で、益々空腹になるので、黒船から海へ棄てる茄子や人參のしなび切つたのを拾つて、鹽をつけて喰つたといふ。

今から見れば、滑稽であるが「四ッ足を食へば次ぎの世には四ッ足に生れる」とか「姙婦が兎を食へば三ッ口を生む」などといふ時代であつたのだから無理のないことだらう。

それに、徳川幕府はなる可く民衆を黒船に近づけまいとした。何時の政府でも、民衆に「時代」を見せまいといふ譯で、その頃の浮世繪に、海岸警備の役人



立札には「黒船見物無用」としてあり、役人が見物人を追つてゐるところの寫眞

が、黒船見物の民衆を追拂つてゐる圖がある。

それは、いとも滑稽に、徳川政府の、三猿主義……つまり、見ざる、聞かざる、言はざる主義を戯畫化してゐるのであるが、どうも、うろたへてゐるときは仕方のないもので、民衆の眼から、完全に黒船を拒絶するには、東京灣だけでも、百哩からの海岸線へ、高塀でも築かねばならぬ、といふことに氣がつかなかつたものと見える。

民衆は、「時代」に敏感だ。

横濱の市民達は、或ひは行商に、或ひは見物に、頻りに黒船と往來する。

「人間の血だと思つたら、あれは葡萄の酒ださうな」

とか、

「白い羊羹みたいなものを貰つて來たから切つて喰つて見た。變なもので喰へやしない、煮て喰ふものだらうと煮てみたら、あぶくばかり出て解けてしまつた……あとで聞いたら石鹸(しやぼん)といつて、洗濯につかふものださうな」

などと、黒船からの新知識が、だん／＼に傳はつて行く。

ボーイとなつて異人に使はれた「ごみ六」といふ石橋六之助、コックで「鳥平」といつて後に西洋亭を出した小林平八、何れもヒユースケンに使はれてゐたのであつたが、西洋料理も、かうして擴がつて行く。

バタを髮つけといふ

黒船からの知識が、毎日のやうに齎らされる或日。

神奈川の町年寄の二、三人が黒船を訪問した。

晝飯を食つて行け、といふので、例の牛の燒いたの、肉入りの玉子燒、ギヤマン茶碗の赤黒い水、等々、と出たが、パンの横に、黄色い四角な脂(あぶら)がある。それは、言はずとしれたバタなのであるが、この横濱の先覺者たちには、さあ判らない。

「何でごわしようかな」

「さあ」

「判りませんかな」

「えゝと、髮附油に似てゐますな」

「左樣で……」

「弱りましたな」

「異人は禮儀が正しくて、食事の前には化粧をすると聞きましたから、矢張り髮へつける油でせうな」

「さうでごわしやうか」

「な、なある程……」

それで、この先覺者達は、バタを掌にとつたと思ふと、威容

を正しつゝ、そのいとも、ちんまりと頭の上に乗つてゐる「ちよん髷」目掛けて、ぺたくとなすりつけたものである。

これは、神奈川の古老の物語りであるが、これが今日の横濱に、ウィスキーの「うい助」や、日曜日の「どんたく」や、バタの「ぴんつけ」が、モダンボーイにまで珍重されてゐる由來であるといふ。

兎に角、かうした滑稽なる苦難を經て、異人料理が擴がつて行つた。

文久二年には、既に二軒の牛肉屋が居留地に出來てゐる。

『こゝに二軒の牛屋あり、毛物を喜ぶは異人なり、こゝにて牛を道具にて殺し、首を切取り皮をむき、大きなる鈎にて吊しをくなり、其血一疋にて醬油樽に一本程も出るなり、椽の下に穴藏ありてそれに入るゝなり、臭きこと鼻をつらぬくが如し（横濱ばなし）』

とある。

慶應三年版の「西洋衣食住」には



異人館の食卓と調理場（芳員筆）

平皿、水呑、匕、肉刺、庖丁、花活、グラス、茶碗、小匕。

など、と数へて、「三本熊手時代」を乗切つたことを示してゐる。

明治二年になると、横濱姿見町の大野谷藏が、西洋料理店を開業した。その當時の話しに、

『日本人の客が、皿から直接にスープを吸はうとして、スープを胸から膝へ浴びたり、ナイフに肉を刺して頰張つて口を切つたりすることは、毎度であつた』

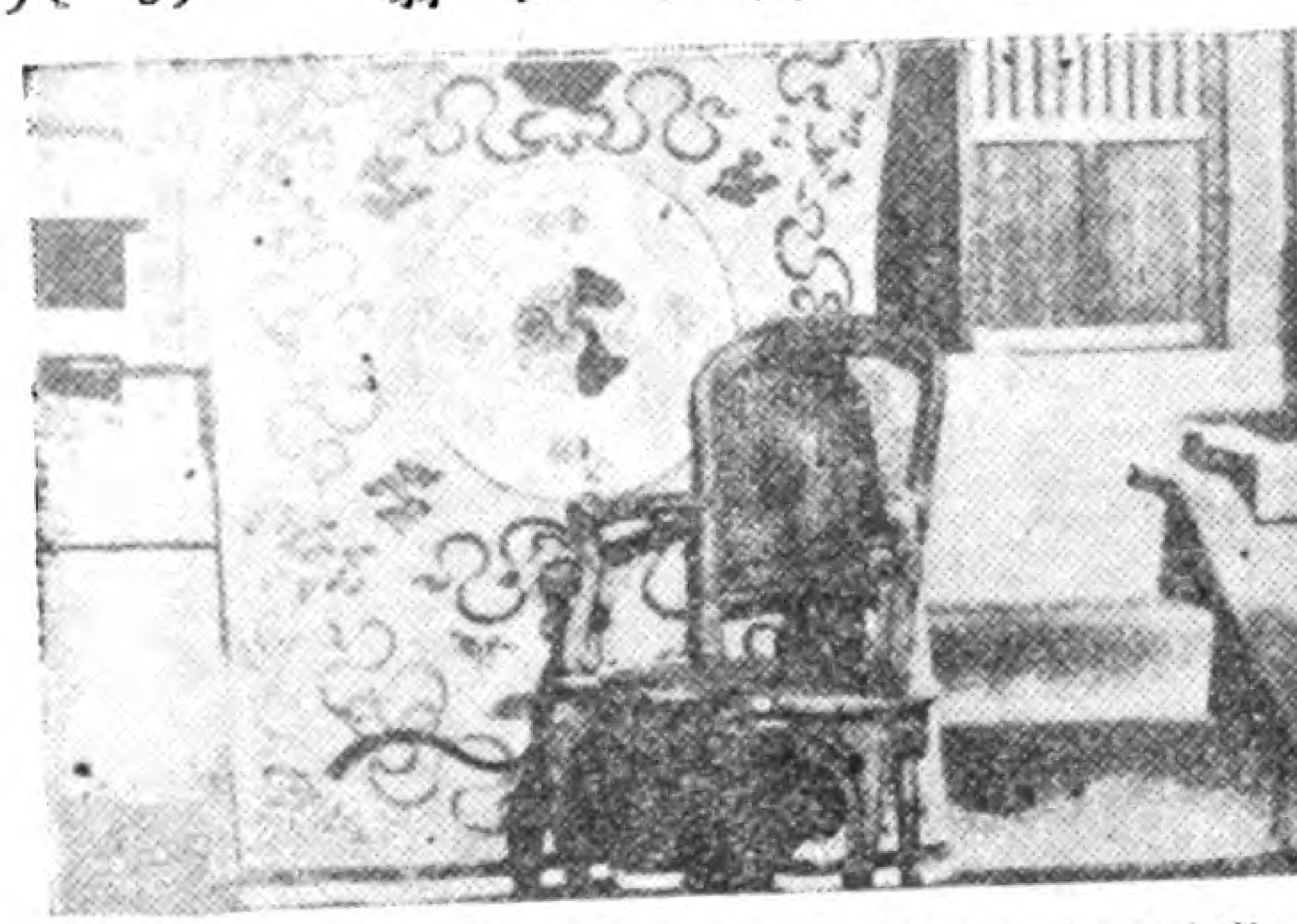
といふから、まだく西洋料理は何うして喰べるものかも知らなかつた。だから、假名垣魯文の「西洋料理通」が、明治五年に出版されたのは、大いに時を得たものといふことが出來る。

かくて、明治二年頃には、牛肉屋三河屋、明治五年には精養軒など、東京に於ける西洋料理も漸く廣まつて來て、殊に日本的な、牛鍋の類は直ぐ珍重されるやうになつてしまつた。

岡士館(コンシエル)の話

港を開くとともに、所謂「コン四郎」や「目ノ下」が駐在する。その頃の、日本の建物では、寺院が最も異人に住へさうでもあり、事務室になりさうでもある唯一の建物であつたので、領事館や大使館は、何れも寺院にきめられた。

これ等の「コン四郎」達の、寺院に於ける生活振りは、凄い憎悪と好奇との誇張をもつて「横濱ばなし」などに傳へられたが、先頃物故した横濱の岩崎次郎吉翁は、島田三郎、小泉遡相、など、共に神奈川民政黨の開拓者だつたが、その十八歳の時から、二十四五歳の頃まで、神奈川淨瀧寺のイギリス・コンシエル、神奈川本覺寺のアメリカ・コンシエルに、下男としてまた後には料理番として奉公してゐたものである。翁のその當時の話。



唐人お吉で有名な我が國最初の駐在領事であり、大使となつたハリスの使用した椅子。開港當時コンシエル館となつた神奈川本覺寺所藏

『いよ〳〵お寺へ、領事(コンシエル)が入るやうになりますと、住持は門番の中へお引越になる。本尊は板圍ひをしてその儘本堂に置いてあつたが、夏になると、暑い〳〵といふので、コンシエルが皆取拂つて、遂に御本尊も、門番のうちへ、お移りになる騒ぎだつた。

そして、門から家の中まで、みんな赤いペンキで塗り立て、赤煉瓦のやうに見せたものであるが、壁はとにかく、柱や板へ塗られるとあとが困るといふので、家の中は塗らせませんでしたが、門はとう〳〵眞赤にしてしまひました。

冬になると、日本のうちは餘程寒いものと見えて、戸から障子から、ベタ〳〵目張りをするといふ仕末です。

それで、お寺の貸賃が月僅かに八兩、後に十兩になつた。

私の給金は、一日一朱で、月二兩の定めであつたが、四兩位にはなつた。未だ黒船に恐れをなしてゐた頃で、幕府の品川のお臺場の仕事などあつたが、この日當が一匁五分といふのですから、これに比較すると隨分、よい給料といへます。

英國コンシエルの一行は五人で、開港の月に淨瀧寺へ入りましたが、その中に佛蘭西人が一人居り、その人の細君がエレンさんといつて唯一の女でした。

私はその人から料理を習ひましたが、この異人の一人が或日

馬丁を連れて鐵砲撃ちにでかけ、鴫を一羽獲つてきました。そして私に料理をしろといふので、これは日本では禁制の鳥だから、自分は料理することは出來ないと斷つたが、このことが知れて、馬鹿な話しです、異人は何でもなく、馬丁の定吉といふのが、二月ばかり、戸部の牢屋へ入れられました。

その頃の横濱は殺氣滿々で、開港の月に横濱本町で露西亞士官が二人殺され、辨天通りでは支那人が殺される、文久二年には生麥の事件があり、その翌年には井戸ヶ谷で佛蘭西士官が二人殺され、元治元年には英國士官が鎌倉で殺されるなど、大變な騒ぎでした——

といふ。

此等は、開港當時の異人の犠牲者として、何れも横濱の外人墓地に眠つてゐるが、一方攘夷の刺客は容易につかまらず、幕府は常に巨額の償金を仕拂はされてゐたのである。

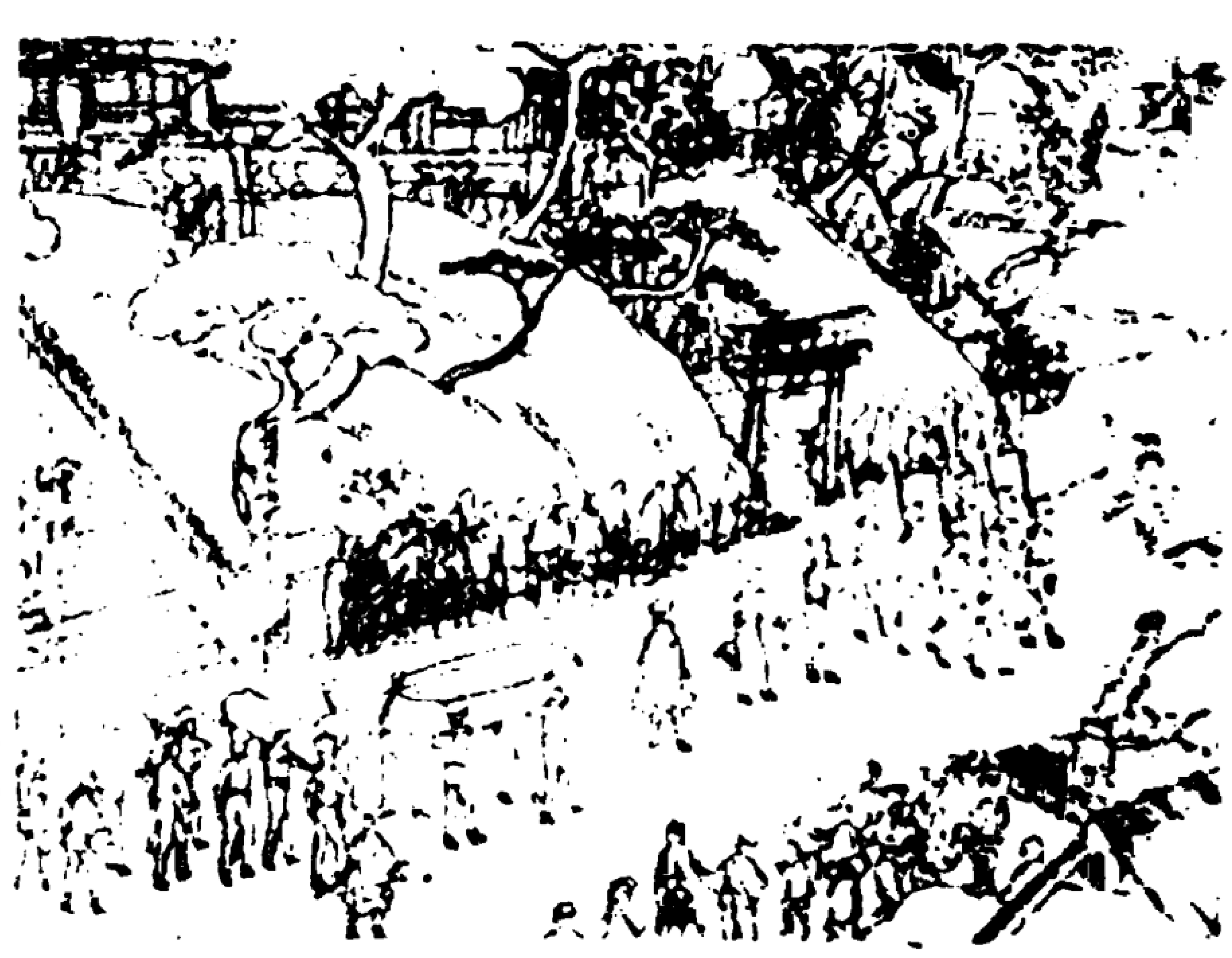
攘夷の浪士で捕へられ、斬せられたもの、うち清水清次は、戸部の牢屋敷で斬られたが、英國の赤隊の並んでゐる前で、日本の武士の面目だと黒紋付を貰ひ、冷酒一升を平けて目隱しを拂ひのけて斬られ、英國の赤隊を驚ろかしたと傳へられてゐる。また清水と共に鎌倉の英人斬りの連累として捕へられた間宮一は十八歳の少年で幕府の小姓組、内藤某の家來で、その肌着に

消えて行く露の命をかけてしも
枯しつくさん虫の醜草

と、書いて着て居り、その處刑に當つての辭世は、

年ふれど色香かはらぬすめらぎの
御國にかへす赤き心を。

といふのであつた。



異人の葬儀

開港當時軍艦の水兵達はかうして山手墓地へ葬られた、その葬儀を寫したもの。（[illegible]氏藏）

赤隊と菜ツ葉隊

横濱開港、ときまると、攘夷熱は、釜の湯のたぎるやうな勢で、異人の暗殺、横濱の焼打と、物凄い噂がそれからそれと傳はり、命知らずの攘夷の浪士が横濱目がけて流れ込んで來た。

で、幕府でも、若しもの事があつてはならないと横濱の要所々々へ關門、番所を設け、俗に太田の陣屋といふ、松平越前守の陣屋を置いて、その番士が、この關門の見張りをしたのである。

それが、安政六年十月である。

この隊士を俗に「菜葉隊」といふ。

その武裝は、腰に大小を佩した上に鐵扇まで挾み、煙草入れをぶら下げ、鐵砲をかつぐといふ調子で、和洋混淆、新舊時代同居、といふ有樣、淺黄木綿の羽織をきてゐたので、「菜葉隊」といふ。この羽織の紐が、白、黄、紫、緋、となつて取締、肝煎、伍頭、定番と階級を區別してゐた。

かうして、大いに西洋式調練をやつたものであるが、

『氣をつけッ』

なんて、氣の利いた號令はなく

『兵士、うまい工合にもとのところへ歸れえ』

と、隨分間延びのしたものであつたさうだ。これが關門警備に當つたので、通行はなか〳〵六ヶ敷かつた。

葬式が通るのに

『何町何某死去に付何町何寺へ埋葬のため亡者一人此處通行致候』

と屆出ねばならぬ。

ところが、此關門なるもの、町人連には、大いに嚴格であつたが、將軍の威勢も衰へた故か、攘夷の浪士の暴れものにかつては、何の役にも立たなかつたらしい。

ことに、東海道筋の、神奈川の關門など、なると、街道往來の、浪士がよく通つた。

無斷で通り拔けやうとするので、

『誰か』

と、誰何すると

『いや、市川團十郎と申す』

とか、

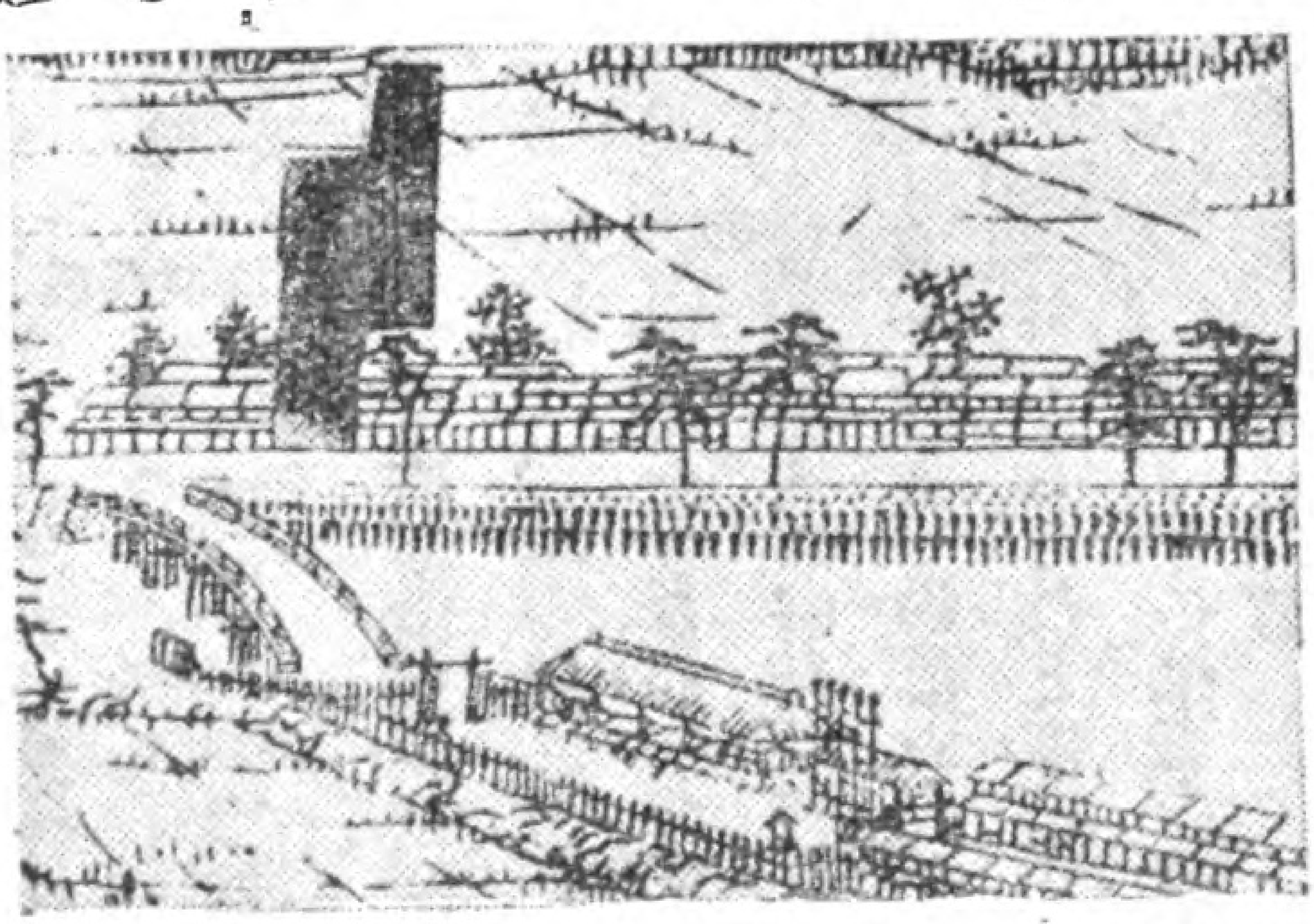
『拙者か、荒木又右衞門だ、通せ〳〵』

とか、

『俺か、俺は加藤清正だ。そこまで散歩に行くのぢや』

など、、すつかり頭からなめられて、半ば暴力で通行したもので、關門も大した役には立たず、頻々として外人が殺された。

生麥の變の償金四十四萬弗を、拂ふときなど、運上所（稅關）から、夜中を選んで、大八車數臺に銀貨を山のやうに積んで公使館へ運んだもので、毎夜々々、これを見る人は淚がなくては



横濱開港當時の關門　幕府の勢力が衰へ、浪士などは平氣で通行し「異人殺し」の事件など絶えなかつた。

見られなかつたさうだ。

生麥の變から後、いよ〳〵英國と、佛國の駐屯兵が置かれることになつて、山手の居留地へ、その頃の金で五萬三千百五十一兩を投じ、幕府で兵營を建てゝやつた。

この駐屯兵が、緋羅紗の上衣を着てゐたので、俗に有名な「赤隊」といふのがこれで、横濱人は、惡口をいつて「赤蜻蛉」とも稱した。

かうして、「赤隊」と「菜葉隊」が、横濱の兩端に、對峙したかたちで、警備の任に當つてゐた譯である。

この赤隊が出來るとすぐ、この附近に、今で言へば、「ストリート・ガール」が現れて、赤隊の柵を越えて來たのを捉へては「ランデブー」を試みた。

安直な「らしやめん」で、明治になつてからは「十錢(てんせんす)」といふ名もついたさうである。

この街頭賣笑婦の中には「つばくろお夏」だの「立花屋小藤」だの「らしやめんお梅」などと、後年の話題にまでのこるやうな豪のものが隨分多かつたさうだ。

横濱らしやめん記

下田時代には「唐人お吉」があるが、横濱時代に、トップを切つたのは「らしやめん・お島」であつた。

文久二年の十一月出版された「珍事五ケ國横濱ばなし」にも

「さる安政六年中、鬼門の方より、鬼共一度に押し來たり、江戸三田濟海寺佛蘭西國ミンストル、正泉寺には同國通辯官、麻布善福寺には亞國ミンストル、高輪東禪寺には英國ミンストル……右寺々に押あがり、尊像佛は門前に取出して、その身は佛殿に寢所をかまへ、みやびやかなる女子を集め、色事のたのしみ晝夜を論ぜず、野菜には牛の乳を朝晩のみ、なほボオトルとて、牛の油を食事の度毎に食するなり。」

とある、兎に角、外人を見ること、鬼か、山賊か、猿か、位に考へてゐたのであるから物凄い。それに尊王攘夷の論が、かまびすしく、横濱などは、國粹派が頻りに横行したらしい。

だから、今の横濱公園のところへ、初めて出來た港崎(みよざき)遊廓にも、國粹派の手前に氣兼ねしたらしい、伊勢樓、二見樓、五十鈴樓、などゝいふ、國粹的な屋號が多かつた。

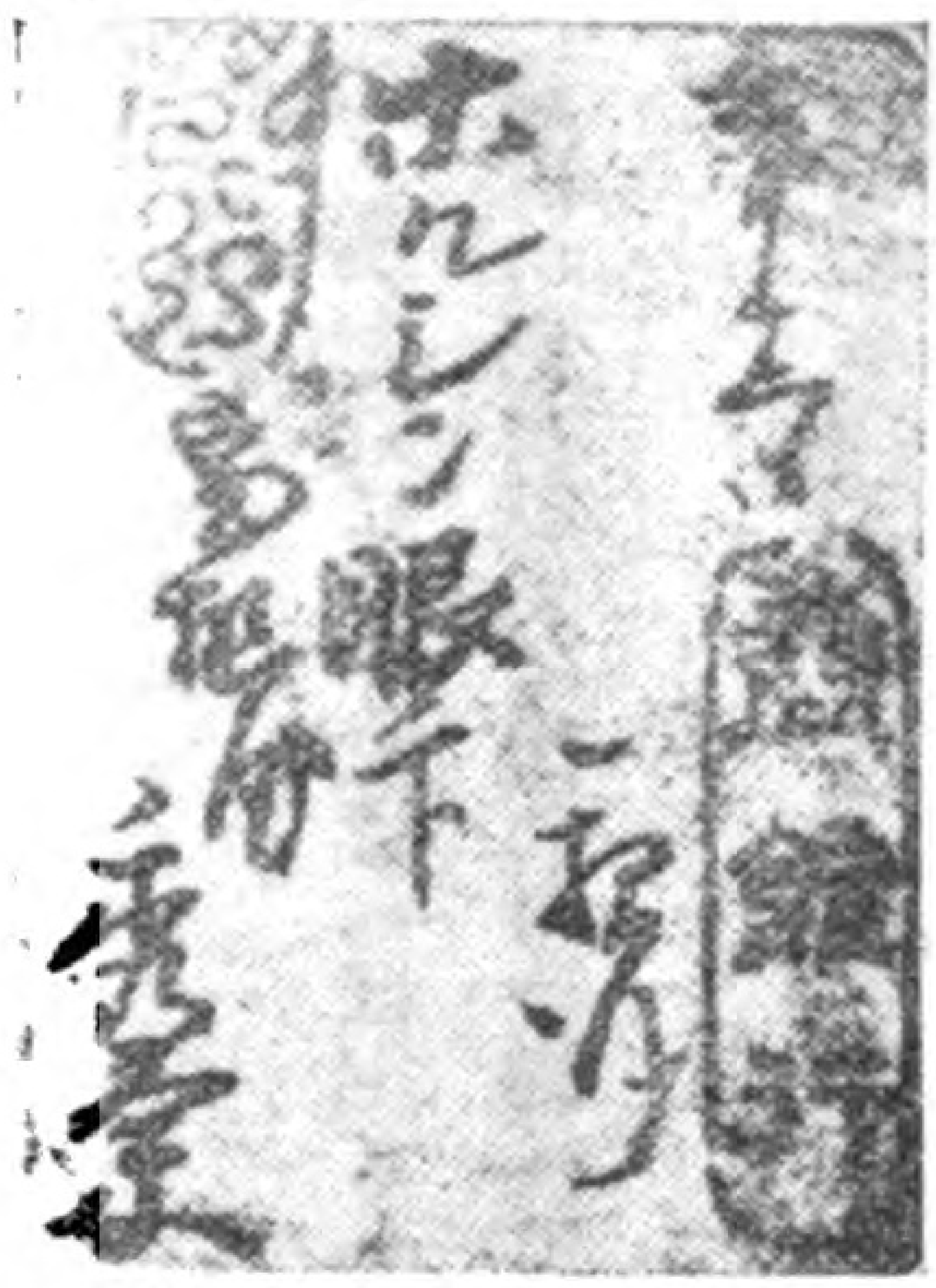
港崎遊廓は、萬延元年六月に出來あがつたが、それまでは、駒形町(いまの縣廳附近)に假廓といふのがあつた。

横濱らしやめんの元祖「お島さん」は、この駒形町鈴木屋の抱えであつた。

その頃、神奈川の長延寺に居た、和蘭領事ポルスブルク、これが、なか／＼の粋人で、お島さんを見染めて、通はせた。これが「らしやめん女郎」の元祖であるといふ。

ところが、この和蘭領事どの、なか／＼浮氣がやまず、或時、本町一丁目の商人、文吉の娘「お蝶さん」を見ると、スッカリ參つて仕舞つた。

芳紀、まさに十九歳、當時のモダンガールの先端を歩んでゐたであらうところの「お蝶さん」、粋領事の妾になることを承知したが、親父さんが聞かない。



一夜行らしやめん鑑札（林若吉氏）

『洋銀百枚、だしませう』

との申出で、

『まあ、仕方があるめえ』

地獄の汰沙さへ金次第、この國際的な、戀の沙汰も金で、何うやら纏つたが、幕府の役人は、

『素人娘を、外人の妾に出すのは國辱でござる。一般の風紀にも、よろしくござらぬ』といふ。

それで、素人娘が、らしやめんになることを國禁とした。

で、「お蝶さん」は、横濱遊廓岩龜樓佐吉の抱といふ名儀になり、源氏名を「長山」と改め、毎月一兩二分の、名儀借用料を岩龜樓に納めることにし、

萬一相滯り候節は、直ちに樓主のもとに立歸り、他の娼妓と同樣相稼ぎ、屹度辨償仕候。

と、いふ一札を入れて、目出度くこの戀成就、となつた。

横濱、らしやめん創世紀は、かうして、一夜行らしやめん、の元祖が「お島さん」、月極めらしやめん、の元祖が「お蝶さん」によつて初められる譯である。

港崎遊廓が、火事で燒けて、姿見町へ移つてからは、羅馬字入りの「横濱吉原細見」なども發行され、大いに國際的の性解放が行はれたらしい。

さて、らしやめんの相場は、といふと、一夜行らしやめんが洋銀三枚（二兩一分）、月極めは、十兩、十五兩、二十兩などと、いろ／＼な階級がある。

この、らしやめん（羅紗綿）の語源は、外國の水夫などが、長い海上生活の、性生活の徒然を、緬羊を擁して慰めたところから、出てゐるといふのだが、それは判明しない。

載せてある圖の、一夜行らしやめん鑑札は姿見町遊廓の、寶

來長屋局女郎、秀菊といふが、ホルシン眼の下、の屋敷へ行くのに發行されたものである。

ホルシン眼の下の「眼の下」は、ミニスターのことで、十一谷義三郎氏の、唐人お吉に出て來る、コンシエルを「こん四郎さん」といふのと、同巧異曲な和製語で、それ等のうちでも秀逸なものである。

さて、かうした「國際愛」の發展は、慶應三年五月、英國岡士（コンシエル）が神奈川奉行水野若狹守に對して書面で

『日本人と外國人との結婚を禁ずる法律があるのか、どうか』

と質問したが、らしやめん、はあるが結婚となると自から問題が違ふ、といふので幕府の請訓を仰いだ結果、

『條約國は差支へなく、尊卑の別なく、雙方出願すれば許可する』

と、返答した。



らしやめん產室の圖

黒船時代の「讀賣り」で、らしやめんが、混血兒を產んだ所である。生れながらにして紅毛の髭のある混血兒を描いてある。

次いで、數年の後なる、明治六年三月十四日正式に外國人との婚姻を許す條規が布告されたが、正式結婚の數は極めて少なく、相變らず、らしやめんが多かつた。

明治三十年頃の、横濱のらしやめん、混血兒の數について「横濱繁昌記」は記してゐる。

『洋妾の數は、おほむね千人內外であらう。またそれに出來た混血兒のうちには、父につれられて本國へ行つたものも少なからずあるさうだが、横濱に殘つてゐるものも、百人餘りあるといふ』

と、ある。

明治初年の川柳に

蓼くふ蟲よ異國からおかみさん

が、これは、らしやめんの反對である。

横濱らしやめん文獻

横濱遊廓は、開港當初から、對外的の關係の下に施設され

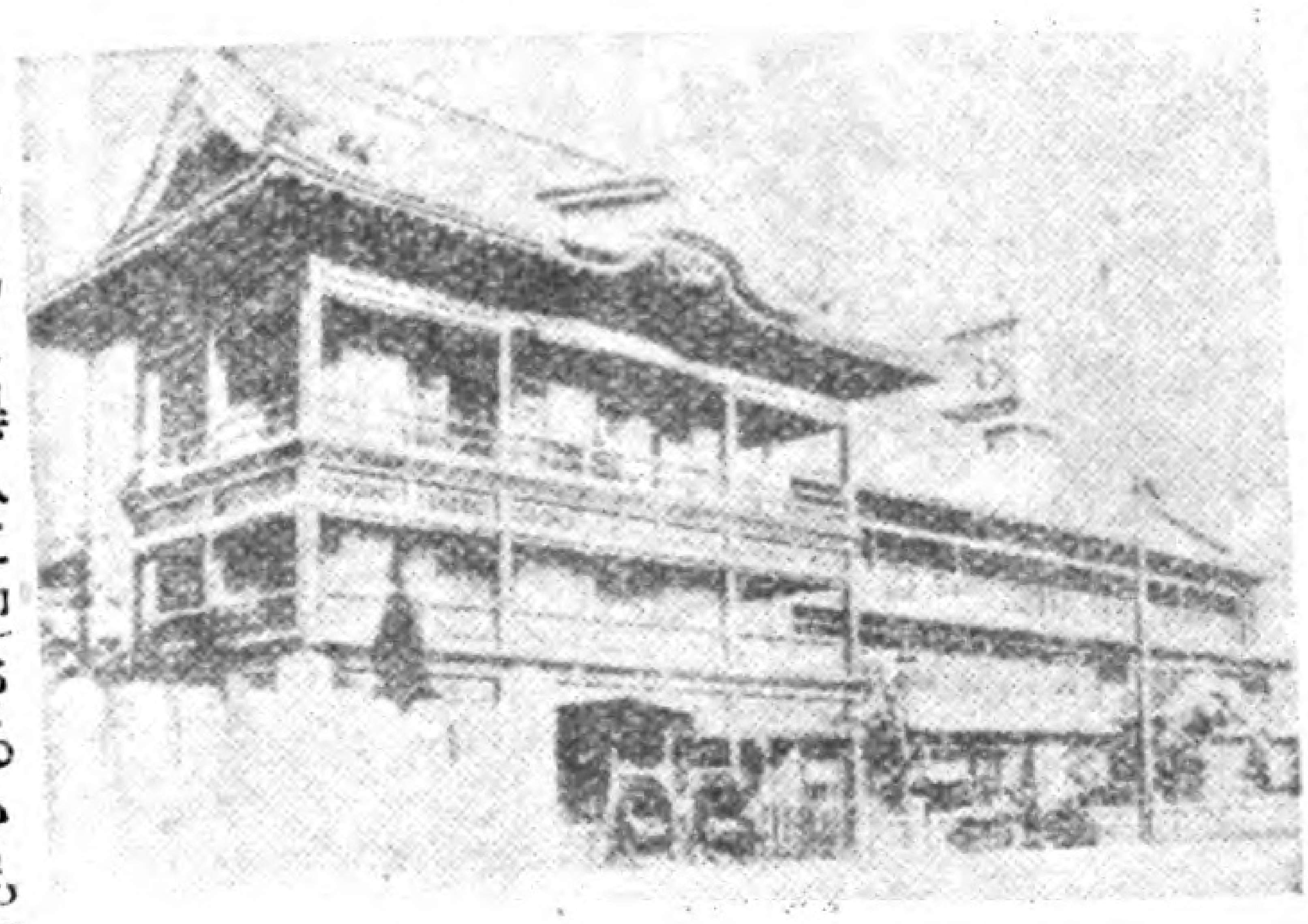
ことは言ふまでもないのである。長崎は和蘭、支那方面からの文化移入地であつて古典味豐かに習慣づけられ、植つけられた情緒は、長い過去をもつてゐるのであるが、それに對して新興横濱の發展が急激であつただけ、それ丈凡ての諸相が特異の進展振りを示してゐた。從つて「らしやめん女郎」の心意氣や、情思の上にも、著しき相違のあつたことを思はれる。

當時、横濱の異人女郎は、長崎、博多、新潟や駿府から抱入れたといふ記錄もあつて、長崎女は、多少慣れた氣分を持つてゐた外、他の女達は、何れも無智なした丶かものであつたに相違ない。

かくして、横濱式異人女郎の出來上つた港崎遊廓の岩龜樓は異人、和人に區別して、異國人の顧客を吸收し、一夜行や月極めの「らしやめん女郎」も隨分と多かつた。(横濱史料解說)

駒形町の假廓、港崎廓時代の揚代金は明瞭でないが、その風態を見て、上中下の敵娼を出し、二分から三兩位であつたと言はれてゐる。そして一夜行娼妓は洋銀三枚、即ち二兩一分と極められ、月極は不明である。姿見町期に入つて、上中下の三段に分ち、月仕切は十兩、十五兩、二十兩の割になり、晝夜行は不同なく三兩、片仕舞は一兩二分であつた。此中から兩廓時代の廓內會所預り人岩龜樓佐吉へ、步合として獨籠貫持切りで一兩二分宛(片仕舞は半額)徴收されてゐた。(横濱史料解說)

當時、公許の娼妓に非ざれば、外國人の妾となることを許さざる規定あり、……髮形、衣裳は娼妓に類し、帶の結び風當時の藝者に類似す。一見して外妾なることを知る、人皆之を憎むこと讐敵の如く、罵言して羅紗綿(らしやめん)と呼ぶ。下等水夫等の綿羊を擁臥して暖を取れるに擬し之を鄙むものか……(横濱沿革誌)



有名な岩龜樓の寫眞。(横濱史料より)

ラシヤメンは獸の名なり。水兵など之を犯すことあり。爲に異人に犯さるゝものといふ名より起れり(横濱奇談)

これは、らしやめん、のうちでも物凄い方で、ストリート・ガールの元祖といふべきだらう(明治七年東京日日新聞に)

横濱街中を夜行するに、西洋商館の傍には多く窈窕たるもの

ありて情人を待つが如し、始めは思へらく是れラシャメンの納涼に托して私過の約を履まんとするものたるべしと、その間に至るに及んで彼の妹なるもの忽ち洋人に聲を掛けて曰く「コンバンハ、アナタスケベーヨロシイ、ワタクシ、アナタハウス、マロノ＼、アナタ、ネロノ＼ヨロシイ」と、是巫山神女の流亞にして、その語、宜しく意を以て解すべし。

異國ベランメー氏曰く、是等の女子誠に憎むべきに似たりと雖其情實に憐れむべし。その全く正味の憎むところは、この女子の身に浴せ懸べからずしてその國の習風と現在の政黨上に負はせて的當なりとす（明治奇聞）

……異人の屋敷が二十軒位あつて、夜になると、洋妾女郎の方から、襠を着て駕籠に乗つて出掛けて行き、朝になるとその儘の仕度で歸つてくる、花魁の朝歸りとは他所に見られない圖でせう。その頃はまた無提灯の夜中通行はならないとあつて按摩までが提灯をつけて歩いたなどは馬鹿氣た話で、嘘のやうです。（開港側面史）

その頃の、異人の遊び方も面白かつたが、殊に支那人は一風變つてゐました。南京人に遊びに來て貰うたことがあり、いつでは、一朱のお祝儀をくれ、さうだからとて呉れ、斷つたからとて呉れる……日本人のやうに、お引けといふことはなく、思ひ／＼に相方の手を引いて於時別宅へ行つてゐて、又來て酒を飲む、そして夜明方に歸る……その頃雨が降ると、朝歸りの客に下駄を出したものです、その下駄が十二文、五もく揃が二十三文でした。（開港側面史）

横濱には昨今、異人娘といふ語が新しく生れた……一ヶ月何回といふ割合で主として獨身者の外人に接する、中産階級以下の若い娘たちの總稱である……横濱の混血兒は在留外人の一割約千人に達する（大正十二年、横濱物語）

ラシャメンは穴でエビシの散し書き（雜誌）

親二人兄まですぐすらしやめんの縁ぞつもりて淵となりぬる
（奇賊百人一首、明治事物起源より）

遊師の「らしやめん女郎」は別として、異人屋敷へ住込んでゐた、純粹のらしやめんの數は、文久二年、既に三十餘名を算へてゐる繁勢ぶりである。

英吉利役人コンシエル、ゲビテンワイス、娘「たか」
ホルトガルコンシエル、クラツク、娘「たつ」

といふ風に、文久二年版「横濱ばなし」に娘として番附になつてゐる。その中の異人の名前には、或ひはコック氏、フライ氏、又はライス氏、シトロン氏等といふ抱腹的なものが續出してゐるから、當にならないことは勿論であるが、娘の名前は大丈夫だらう。

英一番、ガハール、娘、つる
英七番、シトロン、娘、てつ
亞米六番、ハツパ、娘、よね
英廿一番、ガーハル、娘、はな
廿五番、蘭プラーン、娘、こと
卅一番、フランスミニストル、娘、ふく
卅番、佛、レイテルマン、娘、たま
同、コンスタンス、娘、たつ
廿八番、英、ベーロ、娘、はな
卅七番、マキミニイ、娘、八重
四一番、蘭、パタケイ娘、關野
四二番、英、ヨシ、娘、ます


遊女喜遊の傳說と共に行はれた錦繪

四三番、蘭、ライス、娘、てう
四四番、同、スネル、娘、しま
五〇番、英、トテレル、娘、きく
五二番、同、デイセム、娘、ゆふ
六〇番、佛、ブレツキマン、娘、もと
六一番、英、ライス、娘、てふ
六八番、英、コンシユル、娘、たか
七〇番、蘭、カブタイメン、娘、きん
七五番、英、ジヨージ、娘、きん
七九番、ロブシン、娘、とり
プラオ、娘、はる
八一番、英、クラオ、娘、げん
同、士官、アブヒレン、娘、はま
同　モンゴリメン、娘、とし
同、異人パン燒フランキヨ、娘、なか
八七番、英、コーステン、娘、かれ
駒形町中横町、英、ワルス、娘、ぬし

黑船時代の、國粹的、武士道的話柄として攘夷の浪人達に、大いに拍手された話柄として、横濱港崎遊廓、岩龜樓の遊女「喜遊」があめりか人イールスの、らしやめんに懇望され、黃金とピストルとの脅迫も、遂に口說落すこと能はず

露をだに、いとふ大和の女郎花

降るあめりかに袖はぬらさじ。

と、辭世を殘して自刃して果てた。といふ話しが殘されてゐる。

これは當時の浪士の、攘夷宣傳の創作であるといはれる、さう言へば辭世の歌も、駄洒落めいてゐるが、岩龜樓佐吉の血統を引いてゐる横濱市南太田、佐藤甚太郎氏の過去帳に

「文久二年八月廿六日、歿喜遊」とあるのでまた、實在説がぶり返して來た。

ところがこれは、此の名高い傳説が、消え去るのが殘念さに、過去帳へ後に書加へたものと判明、今では假空説の方が優勢である。

しかし横濱人は

「嘘でも構はない、あれは黑船時代の横濱の持つ華かな物語りである」

と、大いに傳説を支持してゐる。

異人屋敷風景（その一）

勇敢なる、らしやめん達の群は、かうして國際的な「物語り」を踏みはじめたのであつた。

その當時の人々には、それが如何に異國的に見えたことであらうか。髪を紅毛に染めて、[illegible]、一世[illegible]れにも倣る「らしやめん風俗」の、らしやめん達を一途にして、人々は羨んだり、白眼視したりしながら、幾多の喜劇と、悲劇となをその中に見いだしたことだらう。

らしやめんの元祖、「お島さん」が、和蘭の粋領事殿に、見染められたときは、泣いたり、わめいたりして悲觀したものであつたが、その、性愛受難の一夜が過ぎると

「なにさ、日本人より親切で、それは〳〵勤めよいんだよ……異人も、やつぱり人間だよ」

と、朋輩に語つたと、傳へられてゐる。

で、混血兒なども、從つて、ふえてきた。

浮世繪描きが、何條、この好題目をのがすものか。らしやめんが椅子によつてゐる、產婆が、子供をとりあげてゐる、そして、その子供であるところの混血兒が、生れながらにして、紅毛の胴毛がはえてゐる。

眞面目に、そんな場面を想像して描いたものか何うか知らないが、滑稽でもあれば、悲慘でもあらうといふものだ。

さて、かうしたなかにあつて、外人の商館がふえて行き、領事館が增し、らしやめんが多くなり、異人の生活が根づよく據えされていつた。

その頃の、横濱人の見た「異人屋敷風景」なるものが、面白いものだ。「横濱ばなし」で一瞥してみやう。

先づ、住宅について

『異人の住居、冬はビイドロ障子を立てきり、内には炭八方に澤山おこし置くなり、大き火の烟は銅の筒にて外へ出すなり、内に少しもけむらぬ仕掛なり、夏は角力の廻しやうなるものを居る上につるし、幅六尺位、立五尺程のものをつるし、仕掛にて引けば團扇の如く大風出づるなり、奇妙なり。あかりはビイドロ仕掛にて晝より猶あかるく、座敷向きは壁なく皆はり壁なり、木の見ゆるところ一つもなく、皆塗り柱なり、外まはりは皆石垣なり』

兎に角、珍らしかつたにちがひない。

次ぎは、衣食について、



異人館座敷の圖　右方は藝妓左方は「らしやめん女郎」濃艶なる當時の横濱情景(文久元年貞秀筆)

『着類は、冬は毛織にて、大寒はツヽツポウ二枚も三枚も重ねて着るなり、夏は何れも白衣麻織なり。食事は二度食なり、何れも腰かけにて臺の上へ布を敷き、パン牛魚鳥、青物は少々づヽ色々にして用ふ……箸なし、小刀一本、かねの三本熊手を用ふ……上客來の節は、春は花の類、餘は冬木の葉にて柱をつヽみ、天井壁に至るまで殘らずかくして、花見堂の盆棚の如く、なほ大きなる馳走と申すは牛の舌一枚づヽ引物にするなり、是一番の馳走なり、この時踊りあり、男女とも腕をくみ足拍子をとり鳴り物に合せて踊るなり、鳴物はウルゴロと云ふ、胡弓と簫と七りきと琴と四色一所にした音いろなり』

兎に角、珍らしかつたにちがひない。

石油らんぷ、のことを「ビイドロ仕掛」といひ、食卓のデコレーションを「盆棚」といひ、洋服のことは「ツヽツポウ」であり、ナイフの「小刀」は好いとしても、フォークを「金の三本熊手」は笑はせる。

ダンスの場合のウルゴロとは、勿論オルガンの事であるが、この筆者の新知識ぶりは、なか〳〵面白く、異人の名前の中には、コック氏、フライ氏、などといふ奇抜なものも、出て來て笑はせる。

異人屋敷風景（その二）

扨、その他の「異人屋敷風景」をざつと見て廻らう。

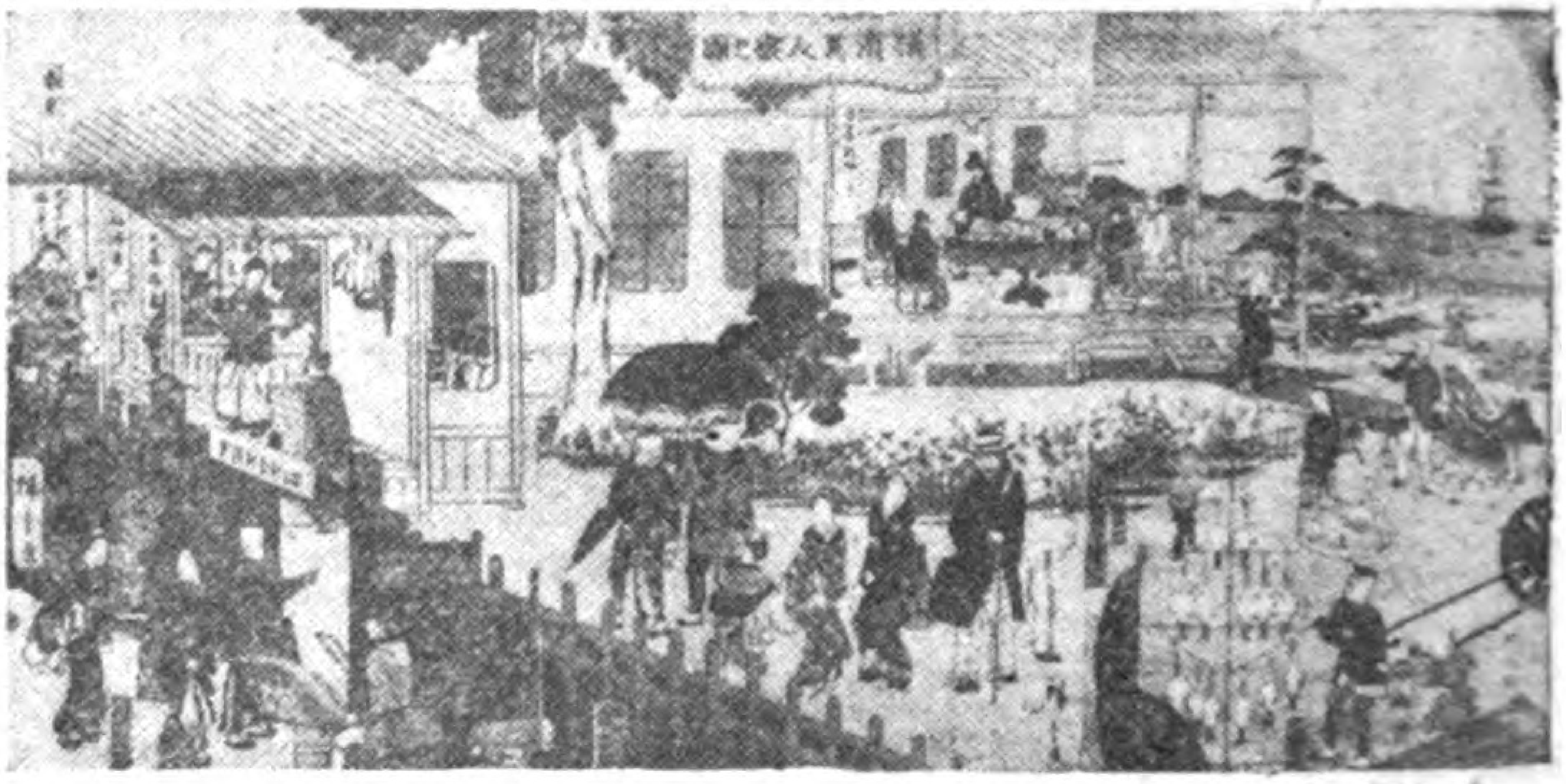
女湯をのぞく

『異人上官、役名ミニストル、御老中同じことなど言へど、女湯をのぞき又は湯屋の中へ入つて見るなり、この頃は大勢つれ合つて見にくるなり、第一供なし、一人立往來す』

藥湯などは、男女混浴でさへあつた時代であつたから、只さへ町風呂の集團的な入浴の珍らしい異人達は、御老中相當官であるところのミニスターまで、のぞいて歩いたものと見える。

接吻について

『異國の禮式は、國元にては上官おの〳〵登城して會釋もなくづか〳〵と女王の前に行き手を出す、女王その手の平へ二本の指を下す、その指の香をかぐ。しかうして退き座につくとなん、これを重禮といふ。



異人館の圖。左は南京部屋とあり、右は亞米利加部屋とある。(廣重筆)

そのほか手と手を振合すなり、別懇になれば男女とも、口と口をなめ合ふとなり。』

なんと、殺風景な、左翼文藝以上の描寫ではないか、こんな表現に合つては「戀の殿堂」も「第二の接吻」も、七里ケッパイ、逃出さざるを得まい。

女異人のこと

『女異人いづれも、顏のかたち般若面の如し。愛嬌なく笑ひ顏すくなし。然りといひどもその身肌美はしく綺麗なること、雪かビイドロかたとふるにものなし』

外人が初めて日本人を見ると、どれもこれも同じやうに見えるのと、同じ理窟で、どの女も般若面のやうに見えたのだらう。さてまた、肌の點に至つては、夜目遠目のたぐひできめの粗い、生毛に覆はれて、まかり間違へば偉大なる「植えぼうそう」の斑痕の七つも八つもある二の腕を出して、電車の乗客を苦笑させるやうな、そんな女異人に出會ふ機會のなかつた筆者の幸福でもあつたらう。

撞球場のはなし

『角に異人の旅籠屋あり。間口三十間奥行二十八間にて猶廣大なり、座敷々々の美事なること譬ふるにものなし、廣間には八方に掛額あり、立四尺ほどにして何れも女の戯むれ居る圖なり、なほ球にかけての勝負事晝夜ともおとらぬなり、但二間に三間程の廣蓋の如くなる角に穴あり、三尺程の臺足つき中に赤球二つ白球二つありて六尺許りの棒にて球をつき自分の球を他の球へ當て穴に落して勝ちまけあるなり、猶外に、大球三十二あり、いろ〳〵のことあれども筆紙にのべがたく之にて略す』

と、ある。撞球場の描寫が面白いが、競技の方法は知らなかつたと見えて、どん〳〵省略してゐる。

異人は猿の如し

『異人は、何事によらず榮耀榮華に奢りなし。唯々利なることのみ心懸くるなり、第一紙を使ひすてず、鼻紙なし。何れも金巾のみなり、男女とも下帶なし、髪を結はず、男女とも猿の如し、櫛かんざしなし、鳥の羽、または草木の花など冠物の上にさすなり、尤も我朝にても髪は人皇四十代天武天皇白鳳十年初めて髪を結ぶ、これまでは異人の如しといふ。今年までに千百四十年になるなり』

この筆者は、大いに氣焔をあげてゐる、日本の方が、千年餘りも文化程度が高いのだと思つてゐる。「男女とも下帶なし」に至つては、思はず失笑を禁じ得ないものがあるが、この筆者を生かしておいて、夏の銀座へでも連れて行つたら、この氣焔を何と訂正するか、さぞ面白いことだらう。



異人館の圖（貞秀筆）

ヘボン博士と名優田之助

名優、澤村田之助が、脱疽を病んで、松本良順が治療してゐたが、切斷の外ないといふことになり、慶應三年九月十五日、横濱居留地のヘボン博士の執刀に依つて切斷した。

駕籠で、ヘボン博士の家へ着いたのは、十五日の朝八時頃、博士は助手と共に、九時頃から手術にかゝつた。

全身痲醉で、切斷したので少しも痛みを感ぜず辨天通りの大勘に三十日まで靜養して江戸へ歸つた。

そして、田之助のために、米國から取寄せた義足は、翌年到着

した。

田之助は、これで舞臺に上りつゝあつたが、更らに又他の一脚を失ひ、次いで兩手をも切斷せねばならなくなり、それでも舞臺に上り名優の名をほしいまゝにしてゐたが、明治十一年三十三歳で歿した。

このヘボン博士の治療は忽ち有名となり、浮世繪とまでなつて世に行はれたが、これが醫術に於ける麻醉の初め、義足の初めであるといはれてゐる。

悟道軒圓玉の回顧談か何かに、圓玉のお母さんが胃病で、江戸から横濱へ駕籠で通つて、ヘボンの治療を受けたさうである。

「その藥がなか／＼の名藥でして、一服飲むと、ぐうつ、と胸の痞が下りる、が、しかし直きもとへ戻る。その藥が一服一兩といふ大金だつたが、今から考へると何のことはない重曹だつたんですよ」

と、例の話術で微苦笑させてゐる。

ヘボン博士は、日本への文化移入の恩人であつて、傳道と施療、和英辭書語林集成の編纂、聖書の飜譯、家庭學校、など枚擧にいとまがないが、殊にその家庭學校は「指路教會」「横濱フエリス女學校」「明治學院」を生むに至つた。

ゼームス・カルチス・ヘボン博士は、一八一五年米國ペンシルベニア州ミルトン町に生れ、プリンストン大學を經て更らに、ペンシルベニア醫科大學を卒業した。

その後六年間、各所を轉々として歩いてゐるうちに、ミス・クララ・リートと結婚し、一八四一年に至つて、醫者のない國へ行つて、傳道と施療をしやうと覺悟し、傳道局の求めに應じて東洋に赴任した。

シンガポール、澳門、厦門等と傳道の生活を送つてゐるうちに、風土病のために一子を喪ひ、自分も亦病氣に侵されたので歸國して紐育で病院を開き、たま／＼アジアコレラの流行を見たので此れが治療に從事して、一躍名醫となり、ことに眼科の名手といはれるに至つた。

一八五九年(安政六年)、日本が開國された。

これを聞くと博士は、日本の傳道を思ひ立ち、親戚や、知人の反對するのを押切つて、傳道局に懇請して日本へやつて來た。その年四月廿四日紐育を出發し、横濱に着いたのは十月十八日であつた。

當時四十三歳、働き盛りの博士は神奈川の成佛寺の本堂を住居とし、附近の宗興寺を借りて、此れを治療所とした。そして三年の後、初めて横濱の居留地に住宅を建築して、治療所、宗教的集會所、日曜學校、英學教授所などに充てた。

そして、日本に止まること二十三年、明治廿五年に歸國して紐育市外イーストオレンヂに餘生を送り、博士が九十歳の時、明治大帝から勳三等旭日章を賜はり、明治四十四年（一九一一年）九十六歳で大往生を遂げた。

日本最初の新聞であつた濱田彦三の「新聞紙」は元治元年四月、横濱埋地百四十二番から第一號を發行した。これは毎月二回郵船で外國から來る新聞を、濱田が飜譯口述して、本間清雄、岸田吟香などが筆記したもので、この岸田吟香は後に、米人ヴエントリードと共に「横濱新報もしほ草」を發行したのである。

後に、岸田吟香が賣出して、全國に名を廣めた眼藥の「精錡水」は、ヘボン博士から傳へられたもので、博士の家に寄寓して和英語林集成の編纂を助けた。

この辭書が一册、十五弗だつたとか、五十弗だつたとか傳へられてゐるもので、當時の英語書生は、一生懸命で之れを筆寫しながら暗誦したものであるといふ。



ヘボン博士の足療治圖

博士が澤村田之助の足を切斷したことが有名になつて、かうした浮世繪まで行はれた。圖にフランスの名醫とあるは間違ひ。

吟香は後に、東京日日新聞の主筆になり、臺灣の役には日本最初の從軍記者として、大いに働いた。

明治以前の横濱の醫者に、早矢仕有的（はやしいうてき）といふ人がある、醫者の傍ら語學を敎へてゐたが、夏冬一着の背廣で、すこぶる無雜作な人であつたといふが、醫書や、藥品の關係から、弟子の金澤善吉の名儀で、丸善書店、丸善藥店を出し、洋書の輸入を初めた。

洋書といへば、直ぐに「丸善」と思ふほどの今日の丸善も、かうして創業されたのであつた。

かうした譯で、その門からは相當有名な醫者を出したが、その熱心なことは、生理研究のために、自分の子供の死屍を解剖したなどといふ調子で、醫界に貢獻したところは、なか〜〜多かつたといふ。

（未完）

新大東京の顏

上司小劍

はしがき

私は今、丁度私の四部作長篇の一ばん終りの『建設篇』といふのを、ぽつ〳〵書きはじめてゐる。この長篇の第二部『勞働篇』といふのが、單行本になる前、『中央公論』に連載されたのは、一九二二年か三年の頃であつた。もう七八年の歲月が流れる。私の描かうとするのは、藝術『東京』であつた。必らずしも實在の『東京』ではない。資本主義を基礎としての中央集權が行はれ、近世大都市は皆その產物として現はれた。私の藝術『東京』は、さうした私生兒的都市の滅亡に理想をおいて、『美しき東京』を描かうとするのである。『建設篇』も、ずつと前から腹案されてあつた。ところが、偶然にも七年前のあの大震火災。……私の建設篇は、新大東京の復興と、期を同ふして筆を執るやうな羽目になつた。

こゝに書かうとする『大東京復興圓舞曲』の一篇は、もとより、そんな藝術『東京』ではなくて、實在の東京である。たゞ私がこの十年間、乏しい創作力をさうした方面にばかり集中してゐるがために、實在の東京にも、どうかすると、藝術『東京』のにほひがするかも知れない。理想の『建設』と現實の『復興』と交叉する點が、この短かい記述の中にも、ところ〴〵出て來るか知れない。それをあらかじめ斷つておく。

（一）世界有數の大都市大東京

東京は日本の首府である。一國文化の中心である、政治經濟及び文學藝術の樞軸である。一あつて二なき大都市である。碌に考察もしないで、漫然大阪や名古屋とくらべて、彼れ是れ言

ひ得べき筈の都會ではない。

大東京の總面積一億七千二百八十四萬坪、人口四百八十八萬餘、(昭和四年九月調査現在)ざつと五百萬の人間が、法制上の東京市と、事實上市内と少しも變らない接續の町々と、その近郊とに集合してゐるのである、これを現在世界の大都市にくらべると、ロンドンやパリを抜いて、ニューヨークの六百餘萬人に次ぐことゝなる。現に法制上の東京市と接續して、澁谷町、荏原町、西巣鴨町等いづれも十萬以上の人口を有しながら、東京市に隣り合つてゐるがために、獨立した市となり得ないでゐる。またそれは實際上東京市の延長だから、そんな人口になつたのであつて、東京市を離れては成り立たない町々なのである。これら、仙臺市や福岡市級の町々のほかに、奈良市や水戸市級の人口若しくはそれ以上の人口を有する町々は、東京市の郊外に幾つも／＼ずらりと、東京市を包圍してゐる。これが大東京なのである。

しかし、私はいまこゝに、左樣に膨脹した東京市の姿、大震火災後急激に發展した市の郊外に就いて語らうとするのではない。主として、市の中心、及びそれに近く、新たに復興のなつた區域に就いて、大都市大繁華の圓舞曲を奏したいのである。

(二) 丸の内

或る外國人は、銀座をもつて、大東京の心臓だ、と言つた。享樂的に視れば、成るほどさうかも知れぬ。こゝを心臓だとすれば、内容はとにかく、外觀はまだ／＼ずゐぶんお粗末な心臓である。建築物の大部分が木造であるのは、姑く容赦するとしても、あの林立した電柱と、蜘蛛の巣の如き電線とはどうだ。あんな亂雜な、汚ならしいものが、スツカリ地下に埋められて街路の上から影を消すやうにならなければ、美しい東京とは言はれない。都市美協會なぞといふ閑人の集りは、完成もしない警視廳の塔なんかに、かれこれ横槍を入れるばかりが能でない。東京市内の到るところに林立してゐる杉丸太と、蜘蛛の巣のやうな銅線とに盲目なのを自ら哀れとは思はないのか。その上に、東京市の電車は、送電線が架空式になつてゐるので、いよ／＼以つて蜘蛛の巣の汚ならしさを助ける。その上、折角の街路樹の大部分が、電線のために伸びることを妨げられて、可哀さうにいづれも梢をちよん切られてゐる。あれでは、いつまで經つたとて、パリのシャンゼリゼエに見るやうな、立派な並木を、東京市の街路に作ることはできない。

聞けば、大震火災後の東京復興計畫では、架空式電線をばす

べて地下式にする筈になつてゐたのださうだが、それではどうしても、經費が二倍ばかりよけいにかゝるので、到頭見合せになつて、復興街路のどこかへ、見本式に、電柱も電線もなく、すべて地下式にした模範的の場所を拵へたのであるさうだが、私はまだそこを見てゐない。でもあの素ばらしい大建築の三井銀行と三越との間の街路は、狹いけれど、偶然か何か知らず、電線も電柱もないので、大通りの方から見通した景色が、いかにも美しい。全市があんなになつたらばと、都市美にあこがれてゐる私は、いつまでも佇んで、あすこを眺めてゐることがある。あすこあたりは、日本の大資本王國三井の根據地で、三井系の大建築が竝んでゐるほかに、日本銀行あり、正金銀行支店あり、昔の金座の跡で、言はゞ丸の内の延長である。

三井と竝稱されて、日本の二大資本王國に數へらるゝ三菱の本營は、言ふまでもなく丸の内であつて、その丸の内はたゞに三菱三井のみならず、多くの富豪の根據地となり、資本主義國大日本の心臟をなすものである。則ち東京の心臟は銀座でなくて、丸の内なのである。丸の内は大東京の心臟で、腦髓を兼ねたものであるとゝもに、また大日本の頭と胸とに當る最重要部分である。丸の内がなければ、日本といふ大國家は一日も呼吸をなすことができない。血液を製造することもできない。全身に意志を傳へることもできない。

その最重要な丸の内には、恐れ多くも宮城あり、議院あり、東京驛あり、それを貫く四十間乃至二十四間の大道路とその支線。それに面して、丸ビルを始め、三菱、三井その他の大建築が櫛比してゐて、日本の全國どこへ行つても見ることのできない壯觀を呈してゐる。設計が舊式で、建築ももう新らしくはないが、それだけに落ちつきの見える東京驛の大建築、とにかく日本第一の大停車場で、日本の中央驛である。これよりも新式の停車場は、おひ〳〵と、上野その他に建築されることであらうが、こんな大きなものは、もうどこにも建てられはすまい。特にその乘車口と降車口との中央部の宮廷用停車場は、庶民の近づくを得ない場所であるが、内部の善美は、停車場の施設としていつまで經つても日本第一のものであらう。階上にホテルあり、東京鐵道局のあるのは、人の知るとほりである。

東京驛の裏口、即ち八重洲口は、當分の假建築であるから、追つて立派な本建築が出來た時、東京驛は更らに現在に倍した大建築となり、設計の舊式に因るあらゆる不便も、その時になつて一切除かるゝのであらうが、裏口のことは姑くおあづかりとして、表口の廣場から、例の四十間幅の大道路を過ぎ、石壁に枝を垂れた老松の緑滴るのを見ながら、殆ど橋を渡るといふ感じ

なしに、廣いお濠を越えて、左へ、宮城の壯嚴な二重橋と、銅製の青い甍の諸宮殿の御屋根とを仰ぎ、またお濠を越えて右へ、日比谷公園の外側から、官廳街を過ぎ、永田町の高臺に聳ゆる新議院の大建築。……そこまでが、いはゆる都大路で、昔しの朱雀の大通に比すべく、日本帝國の第一ばんの表通ともいふべき壯嚴無比の場所である。新築まさに成らんとする新議院のあたりには、既に新築中、或はこれから工事に取りかゝるべき諸官省が、近き將來において、ずらり竝ぶであらう。ずつと前にできた司法省や大審院や海軍省の立派な建物とゝもに、いはゆる官廳街を成すもので、大極殿を中心として、八省百官を竝べた古の大内裏に幾十百倍した壯觀を呈するのも、さう遠いことではあるまい。丸の内を見ずして東京を語ることはできない、東京を見ずして日本を語ることはできない。

日本では從來、評價のできない古建築を別として、新らしい建造物に一千萬圓以上を投じたものは、殘念ながら軍艦のほかになかつた。軍艦は或る年限を經過すれば廢物となるべき運命をもつたもので、永久的の國寶にはならぬ、いはゞ消耗品である。その消耗品に何千萬圓を投じながら、都市美の中心となるべき建築物には、せいぐ二三百萬圓をかけるのが止まりであつた。ところが、七八年前丸の内ビルデイングの出現によつてあの總工費が一千萬圓と稱せられてゐるが、震災に受けた損所の修繕やら何やらで、資本王國三菱があの東洋第一の大建築に投じた金は、よほどのものであらう。但し、こゝにいふ大建築の「大」は、たゞ大きいといふばかりの意味である。

丸ビルにくらべると、日本橋の準丸の内に出來た三井の總本店は、むろんビルデイングでなく、三井の銀行、信託その他に使用されてゐるのだが、丸ビルとはだいぶ上等の大建築で、工費も一千萬圓とか二千萬圓とか傳へられてゐる。費用お構ひなしで、アメリカの技師が請け負つたとかいふが、とにかく一千萬圓以上を要したにちがひない。三井王國の豪勢は、あの一角に白い輝きをもつて、燦然と、通行人の眼を射てゐる。これに對して、丸ビルの隣りにある三菱の本部は、敢へて見すぼらしいといふのではないが、白煉瓦のお化粧で、小ぢんまりとしてゐる。しかし、あの白煉瓦や、馬場先門前一帶の古い赤煉瓦の建築が、あの大震災にビクともせず、東京驛や司法省、海軍省などゝもに、ガラス一枚こわれなかつた堅牢さは、さすがに三菱の仕事の手丈夫を裏書きするものである。丸ビルも三井銀行と共にアメリカ技師の建築にかゝるといふが、丸の内の古い赤煉瓦には、司法省を初め、ドヰツの技師の建てたものが多く、とても堅固にできてゐる。煉瓦は地震に弱いといふが、それも

やりやうで、丸の内の古い赤煉瓦は、いづれも鐵骨時代以前の作であるのに、あの大震災に十分堪え得たのである。

丸の内の赤煉瓦街は、二重橋を正面にして、時代が附き、一種の寂を生じて、だいぶ成長した銀杏の並木とゝもに、しつとりとした都市美を見せてゐる。いくら金がかゝつても、建築のあまり新らしいのは、風情がない。こゝに三菱銀行の石造殿と東京府廳(東京市役所)の赤煉瓦の古建築とが、相對してゐるのは、いゝ趣である。東京府廳の建物は、なか〳〵由緒つきのもので、パリのオテル・ド・ビルを思はせるやうな様式だが、周圍の土堤に、低い、枝ぶりの面白い松の木が竝んで植はつてゐた時代がなつかしい。いまはその松の木を抜き棄てゝ、植物園の垣根のやうな、白ペンキ塗りの棚を設けたのは、ブチこわしだ。それに敷地の一角へ赤十字社支部の鐵骨鐵筋コンクリートを建てたのは、まだよいとして、門内向つて左方に見苦しい木造の市役所分室を設けたのは、何事か。丸の内の美觀を損ふこと甚大である。こゝにも、都市美協會とやらの盲目を見のがすことはできない。

中央郵便局のバラックは、いよ〳〵もつて、丸の内の美觀に汚點を印してゐるが、あれは東京驛の左方に、目下頻りと大建築の鐵骨の組立中だから、その落成まで辛抱するとして、丸ビルの周圍ふの除いた建物、いま以て[illegible]に〳〵つてゐるのは、丸の内の大公園に前歯が一本抜けてゐるやうで、甚だ見苦しい。三菱王國の怠慢ではあるまいか。基盤ばかり穿いてゐないで、あすこを早くどうかしてもらひたい。あすこへ海上ビルと竝んで、丸ビル以上の大建築が出來る頃、その脇の方に鐵道省の本建築も建つであらうし、中央郵便局もこゝ一二年の間に、その美觀を現はすであらうから、東京驛前の光景はその時初めて目鼻の附いた立派さを呈するであらう。あすこが、いはゆる三菱の原として、草蓬々としてゐた頃を、私は知つてゐる。東京驛の基礎工事だけが出來上つたまゝ、戰爭や何かで繰り延べまた繰り延べ、草の茂つた間に礎石を傳ふて、私は友人とゝもに、千餘年前の國分寺の舊蹟でも尋ねるやうな心持ちで、歩き廻はつたことがある。こんなところへ、大きな停車場が、我々の生きてゐるうちに果して出來るであらうか、なぞと、夢のやうに考へたこともあつた。

その頃、西洋の觀光者が日本へ來て、帝國ホテルに泊つて、馬車で一日、東京を探しまはつたけれど、東京が見出し得なかつた、と皮肉を言つたものもあるほどだつた。東京とは一個の完成したる都市にあらずして、村落の集合也、といふ言葉ので きたのも、その頃だつた。あの丸の内の廣い草原を見たものは

誰れしもさう思つたにちがひない。あすこに建ち並んでゐた大名旗本の邸がなくなつてしまつて、荒涼たる草原が出現した。それは實に、封建都市から近世都市への過渡期の草原であつたのだ。『お艶殺し』などといふ怪殺人事件がそこに起つて、美人の裸體が、草の中に轉がしてあつた。當時の新聞紙の社會面は毎日それで賑つたが、もとより今日のやうな誇大性は、その頃の新聞紙になかつた。

資本王國の牙城ともいふべき大建築の並んだ今日の丸の内にも、電柱と電線とを見るのが、不愉快である。むろん、その數はよほど少くなつて、大部分地下式に埋設せられたらしいけれど、まだ／＼絶無でないのが殘念である。「掘つては埋め、掘つては埋め」と、子供にさへ笑はるゝ東京名物の道路掘りかへしも、さうした地下利用のためで、掘つては埋め、掘つては埋めを繰りかへしてゐるうちに、街路はきれいになつた。

明治の初め頃出版された輿地誌略といふ古い本を見ると、ロンドンやパリの繁華を描いて、『電線は蜘蛛の巣の如く』と、それが先進國都府の美觀であるかのやうに羨ましがつてゐる。その頃の東京にはまだ殆ど一本の電柱も電線もなかつたのであらう。それがいまは逆になつて、電柱と電線とが、東京を醜惡にしてゐる。丸の内のお濠を越して、警視廳の假廳舍へ通ずる無數の電話線の如き、正しく醜惡の隨一であらう。一時限りのものとは言へ、まだ一二年はあのまゝであらう。こゝにもまた都市美協會とやらの盲目がある。

東京市は立派に復興した。……それを否むわけには行かぬ。しかし、東京市はまだ地上百尺の都會である。それ以上に空へ伸びることもできなければ、土中へ潜ることもしてゐない。若干の地下鐵道（後既に委しく書くつもりである）と、地下室と、地下埋設物とはあるけれど、地下の利用はまだ／＼駄目で、ほんの目に見えたとこだけの大都會である。

地上百尺と言つても、それは、政府が一切の建設物に對する高さの最上制限で、現在の東京の空へ伸びてゐる平均の高さは、おそらく二三十尺以下であらう。私は、建築物の高さを百尺と限つた政府の方針がわからない。地震國だから、もちろん、あまり高いのは危險だとして、いづれ專門家の意見を聽いて定めたのであらうが、建物の面積によつて、高さの制限を別にしてはいけないものか。たとへば、丸ビルほどの廣さがあれば、高さをばもう三四十尺伸ばしたとて、丸ビルの四分の一の廣さもない近くの昭和ビルの百尺よりは危險が少いのではあるまいか。從つて百坪や二百坪の面積の建物は、高さも四十尺ぐらゐに制限する必要はないのであらうか。この方の法規は現に實行

してゐるのかも知れないが、とにかくいかに短くとも高さは必らず百尺、といふのは、些か窮屈のやうである。

むろん私は、ニューヨークのやうな摩天閣の出現を東京に望むものではない。それは、地震に危ないといふやうなことを別として、街の落ちつきがなくなる。人間の生活が立體的に空中を征服することは、都市の面積を或る程度に縮め得るとは言へ、三十階四十階の上層に生活を營み、現代の施設では、エレヴェーターも一つでは利かぬといふやうなところに住んでゐて、しじう土に遠ざかつてゐるのはいやだ。都市の美觀から言つても、大體七八階ぐらゐの建築で揃へるのがよいと思ふ。寫眞で見てもニューヨークよりは、パリの方になつかしみがある。しかし、東京のやうに、低い家ばかり並んで、最高制限の百尺さへ、まばらにしかなく、地下室を備へた家もめッタに見あたらず、それも大抵一階止まりで、白木屋や三井總本店の地下室二階が珍らしく、新築の日本劇場がたしか地下室三階を唯一の自慢としてゐるやうでは心細い。ニューヨークの摩天樓は學びたくないが、地下を四層ぐらゐにして、十分に利用してゐるのは羨ましい。大下水さへまだ全市に行き渡らないで、汚ない話だが、糞便を一々汲み取つてゐる家の多い東京市の現狀を情けなく思ふ。

永田町の高臺にその輪奐の美を現はしかけた新議院は、まだ批評のできるまでに建築が進捗してゐないけれど、おそらく日本唯一の高價な新建築物で、附屬建物までを合せると三四千萬圓の工費に上るのではあるまいか。とにかく日本にも一千萬圓以上の建築が、丸ビルと三井の總本店と、この新議院とを合はせて、三つもできたのだから素張らしい。それが皆東京にあるのは、中央集權の結果已むを得ないことである。

宮城の内部のことは、恐れ多いから申さぬが、馬場先門内の廣場から拜した二重橋あたりの光景は、世界各國の宮殿に比して、非常の風趣深く眺められる。玉しきといふ枕言葉の通り、玉のやうな礫を敷き詰めた廣い道が、大内山へと、だん／＼にゆるやかな坂になつてゐて、正門の石橋へと差しかゝる。彼方には二重橋の鐵橋が見えて、南面した正殿の御前の門が側面からおがまれる。そこの脇の二重櫓は、現在日本に遺つてゐる城樓のうちで、一ばん形の美しいもので、まさしく一つの美術品である。これは昔し豐太閤が、一世の豪華を誇つて伏見に築いた折りの名閣櫓を、後に家康が江戸へ移したものだとか傳へられてゐる。家康が戰勝の餘威と絶對專制の權力とを以つて、京阪の文物を江戸に持つて來た一つが、この城櫓で、名城の昔を偲ばせる。家康の威光で、大阪や堺の豪商が無理から江戸へ引つ越しを命ぜられたあとは、大阪町、堺町の名で日本橋區に殘

つてゐる。當時泣きの涙で遠く東下りをした人々の子孫が、今や帝都の中心に東京ッ子として、三百年前のふるさとをば、なんのぜい六が、なんぞと頬を撫でゝゐる。佃島もやはり、家康が白魚を喰べたさに、これも攝津の佃の漁夫を移したところで、佃と同じ住吉神社が祀られてある。今なら人權の自由のと、やかましいことであらうが、專制政治は萬事に埒のあくことが早い。

宮城の御造營は、明治の初年から二十二年までの歳月と、數百萬圓の財帑とを費して、落成したもので、それも明治天皇の質素にと仰せられた聖旨を體したものであるさうな。物價のすべて安直であつた時代のことだから、現今の貨幣價値になほしたら、一千萬圓や二千萬圓ではあの御造營ができまい。それから赤坂離宮はヴエルサイユ宮殿に似た建築で、これも今お建てになるとすると、少くとも一千萬圓以上はかゝらうといふ話。これで大東京には、一千萬圓以上の建築物が五ヶ所もあることになる。東京驛裏口の建物は、設計に據ると九百萬圓の豫算ださうで、これも現在の表口の建物を合すると、一千何百萬圓になる。盛んなりといふべしである。フランスのヴエルサイユ宮殿は、時價にして幾億圓の價値を有し、我が日光の陽明門とゝもに、一坪あたりの建築費では、世界第一だとのことだが、そんな骨董的作品を別として、新建築で、一千萬圓以上のものが五つも六つもあるのは、流石に東京である。日本には東京を除いて、一千萬圓以上の新建築物のある都會は一つもないさうだ。永田町の新議事堂は、新らしさと、設備とから言へば、議事堂として、世界第一となるさうな。せいぐ\日本第一、東洋第一を誇りとしてゐた日本の建築物にも、漸く世界第一が出來たのだから、素張らしい。それが宮城を中心とする大東京丸の内の東に白く聳え立つて、遠景の富士山と、美しさを爭ふのである。

(三) 上野

大東京には、國有鐵道の一等驛が十もある。日本一乘客の多い新宿驛から、東京驛、上野驛、品川驛、新橋驛、兩國橋驛、田端驛、汐留驛、隅田川驛、秋葉原驛である。二三の主要都市に一ヶ所だけある一等驛(大阪には二ヶ所)が十ヶ所もあるのから推しても、大東京の繁榮が窺はれる。上野驛は、まさしく東京の北玄關、表玄關であつて、乘客の多いことでは、日本第三、新宿驛、東京驛に次いで、第四新橋驛、第五大阪驛の上にある。(昭和二年度の現在調査に據る)東京及びその附近の各驛がかくも乘客が多く、新宿驛の一日六萬、東京驛の五萬六千、上野驛が三萬八千にも及ぶのは、東京市の內外を貫いてゐる高架線のためであつて、この高架線こそは、いはゆる首府の鐵道(シマン・ド・フエル・メトロポリテン)である。

即ちパリのメトロで、首府東京にだけしかない特行の國營交通機關である。現在淺草、上野、萬世橋間の短距離にだけしか運轉されてゐない東京地下鐵道が、もッと延びるまでは、この高架線が即ちメトロであらう。東京市のやうに、市街電車の線路を路面に百マイルも敷設してゐる都市は、世界のどこにもない。世界第一は世界第一でも、こんな第一は有りがたくない。試みに市內電車の乘りかへ券をとつて線路圖を見るがいゝ、まるで正月の餅網だ。網の目だ。約百マイルの線路に千臺から、多い時は千五六百臺の電車を街上に運轉してゐては、交通のうるさいのが當然だ。けれども、別にこの國營の高架電車があるので、どんなに東京市の交通が緩和されてゐるか知れない。これがなかつたら、春秋の日曜祭日や、朝夕の混雜時には、命がけでも市內電車には乘れまい。市營電車は國營電車に乘客を奪はれるのを恨むよりも、よろしく交通緩和の大援助を感謝すべきだ。

上野驛は、前にいつた通り東京の裏玄關で、表玄關東京驛に次ぐ大建築が、こゝに起工される。さうして、その設備の最新式と、最大便利とは優に舊式の東京驛を凌ぐことであらう。先づこの驛前に、市營電車の複々線の敷かれることを、一つの驚異としなければならぬ。東京驛の前にも市電の複々線があると言へば言へないこともないけれど、複線と複線との距離が五丁もあつては、複々線とは言へまい。ところが、新上野驛には、地下鐵道の乘降口が三ヶ所も出來るから、穴を出て穴に入る群集の連絡が面白いことであらう。やがて、上野驛と東京驛との間に汽車が開通する曉には、この兩驛のいづれかゞ新宿驛を壓して、日本第一の乘客を吸引することであらうが、何にせよ、上野驛は東北行の客ばかりを扱ふところで、これを大阪驛や京都驛にたとへると、上り即ち東行の乘客だけなのである。それでゐて、現在の乘客の多さ。これも大東京の繁榮を物語る材料であらう。西行即ち京都や大阪の下り列車だけを扱ふのが、東京驛、新橋驛、品川驛の三つで、即ちこの三つに上野驛を合せて四ヶ所で扱ふ全部の客を、大阪や京都では一ヶ所で扱つてゐるわけなのである。それでゐて、大阪驛や京都驛は、東京の上野驛なら上野驛一ヶ所の乘降客よりも遙かに少いのだから、この一事で、東京の優越の絕對性に近いこと、少くとも人間の多いといふことだけはわかると思ふ。東京は立派に復興したのである。

地下鐵道と高架鐵道と市內の路面電車とを器用に結び付ける新上野驛前の廣場は、東京驛前の廣場よりも狹いだけで、美しさはあれよりずつと勝るであらう。たゞ前面にあんな大建築がないばかり、その代り右手に上野公園の高臺を控へて、絕好の

風景を見せるであらう。東京驛が品川千住間を貫く四里にあまる第一號幹線の大道路からだいぶ逸れてゐる上、市營の地下鐵道がぐづ〳〵してゐるために、差しあたりそれと交渉のないのにくらべて、上野驛はその第一號幹線道路に近く、地下鐵道は現に構內へ入つて來てゐるのも同樣だから、甚だ地の利を得たものと言へよう。たゞ震災善後の復興計劃で、幹線道路の幅が三十何間から、二十八間に、二十八間から現在の二十四間に縮められたのは、千載一遇の好機を逸した遺憾の極みで、模範的の大道路と言へば、僅に丸ビル横の四十間幅のが、見本のやうにたゞ一本あるのみとなつた。

上野の公園は、帝室から東京市へ下賜されて以來、だん〳〵從來の幽邃がなくなつて、近代的の明るさに改築されつゝある。その可否はこゝで言はぬが、とにかく、東京第一の大公園にちがひない。あの大震火災の二日後に、私が日光の避暑先から、辛ふじてこゝまで辿り着いた時は、焦土と化した市內に餘焰がまだ赤い舌を出してゐて、公園の森の奧にまでその熱氣が襲ひかゝつてゐた。私は燒トタンを屋根として、雜草を席のやうに編んだ急製幌の內で、市から配給の玄米飯の握つたのを喰べてゐる一紳士と、偶然親しくなつて、彼れの避難所（いま考へると帝室博物館前の土手のたらしい）で、大に帝都の復興を語つた。「東京はこれで立派になりますよ。」と私が言へば、かの紳士もこれに應じて、「え、立派になりますとも、五六年後にはね。……なんしろ前市長の後藤さんが內務大臣ですからね、外債でもなんでもドン〳〵起して、立派な東京を造りますよ。」と、希望に輝く彼れの口の端には、玄米飯の粒が二つ三つ附いてゐた。家財全部を失ふて、命から〴〵、漸く逃げて來た悄然たる多くの避難者等は、私と玄米飯紳士との談話を聞いて、「こいつ氣ちがひか。」と寂しい笑ひの眼で、嘲るやうに私たちを見詰めてゐたのであつた。私たちは氣樂に笑つて、草の上で腕角力をして遊んだりした。

いまこゝに、東京は、私たちが大震火災の直後に豫言した如く、見事に復興したのである。

○

まだ〳〵淺草や、銀座や、新宿や、その他隅田川に新しく架かつた十二の大橋や、地下鐵道や、宏大で華麗な各大劇場、大映畫館に就いて、委しく書く豫定であつたが、あまり長くなるので、それ等は、他日を期する。（三月四日）

トンネル工事の話

宇野木忠

日本のやうに山又は山の山岳重疊の國ではトンネルと交通機關といふものが密接な關係を有するものである。山梨縣や長野縣のやうな殊に山の多い國は比較的交通機關に惠まれる事が遲い、此の遲い交通機關をして完全せしめるためにトンネルを掘つて其等の連鎖を計るのである。然るに日本は一方に於て山又山で交通政策上トンネルが他の國よりも必要であるに拘らず他方之れが實行するに種々の支障が伴ふ事である。例へば地質の關係である。日本は火山國であるがために地層が統一してゐない、諸外國のやうに地層が統一してゐるとトンネル工事には常に同じ方法を持つてやればそれでよいのであるが、日本のは非常に堅い岩石であるかと思へば直ぐそれに接續して柔かい土砂であるといふやうな複雜多岐であるから同一の方法で掘鑿すると飛んでもない手違ひを生ずる事がある。であるから其場所々々によつて地質の檢査、掘鑿の順序及び方法等を決めねばならぬ、斯ういふ具合であるから技師が研究的にトンネル工事に當るとすれば日本位天惠に惠浴した處が他に比類がない。

一　トンネルの澤山ある國と日本のトンネル數

世界で鐵道トンネルの多い國はといへばスウイス、イタリー等は線路延長の割合に多い。スウイスのアルプス山脈の横斷には有名なシンプロンといふ延長十二哩四分之れが世界最長のトンネルである。更に今一つイタリーのアペニー延長十一哩六分で而も之れは複線型である。之れは目下工事中であるが、シンプロンに次ぐ大トンネルである。日本のは國有鐵道のトンネル數は昭和四年末の調べで開業線に約千五百本此の總延長約二百八十哩であつて線路總延長約八千七百哩に對し三パーセント餘

に當つてゐる。又現在工事中の鐵道建設線には約百二十本、其延長五十五哩であつて線路總延長六百五十哩に對し八パーセントに當つてゐる。而して今後の鐵道建設線は山間線が比較的多いから、トンネルも亦多くなり、殊に横斷面には將來相當長いトンネルが出來ることであらう。而して右のトンネル中日本最初に出來たトンネルは大阪神戸間にある石屋川トンネルで明治三年十月起工同四年七月竣工した極く短距離のもので長さが三十三間、幅二間半餘、之れに要した工事費四萬六百六十九圓とのことである。そうして既設のト*ンネルで大きいのは山梨縣の笹子トンネルである。一體山梨縣は東京を離る三十五里内外の場所であるに拘らず千葉とか群馬とか茨城とかに比較して文明の恩澤に浴せず、交通機關に惠まれないのは山國である結果であつて其れが爲めに交通機關の完全が計れなかつた譏りを免れない。



(右)鐵道長大トンネルとして世界第一のシンプロン・トンネル(長さ十一哩餘、スウイス、イタリ兩國境アルプス山脈を貫通す)(左)日本で最初にできた鐵道トンネル、石屋川トンネル

二　笹子トンネルと地方の風紀

笹子トンネルは中央本線八王子、甲府間にある單線型鐵道であつて現在開業線の日本の鐵道としては最長のものである、之れは明治二十九年十二月に起工し同三十五年七月導坑貫通し同十一月竣工したもので鑿岩機其他諸機械がまだ餘り發達してゐなかつたので其當時としては可成りな難工事であつた。同トンネルの工事從業員の總延人員は約二百萬人、工事費の總額は約二百二十萬圓であつた。人夫賃は一日工夫が四十錢乃至六十錢、普通人夫が三十二錢乃至四十五錢であつた。之を現在から見ると人夫賃だけでも何倍、何十倍に達して居るから、今に於て此のトンネルを掘鑿すると言ふことは經費の點に於て到底困難なことである。猶同トンネル工事中の負傷者は九十餘人、死者五人であつて割合に犧牲者は少なかつた。然しこふいふ工合に交通機關が文明の恩澤によつて惠まれる其の反面には純朴なる地方人の心境を破壞し良風美俗を失はしむるに至るのは止むを得ざることである。今でこそ三十錢、四十錢と言ふ樣な人夫賃はまるで問題ではないが、其の當時は勞働者として最大の恩惠に浴してゐる譯である。況んや一方に日の目もあはぬ坑內で生死の間に逍遙ひつゝ仕事をして行くのであるから、一旦仕事が終つて宿

舎に引き揚げると、あちらでも、こちらでも飲めや歌への大亂痴氣、自然地方民の家庭までも、それが爲めに脅やかされることがある。鐵道工事や、トンネル工事やで其の附近の家庭では貸間をしたり、食事の提供をしたりするので此の方面からも風紀を破壞することが非常に多い。文明はかゝる場合に於て色々のものを傳播させる。

三　ベル一押して爆發の合圖

トンネルは一日にどの位ひ掘進するのかと言へば専門の言葉で言ふと所謂導坑の掘鑿進行と言ふことで、トンネルの様な斷面の大きなものになると全斷面一度に掘鑿すると進行も遲く不經濟で且つ落盤や、崩壞等の危險の惧れも多いので、普通は斷面の小なる導坑を先導として穿ち、次いで之れを利用して漸次順序よくトンネルの大さに切擴げるのである。トンネル工事に於ては導坑の掘鑿は最も重要視されるのであつて、これが終れば他の仕事は容易に出來るものである。それ故導坑が貫通すれば、一般に最早トンネルを完成した様な氣持になるものであるが、導坑貫通の際には工事從事員は非常に歡ふもので、昨年末清水トンネルの導坑貫通の際にも、鐵道大臣が東京の大臣室に於てボタンを押して約百哩を隔つたトンネル内のベルを鳴らし、此の合圖に依り爆發をなして導坑を貫通させ、國家的意義ある紀念の式を擧げた。米國鐵道のモハット・トンネル（長さ約六哩昭和二年二月導坑貫通）及びカスケード・トンネル（長さ約八哩昭和三年五月導坑貫通）に於ても、大統領が首府ワシントンのホワイトハウスに於てベルを押し、前者は約二千哩、後者は約三千哩を隔つたトンネル口のベルを鳴らし、爆發貫通させた。導坑掘進の世界的レコードは米國グレイト・ノーザン鐵道のカスケード・トンネル（昭和三年完成）に於て、導坑片口一ケ月の進行千百五十七呎、一日最大進行五十二呎である。このカスケード・トンネル工事に於てはすべての點に於て世界的レコードを破つてゐる。約八哩といふこの長大なるトンネルを三ケ年に完成したことも世界的レコードである。眞に鐵道トンネル工事に一新紀元を作り世界各國技術者より嘆賞されて居る。

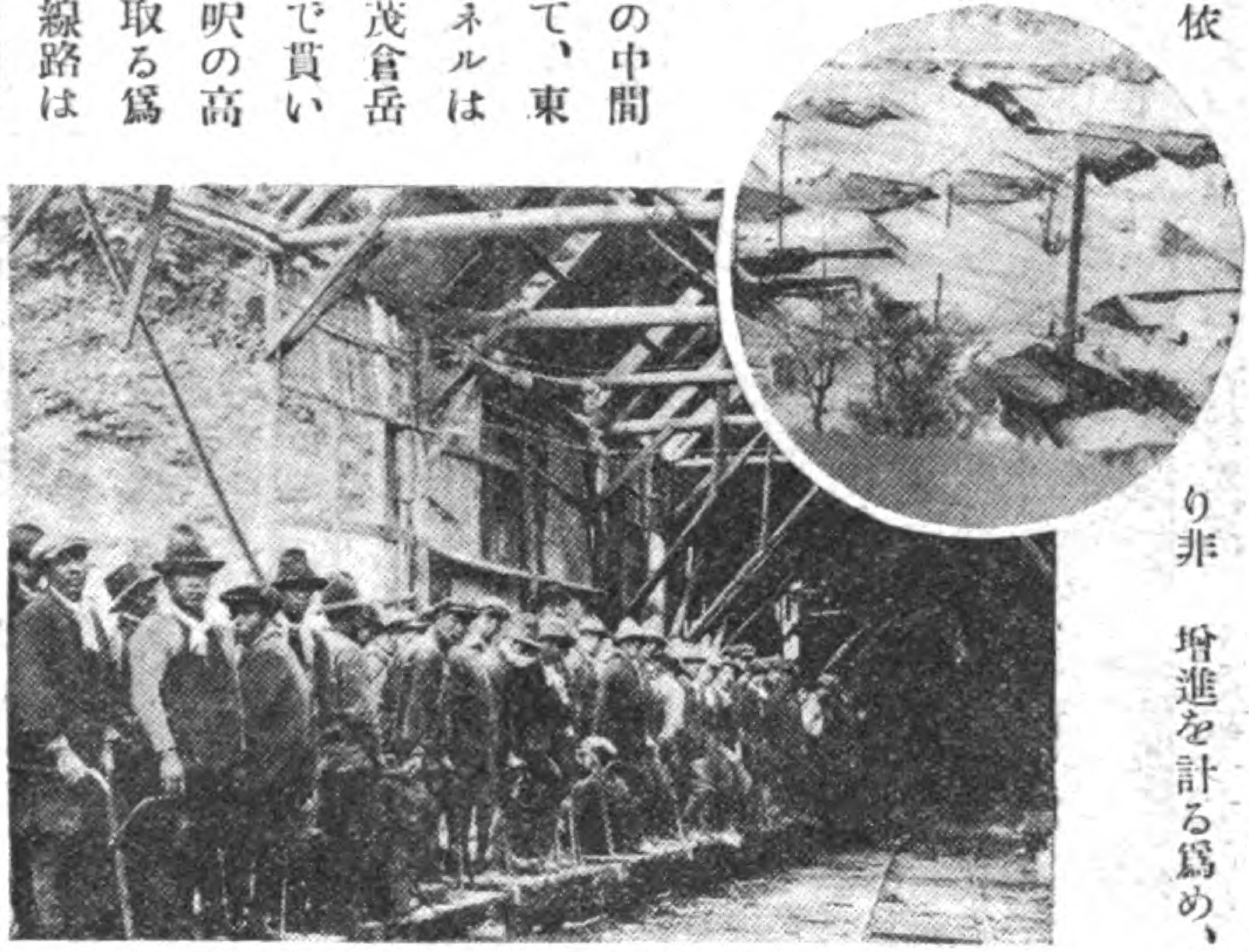


清水トンネル長岡口全景（正面がトンネル坑口にしてその後方の雪を頂く高峰が茂倉岳である）

日本に於ては秋線大刈トンネル（長さ約一哩四分昨年八月導坑貫通）に於て導坑片口一ヶ月進行約六百呎、一日最大進行三十三呎である。導坑進行は地質に依り非常に異る次第であるが、岩石の場合、鑿岩機を使用して、片口一ヶ月進行平均二百呎乃至三百呎が普通である。

四　トンネル內に信號所を設置した新らしい試み

清水トンネルは上越線高崎長岡の中間にある單線型鐵道トンネルであつて、東京を距る約百哩の所にある。トンネルは上越國境なる東山山脈中の高峰茂倉岳（海拔約六千五百呎）の直下を直線で貫いてゐて、トンネル口は海拔約二千呎の高所にある。この高所に上る勾配を取る爲め、距離を延ばす必要があつて、線路はトンネルの兩口附近に於て延長約一哩のトンネルを作り、一巻づゝループ狀に旋回してゐる。旅客はループ線では、トンネルを出ると、再び同じ景色が眼に見えるので不思議に思ふものである。ループ線は我國では九州肥薩線の矢嶽峠にある丈で珍らしいものである。清水トンネルは餘り長いので線路の輸送能力の增進を計る爲め、トンネルの略中央の坑內に、列車行違の出來る樣に信號所を設ける。設けたからとていちく\そこに信號員を配置さして置くわけにも行かないのでトンネルの坑口から電氣裝置により信號を扱ふ計畫でさる。トンネル內の信號所は世界でも珍らしいものである。此のトンネルは延長約六哩、幅十六呎、高さ約二十呎であつて、東洋第一、世界第九番目、現在工事中のものとしては、世界第二番目であつて、熱海線の丹那トンネルと共に世界的に有名である。工事費豫算額は約千二百萬圓である。

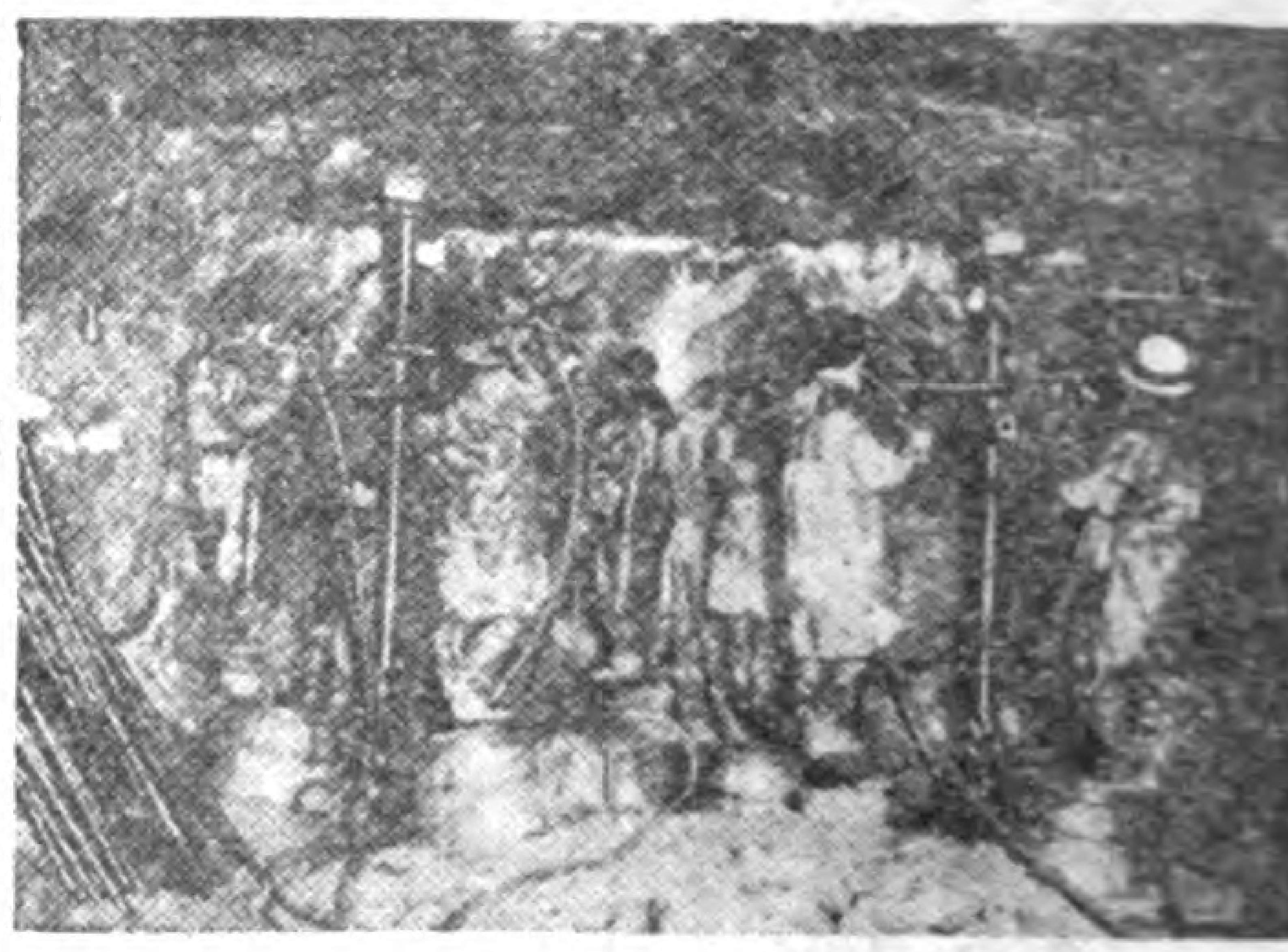


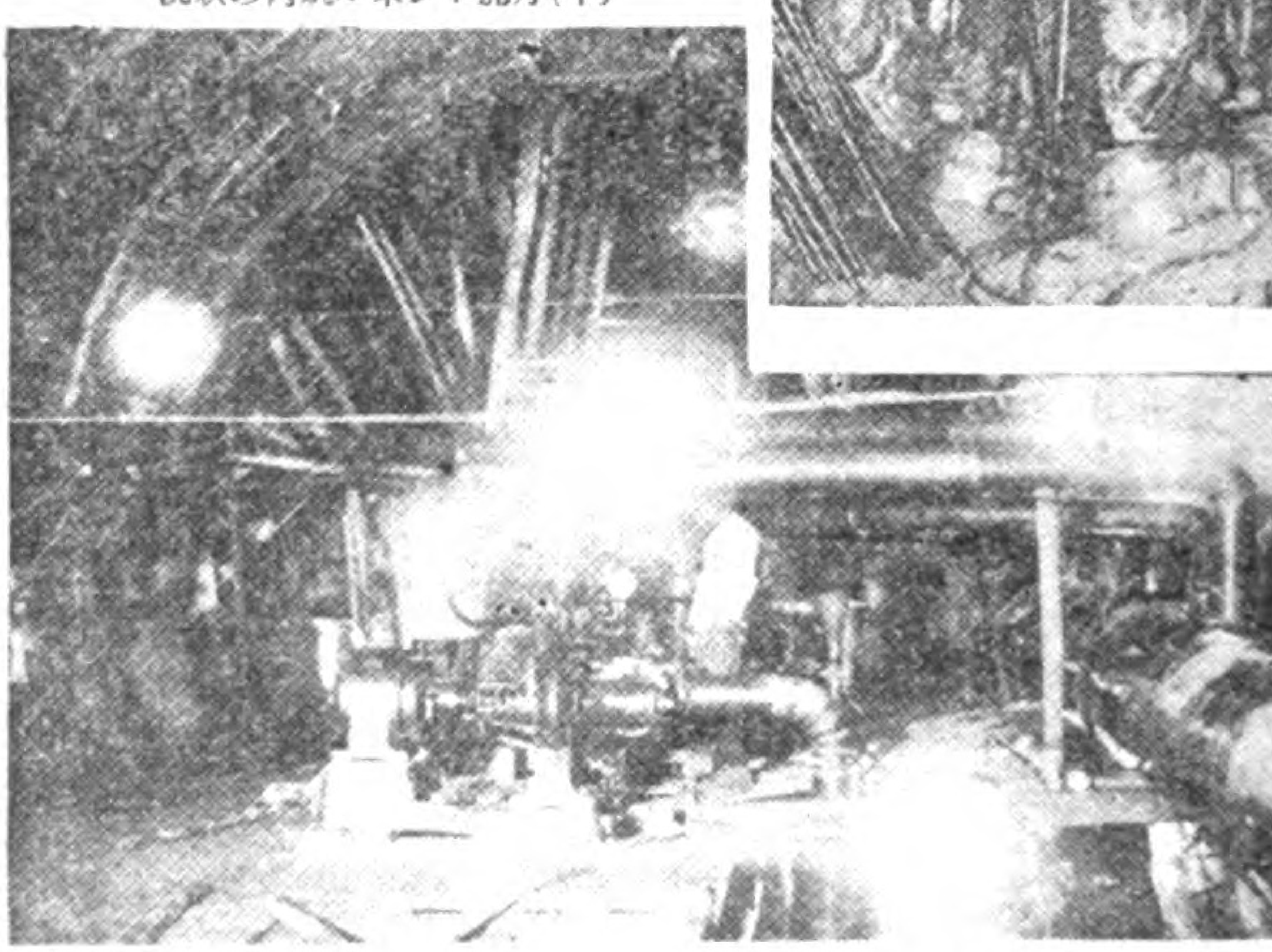
清水トンネル坑夫の入坑（毎日坑內に働く人兩鬮で約七百人）
圖中は積雪十餘呎に埋れた清水トンネル高崎口の從業者の寄舍

五　山鳴りや湧水で變つた現象

工事に着手したのは高崎口は大正十一年八月、長岡口は大正十三年二月であつて、昨年十二月二十九日に導坑貫通し、本年末には工事完成の豫定であるから、起工後完成までに約八ヶ年を要することゝなる。地質は主として閃

緑岩より成り往々軟弱なる地層に出遭つたこともあるも、大體に於て堅硬緻密である。堀鑿中主なる事故としては、大湧水と山鳴りである。高崎口から約八千九百呎の地點に於て、大正十五年十一月に一大斷層に遇ひ、俄然一秒間六立方呎以上の大湧水噴出して、其排水設備の爲め、全然本トンネル堀鑿中止のやむなきに至り、別に排水トンネルを堀鑿して、この湧水を排除するなど非常に困難したが、幸に從事員には死傷はなかつた。現在の湧水總量は高崎口は約一秒間十三立方呎、長岡口は約一秒間十立方呎である。山鳴りは高崎口から約一萬二千呎の個所から坑奥へ約一千二百呎の區間に起つた。この區間は非常に堅緻は閃緑岩であるが、爆發後厚さ三吋乃至六吋位、大なるものは六呎平方もある様な岩が、坑の兩側面から非常な勢で剝げて飛び出た。飛び出る前には必ず非常な山鳴りがする。山鳴りがして後、


(上)清水トンネルに於ける鑿岩機を使用しての導坑の穿孔作業


(下)丹那トンネル坑内の狀況

普通七、八分間も經つてから、丁度ダイナマイトが爆發でもした様な音を發して飛び出るのである。而してこの現象は爆發後普通二時間乃至四時間後に起ることが最も多いが、兩側壁が中凹みの形になるとこの現象は止つた。丁度此の附近は茂倉岳の直下であつて頂上迄は約四千呎あるがかく深い所を近は茂倉トンネルが貫通する場合にはかゝる現象に對して警戒を要する次第である。かの世界最長のシンプロン・トンネルの堀鑿の際にもトンネルから頂上まで約七千呎あつてこれに似た現象があつて犧牲者を出したと報じてゐるが、日本のトンネル工事には始めの奇現象である。

六

近來は從業人の學校も
あつて設備萬端行屆く

從來のトンネル工事は請負でない。鐵道省が直接施工して、職工人夫も直接雇傭してゐる。施工は西口から行ひ、從事員は一日三交代、一交替八時間勤務であつて、晝夜徹行年中休みなく施工を續けて居る。人夫賃銀は一日鑿岩夫三圓に十

錢位、普通人夫一圓七十錢位である。昨年末調で西口に於て職員職工人夫共約千四百人（内女約二十人、朝鮮人約六十人）その家族が約千百人で、合計二千五百人居る。而して起工以來完成迄の總延人員は約二百八十萬人位となる見込である。トンネルの兩口は何れも人家を見ない、眞の山間僻地で然も高地である。冬は非常に寒く、一年の殆んど半分は雪の中である。寒中最低温度は攝氏零下十六度位、積雪は十餘呎である。從事員には夫々官舍、合宿所を設け、又治療所、購買組合、配給所（連日の吹雪で交通全く杜絶する冬季積雪期には非常に苦心する）、學校（兩口の生徒數は約三百人である）等すべて鐵道省が直接設備經營してゐる。從事員は斯樣な熊の出る樣な山間僻地に於ても、（實際トンネル附近には熊が出て一昨年も一匹捕へた）安心して工事に從事し、平和な所謂鐵道村を建設して居るが、此の點は笹子トンネル工事の當時から見ると實に隔世の感がある。學校なども鐵道の從業員の子弟のみであるから、此等の兒童は工事と學校以外には目に何者も見るものなく全たく外境との交渉を絶つてゐるから放課時間などになると大きな釘で石をこつ〳〵やつて見たり、或は石を積み上げて見たりして門前の小僧自然と習はぬ經を讀むのも環境から止むを得ない事である。

清水トンネルを含む勾配區間は電化するのである。トンネル完成後直に電化工事に着手し、來年秋頃上越線全通の豫定であるが、この上越線は、裏日本沿岸地方と、關東地方とを連絡し距離に於て東京長岡間で信越線より約六十哩短縮し、東京新潟間で、磐越線より約五十二哩短縮し、其上勾配を緩かにするから、時間を短縮し、輸送力を增大し將來國有鐵道輸送系統上最も緊要なる幹線たる使命を有するものである。

七　世界に比類なき丹那の難工事

丹那トンネルは熱海線國府津、沼津の中間伊豆半島の主山脈を東西に、丹那盆地の直下を貫通する複線型トンネルである。トンネルは兩口から施工して居るが、東口は溫泉で有名な熱海町の直ぐ北方であつて、海拔約二百三十呎の高所にある。長さ約五哩、幅二十八呎高さ約二十二呎であつて、只長さに於ては鐵道トンネルとして世界第十九番目位であるが、複線型では世界第七番目位である。然し地質の惡いこと、湧水量の多い點に於ては、世界に未だ嘗て比類稀なる難工事として世界的に有名で、特に各國技術者の注目する所となつて居る。この工事豫算額は約二千七百萬圓である。工事に着手したのは、熱海口は大正七年四月、三島口は大正七年七月であつて、只今の所昭和七年に完成の豫定であるから、豫定通り完成すれば約十四ヶ年で

出來上ることになる。現在掘鑿して居る所は、丹那盆地の直下であるが、東口は約四十呎前方に、幅約四十呎の大斷層があつて、それには非常に壓力の高い水を多量に含み、普通の掘り方では掘進不可能であることが判つたので、先づセメント乳を注入して、その斷層區間を固結させ、水をとめて置いて後、掘鑿する計畫で、セメント乳注入を施工して居る。西口は地質良好で一日六呎位宛掘進して居る。目下（二月末）水拔トンネル掘鑿の殘りは、約四千三百呎であつて、トンネル全長の約五分の四を完成してゐる。

八　果然崩壞して多數の死傷者を出す

丹那トンネルは舊熱海火山の陷落火口壁に當る瀧地山を掘鑿するものであつて、熱海火山の噴出岩即ち凝灰岩、集塊岩、輝石安山岩質、溶岩等の互層を以て構成せられた地質である。而して大小の斷層發達し、その斷層には、火山の餘噴による噴氣や溫泉作用の爲め、岩石が腐つて出來た粘土即ち溫泉餘土を往々介在してゐる。トンネル掘鑿中これ等斷層に屢々遭遇し、非常に困難した。丹那盆地はトンネル通過直下の圓形の凹地であるが、之が成因に關しては、從來地質學者間に、水蝕作用、斷層作用、火山作用等の異說があつたが、試錐作業による調査の結果、數多の斷層群による陷落地帶なることが確かめられた。



丹那トンネル附近略圖

工事着手以來の大事故は四回、局部的のものは十數回あつた。大正十年四月に熱海口から約千呎附近に於て俄然崩壞し、折柄作業中の從事員三十三名、埋沒或は閉塞せられ、直ちに之れが救助に着手したが、八日目に漸く生存者十七名を救ひ出したけれども、殘餘の十六名は崩壞の犧牲となつた。大正十三年二月、三島口から約五千呎附近に於て突然泥砂噴出し、作業人夫が十六名閉塞せられた。直ちに救助作業に取り掛つたが、この崩壞土砂は全くの泥土で、其上每秒二十立方呎以上もある多量の湧水があつた爲め、發掘作業が非常に困難であつて、漸く十八日目に全部の溺死體を收容した。大正十四年五月三島口から約七千呎附近に於て、湧水量每秒約百二十一立方呎を噴出し、土砂約六百立坪の流出を伴ひ、坑内は勿論坑

外工事場一帶は大洪水の狀況を呈したが、從事員は幸に無事であつた。

大正十四年十二月、熱海口迂廻坑の奥端で、湧水量每秒約八立方呎に及び、其上湧水の壓力は急騰して、一平方吋に二百七十ポンドとなり、土砂を盛に流出し、其量三百餘立坪に達したが、從事員一同無事であつた。

九

橫濱で飲む一日の水量は熱海口から給水出來る

大正十二年の關東の大震災の際には、丁度工事中であつたが、坑外線路は非常な被害を受けたにも拘らず、丹那トンネルは兩坑口に僅少の被害があつただけで、坑內は全然被害はなかつたので、斯樣な山の厚い、長いトンネルの坑內は、地震には絕對安全であることを保證された次第である。最近の湧水總量は熱海口は每秒約三十立方呎、三島口は約四十立方呎であつて、兩口とも水拔トンネルを、本トンネルと離して別に掘鑿し、それへ排水して居る。熱海口からの湧水だけでも、橫濱市に水道として、優に給水出來る程で、如何に湧水量の大なるか想像出來る。





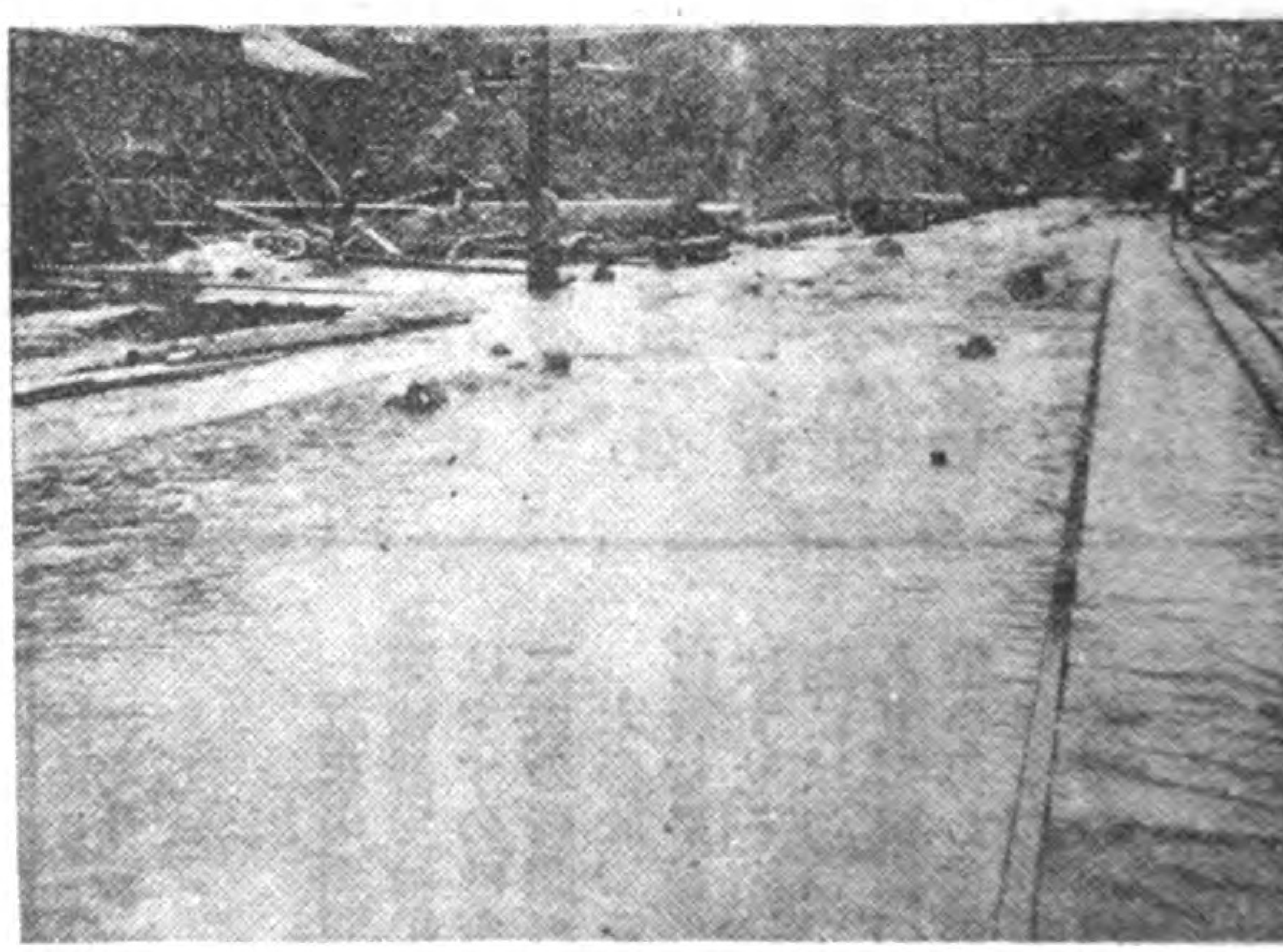
(上)清水トンネル坑內の大湧水（一秒間六立方呎餘）
(下)丹那トンネル大正十五年三島口に於ける大湧水（水量一秒間十二立方呎）

湧水の水源に就ては一時は色々の說をなした。或る人は箱根芦の湖の水位が下つたのは、斷層を通じて丹那トンネルに流れる爲めだと言ひ、又他の人は富士山の熔石と斷層に依つて通じて居る三島の水と同じ水源であるかも知れぬと云ふ。然しトンネル通過の地表面の河川の流水量が減じ、井戸水が枯れ、直上の丹那盆地の湧水が降雨に關係なく次第々々に枯れて行く

ことなどの事實から、茲數年來地表面の降雨量と、流水量との關係、井戸の水深、地表湧水の變化等、研究調査された結果、水の影響は左程遠くへ及んで居ない事が認められ、又丹那盆地の湧水が次第に枯れて行くのは、所謂丹那山體の地下水が低下して行くのを明かに示して居ることが認められて、芦の湖に通じてゐるなどの説は誤りで、トンネル內の湧水は、トンネル通過附近の水と密接なる關係があるといふ説が有力になつてゐる。

一〇　丹那トンネルは世界に珍らしい難工事

最近工事に從事してゐる職工人夫は、兩口で一日平均約五百五十人位である。その內女は約十人、朝鮮人は約二百三十人である。女は坑外でコンクリート塊製作に從事してゐる。賃銀は坑夫二圓八十錢位、普通人夫一圓八十錢位、女一圓位である。丹那トンネルに於ては起工以來鐵道省の岡田技師なども隨分苦心された結果種々の惡い地質に遭遇し、その掘鑿法も普通のトンネル工事とは全く類を異にし、夫々惡地質に適應する樣な種々特殊の方法が研究應用せられ、今日まであらゆる難關を突破して來たのである。セメンテーションとて先づセメント乳を非常な壓力で注入して、掘進する附近を固結し湧水をとめて置いて掘鑿する法、圓形の刃先を持つたシールドを水壓ジヤツキで坑奥へ押し込んで行き、その後から鐵製のセグメントで覆工して行く法、壓搾空氣で坑內に出て來る水を押し返しつゝ掘進する空氣掘鑿法、シールドと壓搾空氣を併用して掘進する法などである。昨秋萬國工業會議に出席された米國ニユーヨーク市の地下鐵道の技師長で、米國でもトンネルのオーソリテイとして有名なるリツチウエー氏が丹那トンネルを視察せられた時も豫想外に地質惡く且つ壓力の高い湧水多量にして、其の難工事なるに一驚すると共に、夫々惡地質に適應する施工法の成功に感嘆の辭を述べて居られた。實際丹那トンネルの地質や湧水のことは聞いたり讀んだりしただけでは豫想がつかぬ、見ぬ前にはかれこれ言つて居つた人も、現場の



丹那トンネル大正十四年三島口に於ける大湧水の際の坑外の氾濫の状況（水量一秒間約百二十一立方呎）

實況を視察して驚かぬ人はないとのことである。最早水拔トンネル掘鑿の殘りは、全長の約五分の一である。この區間に於て今日まで經驗したもの以上に惡い地質や、變つた地質に遭遇することはあるまいと言はれて居る。而して今日までゞ惡地質を通過する技術に就ては充分經驗も積み、施工方法に對する設備も完備して居る故、從來に比して非常に短時日に難關を突破し得る次第である。現在は兩口とも先づ順調に進捗して居る。此のトンネルが完成すると、東海道本線は、このトンネルを通ることゝなり、國府津、沼津間に於て距離が約七哩短縮され、殊に山北經山の現在線に較べて、勾配が非常に緩かになるので、一層時間も短縮され輸送力も增加する。尙電氣機關車を以て運轉する計畫であるから、煤煙等に苦しむこともなく愉快に旅行することが出來る次第である。一體之れは外國でも日本でも問題になつてゐるがほんとうにトンネル工事を經濟的に且つ有機的に完成せしむるには政府監督の下に民間の業者に請負はしむる事が合理的なやり方であつて殊に日本のやうに鐵道省自から工事に當るといふ事は所謂士族の商人であつて經濟的にも決して策の得たものでない。殊に一部には種々面白からぬ弊害のある事もないではない。英國や米國などは早くより民間に對する請負制度を適用してゐる、然し丹那トンネルのやうな世界で稀に見る難工事にかゝつたら請負人もさじを投げて逃げてしまふだらうが、かゝる難工事に對しては當局も相當調査研究してからの上として大體に於ては請負制度にするのが當然であると思はれる。

娼妓自廢九百八十七人

沖野岩三郎

一、どうしてもわかつてくれない！

或日伊藤君は私の宅に來て、例の自廢運動に就いていろ〳〵語つたあとで、

「君、此の點だけは、どうしてもわかつてくれない！」と嘆くやうに言つた。わかつてくれないと云ふのは、當時の警察官の頭が、また封建時代の女郎屋式で、「貸座敷」といふ新しい制度と「前借金」といふ貸借關係の意味を昔の「ミノシロキン」に解釋するといふ事である。即ち樓主といふのは、單に官許を得た娼妓に席料で座敷を貸す貸席屋であるといふこと、娼妓は樓主から金は借りてゐるが、それは決して娼妓の身體を金錢で賣つたのでは無い、普通の貸借關係であるといふことが、警察官の一部に、どうしてもわからない人があつて、其の人々が自由廢業を詐僞行爲ででもあるかのやうに取扱はれるのが、如何にも心外だと伊藤君は言つた。

「其の證據に、此の筆記を讀んでごらん。」と云つて、伊藤君は私の眼の前に一冊のノートを擴げた、見ると其のノートには、

「大正八年十月二十八日日本堤署長江□□□氏の吉原病院に於ける演說、看護婦山口かず子筆記」とあつた。

人間として重んずべきものは何よりも道德である。娼妓と雖も立派な人間である以上人間の守るべき道德を守つて行かねばならない。他人はどうなつても構はない、自分さへ善ければよいといふ不埒な考へから、善くない客に唆かされたり、救世軍にとび込んだりして、自由廢業をする者が時々ある。あれは大きな心得違ひで、けしからぬ事である。人といふ字は兩方から持ちつ持たれつする意味で、あんな字を作つたのである。人間は互ひに助け合つてこそ始めて平和が保たれるのである。あなた方も困つた時、樓主から金を借りてい

たゞいたといふ事を思へば、もうこんな稼業がイヤになつたからと云つて、直ぐ自由廢業をするといふやうな不心得を起される筈のものでないから、どうか今日限り自由廢業といふやうな、ワケのわからない眞似は止していたゞきたい。皆さんが救世軍に行くと、早速『ウン、ソウカ。それは法律にもこれ〳〵だから廢業するがよい』とばかりで、何が何でもスポーンとやつてしまひます。これでは道徳といふことが無視されてゐるから困る。なる程人身賣買といふ事は明治五年の法律で禁じられてあり、自由廢業といふ事も法律上にあるにはあるが、そんな事をして、いつまでも世間を狹く渡らればならぬのはつまらない。何故ならば、前借金何百圓といふ大金を拂はずに出て行くのであるから世の中を廣く渡れる筈がない。私は度々自由廢業の願出者に問ふ『廢業して堅氣になつて返すと云ふが此の大金をいつまでに返される見込があるのか。』さうすると『それはあなた、子供の代になるか、孫の代になるかわかりませんよ』といふ。實際その通りで、今時いくら働いても女の腕一つで金の三百五百と儲けられるものではありません。あなた方は樓主のお蔭で親兄弟を救つていたゞいたんだから、五年や六年の辛抱は、どんな事があらうとも、しとげれば嘘である。そんな德義の無い事をして資本家を困らせてはならぬ。こんな事をいへば、あなた方は『今度の署長は主人の味方をして、自分たちを苦しめる。』と云ふかも知れぬが、待つてゐらつしやい、今に主人の耳も痛くなるから……

そこまで讀んだ私は、其の次にどんな痛棒が樓主に下るのかと一寸樂みにして、瞳をノートブックの上に灼きつかせた。

自分たちは卑しい稼業だから誰の前でどんな事をしてもかまはないといふので、無闇に物をねだつたり、ドンブリや肴のつまみ食をしてはならぬ。そんな事をするとすぐ客の方がアイソをつかして二度と來なくなる。世の中は持ちつ持たれつであるから、客が來なくなれば、あなた方の商賣も駄目になるより外はない。それから新造衆や妓夫太郎先生が花魁を客にねだらせて祝儀を取るといふ事も改めなければいかん。それから禮儀作法について述べて置く。先日私が院長さんと此の檢査場へ見に來た其の時、或者は尻をまくつて火鉢のへりで堂々と紙を使つてゐた。或者は轉がつたまゝ卷煙草をスウ〳〵吹かしてゐるといふ風で、實に私は一見して、『これが日本第一の吉原の花魁か知らん』と思ひました。しかも誰一人私たちにお辭儀一つする者が無い。私は初めてだから見知らないのであらうが、いつもお世話になつてゐる院長樣には、お禮の一言ぐらゐ言つてもいゝではないですか。殊に此頃は米國から社會研究をする有名な人が來てゐるから道端でもよく氣をつけて、ふしだらな行ひを土産にせられないやうにして下さい。次には衛生を重んじて嚴重に洗滌をしてもらひたい。アメリカはこれが非常に嚴しい。で、もしあなた方の主人が、そんな必要がないとでも言つたなら直ちに屆け出て下さい。此間も樓主を集めて其の話をして置いた。それから私は樓主たちに、愛と情とをもつて、飽くまで吾が子供と思つて娼妓を愛せよと言つて置いたから、あなた方も飽まで恩とナサケを持つて樓主を敬はなければならない。現代ではもうあなた方は人身賣買ではないのだから昔のやうな張店は絶對にやめてしまつたのである。だから客を呼んだり、ヒヨクヒヨク暖簾から顏を突き出したりするのは、自分から人權を下げて自分を品物扱ひにすることになる。もしも番臺に居る妓夫太郎やをばさんたちが、呼び込め、顏を出せと云つたら

『いゝえ、私は署長さんから聞きました。そんな事をして品行を悪くさせて』いゝえ、いゝえ、はせられません。なぶり者にはされませんよ』と云ふがよろしい。それでも無理に云ふなら警察にお届けなさい。主人たちを罰してやりますから……

私は、やつと署長が樓主たちに痛棒を食はせる實際問題に逢着した。しかし、それが餘りに小さい事件だつたのに少々失望した。それから最後に江□署長は斯う結んでゐる。

最後に言つて置く。私の前任地では遊廓内に『美紅女學校』といふ學校を設けて、そこで裁縫生花茶の湯を敎へました。これはあなた方が將來家をもつ時の用意です。あなた方もそんな學校を設ける事を樓主に賴むがよい、警察の方でも出來るだけの盡力をしてあげる。あなた方も一度は堅氣になりお嫁に行く人たちです。或は二頭馬車や自動車を乘り廻す方も此の中にはあるだらうから、そんな身分になつた時恥をかゝない用意に……

『どうです、總てが此の調子だからやり切れないんですよ。法律規則を嚴重に施行する役目の警察官が、法律にはあるが、それを實行するのは怪しからんといふんでせう。客が登樓するから娼妓も立つて行くといふのは、泥棒があるから警察官も立つて行くといふ寸法ぢやありませんか。此の江□署長が赴任して間もない十月十日の事でした。こんな事件がありましてね。』

と云つて伊藤君は、鞄から書類の寫しを出して、詳しく說明した。

十日の午前に救世軍本營へ一人の若い婦人が訪ねて來た。丁度其の時伊藤君は市ケ谷東京監獄出張所に用事があつて行つてゐたので、婦人も其所へ尋ねて來た。會つてみると珍らしくも、それは、新吉原の寶來樓に姉妹二人で娼妓をしてゐる其の妹の方であつた。話をきいてみると、姉は酌婦あがりで小柄だが、妹の方は年も若し、とても娼妓稼業が苦しくて堪らないから廢業したいと云ふのであつた。そこで伊藤君は其の妹を日本堤署に同行して名簿削除の申請をした。ところが其の日は、いつも取調べをする警部補の手から事件を引き取つた新任署長の江□榮□は、伊藤君を控所に待たせて置いて、其の女を地下室に伴れて行つて、廢業を思ひ止るやうに懇々說諭した。勿論例の道德論で、持ちつ持たれつの話をしたのであるが、其の女は斷然署長の說諭に反對した。すると署長は直ちに左の宣告をした。これが新任署長の事務始めだつたのである。

申渡書

淺草區新吉原江戸町一丁目三十二番地
寶來樓野△利△郎方娼妓
秋田縣平民　高△ト■
二十一年

大正八年十月十日午前十一時頃當署の許可を得ずして牛込區市ヶ谷富久町百二十二番地救世軍出張所に到りしは娼妓取締規則第七

條の違反行爲にして同則第十三條の二の第二項により即決七日の拘留に處す。

此の申渡に不服なる時は三日以内に正式裁判の申立をなすべし。

大正八年十月十日

日本堤署長　警視　江□榮□

さすがの伊藤君も、此時ばかりは嚇となつて怒つた。で、直ちに保證金を納めて正式裁判を仰ぐことにし、東京區裁判所監督判事西鄕陽宛に辯護許可願を出して置いて、本人を秋田縣の鄕里に歸國させた。

それから二ヶ月半の後、十二月二十四日に公判開廷があつたので、トヨの實姉である寶來樓の娼妓少將が代理として出廷し、伊藤君は東京市及び日本全國の娼妓の現狀と其の生活狀態の悲慘を詳細に述べて、自由廢業の正に然るべき擧措である事を論じた。

二日の後、十二月二十六日に到つて左の判決があつた。これが日本に於ける娼妓の無斷外出に對する最初の公平なる判決である。

判　決

本籍秋田縣仙北郡花館村百九十五番地
住所同所平民無職
高□トヨ
二十一年

右の者に對する娼妓取締規則違反被告事件に付檢事高橋久衛關與判決する事左の如し。

主　文

被告人は無罪

本件公訴事實は被告人は大正八年十月十日午前十一時頃淺草日本堤警察の許可を得ずして一定の地域外なる東京市牛込區市ヶ谷富久町百二十二番地救世軍出張所に到りたりと謂ふにあれども被告人は警察署に出頭して自由廢業の手續をなすため救世軍出張所に到りたる事は當公廷に於て被告人代理人高□トキの供述によりて明かなるを以て被告人の所爲は罪とならず仍て刑事訴訟法第二百二十四條に則り主文の如く判決す。

大正八年十二月二十六日

東京區裁判所判事　尾立鼎三
裁判所書記　布施杉雄

「これで始めて救世軍の勝利に歸したのではあるが、事實はなかく〳〵さうではない。とにかく、頭の古い警官たちが、どうしても、わかつてくれない！」と云つて伊藤君は嘆いた。

二、兵糧攻め

「救世軍といふのは西洋の社會黨といふ恐ろしい團體だから、あんな連中に自由廢業を手傳つて貰つては、一生頭が上らない、などと嚇かされた娼妓が、それなら自分一人で……と勇氣を出して警察へ出頭したものが、可なり多數あつたが、それは

一人だつて目的を達することが出來なかつた。それには斯ういふ手があつたのですよ」と云つて伊藤君は、こんな事を語つた。

娼妓が警察署へ出頭して自廢を願ひ出ると、すぐ警察から樓主へ電話をかけて呼び出す。すると樓主は番頭の中で最もシツコイ男を代理に出頭させる。警察では出願者の娼妓と其の番頭とに對つて「名簿削除は規則上自由に出來るのであるから、いつでも聞屆ける。しかし親や保證人に迷惑をかけ、また再び登錄を願ひ出るやうな事があつては無駄な手數だから、なるべく合意廢業にするがよからう。だから、あちらの控所でよく相談して、其の結果を申し出るやうに。」と申し渡す。そこで二人は冷たい人民控所へ引退る。番頭は警察の電話を借りて主人へ其の事を知らせる。すると主人の方から更に二三人の番頭を警察へやる。そして寄つてたかつて嚇したり賺したりして不心得を諭す。どうしても廢業するといふ時は、番頭たちは交代に近所のソバ屋で腹をこしらへて來て持久戰を張る。こちらは段々腹が減つて來る、裁判所の控所ならばパンも賣りに來るが、警察署の人民控所には、そんな便利が無い。六時間も七時間も空腹でいぢめ通されると、たうとう泣き寢入りをして、「では一度警部さんにお目にかゝつて、救世軍の先生にでも御相談して……」と云ひ出す。そこで警部に面會しようとすると、「もう時間が過ぎたから退けて居ない。明日改めて出頭せよ」といふ始末。たうとう泣く〳〵樓へ歸つた者は、皆こんな他へ住替への憂目を見るのである。それは此の警察の控所に居るうち、きついゝ下振りを狩り集めて置くからである。

三、無斷外出御免の新案

自由廢業は救世軍の助力を借りなければ、不成功である。と云つて救世軍まで頼みに行けば無斷外出で即決拘留處分に處せられる。伊藤君もこれには閉口した。所が、窮すれば必ず通ずるものである。或日の事朝早く吉原の娼妓が救世軍本營に驅け込んで來た。事情をきくと前の晩遅く廓内をぬけ出て新橋驛前の旅館で一夜を過したのであつた。そこで伊藤君は考へた。此のまゝ所轄署へ伴れて行けば、すぐ規則違犯で拘留せられる恐がある。假令正式裁判を仰げば勝つに決つてゐても、それには時日を要する。時日を要してゐるうちに、どんな手で攻め落されるかも知れない。これは一つ考へなければならない！

伊藤君は其の娼妓を、どうして廢業させたであらうか。それは斯ういふ方法であつた。

本營まで二挺の車を呼んで、二人は各々それに乘つた。そして幌をおろさせて堂々と吉原廓内に乘り込んだのである。そし

て仲の町で車を降りて、二人は大手を振つて大門の交番前まで來て、そこで其の娼妓に、名簿削除の爲に警察署へ出頭しますと屆け出でをさせて、それから警察署へ出頭した。警察ではいきなり、『何故無斷外出して救世軍へ行つたか。』と云つて詰問した。すると娼妓は、『い丶え外出は致しません。』と答へた。

『昨夜十二時前に逃亡したといふ屆出が來てゐるぞ。』

『い丶え、逃亡は致しません。たつた今、大門の交番へ屆け出でて來ました。お問ひ合せ下さればわかります。』

『では、昨夜十二時から今朝まで何所に居たのであるか。』

『昨晩貸座敷を出て、廓內の辻便所で今朝まで隱れて居りました。』

『でも、救世軍の士官と一緒に來たではないか。』

『廓內の自動電話で、救世軍の先生へ來ていたゞくやうにお願ひいたしたのでございます。』

問答の結果は娼妓の勝利になつた。伊藤君も言葉を添へて、其の通り相違ないことを證明した。で、警部も苦笑しながら名簿削除の方針を取つてくれたのであつた。

四、奇問奇答

稼いでゐて直ぐ廢業願を出すことが、どうも困難になつて來たので、病氣と稱して一日入院する。そして病院から救世軍へ手紙を出して面會に來てくれと賴むやうになつた。さうすると今度は、樓主から、がつしり病院長を抱へ込んでしまふ方針を取つた。

或日のこと年齡六十歲以上と思はれる老人が、伊藤君を訪ねて來て、『私は元、神田で材木商を營んでゐたのですが、失敗に失敗を重ねて、どうする事も出來ず、たうとう十九の娘を橫濱の勢州樓に住み込ませました。所が七日間勤めて八日目から入院してもう二ケ月も病院に入院してゐます。こんな所と知つたなら來るので無かつた。退院すれば又あんなイヤな所へ戾らねばならないから、一日も早く助けに來てくれと、三日にあげず手紙が來ます。誠にむごたらしい事をしたと今更後悔してゐます。何とかして娘を救ひ出して下さいませんでせうか。』と淚ながらに賴むのであつた。

そこで伊藤君は、未成年者であれば、親權者からの申請で名簿削除が出來るのだと內務省令第四條の說明した上、橫濱の神奈川縣立眞金病院へ出かけて行つたのは其の翌日であつた。

『入院中の娼妓尾上に面會したいのですが……』

伊藤君の言葉の終らないうちに、受付子は、

『面會證をお出しなさい！』と橫柄に言つた。それから奇問奇

君が驚いた。

「面會證？　それは警察署から貰つて來るのですか？」

「いゝえ、貸座敷から貰つて來るのです。」

「貸座敷から？」

「さうです、その娼妓の勤めてゐる樓主の印鑑ある面會證を……」

「一寸お伺ひいたしますが、此の病院は樓立でございますか、縣立でございますか。」

「縣立ですよ。樓立なんてあるものですか。」

「縣立病院ならば、面會證は縣廳か警察署あたりから出しさうなものですね。私は樓立でない限り、そんな面會證なんか貰ひにまゐりませんから、兎に角面會させて下さい、こんな者ですから。」

伊藤君は名刺を出したが、受付子はそれを見もしない。そこで改めて、院長に面會を求めると、半時間程經つて二階の一室へ案内された。そして院長に會つて尾上に面會したいと云つたが、院長はどうしても面會を許さない。其の理由は「慣習上面會を許しては困る。」といふに外ならない。

そこで伊藤君は寿町警察署に行つて、娼妓取締規則第十二條の「何人と雖も娼妓の通信面接文書の閲讀物件の所持購買其他の自由を妨害すべからず」といふ回文を出し、院長に宛てゝほしいと願ひ出た。と同時に娼妓尾上に面會して自筆の手紙を取らしてほしいと申し出た。すると係警部は自轉車に乘つて病院へ出かけたが、三時間程經つて警部は歸つて來た。そして伊藤君に尾上からの手紙を渡した。披いて見ると、

私事はいぎよういたすこと、思ひとまり候間、さようおぼしめし下され、此のまゝおかへりのほど願ひ上げ候。

と書いてあつた。それを見た伊藤君は警部に詰め寄つて、

「私は貴下に對して、院長の説諭と、娼妓尾上に面會いたしたい事の二つをお願ひいたしたので、手紙を貰つて來て下さいとは頼んだ覺えがありません。手紙を貰ふだけの事なら何もわざ〳〵横濱まで出かけて來る必要はありません。是非面會させて貰ひたい。」と取締規則第十二條を楯に強烈に攻めかけると、警部はまた自轉車で病院に行き、一時間ほど經て尾上同行歸つて來た。もう日は暮れて室内の電燈が机上の書類をぼんやり照してゐる。

警部と伊藤君と尾上と三人が鼎坐した時、伊藤君は、尾上の父親に頼まれて名簿削除の申請に來たことを話したが、尾上は唯ハンケチを顔に押當て、泣くばかりである。で、伊藤君は「いつた。

「こゝにあなたのお父さまからの申請書を持つてゐるから、あなたが本當に廢業する考ならば、規則上今すぐにも廢業が出來て、家へ歸られるんだ。それに泣くとは何事だ。」

けれども尾上は、なかなか泣きやまない。すると警部はポケットから一通の聽取書を取り出して伊藤君に見せて、

『なあに、此の女は廢業する氣は無いんですよ。入院中淋しくなつて、父母の顏が見たいばかりに、そんな事を云つたのです。』と云つた。見れば其の聽取書には、廢業の意志は毛頭無いと書いて本人の印まで捺してあるので、伊藤君は施す術がなく其のまゝ引き揚げた。ところが其の三日後に神田の兩親の家から、伊藤君に直ぐ來てくれとの手紙が來た。で、行つてみると尾上は先の日とは似ても似つかぬ笑顏で伊藤君を迎へて當夜の事を詳しく語つた。語る所によると、其晩警部と樓主とは、『たつた七日しか勤めないで自由廢業をするといふのは、詐僞だ。そんな事をすると東京の父親が監獄へ行かなければならないぞ。だからこれへ印を捺せば、父親の監獄行が免れるのだ。』と云つて、無理無體に聽取書へ捺印させたのであつた。けれども樓主と警部とは、其の行爲に對して聊か後悔したと見え、翌日から三日間の休暇を與へられて兩親の許へ歸つたのであつた。歸る時くれぐれも『救世軍の人に會つてはならない。』と言はれたので、尾上は却つて樓主を疑ひ、伊藤君に面會を求めたのであつた。

そこで伊藤君は早速右の事情を神奈川縣の有吉知事と警察部長とに報告して、翌日尾上同道壽町署に出頭すると、先の警部は一言も無く名簿削除はしたが、そこでまた伊藤君と係警部の間に奇問奇答が交換された。

『尾上は、高等小學校まで卒業した教育のある女だが、自分の身體の不具を隱蔽して娼妓になつたのは、どうも最初から詐僞をする精神であつたらしい。』と警部は云つた。

『不具か不具でないか、それは警察醫が診斷する筈ではないですか。身體檢査の上是なりとして御許しになつて置いて、あとから不具呼ばりは警察醫の責任ではないですか。』

『それは醫學上の問題では無く、常識の問題です、苟も高等小學校を卒業した程の教育ある者が、それを知らない筈はないのです。』

『全體どこが不具なんです？』

『娼妓稼業として重要の場所に、あるべきものが無いのです。』

『ではあの尾上は男子だつたのですか。』

『いや、やつぱり女だ。それはあれだけの教育ある女ならば、知つてゐる筈だ。』

『教育々々と仰しやるが、一體日本の小學校教科書には、娼妓になる資格といふ項目があるのですか。今の小學校では、女子の身體の一部にあるべきものが無くて娼妓になる時は、詐僞取財の疑を受くべし。』とでも教へてゐるのですか。』

『…………』

會話はそれきりになつて、伊藤君は尾上をつれて歸つた。そして救世軍病院で大手術を受けて二ヶ月後に全快したが、程なく堅氣な小賣商人と結婚して平和な家庭を作つた。

五、救世軍士官と花柳病の奇問

『奇問奇答ですね。』と云ふと、伊藤君は笑ひながら、

『樓主に抱き込まれた院長には弱りましたよ。こちらも先方の頑固を破るためには少し考へてかゝりました。』と云つて、こんな話をした。

大正七年十一月十六日の事であつた。吉原角町の玉△樓の音丸といふ娼妓から、病院に入院してゐるから面會に來てくれとの手紙があつた。で、早速吉原病院に行つてみると、一人の醫員が出て來て、

『警視廳病院の規定として、樓主の立會がなければ絕對に面會は許しません。』と劍もほろゝの挨拶。

『そんな議論はどうでもいゝとして、それより先づ一應これを拜見して置きませう。』

伊藤君が詰問すると、醫員は別室から一冊の綴込みを持つて來て、

『明治四十四年二月警視廳訓令中第六號を讀みますからお聞きなさい。かう書いてありますよ。……入院患者に面會を求むる者ある時は前條の貸座敷主雇主及び寄留所の戸主及び父母其他親族に限り職員立會の上面會せしむる事を得、但し日沒後は急用の外これを許可することを得ず……だから面會出來ません』

と云つた。

『とんでも無い。それは入院患者に面會を求める人に對して設けられた規則ではありませんか。私は入院患者から面會を求められて、招きに應じて來たものです。其の規則にある面會を求むる者といふのは此の病院内にゐるんぢやありませんか。病院は患者の權利を無視するつもりですか。兎に角院長に面會させて下さい。』

伊藤君の抗議は詭辯に似てゐた。けれども醫員は言葉に窮して、

『院長は唯今不在ですが、樓主へ電話をかけますから、樓主が來たら一緒に面會して下さい。』と折れて出た。

程なく樓主が來たので、伴れ立つて病室へ行くと、音丸は伊藤君の來るのを待ちあぐんでゐたと見え、取り縋るやうにして窮狀を訴へた。樓主は其の不心得をくど〳〵しく說いたが音丸の意志は石の如く堅かつたので、樓主は、

『廢業なさるは自由です。勝手に退院して自廢するがよろしい。』と捨言葉を殘して、さつさと歸つてしまつた。そこで伊藤君は音丸に對して、院長が不在なれば、事務長に自廢申請のため警察に出頭するわけを話して、外出の許可を受けるやうに話して置いて、病院の門前で待つてゐたが、音丸はなか〳〵出て來ない。待ちくたびれて、も一度病院に行つて掛合ふと、事務長が出て來て、娼妓の入院患者は樓主から預つてゐるので、樓主の承諾がなければ絕對に外出許さないと云ひ張るので、已むを得ず警視廳の國澤醫務長を訪問して事情を話すと、

『あの院長は醫者としての仕事はよく出來るが、法律家でないから規則の解釋を誤つてゐるんです、こちらから電話をかけて置きます。』と云つてくれたので、また引返して吉原病院へ行つて面會を求めたところ、院長がどうしても面會させないと云ふので、

『法律上面會を許すべき手續になつてゐるのに、病院長が獨斷で面會させないといふには深い理由があるに相違ない。入院患者に救世軍士官の面會を許せば、花柳病が重くなるとでもいふ醫學上の理窟があるのですか、先づそれから承はらう。』と伊藤一流の抗議を申し込んでゐる所へ、警視廳から電話があつたので、鶴の一聲、音丸は無事に外出が出來、たうとう名簿削除の手續をすませたのであつた。

六、粹な赤星知事さん

『いや、いろ〳〵の事がありましたよ。』と云つた伊藤君は、不意に『君は赤星典太といふ知事を知つてゐますか。』と訊いた。

『知らない。』と答へると、伊藤君はニヤ〳〵笑ひながら、こんな不思議な話をした。

大正六年五月の末頃、救世軍の本營に身の振方の相談に來た婦人があつた。話をきいてみると、新潟生れの飯田蝶子といふ女で、長野市鶴賀新地の遊廓で小蝶と名乘つて娼妓稼業をしてゐるうち、故鄕に殘して來た一人の老母が病氣で困つてゐると聞いて、樓主と警察署との許しを得て歸國してみると、母は病氣の上に食ふや食はずの生活をしてゐたので、ありとあらゆるものを、みんな賣り拂つて東京にゐる親類を賴つて出て來たのであるが、母の病氣もいつ全快するか見込がつかないので、長野縣警察署宛に廢業屆を出すと、長野警察署から、科料金三圓申渡處

分通知書」を駒込署を通じて送達して來たといふことである。

「やつぱり廢業をするには、長野まで私自身で行かなければなりませんでせうか。」と云つて小蝶は打萎れてゐた。そこで伊藤君は、長野縣知事に對して訴願の手續をしてやつたが、其後小蝶から何も言つて來ないので、どうなつたかと思うてゐるうちに、或日右の小蝶がいそ〳〵顔で救世軍本營に來て、

「先生、お蔭さまで私も知事さんのおさばきで、立派に廢業することが出來ましたから御禮にまゐりました。どうぞ先生からも知事さんに宜しくお傳へ願ひます……」と云つた。

不思議だと思つて、小蝶の差出す書類を讀んでみると、こんな事が書いてあつた。

裁　決

本籍新潟縣北浦原郡中條村字中條
長野市鶴賀新地乙廿八番梅□□松方娼妓妓名小蝶
當時東京市本郷區駒込△△町△△方居住

飯　田　蝶　子

右訴願の要旨は訴願人は大正二年十月十五日長野市鶴賀町梅□□松方に於て娼妓稼業中の處病氣勝にて入院十數回に及び稼業に堪へざる折柄郷里なる實母病氣の報ありてこれが看護の爲大正六年三月十六日所轄長野警察署の許可を得て本籍に歸りしが生計困難の事情ありしにより東京駒込△△町實兄方に病母を伴ひ行き看護に盡すと雖も快方に赴かざるのみならず自己亦健康を害したるにより娼妓稼業も廢めんとし大正六年五月十五日附を以て娼妓名簿削除方申請書を長野警察署へ郵送したる處同署は該申請書は東京駒込警察署を經由し本人自ら長野警察署に出頭するにあらざれば受理する能はざる旨を以て之を却下せられたるが訴願人は無資力且病母看護の爲同署に出頭すること能はざる理由あるを以て長野警察署に對し名簿削除すべしとの裁決を求むるといふにあり。

右に對し長野警察署長の辯明は訴願人は長野市鶴賀新地貸座敷業梅□□松方に於て娼妓稼業中大正六年三月十六日より同月二十日まで本籍地に旅行方出願し許可したるに該期間を經過するも歸來せざるのみならず擅に東京市に旅行し同年五月十五日附を以て娼妓名簿削除申請書を郵送し來れるも自ら當署に出頭する事能はざる理由備はらざるを以て之を却下したりと云ふにあり。

依て審査するに元來娼妓は稼業にして訴願法第一條第一項第三號の所謂營業にあらず又本件は同項第六號の地方警察に關する事項といふを得ず且其他法律勅令に於て本件に關して訴願を認めたるものなきを以て本件は訴願を提起すべからざるものとす。

右の理由に基き訴願法第九條第一項に依る本訴願は之を却下す。

大正六年九月十日

長野縣知事　赤　星　典　太㊞

長野市鶴賀新地乙廿八番梅□□松方娼妓妓名小蝶事
飯　田　蝶　子(二十六年)

「何だ、娼妓は稼業にして營業に非ず?」と伊藤君は呟きながら更に一枚の書類を手に取つて見ると、

右者娼妓取締規則第十一條第二項により其稼業を禁止す

大正六年九月十日

長野縣知事　赤星典太㊞

とあつた。取締規則第十一條といふのに、警察官署は娼妓名簿登錄を拒むことを得、廳府縣長官は娼妓稼業を停止し又は禁止する事を得』といふのである。

伊藤君は聲を擧げて笑つた。

『稼業でおらうが營業でおらうが、どうでもよい。いゝ、イヤだといふものに、いゝ、してはならないといふ奇妙なお裁きだ。酒を飲みたくてたまらない者に、「貴樣のやうな奴には、酒を飲ますぞ！」といふ罰もあらうし、スシをイヤでイヤで、たまらないといふ者に、「今後決してスシを食はせないぞ！」といふのも一種の罰さ。名義は何でもよい。あなたは、これで立派に廢業だ。しかも大降りの廢業だ。まあよかつた。よかつた。』

蝶子は單に知事樣から廢業させて貰つたのだと信じてたらしい。幾ら説明しても廢業と禁止との差別が解らなかつた。でも、

『どつちにしても、もう私は娼妓をしなくともいゝんでせう？』

と云つて喜んで歸つた。

七、弱い商買

千葉縣木更津から來たのだといふ五十恰好の男が、救世軍本營に來て、娘の廢業を賴むと泣きついた。事情をきいて見ると娘は十九歳で吉原江戸町の石△樓に娼妓となつて出て四ヶ月目であるが、其の半分は病院暮しである。全快すればまたイヤな稼業をせねばならないから、早く助けに來てくれと、父親に矢のやうな催促をしたので、父親は上京して吉原病院に訪ねて行つたが、樓主の許可がなければ面會させない、と撥ねつけられたので、石△樓へ行つて賴んだが、主人不在で、たうとう追ひ返された。けれども毎日のやうに來てくれといふ娘の手紙にほだされて、又た上京して樓主に賴むと、これ限り二度と面會には來ないといふ約定書に印を捺させられた上、やつと面會を許してもらつたが、現在の親と子でありながら、證文を入れなければ面會も出來ないやうな所へ娘は置けないと思つた其の父親は、早速救世軍へ馳け込んで、伊藤君に泣きついたのである。

そこで伊藤君は、未成年者の娼妓は親權者から名簿削除が申請出來ることを敎へて、早速、所轄署へ同行して係り警部に手續きを賴んで置いて、病院へ面會に行き、一時間ばかり經て警察署へ行つてみると、門の所で其の親爺さんにぱつたり出會つた。どうしたのかと聞くと、

「警部さんが、今日は差支があるから明日來い。それ迄に樓主と本人との意見をよく訊いて置いてやると仰しやるので……』

と云ふ。

『そんな事があるものか、わざ／＼千葉縣から汽車に乘つて出て來たのではないか。無駄足をつかはせるにも程がある。』

伊藤君は呟きながら、親爺さんをつれて、も一度警察へ行つて談判すると、係り警部も致方なく樓主と本人とを呼び出した。そして本人と親權者の意見を訊問すると、どうしても廢業といふ意見に變りはない。樓主は聲を大にして、

『私は此の子に六百五十圓出したのです。それに四ヶ月を半分しか稼がないで廢業とはあんまりです。』と泣き喚鳴りをした。

警部も叱るやうに、

『其方たち二人は、ぐるになつて六百五十圓の借金を踏み倒すつもりだな。廢業するは勝手だが、六百五十圓といふ大金を、どうして調達するつもりか。調達の見込がないのに廢業するのは怪しからんぢやないか。さ、其の借金をどうするんだ！』と言ふ。

伊藤君は傍から口を出して、借金は借金で返濟の義務のある事、娼妓廢業は娼妓廢業で別問題である事を説いて、

『……此の親子二人が、あなたから六百五十圓の資本を借りて米屋を始めたとする。所が四ヶ月を二ヶ月まで入院して、これでは米屋も出來ないと云つて廢業しようとするのを、米屋をすると云つて六百五十圓貸したんだから、病氣であらうが何であらうが、米屋の廢業は罷りならぬ。どんな他に適當な事業があらうと、それへ轉業してはならない。何でもかでも米屋を續けろと説諭する警部さんがあつた時、あなたはどうお考へになりますか。其の時米屋をやらないで醤油屋をやらうとするのは詐僞だとお考へになりますか。』と云つたので係り警部も苦笑して説諭をやめた。すると樓主は始めて、自分は若い女を資本に取つたので無いといふ理窟が解つたらしく、頻りに頭を搔いて、

『さうですかなア。さういふ理窟ですかなあ。さうすると私たちほど弱い商賣はありませんなあ。』と云つて、たうとう廢業に同意した。

『本當に弱い商賣です。私は深く御同情いたします。どうか、一日も早くこんな弱い商賣はおやめ下さい。』

伊藤君は樓主にそんな挨拶をして、警察を出て來た。

八、頭がよい？

此の話をした序に伊藤君はこんな事を云つた。

『いくら無智な女だつて、あまり壓迫すると相當の智慧が出るものです。吉原の一○樓に居た娼妓にこんなのがあつた。廢業したいと思つても廢業はさせてくれず、思案に餘つて、二三回登樓した會社員の所へ、馴染と云ふ程でも無いのに驅け込んで行つた。驅け込まれた男は呆氣に取られて早速一○樓へ知らせると直ぐ迎へに來て伴れ戻した。二三日すると又驅け込んで來

た。そらッといふので番頭が飛んで來る。そんな事を一ヶ月に六七回も繰返したので、其の度に娼妓は科料を仰せつけられて、樓主も其の立替に閉口した末、それ程に男の所に行きたいなら、一ヶ月休業といふことにして外泊許可を取つてやらうといふと、女は大喜び。そこで樓主は其の會社員を訪問して落籍の相談を持ちかけた。男の父親は淺草の山谷で皮革商を營んで相當に暮して居たので、、其の男はうまく親爺をだまし込んで百圓の金を手に入れ、それを手付金として樓主に渡し、娼妓の外泊期間中に殘金貳百五十圓を渡せば娼妓を落籍させるといふ約定證を樓主から受取つたのである。一日三圓三十三錢で毎日女郎買が出來る勘定になるので、男も最初のうちはヤニサがつてゐたが、樓主の方からは早く殘金を調達しろと度々催促に來る。男も段々外泊期間が切迫して來るのに金の工面がつかないで、たうとう思案に餘つて救世軍へ相談に來たもんだ。そこで僕はいろ〳〵忠告した上、そんな女を落籍した所で仕樣がないから思ひ切れと云つたが、男はなか〳〵思ひ切れないと云ふんだ。所が女は考へたもんだ。いよ〳〵今日限りで外泊期間がきれるといふ日所轄署へ出頭して自由廢業の申請をした。例によつて樓主を呼び出すと樓主も、どうせ落籍される子だからと思つて、うつかり同意して名簿削除をすると、女は其のまゝ警察の表から車に乘つて行方不明だ。男の所へ行つて見たが來てゐない。あちこちを調べてみたが手がかりがない。男は男で血眼になつて探したが皆目わからない。一週間の後男は一通の手紙を受取つた。披いてみると、こんな事が書かれてあつた。

長々御世話樣に相成り、ありがたうございました。二三回お目にかゝつただけで、あんなに御厄介をおかけするとは、私もほんとうに、あつかましい女でございますのね。私も自ゆうはいぎやういたし、只今おともだちのところに來て御厄介になつてゐます。此の後はどんなになるか、今のところ見込は立ちませんが、いづれ其のうちに身をかためるつもりです。一生おたよりは致さないかも知れませんが、御恩は決して忘れません。それから少し路金がいりますので、貯金通帳のうちから三十圓だけ拜借いたしました。印かんをお預け下さるほどの間がらですものね。御免下さいまし。だつて、私は廢業してにげて來たんですもの、あなたは一△樓の主人から、あの手付金百圓は戻していたゞけるでせう。ごきげんよろしく……

といふんだ。何と頭のよい女ぢやないか。』

伊藤君は太い喉から哄笑をほとばしらせた。私も『モウパッサンの小説にでもありさうだね。』と云つて笑つた。

九、敬意を表して

昭和四年十二月の上旬に神田神保町の救世軍本營に山室軍平氏を訪ねて、久濶を敍した後、『娼妓自廢九百八十七人』を中央公論誌に發表するつもりだと言つた。すると山室氏は感慨無量

の前迄で語つた。

『それは實にありがたい。亡くなられた伊藤君を今一度地上に復活させていたゞく事だ。伊藤君は凡そ千二百人の娼妓の面倒を見て、其のうちの九百八十七人を無事に廢業させ、それぐ堅氣の生活をさせたのです。僕は伊藤君の事を思ふたびに實に偉大な男であつたと、つくぐ感心する。何となれば、伊藤君があの救濟運動をする上には、始終三つの大きな危險が臨んでゐたからです。三つの危險といふのは、第一に暴力です。いつかもお話したやうに伊藤君は毎日家を出る時、いつ、どこで殺されるかも知れないといふ覺悟をしてゐたのです。半死半生の目に會はされた事が二回、蹴られたり毆られたり石を投げられた事は何百回かわかりません。それでも伊藤君は平氣なものでした。第二の危險は金力でした。金錢でもつて人を賣買出來ると考へてゐる樓主たちです。隨つてどんな人間でも金錢で左右出來ると思ふのは當然です。九百八十七人の娼妓一人につき百圓づゝ樓主側から出しても九萬八千七百圓ぢやないですか。それだけで稼業を續けさせたなら樓主は其の幾倍の利益を見る事が出來るのですから、伊藤君が若し少しでも金に眼が眩れたなら、どんな事でも出來たのですが、實に潔白に身を保つて下さいました。第三には異性の力でした。男子といふ男子は悉く餓鬼[illegible]にしたといふ[illegible]ここの人々[illegible]に、たつた一人伊藤君だけが、賣笑婦の味方となつて生命がけに働いてくれるんです。而も親切が深くて男らしい勇氣に充ちてゐるんです。そんな男が千人からの女性の眞中に立つて神様の様に尊敬されてゐるんですもの。大きな誘惑の力が彼の上に襲つて來た事でせう。けれども伊藤君は毅然として其の誘惑の上を踏越えて戰つてくれました。本當に感謝に堪へません！』

私も山室氏の言葉には同感であつた。其の尊敬する救世軍中校伊藤富士雄君は大正十二年六月二日に、下谷の救世軍病院で永眠したのであつた。

（伊藤君が此の廢娼問題について、私に幾多の材料を提供されたのて、私はそれの中から數項を抜いて大正十年九月の某雜誌に掲載した事がある。其頃伊藤君の生活は決して裕ではなかつた。で、私は雜誌社から原稿料を受取つた時、直ちにそれを伊藤君に送つた。私の微意は、それで令息たちの衣類でも買つていたゞければと思つたのであつた。處が數日の後伊藤君はわざく私の宅を訪ねて來て、『僕は生活するだけの費用を救世軍の方から與へられてゐますから、俸給以外の金錢は一切受けないことにしてゐます。あの三十五圓は救世軍の感謝祭へ捧げさせて貰ひます。』と云はれた事がある。（まだく幾多の材料を殘して此の稿を終るに當り、私は眼底に泛んで來る其時の伊藤富士雄君の面貌に對して袴しく敬意を表しながら擱筆しますこ）

現代就職希望者氣質

線が細い

堤長述

私は中央公論の編輯記者に「當世學生就職氣質」に就いて意見を求められたが、永年文筆に親しむ折もない忙繁の身でもあるし、そうした間に對して適確な答も出來難い立場にもあるので、不滿足な答で終らなければならない事を、遺憾とする。

私が三菱に入社した當時の學生は實に素朴極るもので、裸一貫でやつて來たものだつた。その無頓着さ、無遠慮さ、磊落さ、恬淡さ、豪放さは、驚くべきもので、それだけに相當の見識と、人格と、手腕もあつた樣に思はれる。

處が現在の樣に三菱全體の志望者が千人を越えて、その中から百二、三十人の嚴選採用の就職難時代になると、卒業前からの就職運動は實に猛烈極まるもので、當事者の頭を惱ます一つである。何々重役とか、何々課長とか、又は社會的知名の士とかの紹介や、其の他あらゆる縁故を辿つて、一つでも有利な條件を具備しての、その用意の周到さは、全く想像の外で、その愈々採用試驗となると、風采の整然さは云ふまでもなく、言葉の節々に至るまで、實に要領よく、その勘定高さは、隔世の感を痛切に抱かしめるものがある。かくして、採用者側の思ふまゝの人材を大體摘擇し得らるゝ現在は、大正七、八、九年頃よりは、優秀な人達が多いと云つても過言ではあるまい。

一體大會社に集る人達は、生涯月給取りを目的にしてゐる樣である。それが、現代大學生一般の風潮であるとしたならば、歎かはしい現象だと思ふ。獨立して一旗上げる氣魄こそが、この就職難時代の最もよき解決策ではなからうか。愚見ではあるが、大體月給取りを目的に、學校に行く事は斷然廢すべきだと思ふ。

彼らは小學校から中學校、高等學校、大學と長い青春の大切な時間と、莫大な金を投じてのその學校生活も、廿四五歳にもなれば、勉強にも飽きが來て、早く世の中に立つて、仕事をして見度いと云ふやうになり、どちらかと云ふと、派手な生活がしたい、出世がしたいと云ふ希望に充ちて學窓をでてくる。而もその考へ方は一體に粗雜で、努力の氣慨が鈍い。隨つて會社に入つても、見習上りが、やつてゐるやうな仕事は、馬鹿げてやれないし、器械的實務をやるにしても、それ等の連中のやうにはいかないので、自然に嫌惡の情が湧く。而もその働く時間は學校に於ける勉學の時間より、ズット多く、苦勞も隨つて多い。それにも係はらず自分の期待するほどの出世

が出來ない。社會的地位が得られない。そんな工合であるから、責任の地位に立つまでの辛抱が、なか／＼難かしいのである。

私の經驗から見ると大學の教育は、長過ぎる嫌ひがある。そして、その間に修めた事は必ずしも、會社として要求するところのものではない。それでも、人間としての、教養が充分であれば、以て滿足することも出來やうが、その點の遺憾も多い。唯だ、就職のための、段階を經つたと云ふ、今日の學校教育の有樣では、考へなければならぬ事が、多いのではあるまいか。

最後に少々餘計な事ではあるが、各會社に於て學校出身者を採用する塲合に、餘りに學校教育といふことを尊重して、どこの大學はいくらで採る。將來かくかくの地位を與へるといふやうな考へであると、それがために若い連中を誤まらせるもとにもなり、又その結果多數の就職することの出來ない者を世の中に送り出して、苦痛を與へることにもなるから餘程この點は注意せねばならぬと思ふ。（三菱合資）

健康蝕まる

美土路昌一

新聞に向つて集つて來る青年の數は最近になつて非常に激増したやうである。歐洲大戰以前は記者志願者は漸增の傾向はあつたが、それでも尙學校卒業期に五十名に達するのは多い部に屬してゐた位であつた。それが歐洲大戰後期からの馬鹿景氣にあほられて新聞記者志願者も激減し、又意志の弱い記者はその方の慾につられて、轉職するものも相當あるといふ有樣で、入社志望者は一時非常に減少した。尤もその頃までは、特殊の人々を除いては一般新聞記者の社會的地位がいまだ十分に認められず、甚だしきに至つては、新聞記者とさへ云へばその多くは、特志家からの喜捨とユスリで飯を食つてゐる特別の人間のやうに考へられてゐたもので、新聞記者志願の人々も世間からは一種の落伍者群のやうに誤解されてゐたのである。

然るに歐洲戰時代の好景氣も漸く鎭靜すると共に、一方において、新聞社も相當の整備時代に入り、新聞紙の社會的位置が社會から認識さるゝに至るにつれて、青年の新聞熱は急速度に增加して來たやうである。そして、各大學でも、新聞學會を設け、學生新聞を發行し、講演を受くるなど新聞に對する眞面目な研究が盛んになつて來た。その結果記者志望者の數の增加のみならずその質から云つても新聞に關する智識も非常に發達してゐて十年前のそれ等に比較すると實に雲泥の差である。試みに昨年度における當社の入社志望者の數を見ると約七百名近くに達してゐる。これは東京朝日新聞社のみの取扱ひで、同時に大阪朝日新聞社で受附けた約同數の履歷書を加へると實に驚くべき數に達することが判る。新聞志望の青年の出身學校にもかなり變化を來し十年前後までは早稻田大學を主として殊に私立大學出がその大部分を占めてゐたやうであるが、最近の傾向は必ずしもさうでなく、官立出身者が非常にその數を增加したといふ事も見逃すことの出來ぬ現象である。

試みに昨年度の東京朝日新聞志望者數を學校

別にして見ると左の如くである。

	編輯局志望者	營業局志望者
東京帝國大學	百五十二名 内譯法六四、經二八、文六〇	二百名 内譯法八九、經四九、文六二
醫科大學	十名	十一名
京都帝國大學	七名	十一名
東北帝國大學	三名	四名
北海道帝國大學	四名	四名
九州帝國大學	十名	二名
東京外國語學校	二十七名	三十六名
大阪外國語學校	三名	三名
早稻田大學	百二十七名	百五十三名
慶應義塾大學	十三名	十八名
明治大學	三十二名	六十名
中央大學	九名	三十名
法政大學	三十一名	六十三名
日本大學	七名	十名
立教大學	二名	四名
專修大學	五名	九名
東洋大學	十名	十名
青山學院	十三名	十六名
國學院大學	二名	二名
横濱高等商業學校	—	五名
其他	十八名	三十一名
合計	四百七十七名	二百五名
總計	六百八十二名	

即ち編輯營業兩局を通じて東京帝國大學出身者が五割以上を占めてゐる。新聞社はこれ等の志望者に對して簡單な文章、學力、常識の試驗を行つた後更に口述試驗を行ひ、別に嚴格な體格試驗をして採用することになつてゐる。この試驗にあたつて吾々の一番痛感することは永い學窓生活を終つて、初めて活動の社會にその第一歩を踏み出さうとする學生が豫想外に多く既にその青年期の健康を蝕まれてゐるといふ事である。

最近の學生に常識が缺乏してゐるとか、或は學問の仕方が非實際的であるとかいふ批難はよく聞くところであるが、前後數囘のこの嚴重の選拔試驗を行つた經驗から見るとそれ等は寧ろ末節の問題であつて、斯くの如き驚くべき不健康者が多いと云ふ事は最も重大な問題として考へられるのである。新聞記者はその職業の特質として、晝夜を分たず活動をする必要上、餘程强健な體質でないと數ヶ月後に至つて身體を破壞するものが多い。從つてその志望者の詮衡に際しても、學力よりはまづその健康狀態を第一に注意考査することにしてゐる。然るに志望者の半數以上に胸部における疾患又は虚弱なる人ばかりで、眞に學力、體格二つとも並び健全なるものは殆んど數ふる程もないのである。これは如何に現代の教育がその目的を誤つてあまりに試驗制度に拘泥する結果有爲なる青年をしてその潑溂たるべき學生生活中に早くもその身心を破壞せしめてゐるかを實證して餘りあると信ずる。健康は社會活動における最後の成功を囚する一大力素であるとは今更いふ迄もない。この意味で、今日の大學出身の青年は假へ各自にその志す職業に就く事を得ても遠からず失業に優る悲慘なる終局に陷る事は必然である。失業苦、就職難の問題のみ唱へられて、學生健康を蝕むが儘に放置して顧みない今日の教育制度は有爲なる青年學生に對して一層冷酷な處罰であると叫びたい。教育制度の改革はこの一方面からのみ見ても急務中の急務であらう。與へられた問題の中心から外れたかも知れぬが、現代學生の試驗制度の拙措から解放、學校スポーツの少數選手獨占の弊を排し、一般學生大衆のスポーツとしての併立を唱へたいと思ふ。（東朝）

暗い氣分

鈴木重成

近來の學生には最も學生に望ましい潑剌たる元氣と素直な美しい所謂靑年氣分の乏しくなつたとは實に遺憾で、詮衡員を畑に抱く樣な大元氣者の尠くなつたとは種々な原因もあらうと思ふが就職難の今日で就職の念にのみ捕はれ自分の信じた儘を明るい氣分で思ひ切つて述べ立てる勇氣が自然出來得なくなつたのではないかと考へらるゝのである。又遺憾に思はるゝ一つは其の會社に志望する以上その會社の性質、事業等に就て研究して貰ひたいとて、一寸した事を聞いても全く我れ關せず焉で詮衡者を落膽せしむるとが往々ある。何もその會社へ入り終生其の事業の爲めに盡さう其の土地の上に化さうと云ふ根强い熱心さがあるならば少しは其の會社なりに就て調べて貰ひたいと思ふのである。これも各方面へ廣く志願書を提出して居る有樣で一個所へ深く打込み得ないから知れない、或る地方へ行つたときに商業學校の學生で眞劍に當會社の創立當時の資本金から營業開始の日、其後資本金の增額、それに現在の制度等に就いて迄朗讀的に滑りなく申述べた等は誠に感心なことで是等は其の純眞と其の熱心さの程が見へるのである。

身體の强健は何れの個所でも希望することであるが殊に我が會社の如き風土を異にする遠隔の地にあるものは健康を第一の條件として現に嚴重な身體檢査を行つて居る次第で不健康のものは幾ら人物、學業共に優秀でも如何共致方ないのである。多數の內から特に選拔されて折角赴任しても間もなく罹病の爲めに歸國する事は本人の經歷の上に對しても甚だ迷惑なことで會社としても人繰り上迷惑千萬なことである。

それから今一つは履歷書其の他の書類でも楷行位な整つた字で念入りに原籍、現住所生年月日、學業等順序正しく落らなく書いてあるのと、いかにも粗暴な大小亂雜な字で而も種々洩して書いてあるのは感じの好し惡し許りでなく實に其の人となりが書の上からも見へるから十分注意すべきことと思ふ。又風采等も餘り美麗に飾り立たのは輕薄に見へ嫌なものだがそれとて垢染みた粗野な風も餘り感心しないもので要するに學生らしいサツパリした程の好い風を望ましい。態度も同樣、言語等もハツキリ其の質問に對しては遠慮なく明瞭にありたいと思ふのである。（[illegible]）

就職難緩和の道

五十嵐直三

古い文句ですが「衣食足つて禮節を知る」とは頗る實際的に世相を云ひ現はすものと思ひます。左れば衣食が足らざる場合には肉體的にも精神的にも病氣に成り易いのは當然の歸

給と思ひます。單に衣食の足る足らぬ丈けでさへ斯くの如く非常の差があるのですが、そんなら衣食さへ足れば萬事解決かと云ふにそうは參りませぬ。極めて少數の人々は除いても凡て自力で衣食する事が絶對に必要であります、前掲の古諺も素より其前提の下と思ひます。一生親の脛を嚙り又は親讓りの財産で徒食したり、或は他人の恩惠に依りて衣食する事は何人も欲しませぬ。而已ならず健全なる社會に斯る種類の人々の存在は有害無益である、まして斷じて許すべからざるものと思ひます。社會の各員は「足るべき」衣食は自ら之を求めざるべからず又之を得ざるべからず若し之を得ざる者ありとすれば斯る人々は他の各員に之を得せしむるの道を講ぜざるべからずと思ひます蓋し斯の如くにして社會は初めて健全たり得るからであります。

右は自分の希望でもあり同時に亦理論でありますが物事仲々理論通りに行きませぬ、學生の就職難の如きも僅かに一大問題であります、單に就職難の依て起る所以を說く丈けではダメです、又一部の老人の如く「學生が初から就職を志すのが間違で進んで巡査にでも蕎麥屋にでも成ればよいでは無いか」と云つた所で「巡査にでも蕎麥屋にでも成ります」と云つたら此老人は果して所言通り之を果たさしめ得る成算がありましようか、何れの道實際的の解決ではありませぬ。

多年の間試驗に試驗を重ねられ、やつと學校を出ようとするも仕事が得られない、自力で衣食が出來ないとすれば、病氣にも成りましようし又考へもしましよう。

此處迄は誰れも考へもし又議論もしますが結局は「六ヶ敷」の三字で形付けて横を向くのが落ちである樣に思はれます。然し、それは「ヒドイ」と思ひます。少しは乘り出して假令充分の解決は俄には得られない迄も吾人は少しでも之が解決を心懸け、且實行しなくては「イカヌ」と思ひます。

金のある人が派手な生活ムダな生活を少しでも遠慮すれば幾分でも消費方面が調節せられ、金の無い人の消費する物の値段が下がる道理であるから「そんな事は出來るものでない」とか「大した效果はない」と云ふ樣に簡單に形付けて横を向く樣な事をせなければ未だ改善すべき點は多々ある樣に思ひます。

官吏の減俸問題は趣旨に於ては賛同者が多かつたのだが、之が說明とか減俸の範圍比率が當を得なかつたので折角の趣旨迄も葬られてしまつたのは殘念です。然し一から十迄政府の刺戟に依りてのみ事を解決せずに吾人は自ら進んで爲すべき事爲し得る事は爲したいと思ひます。

自分は實業界に於て或る點迄は出來ると思ふものを申しますと

一、會社銀行の重役の收入を幾分にても減少する事

二、退職手當の制度ある所に於て之を得れば退職するも生活の脅威を受けざる老朽者は退いて道を後進に讓る事

三、現存社員又は行員の收入は殊に上級者に於ては當分居据りとすること

四、工業會社に於ては先づ叙上の三項を實行したる後に初めて職工の賃銀低下を計る

の諸點は決して實行不可能でなく之を實行すれば物價低落の素因となりて目下の急務たる經濟建直しに大に資すると同時に多少は就職難を緩和し得るものと確信します。

以上は表題の趣旨に觸るゝ事は極めて尠い樣ですが實行本位を基として述べた爲めに答案としての點數は低いと思いますが是非各方面一致してやつて頂きたいと思ひます。(正金)

アヹ・マリア

——マリアは唯の女人だつた（芥川龍之介）——

丸木砂土

アヹ・マリア

芥川龍之介はその「西方の人」の中で、マリアが聖靈を感じて孕んだ事は、確に醜聞であつたと斷じ、マリアを以て、唯の女だと言つてゐる。けれども「我らはあらゆる女人の中に、多少のマリアを感じるであらう」と言ひ殘した意味は、どういふ積りであつたらうか。この小說家はすべての女の中に、マリアの世間智と愚と美德とを見たのかも知れない。殘念なことには、この神經の狂ひ出した晚年に、基督の母の中に最早媚かしき女人マリアを見る事が出來なくなつてゐた事である。しかもこの小說家は、嘗ては藝術的に基督教を、殊にカトリツク教を愛したと言つてゐる。芥川龍之介がカトリツク教を愛したのは、決してこの作者が異國的な素朴と古雅とのみを愛した爲ではなくして、この藝術的異教の中に、春の曙の如き好色的雰圍氣を、多分に發見したからだ、と僕は思つてゐる。けれどもこの小說家の見たる聖母マリアは、なほ甚だ道德的であるが、抒情詩的である。唯の女人マリアがもつと性慾的であつた事には、目を向けなかつた。

長く伊太利を旅する者に、この南歐舊教の國のサンタマリア詩情にいつとなく捉れないものが果してどれ程あらう。人はいつとなく自分もカトリツク教徒になつてゐる事に驚くに相違ない。唯この東方民族の牧歌的憧憬も、美術に現れ、傳說として語られる場合に、時代と信仰とにより、神學的に、感傷的に、人間的に解せられる事は止むを得ない。南歐で清淨に考へられた奇蹟も、北歐では奇怪な空想に思はれる事は當然である。貴いサンタ・マリアの傳說が、恰も男女性慾史のやうに見られても、反

つて人間的愛着を深くする事はあつても、決してこの美しき聖母を汚すやうな事はない。そこで僕は多くの西洋人の說に基いて、マリアに現はれたる性慾の象徵を少しばかり窺ふ事にした。

僕はこの機會に日本稀に見る名著「受胎告知」の著者矢代幸雄氏に敬意を表したい。もしカトリック敎を愛する人があるならば、聖書を讀む前にこの書を讀むべきである。僕の聖母に關する美術的知識は、僅かな歐洲見聞の外すべてこの書に敎へて貰つたものである。

少女マリア

聖母マリアの少女時代は、聖書には書いてない。この聖母傳說を書いてあるのは「ヤコブの原始福音書」と呼ぶ本である。これは基督の弟のヤコブの書いたものと稱せられてゐるが、これによるとマリアは三歲にして兩親に伴はれ、エルサレムの神殿に赴いた。炬火を持つた處女達がそのお伴をして行つたが、寺では坊さんがこの少女を迎へ、接吻して祝福を與へ、マリアは十五段の階段を誰の力も借りずに昇つたといふ事である。マリアがその神殿でする仕事は機織で、神殿の幔幕を織らせられた。マリアはかうして幼い娘時代を、エルサレムの神殿に育ちやがて少女になつてから、神の意思で年老ひたるヨゼフの許嫁に成つたのである。

このエルサレムの神殿の侍女としてのマリアの姿を現したものは、プロバンスのある寺に殘つてゐる第五世紀頃のマリアの像だそうである。それによると、マリアは透き通る衣を着け、胸の上に髮を垂らし、兩腕を擴げて立つてゐる。このマリアの姿は、何を意味してゐるか。

神殿生活

マリアが少女時代を神殿に送つたといふ事は、多くの古代傳說にも現れてゐるやうに、神との肉的交渉を意味するもので、女はこれによつて同衾の術を習得し、且毎月の穢れを淨め、この得度によつて少女から女の位置に昇せられる象徵であらう。(後段參照)

炬火と蠟燭

マリアを神殿に見送つた處女達は、みんな炬火を手に持つて行つたといふが、これは、明に婚禮の儀式を意味してゐるものらしい。この場合の炬火は、男の×事な×××象徵である。サンタ・マリア傳說には、又蠟燭の出てくる場合も少くない。これは殊に死の告知の天使が、マリアに燃える蠟燭を渡す例の外に

基督教の儀式として、穢されざる母體としての水と蠟燭との××といふ事を行ふ。これは坊さんが燃える蠟燭を三度水に突込んでお經の文句を繰返すのだが、かういふ蠟燭に類した儀式に用ひられる蠟燭の意味は、いつも男の×事な×××謂である。

祝福

神殿に至つたマリアは、坊さんの祝福を享けた。祝福を象徴するものは、いつも腕であり、手であり、また指である。祝福にはまづ腕、手、指を延ばし、これを祝福される者の頭の上に向ける事である。ところがこの腕なり指なりは、常に男の×××もの、象徴にされてゐる。祝福といふ事は、象徴された××であると斷言してゐる人もある位だ。モハメッドの言葉に、祈りに際して擧ぐる爾等の兩手は、後足で立つた馬の何×××如し、だとある。それは後に聖母の受胎を告知する天使が、腕を延ばし、指を擧げてゐるのも、この一例である。

ユダヤの言葉で腕といふ文字が、男の大××××の代りに用ひられる處から、舊約雅歌第五章の「わが愛する者戸の穴より手をさし入れしかば、わが心かれの爲にうごきたり」といふ逢曳の文句や、愛する者の爲に戸を開けると、手からは沒藥、指からは沒藥の汁が流れて、戸の門に滴り落ちたといふ記事なぞも解釋は斯のやうである。

マリアが神殿で祝福を受けたとは、確に神にその處女性を捧ぐる儀式に相違ない。この行爲は、多くの人の面前で、公然と嚴に行はれたものらしい。神に處女性を先づ捧げる基督教の風習は、今日でも花嫁を最初に接吻するのは、坊さんである事に殘つてゐる。いづれにしても神の代りの男の祝福により、女としての高い特質を授けて貰ふ事である。

祝福の場合にその手を祝福される者の上に置くなり向けるなりの動作は、その者を性慾的に所有する意味だ。ある物の上に手を置く形式が、所有の象徴である事は、中世紀以後の法律上の儀式にも明かで、殊に右の手が働く事は、この手が父權の象徴であり、男の×事××のを事意味してゐるからだ。

擴げた腕

祝福する事が男の性的行爲であるとすれば、祈禱といふ事は女の性的行爲だとされてゐる。祈りは祝福を受けんとする願ひであり、受ける用意の出來てゐる表示である。そこで腕を擴げ手を開いた形は、×としてこの行爲の用意の出來た形だと解せられてゐる。

今日殘されてゐる神殿の侍女としてのマリアの最古の姿が、

この兩腕を擴げた形である事は、マリアを以て所謂神殿の賣女と解し易い。

階段を昇る

マリアは三歳にして、神殿の階段を昇つたとあるが、これはマリアの健康の優れてゐた事を象徴してゐるに外ならない。尤も近頃のフロイド流の研究によると、階段を昇るとか、飛ぶとかの夢を見ると、それは性的行爲に關係してゐるさうだ。

機織

神殿の侍女としてのマリアの仕事は、紅糸と紫糸とを以て、幔幕を織る事であつた。是はヤコブの原始福音書から出て、古い受胎告知圖には、マリアが糸巻を持ち、又は糸車を傍に置くやうになつた所以である。機織又は糸を紡ぐ事は、古代の象徴としては、無限に生み出すといふ意味だ。

解いた髪

この時の娘マリアは、頭の髪を解いて、肩に垂らしてゐる姿だ。散らし髪のマリアだ。

古代ユダヤの花嫁は、必ず髪を解いて花婿の處に導かれたさうである。マグダラのマリアも、勿論散らし髪だ。ところがこの髪を解き亂したといふ事は、處女性を汚したといふ事、又は汚されてよいといふ事の象徴として用ひられたものである。髪を亂すといふ事は、最高恍惚の獻身の意味で、女が象徴的に又は事實上に處女性を失ふ印である。これは古代一般に行はれた風習らしい。

紗

マリアが冠つてゐる紗は、神に捧げられた處女の印である。この紗は處女性を現すものではなくして、寧ろ最早處女ではない事を示すものである。この紗は先づ女の目を覆ふものである。女が目を閉ずるのは、何人にも身を任す、といふ事の象徴であると説く人もある。紗は古代の賣女の裝飾品であり。これで顔を隱してゐたから、賣女だと思つたといふ話は、ユダの物語にある。

今日花嫁が冠る紗は、童貞の印しであると解せられてゐるが、あの衣裳は處女の印ではなくして、もう少女ではない、女であるといふ衣裳であり、性的行爲の用意の出來た女であるといふ意味である。紗はどこまでも男に身を提す證據である事は、古代希臘羅馬の風俗にも現はれてゐる處だ。マリアは神に處女性

捧げた女である意味で、紗を冠つてゐる姿も傳へられたのである。

受胎告知

紀元前九箇月の三月二十五日の黄昏である。ナザレの村の處女マリアが部屋にゐると、そこへ大天使ガブリエルが飛び込んで來て、懼るるなかれ、爾は神より恵みを得たり、爾孕みて男子を生まん、その名をイエスと名付くべし、と言つたので、この清淨無垢の娘も一時はびつくりしたが、我はこれ主の使女なり、と承諾したので、天使は羽ばたきをして、窓あたりから飛んで出てしまつたのである。アヱ・マリアといふ美しい文句はこの時の天使の言葉である。

これは新約の路加傳に書いてある筋であり、中世末以來文藝復興期の畫家にどれ程描かれたか、これは矢代氏の名著「受胎告知」について研究しつくされてゐる。僕の研究したい處は、この神聖なる聖母がどうして男なくして受胎したかといふ點である。

言葉

聖母マリアは、天上樂園に於て蛇に誘惑されて肉慾を知つたといふイブの生れ變りであるといふ説と、聖母とイブは一體である。マリアの受胎は三月二十五日で、イブの樂園追放も同じ日で、受胎と追放とは同じ瞬間であると説く神學者もあるさうである。さうすると樂園でイブを誘惑した蛇は、路加傳では何に當るか。蛇を以て男の象徴とする考へは、既に昔からある。受胎告知の繪で見ると、天使がマリアにこの問答をする時に、天の一方から白い鳩が燦然として飛んで來て、露骨なのになると、この鳩が嬰兒基督を背中に乘せてくるのがある。してみると舊約の蛇は、新約の鳩かといふ問題になるが、さうではないらしい。

舊約では蛇が男性の象徴だが、新約では大天使ガブリエルの爾孕みて男子を生まんと言つた言葉が男性の象徴に相違ないのである。いはば舊約では惡魔の言葉が處女の體中に入り、新約では神の言葉が處女の體中に入つたのである。聖アウグスチヌスはマリアの腰を以て、言葉と人間の肉體との婚禮の部屋だと言つてゐる。第十三世紀頃に獨逸に出來た貧しき者の聖書の挿繪には、「アヱ・マリア」の言葉がリボンの上に書かれて、それが天使の口から蛇の如くに空中にうねり出てゐるさうである。中にはこの言葉はマリアの耳から入つたものと見て、耳を以て女の性的器官の象徴と見てゐる人もある。

言葉を以て男性の象徴と見るのは、基督教以外にもあるさうだが、或はそれは舌が男の象徴に使はれた事と緣があるかも知れない。

息

またマリアの受胎が神の息によつてなされたと解する神學者も多い。聖アムブロジウスの讃歌の中には、神の言葉は祕密なる息によりて肉となつた、と言つてゐる。息を吹きかける事が、男性的な、生殖的な象徴に用ひられる事も、創世紀の神が息を吹きかけて人間を造りなされた記事以來珍しくない。日本の古い物語にも、南風を受けて孕んだ說がある通りだ。風によつて孕むといふ話は馬來半島にも殘つてゐる。マリアに吹きかけられた神の息は、窓硝子を通して美しき光線が流れ込むやうに天から降下したのださうである。

光

そこでこの神の息を光線にして、繪に現して神の口から一道の光線がマリアに向つて放射されてゐる受胎告知の繪が、殊に北歐畫家の筆に澤山に出來てゐる。露骨なのになると、この光線がマリアの膝を目がけて發射されてゐるのである。「貧しき者の聖書」の最古版の插繪には、天使の延ばした指の先から、マリアの耳に向つて光線が發射されてゐるさうだ。

光又は火は勿論男性の象徴だ。聖エフレムの書いたものには、太陽はその光を天と地に注ぎつつ、母なる膝に沈む、とある。日輪胎中に入ると夢みて孕んだのは、豐太閤の母親で、日本にも同じやうな例はある。光との肉交によつて受胎する傳說は、敢てサンタ・マリアの物語を俟たない。

翼

マリアに受胎告知をするのは、大天使ガブリエルであるが、これが見事なる翼を揃えて生やしてゐる。この天使の輕く飛べる形と、これに相對したマリアの屈んだ體の形とは、美しき弧線をなして、多くの聖母畫家の苦心の存する處だ。

然しこの天使の翼が、多少違い氣味はあるが、男の性的器官の象徴に用ひられた例もないではない。この男の×事×ものが羽根を生やして飛ばす漫畫は、西洋獨特のもので、殊にある物の上に翼を擴げてこれを蔽ふといふ事は、そのものを所有するといふ事である。それは經濟的にも性慾的にも所有する意味に解するを普通とする。實は鳥といふ言葉が性交と大に關係のある文字だ。

枝

マリアに受胎告知をする天使は、必ず手に棕櫚の枝か、百合の莖を持つてゐる。或は神の使者である證據に、權威杖を持たせる繪が、封建制度の盛であつた北歐には專ら行はれた。かういふ杖とか、枝とかいふものが、蠟燭と同じやうに男の性的器官を象徴する例も少くない。權威杖は日本ならば笏とも見るべきものだが、これは支配權の象徴で、冠が被支配を象徴する女性器官であるに反して、笏はどこまでも男性器官である。日本でも笏は必ず男の持つものだ。

白百合

マリアの部屋に飛び込んで來た天使は、まづ多くは白い百合の花を手に持つてゐる。或は告知の部屋に、白百合を活けた花瓶が、臺の上に載せて置かれてゐる場合も多い。百合の花がマリアの無垢清淨なる處女美にふさはしく、また聖書の有難い言葉から考へても、天使が百合の花を手に持つた姿は神々しい。

尤も百合は戀愛とも關係が深い。舊約雅歌に、愛する女は「ヨルダンの谷の百合」と呼ばれ、その第二章に「わが愛する者は我につき我はかれにつき、彼は百合の花の中にて、その群を牧ふ」といふ言葉があるが、これは日本の聖書の文句としては[illegible]明瞭でない。然しこの百合の花は、實は女の[illegible]の意味だそうである。尤もマルチン・ルウテルの譯した聖書には、この百合が薔薇になつてゐる。これはルウテルの誤譯だといふ事だ。ある人はこの場合の百合を、乳房ではなくして、××の意味だと解してゐるが、僕にはどちらでも好い。元來が百合といふ花は、ヘラクレスを胸の乳房から乳を吸はしてゐた時に、ヘラが眠つてしまつて、その乳が地上にこぼれ、そこから生ひ立つたといふ傳説がある位だから、女の乳房とは緣がある譯だ。百合の根は女の性的器官を象徴する場合も少なくない。

一角獸

受胎告知の性的想像の中に、中世末以後の北歐藝術の現れた一つの寓話がある。それは天使ガブリエルが、喇叭を吹き獵犬を放つ髯のある獵師となつて現はれ、同情、眞理、正義、平和といふ神意が、四匹の獵犬となり、純潔なる處女マリアの膝へ、一角獸を逐ひ込んで行つた、といふ話で、さういふ奇怪なリンタ・マリア傳説が、北歐畫家の受胎告知圖に描かれるに至つたのである。

一角獸といふのは、一本の長い角を持つた鹿のやうな想像的

動物で、ビヨツクリンが「森の沈默」といふ繪に描いてあるので有名だ。中世紀の解釋によると、この一角獸は恐るべき力を持つてゐて、これを×へるには、處女の膝によつてのみだ、といふ事である。勿論處女の膝の××と××によつて誘ひ捕へる意味であらう。しかもその一角獸の角が、マリアの×に達した瞬間に、アヱ・マリアの聲を聞いたといふのである。

この一角獸の角は、嬰兒基督を意味するか、又は男性の積りであるか、それはどちらにも解せられるやうだ。十六世紀頃の歌に、一角獸は主耶蘇基督で、ガブリエルがこの貴い、獸を逐ひ込んだ、といふ意味のものがあるし、この一本の角で人體を刺せば、その部分の毒を淨める、といふのださうである。同時に角は強さ、支配の象徴であり、元來が男の××なも××意味するものである。強い獸が女の膝によつて捉へられ、同時に受胎の告知があつたとする聖母傳說には、何物も說明を必要としないが、それにしても戀愛抒情的の匂ひの高い南歐告知圖に比べて、この比喩の奇怪さは、いかにも北歐の空想らしい。

サンタ・マリアの美しき傳說は、殆ど受胎告知に盡きるやうである。之に附隨して、マリアによる象徴を少し調べてみやう。

本

天使がマリアの部屋に飛び込んで來た時に、マリアは何をしてゐたか。受胎告知圖には糸を紡いでゐる處と、本を讀んでゐる處との二つがある。

糸を紡ぐマリアは少し家庭のおかみさんらし過ぎるので、本を讀む聖母を描いて神秘の色を濃くしやうとしたものらしい。讀んでゐる本は舊約聖書で、以賽亞書第七章の「視よ、をとめ孕みて子をうまん」といふ句へ目が移つてきた瞬間だと中世紀末には解してゐたさうである。いづれにしても文藝復興期のマリアはみんな讀書家だ。

このマリアの前に展げられた本は何を意味するか。開いた本といふものは、用意せられたる×的準備といふ事に解釋せられる場合が多い。受胎告知といふ事に肉交の事實を聯想するならば、この讀書臺の上に展げられた本は、その×意の象徴に外ならない。未だ筆を下されざる本が、處女の清淨を意味し、筆が男性を髣髴させる事は、西洋でも昔からある話だ。乾いた筆をインク壺に入れて、濡れて出すといふ「筆下し」の諺が、伊太利にもある位である。日本にもある。

樂園

聖母マリアが天上樂園を放逐されたイブの現身であると信ぜ

られ、アダム、イブの罪を消す爲に、基督はここに生れたのだと考へられた聖傳説がある。これから受胎告知の繪の一部に天上樂園を追放されるイブを描くやうに成つたといふのである。

ミラノの大聖アンブロジウスの言葉によると、「アダム處女の土より生れしが如く、第二のアダム(基督)は處女より生れん。」と言つてる。穢されざる土よりアダムが造られ、男に觸れない處女からイエスが生れたといふ事から、マリアは處女の土であり、又マリアは天上の樂園であると説く坊さんが澤山ある。エデンといふ言葉が、處女の土であり、マリアは新しきアダムのほめるエデンなりと言ひ、そこには生命の木が植えられ、生命の實を殖つものだとは、中世紀の比喩精神の一つの現れで、新約の出來事を舊約の出來事に照應させやうとした爲である。マリアの體が芳香芬々たる春のエデンの花園であるといふ象徴から、舊約雅歌の「なんじは閉ぢたる園」はマリアの事だと説く坊さんもある。

女を以て大地に喩へ、殊に萬物を生み出す母と考へ、從つて女の性的器官と大地とを結びつける考へは、決して珍しくない。殊に花の咲く庭を以て、女の性的器官に喩へる例はいくらもある。土に觸れる事は、女に觸れるの謂である。無垢處女のマリアを以て、花咲く花園に譬へられた。描かれた繪に「薔薇の花園に於けるマリア」といふ言葉もあるが、赤い薔薇は女の器の一部分であり、女と土との關係に就ても、僕は既に小著「好色獨逸女」の中で研究しておいた。

泉

舊約雅歌の「なんぢは閉じたる園」といふ一句の次に、「封じたる泉のごとし」とある。マリアはその處女性を傷つくる事なしに、生命の流水を注ぎ出す泉である、といふ説を爲した名僧もある。サンタ・マリア傳説によると、大天使ガブリエルから受胎告知を受ける前に、少女マリアがある夕方泉に水を汲みに行くと、忽ち一方から、恵みに充ちたる物に幸あれ、といふ聲を聞いたが、左を見ても右を見ても誰もゐなかつたので、家に歸つたといふ事である。この井泉の傍の告知を繪にしたビザンツ藝術もあるやうだ。

東方民族に於ける泉は、その戀愛生活と甚だ關係が深い。舊約聖書を見ても、男女相戯れた場所が泉のほとりである例は澤山ある。この泉を以て、女の性的部分に象徴させた思想は、殊に東方民族に特有な處だ。中世紀の木版畫に殘つてゐる「青春の泉」に浴して若返りをする畫圖の如きも、この考へを以てし

なければ到底解釋はつくまい。マリアに就ても同樣である。マリアは生命の泉であり、淨き乳に滿ちたる胸であるといひ、またマリアといふ言葉は、海といふ言葉から出來たものだとする說もある。創世紀にある、神水の集れるを海と名付けたまへり、の海から、マリアの文字が生れたといふのである。ヒイロニムスはマリアの意味を「海の沒藥」だとしてゐる。いづれにしても、マリアの傳說は水と緣の深い泉の傍を離れてゐないやうだ。

杯

舊約雅歌第七章に「なんぢの腰は、美き酒の缺くることあらざる圓き杯の如し」とあるが、聖アムブロジウスはこの圓い杯を以て、マリアの腰としてゐる。日本の舊約聖書には、この腰を臍と書いてゐるが、これは確に間違ひだ。聖アムブロジウスは、マリアを以て最德の高い女性のモデルとしたが、その腰を以て圓い杯に喩へたのは實に性的だ。杯とか樽とか壺の類が、女の性的器官に解せられるのは、今日でも多くの民俗に見る處である。ユデアの婚禮風俗によると、夫婦固めの杯に、花嫁さんが未亡人である場合には口の廣い杯を、處女である場合には口の狹い杯を用ひて、これから酒を飮むのは、花婿に限つたさうである。

神殿

サンタ・マリア傳說によれば、マリアは神聖なる處女として幼時をエルサレムの神殿に住んで、世の汚濁に染まぬやうに育てられたと言つてゐる。マリアがこの神殿を出たのは、ヨゼフの許嫁になつてからである。

これからマリアを以てエルサレムの神殿とし、マリアの內には生きたる聖殿ありといひ、從て住居となり、許嫁の部屋となり、天幕の中といふ象徵になつて來た。基督はマリアの胎中に在ること、花婿の花嫁の部屋に在るが如し、マリアの體は基督を取り卷く天幕の如し、といふ言葉さへ出來てきたのである。マリアといふ處女の腰を以て神殿に喩へその中に基督が王となつて腰掛けてゐた、といふ坊さんもある。

閉じたる

雅歌にある「なんぢは閉じたる庭」といふ言葉も意味は深い。マリアは閉じたる庭、近付き難き山、花婿のみ入るを許さるべき部屋、閉じられたる錠といふ考へが出來てきてゐる。聖アムブロジウスの讚歌に「處女の體は膨れたれど、純潔の錠は閉じられたるままなり」と言つてゐる。「絕えず處女なる者よ、なん

ちの薔薇色の胸を開け、なんぢの信仰は天を開き又閉づるものなり」と或る名僧は言つてゐる。

閉じたる錠が貞操無垢の處女の胎であり、これを開かんとする鍵が×を意味してゐる例は、既に古い話だ。ゲエテの「ファウスト」第二部にも、鍵に從ひて下り行かば、なんぢを母なる者に導かん、の文句がある。エロスといふ戀の神様は、矢を持つてゐる代りに、鍵を持つてゐる場合もある。最も好い例は、創世紀第二十章に、エホバがアビメレクの家の者の胎をことごとく閉じ給へり、といひ又は第三十章に、レアの嫌はるゝを見て其胎をひらきたまへり、とある。××の胎を開閉自在にするものは、誠に神様あるのみである。基督自身天國の鍵といふものを持つてゐた事は、馬太傳にあるし、又神開けるもの、何人も閉じてはならぬ、神閉じたるもの、何人も開いてはならぬ、と敎へてゐるが、これを男女性慾の誡めとすれば、僕は基督に大に同感である。

受胎告知の際にも聖ベルナアルの說く處によれば、マリアは私室に閉じ籠り、しかも處女の私室であるから、鍵がかけてあつた。天使なればこそこの鍵のかかつた室に入つて來たのであるが、處女マリアはその男性の姿の闖入には驚かざるを得なかつたといふのである。受胎告知に戀愛感情が加つて來た神學的基礎はここだ。

門、扉、窓

マリアを以て門、扉、穴に例へた場合も少くない。マリアは常に閉ざされたる聖なる門であり、貴き聖靈のみこれを通る事が出來ると述べたのはアウグスチヌスで、又聖アムブロジウスも、マリアは基督これを開く事なくして通つた閉された門だと言つてゐる。受胎告知の奇蹟は基督教神祕に入る關門だと言はれ、この畫が龕の兩扉又は禮拜堂に入る凱旋門の兩側に描かれるに至つたのださうである。又受胎告知の畫面に、窓又は門を開けて、遠景や青い遠い空を見せる事が常套になつてゐるのもみな人の知る處だ。

窓、門、扉が女の性的器官を象徵する事は、これも決して珍しくない。舊約雅歌の第五章には―わが愛する者戸の×より手をさし入れしかば、我が心かれの爲にうごきたり―と明言してゐる。一體が戸や窓は女と甚だ緣が深い。昔歐洲で行はれた初夜權には、必ず窓から入り込む習慣があり、印度の愛經カマストラには、姦通の誘惑に陷り易い女は、いつも門の附近に立つてゐる女だと說いてあるさうだ。町の門の附近を賣春婦が最も好んだ事は、舊約聖書にもよく出てくる。

黒衣聖母

芥川龍之介の初期の作に、「黒衣聖母」といふ短篇がある。これは黒檀に刻んだ麻利耶觀音にまつはる怪談だが、芥川龍之介の書く處によれば、顔は美しい牙彫で、唇には一點の朱まで加へてある、といふ事だ。

ところが昔のマリアには、顔まで眞黒なものがある。黒い花崗岩又は黒檀に彫刻した立像である。ナポリのマドンナ、モスカウ、ウラジミル寺の聖母等がその一例だ。(眞黒な聖母がどうして出來たかといふと、ある人の説明によれば、舊約雅歌の第一章の「エルサレムの女子等よ、われは黒けれどもなほ美し」といふ言葉から來たものではないかといふ事である。

ところが學者の研究によると、この黒い聖母には、東洋的な希臘主義の影響があるものと言はれ、明朗な、人生肯定の、古代ゲルマンの女性崇拜に對して、反自然的な、否定的神祕の基督教の具體化だと見てゐる。いづれにしても白い色は金色と同じやうに、太陽の色であり、男性の色であり、父權の色であるに反して、黒い色は混沌の色であり、夜の色であり、淫亂の色であり、大地の色である。殊に東洋風の象徴としては、熱の色であり、情慾の色であり、淫慾の色に解せられてゐる。

なほ注意すべき事は、マリアは嬰兒基督を左の腕に抱いてゐる點だ。左の腕といふものは、母權、淫逸、私生兒の誕生、瀆秘等の象徴である事、その例に乏しくないさうである。

幸德秋水

僕はここまで調べて來て、偶々幸德秋水著「基督抹殺論」を開いてみた。

「然れども生々の事は獨り天のみを以て了せず、必ずや地なかるべからず。男子のみを以て了せず、必ずや女子なかるべからず。(中略)知るべし。基督の外三位一體の外、聖母マリアある、亦た基督教の創始に非ずして、實に古代の女性崇拜の異物に過ぎざることを」

僕はこの政府顚覆者が痛ましくも獄中で、裸體のマリアを空想してゐる處を考へてみた。

男性罵倒錄

平林たい子

一、女性の敵は誰か？

今の社會は、人類の縱の一半、即ち勞働階級の勞働力を商品化すると同時に、人類の横の一半、即ち婦人の生きた肉體そのものをも商品化した。私が婦人の肉體そのものが商品化されたといふのは、決して賣春婦のみを言ふのではない。婦人が男性の享樂材となることによつて生活の保證を得てゐる今の社會では、殆んどすべての婦人の肉體は商品化されてゐると言つていい。既婚の婦人は既に消費過程に入つた商品であり、未婚の婦人は未だ流通過程にある商品である。帝劇の廊下や三越の休憩室を、これらのバラ色の、物言ふ商品の裝飾窓として頭に描くことには、敢へて特別な藝術家的直感力を必要としない。かう言つたら顎をしやくつて言ふモダンガールがゐるかも知れない。だから私は結婚を輕蔑するのです――と。結構です！　確かにあなたは商品ではございますまい。しかしあなたが商品でないといふことは、あなたが男性の享樂材であるといふことをちつとも妨げるものではない。それは退屈凌ぎの手慰さみに編まれた靴下が商品でなくとも靴下であることに變りがないやうに――。あなたの外國趣味と性の解放主義とは、あなたをより魅惑的な享樂材として、男性に認識せしめるに過ぎない。そしてその點を除いてはあなたと普通一般の女性との間には享樂材としての何の違ひもないのである。

女性を商品化し、財物化する社會組織！　そこから一切の女性の無自覺と奴隷心と卑屈とが發生する。

從つてかうした觀點から現在の婦人の奴隷的地位を考へるとき、私の憤りは一直線に支配階級に向ふ。私は世の女權論者の

様に男性一般を女性一般の敵として見る様な考へ方には味方しない。男性の大部分は女性と同様に、少數の支配階級によつて壓迫されて、隷屬され、搾取されてゐるのである。彼等に何の責任があらうか。

なる程勞働階級の中にも女性を性的享樂の材料としてしか考へない様な人がたくさんある。しかしそれらの人達はさうした支配階級的な女性觀を人眞似する鸚鵡の様に支配階級によつて注ぎ込まれてゐるだけであつて、女性を財物化すやうな現在の社會組織に何の利益をも感じてゐるわけではない。それに利益を感じてゐるのは資本家階級だけである。

閨房と厨房の天使(エンゼル)よ！　と資本家階級は家庭婦人に言ふ。そしてそれによつて夫の空腹をキスの百萬遍でなだめることを婦人に命令する。他方資本家階級は勞働婦人に向つてはかう言ふ。——家庭に於いてよき半分(ベターハーフ)であるべき婦人は賃銀に於いてもまたよき半分(ベターハーフ)であるべきである——と。かうして一日八十錢の賃銀で殆んど全裸體の婦人が數千尺の地下勞働に追ひ込まれ、監獄の塀よりも高い紡績工場の塀の中で若い婦人が服役させられるのである。女性に對する不當な差別待遇によつて利益を感ずるものは、資本家階級だけであることを、私はもはや數十遍數百遍言つた。勞働階級の中の男性が、よしこの種の資本家的な女性觀を持つてゐたとしてもそれは、それらの人達の階級意識の曖昧さを示す以外の何ものでもなく、從つて、如何にしてこれらの偏見を除去すべきかといふ思索の對象ではあるが、決して憎惡の對象でもなければ闘爭の目標でもあり得ない。

女性の敵は支配者群である。

從つて私の罵倒的男性批判が、ブルジョアジー及びその尻尾である小ブルジョアの男性の罵倒的批判であることは當り前である。私はそれらの男性の性觀念について先づ書いて行かう。

二、靴をはいた雄雞！

何某の會社の重役又は何某の大官が幾人の妾を持つてゐるなどといふ話をきくと私はすぐに、數羽の牝雞を從へて軍艦の様に悠々と胸を突き出して農家の庭を練り歩いてゐる雄雞を思ひ出す。だが、雄雞は少くとも自分で蟲を漁つて牝雞に與へるが、シルクハットを冠つて自動車に乘る雄雞は、他人から收奪した勞働力で、本物の雄雞の數倍もの雌を所有してゐる。そして本物の雄雞は牝雞と協力して卵を製造するがゴルフ・ズボンの雄雞は他人の產んだ卵を掠め、それをビールを飲む様に贅澤に啜つて無意識の粘液を自分の體内に製造するだけである。現代に於ける一夫多妻主義者が利潤と地代の收奪者である譯は彼等の

美食と快適な住宅、衣服がそれらを要求するし、彼等の經濟依存がそれを許すからである。彼等は黄金の魔睡薬を婦人の腕に注射して昏睡狀態に陷れ、自由にその婦人を手籠めにする破廉恥漢である。そして、重役會議の後や倶樂部の晩餐の席で、あ、は、は、は、は、と笑ひながら同類とそれについて語り合ふ動物である。彼等の手と足は主として美食を貪り食ふこと、性の獵奇のためにのみ胴體に着いてゐる。身體の位置を移動するためには自動車があるから足の必要はなく、衣服をきるにも召使がゐるからその手を必要としない。雄雞は脚に泥をつけて裸足で濶歩してゐるが彼等は額に泥をつけて人類の歴史の上を傚さうに歩いてゐる、

三、文化的說教强盜

「戀愛とは卽性慾さ。性慾卽本能さ。本能卽無倫理さ」いかにも悟つた樣な顏をしてこんな事を言ふ男が大分ある。假りに私はこれらの人達を自然主義的戀愛論者と名づけやう。又――

「俺は數人の女を同時に愛してゐる。しかし俺はまごころをもつてそれ等の女を愛してゐる。例へ數人の女を同時に愛して居やうともまごころのあるところに不德のあらう筈はない。それどころか、多情な男といふものは却つて佛心が多いものである」

これは所謂多情佛心教の教理と同[illegible]である。この[illegible]く/\の[illegible]の[illegible]の正體が何であるかを[illegible]いてみるのも面白からう。

この二人の男が本質に於いて一夫多妻主義者である點に於いて、前の、靴をはいた雄雞といさゝかの相違もないことは直ちにどころに了解できる。只異るところは、靴を履いた雄雞が無言の實行者であるのに對して、自然主義的戀愛論者や多情佛心論者が、彼等の戀愛觀をしきりに合理づけやうと焦る點だけである。一方は自然科學的に。一方は道德的に。

およそすべての性的頽廢といふものは、人間の生活關心が社會生活から離れて自分自身の上にのみ停滯した時に發生する。人間の生活關心が社會から全く、乃至は大部分離れて自己一個人の上にのみ集中された時、そこに發生するものは「戀がしたい！　ビフテキが食ひたい！」だけである。そこから性的享樂の無限の追求が發生する。したがつて個人主義の生活原理に生きてゐるブルジョア大衆の性的頽廢は運命的なものである。ただ自然主義的戀愛論者や多情佛心教信者は小ブルジョアなので、富豪や大地主の徒の樣に、金貨の目潰しによつて片端から婦人を弄んで行く程の財力は持合はせない。從つて彼等は全部が、ある程度まで、物質から獨立した合意を婦人から得な

ばならない。そこで自然主義的戀愛論者はにやくしながら言ふ。

「戀愛を重大なことの樣に考へるのは古いのですよ。戀愛とは性慾のクリスチャン・ネームであり性慾とは食慾と同樣に我々の肉體の生理的慾求です。少くとも近代人たる者はそこを認識して飯を食ふのと同樣に戀をしなくつちや駄目ですよ。自由にして、輕便にして、衞生的な性交萬歳！」

多情佛心教の信徒も言ふ。「一人の男が數人の女を愛することを一概に不道德の樣に考へるなんて、デリケートな人間の心の生活と、その反射の多樣さを理解しない朴念人のみの言ふことです。佛の御慈悲の多からんことを願ふ人類が、男の慈悲の少からんことを願ふ筈がないぢやないですか。尊敬するが故に多くの女性を愛するになるのですよ。もし輕蔑してるものなら一人も半分も愛する筈がないでせう。要するに、『愛』ですよ。「慈悲」といふことばで言表してもいゝですよ。つまり、私の術語にしたがへば、『まごころですな』」

しかも、その「まごころ」が、どんな「まごころ」であるかを「大地」といふ里見弴氏の小說によつて見やう。その中の昌造といふ男は、典型的な多情佛心教の信者であるが、その自分の「まごころ」の所在を證明するために、いや、その「多情」も「佛心」の一部分であつたことを證明するために、つね日頃苦心してゐるのである。

その男は、大震災で自分の家族が鎌倉にゐて、その生死の程もわからないのに、避難して行つた親戚の家の庭で、自分の馴染の藝者と闘々しく同衾してゐるといふ痴漢なのである。その癖して、もし家族にもしものことがあつたら、「俺は比叡山へでも入つて一生だあれにも逢はない覺悟」をしてゐるのださうである。比叡山こそいゝ迷惑だらう。近頃は宗教の方面の生活も大分近代化してゐるとはきいたが、まさか藝者と同衾してゐる布團の中から首を出してお經をとなへることを佛さまも許しはしないだらう。――それからある時には甘粕大尉の減刑運動に關する署名をとりに來る男があつた。こんな機會こそ彼の自分の「まごころ」を證明するに最もいゝ機會なのである。彼は自分の名前を書くのが氣がすゝまないので女房に斷つて女房の名を書いて出した。(もし、普通の人間の眞實のまごころなら、誰の名前を書いて出すことだつて罪惡と思ふだらう)それからあとが笑はせる。

「おい、さつきあついお前にすまないことをしちまつたんだがね」と前置きして話してから、「可厭かい。いやだらうね。もし可厭なら取消して來てやつてもいゝが」

女房子供を鎌倉においたまゝ藝者とねてゐるこの男は、こんな時にばかり、こんな事を言ふのである。だが、自尊心がやつて來た時にさへ斷れなかつた弱い人間が、その本部へ行つて斷る勇氣をどこに持合はせてゐるものか。自身實行意志がないにきまつてゐることで、女房をだまし、讀者をだまさうといふのである。「まごころ」とはつまりこんなものである。

要するに彼等は說教をしながら女の貞操を奪ふ、說教强盜の亞流である。

私は、戀愛を決して神祕化して考へはしないが、戀愛卽ち性慾であるべきだといふ考にはどこまでも反對する。そんなことを言ふなら畜類が、一番眞實な性生活をやつてゐることになつてしまふ。人間の兩性關係に於いては自餘の生活に於いてもさうである樣に豐富な心理的要素が重要な構成要素をなす點に於いて、動物のそれと異る。發生學的に見て性慾がその元素であるといふことは性慾卽ち戀愛であるといふことの說明にはならない。それは人間を動物にまで引戾さうとする議論である。

私はある時、「男についての漫談會」といふのへ出席した。そこで、私は、例によつてプロレタリヤの名に於ける、ある男性の妙な議論をきいた。その議論によると戀愛卽ち性慾といふ生活形式がプロレタリヤ解放運動にとつて最も有利な兩性關係の形態だといふのである。その理由は、それが一番簡單であり、活動の時間を僅少にしか奪はないからといふのである。

しかし、それを實踐に移してみたらどうであらう。性慾と戀愛とを混同する生活は、結局性慾の享樂を追ふ生活であつて、それには、何の統制も慣しないものとなり、日常生活はそのために大部分精力を奪はれることになる。そして、それは、すぐに快樂主義に變つて行くであらう。實行するものについて考へてみても、性慾卽戀愛論者の生活は、必ず兩性關係のために多くの精力と時間とを費してゐる生活である。

四、ひざまづく彼

アメリカ映畫を見ると、多少の誇張はあるだらうけれども、大體歐米の兩性關係についての見當がつく。二階の階段を降りるのにも男は必ず女の手をとつて助けてやる。女もまた無邪氣さうに可憐に、また威嚴ある態度で男を遇する。あれが、日本の女權主義者の天國であるとは、情ない。

過去の男子が婦人を輕んじたと同じ程度に婦人を無暗矢鱈に尊敬する人達が日本にこの頃發生した。男に優しくされることが惡からう筈はないが、それらの人達に限つて、ウーマン・ハンターの札付きが多いとは、何と云ふ不幸な國に私達はうまれ

ついたものだらう。婦人は長い間愛撫されることはあつても尊敬されることのない生活を續けて來た結果、自分を卑下することが潜在意識にまでなつてゐる。從つて、尊敬の態度や言葉で女に接近して行くことが、一番巧で確實な女を陷れる方法であることを男達は習得したのである。

昔は同志であつたが、今は墮落文士になつてしまつたある私の知つてゐる男は、ある時人妻を口說き落した。その場のありさまを語る言葉の中で彼は言つた。

「僕はいきなりその女の腰かけてゐる前にひざまづいたね。そして床へ顏を押しつけて泣いて見せたよ。それが實にすばらしい效果を呼び起したさ」

この男はその當時に於いて實に十數人の女を操つてゐたさうであるがこの場合の人妻といふのが、また有名な男性摸索者で自分の魅力の前に敗北した男をひざまづかせるといふことを人生何よりの快樂としてゐる女であつたとは、悲劇の喜劇である。

この種の男の典型的なタイプとして私はアレクセイ・トルストイの「苦惱の中を行く」から詩人ベスソーノフの言葉を引抄しやう。

この色魔詩人はエカテリナといふ人妻をだまし、その他幾人もの女を犯してゐる男であるが、キエウナといふ女を口說く時の言葉――

「僕の全身は凍えてゐる。心臟も止つてゐる。早く僕を温めて下さい。僕の望みはほんの僅です。憐んで下さい。僕は滅びつつあるんです。獨りぼつちにせずに……可愛いわが乙女よ……」

こんな言葉なら、その手品を見破るのは未だ易いかも知れない。

だが、姉のエカテリナと自分との祕密を知つてゐる妹のダーリヤを口說く時には――

「ダーリヤ・ドミトリエウナ、僕はあなたの前に低く叩頭することが出來るばかりです。僕はあなたのお言葉を求る資格さへもないものです。生れ落ちてからこの方今の瞬間程自分を呪はしく思つたことはありますまい。費ひ果たし、減り盡し、拔け殼同樣のこのからだ……數年前ならば……僕は決してあなたを離さなかつたでせう。この盃に口づけて離れなかつたでせう」そして終に「あなたはその盃を私に持つて來て下すつたのです」とやり始める。勿論これは外國のことであるが、そのトリックの迫眞力には國や時代を越えたものがある。それについて、私は今はある種類のプロ作家として收りかへつてゐる沼馬渉(假名)氏のことを思ひ出す。彼のあらはした「災難者」(假名)といふ小說にはいかに、熱情をこめて、ある一人の女性に對する讚美の

言葉が綴られてあつたことであらう！　ために、いかに世の子女の胸を躍らせ、洛陽の紙價を高めたことであつたらう。ところが、實際の生活に於いて、彼はまた、何と下劣な性生活を營んだことであつたらう！

「原始共產時代は母權中心時代であつた。だから現代もさうあるべきだ」

「その進化の以前に於ては、男性は女性の生殖器の一部分であつた」

「男子の一滴の精液の四分ノ一に該當する精蟲があれば、全世界の女性の生殖が可能である。從つて人工生殖が發達した曉にはたつた一人の男子を除く、八億の男性は不要となるであらう」

なんの物好きでか、かういふことをいふ男もある。しかし甚だ婦人に對して謙讓さうに見えるこの男達も、科學的を裝つた自分の言葉にどれ程の科學性があるか、たつた一度反省してみるだけの誠意も持つてはゐないのである。

原始時代に母權中心であつたから今もさうでなくつてはならないといふのなら、その時代には母子相姦であつたから現在もさうでなくてはならないといふ議論がうまれて來るだらう。男性が女性の生殖器の一部分であつたと言ひ得るなら、女性は男性の生殖器の一部分であつたといふ言葉も成立する。なぜなら、それは性の分化以前、即ち性といふものがなかつた時代のことなのだから。第三の、精蟲に對する數學は、人間を中心とした[illegible]にのみ存在するものと前提してゐる。片言隻句の間にも本性を現はす、有閑階級の人生觀のあらはれとしてのみ、我々には興味がある。私は感謝の言葉として、その「社會科學」や「自然科學」によろしく仰有つて下さいとでも言はう。

五、「高が女だ」と二言目にはいふ殿方

「僅か一婦人のために……」こんな言葉をよく聞く。もし、この言葉がより重大な社會的任務のためには夫や戀人に對する愛をも犧牲とすることを厭はないといふ意味なら、私達婦人は悲みながらもこの言葉の意義を認めなければなるまい。そして私達も同じ意味に於いて「一男子のために……」と、斷然と言ひ切るために努力しなければならないと思ふ。しかし、發生する時にはさういふ意味を持つてゐたこの言葉も、現在に於いては男性の婦人に對する單なる輕蔑の意味に變質してしまつた。

夜遊びする亭主が妻君になじられて「一婦人のために俺の自由を束縛されたくない！」などと叫んだとて、誰もこの言葉を悲壯だとも思はなければ、この言葉の主を、自由の使徒だとも思ひはしない。

正宗白鳥氏は、所謂「嬶天下」の夫婦のことを書いて「虐げられる？」といふ題をつけた。その小説の中にある女の程度の勝氣さなら、男は百人が百人とも持ち合はせてゐる。何故正宗氏は、先づ先に女が男に虐げられる所の「虐げられる」を書かなかつたらうか。

男が女を虐げるのは當然で、女が男と對等であるのは「虐げる」といふ慘酷な動詞に該當することになる理由は、どこから來たか。

普通かういふ男の婦人に對する考へは封建的な女性觀と呼ばれてゐる。しかし、現在の社會で最も封建的な經濟生活と家族生活とを營んでゐる農民よりは却つて自由主義的な生活をしてゐる都會のブルジョアやプチブルにこの種の男性が多いことを考へると封建的といふ言葉は決して妥當でないと考へられる。これはむしろ資本主義的女性觀である。農民の婦人は夫と共に重要な一家の經濟單位となつてゐる結果、ある程度の發言權は生活に對して持つてゐるのである。

女性に對してこの種の考へ方を持つてゐる男子はひとり正宗氏のみではない。全被壓迫階級の解放戰線に立つてゐる鬪士の中にも往々發見される。

「女房は臺所を全世界と思つてゐる女に限る。家庭は慰安の場所でありやあい、んだ」

だが、私は聞かう。すべての家庭が慰安の場所として、破綻を示さないために舊い殼を守つてゐたとしたら、それに必要な收入のために努力し、その收入のための勞働に全生活を奪はれ、結局、どの暇を割いて戰線に赴けばい、のであらう。そして、その戰ひには、婦人を味方とするよりも、敵の影響におく方がより有利だとでもいふのか。私は農民や手工業者の娘の、所謂「舊式な女」が生半可な教育をうけた婦人よりは數等すぐれた特質を持つてゐた場合を知つてゐる。しかし、それを全女性の上にあてはめることは出來まい。或る一個人にいかなる配偶者が適してゐるかといふことは彼の個人生活の樣式によつて決定する。しかし、全女性が如何にあるべきかといふことは社會的階級的見地からなされなければならない。女性の進むべき道はモダンガールか、「舊式」かの二つしかないのではない。

フイルム・トリック

堀野正雄

ヴエ・プドーフキンは其の著書「映畫監督論」に於て映畫と眞實性を語りながら次の如く云つてゐる。

「撮影機の對物レンズが向けられる現實の場面は、映畫藝術の眞の材料でないといふことが證明された。」そして「屢々(フィルム・トリック)と呼ばれて來たこの現象は、根本的にみれば、映畫的描寫の特殊な一つの手法に外ならない。」

——映畫藝術の基礎はモンタアジユである。と云つたプドーフキンの映畫に對する理論は尊敬されてよいだらう?

——「映畫眼」の過去は——世の映畫藝術の辿つてゐる進路を變更させるための苦鬪である。演技的映畫から、「仕組みのない映畫」に、劇に仕組まれた映畫から記錄的な映畫に、劇場の舞臺から生活の舞臺に——世界全體の映畫藝術の重心を置き換へる爲めの苦鬪である。——と映畫眼を強調したヴエルトフの理論は「仕組みのない映畫」に其の基礎を置いてゐる。然しヴエルトフは同時に「映畫眼は——事實の映畫的記錄であり、記錄的映畫を標榜する運動である」。と云つて居る所を見れば、畢竟彼の「仕組みのない映畫」は單に理論の爲の理論であつたことになるであらう。事實映畫に於ては仕組まれない映畫はあり得ない。ヴエルトフの最近作「撮影機を持つ男」に其の例を取らう。

——單線の鐵道線路。

——遠方から汽車が急速力で走つて來る。そして觀客の視界を完全に征服して走過ぎる

——次の瞬間、全然逆の方向から觀客の視界を咄嗟にして遠方へ走り去つてゆく と云ふ一つの事實を提供してゐる。そして彼は次のカットに於て鐵道線路の中へカメラを埋めて、ミネ・モーターに依つてクランクしてゐるカメラマンを撮影して、前の畫面に表はれた一つの事實を說明してゐる。

——之が「仕組みのない映畫」を標榜した「映畫眼」の具體化した一例である。畢竟映畫はトリックを離れては存在し得ない。トリックはモンタージュに必要な素材である。

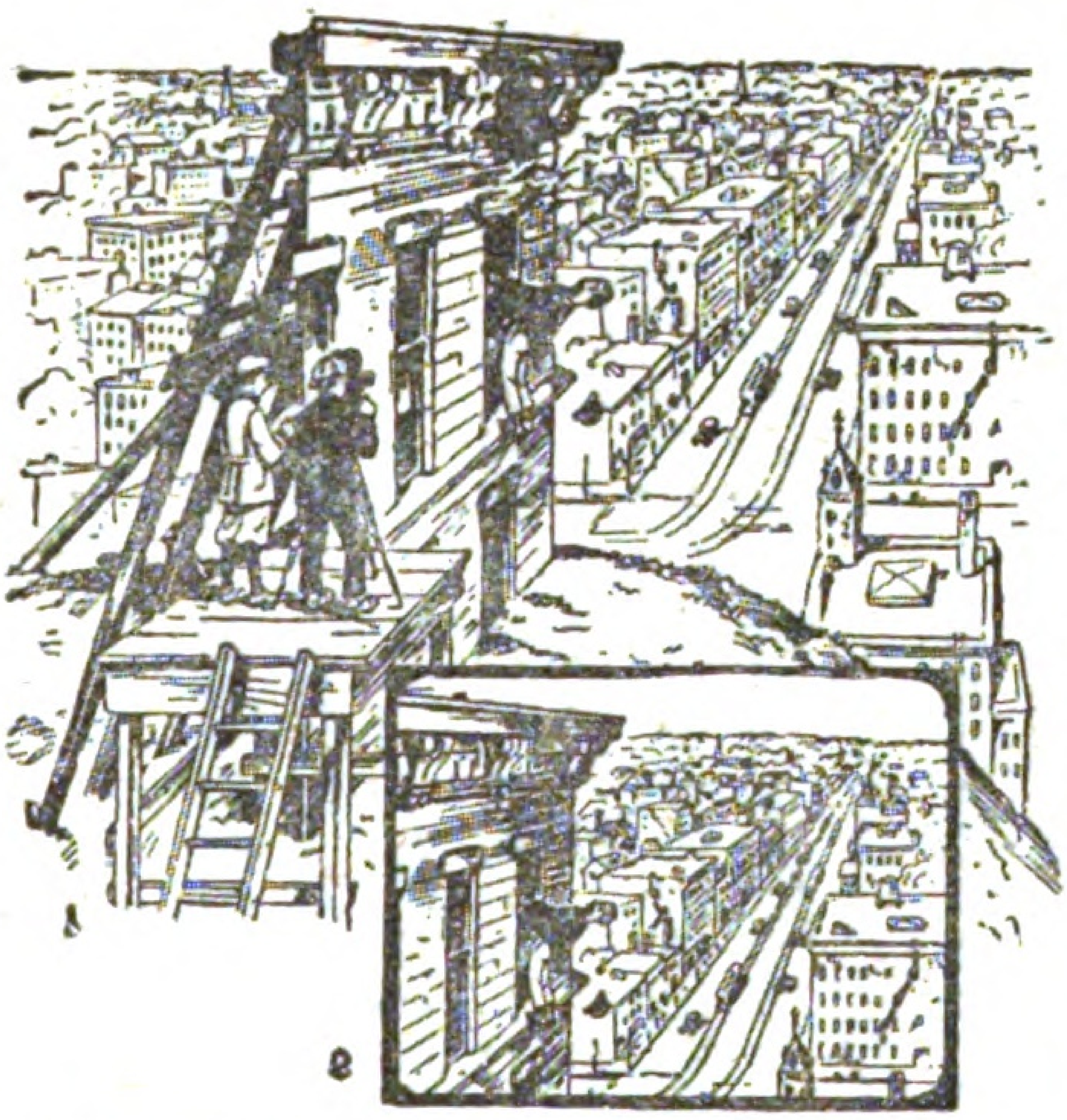
私は此處にフヰルム・トリックについて簡單に述べたいと思つてゐる。私の解說が映畫を翫賞する上に、將來夫の仕事に從事さるゝであらう人達に、そして當事者にトリックに對するプロフイールとして役立つならば幸甚である。然し夫は餘りに細部に觸れない。歷史的に興味ある種々の事實、經驗者の體驗等は省略されてゐる。唯僅かに大事に關して觸れて見るかも知れない。フヰルム・トリックの問題は夫の現在に於ける最高點に存在するシユフタン・プロセスに關してのみですら優に編輯者から與へられた頁を埋めるのに充分

なのである。

トリック・フイルムの發生

シネマのカメラ（便宜上以下單にカメラと稱する）は其の構造上其の撮影を適宜行ふことが出事ると同時に、クランクを隨時撮影中停止して或る時間經過の後に再びクランクすることが出來る樣になつてゐる。此事は「仕組まれない映畫」を完全に否定するに足る事實であり此のプリミテイブな、餘りにも常識的な事實は、意識的に認識された時、映畫術は劃時代的な進展を成就した。之がトリック撮影の初期の表はれである。手品は此のテクニックに依つて完全に撮影出來るであらう。

逆回轉のテクニックは其後フヰルム・トリックを啓蒙した。カーフマンは「モスクワ」に於て將來の駒を寄せ集めてゐる所を逆回轉に依つて撮影して、手を動かすと駒が出て來て並ぶ效果をスクリーン上に齎らした。此のトリックは喜劇を構成する要素としてかなり重要視されてゐるものであるが、今列車が前方に進行する場面——終點に向つて停止する——に之を主觀的に撮影しなければならないとする。所が其の鐵道は田舍の終點で一日に數回しか發着しないものであり、運惡く夕方になつた爲に撮影を翌日に延期すべく餘儀なくされた場合に、若しもカメラマンが逆回轉のテクニックを完全に咀嚼してゐたならば、展望車に乘つて列車の發車する際に逆回轉に依つて、或はハンド・カメラならば上下を反對にして撮影するであらうと思ふ。



圖の上に建てたセツト・スクリーンには下の樣にできる

逆回轉は必ずしもコミックな目的にのみ使用されるものでない。

ダブル・ロール、ダブル・プリント

Similitude と云ふ詞があるが映畫では容易に夫に同時に接することが出來る。文藝作品の上に表はれてくる分身は恐く時間的に相違してゐるものであるが、シネマに於ては分身は同時に存在し得るものであり、互に會話をすることも、容姿の自由さと云ふ點も我々の空想通り實現し得る。「生けるパスカル」に於ける現在を中心とする過去、未來、並行、反復等の同時的描寫、モニメンタルな成功は此の最も適切な例である。

フヰルムの駒を何等かの方法に依つて半分被つて撮影し、逆回轉に依つてフイルムを卷き返し、今度は逆に露出濟の部分を被つて撮影することに依つて行ふことが出來る。此のトリックをダブル・ロールと稱してゐる。此のテクニックは其後一畫面のフオト・モンタージユを將來した。ムルナウの傑作「サンライズ」に於けるフアースト・シーンのフオト・モンタージユ。大汽船が解纜しつゝある——ゆるいテンポで。急行列車が都會へ向つて走

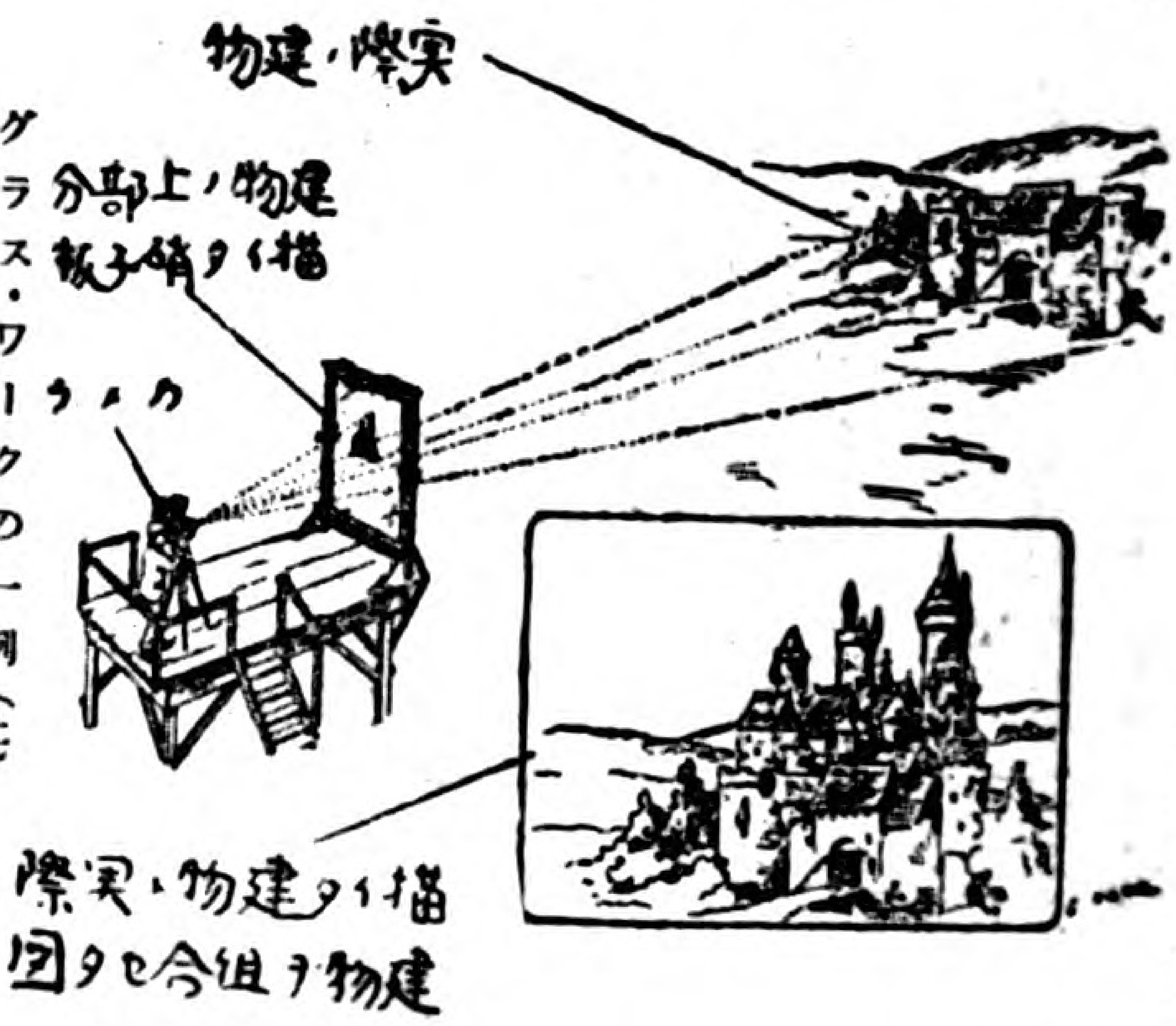
る――早く、速く……。

あらゆる他の仕事に於て困難な同時性、運動しつゝある異なる物象を我々は映畫に於て簡單に觀ることが出來る。演劇に於けるゲオルク・カイゼルの「並行」よりも容易に。

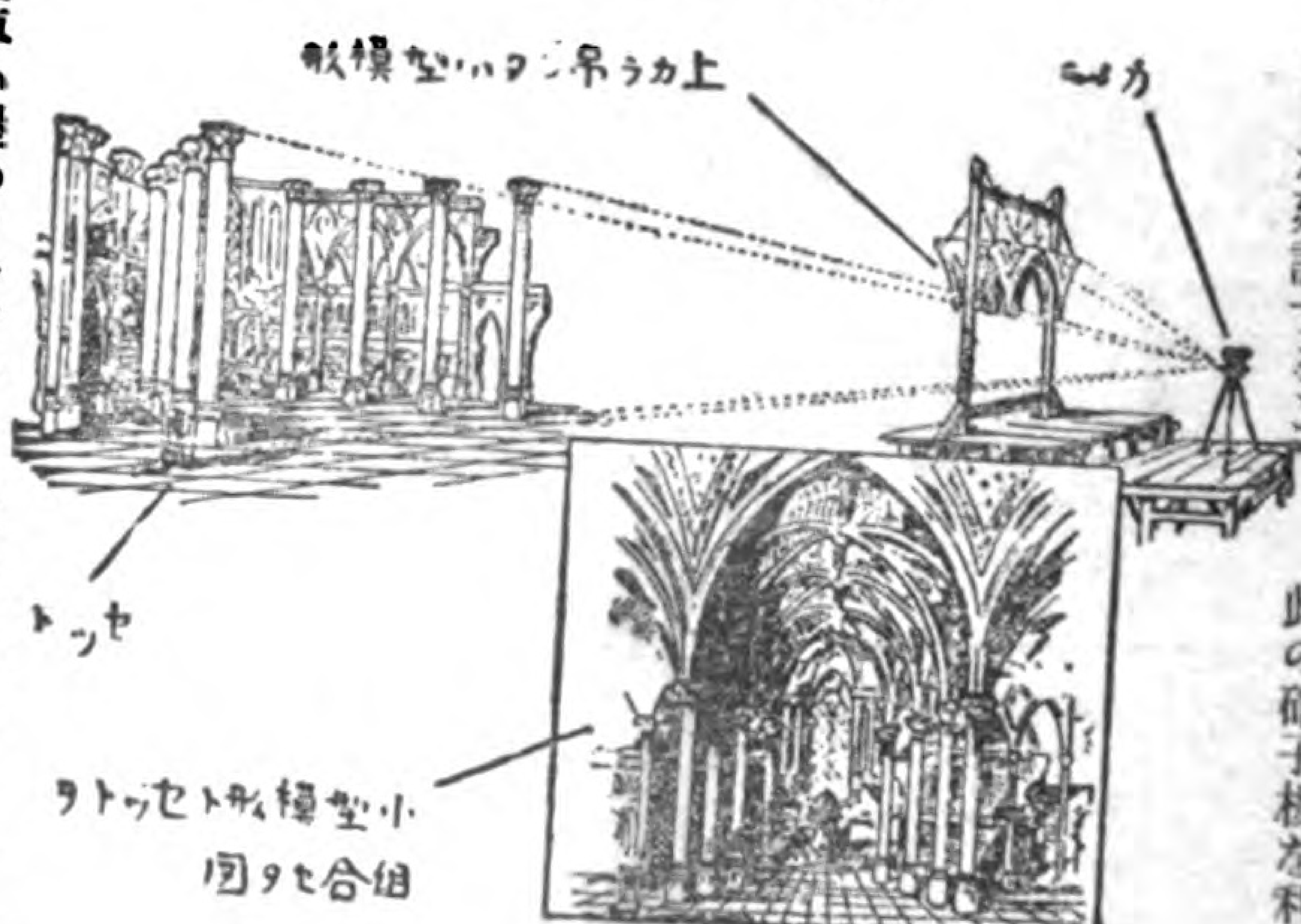
フエード・イン、フエード・アウトをモンタージユしたオーバー・ラップと云ふテクニックがある。此のテクニックは豫め計算された場合には撮影に際して一本のネガテイブの上に行ふことが出來るのであるが、個々の素材をモンタージユしてオーバー・ラップの效果を出すことが出來る。減力液に依つて處理した二つのフイルムを重ねて、一つのポヂテイブの上に燒付する(プリント)のである。此のテクニックをダブル・プリントと稱してゐる。近來專ら注目されつゝある畫面のフオト・モンタージユは、此の方法(プロセス)に依つて、個々の素材を有意義な要素に置換することが出來るであらう。

此の方法は物理的に、更に化學的に考研された結果種々のフイルム・トリックを將來した。

グラス・ワーク、ミニアチユアー・ワーク



グラス・ワークの一例(上)
ミニアチユアー・ワークの一例(下)



シネマの撮影に際して廣大なるセットを建設することは餘りに非合理的の事實である。最近將來するであらう、ウーフア作品「世界の際に」に表はれる戰禍の爲に破壞さるゝ風車小屋のロングショットは恐くダークステーヂに於ける人工的のセットである。夫はダークステーヂ內に於けるホリゾントの前に建設された小屋の下部のセット、適切なるホリゾントを利用した配光、硝子板の上に風車小屋の頂を描いてカメラとセットとの中間に置き、巧みにマッチさせたのに過ぎないのである。

此の硝子板を利用するトリックをグラス・ワークと稱する。廣大なる建設物の內部――敎會堂の內壁、ドーム、城の塔、天主閣、セットの背景となる景、等等に利用される。

然るに硝子板の上に描いた畫を立體の他のものに調和させることは仲々容易ではない。更に寫實的に成就したい希望から考案されたのがミニアチユアー・ワークである。小形の模型なカメラの前に置いて撮影する方法である。ミニアチユアーを使用するトリックは種々の效果を齎らした。大暴風雨の爲に難航しつゝある汽船のロ

ング・ショットは大抵此のトリックに依つて撮影する。池に浮べた模型の船・人工的の暴風雨を高速度撮影機でクランクしたフイルム、波打際の自然の浪を撮影した近景のフイルムとを適當にモンタージユしたスクリーン上に表はれるシーンは、トリックと信ずべく餘りにも多くの眞實性を有してゐる。

シュフタン・プロセス

科學的に工夫されたトリックにシユフタン・プロセスと云ふのがある。發明者はドイツの畫家シユフタンで、最近「ジヤンヌ・ダルク」を發表して其の存在を確固たるものにしたカール・ドレイエルの共働者コツラとの提携に依つて完成された方法である。之は簡單に説明すると前述した種々のテクニツクが適當にアレンヂされたものであり、唯前者の何れとも異なる點は鏡を利用することであるが、夫の齎らす效果は、ドイツ映畫「メトロポリス」に於てスクリーン上から觀客を威壓するのに充分であつた。

先づ撮影に必要な部分を全部具備した模型セツトをカメラの前に置く。一方俳優の演技に必要なバツクとなるセツトを作り、兩者を單數或は複數の鏡を適當に置くことに依つてマツチさせるのである。畢竟ミニアチユー・ワークと大差ないが、鏡を利用する爲にミニアチユアーとの相對的關係から生ずる種々の利點。夫は畫家のアトリエに於ける鏡の價値とは全然比較にならないものである。そして此の方法に於ては鏡を工夫することに依つて、例へば凹面鏡を用ふるとか、或は又凸面鏡を使用することに依つて、要するにミラーの選擇如何に依つて期待し得る種々の效果。最近封切さるゝであらうウーフアー作品「月の中の女」に於ける此のトリックは素晴らしいものである。



2

2a

1

1a

3

ダブル・ロールの最も簡單なる說明圖

之等の撮影に緊要なもの。シネマの撮影に於けるホリツオントの利用である。「パンドラの箱」に於ける救世軍の出るシーンの町のセツト。霧のかゝつた街。ルゝが死なければならなかつた街。アルワアが生れ變る可く消えて行つた街。――あれはホリツオントを利用したテクニツクである。ホリツオントの利用に關しては篤學者は「新興藝術」三、四月號「新興映畫」三月號「フオトタイムス」三月號「科學知識」四月號所載の拙稿を参照されたい。いづれも一九三〇年。

ウイリアムス・プロセス

「ロスト・ワールド」と云ふ映畫があつた。前世紀の巨大な動物がロンドンの市中を歩き

廻ると云ふ物で、之は完全にトリックであることは意識しながらも了解に苦しむものであつた。燒付の際に行ふテクニックで、今夫を簡單に說明すると、（下圖）

Iの操作でAの樣なミニアチュアーを撮影して1の樣なネガテイブを作る。次に之を非常にドギック燒付（プリント）して2の樣なポジを作つて置く。

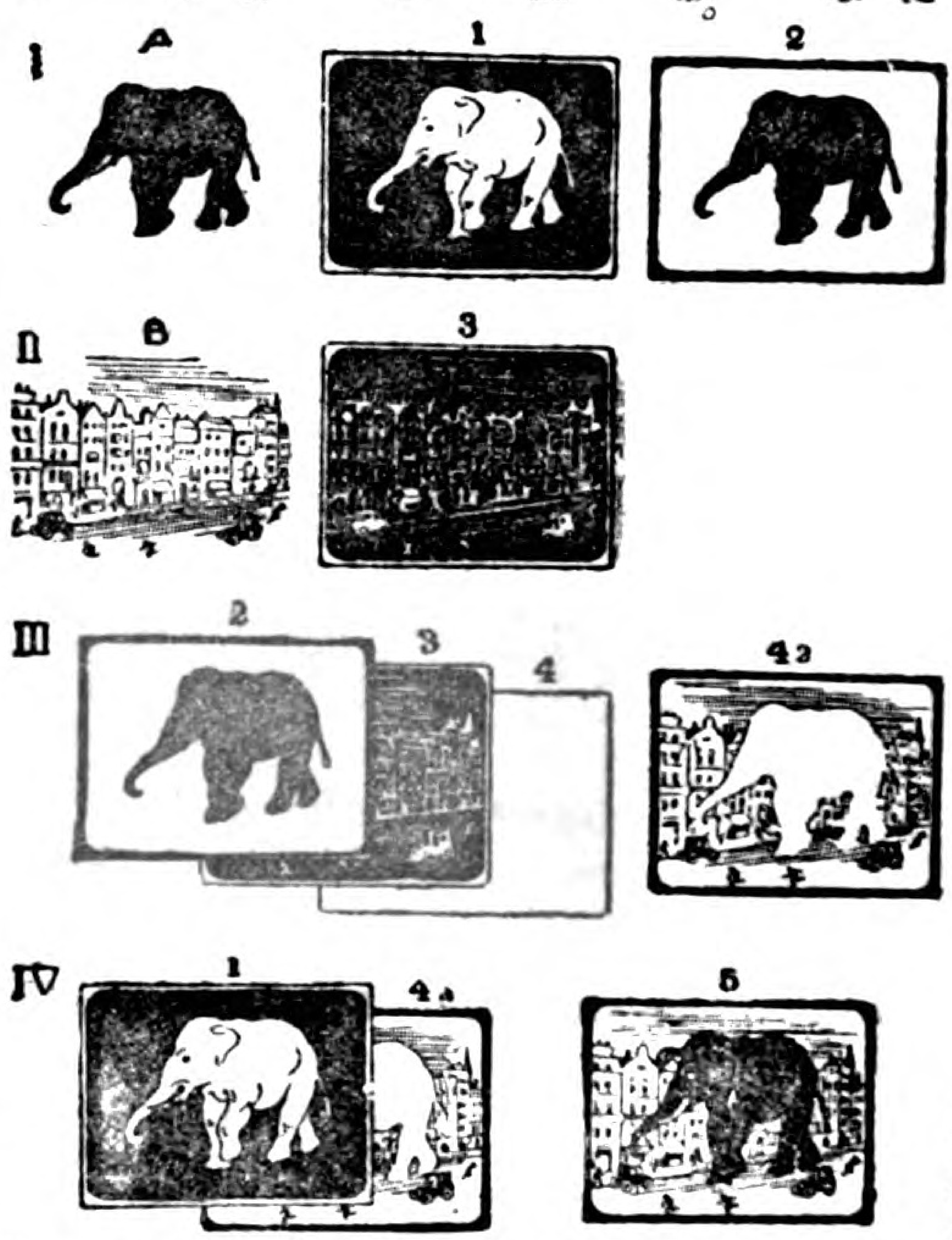
IIの操作でロンドンの市街Bを撮影。ネガテイブ3を作る。

IIIの操作で2、3をポヂテイブ4の上ダブル・プリントして4aを作る。

IVの操作で4aの上に1をプリントして所望の結果を得るのである。

以上は寫眞術に對する概念なしに會得することはかなり困難であると思ふがプロセスの紹介と云ふ意味で……。

此の方法を完成したのがウイリアムス・プロセスであり、我國に於ては「移動マット」と呼ばれてゐるものである。尙最近封切さるゝであらう蒲田作品「進軍」には此の方法を更に科學的に改良した試みが盛られてゐる。飛行機上の冒險的なシーンに、馬上の危險な場面に用ひてある。之は最近歸朝した鈴木重吉氏が將來したプロセスであるが、デテールに關する紹介は現在は筆者としては遠慮したいと思つてゐる。



線畫フイルムについて

幾多の漫畫フイルムを發表して映畫ファンを熱狂させた線畫フイルム製作界の權威プレー氏のラボラトリーの壁は悉く運動するあらゆる物象の高速度映畫を擴大した寫眞に依つて埋められてゐるさうである。

手を擧げる動作は非常に簡單であるが、夫を分解し、そして再び綜合することは容易なことではない。斯かる場合に高速度映畫を利用することは最も合法的であると云へる。近來盛んに啓蒙的に撮影される、運動競技に關する種々のフオルムの分解の爲の高速度映畫――夫は線畫フイルムのモンタージュに缺く可らざるものである。運動しつゝある物象の要所を科學的に把握して夫を線畫に描き、一齣寫しに依つて撮影すると、其處に線畫フイルムが出來上るのであるが、運動の要所要所を一枚づゝ描くことは非常な努力と時間とを要するものである。で今假りに帽子をとると云ふアクションは右手だけの運動に依つて行はれると云ふ樣に省略して考へた結果、次の樣な方法が考案された。右手以外の部分を透明セルロイド板の上に描いて置く。そして其の都度の右手の條件のみを別に一枚一枚描くことに依つて、完

全に全部の姿を描いたと同一效果を擧げることが出來る。

又雲の中を通過すると云ふ様な場合にもやはり透明板に半透明な、或は不透明な雲を描き、其の後ろに例へば飛行機にのつたグロテスクな動物を動かして撮影すると、スクリーンの上には雲の中に見え隠れするシーンを作ることが出來るのである。そして若しも前記ウイリアムス・プロセスを利用するならば容易に線畫の人間と現實の人間とを適當に、同一畫面に、何等の不自由さなしに表現することが出來る。

プレー氏のラボラトリーは完全に分業に依つて仕事されてゐて、撮影は未だにプレー氏自身が助手とクランクして居て、絶對に何人にも其の仕事場へ入ることすら禁じてゐるとのことである。同じラボラトリーに働いてゐる多くの人は自分の仕事がどう云ふ風に、どんな目的に使用されてゐるのかさへ解らないとのことである。

近來常設館に於て觀客の氣持を完全に置換することに成功してゐる漫畫トーキーは、開かれざる王國に於て作製されるトリック・フイルムなのである。

トリック專門の撮影所



野生動物の棲息状態を安全に撮影する方法。ユニーマン商會は紙製の十五呎の高さある大きな造へ物の牝牛を作つた。撮影者はカメラを持つてその胴中へ入り、蝶番のついた小さいドアーを通じて撮影する、此の仕掛で危險な野獸が接近して來るのを彼らに氣づかれずに撮影し得る

アメリカでは一つのトリックを考案すると其の權利金だけで成金になれるそうだが、やがては我國にも將來することかも知れない。元來トリックの撮影は非常な技術と、熟練とを要するもので、仲々簡單に出來るものではない。撮影所で何回も繰り返すよりは專門家に頼んだ方がいゝと云ふので、獨乙ではトリック專門の製作所があつて各撮影所のトリック部分を引受けてゐる。篤學者の爲に代表的のものを擧げて見ると、前記シュフタン・プロセスのパテントを有してゐる Deutsche Spiegeltechnik G.m. b. H d Co. 其他の著名なるものに、Growald-Trickfilm. Trickfilm-Atelier. Wächter がある。(何れもベルリン)

尙フイルム・トリックの專門的研究家として有名な Guido Seeber を忘れてはならない。フイルム・トリックに對する一つ標準である彼の著書 Der Trickfilm Verlag der „ Lichtbildbühne " Berlin を紹介したい。

トーキーに於けるトリックの一例

プドーフキンのカメラマン、ゴロオフニヤの報告に依ると「音の組立に對する實驗は、專ら、音の摸倣の可能性の利用といふ點で盡きる。この點では既に素晴らしい效果が擧げ

られて居る。例へば、列車進行のイリウジオンは、撮影機の傍で指を輕く叩搏することによつて得られ、木の葉のさらさらと鳴らす風の音は、絹布の摺音によつて導き得られ、破壊された硝子の砕け散る音は、金屬の薄板によつて得られる等、等」といつた具合である。

回轉バック使用のトリック

列車中のシーン。車窓から野外の景色が見える。斯う云ふ場合は大抵撮影所のセットで撮影する。列車のセット。回轉バックに景色を描いて、車窓の外で回轉する。汽車――ツルゲネーフの煙、煙、煙。之が肉附けする。だが冷靜に考へて見樣。我々が汽車に乘つて車窓の外を望める。景色が移動する。近景は非常な速度で移動する。然し遠景は左程の變化もないのを知つてゐる筈だ。――回轉バックに斯かる事實が描けるだらうか。此處にトリック撮影の本質的なパラドックスがある。此の欠點は回轉バックの前を急劇に電柱、樹木等をトロッコの上にのせて移動させ、錯覺を起させることに依つて補ふことが出來る。スキーの場面に此のトリックが利用される。滑つて來るロングショット、バスト、移動撮影、――と云ふ場合に白い回轉バックの前で、スキーの出來ない役者がゼスチュアーだけすればよいことになる。然し實際的にはロングショットの雪の白さと白バックの調子とが認識されるものである。其處で廻轉バックの白さは、前のカットとマッチする樣に白く塗らなければいけない。道路上の移動撮影に於ける地面の調子も、同樣の考慮が必要とするものである。然し之等の努力は前記ウイリアムス・プロセスを採用することに依つて完成することが出來るであらう。

レンズを利用したトリック

初め映畫は物象を素直に再現することを目標とした。直線は直線として、平行線は平行線として再現することが専ら考研されたのであるが、繪畫に於ける種々の傾向は、シネアストの感覺を轉換してしまつた。人間の眼を醫學的に分類すると色々ある樣に、鏡玉眼(Lense-eye)も又一樣ではない。或る物は近視眼鏡を、亂視眼鏡を掛けることに依つて正しい眼に補正し得る樣に。そして或る鏡玉眼の場面は目立たなくてはならないことである。

カメラ・アングルの目當て、カメラ・ハイト、カメラ・ポヂションの適切なるコントロール。新しい映畫は之等の三者の相對的のモンタージュに依つてのみ可能である。

最近まで寫眞術に於ては、感光版の對角線の長さより短かい焦點距離のレンズは、絶對に使用してはいけない。誤つた遠近感を齎らすの故を以て、極力夫の使用を排斥したものであつた。

エイゼンシュテインの「舊きものと新らしきもの」に次の樣なシーンがある。農業の機械化に必要なトラクターの購入に反對する農夫。舊い意識に囚はれ農夫は此處ぞとばかり、筋肉の發達した手をカメラの前へつきだして自慢するシーンがある。カメラマン、テイッセは此の場合にワイドアングル・レンズを使用して之を撮影した。

――何と間の抜けた、不均衡な、グロテスクな、嘲笑に價する手であることよ！

焦點距離の短かいレンズ――即ちワイドアングルのレンズは遠近感を誇脹するものである。大工場のシーン、倉庫、夫は左程大きな

工場でなくともかまわない。レンズの撰擇が齎らす奥まりの肉附け、小人數の群集はレンズハイト、カメラアングル、そして廣角度レンズの使用、適切なる群集の配置に依つてイデオロギッシユに其のシーンをモンタージユすることに成功する。

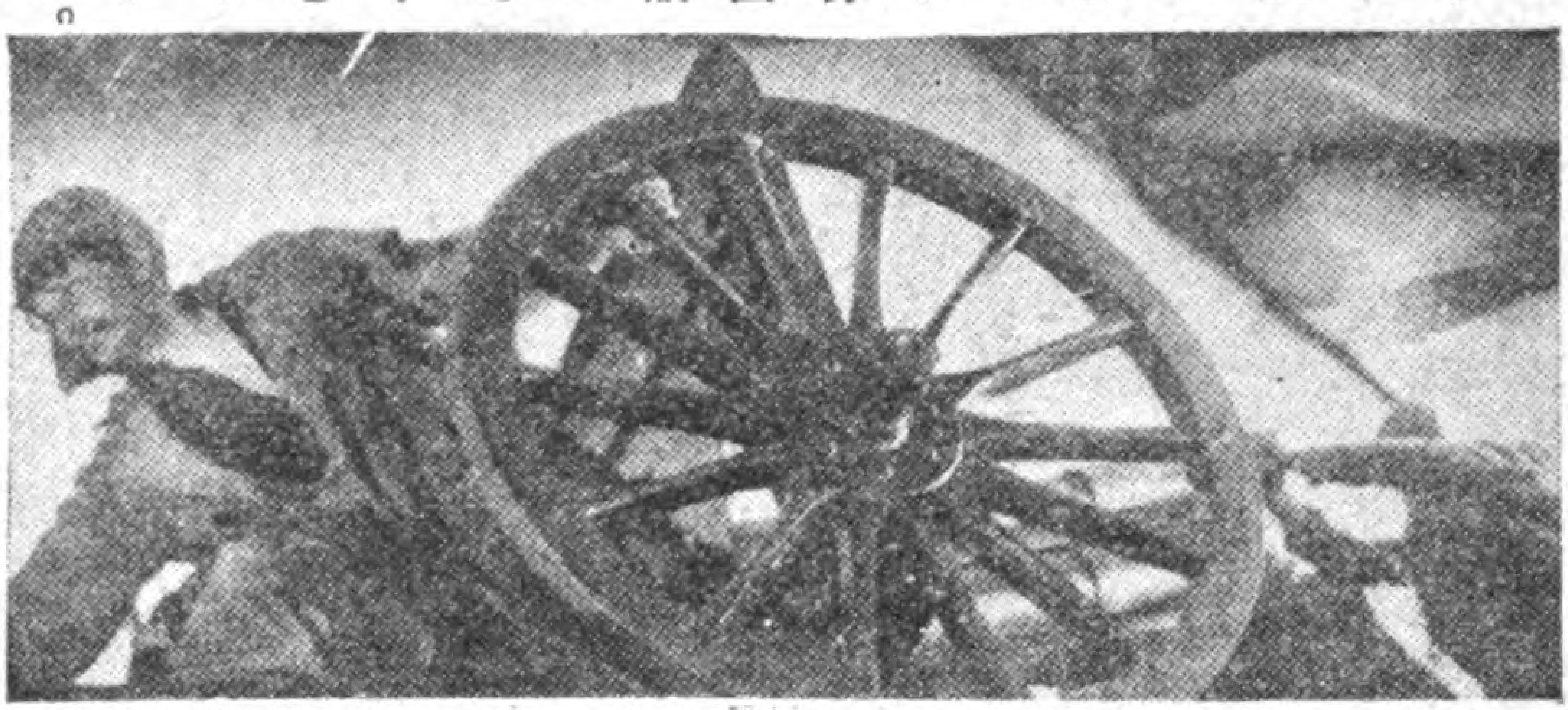
高い崖の上を急ぐ男。——カメラを地面を掘下げてアングルをつけ、廣角度レンズの使用に依つて容易に其のシーンを把握することが出來るであらう。

テイツセは映畫「十月」に於て砲車を引きながら前進するシーンに絶大な效果を齎らした。傾斜する人工的の路。砲車を引つぱり上げる樣にする。路に平行にフイルムの齣を置く。そしてカメラを掘下げて、アングルをつけてある。前へ！　前へ！　のめる樣にして前進する效果を齎らすであらう。

カメラアングル、レンズハイト、カメラポデシヨンを把握せよ！

フイルターの使用及パンクロマチツク・フイルムの利用に依る種々のトリック——例へば夕方街燈のついた場面を赤フイルターを掛けて撮影すると完全に夜景を期待することが出來る等——は既に普遍的の事實となつた。

或は又多面レンズをレンズの前に装置して撮影するならばアメリカ映畫によく表はれるであらう同一物象が圓形に織り重つて見えるシーン、を齎らすことが出來る。



映畫「十月」に於けるテイツセが試みたレンズを利用したトリツク。力強く前進する效果をあげてゐる。

そして若しも多面レンズの中心を平に、周圍を削つたレンズを作り、之を適當に回轉するならば、泥醉した顏がスクリーンの中央に靜止し、其の周圍を同じ顏がデイフオルメートして回轉するシーンを期待出來るであらう。

光學的の種々の工夫こそ將來すべきフイルム、トリックのフイールドである。

フイルム・トリックの將來

ヴエルトフの「映畫眼」の運動は次の如き標語を提供した。

一、人間の眼よりも遙かに完全なる眼、即ち映畫機械（撮影機）の道に映畫眼萬歲！
二、一秒間十六齣の撮影法を追拂へ！
三、研究し、組織立てる眼を讃えよ、映畫眼萬歲！
四、眼に映ぜし事物のみを引寫すな、人間の眼の模寫よりずつと遠くに行け！
五、運動の分解と集中とを讃えよ！
六、運動の直接的撮影萬歲！
七、機械眼の觀察の組織を讃えよ！
八、人間の眼に映る世界に就ての視覺現象と相鬪ひ、自己の『見る』を主張しつゝみる映畫眼萬歲！
九、文學的、演劇的作品の製作を廢止せよ！
一〇、映畫記錄及ラジオ記錄萬歲！

一一、ラヂオ耳は、編輯的『聞く』！（ことであり）映畫眼は編輯的『見る』！（ことである。）

一二、映畫記錄等の新らしき理解を經たる映畫革命萬歳！

之等のモットーはフイルム・トリックの將來を完全に包含する。唯緊要な點は、ヴエルトフの如く機械を弄び、技術を弄ぶことに始終しないことに儘きる。

結　論

以上のフイルム・トリックに對する概念は單に夫に關するかたよつた分野の代表的な紹介である。理論的に餘りにも無價値な思ひ付き——例へば橋のない小川を自轉車に乗つたまゝ走り越すと云ふ場合、其の中乘にピアノの線が最も適してゐると云ふ經驗、目眩ひの感じを主觀的に表現する爲には、ハンドカメラを腹部に當て、身體をふらふらさせることに依つて行ひ、湯のたぎる描寫は、糊を薄くして其を沸騰されることに依つて、雨降りの感じを肉附けする爲に琺瑯引の瓦を作つて使用する等等——こそ效果的なフイルム・トリツクが構成することが出來るのである。要するに日常茶飯事に對する些細な鋭い觀察こそ實質的なフイルム・トリック（トーキーに於ても）を將來するものである。そしてフイルム・トリックが如何樣に素晴らしきものであらうとも、映畫に於ては、單に全體をモンタージユする上の要素としてのみ有意義なのである。フイルム・トリックは、映畫をモンタージユする上に缺く可らざる素材となるものである。最早與へられた紙數も盡きた。又何かの機會にトリックに關して種々の考察、經驗、先輩の體驗、等を述べたいと思つてゐる。

歌舞伎 左翼俳優の 大幹部裁斷錄

小納戸容

美の國、夢の國として、永い々々鎖國太平の狀態を保ち來つた歌舞伎王國にも、新時代意識の潮流は容赦無く押寄せて、忽、覺醒せる若人の改革の叫びとなり、新興演劇への進出の運動となり、一方、所謂、幹部既成大家の深々たる太平の夢の枕邊に突如、耳を貫く警鐘の亂打に、朧眼を睜つて暗雲に振廻す鎮壓の錆刀。今や混沌として其の實狀すら知る術も無い有様とはなつた。

歌舞伎王國裏面生活。又其の内容の如何に複雜にして奇怪極りなき事か。

因習、迷蒙の國。

祕密主義の國。

誤られたる階級主義の國。

此の固く閉されたる鐵扉の内に、今、如何なる狀情の釀されたらんか。巷説は八方に飛んで、三々五々、噂の花に想像の實を結ばせるも、おそらく其の實際を語る者は僅少であらう。

が此處に一ツ、其の實情の程度を知るに、聊か確なりとする材料を捉へ來つて公表しよう。

以下は去る昭和四年三月、俳優協會に依つて設けられた、代表委員諸士が、其の任期の滿了するに及んで、全協會員全般に向つて發せられた聲明書の全文である。

東京俳優協會員の諸兄へ！

東京俳優協會代表委員一同

吾々は、俳優協會幹部諸兄のお考へて、全會員中から代表員として選ばれまして、不肖今日に至つたのでありますが、當二月を以つてその就任期間も終ることになりましたから、この際、責任上その期間中の御報告をして、今後の代表員制度に就いての御參考とし、尙、協會の正しい發展を諸兄に依つて專心に計つていたゞきたいと存じます。

一、代表員の制度に就いて。

俳優協會は、元來上下全般の俳優を通じて、藝術、及び人格の向上、生活の安全を計るのがその目的で、それには協會の活動の根本を四等以上（俳優は一等より八等迄の階級別あり、六等以上より名題級となる。）の最高幹部諸兄におまかせしてあるよりも上中下全ての等級から代表が出て、活動にたづさはつて、「全會員の爲に平等な利益を計る」と云ふのが正しい方法で、この際、代表員を各等から選び出さうとされる協會役員諸兄のお考へは大へん正しい事だと思ひました。

其處で昭和四年三月、全會員投票の結果吾々が皆様から選ばれて此重任をお引受けした譯でした。

二、代表員となつてから今日まで。

イ、協會基金募集園遊會について。

四年四月でした。協會よりのお招きて、吾々は東京會館に蒐り、守田、（守田勘彌

氏）坂東、（坂東彦三郎氏）兩常務理事にお目にかゝり、協會の基金を作る方法について御相談を受けました。

兩常務の報告に依る其の方法は、豐島園に於て協會主催の園遊會を催し會費參圓で全協會員が極力、下級俳優、（七八等級）に至るまで、必ず何枚かの責任切符を協會で決定して賣りさばかせて、その上りを基金にするとのお話しなのです。

吾々は先づ、其前に、協會から代表員としての權限の程度を未だはつきり與へて頂かなかつたので、この催しのお考へに對して、善い惡いを決定する機能が有るものか？　無いものか？　先づその權限の範圍をお聞かせ願ひたい。と申し出ました。

其に對する兩常務のお答へを簡單に云へば、「それはまだ決つてゐないから今返事は出來ない。今日はこの園遊會について參考に代表員の意見を聞くのである」とのことなのでした。

で、吾々は單に園遊會と云ふ形式で金參圓の責任切符を賣るのは社會的にも餘りよくないしそして全會員がたとへ何枚でら、會合的に受持つのは甚だ迷惑な事でもあり、然もその結果が經濟的に成功か、不成功か不明であると、兩常務すらにも其のお說もある事だし、そうして集めた基金が、現在何の爲に費はれるか？　第一その目的もまだ判らないのに、そうした不確實な方法で基金蒐集等、絕對にする必要の無いことを力說しました。

そして其日はお別れしましたが、程たつて、協會側から「この間の問題は延期にいたしました。」との通知がありました。

只此時の會合の代表員と云ふものは、只選ばれて出たと云ふだけで、それ自身は何を決定する所の權力も持たない……そして常務理事お二人にも回答の出來ない樣な、煙の如きものであるといふことが、ハツキリ解つた譯でした。

口、協會費値上げを決定した時。

それから間もなく、常務理事の御通知で帝劇へ集合しました。

其時のお話しに依ると、「協會の維持費が今のまゝでは不足なので仕事に差しつかへて困る」とのことで、その方法に就いての御相談なのです。

で、それでは是迄、七八等級が無會費だつたのでしたが、會員である以上、多少にかゝはらず會費は支拂ふ可きであるといふ事から、七八等級にも會費を負擔させること、六等以上は會費の增額をして頂くことにして計算をとりました。そして會費を確實にして全會員が平等に自分達の協會であると云ふ信念の下に、協會の活動が有益に發展するならば、皆さんも會費增額と其の負擔を御承知下さるであらう。……との理由の下に現在の樣な會費增額案をその場で兩常務（守田氏坂東氏）と決定したのでした。

で七八等の俳優諸兄も一定の會費を納める以上、完全に協會員としての權利を得られた譯です。

只不思議なのは、其席上で決定した增額案中、一等級、（最高幹部）の會費だけが何時の間にか減ぜられてしまつてゐることでした。

ハ、昨年末、減俸案の新聞記事が出た頃から。

吾々は一人として、代表員がどの程度

迄協會の活動に就いての權限を持つてゐるものであるかを知つてゐる者はありませんでした。そんな理由で只譯も無く無爲に過してゐる内に昨年暮、諸兄も御承知の通り各大新聞に堂々と、俳優減俸が來年……即ち本年……實行されると云ふことを發表され、會社側の談話まで加へられてありました。

丁度其頃代表員の忘年會の催しがあつたので一同集つたのですが、期せずして吾々は其の責任觀念から、新聞記事の話が持上り、吾々代表員は全俳優諸兄から選ばれてゐる以上、社會的に堂々と發表された減俸案に對して、只ぼんやりしては居られない、この際協會役員側の意見を伺つて、俳優全體の爲に出來る限り盡さなければならない。

減俸されて困るのは、協會會員の大多數即ち中以下の俳優諸兄で、減俸の影響を感じないのはほんの少數の會員なのです。でこの大多數の人達を減俸から救ふ可き機關の協會ですが、その活動する中心部分がこの減俸に影響のない少數の會員に依つて握られて居る。爲に幾分その方面の察しの少い場合が有ると思うので、先づ三等級以下から出てゐる代表委員に協會の活動方針を決定する權利を認めて頂いて、下級俳優諸兄の意見や要求を協會と云ふ力に依りて守り徹される樣にしなければならない。

で先づ役員諸兄に減俸に就いて相當御考へもあることであらうから、その對策をお聞かせ願ひ同時に代表員に協會の活動方針に對する決定權を與へて頂く事にしやう、と一同相談一決いたしました。

二、會長、(中村歌右衞門氏)を訪問した時。

で先づ委員中の代表として市川猿之助氏が守田常務を訪問して減俸案に對する協會側の内意をお尋ねすると、「それに就いて今會長と守田叁與(阪東三津五郎氏)と相談中であるので、すぐ御返事出來ないが、若し會長が代表委員に面會を求められるなら、代表委員は出席してくれるか」とのことなので、「代表委員は喜んで出席する」と御返事されたのでした。その後十二月もおしつまつた時、會長からのお招きがあつたので、代表委員中から代表數名を選んで會長宅を訪問し、會長、阪東三津五郎氏、守田勘彌氏、小浦主任、の御出席を得て前述の理由を種々お願ひし、質問したのでした。

で會長の御意見は、

「こうした場合、俳優が團結すべきが望ましいのではあるが、今までの經驗からそれは不可能のことゝ思はれる、又今までも何か協會に議事があつて、理事會を開かうと思つても理事が少しも集つて來ない。今度の減俸の新聞記事に就いてもまだ確かな考へは持つて居ないから代表委員の意見を聞きたい。」とのお話しなのです。

吾々代表は前述の樣に決定權を與へて頂きたい理由をお話したのでした。

處が常務守田勘彌氏は吾々の眞意を御諒解下さらなかつたか、只一々まとまらざる御返事のみで長時間のお話しも結局不得要領に終り、吾々も其上論するの點なく、只全般の爲の利益をとお願ひして歸宅するより外はありませんでした。最も他の役員諸兄とも御相談の上御返事下さるとは申されてゐました。

本、再度の協會役員へのお願ひ。

其以後協會からは何等のお話もなく、本年に至つたので、再度熟考の上左の如き書簡を協會役員諸兄宛に發送いたしました。

前略

過日俳優協會代表員數名、會長御宅に参上し、會長、理事殿等御出席の上、協會今後の事業に就き種々御高説を拜聽致しましたが、その後代表者全員茶話會を開催し、再度俳優、上、中、下、全般の將來につき考慮致しました結果、俳優協會の大きな目的の一つは俳優全般の利益をはかると云ふ事にありますが、殊に種々利益をはかつて頂きたい俳優は順次等級の下の者であり、まり數の上から云つても中以下の下級俳優が協會員の大多數を占めて居ります。從つて協會はその目的を達する爲には、出來るだけ下級俳優が意見を述べる事が出來、且つその意見が通り易いやうな仕組にしなければならないと思ひます。代表員に決定權を與へることは、その爲にどうしてもますしなければならないことだと思はれます。

會長並びに協會最高幹部諸兄に、何卒此協會の目的を達する爲の手段を至念お認め願ふやう茶話會は滿場一致で可決致しました。

御多忙中甚だ恐縮でございますが、我々一同の切なる希望をお容れ下さるやうお願ひ願ひ致します。我々一同よろこばしい御返事をお待ちして居ります。

代表員一同

東京俳優協會役員御中

でその御返事はおろか、届いたか、届かないさへ、今日に至りましても是又何の御回答もないのです。

三、結局の所。

晋々は本月を以つて其代表員の期間は終り、この間では前述の通りの仕事をしたのみで、諸兄のお爲になることが出來ず、深く殘念に存じて居ります。

で期間の終りに望んで、以後將來に就いて考へますに、現在までの樣な……其權限さへもあいまいな代表員では、いくら全等級から正しく選ばれて良い仕事をする覺悟でも何も出來ません。こうした代表員制度では無益なものだと思ひます。

協會は皆の爲の協會で、全く、公明正大に物事を處理して行かなければいけません。

公明正大にするには普通選擧法に依りて協會を統一し活動すべきです。

俳優の位置や、藝術の價値と協會の活動とは全く別のものであるとに目醒められて、速に普選を實行して協會改善が行はれ、より以上に俳優全般の藝術、及び人格の向上、生活の安定を計る協會である樣、諸兄の力で結束して現協會に迫られる事を、終りに望んで代表員一同深くお願ひする次第であります。

昭和五年二月五日

東京俳優協會代表員（當選順）

三等級　市川猿之助
　　　　大谷友右衛門
四等級　市川三升
　　　　市川壽美藏
　　　　坂東秀調
五等級　市川八百藏

市川男女蔵
市川團右衛門
尾上菊三郎
助高屋高助
市川小太夫
（故人）市川荒次郎
尾上菊右衛門
河原崎長十郎

六等級
市川左升
市川紅君
中村翫右衛門

七八等級　（八名略）

以上、全文を通して其の文體の稚々たる處、一般下級部員に向つて呼掛けたる所以を見らるべきであらう。又上に向つて云ふに宛ら封建時代の君主に向つて寵臣のそれの如く、如何に所謂歌舞伎王國の階級制度の峻然たるかを窺ひ知るに充分であらう。

又既に一般周知の優志會なる革正運動團體の内に右に列記されたる代表員の全てが含まれたるを見れば、優志會は即ち聲明書中の茶話會より進展したるものである事も明かであらう、下級俳優より成る共和會も其影響に依つて組織されたとするも又然りであらう。が前にも云ふ如く、俳優其れ自身

汝眞理を知る勿れ。
汝眞實を云ふ勿れ。
汝反抗する勿れ。

と教育され、矛盾を喰らひ、腐敗の空氣を肺臓に充満させて生長し來つた彼等である。聲明書中の連名の内にも、確實に覺醒せる進歩的分子も在らう。幹部と稱する特權を目の前にして稍もすれば妥協せんとする退歩的分子も在らう。無論御交際的のマンネリズムも在らう。が眞理は總て全てを清算し、正しく突進する者の勝利となるであらう事は今更喋々する必要を認め無い。

が一方又、頗る奇怪と見るべきは、大幹部俳優より成る協會役員連の態度である。一方の示威的聲明に對して答辯の一句も發つしたる氣色も無い。何等の理論も持たず、從に自己の缺陷を覆はんが爲に、盲目押しの壓迫を敢てしつゝあるとすれば、鼠巣を除かんとして自家を燒くの愚を行ふに等しいものである。輿論は既に、「歌舞伎王國の階級闘争。」「歌舞伎の崩壞か。」等と稱して、囂々たるものがある。現在社會の階級闘争と歌舞伎演劇との結合論説は、專門識者に讓るとして、私は敢て絶叫する。

覺醒せよ！　歌舞伎王國。眞理の爲に革正せよ！　歌舞伎演劇に生命を託する老若の全員よ。然して歌舞伎演劇を、産み養育し來つた民衆の手に返せ…。（五、三、八）

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルデング五九〇區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五三三五番

◇代理部への御注文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。

◇御注文の際は郵税をお忘れなく為替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。

◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他に一切お受け致しません。

古書売買のお取次

主として絶版作家の絶版書又は新刊の御便宜を計る目的で代理部の中に古書部を特設してありますから、どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。

古今御購入のお求めにはもとより、御売却希望の古本古文書、お手許の御所有不用品の御処分、貴重品の御鑑定の御依頼にも応じ致します。

お問合せだけで御返事を致しかねる様なもののならば、一度御送本下されば早速市内一流の専門家に依託して正確な御返事を申上ます。

規定

A、御紹介には往復葉書又は返信料を添附して下さい。

B、御注文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。

C、売品は前金御送金・到着次第と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後御送金までの間に売品の移動があつた時には、再び探し出す為に相当の時日を要する場合があります。従つて價格にも時には變動する場合が生ずることもありますから豫め御承知を願ひます。

D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、保存の程度等詳細にお書き添へを願ひます。但古文書、古書籍等の如きは、現品を拝見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は貴方より申受けます。

E、御紹介の宛名は、「中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。



◇從來の極端な流行から脫して、一番紳士的な、而も明るい感じの洋服を左の廉價で調製致します。

◇先づ生地見本を請求して、代理部考案の用紙に寸法を書入れて送れば、思ひ通りの型思ふ通りの寸法の服が、座りながらに得られる譯です。

◇お持合せの服をお送りになれば、その通りの大きさの服も作ります。

◇特に裁縫の入念と、品質の確實な事は、代理部で責任を持つもの丈に、必ず御滿足を得られます。

◇見本ノ請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添付ノ事。

洋服註文は代理部へ



【春着】

背廣服	F	三十八圓
	G	四十五圓
	H	五十五圓
オーバ	I	六十圓
	J	七十圓

◇洋服の生地見本は、御承知の通り種類が多く全部取揃へる事は、經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ずお希望の品例へば「Aノ背廣」「Bノオーバ」と云ふ風にお指定の上お年齢をお申聞け願ひます。

◇代理部では御指定の種類のお年齢向なものを見立てゝ、明確な圖入りの寸法書をお送りしますから、これに各部分のお寸法を記載してお送り下されば、約二週間で居ながらにしてシックリと體に合つた洋服がお手に入る譯でございます。

中央公論社代理部

振替東京七八四七五番

アテナ萬年筆

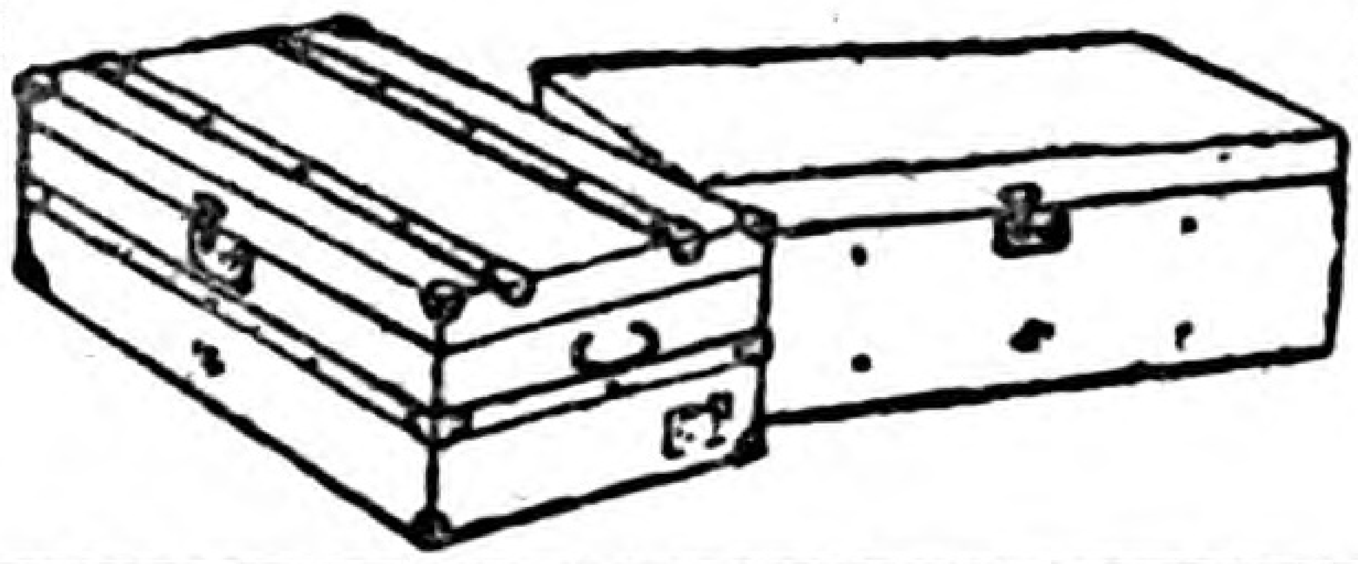
使ひ出せば、間もなく執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に勝る國產第一の優秀品です。

定價 三圓五十錢 四圓 四圓五十錢
(回轉吸入式) 三圓五十錢
送料 內地 十二錢 領土 四十五錢

昭和文庫

厚い鋼鐵板張りの外面には漆の高溫燒付けを施し、防蟲防濕の工夫をした堅牢な容器で縱二尺四寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分、內壁は木板で圍み、ナフタリン樟腦入れまで設備してあります。

毛織物類入れに貴重書畫入れに、上製はトランクとしてそのまゝ發送する事が出來、非常用としても簞笥や支那鞄より遙かに便利です。



定價 上製 九圓八十錢
並製 六圓八十錢
送料 東京市內配達料二十錢
地方荷造費二十錢運賃先拂

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した綾紙製品で而も洗濯が出來布よりも丈夫です。

改正定價 大 一圓 小 六十錢
送料內地 十二錢 領土 四十五錢

にきびとり美容水

脂肪が多くて年中吹出ものが額に出て困る人におすゝめ致します。先づ常に皮膚を清潔に保つ事に留意して、その上にこれを用ゆれば效果は一層あがります。

定價 一圓五十錢 送料 內地十二錢 領土四十五錢

新發明の產兒調節器

獨逸製オクルサトールは、海綿樣纖維質の部分と絕對に水液の滲過を妨げるゴム障壁と把柄からなる新發明の產兒調節器です。

本器は永久的の使用に堪え眼覺めたる新しき家庭の實際問題の上に輝く大いなる光明であるとまで、多大の賞讚を受けてをります。

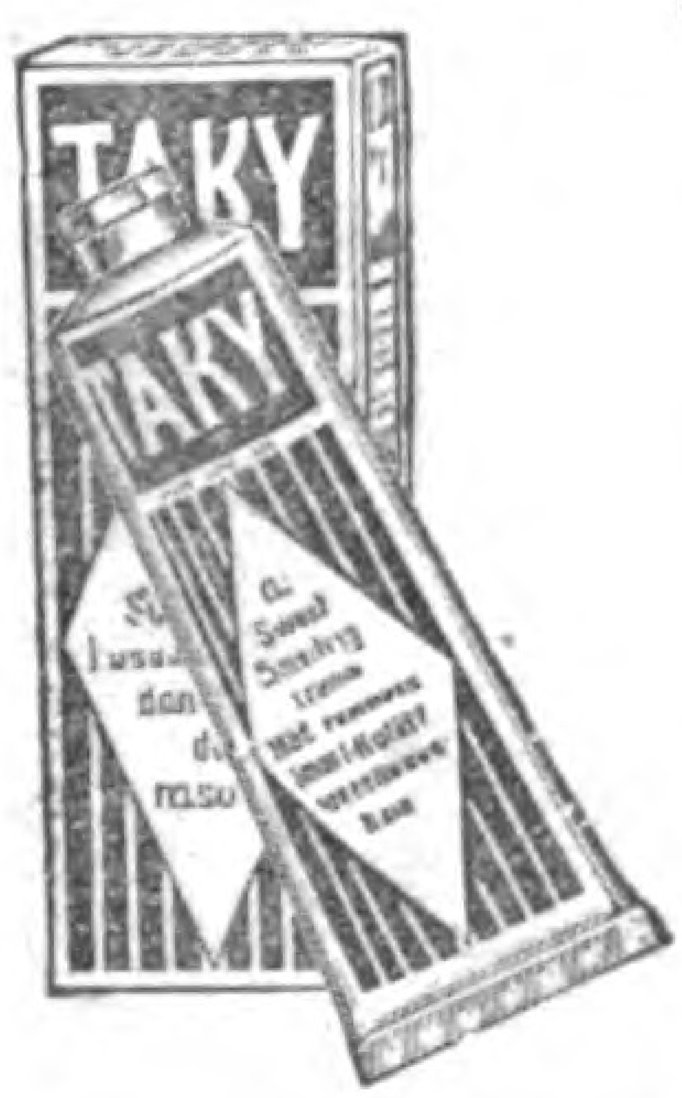
一回經產婦までは ○番
三回經產婦までは 一番
四回以上の方は、 二番を使用

定價(錠劑十二錠附) 六圓 錠劑のみ十二錠 二圓
送料 內地 十二錢 領土 四十五錢

タキー

タキーは、手足、腋の下、襟、髭等任意の所に塗つて、三分乃至十分後に水で洗へば、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり除毛する事が出來、ながく繰返へして使用する間に次第に毛が發生しなくなり、腋臭を除く效果もあります。

用法は至極簡單で、添附の說明書に反した使用法をせざる限り、全く無害で效果は一層確實です。



定價 (マムクリーム付) 二圓二十錢
送料 內地 十二錢 領土 四十五錢

浩壯

(無臭ニンニク錠)

ニンニクの效力は世人のよく知る所、然し臭氣は十人が九人まで嫌やがる。

效力は認めるが服むのは嫌や、服み度が服めないと云ふ人は此のニンニク錠をおすゝめします。本劑は服後口中に臭氣を殘さない事が特長です。

肺結核、肋膜炎、氣管枝カタル、胃腸弱、神經衰弱、貧血症及蛔蟲條蟲の驅除等には驚く程の效果があります。

藥價 十日分二圓 三十五日分五圓
送料 內地 十八錢 領土 四十五錢

オプチサナ

獨逸藥品の偉力は世評の認める所、特にこのオプチサナはセキを止めるに著しく效果があります。甘くておいしく、百日せきの子供も喜んで服用致します。

御醫家の十個以上纏つた御注文には多少の割引をいたします。

定價 二圓
送料 內地十二錢 領土四十五錢

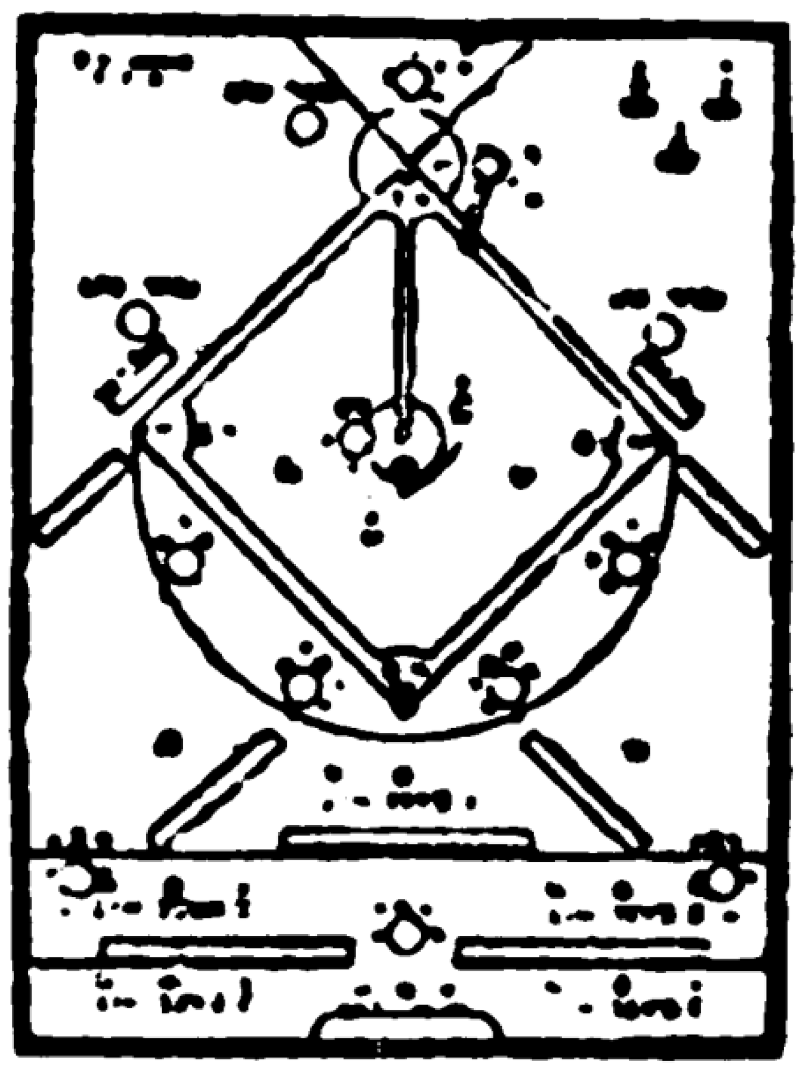
草津溫泉の精

本劑約二〇乃至五〇瓦は居ながらに約一石の新鮮な溫泉となり、常用者は皮膚が美しくなり、色を白くします。



定價 小瓶 一圓 大瓶 二圓
特大瓶(一〇〇回用)六圓
送料 內地二十七錢 領土五十五錢

誰にも愉快な
野球競技盤



盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、球にあてた指の力一つに、直球、曲球、緩球、剛球を自由自在に出す投手と選手がボックスに立つた気持ちで立向ふ打手との興味方緊張した気分は、この野球競技盤ならでは、味はへぬ所です。

選手はもとより、春のシーズンを目前にして野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戯として、一般の家庭におすゝめ致します。

定價　小型一圓三十錢大型三圓八十錢
送料　内地小型は十二錢　中型は二十七錢　領土小型は四十五錢　中型は五十錢

最新艶出布

このフレッシユマン、ダスト、アブソーバーは、特殊の毛織物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、織物固有の染色を損ずる事は決してありません。

この布は、從來の艶ふきんと異り、埃りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

家具類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、帽子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードを、この布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價（金屬製容器入）　一圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

スマドレ
ヘヤトニック

このスマドレヘヤトニックは、米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ商社の製品でニューヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髪後や朝夕に數滴を毛髪の根元に振りかけて、指頭で軽くマッサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙で、あとには得もいはれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髪は絹の様に軟くなり、日々漆黒の美を增します。

定價　婦人用　紳士用　特大瓶各二圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

スマドレ
シャンプー

理想的洗髪液スマドレ、シャンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな潤のある美しい髪にする一方、たゞれ毛や頭垢を落す事は全く不思議な程で、スマドレヘヤトニックと共に、ニューヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界的名品です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髪を整へる事が、重要な時間の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、然もさつぱりとした髪で、自他共に氣持ち良く會談する事をおすゝめ致します。

定　價　特大瓶　二圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

梅と鈴蘭の香水

本社代理部特製の四季の香水の中、春の梅と夏の鈴蘭の二種は、如何にも香りのすがすがとした紳士用には最もふさはしいものです。

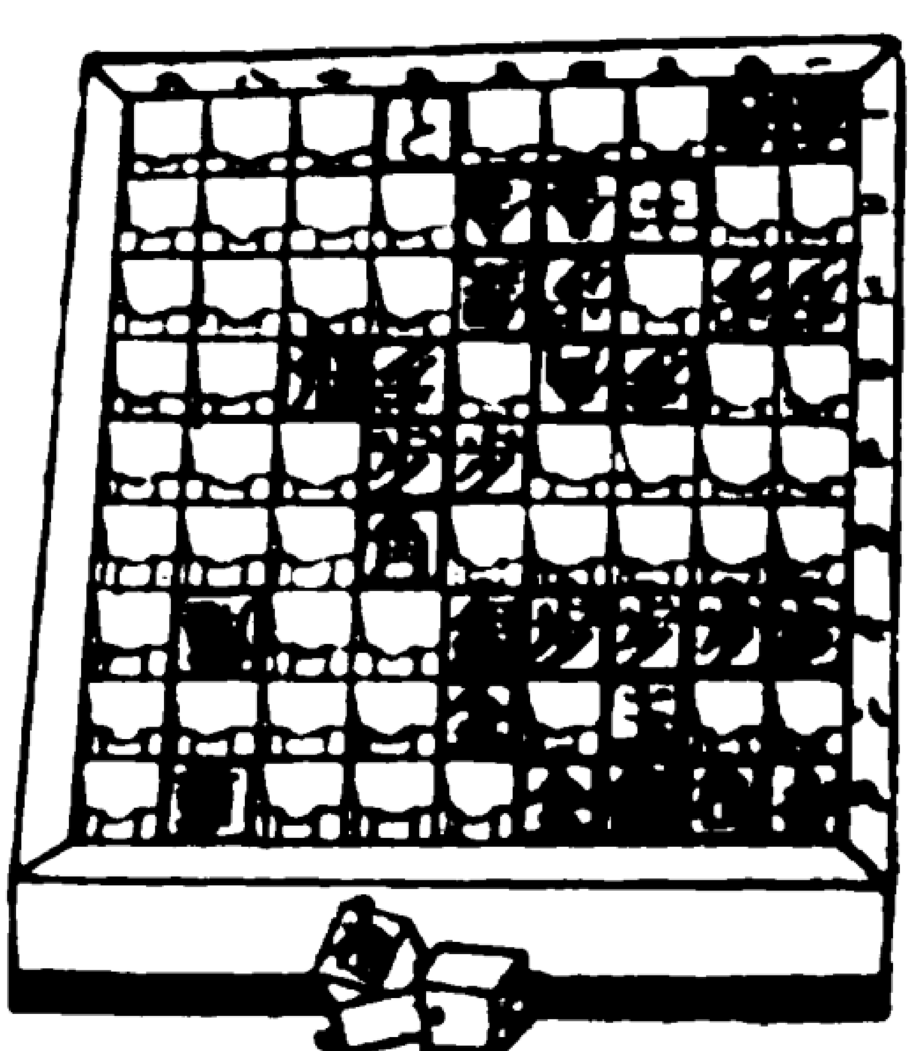
此の外に秋のヘリオトロープ冬のシクラメンを加へて四季何れも外に用意してありますから、お好みのまゝにお注文下さい。

定價（春、夏、秋、冬）各　二圓
（四季組合せ、又ハ四個）七圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

最小型將棊盤

縦三寸七分横三寸二分厚さ五分の最小型將棊盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重く感じる事なく、時には一個一錢器計が附けてある等、婦女子の眼にも可愛らしいのも程のです。



駒には片假名文字を用ひ、盤には縦横に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。

其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或ひは床上りの寢ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、愛棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定　價（附屬品附）　一圓八十錢
送料　東京市内十二錢、内地十八錢
領土　四十五錢

御注意

◇御送金には振替の御利用が一番安全ですが、地方により普通便より四日乃至十日間以上遲れますから、御注文はそれ丈一層お早くお出し下さい。

◇爲替での御送金は、必ず書留郵便に願ひます。

中央公論社代理部

白刃をくぐる總選擧

淺原健三

反動の嵐は猛る。指導者の頭上に、闘士に、工場、農村オルガナイザーに、狂暴金融ブルジョアジーの血に餓えた劍が襲ひかゝる。

日本の金融資本家の、プロレタリアートへの積極的××は、金解禁を契機として、今や其の頂點にある。濱口民政黨内閣の欺瞞的寛手に依つて、金解禁の結果として必然に招來するであらうところの彼等の損失を、巧妙、無疵に、プロレタリアートの、さらでだに惱める生產と消費の過程に轉化せしむる爲めの、普選第二回の彼等が總選擧こそ、正に、反動強化の典型的表現であらねばならぬ。

彼等は、總選擧直前「選擧革正」と「言論自由」を高唱した。毒素を包む、オブラートとして。

「勞働立法」と「社會政策」の實行を聲明した。友呼ぶ、籠の誘ひ鳥として。

然し、其の正體を覆ひかくすには、餘りに彼等自體の行詰りが切迫しすぎてゐる。

果然！ 總選擧の終頃、彼等は勇敢に、ヴエールを吹き飛ばしてしまつた。二月十四五日頃より、恐らく全國に、系統的に行はれたであらう處の、陰險無比なる、民政黨の所謂「選擧戰術」なるものがそれである。我々は今、此の正體を白日の下に暴露して、闘爭の解剖刀を振ふべきである事を信じて、其の縮圖たり得ると確信する福岡縣第二區の闘爭日記を擴げんとするものである。

福岡縣第二區は、北九州海岸と筑豐の核心を縦に貫く、八幡、戸畑、若松、遠賀、鞍手、嘉穗の三市三郡で構成される。そこには、日本の金融ブルジョア、產業資本家の殆んど總てが、其の高下こそあれ、網羅し盡されてゐる。東京が政治的心臓であつたに、大阪に、財界の胃袋であり、北九州は、日本資本主義の喉笛であらねばならぬ。我々の階級運動は、北九州の彼等が堅壘を衝き破ることによつて最後の勝利を基礎づけるものである。茲に於てか、必然に、ブルジョア軍は、此の城塞を死守することに、全勢力を傾け盡くす。過去十幾年の北九州無產運動が、白色テロの狂舞橫行と、解放戰士の血に彩られた苦闘史であることが、明確にこれを證據づけてゐる。ブルジョア組織の防波堤たる既成有產政黨が、此の地理的使命に狂奔するであらうことは、因より說明を俟たない所である。

有產政黨の地方指導部と、資本家の地方責任者とは、この地に於て、實に完全に、結合連繫されてゐる。其の政治的利益と產業搾取は鎖帷子の如く相交錯し、銑鐵の如く打ち固められてゐる。我々の、工場、鑛山、農村、街頭に於ける日常闘爭に對する彼等資本家、有產政黨の對抗策戰は、實に驚嘆すべき、敏速と連絡によつて、時に露骨に、或は陰險に展開されて行く。故に我等の選擧闘爭は、大衆の投票動員と、ストライキ前衛戰の結合である。この一致は全國中北九州を以つて、其の

範なりと云つても誤りないものと信じる。茲に我等の闘爭意識が燃えあがり、未組織大衆の階級的熱意が昂揚されてゆく。

過去五ヶ年、我等の縣、市、町、村議員選擧の闘爭ページは、彼等の陰性比類なき流言、中傷、切り崩し、買收の連續であり、其の政見發表演說會は、常に有產政黨常傭の職業政治ゴロ、炭坑資本家特有の用心棒、前科何犯の「人事係」等々の斷え間なき、彌次、妨害、毆り込みの累積であた。

或時は棍棒の雨、匕首のヒラメキ、又或時は二尺四五寸の日本刀の光り。五回、十回、焦燥し切つた彼等の叛亂裡に、我等の選擧戰野が展開されて行く時、大衆は、何時とはなく、深刻悲壯なる階級的殺氣を養ひ育てゝ往く。

果然、今次の選擧戰も、過去の忠實なる繼承であつた。

我々の策戰の一切は、此の見透しの上に打建てられた。彼等が、公認爭奪に血眼になつてゐる内、妨害手段を決定しない内、動員餘裕の無い内に、敵の虛隙を衝いて、一擧、電要地帶のみの躍進を試みた。八幡、戸畑、若松、直方、飯塚と工場、鑛山の中心地を、矢繼早やに征服して行く。五日、一週日。高原を這ふ初夏の朝風のやうに、全戰線を風靡して行つた。此の第一期戰を終へるや、直ちに第二戰列を布いて、最も強力に、ブチ壞すであらうと豫想せられる危險區域のみに、戰を縮めながら集中する。二十三日立候補以來、二月八日迄、十五日間、我々は全選擧區を馳け廻つてしまつたのだ。

此の時、漸やく、政、民の候補者は出揃つた。民政三名、政友二名、無產二名、計七名の候補者が、五名の定員を闘ひ奪らんとするのである。

我々が正面の敵は、云はずとも民政黨である。彼等は今、權力の把持者である。無產運動は常に、此の權力と抗爭して行くものである。更に又、其の地方情勢は、工場、鑛山の勞働者を最も多く抱擁する土地として、民政黨の自由主義的假面の欺瞞、誘拐より、勞働階級を防衛することは、當然我々の最大なる任務であるからである。

政友會は二名を立てた。昭和三年の第一次普選には、三名を立候補せしめて、三萬二千票を買占め乍ら、僅かに一名の當選を見たのみであつた。此度は二名だ。大事をとつて百パーセントの當選を覘つてゐる。

更に社民の龜井貫一郎君は、前年の選擧目標を完全に整理して、全區に亘つて、小市民と、農民にのみ積極的に働きかけて行つた。私は、龜井君の演說プランや、運動員、事務所、ビラ、ポスター、立看板の配置を、精密に調査して、この結論を握つた。龜井君は、市民層を狙つてゐる。未組織中農の散票を掻き集めんとするのだ。此際だ。社會民主々義の模型、社會民衆黨と、階級的政黨との、闘爭目標を、先づハツキリと區別する絕好機である。

我々は、小市民層を、勇敢に捨てた。未組織農民への努力も亦、放棄して仕舞つた。小市民を無用とするのではない。因より農民を無視したのではない。北九州の如き勞働者の密集地に於ては、選擧戰に非らざれば、容易に喰ひ込み得ざる工場、鑛山地帶に全力を注ぎ、其の勞働層の百二十パーセントの進出であらねばならぬ。小市民、農民への働きかけは平時に此れを爲す事が出來る。闘爭の歷史的中心層たる勞働階級に、全馬力を擧げやう。餘力があるならば小市民に、農村に行かう。我々は最後まで、此の目標をハツキリと實行して行つた。四十二ヶ町村の內、我々の

全然、一歩も踏み込まず、ビラ、ポスターの一片さへ撒かなかつた町村は十五ヶ町村の多きにのぼつてゐる事は、我々の戰鬪的プロレタリアートへの集中戰術を明瞭に指示する。

七名、鎬を削つて、二月二十二日、二名は確に落ちるのだ。それは誰れか。民政か、政友か、無産か。

民政黨の皮算用のみの推定を記するならば、彼等は、野黨の時でさへも、二名を當選させてゐる。我黨内閣の下、六ヶ月間の水も洩らさぬ準備を經た今日、三名の必勝を期することは、强ち、自惚れのみとも思へない。では、何人を落すか？ 政友が二名の大丈夫を豫する時、二名、タタキ落すことを望むのは、無暴であることは、如何に我黨天下の下でも、容易に測り知られる結果である。然らば、政友一名だ、殘る一名は、卽ち無産黨に求めなければならない。社民と大衆の内、何れか一人……。

北九州の社會民衆黨の母體は、官業勞働總同盟だ。それは八幡市を中心根據とする協調主義に立脚した溫順羊の如き團體である。大正九年製鐵所ストライキ以來、其の罷業破りを目的としてデッチあげられた、名實倶に完璧無比なる官許御用組合である。

大衆黨は、製鐵所罷工の主體であつた勞友會の主流をくみ、九州J・C・Pの中核たる九州鐵工組合を過程し、九州鑛山運動の血に彩られて十數年、不斷の鬪爭を續けて來た九州資本閥の爲のバチルスである。彼民政黨、兩者の何れを選んで、押し潰すべきか。問はずして明かである。

大衆黨押しつぶすべし。淺原タタキ落すべしだ。

民政黨の方略は決定した。然も此の時、大衆黨の威勢は破竹の如く、全區を席捲しつゝある。彼等は焦せり出した。出し拔かれた自己の狂燥に轉つて妨害軍の總動員が計畫される。

二月十一日、砲門は開かれた。硝煙なまぐさく全線を覆ひ盡さんとするスタートだ。

揚所は筑豐四郡の炭坑地中、第一位に在る嘉穗郡の中心、穗波村、私の出生地であり、住友忠隈炭坑、三菱飯塚坑、二坑合して二萬數千の坑夫を有する日本第一と云はれる巨村の小學校。

四教室をブチ拔いて廊下まで一杯、屋内千二百。屋外の薄闇に立つ群集約一千。開會の一聲から坑夫の歡聲は上つて行つた。

が二三人目の辯士から、僅ならぬ氣配が漂ひ始めた。罵擾とも、妨害とも、單純には判別し兼ねる聲が、隅々から戰術的に擧げられて來る。同志の神經はピリッとヒラメいた。來たなッ。此の直感は電光の樣に全同志の腦髓を走る。「散るな」「離れるな」「演壇を固めよ！」「かけ持ちして來る候補者の道を守れ」無言の裡、戰陣は一瞬にして布かれた。

脊野、三浦と辯士のプログラムは進む、妨害者の正體は此の邊りから鮮明に露出されて來た。其の數凡そ百名。角々に二十五名宛一團となつて、四五組に蟠居してゐる。私は三浦君の演說中、同志十數名に護られて會場に這入つた。

妨害彌次は盛んに吼え立てゝ居る。筋も根據もあつたものではない。只出まかせの罵倒である。臨監は……と見れば、何處を風が吹くかと云ふ顏付きである。辯士三浦愛二は、剽悍そのものの眼で、口で、彌次の餘波に挑戰し、ハネ返へし、眞赤になつて叱鳴つてゐる。彼は最後まで鬪ひ拔いた。

私は演壇に立つた。彌次群は、何故か、一聲も發しない。林のやうな沈默だ。

二言、三言、口を開くと突如、演壇の眞下

にゐた朝鮮人十四五名が立ち上つた。そして口々に「カチヤカチヤ」(歸らう)を連呼して、ゾロゾロと聽衆の眞中を分けて出て行く。それがすむと又十四五名。百名ばかりの鮮人諸君である。私は無言で、會場の前列を見廻した。百名ばかりの鮮人諸君である。それが次から次へと十分餘、執拗にこの退席戰術が、續けられる。初めから計劃された、哀れな戰術だ。然も此の會場の空氣攪亂手段は、爾後幾度も繰り返へされた。

××××を利用し、欺瞞し、籠絡して、無産運動に抗爭せんとするブルジョアの陋劣さは堪らなく憎い。

聽衆は、靜かに笑つてゐた。其の手は餘りにも古く、淺薄だ、と云はぬばかりに。私は一段落着いたとして、演說すべく身構えた。其の時、火蓋は切られた。

最後列の一團廿名ばかりは、何かグズグズ私語し始めた、と見る裡、聲は急に大きくなつた。「何んだ」「此野郞」と絕叫されるとポカポカと擲り合ひが始まつた。

上着を脫ぎ捨てゝ、シヤツ一枚。勇敢に組んづ、倒れつの亂鬪だ。其の渦は七八名。聽衆は動搖した。中腰になつた。其時だ。坑夫諸君の目に、昨年冬の、坑山地帶全部八ヶ所大衆黨演說會連續解散の姿が、マザマザと思ひ出されて來た。

「手だ」「八百長だ」立つなッ●一人も立つな●立てば解散だ。其の爲の八百長喧嘩だ。ヤラセて置け。勝手に彼等を毆り合はせて置け●聽衆は口々に警しめ合ふ。

何と云ふ訓練された聽衆であらう。一人も立たず、一人も相手にせず、只冷やかに、暴行者の痛ましい狂態を見物してゐる。

幾十回の體驗が、この統制を鬪ひ獲らしめたのである。餘りにも冷靜な聽衆の態度に、妨害軍も策の施しやうがなく見えた。が彼等は機敏にも、第二案に突進した。八百長喧嘩はたちまち三十名許りに擴大し、更に隅から、場の中央へと押し出して來た。聽衆の頭を踏み、腰を蹴飛ばすべく、芝居の舞臺を擴めて來た。然し聽衆は、依然として我關せずの態度を崩さない。彼等が進めば避けて退き遂に眞中に土俵のやうに、空所を造つて、彼等の活躍?　を自由にさへさせた。正に萬策盡きたといふ可きであらう。彼等の面上に、狂暴の氣が走る。五六名の者は、何處から持つて來たか、兒童用の腰掛け七八つを、狂人の如くわめき乍ら、聽衆の頭上に、盲滅法に投げつけ始めた。萬事休す。全員ソアッと總立ち、雪崩を打つて場外に飛び出した。其時始めて臨監君は起つて「解散」

何んと鮮やかなる「言論の自由」ではある。

同志は緊張した。來るぞッ。敵の策戰が、全選擧區に張られてゐる事は明かだ。警備隊を强力に擴大せよ。全員は眞赤な灼熱の固りとなれ。如何なる妨害にも屈するな。暴行、威赫をケ飛ばせ。鬪爭の果に勝利は在る。同志の意氣は昂り、各事務所は其の對策協議に忙殺される。

越えて十二月夜、遠賀郡香月村と木屋之瀬町との二ヶ所。私は同志三名と共に、午後七時木屋ノ瀬町八千代座に這入つた。例の如くスシ詰の滿員だ。然し、何となく殺氣を埋藏してゐる。此所もヤルな。と直感しながら、香月村、池田小學校の登壇が先きだと云ふので、木屋ノ瀬を出發。

池田校迄、約二十町、私達四名を乘せた自動車は闇の街道を走つた。「鎔鑛爐の火は消えたり」に書いた大辻炭坑襲擊に步いた道を…。

木屋ノ瀬鐵道の踏切りを越えて兩側は、松の林に閉ざされて居る。其の央頃、一臺の幌自

動車が、幅員四間の道路に、ナナメに通行を阻んで止つてゐる。

　車中は固より一杯、兩側のステツプに、七八名、手に揃ひの木劍を携げてゐる。兇漢の車は餘儀なく止つた。「淺原先生」二三名のゴロツキ共は、窓近く迫つて來た。何が先生面だ。ハイと返事でもしたらイキナリ引き出されて袋叩きと云ふ寸法である。懷中電燈で車内を探る。我々は急病人と答へてスリ拔けた。三四丁走ると又一臺、二臺、三臺、前後四臺、最後にトラツクに二十名餘、總立ちで飛ばせて行く。歡聲を擧げないばかりに、勝利者的態度で、「池田校はブチ壞されたんだ」と誰かゞ私語く、「餘勢を八千代座に乘り込むんだ」と答へる。此の推測は當つた。池田校の二三町手前で、引き揚げて來る三十名餘の同志に會つた。見事にやられたと齒噛みする。奴等は百數十名だ。こちらは、最初數名に過ぎなかつた。辯士が揃はないので、開會時間が十數分遲れた。好機逸すべからず、と彼等は演壇に殺倒した。スローガンを破る、机、椅を毀す。壇上には本田楠男君が立つてゐる。七八名が本田君に組み付いた。木劍が文庫の蓋が飛ぶ。指揮者らしい一人は、演壇の横に棒立ちになつて、懷から匕首を出して、拔いたり差したりして見せる。遂には臨監席の机に飛上つて「解散」「解散」と叫び出した。警官諸公は總數六七名、手の出しやうもない。床の間の鎧武者の如く、儼めしいけれども、聲も無い。聽衆の二人は木劍の雨下に、重傷を受けたといふ。本田君も又、治療十日の傷を負つた。

　我々は八千代座に引き返へす可く、車の方向を換へた。其時、二人の無頼漢らしい者を乘せた自動車が木屋ノ瀨方面から飛ばして來て我々の自動車に沿つて一廻り、徐々に歸り始めた。道に伏兵在り。私の自動車のステツプにも兩側に二人宛立つた。中には六人乘り込んだ。周圍は、二十數名、總勢三十數人、我等にも各自、棍棒一本が用意されてゐる。自動車は靜かにスベり出した。行くこと數町例の松林に懸つた。案の定、自動車三臺は闇の路傍に音もなく横へられてゐる。敵は四十名餘、聲を呑んで身構へてゐるのだ。

　瞬間。睨合ひの時が過ぎた。彼等の自動車は靜かに動き出した。空車の儘で、紐を通した揃の木劍を握つた無頼漢四十名餘が、車の背後を、雜談もせずに從つて行く我々も三十名餘、手に棍棒を握りしめて、彼等の後を追ふ。

　五分、十分、沈默の對抗は、木屋ノ瀨の町近く迄押して行かれた。と彼等は、八千代座の四五町前、木屋ノ瀨町の入口で、ピタリと止つて仕舞つた。が我々は歩行を停めなかつた。グツト押し進んだ。彼等の自動車は何事もなく片隅によせられる。彼等も又、兩側にサツト別れて立つた。同志三十名は、其の中央を靜かに突き拔ける。息詰るやうな數秒間！　我々が突き拔けると彼等の群は、今度は背後から迫つて來る。八千代座の數十間近くまで進んだ時、街路一杯にザアツと押し出された千數百の聽衆。解散した、一歩の差で八千代座も見事に叩き潰されてゐる。池田校の數十名と八千代座に先入してゐた一團とは合して目茶苦茶に暴れ廻つたらしい。四十間兩側の腰高障子二十數枚は、剩なき迄に打ち碎かれた。

　我々は揉み打ちだ。八千代座から出た一群と、背後の四十名餘、我々は睨み合つた儘對峙してゐる。聽衆は默然として、緊張し切つた街上を見守つてゐる。數分が經過した。數名の同志は、場内に在る同志の身を氣遣つて聽衆の波を押し分け、樂屋に這入つた。殴られた者は、二三あつたが負傷は無いと報告。

最早や會場に入る必要はない。一氣に八幡に歸る可く自動車はヘッドライトを點じた。ステップには鈴なりに十名餘が立ち並ぶ。自動車は、一間、二間、停まりつゝ、動きつゝ進む。反動の群は、無言で途を展いた。聽衆は息を呑んで兩側に避ける。數十間、聽衆の波を突き切ると、ステップの同志は飛び降りた。時速四五十哩、疾風のやうに八幡に歸つた。

我等の選擧運動は、暴力鬪爭と化した。奴等をノサバラせるな。一度、徹底的に毆り倒せ。と憤慨する若い同志もあつた。然し、手を出したが最後、敵は多數だ。犧牲者は數十人を覺悟しなければならぬ。選擧運動は、それで事實上中絶するのである。忍耐せよ。忍べるだけ忍べ。同志の身を護る爲めには、積極的に鬪へ、然し、彼等の挑戰には風馬牛の態度を續けよ！　選擧長、堂本爲廣、福聯委員長古市春彦の兩君は、猛り立つ同志の激憤を制して行つた。

類似の暴行破壞は、遠賀郡の中間に、嘉穗郡の飯塚、桂川、鯰田、稻築に續けられた。

我々は、百パーセントの選擧鬪爭能率を、全部擧げて、此の暴力者と鬪ひ續けなければならなかつた。然も、八千代座の解散以來、辯士隊、警備隊に對する身體檢査は嚴重を極め、同志二名は匕首携帶の現行犯だといふので高手小手に縛られて飯塚の町を引廻はされた。「淺原は拳銃を持つてゐるといふ密告がある故、淺原を擧げてやる」と候補者の私は帽子まで脫がされる。先方は默認、危險だから此方が持てば匕首携帶、罰金五十圓宛也。

彼等の××は、我々の受難は、一手法ではない。千姿萬態、巧緻老獪を極めたものである。

同志は、會場で、反動に毆られ唇を嚙んで事務所に歸れば、警察から一寸來いだ。ポスターを承諾なくして吊したから一寸來い。立看板を默つて立てたから來い。演說で警察の惡口を言つたから引張る。事務所の看板が二階にかけて在るのは、地上九尺以上だから選擧違反だ、事務所主任を召喚せよ。黨員は機械的人夫と認めず、そこで人夫たる同志は片端から留置場にブチ込まれた。一年前恐喝の嫌疑あり、拘引。

身分不相應の金を持つて、料理屋街を徘徊してゐる、竊盜の嫌疑あり、拘引。幾ら持つてゐたのだらう。身分不相應の大金、三圓五十錢也。等々。

斯くて片端から引張られて行く。然も早くて一日、大抵、二、三日、長いのは二十日、三圓五十錢の泥棒嫌疑者は十日間。今回の選擧期間中、警察に一夜を明かした延人員約二百四十名、飯塚の事務所の如き、運動員も、辯士も、人夫も、タッタ一人もゐなくなつて仕舞つて、飯焚きのお婆さんが唯一人、ポツネンとしてゐた。

然も、其の大部分が、選擧違反の記事となつて、民政黨の機關新聞に、二段、三段拔きでデカデカと書き立てられる。

「大衆黨幹部の買收發覺」「擴大して候補者の身邊に及ぶとの噂」等々だ。

「有權者に自動車を提供し」「饗應を爲し」「一票一圓で買收の約束をした」等々、何だと思へば、それは人夫賃である。自動車に乘せて會場に行つた。一食九錢の飯を事務所で喰はせた。一圓は日當評價額だ。それが賑々しく、饗應となり、買收となる。そして五六日のブタ箱饗應に價することになる。

五、六日の留置中、不思議と豹變する。警察の門を潜る時は、買收で宣傳され、釋放されて門を出る時、日本大衆黨脫黨聲明書を、十數萬枚、刷り上げてくれる。私は感ずる所あ

つて日本大衆黨を脱黨いたします」「大衆黨は、勞働者を喰物にするエセ無産黨である」「淺原健三はダラ幹であります」その次に「淺原は國體の基礎を危くする國賊であります」それ見ろ「何分會、何の某以下何十名」。

新聞紙は亦「日本大衆黨何支部の幹部連袂脱退」を報じて、其の聲明書を忠實に滿載する。警察の門を出入する毎に、二重に宣傳材料が急造される。それが、八幡に次ぐ我等の根據、嘉穗郡の××××に限られてゐる。××の留置場には、印刷機械が据えつけてあると見える。

警察から出て來た裏切者は、更に戰線を擴げ、知已を通じて、強固なる同志の「買收再生産」をやる。「二百圓貰える」「黨員一名につき一圓五十錢の閲覽料を出すから黨員名簿を見せて貰ひたい」。

脱黨ビラは、雨と撒かれる。何分會脱黨聲明書、何支部有志署名、大衆黨幹部排撃ビラ、甚しいのは黨員でもない者の名や、存在さへない分會や何々革新同盟と云ふ名で撒き散らされる。内容は大同小異、何時も同じな型もない出鱈目が、ヒステリツクに並べられてある。第二區全線に散布された此種のビラは、約九種類、其數百萬枚を突破するであらう。選擧妨害だ。警察は申告を待たず直ちに檢擧すべしなどヽいふ勿れ。此地域に限つて、大衆黨を律する外には選擧法などは、有つても無くても差支へないのである。

只、印刷屋は儲けて獨り喜ぶ。〇〇〇事務所の諸君、始めて印刷所の失業救濟を爲したりと言ふべきだ。

棍棒、匕首、ビラ、流言、豚箱。二月十六、七日。興奮は絶頂に達した。

我々は、十八日午後一時、再び木屋ノ瀨町八千代座に進出した。最初のプランは、木屋ノ瀨一回の豫定であつた。が、彼等の暴行妨害が續けられる以上、我々は、それに屈してはならない。ヤレ……萬難を突き破つて突貫せよ。討議は、一分に決定した。

然し、無頼漢の持つ共通の「意地」は、恐らく最後の爆發を豫期させる。防戰の壁を死守せよ。假令斬られても、突かれても、一歩も引いてはならぬ。進む時は、全員。引き揚げる時も、一人も缺かすな。傷く時は倶に傷け、倒れる時は相抱いて倒れやう。同志の意氣は炎の如く、志氣は鋼の如く鍛えられた。

十七日の深夜、大辻炭坑の老坑夫二名は、三里の山越しに、私の宅を訪れて呉れた。陰險な計畫が爲されてゐる噂がしきりだ。演説を中止せよ。と老の目に涙を浮べての忠告である。同志は、壯烈な思ひで、此の老坑夫を送り出した。

朝十時。木屋ノ瀨町民の一人だと云つて電話をかけて來た。町は無頼漢で一杯だ。候補者の道を擁して、會場に至らない前「片づけて」仕舞ふと云ふ噂だ。注意の上に注意して町に潜入せよと云ふ報告。私は五人の同志に護られて、木屋ノ瀨行の道を變更し、大迂廻して、正一時、會場の近くまで乘りつけた。途中に同志二十名餘が、待つてゐる。表は絶對に危險だと云ふ。そこで車を捨てて、會場の背後、遠賀川の堤防から、座主の私宅裏門にコツソリ忍び込む。親切な座主は、病人の寢てゐた裏のハナレをあけて、私等五六名を通した。

演壇は、開會の辭が始つた。聽衆は一千餘、彌次は一聲も飛ばぬ。彼等は、噂の如く、途中に私を襲うて、會場に入らせない腹だ。

二三名の辯士が濟んで、豐田山松君が登壇した頃、誰れからともなく、「淺原は會場に這入つた」との情報を受け取つたらしい。三々

五々、道に伏せてゐつたと云ふ彼等の苦心は空に歸した。茲で私に演説をやらせてはナラズ者の面目丸潰れと云ふ可き所である。彼等は、一擧舞臺に飛び上つた。淺原を出せ。決死隊が出來たと新聞に報じてある。決死隊と果し合をヤラウとワメキ立てた。聽衆は、辯士は、樂屋は、水の如くに靜まり返つてゐる。同志の二、三名を毆りつけた。然し振り返りもしない。彼等ゴロツキの興奮は、遂ひに爆發した。「待つてろ」口々に絶叫し乍ら四五十名。怒濤の引いたやうに場外に飛び出して行つた。「何か來るぞ」と云ふ豫感が、全會場を支配した。突如！　表口から、横手非常門から。上衣をハネて、血相を變え、二尺四五寸の拔刀を持つ者、約二十名、棍棒、匕首無數。ワツと叫聲を擧げて、壇上、壇下を暴れ廻つた。會衆總立ち、二階の屋根傳ひに、隣家の屋根に逃げ出す者約三百名餘。ナラクに飛び込む者四十數名。名狀し難い混亂だ。彼等は、血眼になつて私を尋ね探した。然し最後迄、私の片影をも知り得なかつたらしい。

警察官は、蜘蛛の子を散らす樣に……

昭和五年、時は白晝！　衆議院議員候補者の政見發表演説會場に、正服の警察官二十名餘、監視の下に、銀蛇數十本が躍る――。

直方警察署長警視中富某は、さすがに驚いたらしい。署員總動員で自動車を飛ばして來た。曰く「危險だ、淺原君を出して呉れるな。署員を急行せしめて暴漢を一掃しつゝある。少時く待つて呉れ。」彼は、心から心配らしい表情であつた。私は、待たされる事一時間半、署長の案内で、同志數十名に圍まれ乍ら、自動車に乘つた。一路八幡に歸る可く。

午後五時、鎔鑛爐の火華、天に宙する。我等の故郷、八幡に歸つた。前田小學校に立ち迎えて呉れる者、場內二千、場外一千餘。八幡の大衆は、最う、木屋ノ瀬の變を聞いたのだ。「大丈夫か」。「ケガはなかつたか。」

勞働者萬歳。大衆黨萬歳。演説なぞは、一寸もさせて呉れない。只、萬歳、々々の爆發だ。我等の樂場は、灼熱の此地、八幡である。

十九日晝一時、飯塚中座だ。下足料を徴收したにも不拘、二千、場に滿ちた。坑山地帶最後の叫びだ。敵の輩は、血を見ねば止まないであらう。我々も今日一日だ。毆られやうが、斬られ樣が、引張られやうが少しも心殘りはない。

元氣正に當る可からずとも云ふ可きか？

淺原が演壇に起つと、紋切型にワアツと立つた。意外、反動の群と伍して、社會民衆黨の黨員諸君三四十名。

意外は更に續いた。其の日の臨監は、福岡縣××××××××、福岡地方××××××の××二名。

××××課長は、自ら、舞臺の中央に立つて、「檢束」を叫ぶ。××が走る。突き飛ばす。我々は呆然としてゐる間に、大波の引いた樣な靜けさに歸つた。

社會民衆黨の諸君は、福岡縣二區の選擧場裡に、最後、反動群と意識的に協力することによつて、社會民衆黨の行衛を自ら勇敢に暴露した。

右翼社會民主々義者の落ち行く可き途は、資本主義の必然的崩壞を守備する爲めの防風林であり、無產大衆の階級意識の喰ひ止めであり、最後的に橫行するであらうところの白色××への協力！　より外には無い。

彼等の構成は、現在、小市民と勞働貴族とブルジョア政黨の落伍者を其の中軸として、日常鬪爭は、階級的勞働者の罷工メメキツプ

シであり、農民の階級的進出の防止である。

彼等の組合の一部を除けば、其の大部分は、勞働者の激化阻止の爲めに、計畫結成されたる資本家奉仕唯一の御用組合のみである。

社會民衆黨の政治的主張は、巨大なる金融資本の强化に、押しつぶされんとしつゝある中小産業資本家の代辯であり、複寫紙である。

彼等は、ブルジョア政治權力安定の爲めに一切の主張を基礎づけつゝある。彼等の掲ぐる社會民主々義こそは、無産階級の歴史的使命實現の憎む可き齒止めである。

五十七議會の開會に當つて、現内閣提出の豫算案を肯定したるが如き、社民と民政は、紙一重なりと演説し、濱口内閣に對する信、不信を、將來の政策に俟つと公言したるが如き、一ツとして彼等の非階級性を、自ら示現せざるはない。

今次の選擧戰に演壇から我々に投じられた社會民衆黨諸君の中傷攻擊は、野卑なる個人への讒侮の外は、

1. 死んだ山本宣治や淺原健三は第五十五議會の議長選擧に民政黨に投票しなかつた爲に、田中内閣打倒を遠方に押しやつた。

2. 大衆黨福聯は「帝國主義戰爭絕對反對」といふスローガンを掲げてゐる、又淺原は議會で「滿蒙の權益を即時放棄せよ」と叫んだ。吾國體の基礎を危くするものである。

3. 大衆黨は「産業合理化反對」といふ。彼等は日本の産業を破壞しやうといふのだ。

以上だ。

無産大衆が、階級的最後の反抗を叫ぶ時、階級内部に、其の覆滅の地雷火を布敷するものは、右翼社會民主主義者の群である。

彼等は、自ら、白色テロなるの勇氣を持たない。然し、反動群が狂舞する時、彼等の反動性は煽動せられ、其の尻馬に乘つて亂舞する。

福岡縣二區、社會民衆黨は、之れを立證する典型的模型たるの役割りを演じた。

我等の選擧鬪爭は、有産政黨の狂暴と、社會民主主義者の馬脚を、完全に露出して、其の幕を閉じた。

此の縮圖を引き延ばして、全國の選擧戰野を展望する。

民政黨濱口内閣は、老猾、極りなき抑壓戰術を展開した。

共に「自由主義的政論」の假化粧を施し、口に「公平」の笛を吹く。

然も、所謂は、所謂そのものいふ思はする××なるものである。××××氏は「選擧の神樣」なりと云ふ。然り。彼は「政治家」に非らず、「選擧家」である。一年選擧のみを念じて政治の一片だに理解しやうとしない。彼は當選第一主義者である。當然第一主義である限り民衆の意を迎へなければならぬ。其の爲めには自由主義の色調を、最も濃厚に示現しなければならぬ。然し、濱口内閣の使命は自由主義の確立ではない。金融資本家への積極的奉仕である。玆に、民政黨實踐の免じ難い矛盾がある。其の××は、無産大衆の止む時もなき、階級意識の擴展に伴つて、除々に、或は急速に暴露されゆくであらう。

無産階級の飛躍は、不可避的である。第一第二の普選鬪爭は、只其の一局部の表現であり、或は試練であるに過ぎない。階級意識の高揚への一礎石として、選擧鬪爭を我々は獲得すればよい。更に、今次の總選擧を、有産政黨の統一合同への契機として成就せしめ得るならば、容易に得難き狀勢のチャンスと謂ふ可きであらう。

アメリカ通信

軍縮時代劇の展開

在ロンドン本誌特派員　清澤洌

1

ロンドンの海軍會議は、正確な意味において、二月六日アメリカが聲明書を發表した時から始まつたといつていゝ。

會議は一月廿一日、英國皇帝陛下臨御の下に、華々しく開會されたが、その後約二週間といふもの、艦別主義（英國案）か、總噸數主義（詳しくいへば佛國の妥協案）かといふやうな理論遊戲に耽つて、結果からいつて大した相違なき制限の方法について甲論乙駁、いつ果つべしとも見えなかつた。

この間、米國では絶對にその意見を留保して石のやうな沈默を守つてゐた。第一委員會に議長のマクドナルド氏が欠席し、ＡＢＣ順により米國のギブソン全權が議長席を占めねばならぬ時ですらも、米國側はこれを辭退して、英國海相アレキサンダー氏にこれを讓つたほどである。

その沈默を守つて來た米國は、二月六日夜に至つて急にその態度を明らかにし、主に英國に對する具體案を發表して、會議に小爆彈を投じたのである。その案の内容は、『ワシントン會議によつて、一九四二年までに均等になるべき兩國の主力艦を卅一年（明年）までに均等とすべし』といふ一ヶ條を除けば、多くは昨秋、フーヴアとマクドナルドとの間に成立した協定を、改めて公表したといふだけで、必らずしも新規な提案はなかつたけれども、人心が既に單なる手續き上の純理論に倦んでゐた時であり、米國は直ちに舞臺唯一の役者になり了せた。

この役者の登場振りは、併しながら決して花道から堂々と四股を踏んで出て來たものではなかつた。その夕方になつて、新聞記者に對し今夜七時に發表すべき事項あることを告げ、俄然としてその内容を發表したのである。日本側に對しても（英國側についても同じだが）、發表以前二時間くらゐ前にステートメントを持つて來て、諒解を求めたといふ有様であつた。

なぜ米國はかう慌てたか。

第一は本國において、秘密外交と、會議の進行に對する批難と、更に上院及び大海軍論者の一部からは、米國が英國の指導に甘んずること

に對し、漸く攻撃の聲をあげて來たからである。

第二は軍縮に不滿を持つシカゴ・トリブユーンの記者が、米國全權の一人より米國案の內容を知りえたことが分つたので、公平を期するため急遽發表することに決意した。

第三は直裁を好む大統領フーヴア氏が、理論的遊戲に飽いて、ワシントンから命令したと信ぜらるべき理由がある。他の場合にも書いた通り今回の會議は、謂はゞ巨人會議であつて、英國はマクドナルド、米國はフーヴア、佛國はタルジユ、イタリーはムツソリニがこの問題について、殆んど獨裁的なまでに廣範な裁斷の權限を有してゐる。米國の全權がフーヴアの鶴の一聲なくして、この態度に出たであらうとは元より信ぜられない。

米國が聲明書を發表すると、その翌日、英國は直ちにこれに續いた。それは響が聲に應ずるほどの早さであつた。二人の役者が相擁して舞臺一杯に踊つて居るのがこの時の光景である。殘されたる他國――殊に佛國がこれに不快を感じたのは無論であつて、佛首相タルヂユがマクドナルドにねぢ込んだのはこの頃のことである。

2

これ等の經緯を書く前に、われ等はまづわれ等に最も關係の深い日米の交渉を一瞥しておく必要があると思ふ。

誰も知るやうに、そして私が前便でも繰り返し述べたやうに、日本は始めから對米七割の比率を固執して來た。ワシントンにおける米國當局者との會談においても、ロンドンにおけるマクドナルドとの會見においても、日本全權の主張說明は、この七割說以外に一步も出でなかつた。

それればかりではない。ロンドン會議の開會式、首席全權の米國に對するラヂオ放送、その他、日本が世界に對する理想、人類に對する大抱負を述ぶべき機會を與へられたる公開の席上においても、その說くところは常に七割說の根據のみであつて、われ等はかつてそれ以外の言葉が、わが全權の口から出でた例を知らない。卽ち日本は全身の重みを七割主張にかけて、他は一切これを顧みなかつたのである。

故に日本は、いよ〳〵米國が切り出す場合には、相當に好意ある考慮をなすべきことを期待してゐた。殊に首席全權スチムソン氏は、暫らく比律賓總督として東洋にあり、日本の事情にも通じて居ると同時に、稀に見る誠實の士であることを、出淵大使も若槻全權も說して居る。かれは折角、近接して來た日米の親交が、今回の會議によつて却つて隔離する如きことのなかるべきを、心から懸念してゐる旨の情報も日本側にあつた。

然るに二月四日、若槻全權が米國全權の宿舍であるリッツ・ホテルでスチムソンと會見し、米國側から渡された案の內容を見ると、その立場は少しも緩和されて居らないことを發見した。いづれは今後の交渉に待つべきも、日本側の失望は知るべきである。

この『極秘』の判を押した米國案の內容は、越えて七日の東京の一新聞の夕刊によつて發表された。それがその特電の初頭に記されたといふやうに『米國側から知りえた』報道であるか、それとも、ニユズのソアー

スは他にあるか、それはこゝで詮索する限りではない。少なくともこの記事が日本新聞で發表され、ロンドンは東京からの轉電によつて知りえたことだけを書いてをく必要があらう。

この報道を得た日本の輿論は憤激した。それは日本の「强い」輿論の傾向を知るものには當然の結論である。もしかりに何人かゞ、あの際、日本内地の輿論を沸騰せしめることが交渉に便利であると信ずるものがあつたとすれば、それはその人の豫期に添ふものであつたであらう。

米國側と雖も、七割を要求する日本に、六割と切り出したことが、どれだけ日本を失望させるであらうかを知つてゐる。故に日本に同情を有する某幹部は、米國側内部の事情が、身振り（ゼスチュアー）としてだけでも、その外に道がなかつたことを、日本側の某氏に說明した事實もある。

3

米國の全權は、國務長官スチムソン氏を首席として七人といふ多數である。

國務長官、海軍長官、駐英大使、軍縮大使ともいふべきギブソン氏は當然として、この外に上院において共和、民主兩黨を代表する（必ずしも代表しないが）リード、ロビンソン二氏があり、更に實業科出身で人間と人間との交渉に得意のモロー氏が居る。

この人選の献立を見たゞけで、その混雜した事情を知ることができるが、更に注意すべきはその顧問の中に二人の有力な將官がゐることである。プラットとジョーンズがこれであつて、プラットは謂はゞ政治家的、妥協的であり、ジョーンズは飽くまで頑固な專門家的軍人である。ある人がワシントン會議が成效したのはプラットが專門委員の主要席を占めたからであり、ゼネバ會議が失敗したのは、ジョーンズが全權の一人として居つたからだといつたのは、必らずしも誇言ではない。

大統領フーヴァは第一に今回は軍人の聲が押えるために、全權の中に一人の軍人をも加へないことにした。海軍長官は所管大臣として無論海軍の聲を代表するであらうけれども、かれも結局文官である。第二にフーヴァは頑固派のジョーンズに代ふるに、常識派のプラットを以てこれにあてんとした。併しこれに對しては上院に割據する大海軍派が猛烈に反對して、かれ等の意見を代表するジョーンズの加入を主張し、結局兩者を併用することにしたのである。

これ等の事情からわれ等は二つの事實を知ることが出來る。第一は米國の全權は絕えず上院を顧みねばならぬことである。米國が締結する總べての條約は上院の批准を要し、しかもその上院は姑の嫁いぢりのやうな態度を有するが故に、常にこれを顧盻せねばならぬ。米國が今回の會議の結果出來あがる條約は、幾つもにせず、一條約に纏めんとする意志があるのは、その一つが上院に引つかゝる場合には、全體の結果を無效に歸する懼れがあるからである。

第二には米國全權はその海軍部内の異論を纏めねばならぬ。米國全權が二月六日に發表したステートメントは、その内容において内外の賞讃を買つたものであるが、しかも不思議なことには、その中に最も重要な一項を記入することを避けた。即ち

『一九三一年までに英米が同勢力に達するべく、英國は五隻を、米國は三隻を廢棄すべし』

とだけはあるが、米國は實際においては四隻を廢棄して、一つの新造艦(英國のロッドネー型)を造る權利を與へらるべきことを提議したことを書かなかつた。

日本が支那に廿一ケ條を突きつけた時に、各國に對して第五條を提示しなかつたことを最も強く批難したのは米國である。その同じ米國は今、軍縮會議のステートメントにおいて、最も不人氣なるべき新造艦案を記入することを避けてゐるのは、不思議なる廻りあはせではないか。併しながらこれは米國が世間體を誤魔化さんといふよりも、寧ろ部内の大海軍論者の聲を默殺することが出來なかつたといふ方が正當ではあるまいか。そこに最後の戰陣をしいたといふよりも、海軍專門家の說を持ち出して、兎に角一應交渉してみたといふ方が當つて居ると思ふ。

日本に對する提案について、どれだけ海軍側の『專門的意見』が根本をなして居るかは、まだ一週間を經ない現在、これをいふことを憚かるが、例へば主力艦廢棄に米國側が反對して居るのは、ヒリッピン防備問題が最も大きな理由であるに鑑みても(フランク・サイモンド氏がタイムスに寄書して公然そういつてゐる)、第一回の米國の對日提案なるものが、政治案でなくて、軍人案であることは想像がつくと思ふ。

4

私はこゝで簡單に私の立場を明らかにしてをきたいと思ふ。私の考へによれば、日本は今回の會議で明敏を缺いてゐる點が二つあつたと思ふ。一つは根本的なもので、他は技術的なものである。

第一は日本が米國を想定敵國とし、國案を樹立することの可否である。この事は前便にも少しく觸れたけれども、この點について明確な概念を把握しておかなければ、明らかなる結論は生じない。

もし日本が米國を想定敵國とし、國策をこゝから編み出すのであれば——現在然るやうに——海軍側が主張する理論は全部正しいといへる。この想定敵國に對しては、故國のホーム・ウオーターを守備するために七割の海軍力は是非共必要であらうし、これなくして日本の國防は甚だしい危險に暴露されることも事實であらう。米國を想定敵國にするといふ前提のもとに生れる唯一の結論は、七割比率である。そしてこれが日本國民殆んど全部がいだいてゐる理論なのである。

併しながらわれ等の疑問はこの前提そのものにある。問題は日本は米國を想定敵國にしなければならないかどうかである。即ち日本は常に米國と戰爭するつもりで備へて居らなければならないかどうかである。この前提に異論をいだくものあらば、その結論である七割海軍力說は直ちに壞れ落つべきは明らかである。

ロンドン會議の經過を報告すべき任務を負つてゐる私は、今この問題について事理を追ふて詳說する自由をもたない。たゞ私は日本現在の事情は、米國を想定敵國として七割海軍勢力を保持し、莫大なる軍事費を負擔して行くことは、結局國力の發展を妨ぐるものであると主張する者であることだけを書いてをかう。

然らば私は何故、日本の國策の一轉換を主張するか。試みに個條書きだけを述べる自由を許して貰ひたい。

一、日本の現在の狀態は非常な苦痛なくして一等國と戰爭する事にたえない。米國との場合には現在日本の經濟を背負つてゐる生絲（總輸出の三割七分以上）の輸出は止まり、輸入棉花の半分は止る。それがどれだけ經濟的影響の大きいかゞ分る。

二、米國との戰爭は必然に永びく。此苦痛に當面し、現在の日本の社會狀態に照して、社會の變革を企圖する如き不逞の徒の絶無を保證しうるであらうか。

三、かりに是等もないとする。然らば日米が國力を堵して戰はねばならぬやうな問題が何か兩國の間にあるか。それがあるならば、與かり聞かう。

四、國際間の傾向は、一等國間の戰爭は開始する方が困難で避ける方が容易になつて來てゐる。發達した輿論は最早一國の侵略を許さない。われ等が國策を立てるのには過去を見ないで將來を見るべきである。

五、或は米國が支那に對して暴威を振ふことをいふ者もあらう。併しながら日本の對支政策は既に、好むと好まざるとに拘はらず、門戶開放機會均等に落ちつき、幾つもの條約によつて、それ以外に身動きの出來ないやうに縛されてゐる。日本が武力のゼスチユアにより對支政策を行はんとするのは、田中內閣の失敗に懲りざるものである。

六、もし海軍勢力の擴張乃至は維持が、賣擲の件はないものであればそれは『一等國』の廣告のためだけにでもいゝ。併し日本の國情は種々の社會施設、産業發展に全力を傾注せねばならない時に際會してゐる。日本國民の富力は總豫算の三分の一近くを軍費に割きながら、國內事業に巨費を支出するにたえない。

七、日本の國難は「外敵」から來て居ない。其は少くとも十ヶ年以前迄の世界狀勢である。現在は專ら「內敵」に力を注ぐべき時代である。

八、米國は東洋に領土を擴張する如き意志はないといひうる。比律賓の獨立も近い時期に迫つてゐる。米國の野心が經濟侵略であれば、それは海軍力では對抗出來ない。否海軍費を減少して、その方面に備えねばならぬ。

九、日米間の紛爭は無論將來も起るであらう、併しながら是に對しては國際的仲裁に附すべき機關ができてゐる。

以上は簡單にあげうるところの米國を想定敵國とすることの否なる理由である。

5

米國を想定敵國となすことの必要がなくなれば、われ等は新たなる發足點に立つて、海軍政策を講ずることが出來るわけである。

新たなる發足點とは何か。日本が東洋の平和を維持するに足る海軍力これである。日本は自から生くるために、また地勢上、東洋における平和を維持する必要がある、殊に支那が今尚依然の如くして、甚だしく安定を缺く以上は、これに對して適當なる海軍力を維持することは元より必要である。

故に政治家は海軍専門家に對し、この東洋の平和維持のために、幾何の海軍力を保持すべきかについて立案を命ずることが出來る。支那沿岸に何程の軍艦を必要とするか、南洋方面との航通路を安全ならしめるために何程の巡洋艦が要るか。更に楊子江方面、日本海方面の海軍力は幾何を適當とするか。これ等は米國との海軍對抗を眼目とせずに數字に出で來たるべき筈である。

この立場は偶然に英國がその新海軍政策を採用するに當つてとつたものである。英國は過去長い間、二ケ國海軍力標準をその政策としてをつたが、その後、時代の變化と共に一國標準主義となり、それは新興の米國を目標とするものになつた。ワシントン會議からジエネバ會議まで、これがため英國が如何に苦闘したかは何人も知るところである。

然るにマクドナルド内閣に至つて、米國を想定敵國とすることの愚を悟つた。そしてその海軍政策を立案するに當つて、米國を全然考慮から除外することを命じ、この結果、從來の巡洋艦七十二隻案を減少して、五十隻を以て滿足することを發表したのである。これは歐洲の事情及びその屬領——世界に擴がるところの——全部の保護のために必要なるところの海軍専門家の答案である。

この數字はロンドン會議の最中に、海相アレキサンダー氏より發表されたが、如何に大海軍論者の批難の標的になつたかは、この會議に連なつたもの、何人も知るところである。併しこの批難に拘はらず、それは今や英國の國策として決定したのである。

英國がなしえたことを何故日本がなしえないか。英米兩國が偶々國語を同じくするが故に、同一行動に出でうるのだと思ふものは、全く世界の事情に迂愚なるものであつて、この兩工業の間に横はる利害の衝突は決して日米兩國の間の問題の比ではない。

日本がその國策を前述のやうな基礎にをくことによつて、日本の對米立場は甚だしく強きを加へることが出來る。現在日本は比率を出來るだけ澤山とつて、しかもその軍備は減少しようといふ甚だしい矛盾の上にたつてゐる。或は『日本の主張は比率であつてトン數でないから、比率を澤山とりながら、軍縮を實現することが出來る』と主張するものがあるかも知らないが、これは事實に目を蔽ふ强辯であつて、英米の默約が成立して居る今日——英國が約五十九萬九千噸、米國が五十八萬七千噸(主力艦、水上艦を除く、正確な數字は無論今後の交渉に待つ)——日本が七割を望みながら、軍費縮少をいふのは滑稽なる素人騙しである。

この矛盾をいだいて日本の、世界に訴へる聲が小さいのは當然であつた。日本はいかなる晴れの場處に出ても、たゞ『他國を脅威せず、自國を守るに充分』といふ消極的標語に隠れて、それ以外に一歩も出ることをしなかつた。

6

ロンドン會議に來た海軍部の人々によると、かれ等は最も理想的な首席全權を若槻氏に發見したやうである。若槻氏がジエネバ會議當時の齋藤實子よりも却つて、適役であるとはその殆んど公然いふ所である。なぜであるか。若槻全權は海軍の書いた筋書通りに踊るからである。

置かれたる日本の自衛の線の間を行くやうに、かれは涙しんでこれから出でざらんことに全力をあげてゐる。この點ではかれは無論、日本が發見しうる適り役である。

併しながらこれ以外にわれ等はかれに何を期待することが出來るか。對米七割の固執がかれに與へられたる任務であつて、かれとしてはそれ以外に出る道がなかつたとする。それとしてかれの道は、あれ以外の方法がなかつたであらうか。

私は始めにこの會議に二つの明敏を缺いたことがあるといつた。一つの根本的な國策については既に述べた。殘るは技術的な問題である。卽ち、七割を初頭にかゝげて、そこに最後の陣地を敷いたこととの問題である。

これについては全權一行が米國に在る時から、この出方が日本を身動きのならぬ立場にをくであらうことを私は指摘してをいた。既に七割が國防上『絕對最少限度』の海軍力であることを繰り返し述べた以上は、これから少しでも比率が下がることは、國民を由々敷き不安にをくことである。しかし若槻全權は七割と切り出して、交渉の場合に七割全部をとる確信があつたであらうか。われ等は日本全權がその立場を「西太平洋平和の維持」において、比率は會議の場合に示すこと、他の英米佛伊がそうであつたやうにすべきであつたと思ふのである。

それもなほ可なりとする。問題は日米の交渉が纒らなかつた時どうするかである。結果からいつてこの軍縮會議が纒らなくても、現狀と大して變化がありはしない。日本は現在勢力を目標として交渉してゐるのであり、會議が纒らなくてもこれ以上の大勢力を擁することは實際上困難であらうし、纒つて七割の比率を得れば却つて一萬噸巡洋艦（八インチ砲搭載艦）一萬七千六百噸を新造する結果になる（現在の英米假協定數字でいふので動かないものではない）。一方米國と雖も、その國內の平和論に顧みて、將來對日十對七の割合で建艦するであらうとは到底想像することが困難である。

實質的に兩國の海軍力に變化がなければ、この會議の成否はどうでもいゝやうであるが、併し協定不成立の結果、兩國の大海軍論者と無智なる國家論主義者が、たへずこの問題を種に相互に煽動し、國交を甚だしく惡化せしむべきことは明らかである。對手國の一隻の軍艦建造も直ちに戰爭を想像しむべきほどの批難を交換するであらうことは明瞭である。マクドナルドとフーヴアとの協定も、實際的の軍縮協定にあらずして——物質的には米國は更に優越になる——この兩國の國交を整へての結果なのである。

米國が日本に七割を與ふることを拒絕するの愚はまた別に論ずべき問題である。對米比率を主張するを否とする私はロンドンに居る間、却つてこれについて日本海軍側の代辯に近いことを英米の新聞に發表して、自から苦笑したほどである。併し日米の比率の故にこの會議を不成立に終らしむべきではない。

故に私は比率について相互に讓歩する代りに、國民の安心を買ふために『太平洋協定』（パシフィック・パクト）でもいふべきものを締結すべきことを述べて多少識者の贊同を買つた。その內容は

一、仲裁條約よりも強力なものであるが、併しロカルノ協定の如き積極的なものではない（攻守同盟的なものは米國上院の批准を得る見込みは絕對にない）、米國は國際裁判所に參加したからこの條約の作成は案外に容易である。

二、相互に不侵略を聲明し、その隣接海洋及び島嶼の獨立を尊重する。（島嶼といふも問題の中心は比律賓である、比律賓の戰爭中立が出來あがれば最も可であるが、ヒリッピン島が米國領であるに鑑みてこの邊の第一步は米國側から出づべきものである）

三、この條約は二ケ國だけで締結することが最も望ましい。著名國が多ければその條約が國民的に訴ふる力が微弱である。

日本が米國を恐れてゐるやうに、米國は日本を懼れてゐる。この條約は四ケ國條約とや〻同巧異曲であるが、歐洲方面にも同じ種類の條約が幾つも存在する。

今のところ日米兩國の交涉が失敗に終ると思ふのは早計で、恐らくはこの文が現はれる頃は纏つてゐるかも知れない。私は寧ろ樂觀論者であるが、併し日米兩國——特に日本が米國を懼れてゐることの大なるに鑑みて、まづ道德的軍縮の必要なるを思ひ、武裝解除以外にか〻る條約が同時に考慮せらるべきを希望したのである。

7

今回の會議において英米の提携が目立つて來れば來るほど、日佛の共動動作は明らかになつて行きつ〻ある。

始め孤立を覺悟した佛國は、ロンドンに來る早々、首相タルヂュ氏が日本側を訪ひ、兩國專門委員の會見を申し込んだ。この申し込みに對しては拒絕すべき理由はないから應諾したもの〻、日本側はや〻迷惑の感があつたのは事實である。

然るにその後、米國の對日六割提案となり、日本海軍側の激しい不滿を買ひ、その上に英國が米國に和して蹈るを見るや、偶然か否か日本側の態度は變更して來た。たとへば二月七日（金曜）の制限に關する方法の委員會において、佛國は輕巡洋艦と驅逐艦の無制限な噸數融通を主張したに對し、英米はこれに反對した。日本からは財部、永井二全權が出席してゐたが、佛國の主張に加擔したのである。英國海相アレキサンダー氏は『日本はジエネバにおいては、英米案と同じものに贊成したではないか』と突き込むと、永井全權は『三ケ國會議と五ケ國會議とは自然主張が異ならざるをえない』と答へて、別に理由を明示しなかつたとのことである。

その後、潛水艦問題になるや、日佛の主張は全然一致した。この問題が英米に對する對抗の戰略でないことは無論である。日本は潛水艦に對しては現有勢力（七萬八千噸）を保持することを最初からの目標として ゐる。併しそれにしても時が時とて日佛の提携は如何にも目立つた。

この日本の態度に對して佛國は竊かに感謝の意を表してゐる。ワシントン會議當時にあつて潛水艦の制限に反對したのは、佛國だけであつた。現在全權であるところのブリアンは孤軍奮鬪して、世界の不人氣を一身に集めた感があつた。然るに今や佛國は日本に有力な盟友を發見し

たのである。佛國は今後においても日本に對してこの偶然の好意を忘れぬであらう。

佛國の態度はいつもながら、傍若無人なばかりに痛快である。この佛國の態度を日本が倣はぬことを不甲斐なく思つてゐる者もあるやうである。併しながらたゞ忘れてならないことは、佛國は歐洲大陸の强國として、その背後に幾つもの國をひきいてゐることである。佛國が一度扇を以て招けば、ポーランド、チエッコスロバキアその他は、直ちにその膝下に馳せ参ずるのである。これに對して日本が立つて、これに一身を共にするものがあるか。日本が獨り頑張つて、これを後押しするものがどこかにあるか。

われ等は自己を主張するのに、どんなに大膽であつてもいゝ。併し自己の立場を知ることは國際政治にあつては極めて大切なことである。

この英米と日佛の、やゝ大きな意味の提携の眞中にイタリーがある。イタリーは今回の會議においては、たゞ佛國と均等勢力を主張するといふだけで、他は殆んど自己の態度を明らかにしない。そして最後までそれで押し通して、落ちてゐる機會を拾はんとするにあるやうである。英米が各聲明書を發表し、提携密なるを見た佛國は、示威のためにも佛伊の共同動作を示さんとして、伊太利に一方の天秤をかつぐことを持ちかけたが、拒絕された例がある。伊國としては どうせ澤山ない海軍である。割あてはたゞ一等國の體面上、とつて置かうといふにとどまる。一番氣樂な立場がイタリーである。

今度のロンドン會議ほど『時代』を現はしてゐるものはないと思ふ。それは見ようによつては、まだ世界第一を失ひきらないロンドンといふ町に開かれた一大時代劇だといつてもいゝ。

この時代劇の背景は、見渡す限り恐れと迷信に滿ちてゐる。かれ等が今なほどれだけ『外國』といふものを懼れてゐるか。自分の國及び自國人は、常に正義に則つて、決して亂暴な不信を敢てすることはない。が、『外國は絕えずわれ等を狙つてゐるのだ』。それが何れの國もが有してゐる恐怖である。

私はさきに今回の會議において英米が仲よく舞臺で踊つてゐるといつた。併しこれは極めて大きな意味からであつて、仔細にこれを見れば戰鬪艦の均等勢力の問題について、巡洋艦の割あてについて、かれ等は對手を恐れて暗闘してゐる。かれ等のいふ『均等勢力』は對手の勢力に比して少し優勢ならんことを意味する。一旦緩急の場合に、對手を叩き伏せることの出來る勢力が、自國から見て均等勢力なのである。

何千年の歷史の堆積から來て居るこの恐怖觀念に疑問をいだいて、一つの理想主義が一方から芽を出し始めた。英國藏相スノーデンによれば世界が一ケ年に軍備のために費消してゐる額は九十億圓である。この巨額費用と、それに加へて人力を『外國』のために常に準備費消せねばならないのか。それがまづ醒めたる者に來る疑問である。この疑問の許に咲いた花が軍縮會議の試みだといへる。

この理想主義は、併しながら獨り勇猛邁進するを許さない。世界大戰の際に、最後まで殆んど單身で反對しつくした大膽なる非戰論者マクドナルドを以てしても現狀においては、英國の海軍力が百二十萬噸以下に多く下る能はざるを述べて居るのでも分る。

かれ等は一方理想主義に執着しながら、他方黑潮の如く滿ちてゐる大衆の恐怖と迷信を顧みねばならぬ。一等國の政府として、マクドナルドを主班とする社會主義內閣の如く戰爭反對に深い確信を有してゐる內閣はないに拘はらず、尙大飛躍を試みえざるところに問題の困難を想像せざるをえない。即ち過去の傳統と、將來の理想主義の中間に彷徨するところに今回の會議の特色がある。

この時代劇は必然にその時代を反映する。その第一は大衆の輿論が極めて明瞭に會議を左右することである。今回の會議において最も目立つことは新聞記者に、あらゆる便宜を與へて居ることである。この會議のためにロンドンに來た新聞記者は四百四十六人であつて、新聞通信社の數は二百七十である。即ち

英國、一一一(五八種)△自治領、四〇(二六種)△米國、一〇九(三七)△佛國、四九(三〇種)△日本、二二(一〇種)△伊國、一一(七種)△ドイツ、二八(二〇種)△和蘭、一二(九種)△ハンガリー、一一(九種)△スウエーデン、八(八種)△スペイン、八(八種)その他である。

始め秘密會議に傾いた會議は、輿論の壓迫によりついに殆んどこれを公開にし、その會議の內容及び方法についても、常に輿論がこれを左右してゐるのは、會議の內部にあつて、特に感ずる事實である。もし今回の會議が失敗すれば、世界の一般的輿論は、今尙これに熱さないといふことが出來るであらう。

第二は會議に列席してゐる各國代表が、心からこの會議の成功を希望してゐることである。自國の立場は主張するけれども、併しどうにか纏めたいといふ意志はある。少なくとも自分の責任の故に、これを失敗に終らせたくないといふ努力は有してゐる。佛國代表と雖も、意外に眞劍であるのは何人も認めるところである。

この二つの近代的な力が、大きな時代劇にどういふ完結(フイニツシング・タツチ)を與へるか。われ等は見物席から興味と同情を以てこれを見守らう(昭四・二・一三)

●●附記　これを書き終へた時、ニユーヨークからの情報はウオールド紙が比律賓の中立を提案したことを傳へて來た。私は同紙のロンドン特派員と數回會見して、日本が如何に米國を恐れてゐるか、そしてこれは比島問題が重大な關係あることを極說して同感を買つた。私の言說がどれだけ影響したかは知らないが、米國側からこの發案あつたことにつき、私が全然無關係でないことを思ふて聊さか自から得意とするのである。

浴槽の花嫁

—世界怪奇實話V—

牧逸馬

1

英國ブラックプウルの町を、新婚の夫婦らしい若い男女が、貸間を探して歩いてゐた。彼らが、初めに見に這入つた家は、部屋は氣に入つた樣子で、殊に女の方は大分氣が動いたやうだつたが、風呂が付いてゐないと聞くと、男は、てんで問題にしないで、細君を促してさつさと出て行つた。コツカア街に、クロスレイ夫人といふ老婆が、下宿人を置いてゐた。次ぎに二人は、このクロスレイ夫人の家へ行つたが、其處には、同じ階(フロア)に立派な浴室があつたので、男が大いに乘氣になつて、早速貸りることに話しが決まつた。間代は、風呂の使用料を含めて、一週十志(シリング)であつた。男の名はアウネスト・ブラドンといつて、田舍新聞に時々寄稿などをするだけの、言はゞ無職だつた。女は、アストン・クリントンの町に住んでゐる石炭商の娘で、アリス・バアナムといふ看護婦であつた。アリスは、健康で快活な田舍娘だつたが、ブラドンは、脊の高い、蒼白い顏の神經質らしい男だつた。二人とも安物ながら身綺麗な服裝をしてゐたが、女が確固としてゐる割りには、男は、怠け者の樣子だつた。これは後年倫敦ボウ街の公判廷で申立てたコツカア街の下宿の女將クロスレイ夫人の陳述である。

驛に一時預けしてあつた少しの荷物を引き取つて、ブラドン夫妻は即日引移つて來た。翌朝早く、二人は外出の支度をして、階下へ降りて來た。丁度他の下宿人へ朝飯を運ばうとしてゐた女將のクロスレイ夫人に階段の下で出合ふと、ブラドンは、何處かこの近所に醫者はないかと訊いた。クロスレイ夫人は、引越し早々病氣になつたのかと思つてびつくりした。

「どこかお惡いんですか。」

「いや。これがすこし頭痛がするといふもんですから。」

ブラドンは新妻のアリスを返り見た。アリスは、何か氣が進まない風だつたが、それでも、嬉しさうににこ／＼してゐた。

「何でもないんですの。直ぐよくなることは判つてゐるんですけれど、この人が、輕いうちにお醫者に診て貰つたはうが好いといつて肯かないんですよ。」

クロスレイ夫人は、それは、ブラドンさんがあなたを愛してゐるからですと言ひたかつたが、移つて來た許りで、まだそんな冗談を言つてい〻程親しくなつてゐないので、たゞ近所に開業してゐる醫者の家を敎へただけだつた。それは、ドクタア・ビリングといふ醫師だつた。ブラドン夫妻の來訪を受けたビリング醫師は、アリスを診斷して、別に何處も惡くないし、頭痛も大したことはないが、少し神經過敏になつてゐるやうだから、その心算で幾分靜養するやうにと注意した。アリスは、月經の數日前には、何日もこの程度の輕い頭痛に襲はれるのが常だつたので、その事を話すと、ビリング醫師も首肯いて、何か簡單な鎭靜劑のやうな物を吳れて、診察を終つた。かうして愛妻――?――の容態が何事もないと聞かされて、ブラドンは大いに安心の態でアリスを伴つてコツカア街の下宿へ歸つたのだつたが、この、花嫁を愛する餘り其の健康に細心の注意を拂ふ良人としての、一見平凡な、そして親切なブラドンの行動は、すべて巧妙に計畫されたもので、何も知らないアリスが、ブラドンの心盡しを悅んで唯々諾々と醫師へ同伴されたりしてゐるうちに、彼女の死期は刻一刻近づきつ〻あつたのだ。實際、殺す直前に斯うして一度醫者を訪問して置くことは、アウネスト・ブラドンことジョウヂ・ジョセフ・スミス ―Geoge Joseph Smith―の常習的遣り口であり、彼の犯罪における一つの形式であり、スミスにとつては既に殺人手續の一階梯になつてゐた。それが水曜日のことで、その四十八時間後といふから、金曜日の夕方である。

アリス・ブラドン夫人が入浴したいといふので、その用意をして置いて、クロスレイ家の人々は、臺所に集まつて晩飯の食卓に就かうとしてゐた。その前に、風呂の仕度が出來たので、女將のクロスレイ夫人が二階のブラドン夫妻の部屋へ行つて其の旨を告げると、良人のアウネスト・ブラドンは不在のやうだつたが、寢卷一つに着更へたアリスが出て來て、直ぐ廊下を隔てた浴室へ這入つて行くのを見た。浴室は二階にあつて、英吉利邊りの下宿屋の多くと同じ建造で丁度臺所の眞上に當つてゐた。

クロスレイ夫人が湯が出來たと報せて來た時、ブラドンも部

屋にゐたのだつたが、女將の聲を聞くと、何故か彼は、それとなく扉の内側へ隱れるやうにして、見られまいとした。そして、女將が階下へ降りて、アリスが浴室へ這入つて行くと、彼も直ぐ後を追つて浴室のドアを叩いた。

『おれだよ、アリス。一緒に這入らうぢやないか。』

良人の聲なので、アリスは、一度掛けた鍵を廻して、快くブラドンを浴室へ入れた。彼女は××の姿で、浴槽に片脚入れて媚びるやうに笑つてゐた。西洋の浴槽だから、小判形に細長く、一人が寢て這入るやうに出來てゐる。ブラドンは、看護婦上りの若いアリスが一絲も纏はない肉體をその湯槽に長々と仰臥させるのを眺めてゐた。淺い透明な湯が、桃色の皮膚に映えて搖れてゐた。ブラドンは自分も衣服を脫ぐ態をしながら、湯の中へ手を入れてみた。そして、すこし微溫いやうだと言つて、湯の栓を捻つた。それから、湯の量が少いといつて水の栓も開けた。かうして二つの栓から奔る湯と水の音で、彼は次ぎの行動に移る前に、豫め物音を消して置かうとしたのだ。實に用意周到なやり方だつた。首から上だけを出して湯に浸かつてゐたアリスは、突然良人の手が頭にかゝつたので、笑顏を上げた。浴槽へまで來て狂暴な愛撫をしやうとする良人を、嬉しく思つたのだ。ブラドンは片手でアリスの上半身を押さへ付けて、片手で彼女の顏を×××へ捻ぢ込まうとした。はじめアリスは冗談と思つたのだが、良人の手に力が加はつて、眞剣に×めやうと掛つてゐるので、急に狼狽して踠き始めた。しかし間もなく彼女の××は湯の中に沒して、暫らく四肢を振つて悶えてゐたが、直ぐぐつたりとなつて、その××は浴槽一ぱいに擴がるやうに見えた。騷ぎは、ブラドンの意圖した通り、水音に覆はれ浴室外へは少しも洩れなかつた。アリスが溺死したと見ると、ブラドンはそつと部屋へ歸つて、買つておつた鷄卵を六個、その商店の紙袋に入れた儘抱へて誰にも見られないやうに表玄關からコッカア街の通りへ出た。

その時、浴室の眞下の臺所でクロスレイ夫人を中心に食事をしてゐた連中は、天井から湯が洩つて、壁を傳はつて流れ落ちて來るので、大騷ぎになつてゐた。ブラドン夫人が湯の栓を出しつ放しにして、浴槽から溢れ出てゐるに相違ない。夫人に注意しやうと言ふので、口々に大聲に呼ばはつてゐるところへ、裏口の戸を開けて、ブラドンが臺所へ這入つて來た。彼は、翌日の朝飯の用意に、いま買つて來たところだといつて、抱へてゐる商店の紙ぶくろから鷄卵を六個出して見せたりした。いそいで步いて來たとみえて、赤い顏をして、呼吸を彈ませてゐた。そして、鷄卵の値が下つたなどと無駄話しをはじめたが、二階

の浴室から湯が滴り落ちて一同が立ち騒いでゐるので、彼は急いで二階へ駈け上りながら、階段の中途から大聲に叫んだ。

『アリス、お湯が溢れてるぢやないか。』ブラドンは烏渡部屋を覗いてから、浴室へ這入つて行つたかと思ふと、直ぐ飛び出して來て、ブラドン夫人が浴槽に「死んだやうに」なつてゐるから、至急ビリング醫師を呼んで呉れるやうにと、階段の上から喚いた。醫者は直ぐ來た。クロスレイ夫人の案内で浴室へ這入つて行くと、ブラドンが浴槽内の妻の身體を凝見めて放心したやうに立つてゐた。ブラドン夫人は、顔の半分を湯の中に漬けた儘、片手と片脚を浴槽の縁にかけて、丁度湯から出やうとして踠いてゐる姿勢で死んでゐた。餘程苦しんだとみえて、夫人は、湯の中で解れた頭髮を口中一ぱいに飲み込んでしつかり噛んでゐた。ビリング醫師が一瞥して施すべき策のないことをブラドンに告げると、彼は醫師に取り縋つて、何度も繰り返した。

『先生、ほんとに駄目でせうか。何とかならないでせうか。』

ビリング醫師は威厳をもつて答へた。

『お氣の毒ですが、手遅れです。かういふことのないやうに、あれ程御注意申し上げて置きました。』

鷄卵を買ひに出たといふ現場不在證明と、この愁嘆場によつて、ブラドンは巧みにクロスレイ夫人はじめ下宿の人々を瞞着して、底を割ることなくこの芝居を打ち通したのだ。殊にその最も巧妙な部分は、事件の二日前にビリング醫師を訪問してアリスの診察を乞ふたことだつた。何んな健康體でも、醫師が診れば何處か二三不完全な個處があるに相違ない。神經衰弱の氣味だとか、少し心臓が弱いやうだとか、さういふ漠然とした故障は、誰にでもあるものだ。また醫者の身になつてみれば、診察を乞はれた以上、專門の手前もあり、無理に探しても、一つ二つ悪いところを發見して、それを幾分誇張して患者の注意を促さなければならないといふ心理もあるであらう。その患者が、間もなく斯うして急死を遂げたのだから、ビリング醫師は内心不思議に思ひながらも、外面は幾らか自分の職業的慧眼を誇るやうにさへ見えた。勿論その場で死亡證明書を書いて署名した。

「故アリス・ブラドンは、十二月十二日、ランカシヤア州ブラックプウル町コツカア街、クロスレイ夫人方の浴槽において、過熱の浴湯のため、心臓の發作を招發して過失死を遂げたるものとす。」

これさへ手にすれば、ブラドンは安心出來た。アリス・バアナムは、かうして良人アウネスト・ブラドンの「涙」のうちに葬られたのだつた。

誰一人ブラドンを疑ふ者のなかつたことは、言ふ迄もない。ビリング醫師は勿論、クロスレイ夫人も、自分がビリング醫師を敎へて、ブラドンが其處へアリスを伴れて行つたことを知つてゐるので、彼らのすべてにとつて、ブラドンは大して惡くもないのに花嫁の健康を氣にして醫者に見せる程の、可笑しい位な、代表的愛妻家でしかなかつた。その「愛妻」のアリスを失つたブラドンに下宿中の同情が集まつたのは當然だつた。

ところが、アリスの死後、間もなくブラドンの態度が一變して何ら妻の死を悼むやうな樣子がなくなつたので、クロスレイ家の人々は、それを非道く不愉快に思つて、排斥の末、彼を下宿から追ひ出すに到つた。ブラドンは只眞個の彼が出て來たに過ぎないのだが、由來ランカシャアの人は、田舍者の中でも道義感の強い頑固な人達となつてゐるので、この、最近死んだ妻のことをけろりと忘れたやうに陽氣にしてゐるブラドンを、看過することは出來なかつたのだ。ブラドンが下宿を出る時、クロスレイ夫人が面と向つて痛罵すると、彼は平然として答へた。

『死んだやつは、死んだやつさ。』

このWhen they're dead, they're dead といふ、アウネスト・ブラドンことジョウヂ・ジョセフ・スミスの言葉は、彼並びに彼と同型の常習殺人犯の病的に冷酷な心状を説明する最適の言辭として、いまだに犯罪研究者の間に記憶されてゐる有名なものである。實に George Joseph Smith は「一杯の葡萄酒を傾けるやうな」日常的な氣易さをもつて、次ぎつぎに花嫁として彼の前に現れる女を殺し廻つたのだ。そして、一人殺す毎に、彼は内心呟いたに相違ない。「死んだやつは、死んだやつさ。」と。この種の犯罪者は、常にこの徹底した利己觀念の上に立つてゐて、その上自己の犯罪能力と隱閉の技巧を信ずること頗る厚いのを特徴とする。從つて、殺した方が目的に適ふ場合には、自らの逡巡や反省なしに、平氣で殺人を敢行するのである。そして、that's that として、直ぐに忘れる。ブラドン本名スミスの言つたWhen they're dead, they're dead の一言は、この意味で、その間の心理的消息を説明して餘す所ない。實際このスミスは、多殺者列傳の中でも第一位に推さるべき傑物だ。その細心到らざるなき注意と、事件に當つて先づ周圍の人を完全に欺す俳優的技能とは、正に前古未曾有のものと言はれてゐる。また彼は、犯罪史に、一つの祕密な「家庭的殺人方法を加へた發明家でもあつた。それがこゝに言ふ「浴槽の花嫁」なる天才的な獨創である。長く氣づかれずに過ぎたのだつた。

性的動機よりも、スミスの女殺しはむしろ稼業(ビジネス)として金錢が目的だつた。この點一層彼をして冷血動物の感あらしめるが、女殺しと言へば、このスミスこそ眞の女殺しであらう。

アウネスト・ブラドンと變名したジヨウヂ・ジヨセフ・スミスと、看護婦アリス・バアナムとが相識になつたのは、英國南部の海岸町アストン・クリントンだつた。バアナム家は、相當手廣くやつてゐる石炭屋で、父母と、アリスのほか五人の兄弟姉妹があつたが、ブラドンのスミスは、最初から其の誰にも氣受けが宜くなかつた。ぐうたららしい彼の容貌や態度が、家人の氣に入らなかつたのだ。殊に父親の老バアナムは、非道くブラドンを嫌つて、娘に會ふために家を訪問して來ることをきつぱり斷はつた。それが十月三十一日だつた。すると、その四日後に、ブラドンに唆かされたアリスは、この猛烈な家族の反對を無視して、彼と結婚してしまつた。そして其の翌日、ブラドンは早速「愛妻」アリスを五百磅――約五千圓――の生命保險に加入させてゐる。

これでアリスの呼吸に五百磅の値段が付いた譯だが、他にも彼女は、自分名義のさゝやかな財産を有つてゐた。百磅といふから約千圓だ。大部分は父から貰つたものだが、殘餘は自分の貯金だつた。この金は、父のバアナム老が管理してゐたので、結婚後數日經て、アリスは家父に手紙を書いて、直ちに全部送金するやうに頼んでやつたが、幾ら待つても送つて寄こさないので、十一月廿二日に、再び催促の手紙を出した。それでも、何の返事もない。アリスは、中二日置いて、父を訴へる意氣込みで辯護士の許に相談に行つたりしてゐる。ブラドンが陰にあつて、一日も早く現金を取寄せるやうにアリスを急ぎ立てた樣子が、想像されるのである。斯うなると、父のバアナム老も負けてゐない。同じく辯護士を訪問して對策を講じた結果、彼としては、娘の婿であるブラドンといふ人物に、明瞭でない個處があつて不安を感じてゐて、その爲に送金しないだけのことなのだから、改めて、其の辯護士が、依頼者バアナム老人の代理格でブラドンに一書を飛ばして、彼の出生、家族關係、職業、財産等、彼自身に關する滿足な說明を求めたのだが、これに對して書き送つたブラドンの返事なるものは、斯ういふ犯罪者の無責任な嗜惡戲性を發揮してゐて、特徵のあるものである。彼は、老バアナムは自分とアリスとの結婚を承認しないといふ理由の下に、アリスの金を送つて寄こさないものの、アリスは成年に達してゐるので、その結婚は父の承認を經ないでも有效なのだから、バアナムの立場は、何ら法律的に根據のあるものでないことを熟知してゐたし、又相手方の辯護士がそれを承知し

切つてゐることも心得てゐたので、彼の返書は、實に惡ふざけを極めたものだつた。ブラドンは、この手紙の中で、自分の母は荷馬車の馬であり、父は其の御者、姉は曲馬團の調馬師、兄弟は凡て道路の地均し用蒸氣ロウラアに乘組んでゐる小意氣な船員達だと、ユウモラスな心算だらうが、この頃流行るナンセンス文學みたいな、何だか要領を得ないことを言つてゐる。

到々仕方なしにバアナム老が負けて、百四磅の小切手を送つて寄こしたが、それが眞つ直ぐブラドンのポケットへ落ちたことは勿論だ。十二月八日に、アリスの保險證書が會社から屆いた。即日彼は、單に形式だからとアリスを說いて、遺書の交換をやつてゐる。それに依つて、何方でも先に死んだ方が、殘る者のために財產の全部を遺して逝くことに法律的に決定した譯けだが、何方が先に死ぬかとは、ブラドンがアリスを一眼見た時から、疾うに決まつてゐたのだ。斯うしてすつかり準備が出來たところで、ブラドンはアリスを伴つてブラックプウルの町へ出たのである。

これが一九一三年の十二月九日で、三日後の十二日には、早くもアリスの遺書が口を利くことになつた。アリスの所有品と貯金と保險金を掻き集めたブラドンは、本名のスミスになつて、情婦のエデス・ペグラアの許へ歸り、襟襟も着けずに上靴（スリッパ）一つで家の中をのろのろしてゐるやうな生活を數個月續けた。

すると、翌一九一四年の八月のことだ。

アリス・リイヴル──偶然にも前の被害者と同じ呼名である──といふ女中が、ボウンマスで、チャアルス・オリヴァ・ジェイムスと呼ぶ男と相識になつた。チャアルス・オリヴァ・ジェイムスなんて、山田太郎みたいに變名々々してゐて、餘り上手な變名とは言へないが、とにかく、この Mr. Charles Oliver James は、知り合ひになつた四日目に、電光石火的にアリス・リイヴルに結婚を申込んだ。アリス・ルイヴルは、女中乍らも眞面目に働いて、七十磅の銀行預金と家具を少しとピアノを一臺持つてゐた。彼女は、チャアルス・オリヴァ・ジェイムスの結婚の申込みを早速承諾して、ピアノを十四磅で賣り拂つて、結婚の日の九月十七日に、その金と一緒に、預金引出しの委任狀に署名までして良人チャアルス・オリヴァ・ジェイムスに渡してゐる。結婚式を擧げたのはウイルウヰッチの教會だつた。同日それから暫らくして、二人はラヴエンダア・ヒル銀行に現れて、預金の全部をドろした。そして直ちにブロックウエル公園の近くにデラフヰイルド夫人といふ老婦人の經營する下宿屋を發見して落着いたのだが、この家に浴室のあつたことは勿論である。

また、二三日して、チャアルス・オリヴァ・ジェイムス氏が、何

處も何ともないアリス・ジエイムス夫人を、近所の醫師アレキサンダア・ライスの許へ同伴して診察を乞ふたことも勿論である。花嫁の入浴、日用品を買ひに一寸外出したと見せかけたジエイムスの現場不在證明、浴槽に於ける花嫁の溺死、アレキサンダア・ライス醫師の簡單な死亡證明書、涙の葬ひ等、凡て前の事件と同じであることも、亦勿論である。When they're dead they're dead. 明瞭過ぎる事實だ。

3

Bessy Constance Annie Mundy といふ長たらしい名の女は、ブリストルのロイド銀行出張所支配人 Reginald Mundy の娘で、三十三歳になる老孃だつた。父の遺産二千五百磅を相續してゐたが、それは後見人になつてゐる伯父のパトリック・マンディが保管して、幾つにも分割して確實な事業に投資してゐたので、ベシイ・コンスタンス・アニイ・マンディの實際の所得は、年利僅に百磅にもつかなかつた。が、ベシイ・マンディは、明らかに保守的な、内氣な女だつたに相違ない。この少額な年收に滿足して、財産のことは凡て伯父パトリック・マンディに任せきりにした儘、自分は、殆んど宗教的な、飽く迄靜かな獨身女の生活を守つてゐた。しかし、ベシイ・マンディも女性なのだし、それに、三十三なら、晩婚の女の多い英吉利邊りでは、そんなにオールド・ミスの組でもないので、何時かは彼女の前に現れるであらう騎士を待つ心は、無意識にも絶えずあつたのだらう。大戰前の都會に於ける女性の冒險と言へば、精々下宿屋を移り歩く位のものだつたが、このベシイ・マンディもそれに倣つて、下宿屋から下宿屋へと、自由なやうで自由でない、何か素晴しい興味が待つてゐるやうで其の實何らの興味も待つてゐない、大都會で自分の影を追ふやうな、あの妙に儚い獨身者の移轉生活を送つてゐた。このベシイ・マンディ孃が、Henry Williams――これも山田太郎的に、變名で候と言はん許りの變名だ。何れもスミスは能のない變名ばかり選ぶ癖があつたやうだ――に會つたのは、さうして盛んに引つ越して歩いてゐた素人下宿の一つであつた。これが日本の話しなら、差し詰め神田か本郷の下宿の場が眼に浮かんで、舞臺の想描も容易なのだが、西洋だつて、同じことだ。下宿屋の戀は、急テンポをもつて進展するに決つてゐる。殊にこの場合は、相手が職業的「女殺し」ヘンリイ・ウヰリアムズである。ベシイ・マンディの探してゐたものが冒險と退屈凌ぎなら、刻々彼女は、理想的なそれに行き當つた譯だ。しかも、飛んでもない大冒險の後、遂に彼女は、既う退屈を感じる必要のない場所へ行つてしまつた。例によつて、裸

體の儘浴槽から天國へ旅立つたのである。

ヘンリイ・ウヰリアムズは、脊の高い、小綺麗な紳士だつた。素走つこく動く眼と、ロマンテイツクな顏の所有主だつたとある。氣位の高いベシイ・コンスタンス・アニイ・マンデイ孃から觀れば、些さか教養の點に不滿があつたやうだが、元來性的結合には、何らの條件が豫在しない。それに、下宿屋を移り歩いてゐたといふのは、つまりベシイ・マンデイは三十三になつてゐて、淋しかつたのである。賑やかな讃美者の群に取り巻かれてゐる女王よりも、自分だけの女王の孤獨の女のはうが、近代の都會では、より危險率が高いのだ。

しかし、この時は、結婚といふところまで漕ぎつけるのに、ヘンリイ・ウヰリアムズも可成りの努力を要したのだつた。それは、ベシイ・マンデイが珍しく古風な、宗教心の強い女だつたので、傳統的な婚約の期間として、彼は相當の日數を待たなければならなかつた。が、結局二人はウエイマスへ出掛けて行つて、三日の後、其處の教會でこつそり式を擧げた。老孃ベシイ・コンスタンス・アニイ・マンデイは、遂に聖なる鎖によつてヘリシイ・ウヰリアムズに繋(つな)がれたのである。その時の結婚登錄を見ると、女のはうは判つてゐるが、ヘンリイ・ウヰリアムズの項には、斯うある。

「Henry Williams, picture-restorer, son of Henry John Williams, commercial traveller.」

繪畫修復師といふ職業になつてゐるが、額緣の入れ換へ位絡をしたり、繪の手入れや掃除をする、一種の骨董屋の下廻りみたいなものであらう。實際ジョウヂ・ジョセフ・スミスは、以前からブリストルで骨董屋を表向きの稼業にしてゐるのだつた。

例によつて、二人は教會を出ると直ぐ、其の足で近邊の辯護士を訪問して、夫婦間の財産關係を「明日」にして置くことにした。この、結婚と同時に「必要な事務」を手早く片附けることは、スミスの常套手段になつてゐた。結婚直後だと、女は未だ浮々してゐるし、それに、これから新生活に這入る心算で大いに意氣込んでゐるところだから、萬事彼の思ふ通りに取決め易いといふのである。ところが、このベシイ・マンデイの場合には、辯護士の許へ行つて始めてヘンリイ・ウヰリアムズは一つの驚きを味は、された。それは、彼女は相當の財産を有つてゐるやうな口振りだつたのが、よく調査してみると、月々の小遣の中から伯父なるパトリック・マンデイが幾らか宛保留してベシイの名で積立て、置いた百三十八磅といふものが自由になるだけで、他は一切いま言つた後見人の伯父が財布の口を押へてゐて、本人のベシイでさへ手を觸れることが出來ないといふの

だ。これは何とも當ての外れた話で、ヘンリイ・ウヰリアムズは尠からず勝手が違つたが、それでも百三十八磅は百三十八磅である。早速辯護士の方からパトリツク・マンデイへ姪の結婚を報せて、その金を送つて寄こすやうに言つてやると、伯父が愚図々々言ひ出して矢張り辯護士を代理に立てたが、結局、法律上ベシイの名義になつてゐる金を送らないといふ譯には往かないので、數日後、金は、ベシイの手に、と言ふより、良人ヘンリイ・ウヰリアムズの手に這入つた。すると其の日に、今度は彼がどろんを極めたのだ。烏渡其處らへ行くやうな顔をして出たきり歸らないので、幻滅と悲痛に氣の拔けたやうになつたベシイ・コンスタンス・アニイ・マンデイは、それから間もなく、ウエストン・スウパア・メアのタケツト夫人の下宿へ移つて、獨り靜かに心の痛手を癒すことになつた。一方ヘンリイ・ウヰリアムズのジヨウヂ・ジヨセフ・スミスは、ブリストルに待つてゐる情婦エデス・メエベル・ペグラア——Edith Mabel Pegler の胸へ歸つてゐた。ベシイ・マンデイから捲き上げた金で、彼らの上に、また當分情痴と懶惰の生活が續いた。

それが二年も續いてゐる。其の間は犧牲者が無い。この期間をスミスはペグラアと一緒にブリストル、サウセンド、ウォルサムストウ、倫敦と住み歩いて、最後に又ブリストルへ歸つて來た。それが一九一二年の二月で、本稿の冒頭に記した「アリス・バアナム事件」を先立つ約二個年のことである。筆者は事件を主眼に、年代を追はずに此の記述を進めてゐることを、この機會に一言して置き度い。

二月にブリストルへ歸つて來た時は、スミスは財政的に可成り逼迫してゐた。直ちに女狩りに着手して、ウエストン・スウパア・メアへ出掛けた。そして再びベシイ・マンデイに會つたのだが、初めて知つた男のヘンリイ・ウヰリアムズを、ベシイは忘れ兼てゐたのだらう。戀は思案の外といふ眞理に、洋の東西はない。あゝして結婚後直ぐ金を浚つて姿を晦ました男ではあるが、ベシイは再會と同時に凡てを許して、又直ちに彼と同棲生活を始めた。が、其の前に、幾ら夫婦の間でも金錢のことは明瞭にして置かなければならないとヘンリイが主張して、彼は、二年前に持逃げしたアリスの金に對して、この時改めて借用申候一札之事を入れてゐる。しかも四分の利子といふことまで決めたのだから、念が入つてる。水臭いやうだが、形式は飽く迄も形式として整へて置かなければ氣が濟まないとヘンリイが言ふと、ベシイは、「歸つて來た良人」の「男らしい態度」に、涙を流して悅んだ。これで、ベシイの方は難なく納まつたが、さうまでして堅い所を見せても、肝心の伯父パトリツク・マンデイに

は、依然として好印象を與へなかつた。伯父はこのヘンリイ・ウヰリアムズなる人物に益々不信と不安を募らせる一方で、法定後見人である立場を固守して、保管中のベシイの財産から錢一文も廻すことは出來ないと斷然拒絶したのだ。これで、本人のベシイが生きてゐる間は、ヘンリイ・ウヰリアムズは其の二千五百磅に手を置く機會が絶對に無くなつたわけである。ベシイが死ねば、遺言に依つて遺産を相續することは、比較的簡單なのだ。もう一つ、今度彼が決行を急いだ理由は、伯父がその財産管理人としての權利を伸長させてベシイの全財産を政府の年金に組み更へはしないかといふことを懼れた爲だつた。伯父が危險を感じてゐるとすれば、さういふことが出來るのである。斯うすれば、自分の責任が輕くなると同時に、如何にヘンリイが策動したところで、手も足も出ないし、ベシイも生涯を通じて完全に保證されることになるのだから、伯父がこの手段を操るかも知れない可能性は充分にあるのだつた。ヘンリイ・ウヰリアムズは狼狽して、着々「浴槽の花嫁」の準備に取り掛つた。

機會を窺つてゐる内に、容赦なく日が經つて終ふ。五月半ばになつた。英吉利の春は遲いが、この頃は一番好い時候である。公園の芝生がはち切れさうな綠をたゝへて、住宅區域の空に雲雀の聲がする。ライラックが香つて、樹の影が濃い。ヘンリイ・ウヰリアムズ夫妻は此の時までハァン・ベイに住んでゐたが、此處では、近處に相識も出來てゐるので、事件後の目の九月鈍いことを思つて、ヘンリイの主唱で、五月廿日に、二人はハイ街に一軒の古風な、小さな家を借りて急に移轉した。赤煉瓦建ての、住み荒した不便な家であつた。この家を借りるに當つて、何うせ長く居ないことを想見したものか、ヘンリイは一年の家賃の中から少し手附けを置いただけで引つ越してゐる。實に氣味の惡い轉居であつた。

七月八日に、夫妻は同町の一辯護士を訪れて、彼の所謂「形式」として、ヘンリイが先づ自己の所有の凡てを妻ベシイに讓す旨の遺言書を作製して署名した。ベシイも一通同じ意味の遺言を調へて、型通り辯護士立會の下に夫婦それを交換した。遠い慮りとして、ベシイはこの良人の處置を悅んだが、案外それは近い慮りだつたのだ。これで安心したヘンリイは、直ちに第二の仕度を急いだ。

先づ風呂槽を買つてゐる。けちな借家で、家に浴槽が附いてゐないので、彼はヒル街の金物商へ出掛けて行つて、一度目的に役立ちさへすれば好いのだから、粗末なので澤山だ。一磅十七志六片で一番安價い鐵りのやつを買つた。それも、はじめに磅といふのをしつこく値切つて負けさせたのだ。資本は必要の

範圍内で少額な程宜いといふので、細かい男だつた。

4

三日後の七月十一日に、同じ町に住む開業醫フレンチ醫師の許に、ヘンリイ・ウヰリアムズが夫人を伴つて診察を受けに來た。聞いてみると、夫人に輕微な發作が起るといふのである。それは、夫人のベシイ・マンデイが言ふのではなく、良人のヘンリイが話したのだつた。丁度其の二三日酷暑が襲つて來て、急病人が多く、健康な人も何らか身體に變調を感じ易い時だつたので、只それ丈けのことに過ぎないと、ベシイ・マンデイのウヰリアムズ夫人は、醫者へ來て迄も輕く抗辯してゐたが、兎に角と言ふのでフレンチ醫師が診察すると、ヘンリイの話した容態が先入主になつてゐた故か、醫師は簡單に癲癇の疑ひがあるといふ診斷を下した。ヘンリイは豫め癲癇の初期の症状を調べて行つて、それに適合するやうに言つたのであらう。フレンチ醫師が醫學校を出て間もない、廿歳代のほやほやだつたといふことも、彼にとつては好都合だつたに相違ない。斯うしてベシイ・マンデイは嫌應なしに外部から癲癇の兆候があるといふことに決められてしまつたのだつた。ヘンリイは大いに「心配」して、其の日から無理やりベシイを寢臺に寢かせきりにしてしまつた。

翌十二日に、念のためフレンチ醫師が往診すると、何處も何ともなくてぴんぴんしてゐるヘンリイ夫人が、すつかり病人めかして寢臺に寢かされてゐた。醫師は烏渡滑稽に感じて、癲癇と言つても、輕い兆候が見える程度のものだから、そんなに用心する必要はないと言ひ殘して歸つた。が、明けて十三日――ベシイ・マンデイにとつては確かに十三の凶日だつた――フレンチ醫師は、「周章狼狽」して飛び込んで來たヘンリイ・ウヰリアムズによつて愕かされた。「癲癇患者」のベシイ夫人が、浴槽で「死んだやうになつて」ゐるから、直ぐ來て見れと言ふ。其の時のヘンリイは、傍の見る眼も氣の毒な程、狂氣のやうに取り亂してゐた。直ちにハイ街の家へ馳け付けてみると、果してベシイは、同家屋根裏に取り附けられた金一磅十七志六片也の鐵力の浴槽の中で、片手に石鹸を握つた儘、冷く固くなつてゐた。斯うしてベシイ・コンスタンス・アニイ・マンデイは、入浴中の「癲癇の發作」で、裸體といふ失禮な風俗の儘見事に昇天してしまつた。何しろ突嗟の事で、着物を着る暇がなかつたのだらうと、ヘンリイ・ウヰリアムズのジョウヂ・ジョセフ・スミスが後で裁判長を揶揄してゐる。しかし、繪で見る天使はみんな裸體だから、あれで一向差閊へあるまいと彼は此の悲劇に不謹愼なユウマアを弄して滿廷を苦笑させた。これは後日のことで、兎に角、こ

んな事がないやうに、醫者にも見せてあれほど注意したのだ。それだのに、大丈夫だなどと言つて入浴したりするから、取返しの付かない事になつて終つたと嘆き悲んで、その當座彼は、半狂亂」の有様だつた。

これはスミスが最もうまく遣つた商賣(ディル)の一つだつた。殺す前にベシイに唆かして、自分は時々發作に襲はれるやうになつたといふやうな事を手紙に書いて、方々の親類へ出させたのだ。その中にはヘンリイとの愛の生活といつたやうな惚氣混りの文句もある。そして、自分は良人を愛するし、良人も好くして呉れるから、良人を全財産の相續人として遺書を作つたと報告してゐる。何しろ故人がまだ生きてゐるうちに手記したものだから、此の手紙はヘンリイにとつて大きな便宜となつた。その爲に、屍體の解剖を主張した伯父パトリック・マンディの要求も斥けられて、フレンチ醫師の通り一遍の死亡檢案書が其の儘通つた。事件の四日目から彼は相續の手續を始めてゐる。親類の中には死因に疑念を挾む者もあつて、パトリック・マンディを先頭に立て、一時は訴訟になりさうな形勢だつたが、何しろベジイの遺言書に法律上の瑕瑾が無いので、遂に折れて手を引いて終つた。二千五百磅――二萬五千圓――はヘンリイ・ウヰリアムズの有に歸した。

この時娼婦のエデス・ペグラアはマアゲイトでスミスの歸りを待つてゐた。エデスはこのスミスの活躍を少しも知らずに、商賣物の骨董の事で各地を旅行してゐることと信じ切つてゐたといふのだ。このベシイ殺しの後でも、われわれは、直ぐエデスのふところへ飛び歸つて、一緒に生活してゐるジョウヂ・ジョセフ・スミスを發見する。ベシイ・コンスタンス・アニイ・マンデイのことなどは、彼は既にけろりと忘れてゐた。When they're dead, they're dead だ。比較的大金を持つて來たことをエデスに説明して、加奈陀で掘出物をして思はない儲けにあり付いたのだと言つてゐる。約二年間、二人は呑氣に居食ひして暮らした。が、再びポケットが淋しくなつたスミスは、又ぞろ「掘出物」を搜して、今度は英國南部の海岸へ出掛けた。一九一三年の秋だつた。さうしてその十月には、其處のアストン・クリントンであのアリス・バアナムに接近してゐたのだ。

一九一四年の十一月だつた。

クリフトンの町である。牧師の娘で、他家へ小間使ひに行つてゐるマアガレット・エリザベス・ロフテイといふ卅二になる女が、ジョン・ロイド――John Lloyd――と呼ぶ男とふとしたことから相識になつた。丁度この時マアガレット・ロフテイは失戀に惱んでゐたので、此の痩せぎすで脊の高い、色白のジョン・

ロイド君から優しい同情の言葉を寄せられると、その感謝の心持は必然的に戀に變つて、其處へロイド君が結婚の申込みをしたものだから、二人は、急天直下的に、同月十七日にバス町で結婚式を擧げた。式後直ちに、ロイド君は花嫁を保險會社へ伴れて行つて、七百磅の生命保險を附けた。それから、花嫁の金として銀行にあつた、たつた十九磅を引出させて、その中から二人分の汽車賃を拂つて倫敦へ出た。上京する前にロイド君はハイゲイト區オルチヤアド街のウイルドハアゲン夫人の下宿へ手紙を書いて部屋を豫約して置いた。ところが、其の家へ着いてみると、未だ部屋の用意が出來てゐないで、二三時間してから來て呉れといふのだ。仕方がないからロイド君はお上りさんの花嫁を引き廻して、ぶらぶら倫敦の町を見て歩いて時間を消した。が、下宿の女將のウイルドハアゲン婆さんは、二人が餘り貧弱な風體をしてゐるので、初め部屋を見に來た時から、さう言つて斷はる心算だつたのだ。ウイルドハアゲン夫人は、名前で判る通り獨逸人である。時は一九一四年だ。其の年以後の四年間、英國中の獨逸人と獨逸名の人間に、警察が密接な看視の眼を光らせてゐたことは、言ふ迄もない。このウイルドハアゲン家へも、始終刑事が出入りして、まるで家族の一員のやうに臺所で煙草なんか吹かしてゐた。で、此の時も、丁度その刑事の一人が來合はせてゐたので、今引返して來る若い夫婦者を何とかして斷はり度いものだとウイルドハアゲン夫人が言ふと、刑事はお易い御用だと引請けて、手ぐすね引いて待つてゐた。其處へ、もう宜い頃だとロイド君夫妻が歸つて來たので、女將の代りに刑事が飛び出して行つて、そこは心得たもので、あつさり脅かして追つ拂つて終つた。部屋を拒絶するにしても、何故刑事が應對に出たのか合點が往かない筈だが、ジヨン・ロイドの方は顏色を土のやうにして、花嫁の袖を引いて狐鼠々々立ち去つて行つた。ビスマアク街一五五にブラツチ夫人といふのが矢張り素人下宿をやつてゐる。間もなくロイド夫妻は此家へ現れて間借りを申込んだ。不思議と言はうか不氣味といはうか、此處で妙に風呂の事を氣にして詳しく訊いたのは、ロイド夫人マアガレツト・エリザベス・ロフテイだつた。

計畫は順調に運びつゝある。方式通りに、ロイドはマアガレツトを連れて附近の醫者ベイツ氏を訪問した。今度は、妻が猛烈な頭痛を訴へるから診て貰ひ度いと言ふのだ。良人がさう言ふのを聞き乍ら、傍でマアガレツトは、その猛烈な頭痛のする妻と言ふのは一體誰のことだらうといふやうな不思議さうな顏をしてゐた。兎も角とあつて一應マアガレツトを診察したベイツ醫師は、「患者が恐しく健康體」なので變に思ひ乍らも、何し

ろ附添の良人が頻りに頭痛がするすると主張するものだから、そんなに頭痛がしますかと本人に訊くと、本人も一寸考へてみて、さう言へば少し頭痛がするやうですと答へる。自分の身體の癖に妙な返辭だとは感じたが、少し熱もあるやうなので、要するに風邪氣味なのだらうと言ふことになつた。やつと悪いところが出來て、ロイドも安心するし、ベイツ醫師も面目を施した譯だ。型通り處方箋を書いて、部屋へ歸つて寝るやうに言つた。二人は辭し去つた。が、部屋へではなかつた。直ぐ其處から辯護士へ廻つて、例に依つて互ひを相續人にした遺書を書いて手交し合つてゐる。財産も何もないマアガレット・エリザベス・ロフティの相續人になつたところで仕樣の無いやうなものだが、この男は、「形式は形式として整へて置く」ことが、大好きだつたとみえる。それに、例へ服一枚靴一足にしろ、死んで往くと決定した女――尤も女自身は知らないが、人間は多くの場合自分の死期を知らないものだから、これは無理もない――その女の身に附いてゐる物は、何に依らず一切合財貰ふ事にして置いて、一向差閊へない。何うせ死んで終へば用のない品物だから、この自分が「相續」して金に換えるんでもなければ無駄になると考へたのだらう。實際何うも細かい男だつた。

5

ベイツ醫師の所から辯護士へ廻つた其の日である。午後七時半頃だつた。ロイド夫人が入浴し度いと言ふので、その仕度をして、お神のブラッチ夫人が階下から呼ばはつた。

「ロイドの奥さん、お湯が立ちましたよ。」

はあいと答へて、直ぐ階上のバス・ルウムへ這入る氣配がした。ロイドとマアガレットと、二人一緒に這入らうと言ふのだつた。先づマアガレットが、着てゐたガウンを脱いで、含羞み乍ら、未だ處女らしい所の殘つてゐる若々しい身體を浴槽へ沈めた。浴槽の花嫁だ。ロイドはそれに見惚れてゐて、着物を脱がうとしなかつた。マアガレットが促すと、彼は其の襦袢衣の腕まくりをして、浴槽へ近附いて來た。そして、靜かにマアガレットの顔へ手を掛けたので、彼女は、また接吻でもするのだらうと思つて、につこりして男の方へ顔を向けた。其處をロイドは、いきなり頭を掴んで、矢庭に×××へ捻ぢ込んで終つた。そして暫らく滿身の力で押さへ付けてゐた。階下に居たブラッチ夫人は、頭の上の浴室で踊るやうな跫音がするのを聞いた。鳥渡靜かになつた。すると一聲笑ふやうな聲がして、湯を撥ね返す音がした。何を風呂場で戯けてゐるのだらう。若い人は仕樣がないと思つてゐると、やがて溜息のやうな長い聲が聞こえた。ブラッチ夫人は別に氣に留めないで用をしてゐるところへ、何時の間にか良人のロイドの方が降りて來てゐて、階下の應接

間で彼の彈くピアノの音がしてゐた。ピアノの音は十分程續いた。その内にロイドは玄關から出て行つた樣子だ。表ての扉が大きな音を立てゝ締まつた。と思ふと間もなく、玄關でベルが鳴つた。ブラッチ夫人が出て行つて開けると、這入つて來たのは、今出て行つた許りのロイドだつた。つい其近くの大通り迄買物に行つたのだが、急いで飛び出したので歸りの鍵を持つて出るのを忘れた。ベルを鳴らして開けて貰つたりして濟まないと言つて、彼は快活に笑つた。買つて來た品物は、今度は鷄卵ではなかつた。トマトだつた。

『家内はまだ食事に降りて來ませんか。』

『いゝえ。』

『長湯だなあ。何をしてるんだらう。』

階段を上り乍ら、ロイドは大聲に呼んだ。

『出ておいでよ、好い加減に。』

返事がない。無い筈だ。その時は既にマアガレット・エリザベス・ロフティはスミスの所謂「裸體の天使」の仲間入りをしてゐたのだが、その妻の名を呼ばはり乍ら浴室へ這入つて行つたロイドは、忽ち慴がるやうに出て來て「驚愕用」の聲で叫んだ。

『來て下さい。家内が――。』

後は口も利けないと言つた態だ。ブラッチ夫人はじめ居はせた下宿人達が驅け上つて見ると、顏色を變へたジョン・ロイドが、着衣の濡れるのも構はず、夢中で浴槽の中の妻の屍體を抱き上げやうとしてゐた。その濡れた女の裸體を湯の中から釣り上げる姿態は、ジョウヂ・ジョセフ・スミスとして、彼が長年手がけて來た、古いふるい職業的ポウズであつた。マアガレットは湯槽の細くなつてゐる方の底へ鼻を押し付けて、臀部を湯の上へ突き出して、丁度回教の禮拜のやうな恰好で死んでゐた。何んな恰好で死なうと When they're dead, they're dead.

早速呼ばれて來たベイツ醫師が、細かく首を振つて哀悼の意を表し乍ら、「ロイドの爲に」死亡證明のペンを走らせた。自己の過失に出る浴槽内の溺死の例が、また一つ殖えた。風邪を引いて心臟が弱つてゐる時に、熱い湯の中に長く漬かつてゐたりするのが悪いのだ。眩惑を感じて卒倒したきり、再び起ち得なかつたのだらう。悲しむ可き不注意である。口々に慰められて、ロイドはぽかんと口を開けて空を凝視めてゐるかと思ふと、激しくマアガレットの名を呼び續けたりした。發狂か自殺の懼れがあると言ふので、忙しいブラッチ夫人に當分ロイドを見張る用事が附加された。が、三日後に、ロイドは泣きの涙の内に、シエハアズ・ブッシュの辯護士に頼んで、遺書に依つてマアガレットの遺した物を掻き集め、「泣く泣く」七百磅の保險金を受取つてゐる。が、このマアガレット殺しが、ブリストルの骨董商ジョウヂ・ジョセフ・スミスの最後の「掘出し物」であつた。自分

でも大いに意外だつたらう。足は何から付くか解らない。

殺人鬼とか殺人狂とか言ふ此の類型に屬する犯人には精神異常者が多いと言ふが、このジョウヂ・ジョセフ・スミスは例外だつた。細心を極めた手口を觀ても判るやうに、彼は實に組織的な、時として遙かに普通人を凌駕する明徹な頭腦の所有者だつた。普段は怠惰な癖に、「浴槽の花嫁」の場合にだけ異樣に敏活巧緻に働くのだから、其の點が既に病的だと言へば言へるけれど、彼の日常の言動を精査しても、何度專門家が鑑定しても、何ら精神病的反應を呈さずに、報告は何時もネガテヴだつた。それ丈け又彼が明るみへ引き出された時、世間の憎惡と恐怖は大きかつた。彼は建築家の如く平均を重んずる心で殺人の設計(プラン)を立て、軍略家のやうに先を見越して行動し、船長の持つ正確さで犯罪を運轉して、半生に亙つて人命の破壞とそれに依る財物の横領を職業としたのだ。何人の女を浴槽で殺したか、其の數は到々明確に判らずに終つた。スミス自身カタログを發表したことがないからだと言ふのだが、つまり、カタログになる程多勢だつたことは事實である。この犯罪が發覺した時、世人が色を失つて戰慄したのは無理ではなかつた。

George Joseph Smith は、ベスナル・グリインの保險會社員の家に生れた。一八九六年に軍隊から出て來ると直ぐ女狩りを始めて、その「浴槽の花嫁」なる新手は、十八年後に刑死する迄繼續された。頻繁に名を變へてゐるので、軍隊に這入つてからの足取りを拾ふ事は甚だ困難とされてゐる。一八九七年に女のことで投獄されたジョウヂ・ベエカアなる男が、先づスミスの變名の初まりで、其後、ライセスタアで一時菓子屋をしてゐたこともある。次ぎに知れてゐるのは、ジョウヂ・オリヴア・ラヴ――George Oliver Love――といふ三文小說の主人公みたいな名でカロライン・ビアトリス・ソウンヒルといふ十八歲の女と結婚してゐることだ。その時の結婚登錄に、スミスは父の職業を探偵と書いてゐる。皮肉の心算であらう。このカロライン・ソウンヒルの其後の消息も不明だから、矢張り「浴槽の花嫁」になつたのだらうと言ふことになつてゐる。が、スミスの眞個の活動は一九〇三年に開始されて、引き續いて六年間、彼は東奔西走席の暖まる暇もなく女狩りに從事して多忙を極めた。鳥渡被害者の名を擧げただけでも、メイ・ペリスフオウド、マアガレット・グロサツプ、ルウス・ホフイ等だ。この人鬼にも、只一人、財産が眼當てでなしに一生涯愛し拔いた戀人があつた。それが前から度々出てゐる情婦のエデス・メエベル・ペグラアである。スミスは、一九〇八年ブリストルで此の女――ペグラアは賣笑婦だつた――に會つて以來、不思議にもこの女に丈けは人間的な片鱗を見せて、「浴槽の花嫁」で金を得次第、何時も矢のやうにペグラアの許へ歸つてゐる。彼が九十磅の資本でブリストルの町に

小さな骨董屋を開いたのも、この女が居る爲だつた。結婚も此のペグラアとだけは、ちやんと本名のジヨウヂ・ジヨセフ・スミスでしてゐる。一生を通じて唯一度の例だ。眞實に愛してゐたとみえて、スミスはペグラアに何事も知れないやうに終始極度に骨を折つてゐる。不規則に家を明けて他の女と同棲してゐた期間のことを、彼は常に商用で國內又は外國へ旅行してゐたと告げてゐたので、ペグラアは最後までスミスの犯罪に氣が付かなかつた。一九〇九年に、サザンプトンのサリイ・ロウズ夫人が、偶然にも同姓のジヨウヂ・ロウズと名乘る男と戀に落ちて、同棲すると間もなく浴槽で「頓死」してゐる。同時に、ジヨウヂ・ジヨセフ・スミスは、三百五十磅許りの現金を握つて、ブリストルのエデスの所に歸つてゐた。それから三年程、彼等は平凡に、幸福な家庭生活を營んでゐたのだらう。烏渡「浴槽の花嫁」が途切れてゐるのだ。こんな怪奇な冷血漢が此の地上に唯一人の愛する者を持つたといふことは、考へてみると、不思議な氣がするのである。が、スミスも、何時までもさう一家の主人として納まつてゐる譯には往かない。「商用」が彼をペグラアの抱擁から引き離して旅に出した。あの「ヘンリイ・ウヰリアムズ」がベシイ・コンスタンス・アニイ・マンデイに逢つたのは、それから間もなくだつた。

マアク・トウェインの言葉だつたと思ふ。寢臺程人命に取つて危險な場所はない。其の證據には、多くの人は寢臺で死ぬぢやないかといふのがある。

實際その通りで、斯う近年になつて方々で女――それも奇妙に結婚して間もない女に限つて――が浴槽で急死をやるやうでは、花嫁に取つて浴槽程危險な場處はない。これは追々花嫁の入浴を嚴禁する法律でも出さなければなるまい。誰が言ひ出すともなく、そんな笑ひ話のやうな巷のゴシツプが、霧に閉された倫敦を中心に行はれ始めた。川柳の、割箸といふ身花嫁湯に這入り。紅毛人のことだからそんな洒落れた事は知らないが、何しろあつちでもこつちでも、花嫁が這入つたきり浴槽が寢棺になつて終ふのだから、花嫁專門の不思議な傳染病でも流行り出したやうに、微かに社會的恐慌を生じた。

スミスは一つ忘れてゐた事がある。新聞記事である。尤も何れの事件も他殺の疑ひ等は毛頭なく、單なる過失死として扱はれたのだから、大きくは載らない。巷の出來事と言つたやうな言はゞ六號活字の申譯的報道に止まる。が、小さな記事だから餘り人眼に觸れまいと思ふのは、大變な間違ひである。新聞といふものは、恐しい程隅から隅まで讀まれてゐるものだ。兎に角眼が多い。閑人が多い。花嫁が浴槽で死んだなどといふ記事は、一寸變つてゐるから、案外長く記憶してゐる人が尠くなかつた。それが斯う度々、何年か何個月か置いて、あちこちの「巷

の出來事」として現れたのでは、又かと言ふので、何時からともなく、うつすらとした不安と疑念が世間に漂ひ出すのは當然である。實際、スミスが遂に尻尾を捕まれたのは、この週期的に反覆する小さな新聞記事からだつた。

6

故アリス・バアナムの兄チャアルス・バアナムは、アストン・クリントンの家で、其の週の日曜新聞を讀み乍ら、おやと聲を上げた。其處に、マアガレット・ロフティが浴槽で變死した記事が小さく出てゐた。

スミスは近代に於ける新聞といふものの遍在性を失念してゐた許りでなく、數度の「悲劇的結婚」によつて、相手の女の親類や知人の間に多くの敵を作つてゐたことをも、無視してゐた譯ではないが、輕視してゐた。このマアガレット・ロフティの變死事件が新聞に載ると、二人の人が、英國内で地方を異にして同時に首を捻つた。二人とも、以前自分の識つてゐる場合と、その状況が餘りに相似してゐる事と、醫師の死亡檢案書が殆んど同一なのとに、不氣味な戰慄を感じたのだつた。その戰慄は、直ちに好奇的な興味に一變して、二人とも同じ動機から、言ひ合はした樣に同じ行動を採つてゐる。一人は、今言つたアストン・クリントンの故アリス・バアナムの兄チャアルス・バアナムで、他の一人は、あのブラックプウル町・リカア街の下宿のお人クロスレイ氏だつた。チャアルス・バアナムは、早速其のマアガレット・ロフティ事件の新聞記事を切り拔いて、それを、妹のアリス・バアナム事件の載つたブラックプウルの新聞と一緒に、對照を求めてアイルズベリイの警察へ送附した。それと殆んど同時刻に、クロスレイも二つの新聞を纏めて、彼は、地方警察へではなく、直接注意を促して倫敦警視廳へ送り附けた。

茲に始めて、倫敦警視廳はぴくつと耳を立てたのだ。

捜査主任として第一線に活動したのは、現警視總監、當時の警部アウサア・ネイル——Mr. Arthur Neil——だつた。この捜査は、實に長期に亙つて人知れぬ努力を拂はせられた、記錄的なものだと言ふ。それは丁度長夜の闇黑に山道を辿り拔いて、軈て峠の上に出て東天の白むを見るやうな具合だつた。一歩々々足を運ぶ如く證據を擧げて、事實の上に事實を積み重ねて行つたのである。これらの「浴槽の花嫁」事件——既にジャアナリズムが拾ひ上げて、逸早く "Brides of the Bath Mystery" といふ、探偵小說めいた名を冠してそろそろセンセエションになり掛けてゐた——が、其の多くの共通點に關係なく、凡て獨立の過失で、その間何らの鎖もないといふことは、偶然事として有り得るかも知れないが、鳥渡考へられない。必ず底を關聯する何ものかが存在するに相違ないといふ當初の假定は、ネイル

の胸中に於て、捜査の歩と一緒に確信に進んで往つた。アウサア・ネイルは、此の事件で名を成して、警察界に於る今日の地位に達したのだが、實際彼がスミス事件を手掛けたのは、適材適所であつた。僕はあれで自分の根氣を試した丈けのことだと、後年彼は人に語つてゐるが、その根氣が大變であつた。眼まぐるしい變名を追つて一々スミスに結び付け、各保險會社の關係書類を調査し、各事件の被害者の身許を洗ひ、有無を言はせないところまで突き止める爲に、ネイルは實に四十三の市町村を飛び廻り、廿一の銀行に日參した。その間面會して供述を取つた證人の數は百五十七人に上つてゐる。言ふ迄もなくスミスは斯うして自分の頸部の周圍に密かに法律の繩が狹められつゝあるのを少しも知らずに、例に依つてブリストルのエデス・ペグラアの許にあつて悠々自適を極め込んで居たのだ。日夜特命を帶びた刑事が張り込んで尾行を怠らなかつた事は勿論である。

逮捕されたのも、そのブリストルの家であつた。ネイルが三人の部下を率ゐて、自ら出張したのだつた。ベルを押して案内を乞ふと、エデスが玄關に出て來た。四人の警官は、瓦斯會社の定期檢査人に化けてゐたので、譯なく家内へ這入り込んだ。だらしない服裝をしたジョウヂ・ジョセフ・スミス――其の時は可成りの年配で、立派な口髭を貯へてゐた――が、臺所の焜爐の前で石炭を割つてゐた。その彼の肩へ、ネイルが手を掛けるのを合圖に、三人の探偵が左右と背後から一時に襲つた。當面の逮捕の理由は、勿論殺人ではなかつた。それは伏せて置いて辯護士の手數料を拂はないといふので告發されたことに細工が出來てゐた。スミスはすつかり安心してゐて、逮捕の時も顏色一つ變へなかつた。

裁判は、一九一五年の六月廿二日から九日間續いた。裁判長はスクラトン氏、檢事がアウチボルド・ボドキン卿、辯護人は故エドワアド・マアシャル・ホウル卿といふ花形揃ひの顏觸れであつた。が、ホウル卿の辯護が如何に巧みであつても、鋼鐵のやうな事實は曲げることが出來ない。スクラトン裁判長が陪審官に示した要點の覺書といふのが、雄辯に此の犯罪の內容を物語つてゐる。

一、各事件を通じて、死が浴槽內に突發したること。

二、各事件を通じて、浴室の扉に內部から鍵が掛けてなかつたこと。

三、各事件を通じて、死者が其の死の直前に被告に有利なる遺言書を作製してゐること。

四、事件の多くを通じて、死者が其の死の直前に生命保險に加入させられてゐること。

五、各事件を通じて、動產の可能なるものは豫め凡て現金に換えられてゐること。

六、各事件を通じて、死者は其の死の直前に醫師を訪問せしめられてゐること。及び、死と同時に必ずその醫師が呼ばれて死亡證明を書いてゐること。

七、各事件を通じて、死者の實家並びに親戚等に死後廿四時間内に通知が發せられてゐること。及び、各事件を通じて、その筆跡が同一であり、鑑定人はそれを被告のものと鑑定せること。

八、各事件を通じて、屍體發見の直前に、被告は、夕刊、食料品等を購ふため烏渡外出してゐること。

九、各事件を通じて、被告は、家人が上つて來て見るまで、屍體を浴槽内に放置し置きたること。

十、各事件を通じて、死は、被告の變名に依る詐欺結婚の直後に起りたること。

十一、各事件を通じて、その死によつて直接財物上の利益を享けたる者は被告にして、且つ被告一人なること。

十二、各事件を通じて、死體は何れも最少の費用と、最大の速度と、最も不鮮明なる方法とによつて埋葬されてゐること。

十三、各事件を通じて、被告は、事件後直ちにエデン・メエベル・ペグラアの許に歸つてゐること。

スミスに運の悪いことには、この項目の數が十三である。これだけ揃へば澤山だ。

只一つ、スミスが何ういふ實際的な方法で浴槽内でか、次々に女を殺すことに成功したのか、その手口が判然しなかつた。この殺人は、沈默と、些少の抗爭の裡に極く短時間に行はれたに相違ない。多くの場合、屍體は、浴槽の幅の廣い部分へ脚を向けてゐる姿勢で發見された。普通入浴する時とは反對の位置である。この謎を解かうとして、内務省の病理學者バアナアド・スピルスベリィ卿が法廷へ出張して、海水着を着た倫敦病院の看護婦を相手に、スミスの犯罪を實演してみた。その結果、スミスの用ひた殺人法と言ふのは、先づ、相手が無心に湯に浸かつてゐるところを、急激に片手で××を押して××を××の中へ××る。同時に、他の手を、女の兩膝の下へ差し込んで、其の下半身を×××××けるのだ。斯うすると、女は、湯槽の底へ×を押し付けて、丁度×××の恰好になる。跪ぐやつをぎゆつと押さへて暫らく其の儘にしてゐるのだ。やがて、完全な溺死を待つて靜かに浴槽中に戻すと屍體は、頭の方を先に湯の底を滑つて、浴槽の細い部分へ就くと言ふのである。その通りかと裁判長に訊かれた時、スミスは笑つて答へなかつた。控訴も上告も棄却されて、死刑の執行を受けたのは、ケント州刑務所ででであつた。刑を宣告されたのが七月廿九日で、刑死は八月十三日、失神狀態で絞首臺に助け上げられた。

When he was dead he was dead.

銀碗盛雪

武林無想庵

わたしに讀まれるものは、悉く私以外の人間の作つたものだ。さうして作る人間以外の消費を目的として作られたものだ。作るにも努力が要る。消費するにも努力が要る。即ち書くにも努力が要る。讀むにも努力が要る。努力とは意識的に努力を消耗することだ。

印度思想の中に、化自樂天といふものと他化自在天といふものがあつた。前者は一切の物質を自己の快樂に化して了ふ天人だ。後者は前者の作物をそのまゝ自己の物としてその中で遊戯三昧を擅にする天人だ。さうして前者は慾界の第五階をその天地とし、後者はその上の第六階に住してゐる。

化自樂天は作るものだ。他化自在天は消費者だ。さうして化自樂天がプロレタリアで、他化自在天がブルジョアだといふ意味ではない。何となれば須彌山説は地獄より他化自在天に及ぶ

讀むものから離れると、所謂木から落ちた猿同然だ。わたしは畢竟本喰蟲だ。さうしてわたしの本を讀むことが人類に何等の貢獻もしないのは事實だ。わたしは作らずして徒らにたゞ消費してゐる。

△

なぜ作らないのか？　なぜ作り得ないのか？　しかも、わたし自身はすでに作られたるものではないか。

が、作られたといふ事は或努力の消耗を意味してゐる。即ち一種の消費だ。或は消費の結果だ。さうして作ることゝ消費することゝは、たゞ目的の如何によつてその結果を異にするだけだ。即ち消費を目的とする努力の消耗と作ることを目的とする努力の消耗だ。

十一層をなした所謂六道に、色界の十八梵天と、無色界の四天と、極めて煩瑣な階級を設けてゐるからだ。さうしてそこに動かすべからざる宿命を植つけてゐるからだ。

△

云ふべからざるものがある。わたしの意識は無意識界へ通じてゐる。さうして意識に上つて來るものは、恐く無意識界から湧き出して來るものだ。露とく〱の泉の如く滾々と湧き出して來るものだ。それがペンを持つ手の動作となり。それが紙上へ落すインキの滴りとなる。さうしてその滴りこそは恐く無意識界の消息なのだ。

無意識界には國語がない。併しその消息には歷々としてかく國語がある。それゆゑに消息はすでに無意識が意識の世界へ露出して了つてゐるのだ。消息は月を指す一指頭だ。月を見たいと思ふものは斷じて一指頭にこだはるべきでない。無何有の郷も廣莫の野も、それが無意識界へ通じてはじめて意義がある。莊子を讀め！　莊子は東洋人の意識した立派な哲學だ。哲學者の書いた立派な文學だ。プロレタリアに若し文學が死滅しても、漢字の存在するかぎり、莊子は必ず人間の意識に殘る。

△

鯨尺でも計り得る。カネ尺でも計り得る。メートル尺でも計り得る。さうしてわれ〱は何物を計つてゐるのか？　顯微鏡でも窺き得る。望遠鏡でも窺き得る。さうしてわれわれは何物を窺いてゐるのか？「葭のずゐから天上のぞく。」「涯あるをもつて涯なきに隨ふ。殆きのみ。」さうしてニイチエは身を危險に曝すことをもつて人生の本懐だと敎へてゐる。莊子も一是非だ。ニイチエも一是非だ。さうして葭のずゐは常に一是非だ。さうして葭のずゐを離れてそこに人間があるか？　ツエッペリンに乘つても、潛航艇に乘つても、われ〱は常に人間だ。さうして人間は機械ではない。さうして人間は機械を發明する動物だ。機械を發明せざるを得ざるほど、他の動物に比較してそれほど惠まれざる動物だ。さうしてその惠まれざる動物を目して萬物の靈長だといふ。それほど片腹いたいことはないではないか？　それほど己惚れも甚しいことはないではないか？

△

金がもう二千フランしきやない、と妻がいふ、二千フランは二百圓には足らぬ金だ。さうしてその上の收入は今のところではまるで見當がつかぬ。親子三人が食ふのだ。のみならずゾラの飜譯のために、近所にビユーロオまで一室借りてゐる。それに

月四百フランもとられる。ロマンチックに巴里へとび込んで來て、さしづめ身の處置に困つてゐるT君が、わたしのゾラの口譯を筆記に來てくれる。T君もわれ〲のところで飯をくふ。

さうしてそのT君が二三日中に居所がなくなるといふ。ゾラの口譯筆記をつゞけに來てくれるかぎり、同君の居所も何とかしなければならぬ。さうしてこの四ヶ月以來妻はエタイの知れない神經性の胃病にとツつかれて、ほとんど何も手につかないでブラ〲してゐる。

月末までにゾラ翻譯出版社たる春秋社がなにがしかの金を送つてくれなかつたらどうなる？・・・・

△

チヤンとした定收入もないくせに、妻子を抱へて歐羅巴くんだりにウロ〲してゐるものは一人もない。と妻がいふ。その通りだ。みんな妻子のために血まなこになつて、手あたり次第少しでも金になることをズン〲やつてゐる。と妻がいふ。その通りだ。

それだのにさう泰然自若としてゐられるのが不思議だ。と妻がいふ。その通りだ。

さうしてその通りであることが、わたしにはどうにも手がつけられないのだ。

春秋社が若し金を送つてくれなかつたら？・・・・・

△

金！金！たゞ金だけの世の中だ。さうだ。血まなこになつて、金！金！と追蒐けるのだ。それが世の中だ。さうしてその追蒐けかたの足りないものが世の中の下積みになつて藻掻くのだ。さうして藻掻けば藻掻くほど物理學的にます〲下積みになるのだ。さうしてわれ〲はその下積みの方向を辿りつゝあるのぢやないか？・・・・さうして死だ・・・・死だけが唯一の解放だ。

△

下積みでまた須彌山説を思ひ出す。須彌山の下積みは即ち地獄だ。そいつが金輪際にへバりついてゐる。八寒だとか大焦熱だとかいふ諸地獄だが、今の言葉に譯せば、氷點下や七度以上の、即ち人間の生理的存在を不如意にする温度のことだ。さうして餓鬼道がその上の層にある。即ち食慾だ。あらゆる貪婪心はそこから胚胎する。その上が畜生道、即ち生殖慾で、あらゆる貯蓄心がそこに巣くつてゐる。その上が修羅道、即ち鬪爭だ。弱肉強食だ。自然淘汰だ。力即ち正義だ。さうして須彌山説の

科學的でないことは、人間といふものをばこの四層の上に位させてゐることだ。恐らく今日でもまだ現存する印度四階級のヴイチヤ以上の三階級だけを人間らしい生活と心得てゐる常識から割出したものであらう。フランス現在のシトワイヨンなどといふ小ブルジョア思想と同じものだ。所謂人權だ。希臘以來のデモクラット思想だ。共和政體といふものがそこから生れてゐる。マルキシズムのプロレタリア思想だつて、要するにその範疇から出てゐない。須彌山說では、さうした人間界のまたその上に天部と稱する一種の生物を棲息させてゐる。丁度マルキシズムのブルジョア階級に相當する。四大王天といふ軍國主義然たる世界がある。その上にモルガン式ニユーヨーク人の大ブルジョアぶりを極めた三十三天卽ち忉利天卽ち帝釋天がある。さうして帝釋天は出來得るかぎり人間の感覺だけを展開した世界だ。卽ちラディオやツエッペリンの世界だ。所謂急速度の文明だ。アメリカニズムだ。金色燦爛たる世界だ。さうしてその上層の夜摩天兜率陀天となると、卽ちデカダンスの世界で、男女の天人が互にニッコリしたゞけで子を孕んだり、大地が羽蒲團のやうに柔かゝつたり、霞を喰らひ露を吸つて生きられたり、要するに生活の中から勞苦の影を漸次に消滅させて行つた世界だ。つまり印度のマハラジャアや英國太子や米國トラスト王の息子さん達の生活がしのばれる。又十九世紀末の社會主義等が夢想してゐた世界に似てゐる。さうしてそのまた上の、さつき云つた化自樂天と他化自在天が、それを裏書して、丁度昔のフィディオスやミケランジの如きあらゆる大藝術家と稱せられるものどもや、プラトン、アリストットなど、いふあらゆる大思想家と稱せられるものどもが、ウヨ〳〵と棲息してゐる。要するに今日で云ふブルジョア藝術家とブルジョア思想家の天地だ。それからが所謂色界と無色界だ、たゞ禪定によつてのみ、須彌山說では到達せられることになつてゐる、卽ち、感覺意識を超越した世界、卽ち無意識界の沙汰となる。ところが佛教では、まだそれでは飽き足らず、その上に聲聞、緣覺、菩薩、佛の四階級を設け、殊にその菩薩界の如きは五十二階のスカイスクレエパアで出來てゐて、昇降機にもよらず、足でテク〳〵攀上ることになつてゐる始末だ。尤も天台の止觀によると、漸次止觀、不定止觀、圓頓止觀の三種があつて、必ずしもテクでなくても登れるやうなことを云つてゐるから、その菩薩界の摩天閣には恐らく隋唐の昔から普通の階段の外にエレヴエタアもとりつけられてあつたに相違ない。

△

こんなノンキなことばかり考へて貴重な時間を徒消してゐられる時代でも境遇でもないのだ。子供はズン／＼大きくなるのではないか？　妻は病床に呻吟してゐるのではないか？　金が二百圓しきやないではないか？　ホテルの部屋代は拂はなければならないではないか？　毎日食料品を買はなければならないではないか？　二百圓は見る／＼減つて行くではないか？……

△

ボオル・モランは、「書くか？　自殺か？」と念じつゝ、遮二無二書きまくつてゐるのださうだ。さうして今度出した「紐育（ニユウヨーク）」は大當りだ。「紐育」はまだ讀んで見ないが、「書くか？　自殺か？」の心意氣は共鳴できる。こんな身邊雜記でも、こんな文藝でも何でもないものでも、こんなデマカセの日記まがひでも、かうしてペンさへ動かしてゐると、わたしは何だか救はれてゐるやうな心持がする。自殺をしないでも、すむやうな氣がする。ペンがわたしを生かして置いてくれるやうに思ふ。大本教の直子婆さんも、多分こんな心持で、あのお筆先なるものに沒頭してゐたものぢやないかとまで考へられる。芥川龍之介もやはりこんな心持であの「齒車」を書いてゐたのぢやないかとも思ふ。さうして直子婆さんは大本教の教祖になつたが、芥川龍之介は自殺して了つた。が、わたしはボオル・モランぢやない。直子婆さんでもない。芥川龍之介でもない。わたしは依然としてたゞわたしだ。決して他の何人でもない。古今東西、天上天下、わたしはたゞわたし一人きりだ。さうしてそのわたし一人きりを生かさうとしてくれるものはこのペン先だけだ。しかもペン先はわたしぢやない。明らかにわたし以外の或物だ。さうしてそのペン先からこんな言葉をあとから／＼迸射して來るのだ。さうするとわたしの氣が樂になる。不思議だ。まつたく不思議だ。

△

わたしと名づけられたこの唯一個のものからすると、觸目不思議でない何物もない。卽ち妙法蓮華の天地そのものだ。三千世界一時に開く梅の花だ。わたしはたゞ／＼驚嘆の目を瞠るのみだ。一擧手一投足、就中このペン先の動くのが不思議でたまらない。さうしてこれらは日本語だ。さうしてこの日本語はわたしだけにしきやわからぬ日本語か？　それぢやアたゞの紙屑だ。

△

が、たゞの紙屑になつては困る。甚だ困る。困るばかりぢやない。事實パンが買へなくなる。が、お前がパンが買へなくなつたつて、それはこつちの知つたことぢやない。そんな原稿は賣り物にならないのだから、つまり紙屑より仕方がないではない

かと、書肆の立場からは云ふであらう。さうしてさう云はれゝば、文士の立場としてはギヤフンだ。ギヤフンとまゐつて、ひもじい腹を抑へつけながら、泣く〳〵パンを買はずに我慢してゐなければならないことになる。理屈もヘチマもない。事實だ。書肆の氣に入らない文士は、王様の氣に入らない武士のやうに尾羽打枯らして浪人の身となるより致し方はないであらう。東海道膝栗毛の中では、時々その浪人が出て來て、編笠のかげから、「御繁昌の御道中」など、情ない聲を出して、かの彌次郎兵衛北八にまで、「ペッ、〳〵、つくな。〳〵。」など、侮蔑されきつてゐる。明治になつて、四民平等になつてからも、緑雨は苦蟲をつぶしながら、「雷名ある緑雨のあま蛙は價八錢也。仕出し入らず女房の氣轉と題する書は價拾錢也。雷名は惣菜に比べて二錢方低落也。」だとか、「貼りて三角なるは南京豆の袋にして、切りて四角なるは安帽子の裏也。官報の紙質尤もよろし。」だとか、又、「書肆のためには讀まずとも買へ。著書のために買はずとも讀め。」なんかんと云つてゐた。が、昭和の今日となると、緑雨のそんな熱罵も、更にこたへのないほど、世はスッカリ、ブルジョア化して了つてゐる。さうしてたゞパンを買ふことだけが一切の問題となつて了つた。さうして紙屑より外に賣るもの、ない人間が即ち文士だといふことにケリがついた。ブルジョアジイといふものは必ず何か賣らなければ人間が生息できない世界のことだからだ。勿論、實業家の親父から百萬圓讓つてもつた文士のことではない。さうしてさういふ文士が今の世の中では理想的の文士だ。同様に「西部戰線異狀なし」の著者のやうに一擧にして九十萬圓も印税を手に入れた文士が、わたしなんぞには一番羨ましい境涯のやうにのみ考へられる。書肆のためにも著者のためにも、今は同様に讀まずとも買へだ。かうなると緑雨もさすがに古くなる。さうして雪見に轉ぶところまで行つた時代がなつかしい。今は全くポオル・モランの云ふやうに、文士はたゞ〳〵自殺する氣になるところまでヒタ書きに書くだけだ。

△

去年伯林を立つ時は、どこまでも歐羅巴に踏みとゞまつて、子供を巴里で教育しようと決心して、それが續けられるやうな方法を講じに日本へ歸つて見たのだが、運よくゾラの飜譯といふ仕事にぶツかつて、大喜びで巴里へ舞戻つて來たわけだ。つまりゾラの飜譯のつゞくかぎり、われ〳〵親子三人の生活は安定するものと早呑込みして有頂天になつたものだ。ところが巴里は物價が高い。わづかばかり借りて來た金は、豫定より早くなくなる。ゾラの飜譯は豫定より後れがちだ。さうして日本との手紙の往復は二ケ月以上かゝる。さア、兵糧がなくなつたと云

つても、オイソレとは急の間にあはぬ。電報は一日で行くけれど、一度かけるには百フランもかゝる。その上羅馬字でとても委曲がつくせない。しかも百フランあれば、いくら物價が高くても、きりつめて一家一週間の食料費が出る。だからウッカリ電報をうつわけにはゆかぬ。要するに絶體絶命となる。しかるに春秋社へはもう二千枚も原稿を送つてあるのだ。これで三人の衣食住が購へない筈はないと、腹の底では思つてゐる。けれども妻は日ましに痩せて行く病氣に惱まされてゐる際だから、さうは腹の底では考へられないのだ。日ましに減つて行く二百圓と共に、それのなくなつた時には、同時に自分の息も絶えて、あとに殘つた子供とわたしとが、ホテルの一室で食ふものもなく、勿論葬式を出す金もなく、金の外には決して手出しをしてくれないフランス人の中で、二人はきつと路頭に迷ふだらうと、彼女は苦しみ悶へるのだ。いくら月末には春秋社から電報で金を送つてくれるだらうとアテにして見たところで、來て見ないうちは全くアテにはならないのだから、さう妻に責め立てられて見ると、それを打消すだけの有力な證據がないために、わたしもグッとつまつて了ふ。即ち絶體絶命だ。

△

然り、絶體絶命だ。「口を開けば喪身失命せん」だ。さうして十年來わたしはさうした境地にのみ立つて來たのだ、又現在に立ちつゝあるのだ。さうしてこれはわたし一人にかぎつたことか？　決して／＼さうぢやない。人間はみんなさうなのだ。たゞに人間ばかりぢやない。一切の生物がさうなのだ。生といふものはさういふものだつたのだ。生は即ち絶體絶命なのだ。さうして絶體絶命の境地を離れてはそこに生活なるものはなかつたのだ。

△

「大いなる主觀は大いなる客觀に一致す。」など、兒島高德もどきに巖頭の木を削つて書きつけ、失戀の眞劍さを華嚴の瀧壺へ叩きつけた藤村操があつた。かれは一高の生徒で、露伴の血紅星の愛讀者で、鏡花の風流線の主人公で、セシグリノスやエンペドクレエスや、また普化和尙を聯想させるほど、僕には頗る共鳴するところの或物をもつた青年であつた。

その巖頭の辭のうちの、「大なる」といふ文字だけは、さすがに青年で、今のわたしには少々氣のさす感情を裏づけられてゐるが、主觀の客觀に一致した心持は甚だ共鳴される。さうして僕の高橋新吉に共鳴してゐるところもまたそこだ。

で、なぜ今更らしくそんな突拍子もないことを想ひ出したかといふと、それは絶體絶命の境地感から來たことだ。

わたしの絶體絶命には「大の字」がない。さうして逍遥逝の言葉をかりれば、斥鷃之を笑つて曰くに相當するのかも知れない。わたしの小ブル根性がそこに作用してゐるのかも知れない。しかも「大の字」のないだけは事實だ。さうして一木一草觀から脱却できないのも事實だ。

△

一木一草觀！　わたしはそれを天台から學んだ。中道に非るなき一木一草だ。如露亦如電の尊さだ。卽ち生命の價値だ。さうしてそこに「大の字」がないから、華嚴の瀧壺へとび込まぬ。エトナ火山へもとび込まぬ。又薪を積んでプロパガンタの火の中でも焚け死なぬ。東門の大衆を失望させて、西門の空中に殷々たる鈴の音を殘さうといふ詩味も湧かぬ。さうして牛羊の蹄に蹂躙されるまゝ、生き且つ死する一木一草の絶體絶命にすぎぬ。

△

泉鏡花の辰巳巷談に、「人にふまれて一度は枯れて、露の命でよみがへる。」といふ小唄がとり入れてあつた。一木一草觀だ。「清水の西門にてうたふをきけば、つらきは浮世、惜しまじ命露に代らん。」と、西鶴の一代女にあつた。「白玉か何ぞと人の問ひしとき露とこたへて消なましものを」――これは有名な伊勢物語の歌だから、日本人なら誰でも知つてゐる筈。すべてセンチメンタリズムだ。一木一草觀はセンチメンタリズムだ。さうしてセンチメンタリズムを離れたところには決して文學はない。わたしはゾラを譯しつゝ、かれもまた甚しいセンチメンタリストであつたことを到るところで發見してゐる。恐らくわたし自身が甚しいセンチメンタリストであるからであらう。

△

すべては對一說倒一說だ。雲門はさすがに高い。わたしはセンチメンタリストだから、いつも高いところにあこがれてゐる。それゆえに十年前まではよく一切をかなぐりすて、深山へ逃込みに行つたものだ。が、その深山逃避はもと〳〵センチメンタリズムから發足したものだから、一ケ月も籠山比丘の形式に漬かると、すぐ聚落が戀しくてたまらなくなり、「深山にかぎると云へども、また聚落に及ぶべきものなり。」など、勝手な理窟をつけては、たび〳〵酒のあるところ、色つくる女のゐるところへと、ドシ〳〵山を下つたものだ。行不得だ。さうして六十の翁の行不得だ。さうしてわたしの雲遊深寄はその行不得からはじまつたものだ。センチメンタリズムは永遠に行不得だからだ。さうしてその行不得の行く手には必ず常に絶體絶命の境地が待つてゐる。

文藝時評

正宗白鳥

いろんな人が頻りに片假名を使つて爭鬪してゐる喧しい現在の文壇で、どういふ人の所論が、最も明瞭に時代の中心思想を表現してゐるであらうかと、私はさういふ論者を見つけるのに迷つてゐて、知人にも訊ねたが、今日の有様では、ある一人か二人かの代表的論文家を選擇することは六ケしさうである。代表的といふことが、英雄あるひは天才といふ言葉とともに、既に今日の時世には不適切な、時代錯誤の言葉であつて、民衆第一の今日では、大勢がごた／＼と勝手なことを言合つてゐる有樣それ自身を、現代の實相として見る外はないのかも知れない。

ところで、私は、今度、大宅壯一氏の「文學的戰術論」といふ論文集を手に入れて通讀したが、これなどが、現代の文壇の趨勢を概觀するに都合のいゝ書物ではないかと思はれた。これまでこの論者の所論を斷片的に見てゐた記憶によると、大宅氏は、大言壯語家の面目を具へてゐるらしく、自己の著書を「戰術論」と名づくるのによつても、六韜三略を胸に藏してゐて、群小割據、天下麻の如く亂れんとする世に、乾坤一擲の大勝負を試みんとする野心家らしく、少くも、山本勘助か島左近の亞流たる軍師らしく、私には想像されてゐたが、この新著を讀んで見るとさうでもなかつた。

筆に魅力はないが、書き振りは分り易くて、論旨は平俗で穏和である。語氣に大言壯語の臭みがあつても、内容に於ては、事理を明かにしようといふ常識的態度を具へてゐる。さう羽目を外したところも見えない。私は讀みながら同感したところが少なくなかつた。

「文壇ギルドの解體期」「文學史的空白時代」「バラック街の文壇を觀る」「三上於菟吉の因數分解」などを通讀すると、數年

來の日本文壇の趨勢が、この論者の立場から叙述され批判されてゐて、相應の聰明さを有つてゐると思はれる。しかし、この論者は自己の頭腦を働かせることに於て、まだ不徹底のやうに、私には思はれてならない。何故に文學無用論を說かないのであらうか。私などは、昔から藝術至上主義者ではなかつたのみならず、をり〱、「無用」なことに心身を勞してゐる詰らなさを感じて憂鬱になることもあつた。今日までの文學を無用の存在であつたと蔑視する大宅氏の論法から推すと、昭和以後の文學だつて有用である筈がない。氏曰はく「如何に描かれてゐるかといふことよりも、何が描かれてゐるかといふことの方がより多く批評や興味の對象になつて來た」と。描くとか描かぬとか、描寫を云々するのは、氏の論法から推して云へば、不徹底を示してゐて、猿を現すなら猿、猫をなら猫といふ文字だけでいゝ譯だと思はれるが、しかし假りに氏の說を問題として見ると、「何が描かれてゐるか」と見ると同時に、「如何に描かれてゐるか」を考へるのは、我々の心理の常態であると、私は確信してゐる。大宅君はさう信じないのであるか。たとへば、ある畫家が大宅壯一の肖像を描いたとすると、その肖像を見た者は、「何を描いた」と思ふとゝもに、それが上手に書けてゐるかゐないかなど、「如何に描かれた」かの批判が、直ぐに觀者の心に浮ぶので、「何が」だけで澤山だよ、「如何に描け」たかを問題にするに及ばぬと、傍で警戒してもどうにもならないのである。この人間固有の批判慾を基礎としてさま〲な進んだ藝術批評も起つて來る譯である。大宅氏重ねて曰はく、「事實が技術を壓迫しだした」と。つまり、肖像の技術を彼此と云ひたいのなら、簡單に、この肖像は大宅壯一によく肖てゐるくらゐなところに留めて置いて、それ以上、色彩運筆の是非を深入りして研究するなと云ふのかも知れない。人間の持つてゐる藝術鑑賞慾を發展させることは氏は好まぬらしい。內容と技巧は互ひに離しがたきものと思つてゐる私は、「如何に描れてゐる」かを離れて、「何が描かれてゐる」かを見よといふ意見には首肯しがたい。人間の心理を無視したもののやうに思はれる。氏は、あるひは、みんなが同じやうな顏した肖像を書くことそのことがいけない。濱口首相を書くがいゝ。東郷元帥を書くがいゝ。大磯の濱で寒風に吹かれながら赤裸で曳網をしてゐる漁夫

を書くなんか尤もいゝと云ふかも知れない。それなら、私も大賛成である。しかし、大國の滅亡を描いても、如何に描かれてゐる」か、「何が描かれた」以上に問題になるのは、如何ともしがたいと思はれる。

文學無用論まで元氣のいゝ論法を進め得なかつた大宅氏も、「文士洋行無用論」を力說してゐる。私は、海外漫遊中のある日、日本の新聞を見て、廣告欄に出てゐるこの論題に目を觸れて、ふと共鳴を感じたので、この文集を手にすると、眞先きにこの論文を速讀した。なかなかよく說かれてゐる。三分の一くらゐは私の云はんとするところが書かれてゐる。しかし、こゝにも、この論者の平俗と不徹底が露出されてゐるのは遺憾である。「たとへ新東京が米國の三流都市に過ぎないとしても、江戸から東京をつくつたのがわれわれの生活の必然であると共に、震災の廢墟の上に新しい東京を建設したのも、今日のわれわれの生活の便宜から來てゐるのだ。今日の東京に江戸を求めるのは、今日のわれわれの生活を動かしてゐる力を知らない盲目的傳統主義者に過ぎない」と云つてゐるのには、あたり前の意見であるが、米國の三流都市に過ぎないやうな脆弱な建築や粗雜な設備しか出來なかつたことについて、何等の不平を有つてゐないのは、新日本の先覺者としては抱負が甚だ小である。日本が貧乏なため、また設計者に非凡な才能を缺いたゝめ、世界に誇るに足る新様の都市の創造されなかつたことを何故に歎じないのであらうか。新代の生活に適するとゝもに、傳統的の日本美をも包攝する都市を現出することの出來なかつたのは、外國模倣以上に獨創の才能を有してゐる者が、建設者になかつたゝめではあるまいか。大宅氏の如き若き傑れた頭腦の所有者でも、明治前後の先覺者同樣、西洋模倣專門であるらしい。蕉佛は模倣せらるべき價値がないと云ふ口の下から、米露を模倣するのはいゝと云ふやうな口吻を弄してゐるのは不可解である。「日本の米化、東京の植民地化は、日本民族の若さを證明するものだ」と斷じてゐるのには、私は啞然とした。こんなことが日本の若さなら、若いと云ふことは如何ばかりみじめなものであらうか。私は、歸朝の途中、上海やシンガポールの植民地、あるひはカイロの土耳古人町などを見て、亞細亞人の衰頽に感慨を催したのであつた。植民地の蕪雜さを感じた。そして、

日本に上陸して、神戸や大阪の市街を見ると、町の様子が、上海シンガポールに似て、植民地然たるのを情なく思つた。家屋が脆弱でへな／＼してゐるのは、日本の經濟上止むを得ないとしても、若い者の氣持までも「植民地化」に甘んじるのは、日本のために憂ふべきことではないだらうか。大宅氏などの目からは思想も文學もすべて、英米の植民地化してよしと思はれてゐるのであるか。この論文集に、罵倒の材料として引用されてある武林君の「日米いまだ砲火を交へないうちに、米はすでに日を得たるか」といふ、所謂漢文もどきの嘆聲は、大宅氏の文集全篇を通じて何處にも見出しがたいほどの名文句である。私は銀座などを歩行しながら、この點で武林君と感を同じうするのである。

この著者は、武林君が、日本に於ける外國語(英語)の流行を罵つてゐるくせに、自分は、得々として佛蘭西語を亂用してゐるのを晒つてゐる。これには私も同感であつて、武林氏の佛蘭西語亂用は、氏の小說を却つて不純にしてゐると、不斷思つてゐる。しかし、同氏は、七年も巴里生活をしてゐるのだから、佛語が母語のやうになつてゐるのだらうと情狀酌量されるが、この頃の小雜誌の小論文などに、廻らぬ舌で異人の言葉をおやつつてゐるやうに、無性矢鱈に、米國語歐洲語を挿入してゐるのには呆れる外はない。大宅氏の好きな「文學の植民地化」である。

本誌連載の「アメリカ通信」には、をり／＼思當る記事が出てゐる。軍縮全權の船がシャートルに着いた時に、盛んに出迎へたのは日本人だけであつたこと。その一行がシカゴに着くまでの米國新聞の記事は、日本服姿の財部夫人が獨占して、これだけが大袈裟に吹聽されてゐたことなど、その光景が目に見えるやうに私には思はれた。三月號の、全權一行英國到着の叙事文も面白い。印象を新たにするために、新たに引用しよう。

「日本全權の一行は英國のサウザンプトンに到着した。同市の市長は一行を歡迎するために船に乘つたけれども、その外には英國側の歡迎人は殆んどゐなかつた。たゞロンドンから出迎へた日本大使館の一行が、シルクハットを連ねて波止場に立つてゐるのが目立つのみであつた。

一行がロンドンに到着した翌日の新聞も、日本全權の記事は殆んど見當らなかつた。……それと反對に、日本におけ る大新聞の活躍は、すばらしいものであつた。船がドックにつくと、日本内地に送るべき活動寫眞の機械は、せはしく回轉した。全權一行にまつはる如何なる事件も、電線を傳はつて日本に送られた。米國に於ける一行が、準國賓を以つて待遇されたと傳へられたやうに、英國に就ても、朝野の大歡迎を受けたと傳へられるに相違なかつた(?)」

これが實相であるやうに私には思はれる。軍閥や官僚の人々が、外國で歡迎されようとされまいと、大宅氏や私などは敢て意に介しないのであるが、大宅氏の文集に散見するロシアかぶれアメリカかぶれ、他の「植民地化」に甘んじてゐるやうな態度に、何となく飽足りないために、連想が清澤氏の記事に及んだのである。清澤氏の次の記事に曰はく「私はこれを書きながら、近頃、日本から來た新聞が、ダグラス・フエアバンクの記事で一杯なのを想起してゐる。ダグは一體何者なのだ。日本全國をあげて狂迎するフエアバンクなる者は何者なのだ。世界のどこの新聞に、一箇の映畫俳優にあの歡迎と、あのスペースを與へるだらう」と。

昔、支那を崇拜してゐた時代に、漢學の私塾で「孔子が大將となり、孟子が副將となつて、日本を征伐しに來たら、我々はどういふ態度を取るか」といふ問題が討議されたさうだが、今だつて外國思想にかぶれると、こんな問題が眞面目に議せられるのである。

私は一年足らず日本を離れてゐた間に、出版界に資本主義の偉力の著るしく增大したことを感じてゐる。多くの作家はたとへ、上べは虛勢を張つてゐても、大書店や大雜誌社に對して、頭の上らないことを知つた。大宅氏の文集にも、その趨勢が分りよく解かれてゐる。しかも、氏はそれを是認してゐる。大衆の讀み物に適して、營利的出版業者に迎へられるものを書くのが、將來の文學の正道であると信じてゐるらしい。「一刀三禮」といつたやうな態度で技術に心をくだくのは、

陳腐な藝術家氣質で、讀者に受けさうなものを手つ取り早く書くのがい丶のだと、氏は迷ふところなく說いてゐる。出版家に喜ばれるものを書くのは、自己の文學的良心が咎めるといふ在來のある文人の悩みは、大宅氏によつて奇麗に掃除されてゐて、これからの作者はその點は氣樂である。在來は、どんな學問でも藝術でも、その蘊奧を極めるには、周圍を顧慮せず、大衆の思惑に動かされないで、ひたすら志すところを進むべきものとされてあつたが、今日以後は、さう云つた心掛けは抛棄してい丶やうになつたのであらうか。

「天才」とか「インスピレーション」といふ大衆ばなれのした言葉が、文學批評についても排斥されるのは自然の勢ひで、鶴見祐輔氏の英雄振りや、武者小路實篤氏の天才氣取りは、大宅氏によつても嘲笑されてゐるが、その大宅氏が、「出版革命の勝利者」を批判するに當つては、「出版資本家として成功し得るものは、世間にざらにある資本家と違つて、實際千人萬人の中から一人しか出ない天才である」と斷じてゐるのは不思議である。すなはち、佐藤義亮、山本實彥氏その他は、我が日本の有してゐる稀有の天才なのである。以前は、日本でも西洋でも、天才の作品を事務家たる出版者が出版してゐたのであつたが、現代の日本では、凡庸本位、通俗第一主義を作家の生命とし、天才出版家の恩惠によつて、作品を世に出すより外なくなつたのであらうか。

この論者が不用意に洩らしたらしい「天才」といふ言葉に私は敢へて拘泥するのではない。この論者は、出版資本家を他の資本家に比して特別扱ひしてゐるが、そんな筈はない。たゞ大宅氏は佐藤氏に接觸してゐたゝめに、あんなに敬意を拂ふやうになつたので、他の資本家にでも、氏が接觸したら同樣な感じを起すかも知れない。「勤勉」で、「精悍」で「負け嫌ひで」批評眼の「鋭くて辛辣」だといふ特徵は、佐藤氏だけが有つてゐるのではなくつて、他の資本家のうちにも、さういふ傑物は少くないに違ひない。年少のプロレタリア作家の描くやうに、資本家を狡猾で懶惰であると斷定することの誤つてゐることは、大宅氏は、佐藤氏を實例として認めなければならないのだ。

私は、松竹社長によつて獨占された劇界の前途を思ひ、大谷氏の所謂「出版革命勝利者」の支配下に作品の發表をしなければならぬ作家の前途を思ふ。この頃新聞を見ると、青年歌舞伎俳優が、因襲を脱した新運動を試みたらしく、我々をして大に痛快味を覺えさせてゐたが、松竹並びに親分の俳優に睨まれると、彼等新人もさしたる對抗的態度には出ないで「果然ぺちやんこ」になつたさうである。(「ぺちやんこ」になつたのではなくつて、他日一層雄飛するためだといふ說もあるが)これは晒ひごとではない。他人事ではない。「出版革命勝利者」に對して、いろんな問題の起つた時、文壇の諸氏は果して、對抗運動を永續し得るであらうか。演劇王國、出版王國、新聞王國など、階級打破の呼聲の盛んな今日、いろ〳〵な王國が現出するのは皮肉である。無產黨が、「政見發表演說會」のみ榮えて、當選者の少かつたのと同樣に、議論と現實の不一致を、我々は痛歎しなければならない。

「中央公論」「改造」「文藝春秋」所載の戲曲と小說を幾つか讀んだ。今東光氏の戲曲「皇帝」は、秦の始皇の一代記を取扱つたものである。活動寫眞風に場景が目まぐるしく廻轉してゐるが、上演するとして、この方が效果が多いかどうか疑はれる。讀んだだけではあまりに斷片的で印象が薄い。文章も鍛錬を缺いてゐる。臺詞が甚だお粗末である。讀みかけた時、私は、英雄であつた始皇帝を英雄として描いたかと思つて、むしろそれを期待してゐたのであつたが、しまひに、民衆大會」だの、「侵略と搾取」だの、「吾々、被抑壓階級は……」だのと、現代流行の勞働爭議見たいな場面が木に竹を接いだやうに出てゐるので、不純な感じを起さゝれた。德川時代の芝居には、曾我兄弟が頻りに出て來る。「助六」や「白酒賣」が、遊蕩的色模樣を現はしたあとで、それが實は五郎十郎であることを明かにして、仇討好きの當時の見物を喜ばせたなんかその一例であるが、この頃は、いろんな材料が、つまりは、勞働爭議とか階級鬪爭とか云つたやうなものにコヂつけられる。「皇帝」を讀んでそこへ行くと、ちよつと茶番染みた感じがした。どういふ立場から始皇を取扱はふとも、そ

れは作者の勝手だが、それなら、藤森氏の「蜂起」のやうに、はじめから、その態度を持して一篇の結構を創作したらいゝのだ。

淺原六朗氏の「ある一群の象」は氣樂に讀まれた。ある世間話を聞かされたやうな氣がした。しかし、たゞそれだけである。そして、あり振れた現代批判を作者が挿入するのが少し鼻についたし、何處かけすつぽい感じがした。

「改造」の瀧井孝作氏の「父の活計」は、いかにも讀みづらい。氏の創作態度には、私は好意を寄せてゐるし、作品のなかにねばり強いところのあるのを認めてはゐるが、ドモリに話を聞かされてゐるやうなもどかしさを覺える。

久保田萬太郎氏の作品を久振りに讀んだ。この頃、砂利の入つた南京米見たいな作品をたび〳〵讀まされてゐたゝめか、久保田氏の「身の末」はひどく面白くつて、未完なのが惜しまれたほどであつた。在來久保田氏の愛讀者でなかつた私が、實際にかう感じたのである。私は、先月本郷座で、「蜂起」を見て、藝術味皆無の所演にウンザリしたが、それから間もなく、四谷のきよしといふ寄席へ通りすがりに寄つて見て、そこの二三の落語に案外な興味を感じた。しかし、久保田氏の小説を落語と同一視するのではない。「身の末」は、會話が洗錬されてゐて、生きた人間の音聲が動いてゐる。怒號するのが必しも生き〳〵した人間の聲であるとは、私には思はれない。

それから、「文藝春秋」の水木京太氏の「フオオド躍進」は、いゝ作品だと思つた。水木氏のものは、一つ二つは讀んでゐる筈だが記憶にない。それで、私としては、新作家に接したつもりで讀んだのであつた。慌てず騒がず、一ぱし異つた藝を見せようとする氣取りもなく、落着いて書いてゐるうちに、幾人かの人間がよく現はれてゐる。新しい意氣を持つた少女の面目が活躍してゐる。

橋本英吉氏の「勞働市場」は、筆は無器用だが、コツ〳〵と忠實に書かれてあるので、讀後に、かういふ社會の人々の實相が心に殘つた。私はプロレタリア派の作家のうちでは、かういふ人の素質を好む。

以上の三雜誌と「新潮」などが、從來の文壇的標準から云つて創作の本舞臺になつてゐたのだが、この頃は時代が變つた。これ等の雜誌に揭載された作品だけによつて、現今の文學に批判を下すのは當を失してゐることは、明かである。ある種の雜誌の創作が特に權威を有つてゐた時代はよつぽど前に過去つてゐる。そして、作家としても、唯々諾々、大雜誌社の好みに從ふことをいさぎよしとせず、自己を發揮しようと志したなら、個人雜誌を出すか、あるひは、直ちに單行本として出版する外はなくなるであらう。過大な出版廣告や圓本などによつて、日本人の讀書慾も盛んになつたのだから、小說なども、雜誌の舞臺に上らなくつても、單行本として相當に賣れる時代が來るだらうと思はれる。大宅氏の如きは、「ある通俗雜誌社で文壇人の作品に書直しを命じた」ことを、むしろ是認してゐるやうな口吻を弄してゐるが、さうまでして資本家に隷屬することを憤慨する作家が、(失業恐怖病生活難に惱まされてゐる今日にでも)全く跡を絕つ譯でもあるまい。大宅氏は、個性を蔑すみ類型を讚美してゐるが、人間の顏がみんな同じやうにノッペラボウになつて、大宅氏と濱口首相の顏と見分けがつかなくなつても困るだらう。しかし、理窟の上では個性發揮を排斥してゐる大宅氏も、氏自身の心境は、文壇に向つて、自己を主張することにあつて、自己の氣に入らない藝術、あるひは自己の趣味と修養では理解し得ない藝術を非難するに努力してゐることは、この論集を通讀して一目瞭然としてゐる。平俗でも淺薄でも幼稚でも、個性發揮の若い力を有つてゐるところに、この一卷の價値があるのだ。

編輯者雜記

驚いちやいけない。この多彩絢爛の特輯號を普通號の値段で提供するのだ。損は損だ。が敢て損をしても偶には讀者への犠牲的サーヴイスもやつて見たい。また遣れるやうになつたのも嬉しいことだ。儲けることばかりを考へてゐるのも雜誌の能ではなからうから。

と言つて安いばつかりが能でもあるまい。屑ばかり拾ひ集めるなら五十錢が三十錢でも安くはない筈だ。手に取つて一見せられよ。讀み較べて御覧あれ、一圓が一圓五十錢にも該當する充實さだ。それが僅かに八十錢！中央公論始まつて以來の現象と驚き給ふ前に、諸君よ、中央公論社の發展をまづ讃いでくれ給へ。

一中央公論社のためばかりではない。日本文化のためにもだ。最近等比級數的に激增してゐる本誌の讀者層をかくて一層倍加普及せしむることによつて本邦文化は救はれる。飽くまで重厚にして而も飽くまで尖鋭に。時代的感受性豐けき諸賢は必ずや百パーセントの融合を見出さるゝであらう。

大塚氏は近代プロレタリアートの科學的聖典「資本論」の民衆版完成を告げて、そこに驚異すべき學識と尊敬すべき眞摯と痛烈なる熱意とを織り成してゐる。得難き文獻であり、年餘に亘るわれら努力の結實だ。崩壞過程を辿りつゝある資本主義第三期の、その內在的矛盾たる關税政策の世界的動向を究明した笠氏の論文。實踐家稻村氏の情熱溢るゝ金解禁後の農村の特殊貧困論。いづれも感謝して欲しい。

心私かに「第二の山宣」を期する大山新代議士のブルヂヨア議會への戰闘的決意を見よ。更に白河上氏らの悲壯なる落選記錄を見よ。而して大刄をくぐる淺原氏の血戰記を見よ。更に山川氏の第二次普選の勝者敗者を見よ。さうして更に騎つて馬場氏の「大民政黨論」を見よ。今次總選擧の清算はそれで盡きる。

メキシコからはるぐ寄せられた柳澤氏の「亞米利加發見」は九十枚の大作。千鈞の重みを加ふる名篇だ。「黑船・えぴそうど」復興せる「新東京の顔」「フイルム・トリツク」。おゝ、それに怪奇と凄艶で全大衆を唸らせてゐる牧氏の「怪奇實話」それよ、「浴槽の花嫁」！

獰き傳統の城廓に、その搖ぎなき榮華を誇つた歌舞伎王國も今や時代の波に乘上げてゐる、佐々木氏の左翼的歌舞伎論、小納戶氏とは覆面せる新進若手俳優。その內面的暴露。暴露といへば大宅氏の「官製青年團」罵倒は痛快。

若し夫れ、創作欄に至つては島崎藤村氏の大作「夜明け前」、この一の存在を以て優に現文壇を壓するに足る。加ふるに金子、鹿地、廣津、細田の堅豪を以てする。いづれも一粒選りの逸品のみだ。量において質において陽春の批評的中心だと信ずる。

本號が一度び市に出る日や待遠しい。店頭に殺到するわれらの大衆同志ー鼎の沸くが如き歡呼ーかくてわれらの誠意と努力は酬はれるのだ。

四月の廿二日には日比谷の公會堂で、五月の三日には大阪中之島の公會堂で、婦人公論の「愛讀者大會」が開かれる。營利的經營から一歩を進めたわれらの微意の一發揚に過ぎない。やがて中央公論の「愛讀者大會」も開いて見たいものだと思つてゐる。

本社の出版戰線異狀なく進展してゐる。御安堵あれ。

夜明け前（第一篇）

島崎藤村

第四章

一

中津川の商人、萬屋安兵衛、手代嘉吉、同じ町の大和屋李助、これらの人達が生糸賣込みに眼をつけ、開港後まだ間もない横濱へとこゝろざして、美濃を出發して來たのはやがて安政六年の十月を迎へた頃である。中津川の醫者で、半藏の舊い師匠にあたる宮川寛齋も、この一行に加はつて來た。尤も、寛齋はたゞの横濱見物ではなく、やはり出稼ぎの一人と

して――萬屋安兵衛の書役といふ形で。

一行四人は中津川から馬籠峠を越え、木曾街道を江戸へと取り、一ト先づ江戸兩國の十一屋に落ち着き、あの旅籠屋を足溜りとして、これから横濱へ出ようとした。木曾出身で世話好きな十一屋の隱居は、鄕里に緣故の深い美濃衆のためにも何かにつけて旅の便宜を計らうとするやうな人だ。この隱居は以前に馬籠本陣の半藏を泊め、今また寛齋の宿をして、弟子と師匠とを江戸に迎へるといふことは、これも何かの御緣であらうなどと話した末に言つた。

「皆さまは神奈川泊りのつもりでお出掛けになりませんと、濱にはまだ旅籠屋もございますまいよ。神奈川の牡丹屋、あそこは古くからやつて居ります。牡丹屋なら一番御安心でございますぞ。」

こんな隱居の話を聞いて、やがて一行四人のものは東海道筋を横濱へ向つた。

横濱もまださみしかつた。地勢としての横濱は神奈川より岸深で、海岸には既に波止場も築出されてゐたが、いかに言つてもまだ開けたばかりの港だ。たま／＼入港する外國の貿易船があつても、船員はいづれも船へ歸つて寢るか、さもなければ神奈川まで來て泊つた。下田を去つて神奈川に移つた英國、米國、佛國、阿蘭陀等の諸領事はさみしい横濱よりも賑かな東海道筋をよろこび、一旦假寓を定めた本覺寺その他の寺院から動かうともしない。こんな事情を看て取つた寛齋等は、やはり十一屋の隱居から敎へられた通りに、神奈川の牡丹屋に足をとゞめることにした。

この出稼ぎは、美濃から來た四人のものに取つて、かなりの冒險とも思はれた。中津川から神奈川まで、百里に近い道を馬の背で生糸の材料を運ぶといふことすら容易でない。おまけに、相手は、全く知らない異國の人達だ。

當時、異國のことについては、實にいろ／＼な話が殘つてゐる。ある異人が以前に日本へ來た時、この國の女を見て懸

想した。異人はその女を欲しいと言つたが、許されなかつた。そんなら女の髪の毛を三本だけ呉れろと言ふので、仕方なしに三本與へた。ところが、どうやらその女は異人の魔法にでもか・つたかして、到頭異國へ往つてしまつたといふ。その次に來た異人が又、女の髪の毛を三本と言ひ出したから、今度は鰤の毛を三本抜いて與へた。驚くべきことには、その鰤が天に登つて、異國へ飛んで往つたともいふ。これを見たものはびつくりして、これは必ず切支丹に相違ないと言つて、皆大に恐懼を抱いたとの話もある。

異國に對する無智が、およそいかなる程度のものであつたかは、黒船から流れ着いた空壜の話にも殘つてゐる。亞米利加のペリイが來航當時のこと、多くの船員を乗せた軍艦からは空壜を海の中へ投げ棄てた。その投げ棄てられたものが風の無い時は、底の方が重く口ばかり海面に出てゐて、水がその中に這入るから、浪のまに／＼自然と海岸に漂着する。それを拾つて默つて家に持ちかへるものは罰せられた。だから、斯ういふものが流れ着いたと言つて、一々届け出なければ成らない。その時の役人の言葉に、これは先方で毒を入れて置くものに相違ない、もしこの中に毒が入つてゐたら大變だ、さもなければこんなものを流す道理もない、きつと毒が盛つてあつて日本人を害めようといふ軍略であらう、就いては一ケ所捨て置く場所を設ける、心得違ひのものがあつて萬一届け出ない場合があつたら直ちに召捕るとの嚴しい觸れを出したものだ。そこであつちの村から五本、こつちの村から三本、と續々届け出るものがある。役人等は毎日それを取り上げ、一軒の空屋を借り受け、そのなかに積んで置いて、嚴重な戸締りをした。それが異人等の日常飲用する酒の空壜であるといふことすら分らなかつたといふ。

すべてこの調子だ。籐椅子が風のために漂着したと言つては不思議がり、寢椅子が一個漂着したと言つては不思議がつた。ペリイ出帆の翌日、亞米利加側から幕府への獻上物の中には、壜詰、罐詰、その他の箱詰があり、浦賀奉行への贈物があつたが、これらの品々は江戸へ伺ひ濟みの上で、浦賀の波止場で燒棄てたくらゐだ。後日の祟りを畏れたのだ。實

際、寛齋が中津川の商人について神奈川へ出て來たのは、さういふ黑船の恐怖からまだ離れ切ることが出來なかつた頃である。

ちやうど、時は安政大獄の後にあたる。彦根の城主、井伊掃部頭直弼が大老の職に就いた頃は、何程の暗鬪と反目とがそこにあつたか知れない。彦根と水戶。紀州と一橋。幕府内の有司と有司。その結果は神奈川條約調印の是非と、德川世子の繼嗣問題とに絡んであらはれて來た。しかもそれらは大きな抗爭の序幕であつたに過ぎぬ。井伊大老の期するところは沸騰した國論の統一にあつたらうけれど、彼は世にも稀に見る鬪士として政治の舞臺にあらはれて來た。所謂反對派の張本人なる水戶の御隱居（烈公）を初め、それに荷擔した大名有司等が謹愼や蟄居を命ぜられたばかりでなく、強い壓迫は京都を中心に渦卷き始めた新興勢力の苗床にまで及んで行つた。京都にある鷹司、近衞、三條の三公は落飾を迫られ、その他の公卿達の關東反對の嫌疑のかゝつたものは皆謹愼を命ぜられた。老女と言はれる身で、囚人として江戶に護送されたものもある。民間にある志士、浪人、百姓、町人などの捕縛と嚴刑とが續きに續いた。一人は切腹に、一人は獄門に、五人は死罪に、七人は遠島に、十一人は追放に、九人は押込に、四人は所拂に、三人は手鎖に。七人は無構に、三人は急度叱りに。勤王攘夷の急先鋒と目ざされた京都の梅田雲濱のやうに、獄中で病死したものが別に六人もある。水戶の安島帶刀、越前の橋本左内、京都の賴鴨崖、長州の吉田松陰などは、いづれも恨を吞んで倒れて行つた人達である。

こんな重い周圍の空氣の中で、誰もがまだ容易に信用しようともしない外國人の中へ、中津川の商人等は飛び込んで來た。神奈川條約はすでに立派に調印されて、外國貿易は公然の沙汰となつてゐる。生糸でも買込まうとするものに取つて、何の憚るところはない。寛永十年以來の嚴禁とされた五百石以上の大船を造ることも許されて、海は最早事實に於いて解放されてゐる。遠い昔の航海者の夢は、二百何十年の長い鎖國の後に、また活き返るやうな新しい機運に向つて來てゐる。

寛齋がこの出稼ぎに來た頃は六十の上を四つも越してゐた。田舍醫者としての彼は漢方で治療の屆くかぎりどんな患者でも診ないことはなかつたが、中にも眼科を得意にし、中津川の町よりも近在廻りを主にして、病家から頼まれゝば峠越しに馬籠へも行き、三留野へも行き、蘭、廣瀬から清內路の奥までも行き、餘暇さへあれば本を讀み、弟子を教へた。學問のある奇人のやうに言はれて來たこの寛齋が醫者の玄關も中津川では張り切れなくなつたと言つて、信州飯田の在に隱退しようと考へるやうになつたのも、つい最近のことである。今度一緒に來た萬屋の主人は日頃彼が世話になる病家先のことであり、生糸買込みも餘程の高に上らうとの見込みから、彼の力に出來るだけの手傳ひもして、その利得を分けて貰ふといふ約束で來てゐる。彼ももう年をとつて、何かにつけて心細かつた。最後の『隱れ家』に餘生を送るより外の願ひもなかつた。

さしあたり寛齋の仕事は、安兵衞等を助けて横濱貿易の事情をさぐることであつた。新參の西洋人は內地の人を引きつけるために、何でも買込む。どうせ初めは金を捨てなければいけないくらゐのことは外國商人も承知してゐて、氣に入らないものでも買つて見せる。江戶の食詰者で、二進も三進も首の廻らぬ連中なぞは、一つ新開地の横濱へでも行つて見ようといふ氣分で出掛けて來る時だ。さういふ連中が持つて來るやうな、二文か三文の資本で仕入れられる玩具の類でさへ西洋人にはめづらしがられた。德川大名の置物とさへ言へば、佛壇の蠟燭立を造りかへたやうな、いかゞはしい骨董品でさへ二兩の餘に賣れたといふ。まだ內地の生糸商人はいくらも入込んでゐない。萬屋安兵衞、大和屋李助なぞに取つて、これは見逃せない機會だつた。

どん〳〵樣子が分つて來た。神奈川在留の西洋人は諸國領事から書記まで入れて、およそ四十人は來てゐることが分つた。紹介して貰はうとさへ思へば、適當な買込商の得られることも分つた。覺束ないながらも用を達すぐらゐの通辭は勤まるといふものも出て來た。

やがて寛齋は安兵衞等と連立つて、一人の西洋人を見に行つた。二十戸ばかりの異人屋敷、最初の居留地とは名ばかりのやうな隔離した一區域が神奈川臺の上にある。そこに住む英國人で、ケウスキイといふ男は、横濱の海岸通りに新しい商館でも建てられるまで神奈川に假住居するといふ貿易商であつた。初めて寛齋の眼に映るその西洋人は、羅紗の丸羽織を着、同じ羅紗の股引をはき、羽織の紐のかはりに釦を用ひてゐる。手まはりの小道具一切を衣裳のかくしに納れてゐるのも、異國の風俗だ。譬へば手拭は羽織のかくしに入れ、金入れを股引のかくしに入れ、時計は胴着のかくしに入れて鎖を釦の穴に掛けるといふ風に。履物も變つてゐる。獸の皮で造つた靴が日本で言つて見るなら雪駄の代りだ。

安兵衞等の持つて行つて見せた生糸の見本は、ひどくケウスキイを驚かした。これほど立派な品なら何程でも買はうと言ふらしいが、先方の言ふことは燕のやうに早口で、こまかいことまでは通辯にもよく分らない。ケウスキイは又、安兵衞等の結ひ立ての髷や、すつかり頭を圓めてゐる寛齋の醫者らしい風俗をめづらしさうに眺めながら、煙草なぞをそこへ取出して、客にも勸めれば自分でもうまさうに服んで見せた。寛齋が近く行つて見たその西洋人は、髮の毛色こそ違ひ、眸の色こそ違つてゐるが、黑船の聯想と共に起つて來るやうな恐しいものでもない。幽靈でもなく、化物でもない。やはり血の氣の通つてゐる同じ人間の仲間だ。

「糸目百匁あれば、一兩で引取らうと言つてゐます。」

この賣込商の言葉に、安兵衞等は力を得た。百匁一兩は前代未聞の相場であつた。早い貿易の様子も分り、糸の直段も分つた。この上は一日も早く神奈川を引揚げ、來る年の春までには出來るだけ多くの糸の仕入れもして來よう。このことは安兵衞と李助は一致した。二人が見本のつもりで持つて來て、牡丹屋の亭主に預かつて貰つた糸まで約束が出來て、その荷だけでも一箇につき百三十兩に賣れた。

「宮川先生、あなただけは神奈川に殘つてゐて貰ひますぜ。」

と安兵衞は言つたが、これはもとより寛齋も承知の上であつた。

「先生も一人で、鼠にでも引かれないやうにして下さい。」

手代の嘉吉は嘉吉らしいことを言つて、置いて行く後の事を堅く寛齋に托した。中津川と神奈川の連絡を取ることは、一切寛齋の手に任せられた。

二

十一月を迎へる頃には、寛齋は一人牡丹屋の裏二階に殘つた。

「何だか俺は島流しにでもなつたやうな氣がする。」

と寛齋は言つて、時には孤立のあまり、海の見える神奈川臺へ登りに行つた。坂になつた道を登れば神奈川臺の一角に出られる。眼にある横濱もさびしかつた。あるところは半農半漁の村民を移住させた町であり、あるところは運上所を中心に堀立小屋の並んだ新開の一區域であり、あるところは埋立てと繩張りの始まつたばかりのやうな畑と田圃の中である。辨天の杜の向ふには、ところ〴〵にぽつん〳〵立つてゐる樹木が眼につく。全體に濕つぽいところで、まだ新しい港の感じも浮ばない。

長くは海も眺めてゐられなくて、寛齋は逃げ歸るやうに自分の旅籠屋へ戻つた。二階の窓で聞く鴉の聲も港に近い空を思はせる。その聲は郷里にある妻や、子や、やがては舊い弟子達の方へ彼の心を誘つた。

古い桐の机がある。本が置いてある。その側には弟子達が集まつてゐる。馬籠本陣の子息がゐる。中津川和泉屋の子息がゐる。中津川本陣の子息も來てゐる。それは十年ばかり前に三人の弟子の顏のよく揃つた彼の部屋の光景である。馬籠の青山半藏、中津川の蜂谷香藏、同じ町の淺見景藏——あの三人を寛齋が戯れに三藏と呼んで見るのを樂みにしたほど。

彼の許へ本を讀みに通つて來たかず／＼の若者の中でも、殊に末頼母しく思つた弟子達である。あんなどういふ人になつて行くかと見てゐる中にも、半藏の一本氣と正直さと來たら。一度これが自分等の行く道だと見さだめをつけたら、それを改めることも變へることも出來ないのが半藏だ。人の幼年期は爭はれないもので、生れて間もなく母親に死別れたことは、あの半藏の運命を支配するかに見える。香藏や景藏にないもので、半藏にあるものは繼母だ。あの親孝行も、感じ易さも、死物狂ひの學問も、まことの母を求める遣瀬ない心に根ざしてゐるのかも知れない……

考へ續けて行くと、寬齋は側にゐない三人の弟子の前へ今の自分を持つて行つて、何か辯解せずにはゐられないやうな矛盾した心持に打たれて來た。

『弟子と言つたつて、今はもうそんな子供ぢやないぞ。いづれあの若い連中は俺の出稼ぎを問題にしてゐるに相違ない。』

『金銀欲しからずといふは、例の漢やうの虚僞にぞありける。』

この大先達の言葉、『玉かつま』の第十二章にある本居宣長のこの言葉は、今の寬齋に取つては何より有力な味方だつた。金を欲しいと思ひながら、それを欲しくないやうなことを言ふのは、例の漢學者流の虚僞だと教へてあるのだ。

『誰だつて金の欲しくないものはない。』

そこから寬齋のやうに中津川の商人について、横濱出稼ぎといふことも起つて來てゐる。本居大人のやうな人には虚心坦懐といふものがある。その人の前には何でも許される。しかし、血氣壯んで、單純なものは、あの寬大な先達のやうに貧しい老人を許しさうもない。

さういふ寬齋は、本居、平田諸大人の歩いた道を辿つて、早くも古代復歸の夢想を抱いた一人である。この夢想は、京

都を中心に頭を持ち上げて來た勤王家の新しい運動に結びつくべき運命のものであつた。彼の教へた弟子の一人か二人とも、勤王家の運動に心を寄せるらしいのも、實は彼が播いた種だ。今度の大獄に連座した人達はいづれもこの渦中に立つてゐないものはない。その中には、六人の婦人さへまじつてゐる。年も若く感じ易い半藏等が鄕里の方でどんな刺激を受けてゐるかは、寬齋はそれを想像であり〱と見ることが出來た。

その時になつて見ると、舊い師匠と弟子との間には既に餘程の隔りがある。寬齋から見れば、半藏等の學問は實行的な方向に動いて來てゐる。彼も自分の弟子を知らないではない。古代の日本人に見るやうな「荒魂」を振ひ起すべき時がやつて來た、さもなくて、この國創まつて以來の一大危機とも言ふべきこんな艱難な時を歩めるものではないといふ弟子の心持も解る。しかし、寬齋も年を取つて見た。曾ては儒教を異端とし佛道を邪宗として、すべて外來のものを蛇蝎のやうに排斥した昔のさかんな熱は何處へ行つたかといふやうになつた。彼は自分の半生の學問がいかに幼稚極まるものであつたかといふことを思ひ知るやうになつて來た。

新たな外來の勢力、五ケ國も束になつてやつて來た歐羅巴の前に、果してこの國を解放したものかどうかのやかましい問題は、その時になつてまだ日本國中の頭痛の種になつてゐた。先入主となつた黑船の強い印象は容易にこの國の人の心を去らない。横濱、長崎、函館の三港を開いたことは井伊大老の專斷であつて、朝廷の許しを待つたものではない。京都の方面も騷がしくて、賢い帝の心を惱ましてゐることも一通りでないと言ひ傳へられてゐる。開港か、攘夷か。これほど矛盾を含んだ言葉もない。又、これほど當時の人達の惱みを言ひあらはした言葉もない。前者を主張するものから見れば攘夷は實に頑執妄排であり、後者を主張するものから見れば開港は屈從そのものである。しかし開港を唱へるものの多くがその實は攘夷家であり、攘夷を唱へるものでも開港の止むを得ないことぐらゐは承知してゐるものが多かつた。どうかして自分等の內部にあるものを護り育て、行かうとしてゐるやうな心ある人達は、いづれもこの矛盾に苦しみ、時代の惱

みを悩んでゐたのだ。

牡丹屋の裏二階からは、廊下の廂に近く枝をさし延べてゐる椎の樹の梢が見える。寛齋はその靜かな廊下に出て、獨りで手を揉んだ。

『俺も、平田門人の一人として、こんな恐ろしい大獄に無關心でゐられる筈もない。しかし、俺には、あきらめといふものが出來た。』

『さぞ、御退屈さまでございませう。』

さう言つて、牡丹屋の年とつた亭主はよく寛齋を見に來る。東海道筋にあるこの神奈川の宿は、古いといへば古い家で、煙草盆は古風な手提げのついたのを出し、大きな菓子鉢には扇子形の箸入を添へて出すやうな宿だ。でも、わざとらしいところは少しもなく、客扱ひも親切だ。

寛齋は日に幾度となく裏二階の廊下を往つたり來たりするうちに、眼につく椎の風情から手習ひすることを思ひついた。枝に枝のさした冬の木に眺め入つては、しきりと習字を始めた。そこへ宿の亭主が來て見て、

『オヤ、御用事の外はめつたに御出掛けに成らないと思ひましたら、御手習ひでございますか。』

『六十の手習ひとはよく言つたものさね。』

『手前どもでも初めての孫が生れまして、昨晩は七夜を祝ひました。いろ／＼ごだ／＼いたしました。さだめし、おやかましからうと存じます。』

こんな言葉も、この亭主の口から聞くと、ありふれた世辭とは響かなかつた。横濱の海岸近くに大きな玉楠の樹が繁つ

てゐる、世にやかましい神奈川條約はあの樹の下で結ばれたことなぞを語つて見せるのも、この亭主だ。あの遠い對岸の六町の杜と呼ばれるところで、玉楠の枝には巣をかける白い鴉があるが、毎年冬の來る頃になると何處ともなく飛び去ると言つて見せるのも、この亭主だ。生糸の買込みとは何と言つても好いところへ眼をつけたものだ、外國貿易も最早買はうと買はうと勝手次第だ、それでも御紋付の品々、雲上の明鑑、武鑑、兵學書、その他甲冑刀劍の類は嚴禁であると數へて見せるのも、この亭主だ。

舊暦十二月のさむい日が來た。港の空には雪がちらついた。例のやうに寛齋は宿の机にむかつて、遠く來てゐる思ひを習字にまぎらはさうとしてゐた。そこへ江戶兩國の十一屋から屆いたと言つて、宿の年とつたかみさんが二通の手紙を持つて來た。その時、かみさんは年老いた客をいたはり顏に、盆に載せた丼を階下から女中に運ばせた。見ると、寛齋の好きなうどんだ。

『うどんの御馳走ですか。や、そいつはありがたい。』

『これはうでまして、それからダシで煮て見ました。お鹽で味がつけてございます。これが一番さつぱりしてゐるかと思ひますが、一つ召上つて見て下さい。』

『うどんとは好い物を造つて下すつた。わたしはお酒の方ですがね、寒い日にはこれがまた何よりですよ。』

『さあ、お口に合ひますか、どうですか。手前どもではよくこれをこしらへまして、年寄に食べさせます。』

牡丹屋ではすべてこの調子だ。

一通の手紙は木曾から江戶を廻つて來たものだ。馬籠の方にゐる伏見屋金兵衛からのめづらしい消息だ。最愛の一人息子、鶴松の死がその中に報じてある。鶴松も弱かつた子だ。あの少年のからだは、醫者としての寛齋も診てよく知つてゐる。馬籠の伏見屋から駕籠で迎ひが來る度に、寛齋は藥箱を提げて、美濃と信濃の國境にあたる十曲峠をよく急いだもの

だ。筆まめな金兵衛はあの子が生前に寛齋の世話になつた禮から始めて、どうかして助けられるものならの願ひから、あらゆる加持祈禱を試み、わざ／＼多賀の大社まで代參のものをやつて病氣全快を祈らせたことや、あるひは金毘羅大權現へ祈願のために落合の大橋から神酒一樽を流させたことまで、口說くやうに書いてよこした。病氣の手當ては言ふまでもなく、寛齋留守中は大垣の醫者を頼み、折柄木曾路を通行する若州の典醫、水戸姫君の典醫にまで縋つて診察を受けさせたことも書いてよこした。到頭養生も叶はなかつたといふ金兵衛の殘念がる樣子が眼に見えるやうにその手紙の中にあらはれてゐる。

平素懇意にする金兵衛が六十二歲でこの打擊を受けたといふことは、寛齋に取つて他事とも思はれない。今一通の手紙は舊い馴染のある老人から來た。それには又、筆に力もなく、言葉も短く、ことの外に老い衰へたことを訴へて、活きてゐるといふばかりのやうな心細いことが書いてある。只、昔を思ふ度に人戀しい、最早生前に面會することもあるまいかと書いてある。『貴君には、未だ御往生も成されず候よし、』ともある。

「いまだ御往生もなされず候よしは、ひどい。」

と考へて、寛齋は哭いてい丶か笑つてい丶か分らないやうなその手紙の前に頭を垂れた。

寛齋の周圍にある舊知も次第に亡くなつた。達者で働いてゐるものは數へるほどしかない。今度十七歲の鶴松を先に立てた金兵衛、半藏の父吉左衛門——指を折つて見ると、さういふ人達は最早幾人も殘つてゐない。追々の無常の風に吹き立てられて、早く美濃へ逃げ歸りたいと思ふところへ、横濱の方へは浪士來襲の噂すら傳はつて來た。

三

到頭、寛齋は神奈川の旅籠屋で年を越した。彼の日課は開港場の商況を調べて、それを中津川の方へ報告することで、

この都度萬屋からの音信にも接したが、かんじんの安兵衞等はまだ何時神奈川へ出向いて來ることも分らない。

年も萬延元年と改まる頃には、日に／＼横濱への移住者がふえた。寛齋が海を眺めに神奈川臺へ登つて行つて見ると、その度に港らしい賑かさが増してゐる。辨天寄りの沼地は埋立てられて、そこに代長屋が出來、外國人の借地を願ひ出るものが二三十人にも及ぶと聞くやうになつた。吉田橋架け替への工事も始まつてゐて、神奈川から横濱の方へ通ふ渡し舟も見える。ある日も寛齋は用達のついでに、神奈川臺の上まで歩いたが、何となく野毛山も霞んで見え、沖の向ふに姿をあらはしてゐる上總邊の斷崖には遠い日があたつて、さびしい新開地に春のめぐつて來るのもそんなに遠いことではなからうかと思はれた。

時には遠く海風を帆にうけて、あだかも夢のやうに、寛齋の視野のうちに入つて來るものがある。日本最初の使節を乘せた咸臨丸が亞米利加へ向けて神奈川沖を通過した時だ。徳川幕府が阿蘭陀政府から購ひ入れたといふその小さな軍艦は品川沖から出帆して來た。艦長木村攝津守、指揮官勝麟太郎をはじめ、運用方、測量方から火夫水夫まで、一切西洋人の手を借りることなしに、阿蘭陀人の傳習を受け初めてから漸く五年にしか成らない航海術で、兎にも角にも大洋を乘切らうといふ日本人の大膽さは、寛齋を驚かした。薩摩の沖で以前に難船して徳川政府の保護を受けてゐた亞米利加の船員等も、咸臨丸で送り返されるといふ。その軍艦は港の出入りに石炭を焚くばかり、航海中は唯風を便りに運轉せねばならないほどの小型のものであつたから、煙も揚げずに神奈川沖を通過したゞけが、いさゝか物足りなかつた。大變な評判で、神奈川臺の上には人の黒山を築いた。海は最早遠く望み見るだけのものではなくなつた。渡ることの出來る路になつて來た。不案内な土地の方へ行くために、使節の一行は何千何百足の草鞋を用意して行つたか知れないなぞといふ噂さがその後に殘つた。當時二十六七歳の青年福澤諭吉が木村攝津守のお供といふ格で、その最初の航海に上つて行つたといふ噂なぞも殘つた。

二月に入つて、寛齋は江戸兩國十一屋の隱居から思ひがけない便りを受取つた。それには隱居が日頃出入りする幕府奥

詰の醫師を案內して、橫濱見物に出向いて來るとある。その節は、宜しく賴むとある。

旅の空で寬齋が待ち受けた珍客は、喜多村瑞見と言つて、幕府奧詰の醫師仲間でも製藥局の管理をしてゐた人である。汽船觀光丸の試乘者募集のあつた時、瑞見もその募りに應じようとしたが、時の御匙法師に睨まれて、譴責を受け、蝦夷移住を命ぜられたといふ閱歷をもつた人である。この瑞見は二年ほど前に家を擧げ蝦夷の方に移つて、函館開港地の監督なぞをしてゐる。今度函館から江戶までちよつと出て來たついでに、新開の橫濱をも見て行きたいといふので、そのことを十一屋の隱居が通知してよこしたのだ。

瑞見は供の男を一人連れ、十一屋の隱居を案內にして、天氣の好い日の夕方に牡丹屋へ着いた。神奈川には奉行組頭もある、さういふ役人の家よりもわざ〳〵牡丹屋のやうな古い旅籠屋を選んで微行で瑞見のやつて來たことが寬齋をよろこばせた。逢つて見ると、思の外、年も若い。三十二三ぐらゐにしか見えない。

「けふのお客さまは名高い人ですが、お目に掛つて見ると、まだお若い方のやうですね。」

と牡丹屋の亭主が寬齋の袖を引いて言つたくらゐだ。

翌日は寬齋と牡丹屋の亭主とが先に立つて、江戶から來た三人を先づ神奈川臺へ案內し、黑い館門の木戶を通つて、橫濱道へ向つた。番所のあるところから野毛山の下へ出るには、內浦に添うて岸を一廻りせねばならぬ。程ケ谷からの道がそこへ續いて來てゐる。野毛には奉行の屋敷があり、越前の陣屋もある。そこから野毛橋を渡り、土手通りを過ぎて、假の吉田橋から關內に入つた。

「橫濱もまださびしいところですね。」

「わたしの來た時分には、これよりもつとさびしいところでした。」

瑞見と寛齋とは歩きながら、こんな言葉をかはして、高札場の立つあたりから枯れ〴〵な太田新田の間の新道を進んだ。瑞見は遠く蝦夷の方で採薬、薬園、病院、疏水、養蚕等の施設を早く目論んでゐる時で、函館の新開地にこの横濱を思ひ比べ、牡丹屋の亭主を顧みてはいろ〳〵と土地の様子をきいた。當時の横濱關內は一羽の蝶のかたちに譬へられる。海岸へ築出した二ヶ所の波止場はその觸角であり、中央の運上所附近はそのからだであり、本町通りと商館の許可地は左右の翅にあたる。一番左の端にある遊園で、樹木の繁つた辨天の境内は、蝶の翅に置く唯一の美しい斑紋ともいはれやう。しかしその翅の大部分はまだ田圃と沼地だ。そこには何か開港一番の思ひつきでもあるかのやうに、およそ八千坪からの敷地から成る大規模な遊女屋の一廓も展けつゝある。横濱にはまだ市街の連絡もなかつたから、一丁目毎に名主を置き、名主の上に總年寄を置き、運上所側の町會所で一切の用事を取扱つてゐると語り聞かせるのも牡丹屋の亭主だ。

やがて、その日同行した五人のものは横濱海岸通りの波止場に近いところへ出た。西洋の船にならつて造つた二本マストもしくは一本マストの帆前船から、従來あつた五大力の大船、種々な型の荷船、便船、漁り船、小舟まで、あるひは碇泊したりあるひは動いたりしてゐるごちや〳〵とした光景が、鴉の群れ飛ぶ港の空氣と煙とを通してそこに望まれた。二ヶ所の波止場、水先案内の職業、運上所で扱ふ税關と外交の港務などは、全く新しい港のために現れて來たもので、ちやうど入港した一艘の外國船も周圍の單調を破つてゐる。

その時、牡丹屋の亭主は波止場の位置から、向ふの山下の方角を瑞見や寛齋に指して見せ、舊横濱村の住民は九十戸ばかりの竈を擧げてそちらの方に退却を餘儀なくされたと語つた。それほどこの新開地に内外人の借地の請求が頻繁となつて來た意味を通はせた。大岡川の川尻から増徳院脇へかけて、長さ五百八十間ばかりの堀川の開鑿も始まつたことを語つた。その波止場の位置まで行くと、海から吹いて來る風からして違ふ。しばらく瑞見は入港した外國船の方を望んだよ。

動かなかつた。やがて、寛齋を顧みて、
『やつぱり好く出來てゐますね。同じ汽船でも外國のはどこか違ひますね。』
『喜多村先生のお供はかなはない。』とその時、十一屋の隠居が横鎗を入れた。
『どうしてさ。』
『いつまでゞも船なぞを眺めていらつしやるから。』
『しかし、十一屋さん、早くわれ〳〵の國でもあゝいふ好い船を造りたいぢやありませんか。今ぢや薩州でも、土州でも、越前でも、二三艘ぐらゐの汽船を持つてゐますよ。これがみんな外國から買つた船ばかりでさ。十一屋さんは昌平丸とかいふ船のことをお聞きでしたらうか。あれは安政二年の夏に、薩州侯が三本マストの大船を一艘造らせて、それを獻上したものでさ。幕府に三本マストの大船が出來たのは、あれが初めてだと思ひます。ところが、どうでせう。昌平丸を作る時分には、まだ螺旋釘を使ふことを知らない。眞ッ直ぐな釘ばかりで造つたもんですから、大風雨の來た年に、品川沖でばら〳〵に解けて壞れてしまひました。』
『先生はなか〳〵精しい。』
『函館の方にだつて、二本マストの帆前船がまだ二艘しか出來てゐません。一艘は函館丸。もう一艘の船の方は龜田丸。高田嘉兵衛の呼び寄せた人で、豊治といふ船大工があれを造りましたがね。』
『先生は函館で船の世話まで成さるんですか。』
『まあ、そんなものでさ。でも、こんな藪醫者に逢つちやかなはないなんて、函館の方の人は皆さう言つてゐませうよ。』
この『藪醫者』には、側に立つて聞いてゐる寛齋も唸つた。
入港した外國船を迎へ顔な西洋人なぞが、いつの間にか寛齋等の周圍に集まつて來た。波止場には九年母の店をひろげ

て賣つてゐる婆さんがある。その傍に背中の子供をおろして休んでゐる女がある。道中差を一本腰にぶちこんで、草鞋ばきのまゝ、何か資本の掛らない商賣でも見つけ顔に歩き廻つてゐる男もある。おもしろい丸帽を冠り、辮髮を垂れ下げ、金入れらしい袋を背負ひながら、上陸する船客を今か今かと待ち受けてゐるやうな支那人の兩替商もある。

見ると、定紋のついた船印の旗を立てゝ、港の役人を乘せた船が外國船から漕ぎ歸つて來た。その後から、二三の艀が波に搖られながら岸の方へ近づいて來た。横濱とはどんな處かと内々想像して來たやうな眼付のもの、全く生ひ立ちを異にし氣質を異にしたやうなもの、本國から來たもの、東洋の殖民地の方から來たもの、それらの雜多な冒險家が無遠慮に海から陸へ上つて來た。いづれも生命掛けの西洋人ばかりだ。上陸するもの、中にはまだ一人の婦人を見ない。中には、初めて日本の土を踏むと言ひたさうに、連れの方を振り返るものもある。叔父甥なぞの間柄かと見えて、迎へるものと迎へらるゝものとが男同志互ひに抱き合ふのもある。その二人は、寛齋や瑞見の見てゐる前で、熱烈な頬ずりをかはした。

瑞見はなか／＼トボケた人で、この横濱を見に來たよりも、實は牛肉の試食に來たと白狀する。こんな注文を出す客のことで、あちこち引張り廻されるのは迷惑らしい上に、案内者側の寛齋の方でも成るべく日のあるうちに神奈川へ歸りたかつた。いつでも日の傾きかけるのを見ると、寛齋は美濃の方の空を思ひ出したからで。

横濱も海岸へ寄つた方は既に區劃の整理が出來、新道はその間を貫いてゐて、町々の角には必ず木戸を見る。歸り路には、寛齋等は本町一丁目の通りを海岸の方へ取つて、渡し場のあるところへ出た。そこから出る舟は神奈川の宮下といふところへ着く。わざ／＼野毛山の下の方を遠廻りして歸つて行かないでも濟む。牡丹屋の亭主はその日の夕飯にと言つて瑞見から注文のあつた肉を横濱の町で買ひ求めて來て、それを提げながら一緒に神奈川行の舟に移つた。

「横濱も風の多いところですね。」

「蝦夷の方ではゴメです。海の鴎の一種です。あの鳴聲を聞くと、いかにも北海らしい氣持が起つて來ますよ。さう言へば、この横濱にはもう外國の宣教師も來てゐるといふぢやありませんか。」

「一人。」

「なんでも、神奈川の古いお寺を借りて、去年の秋から來てゐる亞米利加人があります。ブラウンといひましたつけか。横濱へ着いた最初の宣教師です。狹い土地ですから直ぐ知れますね。」

「一體、切支丹宗は神奈川條約ではどういふことになりませう。」

「そりや無論内地のものには許されない。唯、宣教師がこつちへ來てゐる西洋人仲間に布教するのは自由だといふことになつてゐませう。」

「神奈川へは亞米利加の醫者も一人來てゐますよ。」

「ます／＼世の中は多事だ。」

誰が語るともなく、誰が答へるともなく、こんな話が舟の中で出た。

牡丹屋へ歸り着いてから、しばらく寛齋は獨り居る休息の時を待つた。例の裏二階から表側の廊下へ出ると、神奈川の町の一部が見える。晩年の彼を待ち受けてゐるやうな信州伊那の豐かな谷と、現在の彼の位置との間には、まだ餘程の隔りがある。彼も最後の「隱れ家」に辿り着くには、どんな寂しい路でも踏まねばならない。それにしても、安政大獄以來の周圍にある空氣の重苦しさは寛齋の心を不安にするばかりであつた。ます／＼嚴重になつて行く町々の取締り方と、志士や浪人の氣勢の惡いこの沈默とはどうだ。既に直接行動に訴へたものすらある。前の年の七月の夜には横濱本町で二人の露西亞の海軍士官が殺され、同じ年の十一月の夕には港崎町の邊で佛蘭西領事の雇人が刺され、最近には本町一丁目と五丁

目の間で船員と商人との二人の阿蘭陀人が殺された。それほど横濱の夜は暗い。外國人の入り込む開港場へ海から何か近ふやうにやつて來る闇の恐ろしさは、それを經驗したものでなければ解らない。彼は瑞見のやうな人をめづらしく案内して、足許の明るいうちに牡丹屋へ歸つて來て好かつたと考へた。

『お夕飯のお支度が出來ましてございます。』

といふ女中に誘はれて、寛齋もその晩は例になく庭に向いた階下の座敷へ降りた。瑞見や十一屋の隱居なぞとそこで一緒になつた。

『喜多村先生や宮川先生の前ですが、横濱の遊女屋にはわたしもたまげました。』と言ひ出すのは十一屋だ。

『すこし繁昌して來ますと、直ぐその土地に出來るものは飲食店と遊廓です。』と牡丹屋の亭主も夕飯時の挨拶に來て、相槌を打つ。

牛鍋は庭で煮た。女中が七輪を持ち出して、飛石の上でそれを煮た。その鍋を座敷へ持ち込むことは、牡丹屋のお婆さんがどうしても承知しなかつた。

『臭い、臭い。』

奧の方では大騷ぎする聲すら聞える。

『こゝにも西洋嫌ひがあると見えますね。』

と瑞見が笑ふと、亭主はしきりに手を揉んで、

『いえ、さういふ譯でもございませんが、吾家（うち）のお袋なぞはもう耄いて居ります。牛の臭氣（にほひ）が籠（こも）るのは困るなんて、しきりにそんなことを申しまして。この神奈川には、あなた、肉屋の前を避（よ）けて通るやうな、そんな作客もございます。』

その時、寛齋は自分でも好きな酒をはじめながら、瑞見の方を見ると、客も首を延ばし、なみ／＼とついである方へ尖

らした口唇を持つて行く盃の持ち方からしてどうもたゞではないので、この人は話せると思つた。

『こんな話がありますよ。』と瑞見は思ひ出したやうに、『あれは一昨年の七月のことでしたか、エルヂンといふ英吉利の使節が蒸汽船を一艘幕府に献上したいと言つて、軍艦で下田から品川まで來ました。まあ品川の人達としては折角の使節を歓待すといふ意味でしたらう。その翌日に、品川の遊女を多勢で軍艦まで押し掛けさしたといふものです。さすがに向ふでも面喰つたと見えて、後になつての言草がいゝ。あれは何者だ、一體日本人は自分の國の女をどう心得てゐるんだらうツて。いかにも英吉利人の言ひそうなことぢやありませんか。』

『先生。』と十一屋は膝を乘り出した。『わたしはまた斯ういふ話を聞いたことがあります。こつちの女が歯を染めたり、眉を落したりしてゐるのを見ると、西洋人は非常に厭な氣がするそうですね。ほんとうでせうか。まあ、わたし達から見ると、優しい風俗だと思ひますがなあ。』

『氣味惡く思ふのはお互ひでせう。事情を知らない連中と來たら、いろ／＼なことをこぢつけて、やれ幕府の上役のものは英吉利の領事に妾を呉れたの、西洋人と結托してゐるの、何のツて、惡口ばかり。鎖攘、鎖攘（鎖港攘夷の略）――あの聲はどうです。わたしに言はせると、幕府が鎖攘を知らないどころか、あんまり早く鎖攘し過ぎてしまつた。蕃書を禁じて讀ませない、洋學者は遠ざけて近づけない、その方針を好いとしたばかりぢやありません、國内の人材まで鎖攘してしまつた。御覽なさい、前には高橋作左衛門を鎖攘する。土生玄碩を鎖攘する。後には渡邊崋山、高野長英を鎖攘する。その結果はと言ふと、日本國中を實に頑固なものにしちまひました。外國のことを言ふのも恥だなんて思はせるやうにまで――』

『先生、肉が煮えました。』

と十一屋は瑞見の話を遮つた。

女中が白紙を一枚づゝ客へ配りに來た。肉を突ツついた箸はその紙の上に置いて貰ひたいとの意味だ。煮えた牛鍋は座

から縁側の上へ移された。奥の部屋に、牡丹屋の家の人達がゐる方では、障子を開けひろげるやら、籠つた空氣を追ひ出すやらの物音が聞える。十一屋はそれを聞きつけて、

「女中さん、さう言つて下さい。今にこちらのお婆さんでも、おかみさんでも、このにほひを嗅ぐと飛んで來るやうに成りますよつて。」

十一屋らしい言草だ。

「どれ、わたしも一つ藥喰ひとやるか。」

と寛齋は言つて、うまさうに煮えた肉のにほひを嗅いだ。好きな酒を前に、しばらく彼も一切を忘れてゐた。盃の相手には、こんな頼母しい人物も幕府方にあるかと思はれるやうな客がゐる。おまけに、初めて味ふ肉もある。

四

當時、全國に浪打つやうな幕府非難の聲からすれば、横濱や函館の港を開いたことは幕府の大失策である。東西人種の相違、道徳の相違、風俗習慣の相違から來るものを一概に未開野蠻として、人を喰つた態度で臨んで來るやうな西洋人に、さうやすやすとこの國の土を踏ませる法はない。開港が東照宮の遺志に反くはおろか、朝廷尊崇の大義にすら悖ると齒ぎしりを噛むものがある。

しかし、寛齋に言はせると、幕府のことほど世に誤り傳へられてゐるものはない。開港の事情を知るには、神奈川條約の實際の起草者なる岩瀬肥後守に行くに越したことはない。それには先づ幕府で監察（目付）の役を重んじたことを知つてかゝる必要がある。

監察とは何か。この役は數もさう多くないし、位もさう高くない。しかし、諸司諸職に關係のないものはないくらゐだ

らした口唇を持つて行く盃の持ち方からしてどうもたゞではないので、この人は話せると思つた。

『こんな話がありますよ。』と瑞見は思ひ出したやうに、『あれは一昨年の七月のことでしたか、エルヂンといふ英吉利の使節が蒸汽船を一艘幕府に獻上したいと言つて、軍艦で下田から品川まで來ました。まあ品川の人達としては折角の使節を歡待すといふ意味でしたらう。その翌日に、品川の遊女を多勢で軍艦まで押し掛けさしたといふものです。さすがに向ふでも面喰つたと見えて、後になつての言草がいゝ。あれは何者だ、一體日本人は自分の國の女をどう心得てゐるんだらうツて。いかにも英吉利人の言ひそうなことぢやありませんか。』

『先生。』と十一屋は膝を乘り出した。『わたしはまた斯ういふ話を聞いたことがあります。こつちの女が歯を染めたり、眉を落したりしてゐるのを見ると、西洋人は非常に厭な氣がするそうですね。ほんとうでせうか。まあ、わたし達から見ると、優しい風俗だと思ひますがなあ。』

『氣味惡く思ふのはお互ひでせう。事情を知らない連中と來たら、いろ〳〵なことをこぢつけて、やれ幕府の上役のものは英吉利の領事に妾を呉れたの、西洋人と結托してるの、何のツて、惡口ばかり。鎖攘、鎖攘（鎖港攘夷の略）――あの聲はどうです。わたしに言はせると、幕府が鎖攘を知らないどころか、あんまり早く鎖攘し過ぎてしまつた。蕃書を禁じて讀ませない、洋學者は遠ざけて近づけない、その方針を好いとしたばかりぢやありません、國内の人材まで鎖攘してしまつた。御覽なさい、前には高橋作左衛門を鎖攘する。土生玄磧を鎖攘する。後には渡邊華山、高野長英を鎖攘する。その結果はと言ふと、日本國中を實に頑固なものにしちまひました。外國のことを言ふのも恥だなんて思はせるやうにまで――』

『先生、肉が煮えました。』

と十一屋は瑞見の話を遮つた。

女中が白紙を一枚づゝ客へ配りに來た。肉を突ッついた箸はその紙の上に置いて貰ひたいとの意味だ。煮えた牛鍋は庭

から縁側の上へ移された。奥の部屋に、牡丹屋の家の人達が居る方では、障子を開けひろげるやら、籠つた空氣を追ひ出すやらの物音が聞える。十一屋はそれを聞きつけて、

「女中さん、さう言つて下さい。今にこちらのお婆さんでも、おかみさんでも、このにほひを嗅ぐと飛んで來るやうに成りますよつて。」

十一屋らしい言草だ。

「どれ、わたしも一つ藥喰ひとやるか。」

と寛齋は言つて、うまさうに煮えた肉のにほひを嗅いだ。好きな酒を前に、しばらく彼も一切を忘れてゐた。盃の相手には、こんな頼母しい人物も幕府方にあるかと思はれるやうな客がゐる。おまけに、初めて味ふ肉もある。

四

當時、全國に浪打つやうな幕府非難の聲からすれば、横濱や函館の港を開いたことは幕府の大失策である。東西人種の相違、道徳の相違、風俗習慣の相違から來るものを一概に未開野蠻として、人を喰つた態度で臨んで來るやうな西洋人に、さうやすやすとこの國の土を踏ませる法はない。開港が東照宮の遺志に反くはおろか、朝廷尊崇の大義にすら悖ると齒ぎしりを噛むものがある。

しかし、瑞見に言はせると、幕府のことほど世に誤り傳へられてゐるものはない。開港の事情を知るには、神奈川條約の實際の起草者なる岩瀨肥後守に行くに越したことはない。それには先づ幕府で監察（目付）の役を重んじたことを知つてかゝる必要がある。

監察とは何か。この役は祿もさう多くないし、位もさう高くない。しかし、諸司諸職に關係のないものはないくらゐだ

から、極めて權威がある。老中はじめ三奉行の重い役でも、鑑察の同意なしには事を決めることが出來ない。どうかして意見のちがふのを顧みずに斷行することがあると、鑑察は直接に將軍なり老中なりに面會して思ふところを述べ立てゝも、それを止めることも出來ない。およそ人の昇進に何が羨ましがられるかと言つて、鑑察の右に出るものはない。その人を得ると得ないとで一代の盛衰に關する役目であることも想ひ知られよう。嘉永年代、亞米利加の軍艦が渡つて來た日のやうに、外國關係の一大事變に當つては、幕府の上のものも下のものも皆強い衝動を受けた。その衝動が非常な任撰を行はせた。人材を登庸しなければ駄目だといふことを敎へたのも、またその刺激だ。從來親子共に役に就いてゐるものがあれば、子は賢くても父に超えることは出來なかつたのが舊い規則だ。それを改めて、三人のものが鑑察に拔擢せられた。その中の一人が岩瀨肥後なのだ。

岩瀨肥後は名を震といひ、字を百里といふ。築地に屋敷があつたところから、號を蟾州とも言つてゐる。心あるもいづれもこの人を推して、幕府内での第一の人とした。例へば阿蘭陀から觀光船を贈つて來た時に矢田堀景藏、勝麟太郎などを小普請役から拔いて、それ〴〵航海の技術を學ばせたのも彼だ。下曾根金三郎、江川太郎左衞門には西洋の砲術を訓練させる。箕作玄甫、杉田立端には蕃書取調所の敎育を任せる。さういふ類のことは殆んど數へきれない。松平河內、川路左衞門、大久保右近、水野筑後、その他の長老でも同輩でも、いやしくも國事に盡す志のあるものには誠意をもつて親しく交らないものはなかつたくらゐだ。各藩の有爲な人物をも延いて、身をもつて時代に當らうとしたのも彼だ。

瑞見に言はせると、幕府有司の殆どすべてが英米佛露をひきくるめて一概に毛唐人と言つてゐたやうな暗い時に立つて、百方その間を周旋し、いくらかでも明るい方へ多勢を導かうとしたものゝ摧心と勞力とは想像も及ばない。岩瀨肥後はそれを成した人だ。最初の米國領事ハリスが來航して、いよ〳〵和親貿易の交涉を始めやうとした時、幕府の有司はみな尻込みして、一人として背負つて立たうとするものがない。皆手を拱いて、岩瀨肥後を推した。そこで彼は一身を犧牲にす

る覺悟で、江戸と下田の間を往復して、數ヶ月もかゝつた後に漸く草稿の出來たのが安政の年の條約だ。

草稿は出來た。諸大名は江戸城に召集された。その時、井伊大老が出で、和親貿易の避けがたいことを述べて、委細を起案の岩瀬肥後に述べさせるから、得と聽いた後で諸君各自の意見を述べられるやうにと言つた。そこで大老は退いて、彼が代つて諸大名の前に進み出た。その時の彼の聲はよく徹り、言ふこともはつきりしてゐて、誰一人異議を唱へるものもない。いづれも時宜に適つた説だとして、悦んで退出した。ところが數日後に諸大名各自の意見書を出す頃になると、ことごとく前の日に言つたことを覆して、彼の説を破らうとするものが出て來た。それは多く臣下の手に成つたものだ。君侯といへどもそれを制することが出來なかつたのだ。そこで彼は水戸の御隱居や、松平春嶽、鍋島閑叟、その他の諸公に說いて、協力して事に當ることを求めた。岩瀬肥後の名が高くなつたのもその頃からだ。

しかし、條約交渉の相手方なる歐羅巴人が次第に態度を改めて來たことをも忘れてはならない。來るものも來るものも、皆ペリイのやうな態度の人ばかりではなかつたのだ。亞米利加領事ハリス、その書記ヒュウスケン、英吉利の使節エルギン、その書記オリファント、これらの人達はいづれも日本といふものをよく認めた。中には、日本に來た最初の印象は思ひがけない文明國の感じであつたとさへ言つた人もある。すべてこれらの事情は、岩瀬肥後のやうにその局に當つた人以外には多く傳はらない。それにつけても彼にはいろいろな逸話がある。彼が頭腦の好かつた證據には、英吉利の使節等が彼の聰明さに驚いたといふくらゐだ。彼は英吉利人から聽いた言葉を心覺えに自分の扇子に書きつけて置いて、その次の會見の折には、かなり正確にその英語を發音したといふ。英吉利人の方では又、彼の爲ることを見て、日本の扇子は手帳にもなり、風を送る器にもなり、退屈な時の手慰みにもなると言つたといふ話もある。

もと／＼水戸の御隱居はさう頑な人ではない。瑞見に言はせると、尊王攘夷といふ言葉は御隱居自身の筆に成る水戸弘道館の碑文から來たと言はれるくらゐで、最初のうちこそ御隱居も髮の毛の紅い蠻人の住む國ぐらゐに外國を視て、何でも一つ撃ち懲せといふ方にばかり志を向けてゐたらしいが、だん／＼岩瀨肥後の說を聞いて大に悟られるところがあつた。御隱居はもとより英明な生れつきの人だから、今日の外國は古の夷狄ではないといふ彼の言葉に耳を傾けて、無謀の戰はいたずらにこの國を害するに過ぎないことを回顧するやうになつた。その時、御隱居は彼に一つの喩へ話を告げた。ここに一人の美しい娘がある。その娘にしきりに結婚を求めるものがある。再三拒んで容易に許さない。男の心がます／＼動いて來た時になつて、始めて許したら、その二人の愛情は反つて濃やかで、多情な人の速かに受け容れるものには勝らうといふ喩へである。實際、あの御隱居が斷乎として和親貿易の變更すべきでないことを彼に許した證據には、こんな娘の喩へを語つたのを見ても分る。御隱居が既にこの通り、外交の止むを得ないことを認めて、他の親藩にも外樣の大名にも說き勸めるくらゐだ。それまで御隱居を動かして鎖攘の說を唱へた二人の幕僚、藤田東湖、戶田蓬軒なども遠見のきく御隱居の見識に服して、自分等の說を改めるやうになつた。そこへ安政の大地震が來た。一藩の指導者は二人とも壓死を遂げた。御隱居は一時に兩つの翼を失つたけれども、その老いた精神はますます明るいところへ出て行つた。御隱居の長い生涯のうちでも岩瀨肥後に逢つた頃は特別の時代で、御隱居自身の內部に起つて來た外國といふものの考へ直しもその時代に行はれた。

しかし、岩瀨肥後に取つては、彼が一生のつまづきになるほどの一大珍事が出來した。十三代將軍（德川家定）は性來多病で、物言ふことも滯りがちなくらゐであつた。どうしても好い世嗣ぎを定めねばならぬ。この多事な日に、內は諸藩の人心を鎭め、外は各國に應じて行かねばならぬ。德川宗家を見渡したところ、その任に耐えそうなものは、一橋慶喜の外にない。殊に一代の聲望並ぶもののないやうな水戶の御隱居が現にその父親であるのだから、諸官一同申し合せて、

慶喜擁立のことを上請することになつた。岩瀨肥後はその主唱者なのだ。水戶はもとより、京都方面まで異論のあらう筈もない。ところがこれには反對の說が出て、血統の近い紀州慶福を立てるのが世襲傳來の精神から見て正しいと唱へ出した。その聲は大奧の深い簾の內からも出、水戶の野心と陰謀を疑ふ大名有司の仲間からも出た。この形勢を看て取つた岩瀨肥後は、血統の近いものを立てるといふ聲を排斥して、年長で賢いものを立てるのが今日の急務であると力說し、老中奉行等もその說に贊成するものが多く、それを漏れ聞いた國內の有志者達も皆大に喜んで、太陽はこれから輝かうと言ひ合ひながら、いづれもその時の來るのを待ち望んだ。意外にも、その上請をしないうちに、將軍は脚氣にかゝつて、僅か五年を十三代の一期として、俄かに薨去した。岩瀨肥後の極力排斥した慶福擁立說がまた盛り返して來た日を迎へて見ると、そこに將軍の遺旨を奉じて起ち上つたのが井伊大老その人であつたのだ。

岩瀨肥後の政治生涯はその時を終りとした。水戶の御隱居を始めとして、尾州、越前、土州の諸大名、およそ本件彼の說に贊成したものは皆江戶城に集まつて大老と激しい議論があつたが、大老は一切聽き入れなかつた。安政大獄の序幕はそこから切つて落された。彼はもとより首唱の罪で、嚴しい譴責を受けた。斥けられ、座らせられ、斷り無しに、人と往來することすら禁ぜられた。その時の大老の言葉に、岩瀨輩が輕賤の身でありながら柱石たる我々をさし置いて、勝手に將軍の繼嗣問題なぞを持ち出した。その罪は憎むべき大逆無道にも相當する。それでも極刑に處せられなかつたのは、彼も日本國の平安を謀つて、計畫することが圖に當り、その盡力の功勞は埋められるものでもないから、非常な寬典を與へられたのであると。

瑞見に言はせると、今度江戶へ出て來て見ても、水戶の御隱居はじめ大老と意見の合はないものはすべて斥けられてゐる。諸司諸役ことごとく更替して、大老の家の子郎黨ともいふべき人達で占められてゐる。驚くばかりさかんな大老の權威の前には、幕府內のものは皆屛息して、足を累ねて立つ思ひをしてゐるほどだ。岩瀨肥後も今は向島に蟄居して、客に

も逢はず、號を鶴所と改めて僅かに好きな書畫などに日々の憂さを慰めてゐると聞く。

「幕府のことは最早語るに足りるものがない。」

と瑞見は嘆息して、その意味から言つても、罪せられた岩瀬肥後を憐んだ。さういふ瑞見は、彼自身も思ひがけない譴責を受けて、蝦夷移住を命ぜられたのがすこし早かつたばかりに、大獄事件の卷添へを喰はなかつたといふまでである。

十一屋の隱居は瑞見よりも一歩先に江戸の方へ歸つて行つた。瑞見の方は腹具合を惡くして、寛齋の介抱などを受けてゐるために、神奈川を立つのが二三日後れた。

瑞見は蝦夷から同行して來た供の男を連れて、寛齋にも牡丹屋の亭主にも別れを告げる時に言つた。

「わたしもまた函館の方へ行つて、養蠶でもして來ます。」

こんな言葉を殘した。

客を送り出して見ると、寛齋は一層さびしい日を暮すやうになつた。「毎晩のやうに彗星が空にあらはれて怪しい光を放つのは、あれは何かの前兆を語るものであらうなどと、人の噂さにろくなことはない。水戸藩へはまた秘密な勅旨が下つた、その使者が幕府の嚴重な探偵を避けるため、行脚僧に姿を變へてこの東海道を通つたといふ流言なぞも傳はつて來る。それを見て來たことのやうにおもしろがつて言ひ立てるものもある。攘夷を意味する横濱襲撃が諸浪士によつて企てられてゐるとの噂も絶えない。

暖かい雨は幾度か通り過ぎた。冬中どこかへ飛び去つてゐた白い鴉は、また横濱海岸に近い玉楠の樹へ歸つて來る。舊暦三月の季節も近づいて來る。寛齋は中津川の商人等をしきりに待遠しく思つた。例の賣込商を訪ねる度に、貿易諸相場

は上値を辿つてゐるとのことで、この調子で行けば生糸六十五匁か七十匁につき金一兩の相場もあらはれやうとの話が出る。江州、甲州、あるひは信州飯田あたりの生糸商人も追々入り込んで來る模樣があるから、なかなか油斷はならないとの話もある。神奈川在留の外國商人――中にも英吉利人のケウスキイなどは横濱の將來を見込んで、率先して木造建築の商館なりと打ち建てたいとの意氣込みでゐるとの話もある。

『萬屋さんも、だいぶ御ゆつくりでございますね。』

と牡丹屋の亭主は寛齋を見に裏二階へ上つて來る度に言つた。

三月三日の朝はめづらしい大雪が來た。寛齋が廊下に出ては眺めるのを樂みにする椎の枝なぞは、夜から降り積る雪に壓されて、今にも折れさうなくらゐに見える。牡丹屋では亭主の孫にあたるちひさな女の兒のために初節句を祝ふと言つて、その雪の中で、白酒だ豆煎りだと女中までが大騷ぎだ。割子辨當に重詰、客振舞ひの酒肴は旅に來てゐる寛齋の膳にまでついた。

その日一日、寛齋は椎の枝から溶け落ちる重い音を聞き暮した。やがてその葉が雪に濡れて、反つて一層の輝きを見せる頃には、江戸方面からの人の噂さが櫻田門外の變事を傳へた。

刺客およそ十七人、脫藩除籍の願書を藩邸に投げ込んで永の暇を告げたといふから、浪人ではあるが、それらの水戸の侍達が井伊大老の登城を待ち受けて、その首級を擧げた。この變事は人の口から口へと潛むやうに傳はつて來た。刺客はいづれも斬姦主意書といふを懷にしてゐたといふ。それには大老を殺害すべき理由を辯明してあつたといふ。

『あの喜多村先生なぞが蝦夷の方で聞いたら、どんな氣がするだらう。』

と言つて、思はず寛齋は宿の亭主と顏を見合せた。

井伊大老の横死は絕對の秘密とされただけに、來るべき時勢の變革を豫想させるかのやうな底氣味の惡い沈默が周圍を

支配した。首級を擧げられた大老を好く言ふ人は少い。それほどの憎まれ者も、亡くなつた後になつて見ると、やつぱり大きい人物であつたと、一方には言ひ出した人もある。成程、生前の大老は兎角の評判のある人ではあつたが、唯、他人に眞似の出來なかつたことが一つある。外國交涉のことにかけては、天朝の威をも畏れず、各藩の意見のためにも動かされず、斷然として和親通商を許した上で、それから上奏の手續きを執つた。この一事は天地も容れない大罪を犯したやうに評するものが多いけれども、もしこの決斷がなかつたら、日本國はどう成つたらう。輕く見積つても蝦夷はもとより、對州も壹岐も英米佛露の諸外國に割き取られ、內地諸所の埠頭は隨意に占領され、その上に背負ひ切れないほどの重い償金を取られ、支那の道光時代の末のやうな姿になつて、獨立の體面はとても保たれなかつたかも知れない。大老がこの至險至難を凌ぎ切つたのは、この國に取つての大功と言はねばなるまい。こんな風に言ふ人もたまにはあつた。兎もあれ、大老は德川世襲傳來の精神を支へてゐた大極柱(だいこくばしら)の倒れるやうに倒れて行つた。この報知を聞く彥根藩士の憤激、續いて起つて來さうな彥根と水戶兩藩の葛藤は寛齊にも想像された。前途は實に測りがたかつた。

神奈川附近から橫濱へかけての町々の警備は一層嚴重を極めるやうになつた。杋見の橋詰には杉の角柱(かくばしら)に大貫(おほぬき)を通した關門が新たに建てられた。夜になると、神奈川にある二ケ所の關門も堅く閉され、三つ所紋の割羽織に裁附袴(たつつけばかま)もいかめしい番兵が三人の人足を先に立てゝ、外國諸領事の假寓する寺々から、神奈川臺の異人屋敷の方までも警戒した。町々は夜ふけて出歩く人も少く、あたりをいましめる太鼓の音のみが聞えた。

五

漸く、その年の閏三月を迎へる頃になつて、[万](角萬(かくまん))とした生糸の荷がぽつ〳〵寛齊の許に屆くやうになつた。寛齊は順に來るやつを預かつて、適當にその仕末をしたが、木曾街道の宿場々々を經て江戶廻りで屆いた荷を見る度に、中津

川商人が出向いて來る日の近いことを思つた。毎日のやうに何かの出來事を待ち受けさせるかのやうな、こんな不安な周圍の空氣の中で、よくそれでも生糸の荷が無事に着いたとも思つた。

萬屋安兵衞が手代の嘉吉を連れて、美濃の方を立つて來たのは同じ月の下旬である。二人は矢張以前と同じ道筋を取つて、江戸兩國の十一屋泊りで、舊暦四月に入つてから神奈川の牡丹屋に着いた。

にはかに寛齋のまわりも賑かになつた。旅の落し差を床の間に預ける安兵衞もゐる。部屋の片隅に脚絆の紐を解く嘉吉もゐる。二人は寛齋の聞きたいと思ふ郷里の方の人達の消息――彼の妻子の消息、彼の知人の消息、彼の舊い弟子達の消息ばかりでなく、何か斯う一口には言つてしまへないが、あの東美濃の盆地の方の空氣までも何となく一緒に寛齋のところへ持つて來た。

寛齋が起つたり座つたりしてゐる側で、嘉吉は働き盛りの手代らしい調子で、

『宮川先生も、隨分お待ちになつたでせう。なにしろ春蠶(はるこ)の濟まないうちは、どうすることも出來ませんでした。糸は出揃ひませんし。』

と言ふと、安兵衞も寛齋をねぎらひ顔に、

『いや、よく御辛抱が續きましたよ。こんなに長くなるんでしたら、一度國の方へお歸りを願つて、また出て來て頂いてもとは思ひましたがね。』

百里の道を往復して生糸商賣でもしようといふ安兵衞には、さすがに思ひやりがある。

『どうしても、誰か一人こつちにゐないことには、濱の事情もよく分りませんし、人任せでは安心もなりませんし――やつぱり先生に殘つてゐて頂いて好かつたと思ひました。』

とも安兵衞は言ひ添へた。

やがて灯ともし頃であつた。三人は久し振で一緒に食事を濟ました。町をいましめに來る太鼓の音が聞える。閏三月の晦日まで隱されてゐた井伊大老の喪も既に發表されたが、神奈川附近ではなかなか警戒の手をゆるめない。嘉吉は裏座敷から表側の廊下の方へ見に行つた。陣笠を冠つて兩刀を腰にした番兵の先には、弓張提灯を手にした二人の人足と、太鼓を叩いて廻る一人の人足とが並んで通つたと言つて、嘉吉は眼を光らせながら寛齊のゐるところへ戻つて來た。

『さう言へば、先生はすこし横濱の匂ひがする。』

と嘉吉が戯れて言ひ出した。

『馬鹿なことを言つちやいけない。たまに波止場へ行つて見るぐらゐで、横濱の匂ひはすこし早いよ。』

この七ケ月ばかりの間、親しい人の誰の顏も見ず、誰の言葉も聞かないでゐる寛齊が、どうして旅の日を暮したか。嘉吉の眼がそれを言つた。

『そんなら見せようか。』

寛齊は笑つて、毎日のやうに手習ひした反古を行燈のかげに取り出して來て見せた。過ぐる七ケ月は寛齊に取つて、二年にも三年にも當つた。旅籠屋の裏二階から見える椎の木より外にこの人の友とするものもなかつた。その枝ぶりを眺めくするうちに、いつの間にか一變したと言つてもいゝほどの彼の書體がそこにあつた。

寛齊は安兵衞にも嘉吉にも言つた。

『去年の十月頃から見ると、横濱も見ちがへるやうに成りましたよ。』

糸目六十四匁につき金一兩の割で、生糸の手合せも順調に行はれた。この手合せは神奈川臺の異人屋敷にあるケウスキ

ーの假宅で行はれた。賣込商と通辯の男とがそれに立ち合つた。買方では牡丹屋に泊つてゐる安兵衞も嘉吉も共に列席して、書類の調製は寛齋が引き受けた。

ケウスキーはめつたに笑はない男だが、その時だけは青い瞳の眼に笑みを湛へて、

『自分は近く横濱の海岸通りに木造の二階屋を建てる。自分の同業者でこの神奈川に來てゐるものには、英國人バルベルがあり、米國人ホウルがある。しかし、自分は誰よりも先に、あの商館を完成して、そこに英吉利第一番の表札を揭げたい。』

かういふ意味のことを通辯に言はせた。

その時、ケウスキイは『解つて異れたか』といふ顏付をして、安兵衞にも嘉吉にも握手を求め、寛齋の方へも大きな手をさし出した。この英吉利人は寛齋の手を堅く握つた。

『手合せは濟んだ。これから糸の引渡しだ。』

異人屋敷を出てから安兵衞がホッとしたやうにそれを言ひ出すと、嘉吉も連れ立つて步きながら、

『旦那。それから、まだありますぜ。請取つた現金を國の方へ運ぶといふ仕事がありますぜ。』

『その事なら心配しなくてもい〻。先生が引き受けてゐて下さる。』

『こいつがまた一仕事ですぞ。』

寛齋は二人の後から神奈川臺の土を踏んで、一緒に海の見えるところへ行つて立つた。眼に入るかぎり、ちやうど港は發展の最中だ。野毛町、戸部町なぞの埋立ても出來、開港當時百一戸ばかりの横濱に何程の移住者が增したと言つて見ることも出來ない。この横濱は來る六月二日を期して、開港一周年を迎へようとしてゐる。その紀念には、洲乾辨天の祭禮をすら迎へようとしてゐる。牡丹屋の亭主の話によると、神輿はもとより、山車、手古舞、蜘蛛の拍子舞などいふ手踊り

の舞臺まで張り出して、出來るだけ盛んにその祭禮を迎へようとしてゐる。誰がこの横濱開港をどう非難しようと、まるでそんなことは頓着しないかのやうに、一旦歐羅巴の方へ向つて開いた港からは、世界の潮が遠慮會釋なくどん／＼流れ込むやうに見えて來た。羅紗、唐棧、金巾、玻璃、藥種、酒類なぞがそこから入つて來れば、生糸、漆器、製茶、水油、銅及び銅器の類なぞがそこから出て行つて、好かれ悪しかれ東と西の交換がすでに／＼始まつたやうに見えて來た。

郷里の方に待ち受けてゐる妻子のことも、寛齋の胸に浮んで來た。彼の心は中津川の香藏、景藏、それから馬籠の半藏なぞの舊い三人の弟子の方へも行つた。あの血氣壯んな若者達が、「このむづかしい時をどう乘ッ切るだらうかとも思ひやつた。

生糸貿易の利得のうち、小判で二千四百兩の金を遠く中津川まで送り屆けることが寛齋の手に委ねられた。安兵衛、嘉吉の二人は神奈川に居殘つて、六月の頃まで商賣を續ける手筈であつたからで。當時、金銀の運搬にはいろ／＼難澁した話がある。鰑にくるんで乾物の荷と見せかけ、辛うじて胡麻の蠅の難をまぬかれた話もある。武州川越の商人は駕籠で夜道を急がうとして、江戸へ出る途中で駕籠かきに襲はれた話もある。五十兩からの金を携帶する客となると、駕籠かきにはその重さで分るといふ。こんな不便な時代に、寛齋は二千四百兩からの金を預かつて行かねばならない。貧しい彼はそれほどの金を曾て見たこともなかつたくらゐだ。

寛齋は牡丹屋の二階にゐた。その前へ來て座つて、手提げのついた煙草盆から一服吸ひつけたのが安兵衛だ。

「先生に引き受けて頂いて、わたしも安心しました。この役を引き受けて頂きたいばかりに、わざ／＼先生を神奈川へお誘ひして來たやうなものですよ。」

と安兵衛が白狀した。

しかし、これは安兵衛に言はれるまでもなかつた。もとより寛齋も承知の上で來たことだ。

寛齋は前途百里の思ひに胸の塞がる心地で起ちあがつた。迫り來る老年は最早この人の半身に上つてゐた。右の耳には殆んど聽く力がなく、右の眼の視る力も左のほどには利かなかつた。彼はその衰へたからだを起して、最後の「隱れ家」に辿り着くための冒險に當らうとした。その時、安兵衛は一人の宰領を彼のところへ連れて來た。

『先生、この人が一緒に行つて呉れます。』

見ると、荷物を護つて行くには屈強な男だ。千兩箱の荷造りには嘉吉も來て手傳つた。

四月十日頃には、寛齋は朝早く支度をはじめ、旅の落し差に身を堅めて、七ケ月の佗しい旅籠屋住居に別れて行かうとする人であつた。牡丹屋の亭主の計らひで、別れの盃なぞがそこへ運ばれた。安兵衛は寛齋の前に座つて、先づ自分で一口飲んだ上で、その土器を寛齋の方へ差した。この水盃は無量の思ひでかはされた。

『さあ、退いた。退いた。』

といふ聲が起つた。廊下に立つ女中なぞの間を分けて、三つの荷が二階から梯子段の下へ運ばれた。その荷造りした箱の一つ〳〵は、嘉吉と宿の男とが二人掛りで漸く持ち上るほどの重さがあつた。

『オヤ、もうお立ちでございますか。江戸はいづれ兩國のお泊りでございませう。あの十一屋の隱居にも、どうか宜しく仰つて下さい』

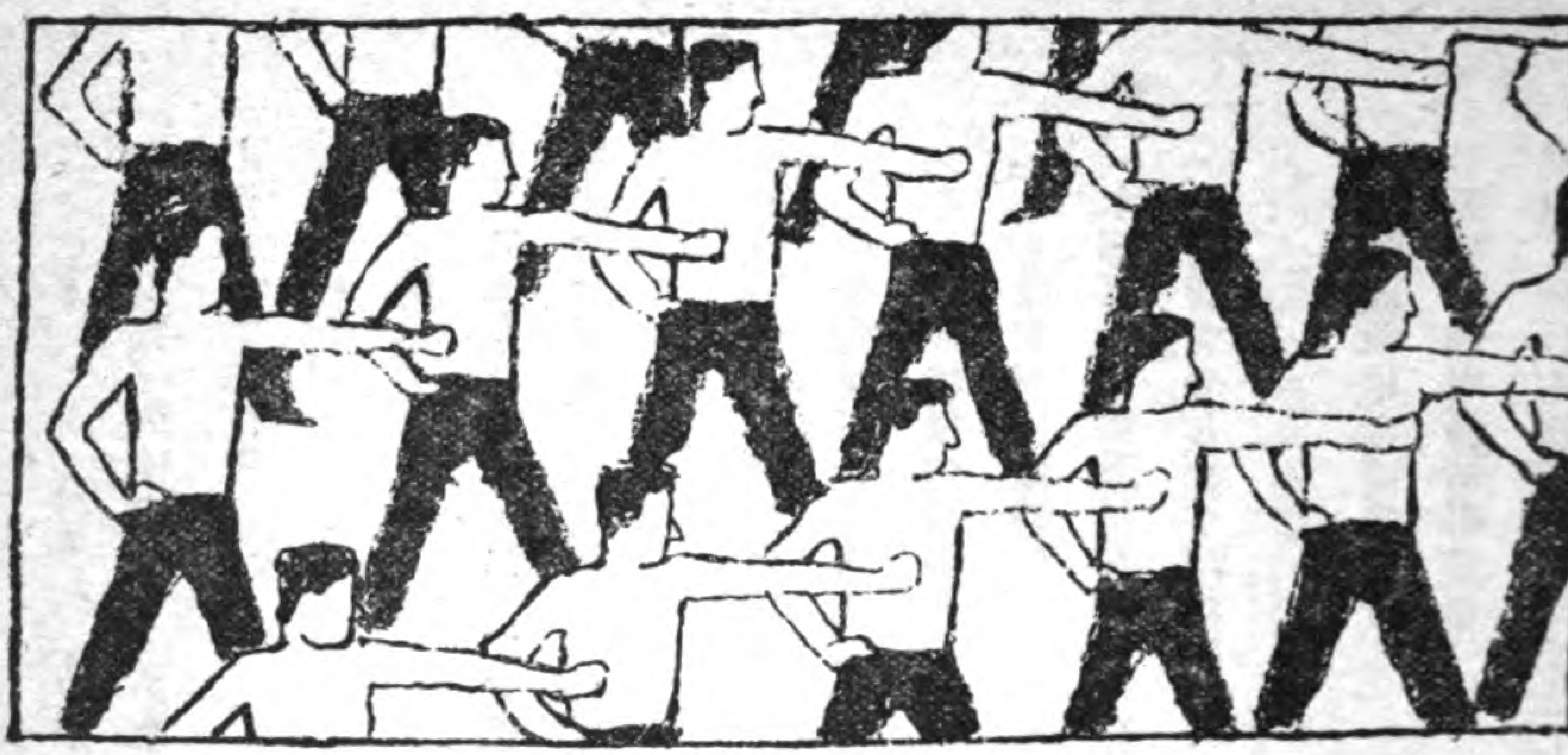
と亭主も寛齋のところへ挨拶に來た。

馬荷一駄。それに寛齋と宰領とが附き添つて、牡丹屋の門口を離れた。安兵衛や嘉吉はせめて宿はづれまで見送りたいと言つて、一緒に瀧の橋を渡り、阿蘭陀領事館の國旗の出てゐる長延寺の前を通つて、神奈川御臺場の先まで隨いて來た。

その時になつて見ると、郷里の方にゐる舊い弟子達の思惑もしきりに寛齋の心に掛つて來た。彼が一步踏み出したところは、往來するものゝ多い東海道だ。彼は老鶯の世を忍ぶ風情で、とぼ〱とした荷馬の藁沓の音を聞きながら、遠く板橋廻りで木曾街道に向つて行つた。

（第四章をはり――次回來る七月號に）

附記――この稿を本誌に掲載し始めたのは昨年の四月であつたが、この第四章でちやうど一年を迎へることになつた。ことしの正月あたりは私の身邊も随分多事であつた。重い病人に。上京する人に。歸國する人に。嫁いで行く人に。右の事情から今回は豫定の分量ほども書けなかつたが、來る七月號にはもつと多くの紙數を寄せたいと思ふ。幸に身は無事で、兎も角もこの續稿をまとめることの出來たのは自分としてもうれしかつた。最早春の彼岸も近い。私はこの作の續きを支度して置いて、二度目の七月を迎へることを樂みにする。（例によりこの稿、年四回――正月、四月、七月、十月、本誌掲載の筈）



一歩前進二歩退却

金子洋文

各派の情報

情報が亂れ飛んだ。

「石田派、彈丸きれた。

安康派、臺灣坊主幾分本部から持つてくるらしい。

敵の策戰、石田を犧牲にして安康を出すらしい。

石田派の地盤一圓で十分、安康派の地盤一圓五十錢、二圓どまりで釣れるものと心得べし。

自重せよ。

敵は彈丸なきを瞞着するため、平靜を裝ひ、投票前夜手渡す約束にて地盤を堅め

つゝあり。
一方の策戰その虚をつくにあり、即ち敵方買收金缺乏せることを宣傳せよ。
しかして實戰は手控へよ。
闘ひは投票日前夜より翌日にかけて開始せよ。
猛烈に開始せよ。
我等は與黨なり。また、二大臣を頂くなり、彈丸は豐富、行動また自在なり。
無産派は齒牙にかけるにあたらず、演說會頗る氣勢のあがりたる場合幾分彈丸增して可なり。

運動員の一人がたづねた。
「この臺灣坊主つて何け。」
「それ、前總督の村川えさ、明日應援にくると新聞にあつたすべ。」
「なるほど、何ぼ持つてくるべ。」
「本部だつて貧乏だもの、自分の懐から出す氣づかひはなし、せい〲持つて來ても一萬位だすべ。」
「一萬圓ぢやしようがない。」

「戰闘はたけなはなり。」
男鹿郡、湖東部奮起せり。
農村に於ける演說會は、主として

イ）不景氣を追ひ出すこと。

ロ）戸數割の撤廢。

ハ）耕作權の確立。

ニ）最高小作料の制定。

ホ）立入禁止絕對反對。

ヘ）生活必需品の免税。

ト）積極政策、——即ち鐵道、河川、道路、橋梁の修築新設。

チ）無產黨は共產黨であることの宣傳。

リ）又、無產黨の幹部はストライキを賣ることによつて生活してゐる——一例勞働總同盟の松下は野田の爭議に於て數千圓着服した事實。

等々。

さて正敵に對しては——。

最も弱き信用派の地盤をつくべし。

彈丸は最後に於て十分配給さるべし。

恐れること勿れ。

二大臣何ものぞ。

總裁應援に來らるゝとの情報あり。

また、前臺灣總督村川閣下は本部に嚴談して十分手配の上、大戰することになりたり。

敵は××を動員して公然と買收するにちがひなし。十分監視して見つけ次第告發すべし。
最後の日は間近かし。油断大敵。

この情報を懐中して協調組合の鈴吉が、殆んど政友の選擧事務所の感ある役場に駈けこんだ時、今戸の農民組合事務所では青年部、婦人部を集めて、若い村議の近藤が短かい舌で演説をしてゐた。
「諸君、鬪ひは旬日にせまりました。民政の奴等も政友の奴等も今や買收に血まなこになつて奔走してゐます。我々は根限り勢限り警戒して彼等の不正を摘發しなければならない。これ今囘の選擧にあたりまして諸君、青年部、婦人部に課せられたる重大任務であります。
諸君は近頃の新聞がまるで吾々無産黨を無視し、あまつさへ逆宣傳をしてゐることを目擊してゐるでせう。しかし諸君、我々は彼等の虚報、逆宣傳にまどはされてはならない。なぜなら彼等はことごとくブルジョア共の代辯者であり、手代であり、犬である。
魁新聞は民政派の新聞である、秋田新聞、秋田時事は政友派の新聞である。彼等は買收選擧を公然と宣傳し、民衆を僞瞞することを職能としてゐるものである。
魁新聞は何を逆宣傳したか。我々の唯一の武器である演説會の員數を一桁誤報することによつて我々の運動の不熱心と不人氣を宣傳した。更らに我々の演説が禮義を缺き、過激であることを宣傳することによつて注意、中止を食らはす警官の横暴を合理化した。
秋田新聞、秋田時事は問題としない、讀む人間は少ないし、誰も彼等の記事を正しいと思ふものはない。
諸君、我々無產黨の遊說隊は六班に別れて吹雪と彼等の暴壓に向つて鬪つてゐるのだ。山を越え野を越え、全身全力を

そゝいでたゝかつてゐるのだ。我々は今本部から來た情報を諸君に報告する。この情報こそあらゆる新聞記事をけとばすに足る我々の正しいニユウスだ。

第五情報

一）候補者班は河邊郡を了へて北秋郡と合流して活動してゐる。鷹巣、大館、扇田、花輪、小坂鑛山、早口、二ッ井

二）湖東部の活躍目覺ざまし、寒風山を突破し、前人未踏の男鹿中、島、加茂等へ進出せり。

三）河邊派、すこぶる有勢、前回全投票の（二十五票）二十倍突破の勢なり。

四）北秋、前田村の全組合一致して我黨支持に決定せり。魁新聞記事は完全なデマなり。

五）前田河廣一郎來援、秋田二ヶ所、鷹巣、大館を了へて歸京。

六）平林たい子、山本和子病氣にて來たらず。奥ムメヲ十八日來る（ポスターに來援未定の人名を絶對に書くこと勿れ、斯くの如き宣傳法は無產黨の恥と知れ。）

七）青野季吉、黑島傳治、細田源吉、小生夢坊、十七日來援。

八）今日まで各班の演說合計百三十四回聽衆人員約六萬七千名（魁新聞のは大デマなり）

九）鵜川、中止二回、前田村、中止一回、扇田中止一回。

指令（第五）

一）山本郡能代港秋田木材の社民黨、信田派に全部買收される疑ひあり、警戒すべし、秋田木材は金解禁により破產の狀態にあり、早晩社員の陶汰あるに相違なし、その點を力說して選擧後の鬪爭に備ふべし。

二）山本郡信田派の遊說隊中早大學生にして社民の松岡駒吉のダラ幹ぶりをあばいて我が黨攻撃の材料にする由、現狀を捕へ、演壇より引づり下ろして叩きのめしてやるべし。
三）石田派の遊說隊農村に於て無産派と等しき政策をとく由、その候補者の屬する黨が何黨であるか吟味することを強調すべし。
四）鹿角郡花輪にウルトラ・リンケンの小勢力あり、野次に乘ぜられること勿れ。
五）小坂鑛山は文部大臣の大買收の地盤たり、鑛夫全般に對しすでに投票日の日當を與へし由、また演說會には助工手達を派して見張りする由徹底的に暴露すべし。また鑛山は金解禁によつて不況にあり、四月頃馘首者相當ある由、この點について次の鬪爭に用意せよ。
六）運動資金は少ない、經濟すべし、馬橇を二本の足に代へよ。
七）開會時間及び（おくれても二十分）各辯士の演說時間厳守。本部に於ては犯禁の黑表（ブラツクリスト）調製中なり。
八）各組合に於ける青年部、婦人部を總動員せよ、鬪ひは迫まつた、買收を徹底的に監視し、つかまへろ！
すでに餘すところ四日、死力を盡して鬪へ！

鬪爭する部落民

村は下井河、今戸、濱井河の三部落からなつてゐた。近くに八郎湖を持つてゐたので村民は殆んど半農、半漁の生活をしてゐた。
農民は極度に貧しかつた。
しかし、今や彼等は貧しさに蒼ざめてゐなかつた。また、地主の鞭にうちのめされ、彼等の鋭い眼光に威壓されてゐな

かつた。

彼等は貧窮の底から立上つた。

自らを理解し、自らの力を知つた。

彼等の呼吸は暗い我が家に、狭い部落に押込められてゐなかつた。初めはおそる／＼組合へ、町へ、縣へ、やがて階級へ解き放たれた。

呼吸が自由になると彼等は默つてゐなかつた。

元氣よく／＼しやべり出した。

地主の黒門なんぞこはくねえぞ。

馬の御機嫌まで伺はなくてすむんだ。

村會のざまは何だ。

鶏をつぶして酒を飲みながら村會を開くのはけしからん。

戸數割を下げろ。

村長は中間地主だ。

犬ばかり飼ひやがつて役場の金を使ひ込んでゐるにちがひない。

あいつを叩き出せ。

助役もいかん。

收入役もいかん。

この非難と不平の聲が次第に鬪爭の形態に組織されて行つた。そして彼等は村會へ四人の議員をおくり出した。

四人は八人の地主議員を向ふにまはして勢一杯に闘つた。彼等はまづ村財政の徹底的な調査にかゝつた。そして一千五百圓の金が不足してゐることを發見した。

收入役は全責任を負ふて辭任することになつた。しかし彼等は追撃の手を緩めなかつた。

收入役を抱きこんで金を使ひ込んだのは村長にきまつてゐるからだ。

村長は縣會副議長までやつたことのあるしたゝかものだ。彼はあくまで犯罪を收入役におしつけ、責任としてその金を自分が出すと言ひ出した。しかし、四人はその手に乘らなかつた。收入役が監獄へ行きたくなかつたら、金を何處からか（村長が出すにきまつてゐる）工面してくるにちがひない。それと、監督すべき村長の責任とは別個の問題である。

村會は混亂し紛糾した。そして採決の結果、八對四で村長不信任案は可決された。日頃村長の横暴を憎んでゐた民政派が彼等と合流したのだ。

斯くして狡猾無比の村長は追ひ出したが、最も大事な戸數割の制定に於て彼等は八對四の小數をもつて破れた。くやしまぎれに支部長の濱田は聽衆の諒解を得て演說した。

「諸君は多數をもつて我々の正當な案を否決した。しかしその實は如何とも曲げることはできない。諸君は戸數割は我々農民にとつて如何に無法な惡税であるかを理解せうとしない、この租税こそは明治時代の役人共が農民の無智を利用して課したるところの最も苛酷な惡税である。

しかるに諸君はこの惡税を算定するにあたつて、搾取的慣習から二重に我々を苦しめやうとする。

我々の小作料は決して一定してゐない。一段歩につき一石一斗から一石五六斗に至る區々の狀態にある。それを個々に取調べず、一樣に一石二斗平均に制定するとは何事であるか、然らば現在地主に一石二斗以上拂つてゐるものはどうすればよいのか、明かに不當な、不正な算定でなくて何ぞや。

貴様等はこの制定で滿足するだらう。

而し我々はこの判定に服從するものぢやない。

もし、あくまで一段歩一石二斗の小作料を正しいとするならば、我々は小作料永久減額の鬪爭をもつて地主に答へるだらう。

「どつちが勝つか見てゐやがれ！」

そして彼等は宣言通り秋の收穫時に於て小作料二割永久減額の爭議にはいつたのだ。

彼等は刈取つた米を一粒も地主におさめなかつた。四斗俵として三千俵、爭議へ參加した部落民は二百人、地主側は大小ひつくるめて七十名、百五十町歩の廣い地域にわたつてゐた。

爭鬪は冬を迎へて激化した。

氷りづいた八郎湖横斷の示威運動をきつかけに、中間地主に對する襲擊、次いで横手勸農會社の暴力團を迎へて街路の雪を染めた。――斯くて部落が、男女の差別なく爭鬪と憎惡にたぎつてゐる中へ總選擧が持込まれたのだ。

荒らい女房

「おつ母、勳章が出かけて行つたぞ。」

尋常一年生のはつ子が奥へかけ込んで來て言つた。

「何勳章？　何處へ行つた。曲つたか、まつすぐにか」

「曲つて行つたぞ。」

「よし。」

女房はかゝつてゐた晩飯の仕度をほふりなげて叫んだ。

「はつ子、ぼつちとつてけれ」それを頭からすつぽりかぶつて店の方へ飛び出して行きながらまた叫んだ。

「閑爐裡の公魚(ちかつこ)こがすなよ。」

こゝは潘井河部落の組合支部のある家だつた。

村の雜貨店で、部落の中央に位した往來に硝子戸を持つてゐたので、店の爐に座つてゐながら往來を監視することができた。また部落の女房や娘が買物に來る度に樣子をさぐることができたし、買物旁々報告にくる者もゐた。潘井河部落の婦人部、青年部のたまりに等しかつた。

勳章とは綽名である。本名藏太郎と言つて、日露戰爭で金鵄勳章にありついた男だ。日雇で地主に多く仕事をもつてゐるので彼はいつも農民組合とは睨み合つてゐた。そして今は民政黨のかくれた運動員だつた。

「金鵄勳章をもつ人間は選擧運動できない筈だ。」

これは婦人部、青年部の討論にのぼつたことがある。

しかしそれが間違ひであることが知れたので、勳章に對する人々の憎しみはかへつて意久地悪くねぢ曲つて行つた。

「ふんづかまえて、勳章をとりあげてやらう。」

雜貨店の女房は熱心なその一人だつた。彼女は秘密に三人の仲間をつくつてこの運動に熱中してゐた。

空は怠けて降つたり止んだりしてゐた。こんな日は黄昏が早くからきて人の心を焦たゝせた。

店の前を曲ると途はやゝのぼり坂になつてゐる。女房はちら／＼降る雪の半町先に勳章の姿を見つけた。

彼女は急いだ。急ぎながらこれから先に組合員でない小作人の家が何軒あるか數へ出した。買收するとすれば組合員外の小作人であると思つたからだ。

橋の手前で勳章は右へ曲つた。

彼女は「しめたッ」と思つた。

橋を過ぎると向側は半以上組合にはいつてゐない小作人の家である。が、右へ曲つた所には家が十軒ばかりしかなかつたし、そのうち七軒は組合員の家だ。

さてどうせう。このまゝ後をつけて行つたものかどうか、もう、彼の行く家は三軒にきまつてゐる。そこへ行つた所でどうすることもできない、一つ、晩に皆集つてから相談してもおそくあるまい、……と、ためらつてゐる所へ、すぐ前の家から飛び出してきた男がある。

政友會の運動員である。鎌築だつた。

「おや……」と男はやゝ仰山におどろいた風を見せて言つた。人柄は惡くない男だ。

「おつ母、お前おらのあとつけて來たのけ。」

「お前のあと?……巖（がん）さはいつた犬ぢやあるまいし、何して男のあとつけて歩くてけ。」

「あはゝゝ」と大きく笑つて「そだば何處さ行くどこけ。」

「何處さ行つたつていゝなえすか。」

「それあまあ、お前の勝手だとも……だけどおつ母、おらあお前の方の敵ぢやなえすて。」

「おやさうけ。」

「だからおらあお前さ注意するども……勳章の織公を氣をつけれせ、あいつお前方の組合員の家にらつてゐるすて

「組合員の家にらふどけ……無調法ながら組合員で買收される人間なんて一人だてゐなすて。」

「さう思ふからいけねえす。人間の腹の中つて汚なねえもんだからねす……おらあ方は彈丸つゝかねえし、この村で

三四十票とりやい丶と思つてゐるから惡いことやらねえが、勳章の方では三百票以上とるつもりでゐるがらねす。」

「おや〳〵三百票とられちやおら方の點數何もなくなるねえすか。」

「だから氣をつけろと言つてるなだすて……何しろ金のある大臣だから彈丸はいくらでもつゞくし、おらあの方などポンプ惡い上に水はつゞかなからねす……。」

「とか何とかうまいこと言つて……お前さんこ丶の家さ何しに來たどこけ……。」

「こ丶の家さ……なに無盡錢とりにだす。」

「旁々買收にけ。」

「あは丶丶丶おつ母にか丶つちやかなはねえ……退却〳〵たけど勳章どこ氣をつけれせ。」

と言ひながら、男は女房とは反對に途を下つて行つた。

女房は橋の方へ步きながら考へた。

(勳章が組合員買收するつて本當だらうか。)

鎌榮がかつぐ爲にあんなことを言ふわけはない。女のため今ではすつかりなくしてしまつたが、四五年前は五町歩の田と山林をもつてゐて大旦那とひやかし半分に呼ばれた何處かのんびりしたところのある男だ。かつぐわけはないし、また惡だくみのできる男でもない、するとやはり勳章は組合員まで買收せうとしてゐるのだらうか――。

女房は初めの考へをすてた。

兎に角勳章の後をつけてみやう。そして何處へ行つてゐるか組合員の家七軒步いてみりやすぐ知れることだ。

橋の前を右折せうとして女房はおどろいて立止つた。

勳章が組合員の六助の家を出て隣家の喜太郎の家へはいり込むのを見つけたからだ。

女房はむつとなつて走るやうに途を下りた。

彼女は挨拶なしに六助の戸口をくゞつた。

くゞるや否やどなるやうに叫んだ。

「親父ゐるすか。」

眼の前の爐をはさんで六助と女房がひそ〳〵話してゐるのだが、外から急に飛び込んだ彼女にはそれと判別することができなかつた。

「誰だす。」

親父は警戒するやうな聲で言つた。

「酒屋、こだすて。」

「おや、女房け。」

年のとつた女房はびつくりして愛憎のいゝ聲をかけた。

「さあ〳〵上つてたんせ。」

「うゝん、上つてゐちれなえす……親父、今こゝさ動員來たすべ。」

「うむ。」

「何しに來たのけ。」

「それでなす女房……」女房はおろ〳〵して

「おらあ今親父と相談してゐたなだす、三回出すから××さんへ投票してくれつてねす。」

「親父、お前それ斷はらねえがつたなけ。」

「おらあ断はるも断はらねえも……」重い中にやや狼狽を見せて、「また錢こもつて來たわけでねす、前の晩もつて來るからつて……。」

皆まで言はせないで雜貨店の女房はすつかりのぼせあがつた。

「そたこときいてるなでねすて……選擧の成績惡いければ幹事の人方憤つてストライキ投げると言つてるなだえ、お前方せば、組合こはしてまた昔のやうに地主にいぢめられるつもりでるのけ……三圓、四圓のめくされ金なだてけ……。」

親父と女房がおど／＼辯解しながら何か言ひかけたが、彼女はそれをきいてゐなかつた。言ひ終るや否や隣家にはいつた勳章を捕へやうとして飛び出した。

「こん畜生ッ」

彼女は土間で喜太郎を對手にくどきにかゝつてゐる勳章をみつけるや否や飛びかゝつた。

「さあ見つけた、來ぢやがれ、交番所さ引つぱつて行くから來ぢやがれ。」

「何するこの女子奴！」

勳章は仰天して女房の手をはらつた。

「何もかにも證據あがつたから來ぢやがれ。」

「證據もくそも……」

女房は再び胸倉にくらひついて、

「さあ、今度こそ貴様から勳章ぶんどつて暗い所へたゝき込んでやるから……さあ來い。」

いとがにあがつた鷄が喚きにおどろいて羽ばたいた。

勳章が女を拂つたはづみに積んであつた水桶がひつくりかへつて高い音をたてた。

赤坊は眼をさまして泣いた。

そして氣の弱い喜太郎がぼんやりして見てゐる間に二人の爭ひは男の强い腕力にひきづられて戸口に出てゐた。

「この阿魔奴！」

そして勳章は最後の腕力をふるふと敗走する軍人のやうにそのまゝ驅け出した。

「畜生ッ　待ちやがれ」

荒い女房は跣足のまゝ執拗に追つかけた。

「勳章、金鵄勳章ぶんどつてやるから。」

村の役場

この日下井河部落の青年は二隊に別れて活動してゐた。

一隊は候補者の小説集「赤い湖」のポスターを近村かけてはりに行つた——、一隊は學校近くの長之助の家に屯してかはり〴〵往來へ警戒に出てゐた。

彼等は役場に出入する政友會の鈴吉をそろ〳〵捕へてぶん毆る頃合だと考へてゐた、この男はかつて組合の幹部をしてよく働いたものだが、村長が主唱して組合と對抗する協調組合をつくつた時、副會長に買收されて行つたのだ。祭の晩一度小氣味よいほど毆つて以來元氣な青年部の連中はそのうま味をなか〳〵忘れ兼ねてゐた。

雪がやんで夜がせまつてゐた。

鐵橋を燈をともした六時の列車が渡つた。

警戒に出た作三と爲之助の二人は一つの冒險をたくらんだ。

田圃の雪を二人で役場の裏口から小使室へ忍び込もう、そこから役場の當直室はまる見えだ、小使はいつものやうに近くの自家へ晩飯を食ふに行く時分だからゐないにちがひない。そして鈴吉が來てゐることが知れたら、一人が警戒し、一人が皆への注進に立つてふんづかまえてやらう――と言ふのだ。

元氣をつけるために、二人は途中の酒屋でコツプ一杯ひつかけた。それから畝を越え、泥に足をとられるのを警戒しながら役場の裏口へまはつた。

「親父ゐるか。」

後になつた爲之助がきいた。

作三はのぞき込んで

「ゐないやうだ……しめたしめた、親父飯を食ふに行つたなだべ。」

二人は靴音を弱めて裏口からはいりこんだ。そして宿直室をのぞき込もうとしたのだが、作三は炭薪小屋でもくもく動いてゐる黑い人影を發見した。

「親父ゐるよ。」

「ゐる？」

「炭小屋へ炭出しに行つてゐやがる……困つたな、すぐこゝへ歸つて來るけ……。」

「困つたな表口へ行つてかくれるか。」

すると、熟視してゐた爲之助が手をあげて作三の言葉を押し止めた。

「待て待て……親父の素振おかしいぞ。」

「なんすて。」
「炭出すなら塵取りもつて運ぶべせ……親父十貫目俵背負ふところだや。」
「なるほどな。」
「あん畜生ァ、泥棒するにちがひないぞ。」
「きつとさうだ。」
二人が注視してゐることを知らず、親父は漸く俵を背負つて立上つた。よろ〳〵となつたがすぐ踏みこたへて、二人の眼と反對の方へ歩き出した。
「つけてみるか。」
と作三が言つた。
「うむ、おれはこつちの方探索してゐる。」
作三が飛び出して行つた後、爲之助は暫く大きな石爐にあたつてゐた。燈がついてゐないところを見ると宿直室には誰もゐないにきまつてゐる。事務室で暖かいストーブを股にして話し込んでゐるのかも知れない。
不意に空洞の空氣をゆるがしてベルがなつた。爲之助ははつとして立上ると窓越しに宿直室に眼をやつた。
白いカーテンの中へ電燈がぱつとついた。
それから電話器をはづしてガチャ〳〵する音と「若し〳〵」と言ふ聲がかすかにきこえて來た。政友派の兵事係だ。
「秋田、秋田ですか……は、は、一寸待つてたんえ……」
それから急いで室を出て行つた模樣だ。
秋田なら選擧にちがひない、鈴吉が來てゐるのだ……彼はとつさにさう思つて耳をそばたてた。しかし、變つた男の

聲が低く、只は、は、と受けてばかりゐるので誰であるか、何の話であるか判然しなかつた。

爲之助は大膽に廊下へ飛び出した。そして短かい廊下を左折して宿直室の戸口へ出たゞが、すぐ戸口近くに立つてゐた兵事係にみつかつた。

「誰だ。」

しかし、彼は腹の中に用意してゐた。

「學校裏の爲之助です……電話かしてたんえ。」

かう言つて戸口へはいると電話にかゝつてゐる人間の正體が知れた。鈴吉だ。

「電話？……學校近いのになぜ役場なぞ借りに來るのか。」

鈴吉は狼狽し出した。受けてゐる言葉さえしどろもどろになつた。

「學校の電話こはれて通しねえをねす、それで遠きども借りに來たす。」

「何處さかけるのだ。」

「港だす。」

「港さ……選擧のことだべ、選擧なら駄目たく。」

がいいちやり音をたて、鈴吉は通話を了へた。

「何してけ、鈴吉さんのも選擧の電話だつたらしいなすか。」

「何たと……」

鈴吉は眼を光らしてつめよつた。

「なんしてそれが判る。」

「せば、今の電話選擧でなかつたわけ。」

「選擧でねえ、商の電話だ。」

「さうけ、せば惡かつたなす。」

「この、餓鬼のくせに生意氣こけやがつて、貴樣等おれの後をつけたつて恐れると思つてゐるのか……。」

「電話借してくれるすか。」

「借されねえ」

兵事係も威高氣にどなつた。

「選擧の電話など借されねえ……一體、表から來ねえで、なぜ裏からこつそりはいつて來るのだ。」

しかし、この聲の了はらないうち兵事係は再びおどろいた。また一人の男がのつそり裏の方からはいつて來たからだ。

「おやまた……誰だ。」

「作三來たか……電話借されねどえ、鈴吉さんさは借すこと出來ても。」

「借されねえ〱さつさと歸らあがれ。」

「歸れ〱。」

と、鈴吉もわめいた。

すると短氣の作三は尻をまくるやうな勢でどなりつけた。

「やい、貴樣等、よくも××を選擧の事務所にしやがつたな……相手の軍曹奴、よく聞け、おらの、今の使の親父、炭盜んで家さ運んで行くなあ見つけたぞ……當然の貴樣の責任だ。おらあ、これから若い者つれて來て貴樣　人を袋叩き

にするから覺えてゐろ……爲之助行かう。」
そして二人は役場を飛び出して長之助の家へ驅け出した。

校長の逆宣傳

その翌夜今戸部落の組合本部では、青年部、婦人部集まつて前日の濱井河部落の勳章事件と下井河部落の役場騷ぎで大はしやぎをしてゐた。
「すると、金鵄勳章とりあげられるなけ。」
「勿論せ、もうとうに裁判所へ訴へたもの、有罪と決定すればすぐとりあげられるなえせ。」
「い丶氣味だな。」
「諸君よ。」
丹助と言ふ若者が演說した。
「わが濱口總理大臣は解散前、犬養木堂の質問に對して（責任は感じません）と言つた……」
「何だその話は……」
「即ち前文部大臣小橋の瀆職事件であります。總理大臣の言葉に從へば××を大臣に奏請しておいて、その××は組閣以前であるから責任ないと言ふに等しいのであります。」
「ヒヤ〳〵。」
「然らばひるがへつて濱井河部落の勳章事件に對して町田農林大臣は何と辯解するであらうか、我々は彼等町田、田中兩大臣に向つてかう言ひたい、買收しなければ代議士になれないやうな××なら、潔よく××の職を辭するがよい、かゝ

る××は秋田縣の名譽でなくて最大の不名譽である。」

一同わあつと言つて拍手した。

笑ひが止むと、一人の百姓の女房が口を出した。

「お前がた、演說でばかり氣勢あげたつて何もならなえ、一つ下井河の若い衆見たいに本當の元氣を見せなければ外の部落から笑はれらえ。」

女達は大きく笑つて青年部は頭をかいた。

「そりやそうだが、おらの部落には勤草も鈴吉もゐねえからな。」

皆笑つた。それから一しきり下井河の青年たちが役場へ押しかけて、鈴吉と兵事係の二人を一里近い一日市町まで追ひかけた話に花が咲いた。

そこへ投票前日の演說會のポスターをはりに行つた四五人連が歸つて來た。

一人が言つた。

「問題あるぞ。」

皆待ち構へたやうに

「何だ〳〵」と先を爭つてたづねた。

「おらあとこの妹、今日學校で校長からひでい事をきかれて來たぞ。秋田無產黨は共產黨の一種だと言つたさうだ。」

「然らば共產黨とは何ぞやときいたらあの校長知つてるてが……。」

「秋田無產黨が共產黨であらうとなからうとそれは別個の問題だと私は思ふ……」

立上つて、かう眞面目に說き初めたのは青年部長の實一郎である、靜かな頭のよい青年だ。

「しかし、校長が今日女子青年部の生徒たちにさう言つた裏には秋田無產黨の運動は危險な運動だ、あんな運動に加はつてゐると共產黨の人々のやうに監獄に叩きこまれる……斯様に恐怖を暗示して選擧投票を防害し、我々の爭議を非難せうとしたのである。

校長はそればかりでない、昨年鹿渡におこつた爭議の例をひいてその小作人が爭議に負けて函館へ落ちのびて慘みな生活をしてゐると話したさうである。

諸君、そも〳〵鹿渡におこつた爭議は徴兵檢査に端を發してゐるのである。卽ち、地主の倅と、その地主の田を作つてゐる小作人の倅とが同時に檢査をうけた。そして地主の倅は丙種不合格でホッとし小作人の倅は甲種合格で×××××のである……」

一しきり笑聲おこりヒヤ〳〵と同感して叫ぶ聲が方々からおこつた。

「然るに地主は、小作人のその不幸につけこんで、倅がゐなくては田は耕されまいから田を返せと言つて來たのだ。彼はさういふ口實の許に田を他に轉耕させ禮金の外に有利な小作料をとらうとしたのだ。

諸君、かゝる場合我々百姓はどうしてよいか、政府は我々から高い稅金をふんだくり、また××の義務として働き手を奪つておきながら、家族の生活を保證しない、のみならず田をとられても職業を失つても平氣の平左でゐるのだ。しからば我々が小作爭議によつてかゝる惡辣無慈悲な地主と鬪ふのは當然のことではないか。……」

「さうだ！」

人々は一齊に喚聲をあげた。

「我々はこの爭議に敗れたか、斷じて否、我々は元通り田を取返したばかりか、地主から謝罪文をとり、幾干の爭議料をとつて最も有利に解決したのである。

校長の言つたことは全くの出鱈目である、なぜならその小作人は現在鹿渡に住んでゐるばかりでなく、今回の選擧に於ても熱心に働いてゐるのだ。」

「校長を追ひ出してしまへ。」

「さうだ、村長のやうに追ひ出へ。」

「若しも彼が事實そのとほり逆宣傳したとするならば、我々は結束して校長を追ひ出す運動をまきおこさう……しかし、その前に我々は諸君に計りたい、校長が女子青年部に話したのは、今日なさうだから、諸君は今夜歸つて青年部へ通つてゐる諸君の妹や、近所の娘たちにきゝたゞしてもらひたい、そしていよ／＼事實であると判つたら選擧すみ次第、校長追ひ出し運動を開始したいと思ふものであります。」

「異議ない。」

「贊成。」

「よう――、おらあ隣りのお由子へきいてみるぞ。」

京藏がうつかり言つたので、皆から助平野郎とさん／″＼にひやかされて頭をかゝへてしまつた。

賢一郎は一寸休んで言ひつゞけた。

「校長問題は大體さういふことにして……今や選擧は闘ひの頂上に到りましておますところ二日になりました。候補者を初め幹部諸士は不眠不休でたゝかつてゐます。我々もまけずに頑張らなければなりません、買收は投票前夜と翌日が最もはげしいさうであるから、その前夜は青年部は寢ずに警戒、翌日は青年部、婦人部合同して警戒の任にあたり、あはよくは動章をふんづかまへたやうに、或は鈴吉、兵事係を追ひかけたやうに、輝かしい武勳をあげたいと思ふものであり

ます。」

拍手――。

そして人々は再び乘氣になつて「三百票とつてみせる」

「いや、二百五十票……」と、投票の豫想を賑かに語り合つた。

開票日

「萬歲……全村九十六票」

瀧井河の組合支部では家にはいりきれないほど組合の男女が集つて港からはいつてくる情報に熱愛を受けて胸おどらしてゐた。

すでに秋田市は前日のうちに開票され、今、各郡の投票が刻々に開票されてゐるのだ。遠地の鹿角、北秋、山本、河邊の四郡は通話の便がなかつたが、地元である南秋田郡の開票は刻々に報ぜられてゐるのだ。

電話のはいるのは七八町を隔てゝゐる下井河部落の役場である。その間を十名に近い青年部の元氣な連中が自轉車で連鎖するのだ。

正午十二時、すでに十數ヶ村は開票されてゐた。支部では一間の押入を掩ふ各村記入の得點調べ票をかゝげて前回の投票を赤字に示し比較が一目瞭然するやうになつてゐた。したがつて投票數が增す度に、低い天井がぶちぬけるやうな歡聲がまきおこつた。そしてそれまでの成績は前年に比べて二倍乃至三倍に近かつた。

外から狼狽てゝはいつて來た百姓の一人が大きな聲できいた。

「おらあ方の村はまだけ。」

「まだ〳〵、三時頃でなければわからねえ。」

「いゝ成績だな。」と感嘆して「この分ぢや三百票は行くかも知れねえすな。」

「そんなに行くもんでねえ、組合員は二百十人しかゐねえ所へどうしてそんなにたくさんはいるもだてけ。」

「それでも大てい二三倍とつてゐるねすか。」

「そりや少ない點數の所へす、前にうんととつてゐる所は二倍など行くものでねえ、現狀維持だと大成績と言ふもんだ。」

「土崎の開票はおそいねす。」

「ほんとうだな。」

「前の日の演說會大成功と言ふから八百から千票はとれるすぺ。」

「港で千票とれりや當選だぞ……樂しみだな。」

次の情報係が飛びこんで來た。

「太平村十六票……」

「萬歲！」

と、人々はまた歡聲をあげた。こゝは政友會派の縣會議員に牛耳られて前回には三票しかはいらなかつた所だ。

「次は情報……」

書きつけた紙片を見て

「土崎の投票一票の違ひ生じて再調査中……」

「なるほどそのせいか。」

見物人はますます集つて來た。二度、三度整理されて十疊の室は三十餘名の人間でぎつしり埋まり、その外二三十名の男女が土間につつたつてゐた。

晴れた日だ。

家根の雪が解けてその雫で軒下は雨のやうだつた。

泥塗だ。その中を自轉車隊は夢中で疾驅するのだ。

飛下りて自轉車を投げるやうに雪閣に立てかける音で人々はそれと知つてどよめいた。

「何處だ」

「何票だ」

人々は叫んだ。すると情報隊は呼吸をきらしてそれに答へた。

「船越町二十二票……」

これは七倍の増加だ。人々はまたどつと嘆聲をあげた。しかし、さうでない場合、豫想より少なかつたり、前回より減じたやうな時は、情報隊の連中は苦笑して早速に答へなかつた。そして人々はその苦笑を見るだけで落膽した。

得票は流石に金權の偉力を示して兩大臣が斷然リードしてゐた。次は民政派の信用、そして政友二人と無産派は殆んど互格の數で競つてゐた。

午後一時半、政友派全部落選無産派當選といふ情報を一人が持つてきた。その出所は明かでなかつたが人々は夢中になつて歡聲をあげた。中にはすでに當選氣分で踊り出した者さえゐる。その騷ぎが永かつたので古いくさつた柱がおそろし

い音をたて、根本から折れてしまつた。

このあてにならない情報が不思議に多くの人々の心を捕へた。ことに女たちはさうだつた。部落以外のことは知らなかつた――、すべての農村が自分たち部落と同じ階級的熱意をもつてゐるやうに考へられてゐたのだ。

「土崎三百八十四票……」

この大きな悲報に接しながら、人々はまだ落膽しなかつた。そして

「下井河二百六十三票」

と、報ぜられると人々は再び歡聲をあげて「當選だ〱」と踊りまはつた。

敗將は元氣よく語つた。

落膽！　衰勢！　泣きぬれた部落の戸口〱へ、青年たちは元氣のよい朝の聲を配つた。

「候補者が來るぞ、皆今戸の組合本部へ集まつてけれ。」

八時三十分、秋田無産黨の候補者は二人連で寒驛へ下り立つた。

候補者は背はあまり高い方ではなかつた。落選したが血色がよく元氣で丸々と太つてゐた、その上寒がりでどつさり着込んでゐるので秋田犬のやうにころ〱してゐた――卽ち作者がその人間なのだ。そして一緒に行つたのは友人の小牧近江である。

歸途を五六町行つたところで、私等は迎へに來た二人の青年に會つた。それから連れ立つて、下井河の組合本部へ立寄

つた。

私等はそこに十分ばかりゐた。そして當選の歡びにぶち折れた柱を見た。それから人々と一緒に、今戸の組合本部へ急いだ。

私等が着いた時には既に五六十名に近い農民たちが集まつてゐた。私はそれ等の人々の顔から何を印象されたか、それは今までの百姓の顔でない顔である。卑屈と陰うつの色をふきけした、勇氣と希望に輝く農民の顔である。

支部長の挨拶の後敗將は元氣よく語つた。

『皆さん大へん御苦勞でした。こんな結果に了つたので皆さんはさぞ落膽なされたことゝ思ひます。しかしこの結果はむしろ自然のあらはれであつて、むしろ秋田無産黨としては歡ぶべき結果でないかと考へるのであります。

我々は敗れました。しかし、秋田無産黨は敗れて勝つたのである、若し、我々が今回の闘ひに當選したと假定するならば、それは勝つて敗れるに等しいものと、言はねばならない、無産階級の運動は、左樣に安易な闘ひではないのであります。若し無産運動が前進し〵、飛躍するやうであつたならば、その運動は非常に危險な軌道を走つてゐるものと見なければならない。それは勝利を約束するものでなく運動を破滅にみちびくものである。

レーニンはかう敎へてゐる。

「一歩前進二歩退却」と。この言葉はしば〵社會民主主義者の運動怠慢の口實に用ゐられるが、それとは別に我々が學ばなければならぬ敎へである。なぜならば二歩退却するところに次の飛躍が約束されてゐるのである。その點秋田無產黨の幹部諸君はこれまでの運動をあやまつてゐなかつたと私は堅く信じる。

諸君、我々は今回の闘ひに於て、二人の金權大臣を敵にまはして四千五百票に近い投票を得ました。この得票は少ないかも知れない、しかしこれ等の投票は十萬二十萬の投票より尊い、なぜなら一票たりともけがれた投票がないからである。

純眞無垢の四千五百票である。しかも、これ等の投票は明日の勝利を約束する響きをもつものである。

我々は前回と比べて千五百票多くかち得た。その數は少ない、而し一倍半の前進である。この堅實な前進にこそ飛躍と明日の勝利が約束されてゐるのである。

下井河農民諸君！

闘ひは終りましたが、闘ひはつゞいてゐるのである。ことに諸君は大きな闘ひを肩に荷負つてゐる。この闘ひは絶體に勝たなければならない。そして私は諸君の勝利を信ずるものであります。何卒あくまで團結してたゝかつて下さい。」

次いで小牧が演說した後私の發言で農民組合の萬歲を三唱した。

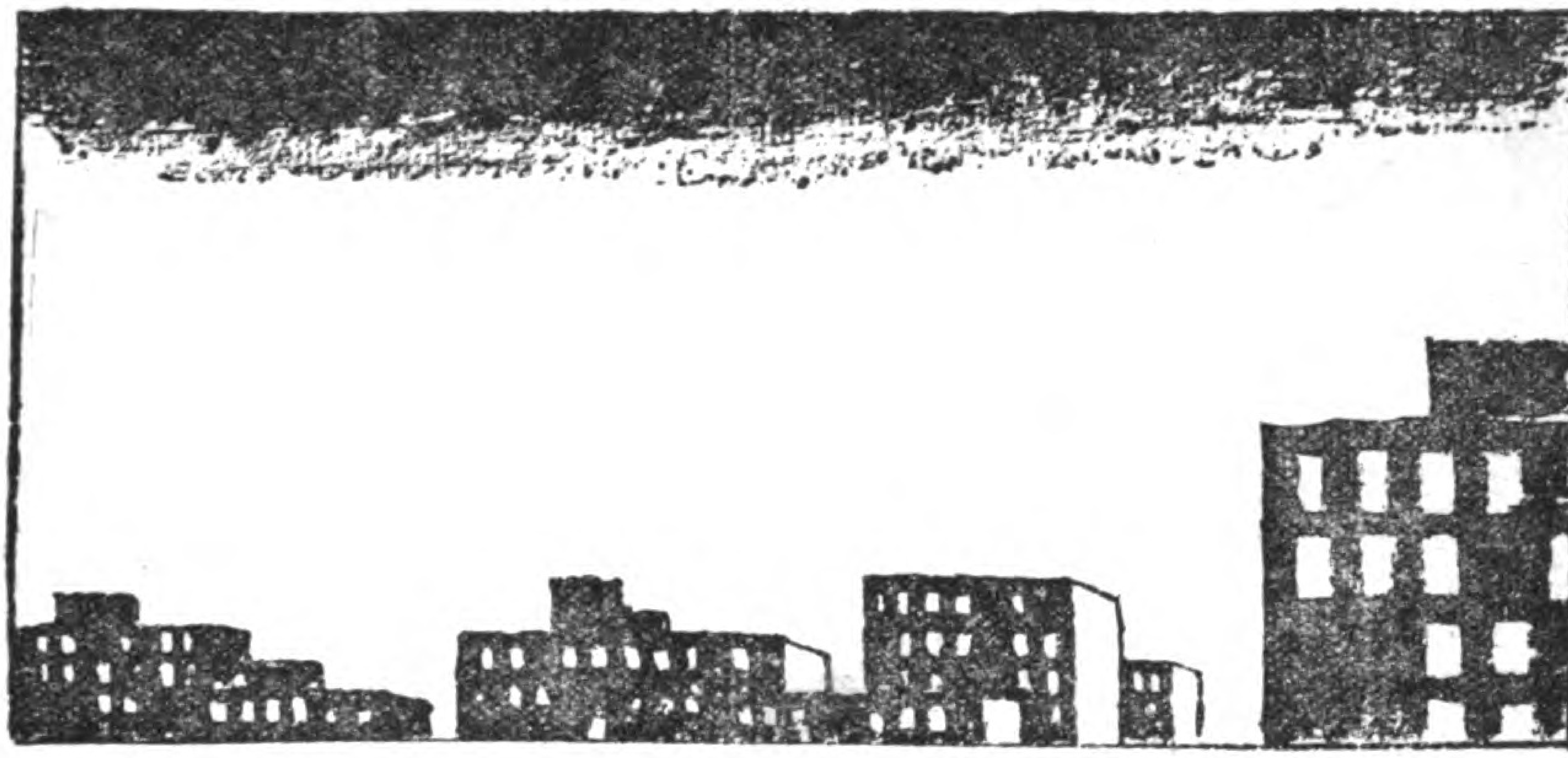
それは實にすばらしい光景と和唱であつた。

二人は農民たちのとつた八郎湖の魚で朝飯をよばれた。

しかしそれ等の珍重すべき公魚、鮒等の味ひより、また二人をよろこばしたものがある。

村民大會が開かれてゐるのだ。そしてとりあげられた問題は、小使罷免と校長問題である。

すでに次の闘が開かれたのだ！



手に霜燒のした女

廣津和郎

『一緒に出てはまづいんですからね。ではこちらは此處を出まして、一丁ほど右に行くと角がありますからね。そこで立つていらしつて。……直ぐ行きますから。それからあちらは左の方へぶらぶら歩いていらつしやると、直ぐお花さんが行きますから……』

年を取つた方の女が指圖するやうにかう云つたので、大嶋と小川とは外へ出た。

『ぢや、又明日……』と大嶋は『御壽司』といふ朧ろげな看板の出てゐるその店の門口で、小川を顧みながら云つた。

『あつははは。これも偶然だ。こんな事も又思ひ出として面白いよ。何處につれて行かれるかといふ冒險的興味もあるからね』

『うん』と小川は答へたが、彼はすつかり疲れてゐた。昨日からの空虚な興奮、底

力のない憤り、それに引きずられて大嶋と一緒にわけもなく飲んでまはつた事の無意味さ――今此處で彼と別々になれるといふ事を思ふと、やつとこれで救はれる氣がした。兎に角、これから何處へつれて行かれるか解らないが、今夜はぐつすり眠りたいと考へてゐた。

『ぢや、兎に角、左樣なら』

『ああ、左樣なら。――明日の晩あたり君のところを訪ねるよ。そして善後策をお互に講じるとしよう』

二人は別々の道を歩き出した。凍てついてでこぼした道が、醉ひのさめかけて、足の爪先の冷たい小川の靴の底に、痛いやうにカチカチと衝つた。大嶋が行つた方の道は、店つづきで、明るかつたが、小川が指定された方の道は、今の壽司屋から二三軒だけ店屋があるだけで、それから納屋のやうな眞暗な建物が幾棟か續き、その先が田圃になつてゐた。星がキラキラと寒く輝いてゐる夜空に、道端の雜木の枯枝が、薄い網目を描いてゐた。それにひゆうひゆう風が當つてゐた。小川はオーヴーの襟を立てて、ポッケットに兩手を突つ込んで、身體中を硬ばらせるやうにしながら、その木立の下に佇んだ。

女は直ぐやつて來た。齒のついた下駄で、でこぼこした道を、風にさからふやうにして小走りに來る身長の低い彼女の身體は、何か丸まつちいものが、轉がつて來るやうに見えた。

『これも一興か』と小川は苦笑した。

女は彼の側まで來ると、「おお寒」と小聲で云つた。

彼は女と一緒に歩き出した。

『一體何處へつれて行くんだい？』と彼は云つた。

『もう少し行つて、左へ曲ると直ぐですよ。――お友達と別つこで、お淋しいでせう？』

『いや、別に淋しくも何ともないよ』

「一緒だと好いんですけれどね、目立つから別々な家が好い、つておかみさんが云ふものですから……」

「ふん、一緒だと目立つて……いや、却つて一緒ぢやない方がいいんだ。俺は今夜は靜かに眠りたいんだからね――で、何かい、君のところで連絡を取つてゐる家が方々にあるのかい？」

「連絡といふこともないんですけれど、でも行く家は決めてあるんですの」

二丁ほどの田圃道を出はづれると、又薄暗い中に、納屋のやうに燈のつかない家が二三軒つづき、その先にぽつんと一つ置き忘れられたやうに街燈がともつてゐる角に來た。

「此處を曲るんです」と女はその角を左に曲つた。郊外らしい小さな家がその通には竝んでゐた。「あの方もやつぱり同じお勤めすの？」

「お勤め？　ううん、俺達は何處にも勤めてなんかゐないよ。」小川は笑ひながら云つた。「俺達は失業者なんだよ」

「あら、嘘ばつかり」

「いや、嘘ぢやないんだよ。昨日會社を首になつたばかりなんだよ。あの男も一緒にだ」

「あの方も。……まあ、御冗談ばつかり」

「いや、本當とも。それで昨日から二人で驅けまはつてゐたんだ」

女がほんたうにしないので、ムキになつて昨日の馘首事件を喋りたいやうな衝動を不圖感じたが、この女を掴まへて、そんな事を云ふのも滑稽な氣がして來たので、彼はそのまま口を噤んだ。

「あの方……奥さんがおありですの？」

「あの男……うん、あるよ。イヤにあの男の事が氣になるんだね。――おい、君は彼奴に惚れたんだな」

「さうぢやないんですけれど……でも立派な方だわね」

「そいつは氣の毒だつたな。早くさう云へば、あの男の方にしてやつだのに。あつははは。——さう俺を前に置いてあの方、あの方、とやられては、俺は片なしだな』

『あら、さうぢやないんですの……』

『さうぢやないけれど、あの方だつたら、どんなに好かつたらう、といふんだらう』

『ウフフフ』女は顎を肩掛に埋めるやうにして笑つた。

小川は別段不愉快は感じなかつた。無論、不愉快を感ずるやうな相手でもなかつたし、そんな事はどつちだつて問題になるべきものではなかつたが、併し二人の女をコヨリの長さ短さで引當てたやうな事をしないで、この女が大嶋に厚意を持つてゐるなら、大嶋の方へ行かせてやれば好かつたやうな氣がした。——ただの座興でも、厚意を持つてゐるのは、持つてゐないよりも好い。

二人は又默々として歩いて行つた。——小川の心には昨日の光景が浮んで來た。彼はいつものやうに朝出勤した。そしていつものやうに事務を取つてゐた。さうしたら突然給仕が事務室に這入つて來て、『近藤さん、支配人がお呼びです』と呼んだ。老人の近藤は何氣ない風に立つて行つた。暫くすると、又給仕が這入つて來て、足立を呼んだ。足立も亦何氣ない風に立つて行つた。すると、間もなく給仕は又這入つて來て、今度は大嶋を呼んだ。

大嶋が立つて行つた時、十年勤續の末永が、「はてな。これはをかしいぞ。——うつかりすると馘首だぞ！」と首を傾けながら呟いた。

今まで何も氣がつかないで、事務を取つてゐた連中は、その聲に一齊に首を上げた。馘首——寢耳に水だ。その言葉の持つ恐ろしい意味がやがて次第に彼等の頭にはつきりして來た。みなは思はず總立ちになつて、ストーヴの周圍に寄り集まつた。

「豚にさうだ。五年前の大馘首の時も、あの調子だつた。——これは、諸君、うつかりしてはゐられないぞ」みんなその方へ向つて耳をのばすやうな顏付をした。

暫くはみんな默つてゐた。事務室から廊下を十間ほど行つたところに支配人の室がある。無論何も聞えてなど來なかつた。

が、へんに薄氣味惡く靜まつた廊下に、給仕の靴の音が又聞えて來た。「水野さん!」ストーヴの側に青い顏をして立つてゐた水野は、恐ろしく尖つた眼で給仕の顏を睨みつけた。が、直ぐうつむいて、しほしほした足取りで、事務室の入口から出て行つた。人々は一層互に寄合つた。——寄合つてゐれば、何か安心してでもゐられるやうに。

給仕は度々やつて來た。その度に一人づつ呼ばれて行つた。廊下にコツコツ少年の靴音が聞えて來る度に、人々の顏は緊張した。そして誰か呼ばれると、殘つた者は一齊にその呼ばれた男の顏を氣の毒さうに見た。一面『まあ、俺でなくつて好かつた。だが、この次は誰に來るか解らないぞ』と云つたやうな、一時的の安心と不安との交錯した顏をしながら。

『まるで一羽々々引つぱり出されて行つて、首をしめられる雞のやうだな』と誰やらが云つた。ひそひそと忍ぶやうな小聲だつた。それは誰しも同感だつた。それに答へるものは誰もなかつた。

小川が呼ばれたのは八番目だつた。『たうとう來た』と彼は思つた。割に自分の心が確であるのを感じたが、併し廊下を歩いて行く膝頭ががくがくしてゐるので、やつぱり平氣ではないのだと考へた。

支配人は安樂椅子に腰をかけてゐた。這入つて行つた小川を上眼づかひにじろりと見て、それから眼をそらして、顎で前の椅子を指さした。髭がない、瘦せた、皮膚に光澤がなくてたるんでゐる彼の顏は、黄ろくカサカサして、日本人の持つ無愛想そのものだつた。

『もつと此方に寄り給へ』と低い、へんに冷靜な聲で支配人は云つた。『君は家族があるかね?』

「いえ、ありません」

『さう』と支配人は右の掌で椅子の腕木を無意味に輕く二つ三つ叩きながら——そんな風にして目下のものに對する威嚴と餘裕とを示しながら、『個人としては甚だ云ひにくい話だが、實は會社はいろいろな點で、今整理期に達してゐる。そこで一口に云ふと、君ももつと何處か適當なところを搜して貰ひたいと思ふんだ』

『…………』

『これはよく理解して貰はなければならない。近頃のこの不景氣、産業界の不振、君にもよく解つてゐるだらうが……』

（嘘をつけ。去年だつて株主に一割二分の配當をしてゐるぢやないか、この不景氣だといふのに）小川は腹の中でさう思ひながら、支配人の言葉を皆まで云はせなかつた。

『それで一口に申しますと、つまり私達がもう御入用でないわけで……』

『さう、さう直ぐ解つてくれれば結構だが、……では少し隣りの部屋で待つててくれ給へ』

小川は立上つた。（御入用でないわけで……何だつてそんな言葉を使つたらう。御入用などと云ふ必要が何處にあるのだ）彼は腹立たしさと苦笑とに眞赤になりながら、隣室の方へ行つた。隣室のドアの前に立つた時、支配人が再び給仕を呼ぶためにベルを鳴らしたのを背後に聞いた。

隣室には、今まで呼ばれた七人の人間が腰かけてゐた。うな垂れてゐる者、青い顏をして、眼ばかりキョトンと光らしてゐる者……その中で、彼を見ると、大嶋の顏がにたにたと笑つた。『君もさうか』といふやうに。

その馘首は十二人で終つた。會計が無表情な顏をして、退職手當の這入つた狀袋をみんなに渡すと、そこで彼等はその控へ室から解放された。

彼等は事務室に這入つて行つた。ストーヴの側から澤山の眼が一齊に彼等の方へ向つた。臆病な、同情したやうな、やつと馘首の一段落がついて、首がつながつたのでやれやれ安心したと云つたやうな……それは狡猾な、卑屈な、冷淡な

いきなり他國人になつてしまつたやうな、親しみないものに、十二人の人間には感ぜられた。
『一度に十二人とは無茶だ！』とストーヴの側から立つて來て、末永が云つた。『餘り殘酷過ぎる』
もう一人若い男が、それを引取るやうに、『俺達にも實際に組合が必要なんだ！』と興奮したやうに叫んだ。
併し殘つたものと出て行くものとの心持は、まるでチグハグだつた。
『おい、何とかやらんければいかんぜ。これは――』と小聲で大嶋が小川の耳に囁いた。『やらうぢやないか、一つ――』
『うん』
『これから十二人の者だけ何處かに行つて、その相談をしようぢやないか。――このまま無力に泣寢入りするといふ事があるものか――』
事務室の出口で、大嶋は被馘首者達に、集まる場所を云つた。彼等はそこに出かけて行つた。それは小さな飲屋だつた。酒が出て、彼等は次第に興奮して行つた。けれども、それは小田原評定だつた。『會社の不當』を鳴らしても、誰も好い智惠が湧かなかつた。殘つた者達の眼付が如何に冷淡だつたかといふ事、支配人が如何に冷酷さを布で包んだやうな云ひ方をしたかといふ事、その假聲、そんなものが醉つた彼等の濁聲で繰返されるだけで、云へば云ふ程、益々意氣地ない自分達の立場がはつきりして行くやうなものだつた。
『俺達はまだ好い。近藤さんなんぞはひどい。十五年も勤めて、退職手當十二ヶ月とは……』
『あんた方はまだこれからだ。併し僕はもうこれでお終ひさ』と近藤はチビリチビリ盃を甜めながら、まるで酒と水鼻を一緒にするやうな聲をして云つた。『皆さんと今日かうして一杯やれるといふのも、これが最後でせうからな。……私は結婚が遲かつたのでね、まだ子供が中學も出てゐない始末で。……だが、そんな事はどうでもいい。私は泣言は嫌ひだ。私は泣言は嫌ひだ。泣言は云うても始まらん。併し酷い話ですよ。あんた方はこれから何でも出來る。併し五十五に

なると、何處でも相手にして吳れませんからな』

『だから僕は云ふんだ』と大嶋は大嶋で醉へば醉ふ程、何か演說口調で怒鳴つてゐた。『平生から我々の結束が必要なんだ。今實際最も弱い立場にあるものは我々だ。サラリーマンだ。諸君、これが職工であつて見給へ。十二人も馘首があつたら全工場の同盟罷業だ。ところがどうだ。殘つた奴達のあの顏付は。彼等は最初ストーヴの側で、一人一人呼び出されて行くのを見てゐる時は、我々と同じ氣持だつた。併し呼び出しが終つた瞬間から、彼等はそつと首を撫で始めたのだ。助つた――今頃彼奴等は家に歸つて、女房達に、如何に彼等が會社に取つて重要視されてゐるか、それだから、如何にして彼等はこの大馘首から平然として免れ得たかを誇つてゐるんだ。そして祝盃を舉げてゐるんだ。その癖彼奴等だとて、いつ同じ運命になるか解りやしないのに。何といふ卑屈なイゴイスト共だ！――諸君、我々は何の後悔もない。我々は我々の利益を擁護すべき何の機關も持つてゐない。だから、我々の手でそれを作らなければならないといふのが、日頃からの僕の持說なんだ。見よ、今日如何に我々が無力であるかが暴露されたんだ。――諸君、立たうぢやないか。立たうぢやないか。――併しどうして立つたらいいか……』

ちやぶ臺を拳骨で叩いて、『立たうぢやないか』と云つて、再び拳骨を上げた時、何か白々しいものが彼の興奮の中にスキ間風のやうに這入つて來るのを彼は感じたらしかつた。そこで彼は一寸白ちやけた顏をして、何かうまい言葉がないかといふやうに、一寸の間默つたが、急に無茶苦茶に『我等の立つべき時は今だ！』と一層聲を張上げて云つて、一層力を入れて、ちやぶ臺を叩いた。

『僕は故鄕に歸らうと思ひますよ』と足立は足立で、近藤老人に向つて云つてゐた。『故鄕に歸れば食つては行けるんです。親父も母親もそれを望んでゐるんです。――東京はイヤになりましたよ』

『君の若さでイヤになつたら、私等はどうしていいか解らん。でも故鄕に財產があるのは羨ましいな』

『いや、財産といふ程でもないんですが……』

『いや、結構ですよ。結構ですとも。……うと……一度お遊びにいらつしやつて下さい。總領は十七ですが、年子で、十六になるそれの妹がゐるんです。……いや、是非ひとつ今後御懇意に願ひませう。……子供達は割合に素直に育つてゐましてな。成績も好い方です。妹の方などは、親莫迦と笑はれるかも解りませんが、その、近邊でも、まあ綺麗とか何とか云はれる方でしてな。……いや、ははは、ええ、その、小町なんかと云はれてゐますよ』

大嶋はじろりと近藤老人と足立の方を見た。『ちえッ』といふやうな輕蔑した表情を露骨に浮べて、彼は舌打した。

『無智文盲度し難しかな』と彼は小聲で小川の耳に囁いた。『老いも若きもなべてかくの如しだ。――話の出來るのは君だけだぞ。いいか、君だけだぞ。彼等は時代の大勢も解らん。讀んでゐる雜誌と云へば、講談倶樂部かキングだけだ。この時この際、娘の求婚廣告だ。――實際話の出來るのは君だけだぞ。――そこで、と、君と俺とだけでも、何とかしてこの事件に向つて我々だとて全然の無氣力ではないぞ、といふ意氣を示してやらなければならん。いいか、解つたか』

『うん、解つた！』と小川は大嶋がぎゆつと手を握りしめたので、それを握り返しながら云つた。『御不用で……』とさつき支配人に云つた卑屈な言葉が、まだ彼の心を不快にしてゐた。

『明日君と僕とで支配人の自宅に押しかけて行つて談判しよう。――君も見てゐる通りのこの始末だ。今此處でこの連中に、何を相談したつて仕方がないからね。え、さうだらう。――そこで、だ、今日はこれから君と一つ飲み明かさうぢやないか』

『うん、好からう』

『なあ、幾らくれたか目腐れ金の退職手當なんか、俺はまだ調べても見ないが、これで一つ飲んで飲んで飲み明かしてやらうぢやないか。そして明日は支配人のところに出かけて行つてやる。――明日のことは明日のことだ。今日のことは今

日のことだ。――」

「うん、明日のことは明日のことだ。今日のことは今日のことだ」

「愉快、愉快、だからあすこで話の出來るのは君だけだと、前から思つてゐたんだ。俺の思ふ事がそつくり君には理解される。――なあ、失業なんか一體何だい。あつはは、愉快だな。失業なんか當分職がないといふだけのことぢやないか。そんな事は世の中に幾らもあるぞ。めづらしくも何ともないぞ。サラリーマンなんかみんな失業してしまへ、だ。この位ヤクザな人間共はないんだ。みんな失業してしまつて、みんな食へなくなつてしまへば、始めて目が覺めるんだ。さうしたらもつと卑屈でなくなるんだ。――おい、出かけよう」

「よし、出かけよう」

　そこで大嶋と小川とはそこを振出しにして、昨夜から東京市内の彷徨となつたわけである。先づ彼等は銀座通のバアからバアを飲み歩いた。至るところで、大嶋は飲んでは支離滅裂な氣焔を吐いた。「中央公論」「改造」等の論説欄で覺えた彼の議論は、社會問題を論じ、革命を論じ、資本主義を論じ、勞農黨を論じ、サラリーマンを論じ、そして何處までもはてしがなかつた。そして最後に、

「ねえ、實際、解るのは君だけだ。俺は前から君だけは話の出來る人間だと思つてゐた。彼奴等を見給へ。彼奴等は講談倶樂部かせいぜいキングしか興味が持てない。彼奴等は自分達のこの時代に於ける立場も知らないんだ。――よし、君と一つ握手をしよう」ときまつてから云つた。だから小川は何度か大嶋と握手しなければならなかつた。大嶋の手は脂汗だか酒だかでニチャニチャしてゐた。そして恐ろしく把握力があつた。小川は握りしめられると手が痛かつた。そればかりではない。大嶋は感極まつたやうに、小川の頰つぺたに接吻しようとさへする事が度々あつた。肥つた赤ら顔の、酒のために皮膚の粗い大嶋の頰つぺたからは、固い鬚の五厘ばかりの奴が、芽を吹いてゐた。それで此方の頰つぺたをこすられ

ろ氣持は、何としてもやり切れなかつた。

二時頃彼等は品川の遊廓に泊り込んだ。

そして目が覺めると、大嶋は小川を誘ひ出して、その遊廓の附近の小料理屋に行つた。

『さあ、今日はいよいよ支配人の自宅を襲ふ策戰だぞ！』と彼は眞顔になつて、そんな事を云つたが、『先づその前に一杯』と云つて、德利を掴むと、又昨夜と同じ繰返しが始まつて來た。彼は一體どの位酒を飲むのか解らなかつた。『もう一本、もう一本』と後から後から注文して、たうとうちやぶ臺の上に二合の德利が十本近くも筍のやうに竝んだ頃には、いつかもう夕暮れが迫つて來てゐた。

それでも、彼はやがて立上つて云つた。

『さあ、これから支配人襲撃だ！』

支配人の自宅は京濱電車で大森海岸から二つばかり行つたところにあつた。

午後五時頃、二人の醉漢は、新築のバンガロー風の玄關に突つ立つた。

『旦那樣はまだ會社からお戻りになりません』と女中がドアの中から顏を出して、切口上で云つた。

『いつ頃お歸りか解らないかね？』

『はい、お歸りに倶樂部にお寄りになることもございますから、いつも時間はきまつて居りません』

『いつ歸るか解らねえといふなら仕樣がねえな、なあ、君』と大嶋は醉眼朦朧としながら、小川に云つた。『奧さんは？』と女中の方へ向き直つて云ひかけて、『いや、奧さんなんかに會つたつて仕樣がねえ。……それぢや出直すとしますかな。……昨日會社で首になつた連中ですよ、旦那さんがお歸りになつたら云つてくれ給へ。何も恨みに上つたわけでも何でもありませんでね。正當な……正當な理由があつて、まゐりました、つてな。いいですか。正當な理由があつて、不正

當な理由を伺ひに上つたつてな。――よござんすか。――ぢや、出直すとしようかな』

彼ほど醉つてゐない小川は、大嶋の肩に手をかけて、門の外まで彼をつれ出した。

『女中なんかにそんな事を云つたつて仕方がないよ。さあ行かう』

『ああ、さうだ。女中なんぞにそんな事を云つたつて、仕方がない――だけれど、君、今の女中、一寸澁皮が剝けてゐたぢやないか。あははは』

二人はそれから何處をどう歩いたか、歩きまはつた末に、再び田舍町の『壽司屋』といふ看板の出た家で再び飲み始めたものである。そしてどうした話の序でにか、二人はそこに現れた二人の女について、カンジンヨリで、クジを引くこととなつたのである。……

『此處ですの』と女が突然立止つて云つた。『一寸待つてらつしやい』

軒燈に『御旅館』と出た小さな家で、ちやちな格子戸がはまつてゐた。

女はその格子戸を開けて、内に這入つて行つた。間もなく顏だけ格子戸から一寸出して、『おはいんなさい』と小聲で云つた。

電燈の暗い、陰濕な感じのする家だつた。

『一寸こちらにお待ちになつて』とよれよれになつた紺飛白の上つ張りを著た四十位の束ね髮のおかみらしい女――女中はゐないらしかつた――が、寒さうに手を袖口から一寸出し、肩をすぼめるやうな格恰で現れて、愛想笑ひをしながら云つた。口だけ笑つて、眼が笑はない、と云つたやうな笑顏をする女だつた。『唯今、座敷がふさがつてゐるものですから。――いえ、直ぐ空きます』

玄關わきの四疊半の部屋に彼は導かれた。電燈のついてない部屋で、障子越しに來る廊下の燈が部屋の明りとなつてゐる仄暗い部屋だつた。

女は立つて行つて、自分で手焙りを持つて來た。そして「おお、寒、寒」と云つて、それに手をかざし、彼の顏を見てにつこりした。

おかみが澁茶を持つて來て「今直き空きますから」と同じ事を云つて、同じ口だけ笑ひ、眼の笑はない笑顏をして、又引つ込んで行つた。――小川は少々度膽を拔かれた氣味で、あたりを見まはしてゐた。廊下との境の障子の煤けた紙には、大きな穴が二つあいてゐた。

「大した家だね」と彼は云つた。

「どうして？」女はその意味が解らないらしく、霜燒けのした、ぷつくり甲が膨れた手を火鉢にかざしながら、小首を傾けた。壽司屋で見た時よりも、恐ろしく善良な、田舍から出たての小娘のやうに見えた。

「いつからあのお壽司屋に來たんだい？」

「三ヶ月前よ」

「その前は？」

「田舍にゐたのよ」

「何處だい、田舍は？」

「栃木縣……」

「ふむ。……やつぱり東京に來たいと思つて來たのかい？」

「ウフフ」と女は輕くうつむいて笑つた。が、急にまじめな顏になつて、「阿母さんがお產をして、お金が要つたの」

「阿母さんが……君は幾つだい？」

「二十一よ」

『阿母さんは幾つだい？』

『三十九よ』

『ふむ。まだ若いんだね』別段感心するわけもなかつたが、彼は感心したやうにうなづいた。

『あたし欺されたのさ』と急に女は蓮葉らしい、捨鉢のやうな物の云ひ方をした。が、又眞顔になつて『阿母さんがお産するので、お金が要る、といつてゐるところに、東京の料理屋でお金を貸すところがあると云はれたので、來てしまつたの。――堅氣な家だといふので、そのつもりで來たら、あんな家なんですもの』

『幾ら借りたんだい？』

『百圓よ』

『百圓？……ふむ』小川はポッケットの上から手を當てた。彼のふところには、昨日からの月給袋が這入つてゐた。『歸りたいかい？』

『それや歸りたいわ。――家ちやあんな家だとは思つてないのよ、お父つあんのこなひだの手紙に、阿母さんがお前に會ひたい會ひたいつて泣いてゐると書いてあつたので、あたし泣いちやつたわ』

(よくある奴だな)と彼は考へた。

『ああ云ふところで働いてゐて……例へばだね、かうしてこんな風にお客を取るとするね。さうすると、君はいくら貰へるんだい？』

『何でも六分と四分とかいふんですけれど、よく解らないわ』

『六分と四分といふと、主人が六分で君達が四分かい？』

『ええ、さうよ』

『それで、君は家にお金を送るのかい？』

『ええ、送りたいんですけれど、送れやしないわ。……だつて著物だつて要るでせう。それに髪錢に湯錢に……』

髪は丸い顔の上に、燕の巢のやうにもじやもじやした、それでも逆毛を立てて、アイロンをかけたらしい跡などがついて、そして後に向つてぷつくり膨れたものがついてゐる、といふよりも乘つかつてゐるといふやうな形をしてゐた。——これで髪結錢がかかつてゐるといふ事は、へんにこの女の無智と無邪氣とを表すものだつた。それに著物——綿まじりのやうなお召——兎に角お召を著てゐた。これ等のために、彼女の取り前がみんな失くなつてしまふとは……

『こなひだもお父つさんから、肥料代がないから、何とか都合してくれと云つて來たので、主婦さんにお願ひしたんですけれど、借金が前よりふえてるつて云つて、貸してくれなかつたの。……どうしてふえてゐるのか聞いたつて、あたし達にはよく解らないんだけれど……』

女はさう云つて、彼の膝元から煙草を一本取つて、火をつけて、口に持つて行つたが、ほんたうには吸へないらしかつた。

『何だ、吸へないんぢやないか。强ひて吸はない方がいいよ、そんなものは。……それでお父さんから送つて來いといふ肥料代は、いくらなんだい？』

『幾らでもないんですの。——十五圓ですの』

『十五圓？……十五圓なら、俺が出してやらう』と彼は思はず云つた。こんな風にして身の上を聞くのも偶然ではあるが、彼はその偶然から、さつきはうつかりすると百圓出してしまふところだつた。百圓の前借——彼のふところには、その四倍位の金が這入つてゐた。併し今後の暫くの範域を考へると、その中から百圓を出すのは莫迦らしかつた。併し聞いた以上、そしてそつとポッケットの上に手などやつて見た以上、何かこだはりが彼の心に殘つてゐた。何か良心が平らかでない——さう云つたやうな心持だつた。

それが十五圓で濟むといふ事になつて、ほつと安心の出口が見つかつたといふ形だつた。彼はポッケットから紙袋を出した。そしてその中から十圓紙幣を二枚拔き出すと、彼は女の手に握らせようとした。

『そんな事して頂いては濟みません』と云つて、女はそれを取らうとしなかつた。彼はうつむいてゐる女の顏を覗き込むやうにして云つた。

『いいんだよ。取つてお置きよ。實を云ふと、俺は君の前借金位は今此處に持つてゐるんだ。併しね、さつきも云つた通り、俺は昨日からほんたうに失業してゐるんだよ。ほんたうにあの男……さうさう、君が氣に入つてゐたあの男だ、どうだい、大分惚れてたらしいあの男だ』と彼はうつむいてゐる女の頬を指先で小突いて、『あの男も一緒に失業してしまつたんだよ。それで正直なところ、今俺には籠城費が要る。――併し十五圓や二十圓の金は、俺のところに餘つてゐる。それは何でもないんだよ。だから、好いから、取つて置き給へ』

それでも女は手を出さうとしなかつた。

『ほんたうに構はないから、取つて置き給へよ』たうとう彼は女の帶の間にそれを押込んでやつた。

『濟みません』女はうつむいたまままさう云つたかと思ふと、急にすすり泣き出した。『濟みません、濟みません。――ありがたうございます』

すすり泣いてゐるばかりでなく、女は火鉢の縁に額をつけて、身體を顫はして泣き出した。――小川は呆氣に取られた。二十圓の金で泣き出さうとは？――彼はぼんやり女の泣いてゐる姿を見守つてゐた。

『泣かなくつたつていいや』と彼はへんに身につまされた心持になつて來て云つた。『泣かなくつたつていいよ。ね、泣くのは止め給へ。俺が第一參るよ。ね、そんな事で泣く奴はないよ』

彼は十五圓の肥料代について、一所懸命になつてゐる年取つた百姓の顏が眼に浮ぶ氣がした。子供ばかり多い百姓――

長女が年頃になつて、こんな風になつてゐるのも知らずに、まだその後が生れる。多産で、貧乏で、十五圓の肥料代に窮してゐて……それ等の事で、その貧農の生活が、はつきり想像出來る氣がした。

「世の中が惡いんだよ。世の中がね」と彼は云つた。彼の頭にはいろいろなものがごちやごちやと浮んで來た。會社、支配人の顏、卑屈な昨日までの同僚の顏、大嶋の演説口調、併し何も出來ないあの興奮……百圓の前借で、綿入りのお召を著て、髮を郊外の怪しげな髮結に逆毛を立てて貰ひ、燕の巢のやうに結つて貰つて、霜燒けでぶつくり膨れた手の甲をして、この薄暗い部屋に二十圓の金が思ひがけなく手に這入つたといふだけの事で、すすり泣いてゐる田舍娘――それ等は彼等及び彼女等ばかりでなく、今の薄暗い日本に充滿してゐるのだ。――彼は善根を施したと自分で自分を思ひ得た男の感傷で、そんなものを一遍に胸の中に浮べながら考へた。「世の中が惡いんだよ。――だから、何も卑下する必要はないんだよ。誰だつて、自分が卑しいと思ふ必要はないんだよ。いいかい。もう泣かなくつたつていいよ」

「卑下する」といふ言葉が、昨日支配人の前で云つたあの言葉、「御入用」といふ言葉を、彼に再び思ひ起させた。彼は口の中にごみごみ口著いた煙草の粉でも吐き出すやうに、その『御入用』といふ言葉を、ペッと頭から吐き出した。

「ほんたうに助かります」と女が顏を上げて、メリンスの襦袢の袖で眼を拭き拭き云つた。「明日すぐ送つてやりますわ。阿父つつあんがどんなに喜ぶでせう――」また泣けさうになつて來さうなのを、瞬きをして、こらへて、彼女はにつこりして云つた。鼻の低い、併し色だけ妙に健康さうに白い顏が、あどけなさと、善人らしい美を見せて。「ほんたうに濟みませんわ。どうしてお禮していいか解らないわ。――あたし御禮の仕樣がないから」一寸恥しさうな顏をして、「今晩は裸かになりますわ」

云つたかと思ふと、耳の根まで眞赤にして、火鉢の縁に顏を伏せた。

小川は再び呆見に取られて、女を見守つた。微笑が彼の頰を縫うて來た。三ケ月のプロスティチュートの生活の間に、

この氣の利かない田舍娘がこんな事を覺えたのだ。――何のお禮のしやうがないから、裸かになりますわ……彼は氣の毒と共に、一種の可憐さを覺えた。

　奧の方から手を鳴らす音が聞えた。

『はあい』と四十女の干乾びた聲で答へて、おかみがばたばたと廊下を歩いて行つた。おかみは一度戻つて來て、又ばたばたと廊下を歩いて行つた。勘定書でも取りに來たのだらう。

　再び奧から廊下に聞えて來た足音は、今度は一人のそれではなかつた。今まで奧を占領してゐた客が歸るところなのだ。廊下の途中で何か男が云つたと見えて、女がけらけらと笑つた。――小川は障子の破れ目に眼をやつて、出て來た男女を見た。男は五十がらみの肥つた男で、請負師か何かと見えるやうに、トンビの襟に、貧弱な狐をくるりと卷いてゐた。女は三十五六の曖昧茶屋の女らしい女だつた。不生著（ふだんぎ）のまま出て來たといふやうに、何だかわけの解らない小汚い着物に、黑襟をかけてゐた。下駄を引つかけて、おかみを振返つた途端に、女の顏に電燈がまともに射した。青ぶくれたやうな顏に、金齒だけやけに光らした、味も素つ氣もない女だつた。

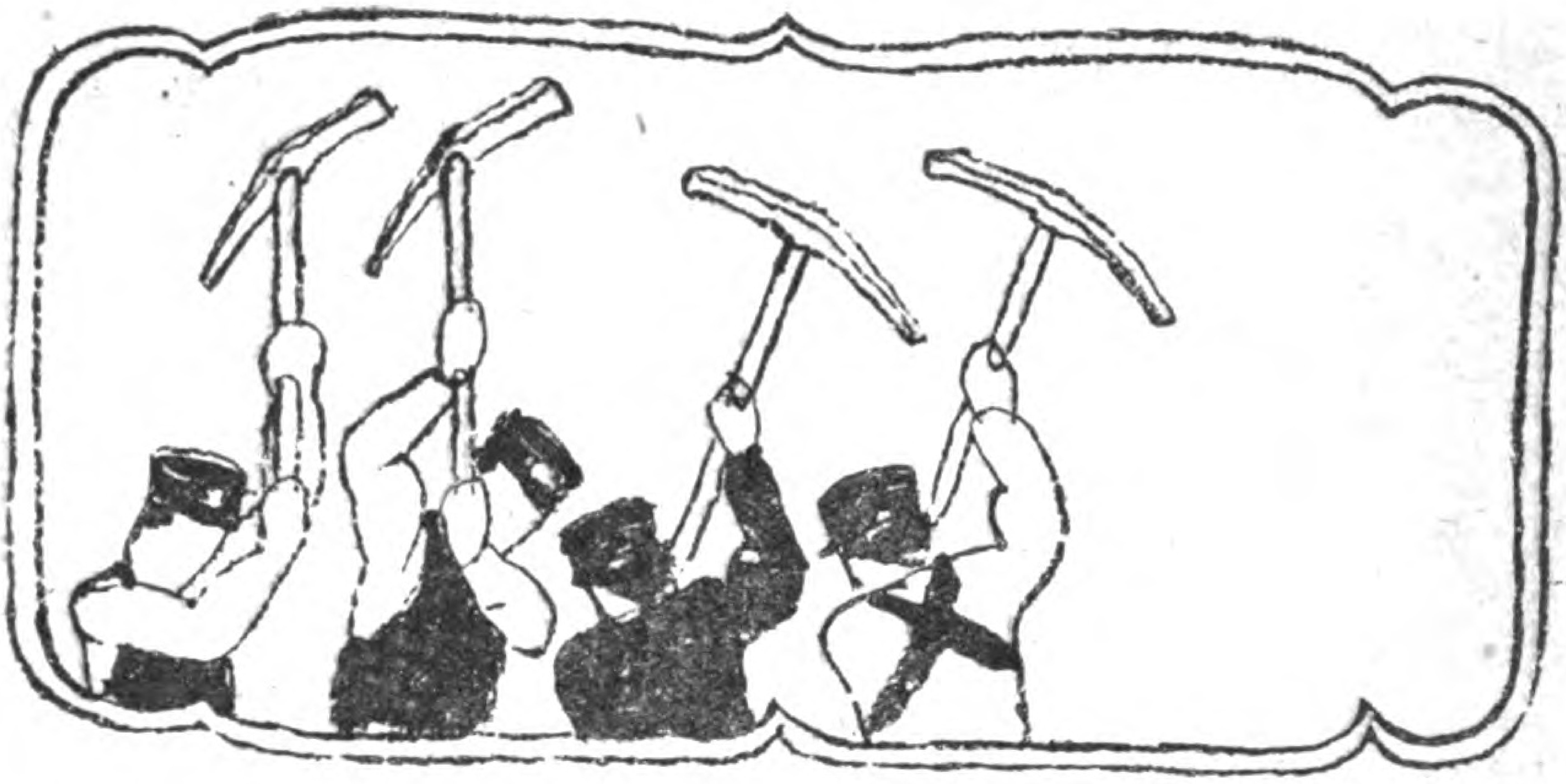
　小川は西鶴か何かで江戸時代の盆屋（ぼんや）の事を讀んだのを思ひ出した。二人の男女が出て行くと、後には又他の男女が待つてゐる。……

『又お近い中に……』

　二人を送り出してしまふと、おかみは直ぐ小川達のゐる部屋の障子を開けた。

『お待たせ致しました。あちらが空きましたから――』

　先客を歸して、部屋の空氣も換へないやうな部屋に、小川はこの一夜の女と一緒に這入つて行つた。彼はこのちびたやうな田舍娘に今は或愛情を感じ出してゐた。（終）



勞働日記と靴

鹿地亘

逸郎の死

一九二七年六月二十六日、達郎が十六の時、兄の逸郎が死んだ。

其日達郎は彼の勤めて居る吾嬬鐵工場が休みだつたので、晝過ぎ請地の父の家を出て淺草に活動を見に行つた。五月雨の霽れた後で、仲店を往き來する人々はもはや眩しさうな浴衣を着てゐた。二時頃、活動小屋の看板を一わたり見終ると、急に氣が進まなくなつて吾妻橋を渡つて家に歸つた。

戸口をはいると驚いて彼は眼を見張つた。

滅多に來たことのない伯母が店の上り口に居て、筒袖に前掛姿の母親が脊を丸くして泣いて居た。二人とも彼を見ても物を言はなかつた。

「どしたんだい、お母さん？」

すると伯母がためらひ勝ちに聲をひそめながら言つた。

「兄ちやんがな……大けがをして助かるかどうかわからん……」

「嘘言つてらい！」

「嘘だなんて！」

「嘘言つてらい！　嘘言つてらい！」

逹郎は伯母が彼をだまして居ると思つた。

彼はいきなり家に驅け上つた。小さい弟と妹とは工場裏の空地で遊んで居るらしく、そこには姿が見えなかつた。生れたばかりの赤ん坊がおとなしく眠つて居た。一わたり見廻すと佛壇の燈明臺の下に、表紙のそゝけた勞働日記と穴のあいたシースとがあつた。

「あれまあ、逸郎はこんなものおいてつたよ。肌身離さず大事にしてたに。」

昨日の朝母親が掃除にかゝらうとして、それを見つけ出した時のまゝの位置にあつた。確かに逸郎はそれ以來歸らない――逹郎は兄が無雑作にマントを肩に投げかけて出た昨日の朝の姿を思ひ出した。その頃丁度雛木ゴムの會社がストライキ最中だつたので、工場がひけてから組合に行つてとまつたのかも知れないと思つた。しかし、産後二十日にならない母親の上り口で泣いて居るさまが、ふいと、たゞごとではないと思はれ出した。

彼は上り口へ引つ返した。今度は店先に親父の人力車が置き去りになつて居るのを見附けた。親父が仕事に出て居るのでないことは直ぐわかつた。

「お父つあんは何處へ行つたんだい？」

伯母も母も答へない。

「泣いてちやわからねえや。」

彼は當惑した。何かあつたんだな――と益々確信した。勞働日記を見ればわかるかも知れない――と思つたが、それに

は日頃から逸郎が決して手を觸れさせなかつたので、何となく氣がひけた。
――組合本部へ行つて見よう――で、下駄を突つかけて本所の太平町に足を向けた。
外は暑苦しい工場の煙の中に、ごみ〳〵した長屋町の屋根が沈んで居た。豚の腸のやうな道路があてもなく曲がつて居て、それに副つた一間幅の溝の中では、太陽が射し込んで汚水がぶつ〳〵煮えて居た。小走りに走つて行く達郎の脇の下で汗がだら〳〵流れた。
「もし〳〵……」
彼は足をとめた。長屋町には似附かはしくない、なりのいゝ夏服の男だつた。豚の腸のやうな道に迷ひ込んで出口が見つからないといつたやうに、雜草が一ぱいに生えた空地と工場との堺の袋路から足を返して來た所だつた。柔い中折のひさしを持ちあげて――
「一寸お尋ねしますが――」と言つた。
もどかしさうに達郎は相手を見上げた。「この近くに塚原小三郎さんといふ車屋さんがありますか。」
「僕んとこだが――」達郎はぢつと眉を寄せた。
「ほう、では君が逸郎君の……そりや丁度――」
相手はポケツトのシースから名刺をとつて差し出した。朝日新聞記者といふ肩書があつた。
「兄さんが御不幸で大變……」
「兄ちやんが？！」
大きな建物が頭から落ちかゝつたやうに達郎は感じた。見る見る顔が蒼ざめて全身の血が爪先から消えてなくなるやうに思はれた。

「本當ですか？」やつと息をついで言つた。

「本當ですとも。警察で……ではまだ……」

達郎はくるりと向きを變へ、もと來た道を一さんに走り出した。雜草も空地も溝も路次も消えて、無意識にあがく足の下で大地が高まつたり低まつたりした。狙て、新聞記者は後を追つた。戶口に走りつけると達郎は喚鳴り附けるやうに大聲で叫んだ。

「死んだんだつてさ！」

上り口へどかりと身體を投げ出し、はあ〳〵息をした。伯母は默つて彼を見やつた。何も言はなかつた。その脇で母親が泣きつゞけて居た。達郎は急に胸が一ぱいになつて喉がつまつて來た。だが――泣いてはならない。泣いてはならない……彼は上眼使ひに軒下の空を見た。

新聞記者が來た。間が惡るさうに悲しみの挨拶をして用向きを述べた。――伯母が時々手の甲で鼻をこすりながら應待した。――主人は今死骸を引き取りに南千住警察に行つて留守であること。死んだのは夜の十二時過ぎで、家には直接通知が來ないで、同じ街の彼女の家に今日の晝過ぎ巡査が知らせを持つて來たこと。詳しい事情は組合でなければわからないこと。……

おろ〳〵聲で話す伯母の皺深い眼の涙を達郎は穴のあく程見つめた。それから新聞記者に眼をうつした。

「それはどうも……で、御本人の性質は……？」

用もない奴が――達郎は、中折を腋に挾んで手帳に鉛筆を走らせて居るその男をひどく憎んだ。達郎はふいと立ち上つた。表に出ると足は自から合同勞働の本所支部に向いて居た。――詳しいことがそこならわかる……組合には殆んど人が出拂つて居た。殘つて居た二三人は彼の顏を默つてまじ〳〵と見た。何處へ皆出掛けたかと尋ねると「雑木爭議團の本部」

と答へ、一人が何と言つてよいかわからないといふ風に、「兄さんが死んだんだつてね。」と言つて彼の肩に手をおいた。

雜木爭議團の本部になつて居る千住橋場の化學本部に行つた。

「お、逵郎君か！　上れ。」

落ちつきなく家の中を立つたり坐つたりして居る男たちと女たちの中から、書記長の志村が彼を見つけて呼んだ。多くの傷ましさうな視線を浴びながら、志村について二階の階段を上がつた。二階も人々で埋まつて居た。兄の親友の上川や辻も居た。いつもなら辻は——やい、兄貴のかばん持ち——といつて彼をからかふのだが、その時は、ちよいと眼でうなづいて見せたま、直ぐ顔をそむけた。その横に首の太い、いかつつい男があぐらをかき、太い腕を組んで齒を食ひしばつて居た。人々はちらりと眼をあげ、そして眼をそむけた。それらのそむけられた眼の注意がすべて彼に集つて居るのを感じた。彼は子供が大人の群にまぢる時感ずる自分といふもの、頼りなさを感じた。志村は彼を隅につれて行つて觸れ合ふ程に額を押しつけて言つた。

「昨日ビラまきでやられてな。度々もらひに行つたんだが、今日になつても檢べ中とばかり言つて、本當のことを知らせねえんだ。」

逵郎は志村の垂れた髮の下の深みのある眼を見つめた。志村の話によると——逸郎は昨日五時過ぎ、勤め先の朝日ラバーから直接爭議團に來た。それから二人の組合員と工場附近にビラ撒きに出掛け、警戒中の千住署の巡査に追はれた。三人は一人と二人とに分れ、逸郎と他の一人とが工場横の裏通りを逃げ、途中で一人は靴の紐が解けたので、傍の塀を飛び越えてかくれ、逸郎だけが追ひつめられて捕まつた。今朝になつて度々もらひに行つたが、組合にはどうしても眞相を明さなかつた。——

「怒つて騷ぎ出すと思つたんだな・・・・怒らないでさ！」志村は拳を握つた。——何もかも作り事のやうだ。・・・・逵郎

は考へをまとめることが出來なかつた。すべてそれは何か巧にしくまれた芝居に過ぎなくて、小肥りの赤味をおびた兄の顏がそこらから、笑ひながら出て來るのぢやないかとさへ思はれた。だが——一體このものゝ〳〵しい靜けさはどうしたと言ふのだらう。……

組合の表に重い靴音が群がつた。サーベルの音がそれにもつれ始めた。色めき渡つて人々が立ち上つた。窓からのぞいた一人が「來たぞ！」といふと、志村が眼で答へて、階段の降り口に歩み寄りながら靜かに指圖した。

「皆下に降りてくれ。」

ぞろぞろと降り始めた。後から押されながら達郎も降りた。もはや下では雛木の女工たち、組合の男たちが、土間まで埋めて塊り合ひ、小さい者は脊伸びをして居た。其等の後向いた頭を越えて、先頃つけたばかりの警官の白の日覆ひが重り合つて見えた。達郎は心臟が縮むのを意識した。まぎれのない事實が眼の前に展け始めた。日蔽の群の間に道が出來た。

「逸郎君ばんざあい！」

忽ちひきつつた聲が塊の前部から迸り出ると、悲しみに割れるやうな叫び聲が家の中と外とのすべてを滿した。すべての手が頭の波の上に上がつて。——ばんざあい！……二度目の聲は小さくなり、三度目の聲が消え消えに細つて手の林が下に降りると、日蔽の群の中に開かれた道に、紋附羽織姿の陽に燒けた父の顏が、苦痛に滿ちて人々の前に頭を垂れて居た。その後に黑いほろの寢臺車。評議會の唐津、藤沼等に附き添はれた眞黑の寢臺車——達郎はくらくらして、眼頭が熱くなり、すべてが霧の中につゝまれてしまふのを感じた。抑へ難く聲が喉をついてもれた。……

あたりはひつそりして、サーベルの音もさすがに靜まつた。その中から鼻をすゝる音が一時に起こり、女たちの泣き聲が誘ひ合つて痙攣し始めた。

……しのゝめの明けぬ間に……

志村の聲であつたらしい——達郎は曇つた霧の中にきいた——次第にすべての聲が融け込んだ。

……祭壇のなきがらは……

……うらみを呑んでねむる……

歌が終ると森にのまれた嵐のやうに靜まつた。その中で切れることのない女たちの啜り泣きが耳についた。お、……お……といふ聲を傍に聞いて達郎は眼をふいてふり返ると、それは二階で腕を組んで坐つて居た頑丈な勞働者の嗚咽だつた。

志村が表に出て父に向かひ挨拶して居た。父はしきりに頭を下げて、——いや、それには及びません——と言つて居るのが聞えた。志村は戸口に歸つて——皆、塚原君を家まで送つてくれ給へ——と言つた。

間もなく、緣のない、赤い組合旗を持つた志村とそれを守る首の太い頑丈な勞働者、父、寢臺車、達郎、組合の男と女たち——からなる異樣な行列が警官に附き添はれながら白鬚橋に近づいた。瓦斯會社の赤煉瓦の大工場と巨大なタンクを過ぎた。橋際の交番で巡査が前を遮つて、旗を卷け、といつた。

「何をこの野郎!」

首の太い勞働者がやり場のない怒りを投げつけると××はすごすご前を退いた。橋を渡る時寢臺車の車輛が橋桁に反響してごうごう鳴つた。組合旗が風にはためき、川一面に傾いた太陽が散つて、煙突のない隅田製鐵の這ひ下がる煙が焦茶色に渦卷いて居た。

露地の家の前の狹い路次には近隣の人々が黑く塊つて居た。近附くと、小さい、丸い母親が顏を兩手で蔽つて居た。小さい弟と妹たちがその裾にすがりついて「兄(あん)ちやん死んだあ……」と言つて泣いて居た。その橫に伯母、その脇に赤ん坊を抱いた妹の幾子が眼を泣き膨らせて居た。死體は用意された佛壇前の席に組合の人々の手で運ばれた。ぞろぞろと人がつ

づいて家の中一ぱいに溢れ、這入り切れない人々は家の外の路次を埋めた。家の中には一しきり激しい泣き聲が又起つた。

志村が靜かに顔の白布の蔽ひを取ると、首筋から顎にかけて暗紫色の斑點のついた死に顔があらはれた。顔をあげた母親はよろよろして眼をそむけた。

「ははあ…左の頰をやられたんで、下の右の頰が膨れ上つたんだな。」色の變つた右下の頰を眺めながら誰かゞ言つた。

「首のあとは問題だぞ。」と誰かゞ囁いた。人々はうなづき合ひ、組合の連中は隅の方でひそひそと話し合つた。

夜になると警官が減つた。

伯父や、その他親戚の人々が來た。夕飯の時泣いてばかり居て飯を食はなかつた弟と妹たちは、やがて、通夜に來て何くれと立ち働らく人々の足の間で疲れて眠つた。隣の革屋のお主婦がそれに蒲團をかけてやつた。

「可愛らしいもんだ。兄ちやんが富公富公つて可愛がつたけねえ。」

達郎は母と一しよに死體の枕元に坐つた。枕元には花が横へられ、勞働日記と穴のあいたシースとが重ねられてあつた。めくれた表紙の眼につく指あとは、逸郎の指の臭ひをはつきり殘して居るやうに思れた。

翌日は朝から色々の人が弔ひに來た。まだ體の回復し切れない母親が赤ん坊に乳を含ませながら應待した。伯母がしなびた手で赤ん坊を抱き取りながら——體に毒だから横になれ——といつたが母はきかなかつた。疲れて居るのか疲れて居ないのか達郎は自分にもわからなかつた。午後になつて一寸身體を伸して横になるとそのまゝ眠つてしまつて、雜木の女工たちが五十人餘り來て線香をたいて歸つたのを知らなかつた。

「何しろ首筋の斑點が問題だ…」

組合の連中が間島ドクトルと打ち合せて親父に相談した。解剖に附することが決められ、時をうつさず帝大に交渉すると、大學では曝いてならぬことを曝くことを怖れてそれを拒絶し、直ぐ慶應に交渉して、翌日村上博士の執刀で解剖され

ることになつた。

翌日死體はトラックで大學の解剖室に運ばれた。父と間島ドクトルと關東地方評議會の唐津清六が立ち會つた。夏初めで、白衣の博士が銀色のメスで腹を裂くと、惡臭が人々の胃の腑まで流れ入つた。博士は眉一つ動かさずにさらさらと體を開き、やがて助手と顔を見合はせ、ちらりと眼配せした。勿論人々にその意味はわかる筈がなかつた。

「死因は心臟痲痺です。」

おごそかに博士が報告した。人々は默つて頭を下げ、それから、解剖室を出た。室を出る時、間島ドクトルが無念さうにつぶやいた――もう二時間早かつたらなあ…

死體は火葬場に送られた。

相談の結果、葬式は關東地方評議會の組合葬に決し、日取は七月三日、場所は示威の意味を含んで南千住の西光寺を選んだ。

二十九日、三十日、一日、二日――

その間に寺島の警察から、「葬式は何時ですか？」とちよいちよい尋ねに來たが、「組合にまかせてあるから知らねえです。」と父は答へて歸へした。

七月三日は第一日曜になつて居た。

新聞が筆を揃へて南千住署の非法を鳴らした後なので、葬式は全市の注目の中に擧行された。父と母とは先に寺へ行つて待つた。總動員された組合の本隊は家の前が狹いので、一先づ飛木稻荷の境内に集つて途中から葬列に加はることになつた。先頭に白裝束した妹の幾子が燈籠を持つて、達郎が骨を抱き、葬列は家を繰り出し、じめじめした屠殺場通りを西に下つた。長い道の兩側を五間置きに巡査が固めて居た。途々一塊りづゝの勞働者が警戒を破つて葬列に加つた。トラック

が幾臺も列を追ひ拔いて南千住署の方に走つた。それらの上には飛木稻荷に集る筈の顏ぶれが次々に見え、或者は列を追ひ拔く時に、後手を取られたま丶——塚原君ばんざあい……と聲を流して行つた。

「又行かあ」——「又行かあ！」

人々は呆れて見送つた。

消費組合のトラックが白旗を立て丶走つて來たが、葬列に出會ふと車をとめて、乘つた人々はばたばたと降り、葬列に加はつた。

西光寺にはもはや八百人あまりの會葬者が集つて、骨の來るのを待つて居た。やがて燈籠を持つた幾子の姿が見え始め、人々はざわめき立つた。幾子は重たげに身體をくねらせ燈籠の竿を擔ぐ肩を代へ、肩を代へした。葬列は本堂にはいり、人々はその後に崩雪をなした。その時達郎は、脫いだ靴を下げ、跣足で土の上を渡り本堂の裏にはいる五十人餘りの巡査を見た。

葬式は始まつた、本堂は人いきれで蒸し返されたが汗を拭ふものもなかつた。弔辭が讀み上げられ弔電が傳へられた。その度に達郎は全身の毛穴が開き、そこから、冷い水が流れ入るやうに覺えた。布施辯護士の代讀の半ば、突然サーベルの音が床をつき、南千住の署長が立ち上つた。葬式は解散を命じられた。

「ぶつ×せ！」

本堂の中は總立ちになつた。司葬者たちは必死になつて抑へた。やがて、警官たちに押しまくられ、ぞろぞろと本堂をこぼれ出る群の中から「かたきはとつてやるぞ！」短い叫びが聞えた。

人々が散ると、父、達郎、評議會の市島、唐津、藤沼等は骨を守り、三臺の自動車に分乘して芝の西蓮寺に向つた。警察のトラックが一臺それについいた。途中、一丁置きに配備された日覆ひを見て、頑固な親父が珍しく皮肉をもらした。

「逸郎もえれえもんだな。」

顔は不思議な微笑で引きつゝつて居た。

葬式がすむとめつきり家の中が淋しくなつた。組合の人々はまれにしか來なくなつた。子供達は外に遊びに出なかつた。

「外へ行つて遊びな」

さう言つて小使ひをやると、富公は、近所の駄菓子屋から菓子を買つて來て、「兄ちやんにおける」といつて佛壇にそなへた。

「兄ちやんの夢見た。」と妹の幾子が言つた。

「夕、兄ちやん着物着て來たよ。」と母親も眞顏で言つた。おわたゞしい十日が過ぎた後は實際すべてが嘘のやうに思はれた。夕方工場から歸つて來た達郎が表を開けると、うす暗い家の中から妹の幾子が、「おゝ、やつぱり兄ちやんぢやなかつた。」とがつかりしたやうに言つた。

十日過ぎて、千住署の留置場から出たといふ總同盟の男が、逸郎が靜察に殘した靴をとゞけてくれた。黑革のボックスの編み上げで死ぬ少し前にあつらえた逸郎の氣に入りの靴だつた。達郎は靴に足を突つ込んで見るとぴつたり大きさが合つた。母親が幾度もその男に禮を言つた。

「兄ちやん。その靴頁ふんだから、あたいに勞働日記をおくれな。」

妹は勞働日記を大事さうに行李の底に收めた。

親父はすつかり精が落ちた。仕事にも出ず、革屋と將棋もさゝなかつた。ふらふらして居た。以前は組合の者が來ると嫌な顏をして碌にものも言はなかつたが、葬式の後は、急に愛想よくなり、時々は自分から微笑を浮べて、「はい今日は」と

挨拶した。

兄の親友の上川と辻が時々訪ねて來て、逸郎の肩を叩き「どうだ、しつかりしろよ」と勵ました。

羅木のストライキが勝つて、女工たちが花を持つて佛に供へに來た。

働き手だつた逸郎が居なくなると家計は急に苦しくなつた。葬式の時の寄附が三百圓餘り殘つて居たが、大島に引越して下駄屋を始め、思はしくないので、次に、精進あげ屋を始め失敗して元も子も擦つてしまつた。大島にも居られなくなつて寺島に引つ越した。その頃から、又組合に對する恐怖とつながつた惡感情が親父の中に甦り始め、兄の友達が來るといゝ顔をしなくなつた。一家を襲つた不幸の原因が、その不幸に壓しひしがれ始めると、親父の頭の中で次第によそに轉化され始めたのだ。

或る時幾子が家計の苦しさを見兼ねて工場にはいりたいと言つた。親父は吐き捨てるやうに言つて相手にならなかなた——

「工場にはいつたら、碌な奴にやならん。」

「そんな馬鹿なこと——」

「馬鹿なこと？ 死んだ兄ちやんは何と言つたかな。」

幾子が小學校を卒業した時。工場に入れては、と勸めた伯父に向つて、——俺が働くから何處にもやるな、女の子はお針さへし込んだらいゝ、——と逸郎が言つたことがあつた。逸郎のことを言はれると幾子は默つた。然し、間もなく東洋自轉車の吾嬬工場に通ふことになつた。……そのことについては親父もそれ以上頑固になることも出來なかつた。然し、死んだ兄の記憶を生活に生かさうとする兄妹との間に深い溝が次第に出來た。家は益々苦しくなつたので、親父はやがて鑢掛屋を始めた。

あらそひ

「お父つさんが無理だよ、それは――」
「おめえは默つてろ!」
「それぢや、幾子が可哀さうだよ……」
「默つてろつたら默つてろ!」
逸郎の一周忌が過ぎて間もなくのこと。
夕方を過ぎたばかりといふのに吊られた蚊帳の中から、達郎の聲が親父と爭つて居た。八疊と二疊との狹い家の中にすきまなく蚊がうなつて居た。蚊帳の外で橙の皮をくすべて居る親父は激しく團扇を鳴らせ、その前に外から歸つたばかりの妹が、着變へかけた浴衣をちがへたまゝ、蚊帳の裾を敷いて足の蚊を叩いて居た。――親父は妹を待つて居たのだ。達郎には見向きもしなかつた。
「だつてお父つつあん。おめえ工場に通つたことがねえから知るめえが、誰が面白半分に――」
「默つてろ!」
蚊帳の暗い影の中で達郎の顔が動いた。
「……面白半分にストライキやるもんか、そりや、何時だつて勝つと決つちや居ねえ、どうせ相手は強いんだから――」
「馬鹿、女がやるもんぢやねえ。女あ小使錢とりに工場に行きや澤山だ。」
「そんな馬鹿な! 一所に働いてる者を裏切るなんて……出來るもんか、そんな!」
「何だと!」
親父は急に蚊帳の中に向きなほつた。達郎もむつくりと起きた。ことの起りは――東洋自轉車の吾嬬工場が動搖し始め

て、幾子が檢束されかゝつたと聞いて、心配した親父が幾子を無理强ひに手を引かせやうとしたので、逵郎が見兼ねて口を出したのだ。二人の聲が高くなつた。

「女なんて――」父はあえいだ。

「何が女だい！」

「女なんて――」

「女も男も同じだい！　幾子、どんどんやれ！」

「で、出て行け！」

親父は破れたシャツの袖をぶるぶる震はせた。ふむ――と言つて逵郎はそつぽを向いた。

「おめえ見てえな奴あ出て行け！」

「出て行くよ！」

逵郎は蚊帳をくゞつて出た。浴衣をかけて帶を卷いた。やがて玄關の闇で下駄をさぐつた、――親父は顎をふるはせながら見送つたが、逵郎の白い浴衣が闇に浮いて、前の瀬戸に消えると、急に絶望的な後悔に襲はれた。富公やその他の妹や弟たちが蚊帳の中からおどけたやうに顏をこわばらせて眺めて居た。

逵郎が家を出たのは始めてゞはなかつた。

寺島へ引つ越して間もなく彼は家を出た。

飯の菜の文句を言つたのがもとで、どうして下らないことで父を怒らせたのか、逵郎は後では首をひねつたが、然し、どうせ二人が馴れ合ふことを恐れて居た溝が一度は曝かれなければならなくなつて居たのだ。

「同じまづい飯でも、兄ちやんの仲間と食つてりや味が違ふ！」――出たあとで彼は清々した。十一月だつた。彼は合同の向島支部に宿つた。家には歸らなかつたが矢張り氣になるので、二度ばかり、稼ぎためた日給を十圓程持つて行つて母

親に渡した。翌年の二月までそこで組合の仕事をした。

すると總選擧がやつて來た。

太平町から兄の親友の素藤がやつて來て、——手傳ひしないか——といつたので本部へ行つて唐津淸六の選擧事務を手傳ふことにした。眼の廻る程忙しかつた。幾日か續けて工場を休んだら遂々解雇通知が廻つて來た。だが、その時はもはやそれが問題でなくなつて居た。何故なら且つて辻がからかつた「かばん持ち」から、彼は漸やく一人の勞働者としての意識を掴みかけて居たし、その上彼の全精力を奪つて居る差し當りの仕事の意味深い輪廓が、彼にも次第にはつきりし始めたからだ。運動がその仕事を通して大きな轉期を示さうとして居た。——

だが、その頃から彼にとつてたゞならぬ、不可解な一つの事件が起つた。彼は非常に驚いた。或日のことだつた。——勿論、彼は眞劍な一本氣で働らいて居たし、逸郎の弟だといふことからして、仲間が彼に疑惑を持つなどとは思ひ及ばないことだつた。だが、その自信が根本から覆された時に彼は眞暗な氣持になつた。

彼は太平町の本部の二階で組合の五十里と話し合つて居た。他の組合の男が來て五十里を呼んだ。五十里は困つたやうに邉りを見廻し、やがて、

「一寸、君——」

と達郎を待たせて下に降りた。上つて來た。間もなく他の男が眼配せした。

「一寸、君——」

五十里は又彼を避けて部屋の隅に行つて囁き合つた。のけものにされた——と彼は思つた。幾人も人が來て、その度に彼は取り殘された。やがて又五十里は彼の所へ歸つて來て何氣なく話し始めた。……何だといふんだ……だが、その時は餘り深くも氣にもとめなかつた。

夜になつた。

下の臺所脇に、日頃物置きにして居る暗い二疊の外を通ると、五十里が來て「一寸君遠慮してくれないか」と言つた。明りのない小室に五六人の影が吸はれるのを見た。達郎は完全にどやしつけられたやうに感じた。もはやその時は「何だらう？」ではなくて「俺をスパイと思つてるんだらうか」といふ疑ひがはつきりと兆した。

「ふん、こいつあい丶な。」

小室からはつぶされたやうな囁きがもれた。何かを障子の外の明りにすかして眺めて居る氣配だつた。やがて人々の影は次々に部屋を出て、彼の居る上り口を通り、何處へともなく外へ消えた。

次の日もその次の日も不可解なことが續いた。

「おい、こんなビラが街に落ちてたぜ。」

幾日目かに、素藤が小さいビラを見せてくれた。赤インクの鮮明なビラだつた。急に彼は何だかわけがわかつたやうな氣がした。同時に――素藤も又暗い小部屋から出て來た仲間の一人だつたことを、達郎ははつきり思ひ出した。彼はいぶかしさうに素藤の眼を讀んだ。

「どうだい、これは。」

彼は答へなかつた。人に言ふな、と素藤は注意したが、達郎はまだ「のけものにされた」氣持を捨てることが出來なかつた。次第に兄の仲間たちの間に戻ることが心苦しくなり、彼が人々の邪魔をして居るやうに思はれ出した。

その時、月島にソリジットのストライキが起つた。達郎はい丶機會だと思つた。――是非自分を應援にやつてくれ――と言つた。逃げ出すやうな氣持だつた。

爭議團の本部は月島の金屬支部になつて居た。そこでは別に變つたこともなく過ぎた。一度工場附近で印袢纏の樫の棒を持つた會社の暴力團に追はれ、一度工場長の私宅を襲撃し、一度引ぱられてした丶か「訓練」された。例のビラが爭議團でも話題に上つて居た。――おつかねえな――と或者はいひ、――やつてやがる――と或者は喜んだ。爭議團はひどく

苦戰をして居たので、朝夕の食事は握り飯に味噌だつた。時々一串づゝのめざしがあつた。それを幾日も續けて居ると、甘いものが馬鹿に食ひたかつた。體がひどく疲れ始め、顔色がくすぼり始めた。糖分の不足したせいだらうと思つて居たが、三月に入つて間もなく、兄の形見の靴が擦るやうに重く思はれて、ふと脛にさわつて見るとかまぼこのやうに膨れ上つて居るのを發見した。

「そりやいけねえ。」京橋に見廻りに來た素藤が心配さうに眉を寄せた。「俺んちに行つて寢てろ。」

「なあに。」

彼は力なく笑つた。

丁度さうした時に所謂三月の事件が起つたのだ。

未明に全市がやられたといふ聲が傳つた。――此處にも來るぞ……ビラを燒け……書類を整理しろ……さうして人々は敵の襲來を待ちかまへた。報せをきいた時に感じたことは、――やられた――といふことでなくて、――愈々火蓋だ――といふ焦々した心が騷ぎ立つた……待ちかまへて居たが晝近くまではやつて來なかつた。達郎は太平町の本部の容子を探らうと思つた。で、電車道まで出ると、遇々爭議團に來る出版勞働の男に會つた。

「危いから止せよ。」

その男はむきになつて止めた。一緒に又もとへ引つ返した。

「ひどくやられたかい。」

「滅茶々々だ。」

その時も達郎はそれを信じることが出來なかつた。大したことはあるまい――といふ氣持が腹の隅にかくれて居た。

――選擧が終つたら來るかも知れないから準備しろ――と太平町に居る時誰か言つたのをふと思ひ出した。

間もなく素藤が逃げて來た。

「此處も危い！」

と素藤が言つた。

「俺ぁ行き場がねえんだ。」

狽て氣味に達郎が言ふと、素藤は「ついて來い」といつて、本所の小さいラムネ工場に連れて行つた。素藤の父の工場だつた。工場と母屋との間から階段を上ると、二階に三疊の部屋があつた。書類を皆持つて行つて天井裏にかくし、それが片附くと素藤は「休んでろ」といつて忙しさうに又出かけて行つた。達郎は赤ちやけた疊の上に始めて身體をのばした。落ちつくと急に疲れが出た。脛は益々膨れて居た。

達郎は醫者に診て貰はうと思つた。

素藤が歸つてから相談すると、

「そりやいけねえ、暫く寢て居て本でも讀むんだな」と言つて眉をよせた。

翌日間島ドクトルに診て貰つた。診察券をもらつて順番を待つて居ると、待合室に居る患者たちが色々噂話をして居た。

「記事差とめだつて話だよ。」

「全國的ださうぢやないか。」

ドクトルは彼の脚を押して見て「脚氣だ」といつて藥をくれた。歸つて來るとがつかりして疊に横たわつた。

素藤は留守だつた。嚴しい警戒の中で忙しく立ちまわるこの兄の親友のことを思ひながら――えらい、と心から思つた。

達郎は本箱をあさつて見た。ばら／＼とページをめくつて見ると、どの本にも餘白一面に書込みがあつて赤い線が引いてあつた。――よく讀んものだな――と驚いた。――勉强しなけりや駄目だ――と感じ、寢そべつたまゝ手當り次第に讀み始めた。

十日餘り、晝間は本に讀み耽りながら休養した。二度ばかり爭議團本部に容子を見に出かけたが、そこではもはや平常

に歸つて、續々判明する思ひがけない被害について人々が話し合つて居た。
三度目に出掛けた時に東京市の人夫の男に會つた。——築地に仕事があるが行かねえか——とその男が誘つた。ぢつと寢て居るのが退屈になつて居た時なので、達郎は行つて見ようと思つた。その夜は爭議團本部にとまつた。
翌日の朝、人夫の男に連れられて行くと、仕事はトラックへの石の積み降しだつた。日給は一圓五十錢で頭を十錢はねられた。夕方へと〳〵になつて一圓四十錢の日給を受け取り——まだ體に無理だつた——と思ひながら、重い足をラムネ工場に運んだ。上り口の土間でぐつたりとなつて靴のひもを解きかけた時、ふと見なれない二足の深ゴムが眼についた……
……その時注意すればよかつたのだ、畜生！
ぎい〳〵鳴る梯子を踏んで二階へ上ると、
「よう、塚原君か、待つてたよ。」
「一寸來てくれ、一寸でいゝから。」
寺島の奴等だ。二人ともあぐらをかいて、卵丼を取り寄せて食つて居た。達郎は物が言へなかつた。
「素藤君は一足先に行つて貰つたよ。」
「俺はな……身體が悪いんだ……藥瓶があるだろ……」
「そりや、君の藥か。暇どらせはしない、一寸でいゝんだ。」
「食つてしまふからな。どうだ、君も何か食ふか。」
間もなく達郎は藥瓶をさげてつれて行かれた。家を出る時老ひた素藤の父が手をもぢちぢさせながら何か口を動かした。
「大丈夫ですよ、お父つあん。すぐ歸るから」といふと老人は默つて大きくうなづいた。
留置場には素藤や七島や立花やがもはや先に來て居て、各々別の房からぎよろぎよろ眼を光らせて居た。「拘留二十五日」
夕方になつて言ひ渡された。……

三日目になつて呼び出された。

それが檢事だといふことを後になつて知つたが、金線の眼鏡越しに感情の死んだ冷い眼をまともから注がれて達郎はぞつとした。

「……にはいつたのは何時だ？」

「何のことですか。」

冷い眼はナイフのやうに光つた。

「知らない？」

………

「言へるやうにしてやらうか……」

……達郎はよろめきながら房に歸つた。

無數の眼が又心配さうに金網越しに光つた。――まづいことを言つたのぢやないか――といふやうな素藤の氣がゝりな顔を見て達郎は悲しい程口惜しかつた。

四月に入つて辻と上川がつれられて來た。十日になつて、寺島町與斯會の一團が七八人來た。それらの一團は一塊りに達郎の房にぞろぞろ押し込まれた。……三團體が解散された、といふ知らせをその人々が持つて來た。その日は朝から夜中まで引つ切りなしに人が増えて三十八人だつたのが夜中には九十二人になつた。五つの房（そのうち一つは保護室）に分けられて、各々二十人近くの人々が米袋のやうに積み重ねられた。暑かつた。人いきれで蒸し返された。藥がなくなつて達郎の體は日毎に衰へ、胸が苦しくなり始めた。

體が弱ると氣が沈み始めた。

二度目にしらべられた後だつた。歸つて來ると急に息苦しくなつて板の間の上に倒れて呻いた。恰度嘔く物が一ぱいつ

まつて居て出口をふさがれてしまつたやうに、胸が割れさうに痛み出した。人々は狽て、看守を呼び、脊中を撫でゝくれたが、「大丈夫だらう」と言つたきり看守は見向きもしなかつた。

耳の傍で一人の男が他の若い勞働者を低く然し、きつくたしなめて居るのが聞えた。

「そんなことしやべつたのか。そのまゝ出やがつたらぶつ殺してくれるからな。……いゝか、今度呼ばれたら引つくり返すんだぞ。」

それが誰だかわからなかつた。

達郎は――自分も兄のやうに死ぬかも知れない――と思つた。

三日――五日――七日――十日過ぎた。

房は又次第に人が減つた。始め捕まつた達郎等だけが再び後に殘つた。達郎の體は目に見えて惡くなつた。「×んだら出してやるよ」と看守が言つた。週期的に胸苦しさが襲つて來た。やがて七島が繩を打たれて送られた。その翌日素藤が送られることになつた。その日の朝、隙を見て素藤が金網の間から紙片を投げ入れた。

――キミノコトイハヌ、ガンバレ――

二人の巡査に繩をとられて行く兄の親友の後姿をぢつと見送つた。

やがて拘留あけが來た。時間が早く過ぎるか、生命が長く續くか――達郎は只外に出たいと思つた。

彼は呼び出された。主任が勿體ぶつて口を切つた。

「兎も角出すけど、身柄引受けを誰にしてもらふかね。」

色々頭をめぐらして見たが、結局父より外になかつた。出るんだ!!……出るんだ!……脹れ上つた足を留置場に引きずりながら彼は胸をわくわくさせた。

父が來て、眼に涙を光らせながら彼を見た。彼も眼頭が熱くなつた。ぢつと首をうなだれて石の建物を出た。もはや暖

い風が吹いて、煤のたまつた寺島の、街の、所々疵のやうに見える空地には、花のない草が黄色い葉を擴げ、そこゝで鯉のぼりが煙を呑みながら泳いで居た。父も彼も何も言はなかつた。家に歸り、風呂に入り、ぐつたり眠つた。燒けるやうな彼の額に手をおいて母親が激しく泣いた。

親父はそれに懲りた。それ以來、「出て行け」といふやうなことはなかつた。體が回復すると達郎は大和革布工場につとめることになつた。

治安維持法の勅令が出た後、ちよいちよい親父は斷片的に言つた。

「家から繩附きは出したかねえ。やるんならよそでやつてくれ、……」

「そんなことよか、くらしのことを手傳つてくれるとなあ……」

「今度の法律ぢや死刑だつてからなあ……」

親父の記憶の中で、死んだ息子の顏がちらちらした。達郎は何も口答へしなかつた。止めたんだらう――と親父は考へて居た。

それだのに……今夜、俺は何といふことをしでかしたのだらう――

「兄ちやんは、どうしたつて言ふんだらう」幾子は玄關まで出て眺めて居たが、やがて歸つて來て帶をしめ始めた。親父は物を言はなかつた。

寺島の町を北から南に貫いて曳舟川が流れて居る。前には上流が江戸川につながつて居て、毎月さるの日に帝釋樣におまゐりする足弱の女や半病人をのせた大傳馬が岸傳ひに人夫に曳かれて上下したものだ。その後川上は埋め立てられ、そのあとに小石のやうな家が立ち並んだ。川の兩側には染色工場やゴム工場や革布工場が隙間なく建つて、石炭殼をこづみ上げた工場と工場との間の空地には、壞れたボイラーの死骸が半ば土にめり込んで居る。工場から排泄する醬色と茶褐色

の灰汁はすべてこの川に注ぎ込み、闇の中でぶつぶつ泡をふいて居る。且つて帝釋參りの女たちを運んだであらう大傳馬は狹い水面の兩岸寄りに、石炭の粉を一ぱい浴びて腐蝕するまゝに殘されて居る。昔の名殘りといつては、町北の橋際で老夫婦が生業して居る名物の曳舟だんごだけである。――

達郞は川に出て、何處へ行かうかと考へて見た。半年前家を出た時のやうに明らさまに行くことの出來る組合の事務所はなかつた。兄の友人は多く捕はれ、殘された者はその煙の下の暗い街の何處にひそんで居るのかわからなかつた。

傍に、彼の勤めて居る天井の低い赤煉瓦の工場があり、如露の口のやうな三本の煙突が突つ立ち、闇に光つて居る油のやうな水に倒に影を突き倒して居た。

素藤や志村のことを思ひ出した。上川の消息は全くわからなかつた。プロ・ニユースは發行される度に、同志某々の死が報じてあつた。それらの記事を呼んで聞かせると、母親は、

「逸郞のやうに死んだんぢやらう。」

と言つて淚ぐんだ。

一年の間に何もかも變つてしまつた。幾子は十五になり、小さい弟や妹は見違える程丈がのびた。

「インタナシヨナルて何だか知つてる?」

時々逸郞が殘した勞働日記をめくりながら幾子がとてつもなくそんなことを言つた。

それから父のこと――

ふいと、達郞は、逸郞がどうして頑固な父と衝突しなかつたか不思議に思つた。彼は無言で、しかし、容赦なく仕事を片附けた兄のことを思つた。……然し、彼は――彼の時代は、もはや、それは駄目だ。父と彼との間に橫たはつた溝は一年の間の時代が、それを避け難い裂目にして居たのだ。彼は顏をあげた。もぐらもちの道のやうな、じめじめした闇を步き出した。

巷路過程

細田源吉



…………

夏の勞苦はまた記憶から薄らがない。
溫氣は累進稅率的な昇り方をした。

頭から土埃をかぶつたF區の街通りといふ街通りは、陽の光までが、焦げついた粉のやうに赭々とむせつぽかつた。朝から道路の堀り返しをやる汗みづくの道路工夫は、油びたりの南京豆そつくりだつた。

おまけに街通りの眞中は、手摑みで人間を押し込んだやうな電車だ、焦々したトラホーム患者みたいに客を睨み廻る圓タクだ、あぶれたサーカスのやうな自暴的なトラックだ。土埃の落ちつく暇がなかつた。

さうかと思ふと、のぺつたらしのない長雨が街通りを襲つた。

バラックからバラックへ、足の踏み入れもならない深い泥濘だ。電車や圓タクやトラックが、跳ね飛ばした泥土を、更に跳ね飛ばすのだ。道路は人間にとつて歩く

場所ではなくなつてしまふ。

なにしろ下區は最大滿潮から二尺の土盛りにとりかゝつたのだ。場所によつては六七尺、ひどい低地は十尺からの土盛りなのだ。區劃整理をかねた工事で、大きな表通りの××町もその例に漏れず、家も人間も見る陰さへなくなり、その日暮しの小ぽけな雜貨店、呉服店、飲食店は、愈上つたりになつた。そこで界隈の人達は、近くの復興局第――出張所へ呶鳴り込みに出かけるのであつた。

照れば照るで、

「引つ越はした、家賃はべら棒に高いところへ、このひつくり返した道路と土埃と來てる……まるで商賣が止つちまつた。一體誰が喰はしてくれるんですかね……？」と、體あたり的にぶつかつて行つた。

降れば降るで、

「こりあ道路ですか、川ですか。これぢあ買物したくも客が寄りつけませんよ。氣の利いた客は電車でデパートへ出かけるにきまつてまさ。まあ、一寸見たらどうです？　せめて一軒に一づゝ舟をつくつて貸下げて下さいよ」

さういはずにゐられないほど、道路は二段も三段も低下し、雨水があふれ流れる。

ところが復興局の出張所では、降れば晴れる日のある確信を以て、平然と呶鳴り込みの人達を對手どつて行く……。

堰くに堰かれない生活の波が、街から街へと押し遣られる。その波の中の一滴が、泡になつて消え去らうとも、後から後からと續く流れは果しもないのだ。而も泡の出來がちな場所は、きまつて障碍の多い片隅なのである……。

呉服小賣商人の東尾山崎平兵衛は、たつた一人きりの小僧を指圖しながら、朝――五月の初めのことだ――狹い店の掃除を濟ませ、三尺四方の飾窓の、表に面したガラスの汚れを氣にして、突つかけ草履で表へと出てみた。

街は天氣續きで埃の始末がつかなかつたが、五月の大空の一部は、人間の心持を遙か遠方へ映つた。東尾は暢やかな臨氣を感じ、埃つぽい空氣ながら、二つ三つ深い呼吸をして胸を膨らませたりした。

ところがその間といふものは、ほんの二分ともなかつた。くりくりと丸つこい五十がらみの小さな軀を反し、彼は目と鼻の間の隣りの洋物店の軒をふり仰いだのであつた。軒へ梯子をかけたペンキ屋が、一度塗りつぶした看板の上に、肉太の文字をなすり立てゝゐるところだつた。

（隣りはまた店をせつちようしてる……）

なにか、かにか、人目を惹かうとつとめる洋物店にしても、さう〳〵弄り廻はしたところで、三間半間口は四間以上には見せられはしまい、と彼は嘲り顏で、すぐ自分の店の内へ戻つて了つた。

たつた一ト間の奥では彼の後妻が、亡くなつた先妻の男の子――十三になる金市と、一昨年彼女の生んだ男の子達に、朝餉を喰べさせてゐた。彼はその間に割り込み、新聞をとり上げたが、隣りの看板のことは話し出さなかつた。いづれ小店員の孝助が喋舌るだらう、それも前以つて想像するだけで彼は不快だつた。商賣根性からの嫉妬がこみ上げてゐたから……。

第一、前々から彼は隣りの看板が氣に喰はないのであつた。彼の軒に立てた看板は丈が低く細長かつたにしても、隣りのはそれよりも二尺は高過ぎるのであつた。看板を上げたのは彼の方が一ヶ月おくれたが、その時彼は隣りの看板と似合はしい高さのものにしたほどであつた。ところが、その半月も後には隣りは更にそれを上越す高さのものに掛け替へたのであつた。彼は啞然としながら、

（隣りの市田屋は飛んだ出過ぎた野郎だ……）

と、聲に出してつぶやかずにゐられなかつた。

小僧が彼の細君と代つて朝の膳に向ふ爲め、奥へ引つ込んで來るなり、云つた。

「旦那隣りぢあ看板を塗り替へましたよ。新流行第一、モダン柄と並んで書きましたよ。おかみさんも出て見てます」

「そんなもの見なくともいゝ」

さう彼は怒りを帶びた聲になつたが、モダン柄、柄、柄……とはなんだらう、好みぢあないか、と訝しがつた。

「洋品店なら、柄はをかしいな。隣りはものを知つてるさうだが、案外柄と書かせるのはをかしい、モダン好と――すれあい、ところだ」

彼も店へ出ると、表でペンキの看板をふり仰いでゐた細君の顔が、急に苦い表情となつた。彼が呼び込まうとするよりも早く、細君が店に引返し、

「メリンス專門店――と書かせましたよ。隣りぢあ、二三日なんかをかしいと思つてたら洋物を片づけ出して、もうメリンスを問屋から入れてるらしいですよ」

「そんな馬鹿をされて默つちあゐられない」

年若な細君の前で、平兵衞は苦りきつて焦々し出した。……「ほんとうか、メリンス專門店と書かせたか」

「出てごらんなさいよ」

「いやゝそんなら出てみるにあ及ばない」

彼はこつちから出かけて行くことは、掛引上つまらぬことだと考へたのだ。向うからなにか一言あるべきところだ、あ

まりに踏みつけ過ぎるといふものだ、もし挨拶に來たら、頭ごなしにきめつけて、斷然やめさせるまでだと、思ふのであつた。

隣りの店先きでは、そこの店の者が二三人して話聲を立ててゐた。

「安賣正直賣――新式販賣法……」

誰かそんなことを反覆してゐた。

隣りからは午過ぎまで挨拶に來る者がなかつた。通りがゝりの顔知りの人達が、東屋の店の方へ入つて來て、驚きの口顔で、

「こちらで承知なすつたんですか」などと煽動的にこつそりと焚きつけて行くものもあつた。

平兵衛は店に坐つてゐられなくなり、五六軒向うの氣の合つた版木屋の店へ出かけ、そこの主人とものゝ二三時間もぶつつゞけに喋舌り立てた。版木屋は賣薬店の金文字入りの看板を彫りながら、それでも手捌きはおくれさせず、一枚一枚、小さい弟子の方から廻して來るのに彫りを加へて行つたが、平兵衛は只昂奮しきつて隣りの市川屋を攻撃する一方だつた。

「もうこれで私も堪忍しちゐられない。前のことがあるのに、それも二度も私が許してやつてるのに、こんな眞似をするとは……」

その全身はおこりのやうに震へた。まつたく彼の立場からすれば、市川屋はあまりに非人間的な企てをやり過ぎるともいへるのであつた。

東屋平兵衛は明治三十三四年頃からこの××町通りに店を張つて來たもの堅い小賣商人だつた。二十六七年の餘も一つ町内で商ひをしつゞけて來た彼も、今度ばかりはどこからどう話をきり上げていゝのか、きりけようのない驚き入り

た……。

「メリンスですぜ、私の店の大事な商ひものですぜ……隣り合つて同商賣をやらうなんて、どうしてこの東屋が憎いのかね？　殺すやうなもんぢあないか、ねえ、榮さん！　町内で默つてますかね？　……こんな亂暴な眞似をされてさ！　これぢあ近所の誼みつてものもなんにもありあしない。時世が變つたかも知れないが、どうも極端だ。それもさ、一言の挨拶をしてお互ひわかり合つた上なら格別……」彼の憤りはどこまで行つても止まらなかつた。

版木屋は、事實急ぎの注文にせき立てられてゐた。それに、市田屋とも知り合ひの中であつてみれば、いかに東屋がそれ以上に古い馴染みの間にしろ、一寸口出しは困るのであつた。然し勿論版木屋は東屋の肩を持たずにはゐられなかつた。なぜなら、彼は東屋側に義理があつたからだ。

東屋と市田屋との間には震災以來の煩はしい經緯があつた。震災前まで市田屋は裏横町の方でしもたや住ひをしてゐた。どことかの會社に勤めてゐたさうだつたが、震災でその會社が潰れてしまひ、急に三十七で商賣を始める決心をした。丁度××町の表通りの、東屋の敷地が震災後半年も放つてあつたので、どこに東屋が避難してゐるかわからないといふ口實の下に、木造トタン葺平家一棟――建坪八坪七合五勺のものを急造し、その土地を無斷で占有したわけであつた。それと前後して、やつぱり震災前まで近所にゐた男が、その隣りの空地に木造トタン葺平家一棟――建坪で十三坪のものを建てたのであつた。

「東屋さんがどこかゝら借りてる土地ださうだが、こんな際で生命さへどうかわからないんだ――當分の間、又借りだ」などと、その二人は話し合つては地代の屆けどころもなく、いい氣持でゐたのであつた。結局東屋の借地はこの二人の闖入者によつて、都合二十四五坪は横取りされた形であつた。

東屋はなにも知らずに埼玉の小さな故郷の村で、久しぶりに年若な後妻と子供二人の呑氣な朝夕を送つてゐた。彼達は

震災直後に當分東京をだめだとあきらめて田舎へ落ちて行つたのであつた。聞くところによると、F區はこの際に全區土盛りをするといふ話なので、一層立ちおくれるものと豫想したのであつた。いふことには、小さな村で彼達がめづらしがられたといふわけであつた。二晝夜、地震の後に火災が起つて、數里に亙る炎々とした焔が、埼玉の村間近かに天を焦しつゞけた。恐怖に恐怖しながらその大火焔を眺め過した村の人々だつた。東京の人々がその時どこにどうして生きてゐたか、村の人々には想像も出來なかつた。さうして東屋の親子達は凱旋の勇者のやうに大事がられたといふわけであつた。

東屋は東京山ノ手の代々のもの持ちから土地を借りたまゝ、もう半年にもならうといふので、或る日上京して來たが、さて最初はどこが我家だつたか見當もつきかねるくらゐだつた。二三の知り人に出逢ひ、はじめて自分の店の後に二軒も小屋がけして商ひをやつてゐるといふことを知つた彼は、驚いて立ち廻つてみると、話の通り二軒のバラックが立つてゐた。

「あなたがどこにゐられるのかわからないので、仕方なしに建てたんですから……」

申合せをしておいた横取りの二人は、くり返して頭を低く出たのであつた。

殘つた地所は十坪に充たなかつた。

彼もほとほと困却して了つた。といつて震災前通りに彼も五十坪あまりの店舗を建てる資金は、とてもないのであつた。成行を見ると、彼も手が出せなかつた。そこでやむを得ず承諾をした。その後でもうバラックに入つてゐた版木屋をたづね、

「仕様もないから許してやつた」と云つた。

「そりや、證文をとつときなさい。市田屋の方はなかなかの人間らしいよ……」と、立退きの契約をすゝめたものであつた。

それもさうだと思ひ、東屋は又二人の人間を相手に第一の證文をやつと書かせることが出來た。それまでにはだいぶの手間を費した。

立退契約書

大正十五年八月三十一日迄に家屋をとり壊し土地を明渡し申べく候

大正十三年二月　日

市川仙太郎㊞

山崎平兵衛殿

この一札で東屋も安堵した。その上、有體に云へば、彼の店がゝりは三分の一にはなつたが、これ〳〵で割込んだ人間があるといふ口實で、

「どうもやむなく手狹な店になりまして」

と、どこへも吹聽して廻ることも出來たといふものであつた。

ところが、後の男の方は、その立退きの契約前に他所へ引越すことになり、その家屋は東屋へよりは市田屋の方へ――といふよりも東屋が聞きつけるより前に、市田屋の方が先に聞きつけ、二足三文で引きとることになつた。その話が決定した後で東屋が聞き込み、なんぼなんでも自分は地主代りの人間なんだから、一應自分の手を通してからでなくては市田屋へ賣らせぬ……といひ出した。

その癖、東屋は一文でも鞘をとらうと思つたからではなかつた。只、手續上、彼がさうする方が好ましくもあり、地主の手前、またさうしておく方が正しいからでもあつた。

立退き期限までの地代は、東屋に迷惑をかけた損料といふことで、八坪七合五勺に對し月々十一圓、それから後の十三坪に對し十七圓、〆めて二十八圓宛を東屋に支拂ふ約束になり、それ以後市田屋は月々それらの金を拂つて行つた。

そこまではどうにかかうにか表沙汰になる問題はなかつた。只、市田屋は五百圓で買ひとつた隣りの表構へを修繕し、三間半間口に擴張した。奥行は淺かつたが、見た眼には堂々とした店舗になり、問屋側でも力を入れる二三軒が出來たらしく見えた。

「商業學校とかを出た男ださうだよ。道理でむづかしく話をすると思つた…店の廣いのは無理になるから、いまにもて餘すだらう」

隣りの店に商品の充實した光景を眺めて、東屋はなにか平かならない氣持から、その夜細君にそんな風に多寡をくゝつて話したこともあつた。震災前には彼の店舗が片隅に土藏のある三間々口の手廣な構へで、店員も少い時で四人はゐた。それもたつた一年半前の光景だつた。逢ふ人毎に、まだ消え失せないその光景を話し出して、隣りの洋品店の手前、自分の落ち目になつた營業ぶりを飾らうとするのであつた。

なにしろ、彼は半年の餘も他人から立ちおくれ、問屋の信用をかなりに害ねて了つてゐた。

それこれの、東屋と市田屋との盛衰が、日に日に鮮明になるばかり、しかも市田屋は出來る限り外面を裝ふのに骨を折つてゐるのであつた。大きな高い市田屋の看板や、土足のまま店内を歩いて見られるやうな新様式の裝置が、殆どその隣りの東屋の存在を壓し盡して了つた。東屋は見るから小さく市田屋へよろめきかけてゐる風體だつた。

東屋がその有樣に無關心でゐられる筈はなかつた。彼れ平兵衛は、

「私が土地を貸してやつてるんだから、いつでも立ち退かしますよ。十五年の八月三十一日には是が非でも退いてもらひます…」と、觸れることを忘れなかつた。

ところが、その期限が近づくと、市田屋はある限りの慇懃さで、

「この通り、問屋にせがんでこれだけの店にしたんですから、もうどうぞ二年ばかり…その間にはどこか適當のところ

へ店をみつけて引越しますから、なアにその時はこの建物なぞ、どうせバラックの平家ですから差上げます……」と、要領をしに來たものであつた。

面と對つて、やり手の市田屋に下から出られた氣持は、東屋もわるからう筈がなかつた。

「證人といふのも變ですが、ともかく版木屋さんが近所のお方でいゝ人だから……」

と、そこで東屋は證人に版木屋を名ざしたのだつたが、どうしても市田屋が言を左右にして證人などとは水臭い、なにしても律氣な商人の仲だからといひ張つて、堅く今度こそと契約を改めたのであつた。

それから三年後の今日はどうだらうか。もう二人の間では三度目の改約がされ、三度目は市田屋も仕方なしに證人として版木屋を認めないわけにいかなかつた。

その三度目の期限も、もう剩すところ十ヶ月あるかなしかであつた。

だから、どつちから云つても東屋は唇を嚙み、眦を釣り上げずにゐられなかつた。

「こともあらうに、三度も立退きを延期させたんですぞ。その上に私と同業のメリンスを賣らうなぞとは、一體人間の考へることですか、ねえ榮さん、三度目には佛樣も怒るんですぞ！　私がいかに人が好いたつて、これを許せば四度目の難題を許すことになるんですぞ！　佛樣もこの眞似は出來ないんだ……」

東屋が憤るのを、版木屋の主人榮三も、ほとほともてあました。事實、その憤りに無理がなかつたから……。さうして最初、堅く立退くといふ約束があつてから、づるづるべつたりにもう足掛け六年にもなり、年號も昭和に改つてゐるのであつた。

「まつたく、どうも……とにかく私が一寸後で出かけませう」

もう仕方なしに、版木屋も承諾をした。

看板の塗替へをした夜、版木屋からの話で市田屋に出向いてもらひたいと云つてやつたところが、むしろなにはなくとも一口差上げたいからこちらへ失禮ながらお出かけ下さいといふ市田屋の申出であつた。尤も版木屋も東屋も、混み入つた相談などをやるやうな座敷がなかつた。市田屋はそれでも六疊の一間は、讓り受けではあつたが、そのまゝ座敷に空けてあるのであつた。

この機會に市田屋は叮嚀に二人を歡待することを忘れなかつた。場合によつたらもう一つ思ひ切つた企てが——メリンスばかりでなく吳服一切を扱ひたい企てが、彼の胸にあるからだつた。勿論、十ヶ月後に差し迫つてゐる立退きの契約も殆ど無期延期にさせてしまひたい肚があつたからだつた。さうでもしなかつたら、この商ひにかぢりついてはゐられない。現に問屋仲間の噂たといふには、隣りの東屋は殆ど對手にされず、もう半年か一年の後にぴたりと問屋との取引が停るだらうとさへ見られてゐるさうだつた。もし店を閉めるほど東屋の內證が苦しいものなら、なにもこれまでの自分の努力を放棄して立退かなくともいゝのだ。また商賣だつて、そつくりこつちが華客を貰つておいてもいゝのだ、と多寡をくくる氣持もあつた。而もこの肚の惡さを、惡いからと云つて誰が咎め得られるか——とさへも思つてゐるのであつた。

三十七よりは老けて見え、どこか强氣な容貌の市田屋は、そこで萬遍なく酒を促がしながら、東屋と版木屋の機嫌を迎へ、

「どうも洋物の方はとてもやりにくいもんですから……それに私の學生時代にいつしよだつた友達がモス問屋の西伊へ入りましたので、一つ店とチエンストアのやうな風に品物を動かしてやるからつて話で、丁度行き詰つてたのでまあ餘儀なく初めます……どうぞ私達親子もなれない商賣でだいぶこれまで苦しんで來ましたから、一つお力を添へて下さい。……現今はデパートつてものが力瘤を入れて、なんでもござれで賣るもんですから、小賣店はどうしてもそれに對抗する日になると、專門化されなきあ立ち行きませんよ。吳服店も、銘仙屋、メリンス屋と、それぞ〳〵專門化して、デパートより吳

色のあるものを賣る‥‥それがたつた一つの途です‥‥」

透かさずに市田屋は巧みな話しぶりで續けて行つた。その間に彼の細君が銚子を運んで來ては、一つ二つ隣りの子供——金市や赤ン坊の與吉のことで愛想をいふのであつた。

「成程‥‥」と東屋は市田屋の說くところをそのまゝ肯くのは厭であつた。といつて、市田屋の說をひつくり返すやうな考へが、彼にあらう筈がなかつた。成程‥‥といふ言葉が口元まで出てゐるのであつた。彼の兄が吳服店をやり、兄が三十前後に夫婦とも夭折したところから、やむなく彼が中年の吳服商人になつたわけであつた。尤も彼は父を失つてから多くの年月を兄の店で送つてゐたから、もと〳〵ずぶの素人ではなかつた。なにしろ二十何年もの年期を入れてゐる自分だ、學校は出てもずぶの素人の市田屋に、碌なことは出來る筈がない、と見縊つてみるのであつた。

「私の友達の話に——そいつがこないだこゝへ來ましてね」と、市田屋が云つた。「東屋さんと私の店をのぞいたんですが、なんでも澁谷とかに丁度こんな風に仲よく竝んだ店があつて、兩方とも吳服店をやつてるんださうで、それで却つてお客を引いていゝ商ひをしてるさうですから‥‥東屋さんは吳服とメリンス——私の店はメリンスぞつきで立つ。却つておもしろいから客を呼ぶだらうと思ひますよ。然し東屋さんが從前通りメリンスを賣られることはちつともかまひません。もしなんでしたら私のその友達が入つた西伊を御紹介しませうか、西伊のメリンスは今賣れ足がいいさうですから‥‥」

云はれても東屋はすぐ返事をしなかつた。誰の眼にも、むしろ東屋の方が變屈屋だと見られても仕方がなかつた。

「どつち途、小賣商は皆な行き詰りです。商品がストックになることが小賣にとつていけないんです。こいつはうまく囘轉率をよくして‥‥それから銀行の利用です、それには信用の能力が薄弱だから、組合とか聯合とか、いろんな形で、皆なして信用を高めなけりや駄目ですよ。三土藏相の中小商工業への融資ですね、あんな七面倒なものは私とこあたりぢあ利用出來ませんよ。高々、千圓から三千圓ばかしの資金融通に十人以上の連帶保證だとか、一ケ年の償還だとか、こん

なせちがらい時代に低利にしろ、利をとるのに、そんな手間暇を忍んでまで借り出せるもんですか。なんでも、最初の案を改善して普通銀行に割よくさせるさうですがね、どうしてなかなか普通銀行が貸出しに大膽になれるもんですか、なにしろこの震災後ですよ。民政黨が經濟界のパニックを起したといふ後ですよ。版木屋さんなんぞ、どうです？」

聞き惚れてゐた版木屋は、不意にさう聞かれて、すぐ跋を合はせることが出來なかつた。彼も中小商工業に融資するといふ政友會政府の案を、人傳に聞いてはゐたが、自分で碌に考へてみたこともないのであつた。考へたところで、彼の現在にすこしの利益關係を生じさうもないからだつた。只、その結論だけは、どうやら市田屋と出逢ふらしいところから、

「さうですよ。まつたくこんなしがない商賣してゐるものはなんだつてうまい廻り合はせなんかありませんさ……」

さて、云つて了つてそれでいゝのかどうか版木屋は盃をおいて市田屋を眺めた。

そこは如才のない市田屋であつた。版木屋の表情が自分を受け容れたと見ると、彼は融通の形式、一人の借入限度、融通利率、償還期限等々について、西伊の友達などの智識も借用して補ひながら、尚しばらく喋舌つてゐた。

東屋も版木屋も、その夜はとり立てゝ不服らしい不服も持ち出せなくなつた。結局、メリンス一點張りの、他店荒しはしないといふくらゐのことで、鳧がついてしまつた。

「デパートですよ、問題なのは……お互ひに小賣商人は結束しなけりやどうもならなくなりますよ。……三越なり松坂屋なりの商品切手が一體どのくらゐとお思ひです？　三越で七百何十萬圓、松坂屋で四百何十萬圓。松屋で貳百萬圓、その他のデパートでも五十萬以下ぢやありませんよ。千五六百萬圓つてものが、われわれ小賣人の客から吸ひられちまつてるんですぜ。その千五六百萬圓はお客から只借りしてるわけで、そいつを銀行に預けて、あべこべに利子をとつてるぢやありませんか。その利子だつて何十萬圓つてもんでせうね？　どうです……？　昭和二年、今年の上半期ですぜ。その無利子の預り金でふんだんに安い大量的な仕入れが出來るんですよ。ところが小賣商人と來たら十人以上の保證人連署でいくら借り

られます？　千圓――から三千圓。それで利子はお上みへとられるんです。小賣商人はどこまでうだつが上らないかわかりますね。どうしたつて小賣商人は兄弟のやうに結束することです。さもないと、いよ〳〵地べたの底へでも潛らけりやならなくなりますぜ。……ぶつかつて行くところはデパートです。商品切手を全廢させることが一番です……」

それから尙、東屋と阪木屋とは、すゝめられるまゝに盃をかさねてゐたが、さて改つては苦情もくど〳〵と云へず、氣を呑まれたやうな形になつた。

歸りに阪木屋は、事の〆めくゝりがつかないので、東屋の店へ立ち寄つたが、こゝでもいゝ考へはなかつた。なにしろメリンス一式でやるといふのであつてみれば、同一の商賣とはいひ條、多少考へ方を案配しなければならないからであつた。

「どうも市田屋のすることには腹の蟲がむかついていけない……」と、東屋はこぼすより仕方がなかつた。

後妻の細君は板張りの壁越しに耳を澄してゐたが、聞えるのは市田屋の聲だけで、とても心配だつた、と云ふのであつた。

煩はしい經綸を他所に、市田屋の大きな塗り立ての看板は、節句の色蒲鉾の生々しさで光彩を放つた。街がまるで黄疸みたいな埃深さだから一層人目に立つた。

擴張記念特價品大賣出し……の一時的な店前裝飾を廣告屋がとり急いだ。

二

つれ賣り出しはどうだ、と或る人々が東屋を煽つた。隣りでやるから、すこしの費用で相當客を引くだらうといふので

あつたが、東屋の主人は怯まなかつた。

擴張記念…の擴張の二字が、どうしても東屋の主人の腑に落ちないのであつた。改業記念…と書き直したらどんなものだ、と思ひ、外へ出てみたついでに、彼は市田屋をのぞいて、

「改業はよろしいでせう、開が使へず、改なら理窟も尤です」

「それもなか〳〵いゝ思ひつきです。なにかに使はせてもらひませう……」

と、その返事は愛想がよいのに、結局うやむやに終つて了つた。

賣り出しは三日に亙つて喧々しく樂隊を入れた。市田屋が耿々と輝かしく眩いのに、東屋は盲目のやうに薄暗かつた。それでも二三人とめづらしく客が立て混むことがあつた。

「いかゞです？……よろしいでせう。なアに世間は珍らし好きですから、共同的に商賣をしてるつてとこを見せると、却つて喰ひついて來るんです……私は、東屋さんの方にそのお品はございますつてお客さんにすゝめるんですよ。歸へりにお寄りした人もあつたやうで」

さういはれるのは東屋としては不快だつた。

「いえ、前からのお馴染です」

東屋は云つた。そんならお馴染が一足先きに隣のメリンスを買つてから東屋へ寄るのは心さみしいことであつた。

東屋へ來た客で、メリンスをみせてくれといふ客が、その後めつきり減つて來たことが主人にわかつた。

「これぢあ他の物も賣れなくなる」と、彼は首をふつた。

永い間日本橋堀留から來るメリンス問屋の店員が、隣りの店から出て、東屋の方へ入つて來た。すぐ東屋では不快な顔をした。

「お次にはこちらか……　どうもひどいな。ずぶの素人の店へいゝ柄のをおいて、うちへ二番ものは恐れ入るよ。……今日はやめとかう」

「旦那、だつて仕樣がないんですよ。西伊がばかに氣を入れてるから、私とこでもどうだつてんで、それでなにしろメリンス專門つてとこで、仕入れも大きくしますから……」

その答辯は苦しかつた。

「それぢあ、古い取引先よりも、澤山買やあ、新店の方な大事にするのかい?」

「どうも困りますよ、旦那。隣りで選つたのを一寸覗いてごらんなさい。隣り向きのもんばつかりです。どうしたつて主人の趣味ですよ。東屋は昔から東屋好みで通つてるんだから……」そこで問屋の若い店員は、鬱金木綿の袋をといてメリンスを山とひらいてみせた。

氣分がすこしも浮き立たないから東屋の主人は買ひ汚なく出て、今日の仕入れは三反くらゐしかしなかつた。あれこれと世間話しの中で、問屋の店員は、

「づぶの素人でも市田屋の旦那は頭がありますね。どうも頭がいゝや……」

最初の皮肉でどうにか東屋を見縊つた問屋の店員は、そろばんの上からも市田屋を重んじ、賣り掛けも多くするやうなことになつた。東屋の立場は、主人が鬱ぐだけ近づく者もむせつぽくなり遠々しくなつた。西伊が入つてゐるとなると堀留の問屋も競爭的に引きずられるから、荷物を曳つ張つて來ると、第一に市田屋の前につけるのであつた。

そこで東屋はメリンスが上つたりになり、足袋類のやうなものや白木綿などが賣れ、その上り高は目に見えて減り出した。ところが市田屋の主人は煙草を喫ひながら、三分五分と、東屋の店先きで如才なく世間話にかこつけ、店内の手薄くなつた有樣をぢろ〳〵と見廻しながら、

「メリンスか銘仙かつて時代でも、やつてみるとさう思つたやうな儲けはありませんな」と、底のわからないやうな話をつゞけるのだつた。「……メリンスの一ケ年の消費高は一億二千萬ヤールださうで、一人頭二ヤールにあたるわけですがね、私の店ぢあその儲けが一割缺けるんで、冗費です……」

「そんなことぢあないでせう？あんたンとこはそんなに勉強しますか」

と、東屋は正直に訊き出さうとした。

「いえ、まあ、私ンとこは諸式にかゝるんですね。どし／＼賣れゝば格別、さうでないと一考へしなけりあなりません」

市田屋は成心があつてそんな遠廻しなことを云つてるのであつた。彼は吳服物の一切をおいてみようと考へはじめてゐた。銘仙の智識を持たうと思つて、東屋へ來るたびにその方へ話を持つて行つた。

「お店は銘仙が出ませう？銘仙つていふと、秩父物は玉絲のせいで、どうも染付に惜しいところがありますね」

「この邊ぢあ、まあ女物が多いから足利ですよ。なにしろ足利は熱心でしてね」

然し伊勢崎に越す銘仙はないといふ話なぞで、市田屋はあれこれと話を向けるのであつた。問屋は小賣店を大事がらない。大阪に比べれば東京の問屋は市內の小賣店本位にやつてはゐるが、普通六十日の手形で支拂ふのと、それも支拂つたり支拂へなかつたりで——他方のデパートの三十日手形できれいに支拂ふのと比較したひには、誰れしも仕入高のかさむデパート第一つてことになるのは自然の成行だ、などといふ話にもなつた。

この點で現に苦しいのは東屋であつた。二十日が問屋の〆め日だから、仕入れはその後にする、さうすると、六十日の期限のものが、更にもう一ケ月先きへ、九十日分に延ばせる……それもすこし支拂ひさへよくすれば、二十日〆めとはいへ、二十日前の仕入分をも、二十日締めといふことして三月先きの拂ひにしてくれたものだつた。が、もうこゝしばらくは東屋の店はあつちこつちで警戒されて了つた。その證據は、好意的の二十日締めも利かず、品物も來ないのであつた。

因業になつたばかりに、内證をそのまゝ市田屋に知られるのは、東屋も苦痛であつた。

その間に、冬物の仕入時が近づいてゐた。

或る日、東屋の小僧が、隣りの市田屋の店に伊勢崎物がうんと積み上げられてゐる、と云つて主人に知らせ、急に父事が煩はしくなつた。東屋はなに氣ない風を裝つて、市田屋の圓椅子にかけてみたが、その通り、人の丈ほどにも積み上げられてゐた。

「どうなさるんです、市田屋さん。まさか銘仙までおくつもりぢあないでせうな」

「それがどうもこのせち辛い世の中です、問屋からすゝめられまして……」

「どこです？」

「山一の塚原です」

そこで東屋は二の句が出なくなつて了つた。塚原商店とは彼も永年の取引だつた。それが圓滑を缺いで時々彼も半日の手間暇をつぶして掛りの番頭といざこざしてゐる最中だつた。

「實は私も問屋の賣場を見て、この商賣はやめようかと思つて歸つて來たとこなんです」と、いつになく市田屋の主人は悄々とした表情をしてみせた。

（この狸が……）と、勿論東屋は胸でつぶやいた。

「もういけませんよ。東屋さんは永年の玄人だけによくやつてられます」

市田屋はどこまでも心憂いやうな口吻をみせ「……問屋でデパート第一のあけすけな取引を見て來ましたよ。私なんか新米は手を出すだけいけません。デパートと來たら二萬疋、三萬疋を一ぺんに仕入れるんで、柄は選りどり勝手、どん〳〵選りぬきますよ。しかも疋ですね、十二圓五十錢ですよ。そいつをデパートの賣場で見ると十七圓五十錢乃至十八圓

……私の店で仕入れるのが十七圓、賣りは十八圓五十錢から十九圓、デパートが四割乃至四割五分で賣つても、私の店で一割か一割二分そこ〳〵儲けて賣るのよりは、また一圓方デパートが安いわけになるんですよ。新米だから東屋さんにざつくばらんに打ちあけるんですがね。この違ひぢあ商賣は出來ません。デパートよりも一圓方高いんぢあお客が承知しませんもの……」

初めての經驗に目がさめたといふ口吻で、市田屋が話すと、東屋もそれ見たことかと思ひ、

「おやめなさい。呉服は無理ですよ、たしかに！」

「さうですとも……今度仕入れたゞけは試しに賣つてみて、賣りつくしたらきれいにあきらめます。つい塚原商店で畑てるもんですからね」

それは市田屋の本音ではなかつた。憐愍を喚つて、東屋を追ひ返したいと思つたからだ。彼は一割にしろ五分にしろ、ともかくあれこれを賣つて量で儲けるつもりだつた。それにしても、彼は今日塚原商店の土藏の中で見た、デパートの仕入ぶりには前途のない憂鬱に捉へられて了つたのであつた。その氣持だけには嘘僞りはなかつた。……

東屋の主人は、雲を摑むやうな焦り方で、そこを出ると、薄ら寒くなつた通りを、ガラス戸の入らない版木屋の店先きで、夕方まで話し込まずにゐられなかつた。

なんだつて、こんなに何も彼も調子が狂つて來るのか、東屋にはわからなくなつた。期日のある手形が目先き二つも彼の工面を促がしてゐるにも拘はらず、とてもその成算の立ちようのない最中だつた。そこへまた、塚原商店ともあるものが多年の取引を無視して、新店に力を入れるなんてことは。

（なァに、それは市田屋の上手な宣傳かも知れないぞ……。小賣の彼奴がどうして問屋で大事がられるものか。だから歸つて來て心がふさいでるんだ……）

ともあれ、最近の東屋の狀態では、いつそ思ひきつて店を畳んだ方がマシかも知れないのであつた。隣りから月々二十八圓の損料が來る。地主へ十六圓拂つても十二圓はのこる。それに背負ひ呉服をはじめようか……堅いお得意がまだ十二三軒はある。そこらを廻つても三百圓の賣上はあるだらう。五六十圓の儲けがあれば、家賃の入らないだけにどうやら口は過せるだらう……そんな考へが、明け暮れ彼の頭を支配するやうになつた。彼の後妻は賃仕事をするといひ出し、

「あなたがあんまり突つ張りがないからです……たからなにもかも隣りにとられてしまふんです」とすゝり泣くのであつた。

「誰が？おれがか……？そんなことない」

先妻ののこした男の子の金市の前で、夫婦は聲を荒げることが屢々になつた。

「それつてのが市田屋が商賣を奪つたからだ……おれに泣かずに市田屋へ行け、市田屋へ……」と小柄の彼に似ず、響きのある聲で云ひ放つた。

父親の前で小さくなつてゐた金市は、十三よりもむしろ十五といひたい身體で、親達を嗤ふのだつた。母親の袂を引つ張つて、

「他所で聞いて來たよ、ヒサシを貸してオモヤをとられるつてなんたい、かあちやん、そんなことはバカなことなのかい」

そのすぐ傍で、父親は堪らなくなり、金市の頰を平手で擲ぐつた。それでも金市は泣かなかつた。父親の顏をぢつと仰いだ。

「この野郎はこんなに圖々しくなりあがつた……おれを馬鹿にするか」

荒くれた父親はもう一度金市の頰を擲つた。

「なにするんですよ」

と、繼母が金市をかばつた。隅へ押しやられた金市は、それでも泣かなかつた。彼は白々と侘びしい家の内を見廻してゐた。

「早く與吉をおぶつて遊んでおいで！」繼母は自分の三つになる男の子を金市の背にくゝりつけ、白銅を一つ握らせようとしたが、金市に押し返へされた。

（變な子だよ、この頃ちつともお金を欲しがらない……）と、もうそんなことの二三度になる繼母は、訝しがるのであつた。

三

與吉を背負つた金市は、店へ廻り、小僧と話しながら、市田屋との境のところで、それとなく向うの様子を見てゐると市田屋の一人息子の十二になる德太郎が、帳場の前で後向きになつてゐた。もどかしくなつた金市が、誘ひをかけるやうに背中の與吉をわざと搖り上げて、

「よし、よし、待つてろ、待つてろ」

と、德太郎に聞えるやうに繰り返した。

「東屋さんぢあ小僧がゐるのにねえ」

さう市田屋の細君がつぶやくのが金市にも聞えた。

德太郎がふり向いて見た。待つてゐた金市は、鋭い眼で自分の方へ引きつけて、出て來い、といふ風をみせた。

そつと德太郎が立ち上つた。

「お前、もう遊びに出ちやいけないよ。もうお夕飯です」

德太郎は母親の一ト睨みよりも金市のそれを怖れ、

「うん、表にゐるんだい」と云つて、金市の傍へ來た。德太郎の母親もさうだつたが、德太郎自身も商人の子らしくなくどこかの勤人の子供くさかつた。

「今日の分をまだ寄越さないぢやないか」

「……貰へないんだもの」

「嘘いへ……ぢや、本でもなんでもいゝよ」金市は地べたへ引きずりおろすやうな云ひ方をした。それからすこし持つてるだろ？」

「すこしならある」

德太郎はさゝやくと、家の人達に氣取られないやうに奥へ飛んで入つて行つたが、やがて一冊の雜誌と、六錢の金を金市にそつと手渡した。

それで丁度今日の五十錢分になる德太郎の見つもりだつた。

「德ちやん、こつちへおいでよ。僕ンちの方へ！……」と、金市はおびき寄せておいて、

「云ふと殺すよ。いゝかい。僕だつて德ちやんを殺して死ぬから、……」

手早く彼は雜誌を飾窓の下へ投げ入れたが、そこには前々から本だの雜誌だの手帳だのが隠してあつた。どれも德太郎から人知れず卷き上げた品物だつた。

六錢の小錢を、金市は掌で握りしめてゐたが、胸算用でもうこないだから、〆めて八圓ばかり德太郎から取り上げてゐることを知つた。さうすると、もう十圓には四日かゝる。彼は毎日五十錢づゝ搾りとつてゐたのだ。

なぜといつて金市は、虎の子のやうに大事がつてゐたガラスのインキ壺を、德太郎に突き當たられて學校の廊下に粉微塵にされたのだつた。金市は、

「おい、十圓なら許してやる。そいだけ出さなけりあ先生とおぢさんに言つてやる。このインキ壺は、うちのお父さんが大事にしてるんだ。もし知れたら僕は家を追ひ出される」

德太郎は金市の威嚇的な眼差に脅かされて了つた。なにかといふと金市が學校だのその歸りだのに彼を覘つて來るのが可怕いからだつた。小遣のない時の德太郎は、奥に入つて本を讀む振りをし、一日おど〳〵と脊縮めてゐるのだつた。それでもまだ德太郎の周圍が審しがるところまで來てゐなかつた。

「殺す……」

その一言で、どこかわからない所へ連れられて行かれ、刺し殺された子供の事件が、德太郎を事實あり得べきことのやうに恐怖させるのであつた。そこが金市のつけ目だつた。

(うちの者を虐めやがるんだもの……市田屋は狡いんだ、こつちへとつてやつて丁度いゝんだ……)と、十三の金市はこの數年見聞きしてゐた市田屋との經緯で、肚が据えかねるといふ氣持であつた。

(うちの父さんもまづいんだ。だから甘いつて近所の若衆が云つてた……)

四

不意に山ノ手に住んでゐる地主の伊藤氏から東屋へ使ひが來た。そこで主人の平兵衛がとるものもとりあへず訪ねてみると、文部省の課長をしてゐる當主は、

「突然、市田仙太郎つて人が訪ねて來て、急な話だがこれまで山崎平兵衛さんに貸しとられた地所を私の方へ讓つてもらひたい、そんなことを持ち出されたわけだが……山崎さんとは先代からの關係で、山崎さん自身からお話のない限りは如何とも出來ない、さう云つて歸へしましたが、一體どうしたわけです？」

と、四十になるかならない伊藤氏が審かしく平兵衛に訊き糺すのであつた。

「とんでもないことで……。私は一度も市川さんにそんなこと話したこともありません。どうも恐しい人だ」と、平兵衛はかい摘んで、震災直後にいきなり無斷で彼の借地に市田がバラックを建てた事情を話した。立退く約束を二度して二度とも立ち退かずに、今は三度目の期限が差し迫つてゐるにも拘はらず、

「こちらへ直接そんなことを云つて來るなどとは、一體どこまで底の深い狡い人間でせう……」そこで彼は、只驚くばかりだつた。

「あなたは商賣をやめるさうだが……？」

「へえ、私が、……？　誰が申しました？」

「その市田屋さんて人が……」

「へえ、まだ自分でもどうしようか見當がついてゐない話でございます。どうもつまらぬことを宣傳して歩く人です」

東屋はむしろ怖ろしさを感じるほどだつた。これから次々と自分の意想外の事が擡上つて來さうで暗い不安を感じた。

彼はあたふたと歸つて來て、いきなり市田屋の店先へ入つて行つた。

「一寸、話がしたいんで……どうも困るぢありませんか」と、東屋は帳場で急がしさうにしてゐる市田屋の主人へ、顫へ聲で呼びかけた。

「まあ、おかけなさい」

「市田さんも實に底の知れない人だ。私みたいに左り前になつた人間をどこまで苦しめるつもりですか」

そこで地主の伊藤氏から呼び出された話をしたが、市田屋は顏色も崩さず、

「それは伊藤さんの釋り違ひです。……どこかに伊藤さんの地所が空いてたら、といふ前置きで地所のことをいろ〳〵話したんですよ」

心で市田屋はまさか伊藤氏ともある人が、そんな風に東屋へ煽動的に話さうとは思はなかつたのであつた。立派な人といふものは、必要以外に他人をけしかけるものではないと彼は思ひ違ひをしてゐたのだ。そこで、彼の方が自分の必要外に出ようとしないで、東屋を宥めるのに骨を折つた。

東屋は愈々嘆息して了つた。後妻の前でも、唯一の味方の版木屋の前でも、

「かうケチがついちまつちあもういけない。小賣商が結束しなけりあ、なんて囈言にも程がある。今度立退きの明日が來たら證文にものを云はせてやるんだ」

あれもこれも、一時に行き詰めて了つた。今日か明日にも店閉めが差迫つてゐるのは事實であつた。市田屋が地主に話した通りに、自分が事實で裏書きするのは辛いことであつた。そのやりきれなさの上に、まだ後からなにが起つて來るか……？ 彼は毛髪の薄くなつた頭を、すこし右に傾けたまゝ、ぢつと動かなかつた。

五

この年を無理でも越さうと、東屋は寧日なしに金策の途を辿つて行つては、死力を出したのであつた。それにも拘はらず、一つの約束手形の爲めに、十一月の末を以つて、一トまづ店の戸を閉めることを餘儀なくされた。

「東屋さんは堅過ぎるくらゐでしたよ。あなたのやうな店をつぶさせたのは丸藤一軒のためですよ。約手なんかこの際めつたに出せなかつたんですよ‥‥」

と、東屋の閉めた上り端で、市内廻りに出た一人の番頭が立ち寄つての話だつた。「隣の市田屋さんをごらんなさい。表向きは派手で品物が動いてるやうですが、あれでとてもこの節は苦しいさうですぜ。ですがね、東屋さん、市田屋さんと來たら、うつかり手形を出しませんや。あの主人はどうして素人なもんですか。初めのうちです、〆後六十日勘定できれいに拂ひく〜したのは‥‥。五千圓、六千圓つて、累み出したんで、手強く催促すると、その内金だつていつて、千圓、五百圓と渡してくれる。‥‥さうしてどうです！後ですぐ品物を入れてくれ、入れてくれですぜ。それだつて後が殘つてるから問屋としちあ見限れやしませんでさ。そこでまた新しく七百圓、千圓つて品物を入れさせられちまふつてわけなんです‥‥」

「そいでもう信用がなくなつたのかい」

「どうして‥‥矢張り他かでも持ち込んでるから。もうすこし、もうすこしで、まだどこも手許を締めやしませんよ。そのコツですね。なにしろ東屋さんは、昔の鷹揚だつた時分の取引を頭においてるから終ひにこんなどたん場まで來ちまつたんですよ。震災から六年目になる昭和二年ですぜ、震災當時のやうな現實が崩れて、この節は實は問屋だつて四苦八苦でさ‥‥。とにかく東屋さんも時世におくれたわけだが、またあなたの思ひつきの背負ひ呉服もいゝことがあるでせう‥‥」

「まあ、古いお得意樣だけはね。‥‥時に市田屋は今どのくらゐ問屋にあるかね」

「さうですねえ‥‥皆なぢあ三萬はありますぜ、屹度‥‥。素人であすこまでやれるんだからえらいですがね、もうぢきいけませんよ。見てごらんなさい、私は問屋の番頭でいふのも訝しい話ですが、小賣店をつぶすのは問屋ですよ。甲か

乙か、どつか一つ二つの問屋の手が可怕いんです……上つた、と見ると容赦しませんよ」

その番頭のいふ通りに東屋は裏から裏へぬけて行く方法に大膽でなかつたばかりに、年の暮れに迫つて、どの朝も早く背丈の低いくりくとした身體に、多かれ少なかれ荷物を背負つて、閉めた表からは出ずに、狹い裏口から出て行くのであつた。彼の最後の帳合は、まだ全部決りがついてゐないのであつた。取引先だつた問屋の中で、神山商店の主人だけが、どういふものか彼を最後まで搾り上げないでおくのだつた。

「神山がこんなに親切だとは思はなかつた。あんな人にはきつと後生がいゝんだ……」

と、東屋は手を合はせてもまだ足りない氣持でさう呟きくした。丁度、隣りの市田屋を首切人のやうに憤るのと反對であつた。

彼の店からは小僧も居なくなり、後妻は子供の與吉を金市に背負はせて、賃仕事を引き受けてゐたが、前から店に來る客で彼女に仕立てゝもつた幾人かが、反物を廻して來るのであつた。

或る日、外から荷を背負つて歸つて來た主人は、座るのももどかしがるやうに、

「どうだ、今日ね、神山さんへ一寸御寄りしたら、訴訟してどうしても市田屋を追ひ立てゝしまへつて、いはれるんだ。これまでの積る話をしたもんだから……そこで今度こそ裁判の費用がどんなにかゝつたつてやつてやるぞ、神山さんが費用を立替へて下さるつていふんだ……」

その期限の前後を待ち構へて東屋は隣りへ出かけて行つた。年末と年始の賣出しで、市田屋にはどこかの問屋から手傳ひさへ來てゐるやうだつた。

「どうか今度は退いて下さいよ。私は身代限りした時に、この借地權まで押へられてるんだから」しかしそれは東屋の聲であつた。「もうすつてんてんで、私にア借地權きり殘つてゐないんですよ。今度はあなたを訴へても退いてもらひます。

ようございますね？」と、彼は腹に呼吸を入れて云ひ渡した。

「さうですか、なにしろ年末年始の際で、また改めて私が出ます」

「いや、年末は仕方がありませんよ。あなたとこの十二月三十一日迄お約束してあるんだから‥‥然し年始は困ります。なんてつたつて困ります」

堅く云ひおいた東屋を裏切つて、年が改つてからも立ち退く氣勢さへ市田屋には見えなかつた。東屋は版木屋へも出かけ、神山へも日參するやうに足を運んだ。

「費用は出して上げますよ。心配なしにおやんなさい。‥‥只ね、これは形ばかりに、一札證文を入れといて下さい。なにも、一寸した形でいゝんだから。裁判へ出たら屹度あなたが勝つにきまつてゐる。勝つたらその費用をそつくり返してさへもらへれば‥‥」

「いえ、もうその點は間違ひません。私も勝ちます。なんであの借地權まで市田屋の奴にとり上げられるもんですか。人間はわかりませんよ。市田屋は最初兄弟のやうに小賣店は結び合はなくつちや駄目だなんて、云つてたもんです」

東屋は目の前の神山を崇めるやうな氣持で、市田屋をこつぴどくこき下すのであつた。

六十に近く、息子の多い神山は、默つて苦い顔をしてゐたが、彼も東屋にとつては、いつか市田屋同樣に呪はれるだらうと、その豫想があるからであつた。次男に店を持たせたい彼は、一心當りの賣家や賣地借地を探してゐる最中だつた。赭面の、一代で資産を築き上げた彼は、その東屋の人情落しをとり合つてはゐなかつた。

立退きの期限が切れてまる一ヶ月すると、東屋は長年顔見知りの辯護士を訪ね、足掛七年目へ入つた今日までの證據物件をもとり出した。そこで家屋收去竝ニ土地明渡シ請求ノ訴といふ訴狀が認められることになつた。訴訟見込費用として東屋は神山から借りた金で心配なく三十圓を拂つた。その他、印紙代まで一つ殘さず拂つた。そこで訴狀が、やがて東屋の前に、嚴めしい存在を見せた。彼は力強く胸を張らずにゐられなかつた。

訴　狀

東京市‥‥區××町六十七番地
原　告　山崎平兵衛

東京市‥‥區××町百二番地
右訴訟代理人
辯護士　田中慶次郎

東京市‥‥區××町六十番地
被　告　市田仙太郎

家屋收去竝ニ土地明渡請求ノ訴

請求ノ目的

一、一定ノ申立記載ノ通リ

此訴訟物ノ價額金貳千參百圓也

一定ノ申立

一、被告ハ訴外伊藤弘ニ對シ、被告ノ所有ニ係ル東京市‥‥區××町六十番地所在木造トタン葺平家一棟建坪八坪七合五勺此敷地十坪竝に木造トタン葺平家一棟建坪十三坪此敷地十三坪ヲ收去シテ其敷地二十三坪ヲ明渡シ且原告ニ對シ

昭和二年十二月一日ヨリ本件判決執行濟ニ至ル迄一ケ月二十八圓也ノ割合ニ依ル金圓ヲ支拂フベシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ御判決竝ニ保證ヲ條件トスル假執行ノ御宣言アランコトヲ求ム

……………

その後に「請求ノ原因」として、原告が再三再四、温情を以つて立退きを猶豫して來た、その被告の不履行的事實を指摘し、證據方法は口頭辯論の際に提出すること、訴訟代理委任狀一通――といふことも附記してあつた。

その二月十七日から愈々市田屋と相爭ふことになつた。訴狀が東京地方裁判所宛に出されたといふことが、市田屋の内部にも知れると、僅かな隔てをおいた双方の廂間が急に冷酷な空氣を流しはじめた。二つの家族が、面と對ひ合つても挨拶一つ交はさなくなり、どつちからも明かに各々を非難し合ふ汚い言葉が洩れて來た。

「人間の皮をかぶつた山犬だ……」と、東屋が夜食の時に喚くことがあつた。

「常識で解決のつく問題を公に持ち出すなんて非常識な人間ほど恐しいものはない」と、市田屋の主人が、どこかそこらの人に向つて、聞えよがしに喚くこともあつた。

一軒の間で、そつと逢つてゐるのは、東屋の子供の金市と、市田屋の一人息子の德太郎の二人だけであつた。といふよりも、むしろ金市が俛迯避けたがる德太郎を、陰に廻つては脅かしつゞけ、强ひて引つ張り出すのであつた。その機會を金市は學校の行き歸りに偸むのであつた。金市は拔け目なく考へた。始終德太郎を搾らうとしないで、時には彼から、公園へ德太郎を誘つて、そつと洋食の一皿くらゐを喰べさせることも忘れなかつた。

それといふのも、訴訟が始まつてからの東屋の家の中には、いつも相應に金があつて、いつもこぼしきつてゐた繼母が、こぼさなくなつたばかりか、時には活動を見ておいで、と一圓紙幣をくれることがあつた。だから金市は訴訟が長く續けばいゝと希ひさへした。

さうはいつても、金市はすぐに金が欲しくなり、その度に徳太郎の肩にぶら下りながら、

「持つといでつたら！　今夜裏の木戸の下ンとこへ五十錢おいとかないときかないよ。洋食喰つた金は僕が盗んだ金だから、君にだつてその半分はかゝるんだ。警察へ引つぱられる時は君もいつしよだぜ…。だから誰にも云つちや駄目だよ」

夜の飯を喰つてしまふと、金市はそつと裏木戸のところへ行つて蹲まり、いつもの場所へ手を伸ばすのだつた…。

七

東屋も市田屋も、双方の辯護士に任かせてその一年は爭ひの中に睨み合つて暮した。東屋は、賣れない日は重い呉服の重量で、老人くさく深い吐息をついた。市田屋の方は、どの日も早くから店をあけ、照る日は土埃で、降る日は深い泥土で、悩まされながら、小賣りの思はしくないことを喞つことが多くなつた。

彼は近所の小賣商人と語り合つて、復興局の第一出張所へ嘆願をしに出かけたりした。

「いつになつたらこんなひどい土埃や泥がなくなるんですか。…私どもは一日つていふ日がなか〳〵以つて大切でして、その日賣れなければ御飯がいたゞけないんです。官吏さんは降つても照つてもおかまひなしだから、どうも小賣人にお同情を持つて下さらぬ……」

その時の先導は市田屋であつた。その勞をねぎらふつもりから、近所の人達は口を合はせて、

「あなたを追ひ立てるなんて、あれは店仕舞をした東屋さんが嫉妬けて〳〵ならないからですよ」など、追従をするのであつた。

東屋では、訴訟に事をよせて神山から金を借りて來ては、その月の生活費の足りない分を補ふこともあつて、

「勝つたらどのくらゐとれるんです」と、後妻も氣を病まずにはゐられなかつた。

「勝つたら？……費用全部向ふ持ちだ。市田屋が神山さんへ返却してくれるやうなものさ。その上に訴訟後から溜つてる地代がとれるよ。そいから借地が他へ貸せるし……」

その東屋の期待は外れなかつた。訴狀を出してから十五ケ月目の、昭和四年五月の二十二日になつて、代理辯護士の訪問が彼を驚喜させた。

その日に判決があつて、その言渡しを代理辯護士が聞きとつて歸つて來たのであつた。彼は豫期通り勝訴した……。

判決書の主文——のあらましを、代理辯護士が暗じて、かう喋舌りつゞけた。

主　文

被告ハ訴外伊藤　弘ニ對シ東京市、、區××町六十番地所在ノ宅地二十三坪ヲ其地上ニ存スル木造トタン葺平家一棟建坪十三坪及ビ木造トタン葺平家一棟建坪八坪七合五勺ヲ各收去シテ明渡シ且原告ニ對シ昭和二年十二月一日ヨリ右明渡濟ニ至ル迄一ケ月金二十八圓也ノ割合ニ依ル金圓ヲ支拂フベシ

訴訟費ハ被告ノ負擔トス

此判決ハ原告ニ於テ執行前保證トシテ金八百圓又ハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得……

その後に「事實」としてこれまでの經緯が、「理由」として原被告双方の理非理を糺してあるといふことであつた。

「いづれ書記の方から判決原本の寫しがとれますから」と、つけ足して東屋を有頂天にさせた。

まつたくこの時ばかりは、——丁度夜になつてゐたが、東屋はそこら中を叩き廻りたい衝動を感じた。叩きながら、嚴正な法といふものに隨喜の歡聲をふり絞りたかつた。……殊に隣の側の板壁を叩いて、天の恐ろしいことが叫びたかつた。

「こゝへ來い。金市も與吉も……お父さんはお前達にこれまでひどい不自由をさせたが、今日からもうそんな目に遭はせ

ないぞ。天を粗末にしちあならない。いゝ人間はきつといゝといふのが天だ。……おまつ、なんか子供に御馳走をしてやつてくれ！　二人とも可哀さうな奴だよ、さう云つて喋舌り立てゝゐる間に、彼は眼頭が潤んで來て、子供達や後妻の顏が見えなくなり、拭いても拭いても涙があふれ出て來た。「どうしたんだ！　こんな日におれはとても悲しくなつた……急に昔のことまで思ひ出されて來るなんて、どうしたんだ？」

自分でその心持が彼にわからなかつた。この土地に彼の父母達が呉服店を始めて開業した時分のことが……。それ迄は母が背負ひ呉服をし、父が呉服屋の大番頭をしてゐたのであつた。いゝ加減の時に父は主人から相應の資本をもらひ獨立したのであつた。それが明治三十年代のことだつた。間もなく父も母も死んで了ひ、五六年後には兄夫婦も死んだ。……

「おまつ！　佛さまへお線香をあげてくれ。東屋は身代限りしたが、土地まで失くなさないで濟みましたと。以前から借りた土地でも、かう何十年と借りてれば自分のものも同樣さ。……地主さんだつてこないだ私を疎略に扱やアしなかつたよ」

もう夜も八時過ぎだつたが、東屋の主人は近所の版木屋へ驅けつけ、すぐその足で神山のところへ報らせに出向いた。

「その八百圓を融通しませう、供託して押へとかなきあいけないから……」と、その神山の申出は、東屋の主人を唸らせて了つた。

「旦那、私は拜みます……！　こんなお力添へして頂けるなんて、私も冥加に盡きます」

兩手をあてゝ東屋の主人は眼を拭ひ〳〵しなければならなかつた。その場で、一札の證文と引き換へに彼は神山から八百圓の小切手を受け取つて歸つた。

「おまつ！　今夜はおれは眠らずにこの八百圓を守るからな！　佛壇へあげてくれ！……久しぶりで八百圓つて金高を拔ふんだ。……勝つたお蔭だ。あの田中辯護士も代理辯護士の谷つて人も、辯護は上手と見えるな」

事實、その夜は、眠りたいと思つてさへ彼は眠れなかつた。

この事件の判決後、供託金が代理辯護士の手を經て既定の手續が踏まれてから間もなく、被告の市田屋から控訴されたといふことがわかつた。

「まだそんな手間をとらせようつて肚か！　よく〳〵往生のわるい奴だ」

と、東屋は、人の顏さへ見かけるとその一言を持ち出した。彼は勝訴したのだ。市田屋は法の命ずる通りでなければならない、と思つてゐるのであつた。

「これは長引かせて嫌がらせる術です」と辯護士も云ふのであつた。

勝訴が東屋を甦生させたやうに見えた。朝から彼は調子づいて吳服を背負つて出た。彼の荷物は、背負ひ吳服專門に品物を貸してくれる問屋があるのであつた。賣れても賣れなくつても、當座といふもの彼の家の生計は、借りた神山の金で支拂が出來るからだつた。今年に入つて、初めて彼は一陽來復したやうな、明い上機嫌の毎日が續いた。

ところが、その或る一日、彼の歸りを待ちかねてゐた市田屋から、

「御主人に一寸お出でを願ひます。學校の若い先生が見えて、どうしてもお目にかゝらないと煩いことに相成りますから……」といふ使ひが來たのであつた。

「市田屋はあの術で威かしやがるんだ」

すぐには東屋も出かけなかつた。その内に再三迎ひが來た。彼はやむなく市田屋の表口へ廻つてみると、小學校の先生が確に市田屋と對ひ合つてゐた。

彼は招じられて無愛想らしく座敷に通つたのであつたが、意外な事件が彼の耳を疑ぐらせた。

「金市さんは非常なことをなすつてられるんです。……こんなことは稀なことで」と、小學校の先生が、事件をほぐし出

した。

——金市がひどい不良少年になつて、もう一年半といふ間、市田屋の德太郎を殺す、殺す、といつて脅嚇して、初めからでは六十圓餘りの金錢を卷き上げてゐるといふのであつた。

「どうも德太郎が月々沈んだ子になるんで、お醫者さんにも診てもらつたのですが、どこも惡くないさうで……。その筈でございますね。刄物を見せて毎日五十錢づゝ奪つてたさうですもの……德太郎も五十錢がないと品物で渡したさうで、その在り場所も申してゐます」と、市田屋の女房が口を添へた。

はた、と東屋は當惑して了つた。彼が否定する爲めにはその在り場所を檢めさせるよりなかつた。そこで小學校の先生や市田屋も一緒になつて、もう今は閉めきつて、ガラスも外してしまつた東屋の飾窓の眞下が覗かれることになつた。

不意に、そんなことのあらうと思つてゐなかつた金市の不用意さが、そこに前々から彼の罪業を積み上げておいたのだつた。

父親として東屋は二の句が出なかつた。

「これを警察へ訴へる前に、まづ學校の先生にお話しして、その上でと思ひましてね」

こちらでは訴へる前にこれ〳〵の態度で愼重に考へてゐると、市田屋側ではいひたさ一杯であつた。

この不意に擡ち上つた事件が東屋をひどく悄げさせて了つた。金市に對する彼の見方は、冷酷になつた。金市を見さへすると彼は猛り狂ふやうなものゝ云ひ方をした。

「止して下さい。近所では私が繼母だから不良にしたと噂してるんですから……叱つたつて惡るくするだけですよ」

「おれはいゝ恥を搔かされた。あんな若い教員の前で頭を下げた……。みんな金の奴のお蔭だ。するに事を缺いて、金をとるとは……」と東屋は、二三日前から頭を上げ得ない程に沈みきつて了つた。

其寢てゐる枕許で、彼は市田屋側から突然調停の申立がされたといふことを知つた。區裁判所の△町出張所へ宛て、……。申立人は市田仙太郎と代理辯護士、被申立人は東屋と地主の伊藤弘といふことであつた。辯護士が、その書類を見せた……。

家屋買取請求ノ調停申立事件

申立ノ趣旨

一、被申立人伊藤弘ハ申立人市田仙太郎ヨリ、、、區××町六十番地所在木造トタン葺平家二棟二十三坪ヲ金五千圓ニテ買取ルベシ

一、被申立人山崎平兵衛ハ申立人市田仙太郎ニ對シ明渡シ訴訟ヲ中止シ伊藤弘ニ買取リ方ヲ懇請シソノ御調停アランコトヲ求ム

申立ノ原因

一、申立人市田仙太郎ハ被申立人山崎平兵衛ガ被申立人伊藤弘ヨリ賃借セル前記土地ノ上ニ前記家屋ヲ所有セシ爲メ之ヲ買受ケタリ

一、然ルニ右買受所在地ヲ申立人市田仙太郎ニ賃借スルヤ否ヤニ付、地主伊藤弘ガ考ヘ中（再三交渉ノ結果）右山崎平兵衛ハ伊藤弘ニ代位シテ申立人市田仙太郎ハ家屋ヲ收去シ土地明渡スベシトノ訴ヲ提起シ（東京地方裁判所昭和三年(ヤ)第八二二號事件）タリ

一、而シテ申立人織田留三郎ハ右家屋ヲ賣渡シ擔保トシ金貳千圓也ヲ市田仙太郎ニ貸與シアリ、依テ市田仙太郎ニ對シ債權ヲ有スル利害關係人タリ

一、右調停ヲ求ムル次第ニ在リ

辯護士　川本岳太郎
代理辯護士　原子之吉

東京區裁判所△町出張所御中

一ト通り目を通した東屋は、

「どうも地主の伊藤さん――文部省の××課長の伊藤さんをそんなとこへ呼び出させるなんてことは、私として出來る譯合ではありません……こゝを市田屋がツケ目にしてゐるんです」

彼は枕から頭をもたげながら、その視線は、まるで顚倒されて了つた市田屋と自分との勝負を、更に確めつきとめようと焦せるやうに、鋭く辯護士を睨んでゐた。

「これは市田屋がいけない。借地借家調停法第三條で、所謂不當の目的を以て濫りに調停の申立を爲したるもの……に該當しますよ。第一、市田屋なる申立人に對して、その家屋を買取るとか、そんな協力の義務もありません。判決が認定してることです。こんなことに調停の餘地はないんです。今日から判斷すれば震災のごた〳〵當時、火事どろ的に六十番地の土地を市田屋が占有したのは、永久的の野望からたといへるし……土地明渡の契約を反古にしたこと、何度ですか、この調停申立書に上げてある織田留三郎とは何人です。今更あの家屋が貳千圓で……擔保に入つてゐるとは、どうも言語同斷ですよ。突拍子もなく不意に負訴になつた今頃、そんな人物を持ち出す市田屋の肚は、見え透いてるぢあないですか。……あの家屋はどんなに高く見積つたつて六百圓の値打のもんぢあない。それに貳千圓も貸した、なんて馬鹿らしさもひどいですよ。早速、市田屋の家屋の保存登記とか權利移轉とかの關係がどうなつてゐるか調べてみて、私が今云つたことを、答辯書として差出しませう……」

「それにです、なんか申立人の市田が、地主伊藤さんと土地關係で交渉中、私が訴訟を起したやうな口吻があるやうです

が、實はこないだ訴訟前に市田が伊藤さんを訊ねて行つたもんですよ……」

と、東屋の主人は自分の側に理窟の強いことを證據立てる爲めに、市田の虚構的な言動を話さずにゐられなかつた。

「どうも、急に又織田とかなんとかいふ人間を持ち出して來たり……どうも煩いことで」

その夜市田屋が不意に東屋を訊ねて來た。

「もうそのまゝで、どうぞ……。いけないさうでお案じしてたのですが、御無沙汰しました。どうです東屋さん、この問題を二人であつさり片づけたいもんですが…私としては御承知のやうになにも事を構へたくないんです。こないだの金市さんの金錢問題の場合でも、表沙汰にしない私の心はおわかりでせうが……？」

その金市の問題へ問題へと、市田屋の話頭が向きがちなところから、東屋は身を切り虐なまれるやうに苦痛だつた。

「金市を訴へなさるなら訴へて下さい。あれの心持もこないだから親として考へてみましたよ。親が失敗したのはどういふ事情ですか、あなたが所もあらうにすぐ隣り合ひで同商賣をやんなすつたからです。子供心にお家を恨みもしませう。私は頭が病めて〳〵たまらないで寢てゐますが、訴へれば出るところへ出て、今日までのあなたの所業をみんな述べ立てませう……家内が繼母だからつてあれまでがに苦にしてます。一家をとり殺すおつもりですか。裁判所で勝つたんですから警察でも勝ちますよ」

「まあ東屋さん、さう昂奮なさらないで下さい。それはもうさうなさりたければ、私も斷行しますが……ものつてものは勝つばかりが勝でもないですよ」市田屋は濃い茶のお召の羽織を着て、どこから見ても立派さうな風丰を見せてゐた。彼はねち〳〵と、二時間もそこで話しつゞけた。終ひに、東屋は眼をとぢて、墮ちるならどこまででも墮ちていゝとさへ考へて了つた。

…………………………………………………

街通りは依然として晴れの日にも雨の日にも通行の人々を苦しめ、その日暮しの小稼ぎをする商人を悩ましつゞけた。埃、埃、さうかと思ふと道も横ぎれない泥濘……。

調停中立の問題の結果は、東屋の病床へ報告されるまでに、二三日は双方の代理人の間で紛援してゐたが、この頃はしく、とめどのない事件が、双方の代理人によつて案外あつさりとした一策で結末づけられようとは、當の東屋その人も豫想してゐなかつたところであつた。

代理人の口では、中立人の市田屋の主人が「五百圓出してくれゝば立退く」といふ話になつて來たのであつた。

「五百圓？　それぢあ訴訟費用や、土地の損料はどうなるんです。私は勝つたんですよ」と、東屋が頑として拒み出した。

「だけど、東屋さん。この煩さい爭ひは市田屋が引つぱれば引つぱる程、あなたの御損ですよ。あなたはもし損料がとれないからつて地主の伊藤さんに丸々勘辨してもらへますか？……そいつは出來ないでせう。事實、市田屋の内情を調べてみると、破産申告をされないばかりになつてるんです。四萬かそれ以上の負債で、問屋からの品物もとまつたさうですよ市田屋さんも昨日は私達の前で泣きました。……どうかして商店らしいものに、とひた押しして來たが、小資本で無理に無理したので昨今は愈々行き詰つた。……つて云ひましてね……」

この長い煩はしい係爭も、神山が五百圓を投げ出したので、最後の足搔から市田屋も諦めをつけ、訴訟費用も月々の損料もそのまゝ蹈んで了つて段落へこぎつけることになつた。

「こんなことなら、澤山の費用をかけなくつたつてよかつた……」東屋の後悔も大きく、そして當然であつた。

彼が勝訴したにも拘はらず、彼の負擔額は、その訴訟費、土地の損料とを合はせて、二千圓を越したが、八百圓の供託金は戻るものと見、千貳百圓に達して了つたのであつた。

而もこの煩はしい係爭は、その次ぎに自然と、神山對東屋といふところへ落ちなければならなかつた。

神山からの東屋の借金は千四百圓餘になるといふ驚くべき計算を現はした。最後に神山が東屋の前にその姿をむき出して來た。

「どうしてこの借金を返すか。今が今つてわけでないけど、勘考の程を聞かして下さい。……あなたがこの借地權を持つてゐれば又貸して地代がとれるでせう……然しあなたの分を拂ひ、私への返金をしたら——私は利子なんか見込んでゐないが、あなたのその日〳〵の暮しはどうなります？……この借地權をそつくり私の方へ下されば、利子もなにもいひません、全部の借金を帳消しにしませう。どうです？」と、柔かな調子で計算までしてみせるのであつた。

「千四百圓で、この土地の——將來資本さへあれば見込みの多い土地の權利金が？」それは確に安過ぎるのはいふまでもない事實であつた。と云つて、東屋が永久に頑張つてみたところで、月々十圓の返金もむづかしかつた……。

東屋と市田屋のバラックが取り拂はれ、新しい普請の板圍ひが出來たのは、それから間もなくであつた。——神山吳服店建築場の立札が出た。その界限は、更に材木や石塊や人足や大工でハキ溜へ投げた粉のやうに埃風が胸をむか〳〵させた。

（五年三月作）



大陸（長篇小説）

谷譲次

4

パサン族といふのは、印度に住んでるアフガン人のことだ。それが人身御供に子供をさらつてくといふ噂が立つた。根も葉もないことだ。しかし騒動は多く根も葉もないことから起るのだ。恐慌がボンベイの街を刷いて、裸足の群集が縞の腰布（サァロン）をひるがへして走つた。パサン人の屍骸が町角にころがつた。彼らは、すつかり人生をあきらめてる善良な市民でしかないのだ。必要が彼らを結束させた。發砲が星と窓硝子を震撼させた。ボンベイの市長はこれは何うやら暴動らしいといつた。警官と軍隊が市街に充滿して、彼らは酒と女を無料で要求した。印度人は、この英吉利人の殖民地無

頼漢の集團よりも、パサン族のはうがまだましだと氣がついた。

市街戰は十日間つゞいた。何のための市街戰か誰にもわからないのだ。とにかく百三十八人も死んでるのだから市街戰だらうといふのだ。パサン人と印度人との喧嘩が、何時の間にか印度人と英吉利人の喧嘩になつてた。黑い屍體のあひだに白い屍がちらほら見えてた。白いのは廿二あつた。一つは士官の制服を着て、他は巡査と兵卒だつた。ボンベイから五百哩離れたミソオル州のバンガロア市にも宗教上の犧牲のための小兒誘拐の評判がひろまつた。遊んでる子供を伴れてつて殺して祭壇にそなへるといふのだ。印度人の仕業だといふのだ。この町にはパサン族のはうが多く住んでゐるので、ボンベイとは逆の話しになつたのだ。やはり騷ぎになつた。パサン人の群集が印度人の影をさがして市街を走りまはつた。警官たちは印度人を助け出さうとして石をぶつけられた。ならずものの英吉利軍隊が各地から夜汽車で急行した。

印度總督はゴルフの手を休めて眉をひそめた。子供をさらつて神樣の御馳走にする？　しかも印度人の町ではパサン人がやるといひ、パサン人の町では印度人のしわざだといふ。また迷信か。しかし變だぞ。いつたい誰が何のためにそんな作りごとをばらまいて無智な民心といふやつを攪亂してあるくのだ。さわぎに乘じて何かしやうといふのか。何をしやうといふのだ。何しろ迷惑な話しだ。マハトマ・ガンヂは印度人が洋服を着るなんて法はないといつて、カルカッタの街上に古洋服を山のやうに積んで焚火した。その廉でいま牢にはいてるから、まづきやつの策動ではあるまい。印度總督は安心して中止してゐたゴルフをつゞけた。

コンスタンチノウプルの歐羅巴區域にスチイコフといふ露西亞人の一家族が住んでる。オデッサから移住してきた著作家だといふことだ。そいつの顏が髯のないトロツキイに似てる。たゞ似てるといふ分には差しつかへないわけだ。コンス

タンチノウプルのサウエイト領事館はもとの公使館だ。百も部屋のある途徹もない大きな建物だ。帝政の時の鷲の紋章のやうに淋しい両翼を張つてる。その左右どこからでも人眼につかずに出入することは容易なのだ。オデッサから引つ張られて來てしばらくそこにゐたトロツキイは、中頃あのトカトリアン・ホテルへ移されたが、またこの領事館内の商務官事務所といふ一室へつれかへられた。そこからひき出されて、こつそり船に乘せられた。船はサウエイトの黒海砲艦イリッチ號だつた。イリッチ號は、コンスタチノウプルの沖を一廻りして、いまオデッサから着いたことにして、直ぐまた元のところへ入港しなほした。そして、トロツキイを陸へ抛り上げたのだが、そのトロツキイはもうトロツキイではなかつた。オデッサから着いたばかりの著述家スティコフだつた。土耳古の政府は一般旅客の一人としてこのスティコフに上陸と滯在をゆるした。たゞ警察だけが遠くからスティコフを眼の隅で見てゐた。どこの國の警察だつて在留外人をしぢう遠くから眼の隅で見てることは彼らの仕事の一部なのだ。スティコフはおとなしい露西亞人で窓にすがたを見せることさへなかつた。彼は友人のイワノフがいつの間にかゐなくなつてゐることに氣がついてゐたが、それについては周圍の誰にも質問しなかつた。やたらに質問することは時として危險なことなのだ。スティコフはそれを知つてるのだ。たゞイワノフがゐなくなつた位だから、自分の逃げるのを待つて殺さうといふ計畫は止まつたのだらうと思つた。實際暗殺者の圍みは解かれて、スティコフはそれを感じなくなつた。が、彼は、その代價にイワノフが殺されたことは知らなかつた。イワノフはトロツキイにくつついてゐる要がなくなつたけれど、サウエイトへ歸つて餘計なることをいはないやうに秘密に處分されたのだ。生命のほか何も奪らない不思議な强盗におそはれたのだ。それはそれでいゝのだ。スティコフは一時に年をとつたやうに氣が弱くなつてぶらぶらしてる。ボンベイとバンガロアの新聞記事を見て、やつてるなといつて笑つた。

東洋に眼をつけたのは、レニンとトロツキイだ。ことに印度だ。そのはうへそろそろ手が廻り出したとみえる。この、何

が何だかわからない黒と白の動搖のなかに、赤いぽちぽちを見つけて微笑したのは、コンスタンチノウプルのステイコフだけだつた。そのことをそつと印度總督にさゝやいたとしたら、印度總督はそれでもゴルフをつゞけるだらうか。

パナドユラはクシャルガル市の若い果物商だつた。朝早く手押しの一輪車を押して、青物市場のはうへ歩いて行つた。彼は赤革の靴のやうな立派な皮膚を持つた青年だ。彼にとつてかうあるべきもの、あゝあるべきものと決まつてゐるといふことは一つもなかつた。今さうであるものは事情がさうだからだ。さうでないのは事情がさうでないからだといふ風に考へてゐた。その事情とは何であるか、彼はそこに歴史だの民族だの經濟組織だのを見やうとはしなかつた。ちよこざいなインテリゲンツィアといふやつではないからだ。左翼運動におけるインテリゲンツィアといふ存在は、瀕死の病人のそばで體育を説くやつだ。彼らはそれを啓蒙と呼んでる。こんな小市民出身の議論家は邪魔になるだけで何の役にも立たない。やつらは簡單なことをどうしたらもつともつと複雜に言ふことが出來るかと苦心して、それで飯を食つてる。「呪はるべき」資本主義がそんなに呪はれていゝほど發達してゐない場所にこの連中が多く巣くつてる。バルカン、印度、支那、日本、墨西哥、南米などだ。ところが、やつらの説教する資本主義の害毒なるものが一般の人のあたまにぴつたり來ない。害毒を流すほど熟してゐないからだ。そこでやつらは一層聲を大きくして叫ぶ必要がある。現に叫んでる。全く笑はせものだ。しかし、誰だつてこれでいゝとは思つてゐない。パナドユラもさうは思つてゐない。たゞ事情がいけないのだ。みんなで板を擔ぎ上げて、その板のうへに、何うして力を持つやうになつたか判らないが兎にかく力を持つたやつが寢そべつてるやうな事情だ。そいつは時として英吉利人であつたり、金持であつたり、警官や士官であつたり、坊主であつたりした。これらはみんな同じものだとパナドユラは思つた。何時までこれがつゞくか。さう長いことぢやあるまい。そのうちにみんな板を抛り出して、板の上のやつらをびつくりさせる時が來るだらう。これは二つ三つ工場があると其處に無産

者解放運動があつたりする猿眞似式にちんまりした島のはなしではないのだ。アフガニスタンから黄色い風の吹いて來る奥印度のコハト地方のことだ。パナドユラはあんまり主義といふやつを聞きかぢつてはゐない。たゞ前途が薄桃色に明るいことだけをぼんやり感じてゐた。通りのむこうの平原に太陽が昇りかけてたのだ。

『早くから精が出るね。』

歐羅巴人の行商人が彼と並んで歩いてゐた。それは、クシャルガルの町に住んでゐる、印度語の達者な露西亞人だつた。その露西亞人はパナドユラの果實店の近くに家を持つてゐたが、しぢう旅行がちだつた。彼はティラ、アフリデスなど歐道のない田舍へ象に乘つて出かけて行つて、安い石鹸を賣つてくるのが商賣だ。ちよいちよい不思議な說を吐く豫言者でもあつた。その時も、いつしよに町を歩きながら、露西亞人は脊負つてゐる米利堅粉の袋から綠いろの石鹸を一つ二つ取り出してパナドユラに買へと言つた。

パナドユラは笑つて答へた。

『おれにその石鹸で何處を洗つて綺麗になれといふのだ。皮膚の色はこすつたつて落ちねえよ。』

『成程。兄弟の言ふ通りだ。』露西亞人は誰をつかまへても兄弟と呼んだ。『お前さんのやうに外は黑くても中の白い人もある。英吉利人みたいに外だけ白くて中の眞つ黑なやつもあらあ。おれはかう見えても英吉利人ぢやあねえ。』

『駄目だよ、何といつたつて。おれは石鹸なんか用はねえのだ。第一、そんな食へもしねえ物に出す錢なんかねえや。』

『エスキモウ人は石鹸を食ふんだつてね。』

『肚んなかを綺麗にするためになら、ほかに食はせてえやつがうんとゐらあ。』

『違えねえ。だから何うだい。一つ買つといちや。』

『金がないよ。パナドユラさまは素敵に貧乏なんだ。』

『さうよ。みんな貧乏なんだ。』露西亞人は歩調をはづませて饒舌りつゞけるのだ。『困ることはねえさ。貧乏なら何も怖いものはない筈だ。さうぢやねえか、兄弟。』

『おめえのいふ通りだ。何もこわいものはねえ。』

『さうだらう。みんな集まつて欲しい物をどんどん取るがいゝのだ。先づ、土地だ。それから、工場だ。監獄をぶち破つて、囚人を俺達の軍隊に使ふんだ。あとは無產獨裁つてやつさ。へつへ、こいつは試驗濟みなんだぜ。』

『うまいことを言つてら。』

『まあ、こいつを讀んでみな。』

バナドユラの手に、カルカツタで發行されるアムリタ・バザル・バトリカ誌の舊號が一部渡された。

その晩バナドユラは店の裏の住居でそのアムリタ・バザル・バトリカを讀んだ。石油燈が一晩燃えつゞけて、工場の煙突のやうな油烟をあげた。彼は自分の考へてることがそつくりそこに書かれてあるのに驚いて、それからその中の文句を取つかへ引き換へ知人の顏を見た時の挨拶に用ひはじめた。間もなく青物市場の學者として、どこへ行くにも英吉利人の探偵をお供につれて歩くやうになつた。石鹼賣りの露西亞人が何度となくこつそりやつて來て、石鹼ではなしに金を置いて行つた。お使ひ下さいといふのだ。

露西亞人の行商人は印度中にひろがつてる。行商ばかりではない。土方や、のらくら者にも化けてるのだ。油田、紡績工場、綿花地方、藥味をつくり出す農園、鐵道從業員組合などにわやわやしてる。集會は多く彼らがつかさどる。ストライキをはじめると金を持つてやつてくる。キベル山岳地方の鐵道勞働者は印度無產者中の貴族だ。氣位が高くて社會民主主義系統の總同盟に加盟を拒絕したところが、莫斯科が感ちがひして望みがあるといふので四萬留送つてよこした。お使

ひ下さいといふのだ。郵便で來たといふのだが、誰の手を經たのか警察には直ぐわかつた。もうすこし成行きを見てることにした。共産主義文書、無産獨裁のリイフレット、反宗教の宣傳びらが、工場地帶と鐵道のキャンプに雪みたいに降つてる。映畫常設館、從來のおとなしい組合の總會などでひそひそ話す人聲が傳はつてる。このぼうつとした解放運動の機運を育て、自分のものにしやうとしてるのは誰か。共產黨員は寢具と食糧をしよつて山野をあるきまはつてる。パナドユラもその一人だ。彼は近いうちに何か起りさうなにほひを嗅いでる。

起りさうで仲なか起らなかつた。そのまゝ日が經つて行つた。そして起つた時は別の形だつた。

あのボンベイとバンガロアの市街戰がその第一だつた。これは失敗だつた。石鹼の泡みたいに消えちまつた。美裝の英吉利軍隊と警官がそんなに恐しいものでないことをみんなに知らしただけが、效果だ。

ABPの主筆フィリツプ・スプラットが編輯局の窓から往來を眺めてる。下はカルカツタの雜沓だ。まるで革命のやうな騷ぎだ。群集が街路を押し進んでゆく。廣場を埋めつくしてる。演說者の全身が友達の肩を踏んであちこちに浮き上つて見える。叫び聲がABPの建物を搖すつた。

フィリツプ・スプラットがパイプを離して、猶太鼻の下から言つた。

「何だい、これあ。」

油を賣りに來てたトレイド・ユニオン・コングレスの委員長ドユンデラ・セガデがスプラットの背中へ答へた。

「ヂフテリアの豫防注射に反對だといふんで市民大會をやつてるんだ。しかし、大分割り込んでる。反英と共產の分子が

ね。面白いよ。當分は兩方同じ歩幅で行つていゝわけだからな。あの群集の中へ同志がうんと出て、反英帝國主義つて紙つきれに署名を求めて廻つてるんだ。餘計な注射なんかするのは英吉利の計略だといふんだよ。愉快ぢやないか。』

『ちつとも愉快なことはありやあしない。あんまり色んなものを利用するのは考へ物だ。はじめから雑色を加へないではつきり押してつたはうがいゝんだ。十一月には思ひ切りこれを主張するつもりだ。』

スプラットが十一月といつたのは、毎年其の月に莫斯科で開かれる第三インタナショナルの大會を意味したのだ。セガデは笑つた。

『そんな潔癖は通用しないよ。それこそブルジョア臭味の理想主義といふものだ。われわれは手段をえらばずさ。大きな國の下にゐる小さな國へ持ち込まうつて時には、ちよいと民族主義といふ感傷のオブラアトで包むんだね。それでいゝ。だから、墨西哥の共産黨は反米的色彩を帯びてるし、支那と朝鮮では反日、この印度では反英、ちやんとうまく往つてるぢやないか。利用、利用、利用。さかんに利用することだ。そして、民族的感傷ほど利用しやすいものはないんだ。資本家はこいつに愛國心といふ商標をつけて、樂隊入りで賣りこんで來たぢやないか。この愛國心てやつのために昔からどれだけの勞働者が軍服を着て靴をはいたまゝ死んだか知つてるか。おれ達はいま同じ手を逆に使つてるだけなんだ。だからこの印度ぢやあ、排英大いに可なりさ。同じものでも、墨西哥へ行けば排米、支那や朝鮮へ行けば排日、はつはつは、定石だ。』

『君のいふことは解つてる。墨西哥のサウエイト大使館は十六も部門があつて活動してるんだつてね。大きさも人員も亞米利加大使館の次ぎだといふぢやないか。亞米利加の大使館が大きいのは當り前だ。墨西哥と一番取引きの深いのはアメリカだからな。ところがサウエイトは、墨西哥と何ら商賣なんかしてゐない。それだのに、何故そんなに尨大な大使館を必要とするか。一に排米運動を援助するためにだ。と、コロンタイが墨西哥へ大使になつて行つてゐる時言つたね。つまり民族主義にすがたを變へて焚きつけることだ。墨西哥ではそれもいゝだらう。しかし、墨西哥と亞米利加の關係は、たい

ちに印度と英吉利の關係ぢやないからな。排日だつてさうだ。支那における排日の戰術は、まだ利くだらうが、それも朝鮮ぢやあもう駄目だ。十年前ほど利きやしない。だから僕はいふんだ。支那で排日運動に混入するのと、墨西哥で排米に轉化するのとは、丁度同じやうなもので、このはうは幾らかきゝめもあるだらうさ。が、印度で排英に紛れこむのは、朝鮮で排日を煽てるやうなもんで、もう利かないよ。』フィリップ・スプラットは、しかめ面をして、窓から手を出して、下の群集を一撫で撫でるやうな手つきをした。『駄目だ。こんなことをしたつて。』

『さうかも知れないねえ。すくなくとも、南ぢや駄目かも知れない。』

『南ぢや駄目だ。北だつて駄目だが、すこしはいゝだらう。』

『英毒いたらざるなしか。ＡＢＰの賣行きは何うだい。北のはうがいゝかい。』

『賣行き？　ちつ、北だつて南だつて、賣行きなんてものがあつたら、お眼にかゝりたいね。ちつとも賣れやしない。賣れはしないが、發行部數は五萬だ。何うだ、豪勢なもんだらう。』

『賣れないくせに部數が五萬とは、は、あ、びら代りだな。』

『大名商賣だ。金には困らないからね。』

『しかし、文盲の多い印度で、無代でもよく貰つてくやつがあるねえ。』

『誰も讀みあしないさ。ひどいやつになると、毎月車を引いて來て新しいやつをごそつと持つてくから、感心なやつだと思つてたら、だんだん判つたんだが、袋に貼つてるんださうだ。これには驚いたよ。』

印度を通して英吉利を衝かうとしてるのが莫斯科だ。が、英吉利に對するサウエイトの大きな敵愾心は、印度では小さな成功しかおさめてない。英吉利流の禮儀ぶかい殖民政策とおためごかしの勞働組合が一般に受けてるためだ。さうでなくても、印度は英吉利に對する反感で一ぱいで、資本家に對する反感が這入りこむ餘地はないといふのだ。尤も英吉利人

と資本家は多くの場合同じものなのだから、その意味で、上から來る力への反撥といふ程度でなら、何萬のパナドユラがゐる。しかし、やつぱり印度はサウエイトよりは英吉利へ就かうとするだらう。みんなさう思つてた。反英主義の市民署名帳なんて、市街の空へ打ち上げる花火みたいなもんだ。音と色が素晴しいだけで直ぐ消えるのだ。共産黨員自身さう思つてた。

それがさうでもなかつた。

銃聲は北方から聞こえはじめた。やはり別の形でだつた。

印度の北西の國境はアフガニスタンに接してゐる。サウエイトが反英の宣傳を集中して來た場處だ。そこに戰雲といふやつが捲き起つたのだ。全印度の共産黨員がそれを利用すべく、鎭壓に向ふ兵隊と同じ汽車であつまつてきた。表面の騷動は二つの種族のあひだの鬪爭なのだ。それを取りまいて英吉利の兵隊どもが銃劍を光らせた。シア族といふのが、一度英領に合併された土地を奪ひかへしに乘り込んでこやうといふさわぎだ。そのかげに、英吉利の鼻を彈かうとするサウエイトの赤い手があるといふので騷ぎは倍にも三倍にもなつた。クシヤルガルの果物商パナドユラは部落から部落へ馬に乘つて煽動して歩いた。二つの種族の男達が、兩方ともサウエイトから貰つた鐵砲を持つてテラの野原に對陣した。テラはアフリデス部にある。クシヤルガル町の北方だ。いまそこにサニス族が住んでゐるが、この邊はもとシア族の所有だつたのだ。それが一九一七年に、英吉利がサニスの尻押しをしてシアから奪つてしまつたのだ。今度の事件のおこりは、その舊領土を、シアがサニスからとり返さうといふのだつた。この襲擊は前から度びたびあつたものだ。サウエイト・ラシアはこ

れに眼をつけて物にしやうとした。英吉利の軍隊はコハトに駐屯して、そこから南方の種族へ密偵が放たれた。そして、シアの本部に白い人影がちらちら見えるといふことが報告された。それがアフガニスタンから潜入してきたサウエイトの人間だらうといふことになつた。そのうちに土人達は持久戰にうつて砲壘を築きはじめた。アフリデス部は勿論サニス族を應援した。カルカッタもボンベイもそのうわさでいつぱいだつた。シア族もサニス族も同じモハメッド教徒なのだ。宗敎以外のことで血を流す理由があり得るといふことが、一般の印度の人たちには不思議に思はれた。サニス軍は日ましに強大になつて行つた。それは一方ではシア族を相手にしながら、他方では段々英吉利に不從順な態度を示し出した。それでは約束が違ふのだ。英吉利はあわて出した。空いつぱいに飛行機を飛ばして脅しにかゝつた。コハト・タアルの山道に保護區域として英吉利がサニス族にやらせてた砲臺がある。その向う側でサウエイトがシア人に同じことをさせた。その國境で激戰があつた。土人同士が殺しあふだけなら、激戰なんかいくらあつたつて構はないのだが、底にサウエイトの影響があつてそれが國境全線へ擴がつて暴動化するやうなことがあつてはと、印度政廳をはじめ英吉利本國まで身體ぢうを神經にした。いつたい北印度の醇朴な氣風はどこへ行つたのだ。さういつて嘆いた。そのとき動搖はアフガニスタンにも傳はつてゐた。三月三十日の朝になると、強大なアマニユラ族がヘラとカンダアル・ラシユカル方面から一せいに南下してきた。これはなかなか武器を持つてる常備軍なのだ。デエラニ地方の種族も續々集合しつゝある。印度の國境に一番近いアフガニスタンの都會はキラアト・イ・ギルザイなのだ。その田舍のミユカル村にゐて組織者として働いてゐたバナドユラに、一通の電報が飛んだ。彼はその夜のうちに出發して政廳所在地である南部ミイラット州のデルハイへ潜行した。

四月八日だ。南印度の英吉利人がみんな脊伸びして北のはうを見てる最中だ。

開會中の立法議會といふやつで爆彈が破裂して五人大怪我した。これは殖民地政府の大官を殺さうとした共產黨員の陰謀だといふのだ。その爆彈を投げるところをジョン・シモン卿が見てた。猛烈な音とけむりのつぎに議員どもの狼狽がお

つた。逮捕された印度人はみんな犯人であることを自白した。ジョウヂ・シャスタァ卿も負傷したひとりだ。恐怖と昂奮が印度を包んだ。何といふ飛んでもないことだ。デルハイの立法議會へ爆彈を投げ込んだやつがある。

委員長バテルが公衆保安法といふやつを説明すべく起ち上つたとき、傍聽席から二つの爆彈が投げられて政府委員席のすぐまへで爆發したので、議員と傍聽人は煙をくゞつて出口へ殺倒した。傍聽席では拳銃の音がつゞいてゐた。勞働爭議法の第三回讀會があつたのち、いま言つた公衆保安法といふのが上程されやうとした時だ。この新しい法律は英吉利に國籍を有する共産黨分子を一掃的に本國へ送り歸さうといふ案だ。丁度その時ミイラットに共産黨事件があつて豫審が進行中だつた。公衆保安法の内容と目的を説明するためにはその豫審中の事件に言及しなければならない。さうバテル委員長が言ひかけた時、何か飛んできて椅子をめちやめちやにしてしまつたのだ。みんなきちがひのやうに逃げ廻つた。負傷者のうめき聲があちこちにあつた。議員達はお互ひに脊中を踏み合つて戸外へ競爭した。警官が出張して來てすぐに出入口を締めてしまつた。建物を取りまいて何重にも兵隊の列があつた。交通はすつかり遮斷された。さうして置いて議場内を調べると、爆彈につゞいて傍聽席からばら撒いたらしい赤いパンフレットが多數發見された。それは「印度社會主義共和軍」といふ題で、つまり印度の赤衛軍の宣傳びらだ。司令官バルラといふ署名があつた。床一面眞赤に見えるほど散らばつてた。通り一ぺんの共産主義手ほどきみたいなことが共産黨員一流の智的に簡明な文體で書かれてあつた。「サウエイト印度」がその「赤衛軍」に命じてこの行動をとらせたのだといふやうな文句だ。それは勞働爭議法と公衆保安法とが共産黨撲滅を目的にしてる以上、この行爲は絶對に必要だといふのだ。印度及び世界×××萬歳といふ文句で終つてた。専門家が爆彈の破片を檢査してこれは幼稚なものだが人間はかなり殺せる筈だといつた。一度すつかり閉めて誰も出さないやうにして置いてから、一方の出入口をあけてそこから群集に一人づつ出て來さした。拳銃を持つてゐる印度人を六人見つけて捕まへた。六人が六人とも自分が爆彈を投げたのだと主張した。ジョン・シモン卿が投げたやつの顏を見てたので、そ

のうちの二人がほんとの犯人ときまつた。一人はコウンボアから來たベンガリ人で、他はパンジャブ人だつた。パンジャブ人は彼のはうから巡査の腕を摑んで呶鳴つた。

『さあ、俺を捕まへてくれ。おれがやつたんだ。』

クシャルガル市の果物商バナドユラは知らん顔してその同志の傍を通り拔けて出た。二人ぐらゐの犧牲は仕方がないのだ。はじめからその相談だつたのだ。ほんとに投げたのはバナドユラなのだ。みんな同じやうな黑い顏をしてゐるから、投げるところを見た筈のジョン・シモン卿にも區別がつかなかつたのだらうといつて彼は笑つた。豫定どほり犧牲になつて捕縛された二人の同志は、バガット・シングとブトユスケシユワラ・ドユテだつた。バガット・シングがパンジャブ人で、ドユテはコウンボア生れのベンガリ人だ。ふたりとも入場劵なしにやつて來たのだが、早くから詰めかけてゐたので、巡査が來て群集を整理し出す前に這入りこんでゐたと言つた。

チャマンラルが勞働總同盟の本部の階上で顏をしかめてこの事件を批評した。チャマンラルはこの團體の當首なのだ。この團體は社會民主々義的なのだ。チャマンラルは言つた。

『こんなことをして吳れちや國民運動にも汚點がつくぢやないか。その意味で反民族的犯罪だといへるのだ。こんなふうにおれ達勞働者が頭を搔かなくちやならないやうなことをするやつは、片つぱしからやつつける必要がある。暴力は何時だつて味方の理窟をぶちこわしてしまふ。迷惑するのはおれたち無產者だけだ。』

訪問した新聞記者にこんなことをいつてから二三日して、事務所のかへりに、彼はクシャルガルの果實商にさんざんにぶちのめされた。七十人の警官が日夜議事堂をかこんで立つてた。何日經つても警戒はゆるまなかつた。バガット・シングはいま國外に追放されてる有名な赤いあばれ者アジト・シングの甥だといふのだ。この親類はみんないけないんぢやないかと言つて英吉利人が呆れた。前の年の十二月にラホウルで殺されたソウンダアス警部といふのがあつた。犯人は共產黨

員だといふだけで誰だかわからなかつた。ところが議會で撒かれた赤いマニフエストの中にその手懸りがあるといつて、このバガット・シングが下手人らしいと警察が聲明した。とにかく聲明したといふ噂だつた。バナドユラはこれを聞いてびつくりして、バガット・シングを氣の毒に思つた。そして、自分がほんとの議會の爆彈犯人であることを名乘つて出やうかと思つた。しかし警察は、おとなしく逮捕された二人が、豫定の犠牲者であることを知つてゐて、こんなことを言ひ擴めてそれによつて他のコンミユニストを驚かして眞犯人の自首を待つてゐたのだ。さう氣がついたからバナドユラは矢張り知らん顏してた。すると、計畫どほりうまく往つて、捕まつた二人は證據不充分で罪にならなかつた。が、この爆彈事件とは別に、共産主義者であるといふことだけで既に立派な一つの犯罪者であるといふので二人とも投獄された。これで警察がそつと眞犯人を搜してることがわかつた。バナドユラは危險を感じてミイラツトへ逃げた。

ミイラツトで開かれた「侮辱され續けて來た印度人の會」でバナドユラが演説してた。

『××がやつて來るぞ。』と彼は故郷の青物市場で値段を競つてる時のやうに叫んだ。「おれ達がデルハイの議會で爆彈を投げたのは、昔の人の眞似をしたんだ。佛蘭西の人だ。ヴエイランといふ無政府主義者だ。おれ達はヴエイランのことを考へてる。一八九三年の佛蘭西議會だ。ヴエイランのやつ、うまく議會へ這入りこんで首相に爆彈を食はしてやつたんだ。他にも多勢死んだし、ヴエイランもギロチンされた。俺はジヨン・シモンをやつつけるつもりで、デルハイでちよつとこいつをやつてみたんだが、うまく往かなかつた。しかしヴエイランが言つたよ。つんぼに物を判らせるためにやあ大きな音が必要なんだとね。全くその通りだ。その大きな音を立てるものと言へあ差し詰め爆彈ぢやないか。だから俺達が判らず屋の議員どもの眞ん中へ爆彈を送り込んだのに別に不都合はねえのだ。どうだ、兄弟、物は理窟ぢやあねえか。歴史のこ

となんか何うでもいゝが、この十年間の歴史は何だ。英吉利の政府は何かつて之を直ぐ改良々々と言ふが、俺はその改良ほど氣に食はないものはない。改良とは何だ。勞働者は改良を必要とするほど性が惡くはねえ。自分たちこそ餘つぽど改良したはうがいゝのだ。改良といふのは要するに侮辱ぢやないか。が、俺たちは色んな形の侮辱に飽きてる。じつさい印度の立法議會といふやつは俺達を侮辱する方法の製造所なんだ。シモンといふおやぢが印度大衆を改善に導くなんて大きなことを言つてる口の下で、やつの四肢である議會は何をしてるか。それを見やうともしないで、印度人はまだ約束の御馳走の出るのを待つてるのだ。英吉利のやつらが立派な晩餐についてる其の食卓の下に蹲踞んで、麵麭のかけらが落ちて來るのを狙つてるのが印度人だ。しかも、稀に何か投げて貰つたと思へば食ふところも何にもない骨ぢやないか。やつらは今度も、恩に被せるやうな面をしてこの出しがらの骨を抛つて寄こさうとしたのだ。勞働爭議法と公衆保安法と二つの法案がそれだ。かう度びたび馬鹿にされると、俺たちのサウエイト印度は默つて見ちやゐられない。侮辱は侮辱として我慢出來るとしても、責任といふことを眞面目に考へなくちやならない機が來たのだ。そこで思ひついたのが先刻いつたヴエイランだ。こんな擧者どもが寄り合つて好い氣に喜劇を演じてるのを中止させるためにあ、餘程でつかい音を立てなくちやいけねえと考へたんだ。幸ひ俺たちには印度赤衛軍といふ武器がある。司令官バルラの命令で俺がその大きな音を立てたんだ。印度はいま西から來た貴族的搾取業者に踏み躙られてる。やつらには仕たいことをさせるがいゝ。仕たいことをしてる最中に、やつらを眞つ裸かにして其の醜惡な姿を公衆の前へ引つ張り出してやるのだ。人民はみんな銘々の家に武器を隱してる。革命の用意は出來た。英吉利政府は一つの教訓を味はうがいゝのだ。俺達は何も勞働爭議法だの公衆保安法なんかといふ小つぽけな立法に反對な許りぢやないんだ。人を押さへつければ人の考へを押さへ付けることが出來る。人を殺せば人の考へを殺すことが出來ると考へてる奴らの頭に反對なんだ。これこそ印度大衆が歴史を通して英吉利人に發しやうとしてる親切な警告だ。俺たちはコミユニストだ。××××××は、人がみんな完全な平和と滿足な自由を享樂

する輝かしい將來の夢を持つてる。人間の生命を大事にする點ぢや俺達が一番だらう。その大切な血でも、時として流さなくちやならないのだ。俺達に目的を持つて來る××の前には、個人の命を犠牲にすることは避けられない。人間が人間に寄生するやうな現象のない社會を作り出すために、俺たちは、他人の生命でも自分でもどんどん處分しやうぢやないか。つんぼどもには大きな音を聞かせてやれ。邪魔になるやつは遠慮なく殺して廻れ。』

印度を通してのサウエイトと英吉利と、印度を通さないサウエイトと英吉利とは、全然別の物だつた。莫斯科と倫敦の間には、微笑と通商が交されてた。双方に滿足な根底が發見されたといふのだ。サウエイト國立銀行の頭取ピアタコフがリガから來た英吉利領事にこんなことを言つたといふのだ。サウエイトは全心的に英吉利との取引きを望んでゐる。しかしそれは外交關係の常態回復といふことを前提にしての話しだ。これは半公式の會見だつたから、サウエイトはピアタコフを使つて英吉利に水を向けたものと解釋してい丶といふのだ。リガの英吉利領事レマンがそれに答へた。レマンの口を通して英吉利がサウエイトに答へたのだ。英吉利とサウエイトの貿易は外交の土臺なしに進展することが出來ると信ずる。その方が、例へば印度の問題などが話しに出なくて都合が好いではないか。話しになれば、何とか片を附けなくちやならないのだから。

サウエイトは苦笑して片眼をつぶつたのだらう。滿足な根柢が發見されたといふのだ。英吉利のやうな圖々しい資本主義國家に對すると、サウエイトもその上を往つて圖々しいやうだ。

玄關では挨拶しろ。裏口では火をつけろ。莫斯科でこの交歡をやつてる最中、印度では何うだ。勿論、第三インタナショナルのすることは完全にサウエイト政府の取締りの外部にあるのだから、仕方がないには相違ないが。

ミイラットの市街を照らし出した四月廿一日の太陽は普段の眠さうな町の代りにそこに大變な變化を見た。數千の男と女が顔を光らせて通りを練り歩いてるのだ。前の日の夕方、市の裁判所で三人の男に對する判決の言渡しがあつた。その三人は、一月に同市の車輛會社に罷業があつた時、罷業職工の示威行列の中から鐵砲をうつて見物してゐた子供と母親を即死させたのだ。三人は捕縛されて事實を認めた。が、この事件には市の保安ばかりでなく國際的な關係があつた。三人とも共産黨員で一人はサウエイトの人間だつたからだ。罷業職工達は共産黨に對して猛烈な復讐を企てた。何故なら、その三人は職工ではなく、何時行列へ加はつたか誰も知らなかつたのだ。それが發砲して子供と母親を殺したのだ。殺したのは間違ひだが、子供と母親といふのがいけなかつた。子供は無邪氣と可憐の象徴だし、子供と母親は神聖な一組といふことになつてる。それを射ち殺したのだから、職工側は市民と警察の同情を失つて罷業は負けてしまつた。彼らははじめ工場の廻し者が罷業にけちをつけるためにやつたことと思つたのだが、その三人が共産黨員と判ると、まるで裏切られたやうに喚いで三人の嚴罰を求める運動を起した。が、一人が露西亞人なのと、由來ミイラットは印度共産主義運動の中心地で市に黨員が多勢ゐるので、國際問題と共産黨の騒擾を恐れて、裁判は仲なかきまらなかつた。輕くすると勞働者と市民が默つてないし、重くすると共産黨とサウエイトにいけないのだ。何方を怒らしても双方の間の戰爭になりさうなので裁判所は頭を捻つて來た。何とかして誤魔化さうとして、證據不充分といふことで無罪にした。罰したいが證據不充分だから仕方がないといふのだ。これなら職工のはうも一般の市民も諦めるだらうと思つたのだ。例へ少し位ひ動揺してもサウエイトが文句を言ひ出したり、共産黨員に暴れられたりするよりは、内輪のことではありそれ程組織力のない連中だから、まだ増しだと思つたのだ。それで無罪の判決をした。昨夜のことだ。

大したことはあるまいとたかを束つてゐた。それが何うだ。翌る朝になつてみると、往來は群集で充滿してる。命令も

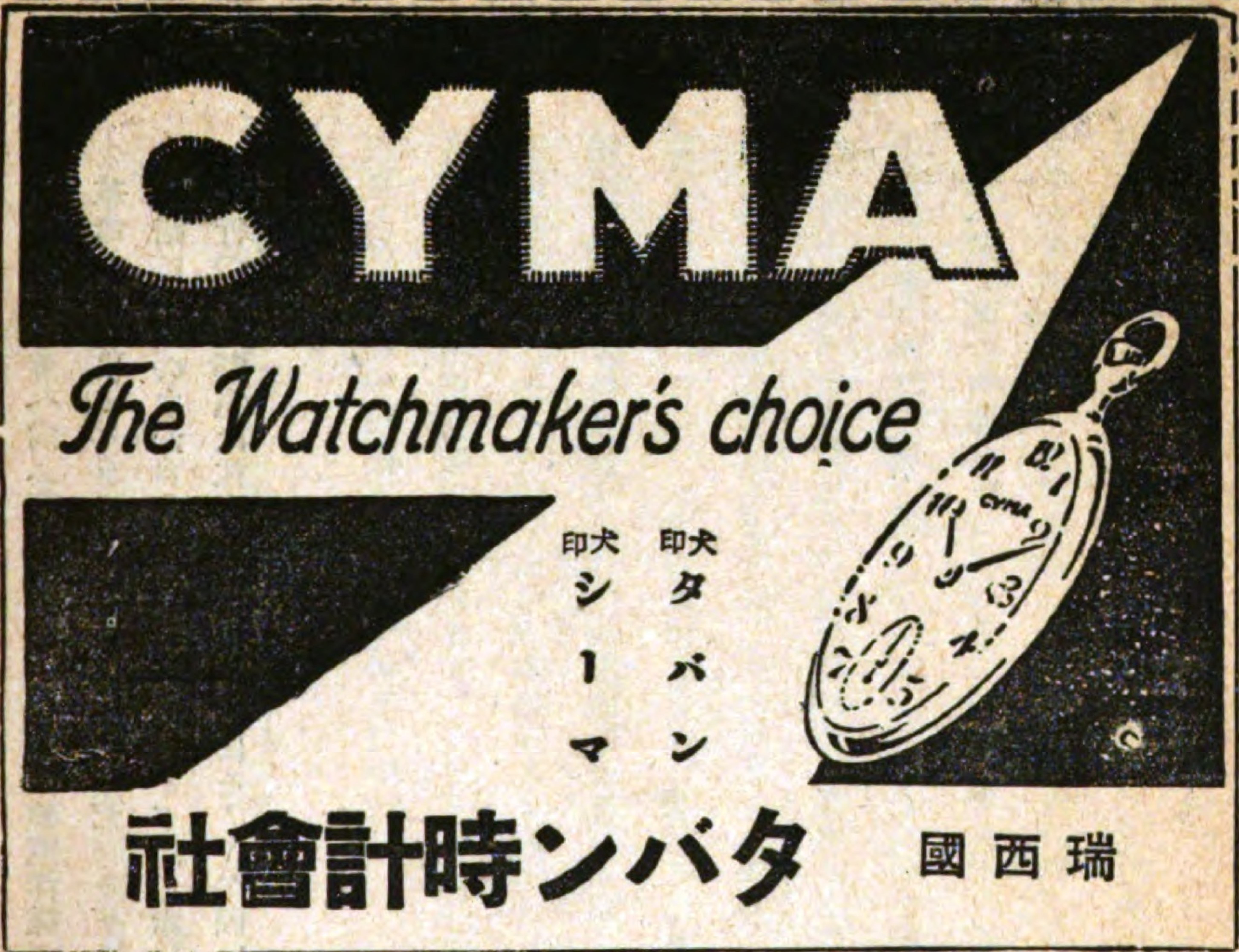
旗も演説もない、靜かな市民運動だ。靜かなだけ眞劍で怖いのだ。群集は悲慘な、しかし力強い人間の相だとヴイクタア・ユウゴウが言つた。その悲慘な力強いやつが商店と工場と住宅から出て來て、みんな口を尖らせて街路を押し歩いてる。不穩の氣が募つて來る。かういふことは速いのだ。群集は野火みたいなものだ。一度火がついたら燃える物のあるところまで燃え拔くのだ。瞬く間にそいつがはじまつた。襲撃は警察と裁判所と市廳と三手に別れた。驚いたことには、市民の敵であるべき共產黨員がその群集に混つて勇ましく働いてるのだ。群集は破壞作業に手を貸す者なら誰でも歡迎するし、急場の統率者を要求してるのだ。その何方も共產黨員の得意とするところだ。こんなことのないやうに無理をして三人を放免したのに、これでは何にもならない。警察と裁判所と市廳に對する呪ひは群集の中のコミユニストによつて最も效果的に代辯されて油を注がれた。共產黨員も市民も職工も何もかもごつちやになつて「權力」へ食つて掛つて來た。共產黨の利用政策といふやつが今度は少し成功しさうなのだ。彼らは群集を巧みに誘導して自分達の欲する通りに向けて行つた。夜までにはその色彩がはつきりして、ミイラットにあるのは全然共產主義の××だつた。指導者は「侮辱され續けて來た印度人の會」と其の盟主のパナドユラだつた。

鎭まつたり起つたりして、その狀態が二個月續いた。

サウエイト・ラシアの外國での仕事にしるしの見えて來た最初だ。大陸中の眼がミイラットに集中された。市伽古評論の特派員フロイド・ロイドは、本社の命令を受け取つた一時間後には、巴里を南下してナポリへ向ふ汽車中にあつた。この共產主義革命の小見本を見落してはならないのだ。現にやつてるのだから、逃せない好機會だ。ロイドは、ナポリを拔錨し

て大急きで印度へ向ふ英吉利地中海艦隊の輕巡洋艦ハウダ號に間に合つてやつと便乘することが出來た。

革命と同時にミイラットの全市は總罷業だ。ラヂオ、電信、電話、郵便、汽車、電車、自動車の運轉がぴつたりやまつて街路には人の血が自由に流れてる。ロイドば、赤い恐怖によつてあらゆる通信が切り離された、島のやうな街へ飛び込んで行つた。群集は往來にしやがんでぽそ〳〵の固い米飯を手摑みにして揉むやうに解しながら食べてた。（未完）



定價		送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料
△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年三月十八日印刷
昭和五年四月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　竹內喜太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ內ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ內（〇〇〇）五三五・五三六・五三七番
振替東京三四番
同長野三二〇五番


内面艶消
新マツダ
新マツダ
瓦斯入電球

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十二年一月廿九日第三種郵便物認可